へたれ犬

腹イタリア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
へたれ犬

【Ｎコード】
Ｎ４７６９Ｓ

【作者名】
腹イタリア

【あらすじ】
「アンタ、今日から私の下僕ね」
ごく普通の高校生である兎月将也はそんなことを言われた。言った相手は大手企業社長の娘でお嬢様の春日恵。納得いかない兎月だが、なぜか春日の命令には大人しく従ってしまう。そんなヘタレで情けない兎月がワガママで理不尽な春日に振り回される学園コメディー物語。

第1話　出会いと下僕宣言（前書き）

初投稿です。
ものすごい未熟者ですので、どうか生温かい目で見守ってください。
意見、感想、誤字脱字訂正、批評なんでもお待ちしております。

第1話　出会いと下僕宣言

今朝は雨だった。

四月半ば、季節は春といってもまだまだ寒さは残り、ましてや雨となっては気温もぐっと下がるわけで。ということで、いつもは自転車通学だが今日はバスで行くことにした俺。やっぱ朝というわけでバスの中は混雑しており、後方にクラスメイトの渡部君の姿が目に入った。しかしまあ渡部君とはそんなに親しくないので目で軽く会釈して俺は吊り革を持って立つ。あ～バスって快適……もうこれからもバス通学にしちゃおうかな。のほほんとバスに揺られること数分、次の停留所でバスが止まる。降りる人と乗る人でうごめく中、一人の女子が乗車してきた。その瞬間、車内の空気が変わった。ピシッと緊張が走ったような……な、なんだ？

原因として考えられるのはこの女子。あ、うちの高校の制服じゃん。艶やかな長い黒髪をなびかせて、ちょい強めのつり目が特徴的だ。まぁ正直言って可愛い。俺の中でトップ５にランクイン！

しかし、そんな大型新人アーティストよろしくなイメージはすぐに崩れた。

「アンタ、そこの席譲りなさいよ」

聞き心地良い美声だなんて二の次だ。こ、こいつ今なんて言った？

「え…で、でも……」

うろたえた声を出す渡部君、って渡部君かよ！

その女子は渡部君を睨み続ける。睨まれる渡部君とその震える手。

重苦しい空気が張りつめる中、数秒の空白の後……

「ど、どうぞ」

おとなしく席を譲る渡部君。

「ふん」

お礼もなしかよ！　その女子はさも当然かのように空いた席に座る。な、何様だ……。

弱々しく俺の横に並ぶ渡部君。その姿はとても憐れだった。つーか単純に可哀想。それと同時に情けなくも思う。あんな理不尽な要求に応えなくてもよかったのにさ。男ならガツンと言ってやろうぜ！

「ちょ、大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ兎月君。いつものことだから」

「いつものことって……」

あんなことを毎日してるのか。おいおい、あの女子は何様ですか。女王気取りですかコノヤロー。

「あんなの無視すればいいじゃん」

「そうはいっても相手は春日さんだし……」

春日？

「ああ、それ春日恵（かすがめぐみ）さんだよ」

不快感バリバリの超絶ブルーなバスを降りて今は賑やかな教室でのんびりとくつろいでいる。渡部君にも笑顔が戻ったみたいだし良かった良かった。

「それって同じ学年？」

俺はクラスメイトの水川にさきほどのことを話していた。

「うん、そだよ。二年一組だよ」

「へぇ、まったく知らなかったよ、マミー」

「その呼び方やめてよ」

マミーこと水川は嫌だと言わんばかりに顔をしかめる。水川真美（みずかわまみ）って名前からのあだ名だが、マミーと呼ぶのはごく少数だ。水川とは一年から同じクラスでそれなりに仲良くさせてもらっている。ショートヘアーでつぶらで綺麗な瞳。容姿も可愛らしくて性格も良いと、男女ともに人気が高い。ちなみに彼氏はいないらしい。ちなみに俺もフリー！　どうでもいい補足情報。

「でも、なんであんなに偉そうなんだよ」

あの態度はどう考えても普通じゃないだろ。ありえないって。

「噂だけど春日さんのお父さんって有名企業の社長らしいよ」

へえ～、だから偉そうなのか。いやいや、そうであろうと他人の席を奪っていいわけじゃないでしょ。常識を知らないのかねぇ。うーん……父親が社長か……すごいな。

「ま、いわゆるお嬢様ってやつさ」

と、低い声が背後から聞こえた。ああ、こいつか。

「いつの間にいたんだよ米太郎」
「その呼び方やめてよ」
「いや、アンタの本名だから無理でしょ」

後ろを振り向くとそこには長身で細身の男子が立っていた。こいつの名前は佐々木米太郎（ささきこめたろう）。こいつも一年からの付き合いだ。

「にしても米太郎ってホント面白い名前だよな」
「なんでそんな名前なの？」
「前に言ったじゃん水川！　覚えてねーのかよ」
「ほら、あれだよ。こいつん家さ農家だからさ、両親がお米のようにすくすく育ってほしいという願いを込めてつけたんだよ」
「その通りだ将也！」
「あ～ね。にしては凶作だねぇ」

クスクスと笑う水川。

「馬鹿にしてんのかマミー！」
「マミーって言うなインディカ米」
「な、なんだよインディカ米って」

「米太郎が身長高いからじゃね？」
「ちょ、そんなイケてないあだ名やめて」
ハハハと笑う俺と水川。ん？そういえば何の話だったっけ？　……ま、いっか。さて、今日の授業も頑張るか。

今朝は晴れだった。
昨日のうちに雨は止み、見事な快晴。絶好の自転車日和だ。つーことで自転車でさあレッツゴー……のはずが自転車がない。え？　あれ？　ちょ、俺の相棒は……？
玄関で呆然としていると母さんがぬっと現れた。
「自転車ね、今朝早くからおじいちゃんが乗っていったわよ」
「は？　じいちゃんが？」
「なんか風になりたいって」
「意味分からんし！　じゃあ俺どうしたらいいんだ？」
歩いて行くと一時間はかかるぞ。とてもじゃないが間に合わない。
完全に遅刻。もれなくアウトだ。

「バスで行きなさいよ」

そう言って母さんは家の中に戻っていった。あんのクソジジイ覚えてろよ。勝手に人の自転車使いやがって。……しょうがない、今日もバスか。携帯でバスの時刻表を確認して近くの停留所へと急ぐ。う～ん、なんか引っかかることがあるんだが……なんだっけ？俺が停留所に着くと同時にバスも到着。混んでいるかと思いきや、後方に一つ席が空いていた。ラッキー。俺は空いた席に座る……と同時に周りの乗客がざわついた。な、なんですか？よくよく車内を見回すと、渡部君が焦った表情で立っていた。

「お、渡部君。隣座る？」

しかし渡部君は首を横に力強く振って俺から視線を外した。……俺なんかしたかな？　渡部君の好感度を下げるような真似はしていないけど。昨日フランクに話しかけたのがいけなかったのかと考えているうちに次の停留所に到着。降りる人に乗る人、そして乗りこむ一人の女子生徒。空気が変わる車内。そして俺は思い出した……春日恵のことを。父親が社長でお嬢様のこいつは昨日、渡部君から席を奪った性悪女だ。車内を見回す春日。乗客は誰も彼女と目を合わせず代わりに俺を見てくる……って俺!?　俺ですかい!?

「え……!?」

もれなく全員が俺を睨んできた……え、なにその「せっかく一つ開けておいた席に座りやがって。お前のせいで俺らが立たないといけなくなるかもしれないじゃないか」的な顔は！　つーかまさにその通りだよね！　さきほどの渡部君の表情の意味がやっと分かった。ごめんね渡部君。

「ちょっとアンタ」

俺が一人反省会を開いていると、例のあの人春日が話しかけてきた。昨日の様子を見た限りじゃ用件は見当がつきます。他の乗客の皆さん、俺も空気は読みますからそんな目で見ないでくださいよ。分かってますって。俺がすべき行動ぐらい。

「……俺？」

「そ。そこの席譲りなさい」

「はい仰せのままに」

俺は鞄を脇に抱え、するりと春日の横を通り抜けて席を空ける。その様子を春日は少し驚いた様子で見ていた。

「これでいいでしょ？」

俺はそそくさと前へ移動して渡部君の隣に立つ。

「他のお客さんに迷惑かけたらいけないからさ」

本当なら春日相手にメンチ切ってもよかったが、周りの迷惑を考えるとそれはすべきじゃないと思ってね。

「う、うん、そうだね」

そしてバスは走り出した。ま、女子に席を譲ったと思えば気持ちは楽だな。うん、良いことした！

……え～っと、なんとなく春日がこっち見てる気がするけど、気のせいだよね？

バスを降りてすぐ、予想もしない人物から声をかけられた。

「ねぇアンタ」

まさかだった。春日が俺に話しかけてくるなんて。

「渡部君、一緒に仲良く登校しようぜ！」
「ぼく今日、日直だったかもだからー！」

急に走り出す渡部君。つーか日直だったかもって！　完全に逃げたよ……。

「無視するな」
「いや…俺ですか？」

俺なんかしましたか春日さん？　あなたに席を譲ったごく普通の高校生なんだけど。

「学年は？」
「二年生です」
「クラスは？」
「二組」
「名前は？」
「兎月将也（とづきまさや）」
「私の鞄持ちなさい」
「はい……ってなんで！？」

びっくり！　何気ない質問からいきなり鞄持てって……。あまりに自然な流れで思わずＯＫしかけたよ。

「え、ちょ……は？」

すると春日は自分の鞄を俺に押しつけてきた。いやいや、持つとは言ったけどさ、最後になんで！？　って聞いたよね。そこは無視ですかい？

でもここで反発してもしょうがないし、俺は素直に鞄を持つ。鞄を渡した春日は俺を置いて歩きだす。俺もその後ろについていく。……これ完全にパシリ状態だよね？　なんで俺はこんな素直に従順してるんだ？　ガツンと言ってやれと思っていた昨日の俺はどうした！？

「兎月、だったわよね」

前を歩く春日の声だ。

「そうだよ」

「変な名前」

な、なんだとおぉ！　名字なんだからしょうがないだろうが。それにそんな変じゃないだろ。兎の月と書いて兎月ってそれなりに良くね？　少なくても米太郎よりはマシなはずだ！

「え～、そうかな？　ユーモア溢れた名前だと思うけど」

「私はそう思わない」

はいはい、そーですか。

「アンタ、いつもバスじゃないでしょ？」

意外にがつがつ質問してくるなぁ。

「ああ、いつもは自転車だよ。今日はじいちゃんが自転車で散歩行っちゃって。風を感じたいんだってさ、ハハハ」

「……」

……す、スベったぁ！　場が静寂に包まれたぁ！　クソジジイ、お前のせいだからな！

「か、春日はいつもバス通学なの？」

「……」

こ、こいつ無視かよ……。自分は質問しまくりのくせして俺の質問には答えないってか。

「……」

「なんで」

「へ？」

「なんで私の名前知っている？」

いや、あなた有名みたいよ？　俺は先日まで知らなかったけどね。

「まぁ、なんとなく」

「そ」

「……」

「決めた」

「え？」

な、なんすか急に。前を歩いていた春日はこちらを振り返る。髪をなびかせた姿がなんとまあ綺麗だった。しかし、そんな初恋よろしくな思いは次の言葉で一気に壊された。

「アンタ、今日から私の下僕ね」

「……はい？」

第2話　そして始まる下僕ライフ

「おーす将也」
「……」
「どしたの？」
「いや……ちょっとね」
「おいおい、今日の体育は他クラス合同のバレーだぜ？　もっとアゲアゲでいこうぜ」

朝からテンションの高い米太郎。とってもウザイ。

「お前だけ舞い上がってろ」
「テンション低いなー。今日の双子座十二位だったのか？」
「俺は天秤座だ」

米太郎のノリがあまりにウザイので教室から出る。もー嫌だ。朝から憂鬱だってのに米太郎の相手なんかしてられるか。

「あ、ついでにサイダー買ってきて」
「単にトイレだよ。わざわざ食堂の売店まで行かない」

朝の予鈴まであと数分。まぁトイレ行くのには十分だ。と、そこへ……

「兎月」
「ん？　げっ」

教室を出て三秒後、米太郎以上に会いたくない奴と会ってしまった。つまり最悪だ。

「ちょうど良かった」
「何がだよ……春日」

そう、春日恵だ。なんと今朝、俺は彼女から下僕になれと言われた。それ故に現在テンションが低いのだが……いや、だってさ……普通に考えて同級生に対して下僕になれって言いますかね？　同い年の、同じ学生の、しかも面識のない人に対して下僕になれってよく言えましたね！　ええ！？　あれはもしかしてジョークだったのかな！？　アハン？

「売店で紅茶買ってきて」
「はぁ？　なんで？」
「アンタ、私の下僕だから」

……どうやら朝の発言はマジだったらしい。ふざけるなよ。

「嫌だ。第一、俺はお前の下僕じゃ…」
「買ってきて」
「買ってきます」

え……何言ってるんだ俺は？　何をこんな簡単に折れてるんだ！？

「早くして」

そう言って春日は自分のクラスに戻っていった。あ、ちょ……。朝の予鈴まであと数分……走るしかないよねぇ。

「くそっ、俺こんなヘタレだったのか！？」

自分の弱さを嘆きつつ俺は廊下を走る。か、悲しい……。

「……やっぱり思った通りの奴ね」

キーンコーンカーンコーンと朝の予鈴が鳴る。

「はい紅茶。ペットボトルで良かったよな？」

俺は一組の教室の後ろのドアからそーっと顔を出す。幸い春日の席は入口の近くだったので目立たずにジュースを渡せる。はい受け取ってぇ。

「……」

春日は無言で俺の手からジュースを奪い取ると、もう消えろ的な目線を向けてきた。……せめて、ありがとうぐらいは言ってほしかったね。

俺は苦笑いを浮かべてその場を離れた。もう予鈴は鳴ったので急がなくては。速足で教室に戻ると、

「おら兎月、今日から毎日朝の予鈴と同時に単語テストをやると言

ったよな。初日から遅れるな」

プリントを配っている担任に怒られた。ちっ、どーせ三日もしたら忘れるくせによ。

「すいませんでした」

「早く座れ」

クラス中の全視線が俺に集中する。気になるし、気まずいし、恥ずかしいし。頬が赤くなるわ。そそくさと席に座ると右隣の馬鹿が小声で話しかけてきた。

「かなりの激戦だったんだな」

「トイレじゃねーよ。ほら、サイダー」

馬鹿もとい米太郎にサイダーを渡す。

「うえ？　マジで買ってきてくれたのか。冗談だったのに」

「ついでだついで」

「？」

午前中の授業はあっという間に過ぎて今は昼休み。朝に下僕宣言を受けた俺だが、あれ以降春日からは何も言ってこないし下僕らしきことは朝の鞄持ちとパシリだけしかやっていない。おー、意外と平和。

「くはー！　やっぱ婆ちゃんの作ったお米は美味い！」

弁当にがっつく米太郎の醜い姿すら微笑ましいくらいだ。

「おい将也、食べないのか？」
「ん？　ああ、食べる食べる」

昼飯を食べ終わって、ダラダラする俺と米太郎。

「次の授業何だっけ？」
「体育だよ」
「何するんだろ？」
「はぁ？　朝言っただろ。一組と合同でバレーだって」

そうだっけ。にしても合同でねぇ。……ん……一組ぃ？

「……なぁ、それって男女一緒？」
「んあ？　おいおい将也、バレーはバレーでもおっぱいバレーじゃないぜ？」

何を言ってるんだこいつは。俺はおっぱいを見たいわけじゃない。

春日に会いたくないだけだ。

「まぁ……たぶん大丈夫だろ」

「そうそう、元バレー部の俺がいれば安心だ」

「そっちじゃない馬鹿」

「えー、男子は右のコートで女子は左のコートで試合するぞー」

場所は体育館。一組合同かつ男女合同ときたら俺の不安は的中したと言って間違いない。

「兎月」

はい間違いない。

「……なんでしょう？」

振り返るとそこには体操服姿の春日がいた。ものすごい可愛いだなんて思ってはいけない。思ったら負けだ。

「放課後、私のクラスに来なさい」

「……分かりました」

勿論、嫌とは言えません。どーせ鞄持ちだろうな……はぁ。

「じゃ、試合あるんで」

とにかく急いで退散だ。これ以上何を言われるか分かったもんじゃない。

「おーい米太郎、俺らのチームは？」

「おー、こっちだこっち。すぐに試合だ」

俺はチームメイトを確認する。中学でバレー部のエース（自称）だった米太郎に日直じゃなかった渡部君そして遠藤、酒井、吉岡君だ。

「よ～く見とけよ将也。俺の華麗なるジャンプサーブを」

「はいはい」

米太郎はボールを上げると軽やかなステップをして力強くジャンプする。

「とおぉりゃぁ！」

勢いある気持ち悪い声とともに放たれたボールはネットへとぶつかる。

「いきなりサーブミスじゃねぇか！」

カッコつけてジャンプサーブなんかするからだ。

「オッケー大丈夫、切り替えていこ」

お前が言うな。サーブ権は相手チームに渡り、こっちのチームはレシーブの構えに入る。

「いいか将也、左手はそえるだけだ」

「お願いだから黙れ」

相手はごく普通のアンダーサーブで打ってきて、ボールはゆるーい弧を描いて落ちてきた。

「っしゃ、任せろ」

緩やかなボールを米太郎は難なくレシーブし、ボールは俺の真上へと舞い上がる。

「将也、こっちだ」

米太郎はネット前に走っていた。よし、任せろ！　俺は両手を頭上にかざし、トスの体勢に入る。

次の瞬間、俺の後頭部に衝撃が走った。い、痛い。突然のことに俺はバランスを崩して片膝をつく。ボールはそのまま俺のすぐ横に落下した。

「っ、何だ？」

この感じ、ボールをぶつけられたとしか思えない。くそっ、一体誰だ！？

「やいやい！　気をつけ、ろ……うっ」

俺の後ろには春日がいた。つりあがったキツイ双眸が俺を見下ろしている。そして無表情が怖い。

「か、春日だったんだ。ははは、次は気をつけてね」

慌ててボールを拾い、春日に渡す。つーか押しつける。

「しゃあ！　みんな集中していこうぜ！」

腹の底から声を張り上げる。周りの声が聞こえないくらいに。だって春日と絡みたくないんだもん。

続けて相手のサーブ。落下地点には米太郎。

「おっけぇ」

さきほどと同じフォームでボールを返す米太郎。そしてボールは俺の頭上。

「よし、今度こそブベェ！？」

またしても後頭部に衝撃が。ボールはトスできず、相手チームに二点目。

「か、春日わざとだろ！」

「ボール拾って」

「は、はい、どうぞ」

俺弱っ。自分が情けないよ……。

「何やってんだ将也。お前がトスもできない男だったなんて。そんな子に育てた覚えはないぞ！」

俺もない。

しかし一体なんだよ春日の奴。邪魔ばっかしやがって。俺への嫌がらせかよ。

気を取り直して試合に集中。相手のサーブを米太郎が返す。つーか安定感あるな米太郎。さすがバレー部だったことはある。

「今度こそしっかりな！」

「おう」

そう言った直後、またしても後頭部に衝撃。なめるなよ春日、三回も同じように倒れてたまるかっ！

踏ん張る俺。そんな俺の右足に新たな衝撃が。

「ぬぁ！？」

二撃目があるなんて聞いてないぞ！　くっ、なんとかトスは上げなくては。

よろけつつ顔を上げると、眼前にはボールが……あぁ！？

「ぐふぇっ」

ボールが顔面に直撃。三連コンボ見事に決まりました。

「ぶははははっ、何やってんだ将也」

「う、うるさい」

周りから失笑が聞こえる。なんて赤っ恥だチクショー。

「おい春日！　二連続は禁止だろ」
「ごめん兎月。二発目は私だった」

春日の横で両手を合わせる水川。

「お前かマミー！」
「マミー言うな！」

第3話　意外な接点

体育も終わり、残りの授業もダラダラと受け流して今は放課後。やっと帰れる～。あー、疲れた。いつも以上に疲れたと感じるのはやはりあの人のせいなのだろう。うん、そうに違いない。つーか絶対そうだ。

「じゃ～な将也」

米太郎は軽い足取りで教室から出ていく。あいつって確か弓道部だったよな。ってことは今から部活か。大変だねえ。

「おう」

俺も鞄を持って教室を出る。俺も部活はしているが今日は活動しないのでさっさと帰りましょうかね。帰って一狩りしますか～。

「はぁ～、今日も疲れた」
「兎月」
「……なんでしょうか」

またですか、春日さん。俺もうあなたに名前呼ばれるだけで気分ガタ落ちなんですけど。

「……放課後、私のクラスに来いと言ったわよね」
「んん？……あー……そーいえばそんなこと言われたような。で、何か用でも？」
「鞄持ちなさい」

やっぱりですか。やっぱり下僕の仕事ですか！　はぁ。
俺は無抵抗で春日の鞄を持つ。さも当然のように鞄押しつけやがって。……俺達、今日知り合ったばっかりだぜ。なんで一日にして主従関係が成り立っちゃってんだよ！？

「帰るわよ」

そのまま俺と春日は下校する。一見、可愛い女の子と一緒に帰るというラブコメっぽい展開かもしれないが相手は春日。ワガママ理不尽お嬢様の春日。俺はこれっぽっちも嬉しくありません。黙々と歩く俺達。何か話題は……

「春日は部活とかしてないの？」
「してない」

即答アンド会話終了。な、なんか話題は……

「春日の家ってお金持ちなんだろ？　どうしてバス通学なんだ？」

ちょっとこれは不躾な質問だったかな？　でもちょっと気になったので。だって、お金持ちなら車の送り迎えで登下校していてそうだしさ。

「お金持ちだから何？　リムジンで通うとでも思った？」
「いや、まぁそんなイメージが」
「そんなわけないでしょ。漫画の読みすぎ」
「そ、そうなんだ」

お、怒っていらっしゃる感じ。機嫌損ねてしまったよ……。わ、話題は……うーん……

「あ、バス来たね」
バスナイス！　これ以上気まずい空気に圧迫されるのはキツかったんだ。プシューと開く扉から俺と春日はバスに乗りこむ。席はそれなりに空いていたのだが、

「アンタは立っていなさい」
「はい」

と言われたので立つことになりました。くっ、どうして俺は何も言い返さないんだ！？　少しは抵抗しょうよ俺！
自分の弱さにへこんでいると春日の降りる停留所へと到着。立ち上がる春日。おおっと、鞄を返さなくては。

「はい、鞄」

差し出した鞄を無言で取る春日。俺が誠意込めて渡したのになんて態度だ。一言ぐらいお礼を言ってもいいじゃないか。

「じゃ、じゃ～ね」
「……」

またも無視。せっかく美人なのに……あの性格じゃ彼氏はできないな。……春日恵か……。俺は明日もパシリしなくてはならないのだろうか。……嫌だ。今日一日、一応下僕として過ごしてみたが、とんでもないストレスだった。あれをこれからも続けていくのは無理だって。よし、明日はガツンと言ってやろう。春日を前にするとなぜかすごんでしまうけど、そんなの関係ない。俺はお前の下僕じゃない！　ふざけるな！　……よし、この台詞でいこう。見てろよ春日ぁ……もうお前なんかに服したりはしないからな！

「将也、ご飯できたよー」

家に帰って自分の部屋でのんびりとゲーム中。と、下から聞こえてきたのは母さんの声だ。俺はクエストを中断してゲーム機をスリープモードにする。

「今行くー」

部屋を出て階段を下りて一階へ。食卓には晩飯が並べられており、既に父さんが食べていた。

「じいちゃんは？」

玄関には自転車があったので帰ってきているはず。

「おじいちゃん今日は友達とクラブに行くって」

おいおい、ファンキーなじじいだなおい。勝手に俺の自転車を使いやがったから文句の一つでも言ってやりたかったのに。

「まぁいいや。よし、いただきます」

晩飯を食べ始める。にしても春日には参ったな。ぜってー明日はガツンと言ってやる。俺はお前の下僕じゃないと思いきり叫んでやる。

「ん、どうした将也？　暗い顔なんかして」

向かい側に座る父さんが話しかけてきた。

「暗い顔してた？　いや実は今日、同級生から下僕扱いされちゃって」

「はっはっは、それは災難だったなあ。ま、お前なら大丈夫さ」

「適当なこと言うなよ。相手は女子だぜ」

「あら、いいじゃない。可愛い子？　名前は？」

父さんにビールを注ぐ母さん。

「可愛いかどうかはともかく、名前は春日…」

次の瞬間、父さんが口に含んだビールを盛大に吹き出した。

「うわっ汚ねえ！」

びっくりした。父さんは涎のようにダラダラと口からビールをこぼしながら俺を睨んでくる。ど、どうしたんだよ。

「ま、将也……今何て言った？」

「え、いや、春日って」

「今何て言ったぁあ！？」

絶対聞こえてるよね！？

「どうしたんだよ父さん。急に動揺しちゃって」

数秒の間の後、父さんは濡れた口を拭い、母さんは汚れたテーブルを拭く。

「父さんの会社はな、それなりに大きな会社なんだ」

「何それ。自慢？」

「話を最後まで聞け馬鹿息子。会社があれば当然、社長もいるよな」

「あ、ああそうだよな」

「うちの会社の社長は春日さんとおっしゃるんだ」

……おいおい……今、なんと？　え、ちょ……そ、そんなわけ……！？

「ま、まさか」

「そのまさかだ、この馬鹿どら息子ぉ！　いや、待て。もしかしたら人違いかもしれん。将也、その春日さんって子の特徴を言ってみろ」

「えっと…ワガママで親が有名企業の社長らしくてお嬢様だったかな」

「こんの大馬鹿息子があぁ！」

「うるせーよ！　声デカすぎ！」

「あああああっ！？　間違いない！　その子は社長の娘さんじゃないか！　とんだ偶然！　最悪だ！」

ちょ、落ち着いてよ。もう年なんだから、血管切れちゃうよ。

父さんはワナワナと震えているかと思いきや、勢いよく立ち上がると俺の両肩を掴んできた。近い近い、顔が近い！

「いいか、将也。その春日さんの娘さんには一切逆らうな！」
「はぁ？　なんでだよ」
「父さんのクビがかかってるんだよ、ってそんぐらい察しろ馬鹿息子がぁ！」
「ぐえっ、そんな乱暴に揺するなよ」

気持ち悪くなるっての。そして加齢臭がキツイ。嫌だねぇ年取るのって。ぐわぁ、ダブルでキツイ。

「父さんが有名企業に勤めているといっても、ただの平社員。社長の一声で父さんはレッドカード。もれなく会社から退場だ！」
「将也、あなたは私達を路頭に迷わせるつもり？」
「そんなこと言ったって母さん、俺はどうしたらいいんだ？」
「お前さっき言ったよな。春日さんの娘さんから下僕扱いされていると」
「ああ」
「ならそれをやり通すんだ！　完璧にだ！　そうすれば娘さんも満足して社長にチクったりはしないだろう。そうすれば父さんは安泰だ。いやむしろ特別ボーナスが出るかもしれない。やったぞ母さん、今年の年末はドバイに行けるかも！」
「ええ、そうねあなた」
「ピンチをチャンスに変えるとはこのことだ。ということで将也、お前は春日さんの奴隷として頑張るんだ」

何を勝手に決めつけているんだこの馬鹿親父は。自分の息子に奴隷を強要してきたよ。なんつー親だ。ある意味モンスターペアレント。

「嫌だよ。そんなプライドのないことを」
「黙れ小僧！」

うおっ、なぜにここで美輪さん！？

第４話　ヘタレ体質（前書き）

今回はちょっと短いです。

この程度のこと言わなくてもいいんですが、なんか前書きを書きたくて……

今度はもうちょっとマシなこと書きます。

第4話　ヘタレ体質

「よし、今日は自転車で行けるぜ」

下僕宣言を受けた翌朝、三日ぶりの自転車通学に俺は若干テンションが上がっていた。じいちゃんも昨日はクラブで弾けた後カラオケでオールしたらしく、まだ布団で寝ている。老人にしては非常に不健康だが、元気なので良しとしましょう。せいぜい余生を楽しく過ごしな、じじい。

自転車に跨がりペダルを漕ぐ。吹き抜ける春風がなんともまあ気持ちいい。今日はなんだか良い事がありそうだ。うふふふっ。

「……これはどうしたら……？」

うちの学校は坂道を登ったところにある。その坂道の途中に俺が一番会いたくない女子がいた。そう、春日だ。こういう状況でさっきの台詞が出たわけだ。このまま通過してバレないだろうか？　……たぶんバレないだろ。非常に危険だが、春日と知り合ったのは昨日。顔も覚えられていないだろうし、ましてや自転車に乗って後ろ姿しか晒さないから気づかれないはずだ。頑張れ俺。存在感を消すのだ。

地味にそしてごく自然に駆け抜けろ。
意を決して力強くペダルを漕いでいく。どんどん加速していき、そして春日を追い抜く。よし、通過したらこっちのもの！

「兎月」

急ブレーキしましょう。名前呼ばれちゃったもん。

「お、おはよう春日」
「……」

うーん……外見は完璧なのに性格が欠陥だらけなんだよな。あと、その無表情なんとかならないのかよ。もっと愛想よく笑いなさいよ。シンジ君風に言わせてもらうなら、笑えばいいと思うよ。

「アンタ、今日はバスじゃないんだ」
「まぁ、ご覧の通りチャリ通なもんで」

チリンチリンとベルを鳴らすが春日の目つきがキツくなりギロリと俺を睨んだので慌ててやめる。あー恐ろしや。

「鞄持ちなさい」
「はい」

何も抵抗できず、イエスと答えてしまった。春日の鞄をカゴに入れて再出発しようとしたが、

「アンタは私の後ろから来なさい」
「な、なんでだよ」
「来なさい」

「分かりました」

だから俺弱っ。

自転車を降りて手で押す。その前を春日が歩く。うぅ、なんと惨めな……。ガツンと言ってやると決めていたのに本人を目の前にすると言葉が出てこなかった。春日に命令されると反論できなくなってしまう。大人しく従ってしまう。なぜだ？

「はぁ……なんで言い返せないんだろ」

「それがアンタの体質よ」

……答えが返ってきた？　もしかして今、声に出てた？　うっわ、ヤッベ。

「い、いや今のは言い間違いで……って体質？」

なんだ体質って？

「アンタの父親って私のパパの会社の社員でしょ」

ば、バレてる！　な、なんで分かったの？

「気になったから色々と調べたわ」

「気になったって何が？」

「別にアンタのことじゃないわ」

そ、そうですか。すいません。

「じゃあ何？」

「アンタが私の命令に従順な理由、分かる？」

それってやっぱ俺のことじゃね？　いや、ここでツッコんでも意味ないから言わないけどさ。

「アンタは犬なのよ」
「い、犬？」
「主人に忠実な犬ってことよ」
「はぁ？　なんだそれ。ふざけるな、俺はお前に尻尾を振った覚えはない」
「口答えするな」
「はい、すいませんでした」

……ってあれ？　またもや簡単に謝っちゃった。嘘…ま、まさかこれが……！？

「それよ。アンタは自分の犬精神に基づいて本能的に命令に従うのよ」

う、嘘だろ？　そんな体質の持ち主だったのか俺。とんだヘタレ体質じゃねーか！　んな情けない体質だったなんて……うわ、ガチでへこむわ。
顔を上げると春日が微笑を浮かべていた。笑顔の春日、初めて見た。微笑だけど。ものすごい嫌な笑みだけど。

「アンタの昨日の見事な従順っぷりを見る限り、中々の犬体質だったわ」

お褒めの言葉かもしれないが、まったく嬉しくない言葉です。できれば撤回してください。お願いしますから。

「そういうわけだから」
「う、嘘だ！　俺はそんなヘタレじゃない！」
「早く行くわよ」
「はい」
……ああ……俺、ヘタレだなぁ。

第5話　図書室のオアシス

「紅茶買ってきって」
「次の授業、移動教室だから教材運んで」
「図書室に本返しといて」

これらの命令全てに対して「はい」と言って、そつなくこなした俺は偉いと思う。今は図書室で本を返した帰りだ。

「返してきたぞ」

一応、春日に報告する。

「じゃあ、これも」

お礼も言わず春日は本を差し出してきた。

「……これも返せと？」
「そ」
「さっき出しとけよ！」
「今読み終わった。行ってこい」

な、なんて奴だ。こんなこと許されるのか？

「行ってきます」

しかし犬体質のヘタレな俺は反射的にこの理不尽な要望を承諾してしまう。溜め息を吐きつつ先程歩いた道を再度通る。

「こんなことしてたら昼休みが終わっちゃうっての」

図書室は違う棟なので一度外に出なくてはならない。まったくもってめんどくさい。あー、しんどい。

ふと、俺の前を一匹の黒ぶち猫が横切った。

「猫だ。学校内にいるもんだな」

うはぁ癒される。猫は俺の数メートル先で歩を止め、こちらを見る。

「おいでおいで」

しゃがみ込んで手招きをする。が、猫はそれを一瞥した後また歩きだす。

「そんなもんだな。猫は自由気ままな動物だし」

はい休息終了。立ち上がって図書室へと向かう。

図書室がある建物の前まで来た。入口すぐ横の階段を登れば図書室に着く。これで本日二回目の入場となる。と、そこにはさきほどの猫がいた。

「さっきの猫、と……」

そして一人の女子生徒がいて、その女子は猫に鰹節をあげていた。

猫は鰹節を食べ終わると満足したように建物内から出ていく。お礼も言わないところが春日そっくりだ。

「猫って不思議だよね」

不意に女子生徒が喋りだした。独り言か？

「こんなことを今までに何十万人という人が考えたんだろうね。そう考えると歴史は繰り返すって言葉はしっくりくるよね」

深いことを言ってるようで浅い気がする。まあ、言いたいことは分かるな。

「でも答えは人それぞれ違うんじゃない？　そう考えると歴史は塗り替わるって言葉もしっくりくるよな」

俺の言葉に女子生徒が振り返る。赤みがかった長髪が印象的だ。そして可愛い。

「へぇ、そんな考え方もあるんだ」

くすりと笑う女子。これを天使の微笑みというのか。春日とは大違いだ。

「いつもあいつに餌あげてるの？」

「そうだよ。名前はコジロー」

それなりにカッコイイ名前だなおい。

「いつもご飯をあげているのに、お礼の一つも言わないんだよコジローは」

「そりゃ何も言わないでも餌貰えるなら言わないだろ。それってある意賢いよな」

「……それもそうね。うん……面白いね」

また微笑みをこぼしてくれた。可愛い。うは、可愛い。

「君の名前は？」

「俺？　兎月だ」

「兎月君よろしくね。ところでここに何か用なの？」

「あ、そうだった。本を返しにきたんだ」

俺は手に抱えた本を見せる。

「それはフランスの作家モープッサンの『川の宿』だね。こういうのを読むんだ」

「いや、俺じゃなくて知り合いの借りた本なんだ。俺は読んでいない」

「そうなの？　なら一度読んでみてよ。短いし読みやすいから」

「それなら読んでみようかな」

あまり本は読まないが、いい機会かも。

「うん。なら一度返して、今度は君の名前で借りるといいよ」

そう言って女子生徒は階段を登りだす。

「私も一緒に行く。本を読みたくなった」

そういえば、この人の名前はなんだろう？　見事に聞き忘れた。

図書室で本を借りるにはカウンターで司書さんに申し出て図書カードというものに学年、クラス、名前、本のタイトル、背表紙に貼られた番号を書く。レンタル期限は一週間。カウンターでカードを記入する俺の横にさきほどの女子が本を三冊抱えてやってきた。

「そんなに読むんだ」

「うん、あっという間に読み終わってしまうからね」

女子生徒は慣れた手つきでカード記入を始める。俺はそのペン先を横目で覗く。

名前記入欄には『火祭桜』と書かれていた。……カサイって読むのかな？

「どうしたの？」

「い、いや何でもない」

俺はカード記入を終えて司書さんに一礼する。

「じゃあこれ読んでみるよ」

「読み終わったら感想を聞かせてね」

その場で火祭と別れて教室へと戻る。なんだかいい気分だ。へぇ、あんな女子生徒がいたんだな。

「あれ？　将也、その本は？」

教室に戻ると、たくあんを摘まんでいる米太郎に話しかけられた。

「図書室で借りた。つーか、たくあんをスナック菓子感覚で食うな」
「やめられない止まらない～」
「面白くないぞ」
「その割には笑っているぞ。いや、笑ってるというよりはニヤニヤしてる」
「え、そうか？」
「そうだぞ。何かあったのか？」
「実はな……」

さきほどの火祭とのやりとりを話す。

「へぇ、ほのぼのしてるな」
「だろ？　しかもその女子かなり可愛くてな」
「ほほぅ、名前は？」
「えっと…火祭（かさい）」
「よっしゃ、今度は俺も一緒に行くぜ。つーか今から行くぞ！」
「はぁ？　嫌だよ」

冗談じゃないぞ。昼休みのうちに三回も図書室に行くなんて。

「うっせー、善は急げと言うだろ」

残りのたくあんを口に流し込む米太郎。だからスナック菓子みたいに食うなよ！

「つーか、もう図書室にいないかもしれないだろ」

「案ずるな、俺の直感がその火祭さんに巡り逢えると告げている。これはまさにデスティニーとな。さぁ、行こう」

この馬鹿は本気のようだ。

「はぁ……分かったよ。そのデスティニーに乾杯といきましょうかね」

「さすが将也。そうとなれば猛ダッシュだ！　うはっ、俺の女が待ってるぜ！」

お前の場合は妄ダッシュだ馬鹿。こうして俺は三度、図書室へと向かう。

「どこだ？　どこにいるんだ俺のハニー！」

口から大量のたくあん臭を撒き散らしながら米太郎は進む。つーかお前の女じゃないからな。

俺と米太郎は図書室の前に到着。まだいるといいけど。

「よっしゃ、開けるぜ」

図書室のドアノブを掴む米太郎。

「俺の姿大丈夫？　寝癖とかないよね？」

「たくあん臭い」

「よし、行くぞ！」

それは問題ないのかよ。

ドアを開けると中には生徒がほんの数人しかおらず、火祭の姿は……あ、

「いた」

まだいたのか。どうやら本を借りた後そのまま図書室で読みだしたようだ。

「米太郎、あの子だ。可愛くね？」

火祭は本に夢中でこちらに気づいていない。改めて見るが、やっぱり火祭は可愛い。サラサラとなめらかな長髪は肩にかかり、整った小顔と大きな瞳がお人形さんのように綺麗だ。見惚れてしまう。

隣の米太郎は固まったまま口をあんぐりと開けている。

「おいおい、一目惚れとか言うなよ？」
「い、いやあぁぁ！」

見事な奇声を上げた、って声デカ！　図書室にいる人全ての注目が俺らへと向けられる。火祭も驚いたようにこちらを見ているし。

「馬鹿、大声出すな。図書室では静かにしろ」
「そんなこと言ってられるかぁ！」

そんなに火祭が可愛かったのか？　いや、それにしては米太郎の顔は引き攣って怯えた目をしている。ど、どうしたよ。

「こっち来い将也！」

米太郎は回れ右をして、図書室から猛スピードで離れる。

「ちょ、待てって」

階段を降りて建物の入口前に来ると、米太郎は俺の胸倉を掴んできた。

「ぐっ、なんだよ急に」
「お前……あの人を知らないのか？」
「あの人って、火祭（かさい）のことか？」
「名前が違うわ！　あの人はかの有名な火祭桜（ひまつりさくら）だぞ！」
ひまつり？　かさいじゃなかったのか。
「へぇ、火祭（ひまつり）って読むのか」
「知らないのか！？」
「は？」
「……はぁ」
呆れたように溜息をつく米太郎。やめてくれ、たくあん臭い。
「あの人は県内最強の人だぞ」
「はぁ？　何言ってんだ。火祭は女の子だぞ？　そんなわけないだろ」
「分かってないな、あの人の強さを。間違いなく最強の女だ。実際に拳を交えた俺が言うんだからな」
「お前、火祭と喧嘩したことあるのか？」
空を見上げる米太郎。そしてフッと小さな笑みを浮かべる。
「あれは中学三年の時だった。受験勉強に疲れた俺は友達数人と公園でたむろしていた。ヤンキー気質溢れんばかりの俺達やんちゃ組は給食で余った牛乳を投げて戯れていたんだ」
なかなか病んでいたようで。

「そこの公園は一般歩道の塀の上にあってな。そこから牛乳パックを落とすと勢いよく破裂するんだ」

何をやってたんだこいつは。牛乳爆弾（俺命名）はめちゃくちゃ臭いんだぞ。中学校の時、ガラの悪い先輩から牛乳爆弾を食らった友達が泣いていたのを思い出すわ。

「それが楽しくてな、皆で躍起になって落としていると、一人の女子が現れた。やめろ、一般人の迷惑だとか言ってきたんだ。俺らも腕っ節には自信があったからな。ちょっと力で黙らそうとしたんだ」

そこで震えだす米太郎。

「で、ボコボコにしたんだ。その子が、お前らを」

「だって激強だったもん！」

「その激強な女子が火祭だと？」

「あの赤色を帯びた髪……間違いなくあの子は『血祭りの火祭』こと、火祭桜だぁぁ！」

「呼んだ？」

米太郎以外の声。俺らの後ろに火祭がいた。いつの間に。

「ひ、ヒイィィィ！　ひ、火祭さん、あの時はマジすいませんでした！　あれから牛乳は毎日飲んでいるので勘弁してください！　それでは～！」

顔を真っ青にして米太郎は外へと逃げていった。最後の方は言ってる意味が分からなかったが。

「わ、悪いな火祭。あいつ頭おかしいから」

「いや、彼はおかしくないよ。今の会話、途中から聞いてたよ」
火祭の顔が暗くなる。ってことは……
「喧嘩が強いってのは…」
「そうだね。自分で言うのもアレだけど結構強いよ」
「へぇ」
「……引かないの？」
「引く？　俺が火祭のことを？　いやいや、俺はなんとも思わないぞ。マナーの悪い米太郎を粛正しただけだろ？　火祭は正しいじゃんか」
「……そう」
「ちなみに米太郎ってのはさっき逃げた奴」
「米太郎って名前なんだ。面白い名前だね」
くすりと笑う火祭。やっぱ笑顔が可愛いな。
「だろ？」
俺もニヤリと笑う。
「とりあえず改めて自己紹介するな。俺は二年二組の兎月将也」
「私は二年一組、火祭桜。よろしくね」
俺の下僕生活にオアシスが見えた気がした。

第6話　誘拐は突然に

「米太郎」
「おぉ、将也ぁ。大丈夫だったか？　怪我はないか？」
「…あのなぁ、火祭はそんな狂暴な奴じゃないからな」

ブルブルと震える手で俺の体を触ってくる米太郎。ひどく不快だ。

「お前……火祭に洗脳されたのか？　奴は十数人の不良相手に圧勝するような怪物だぞ」
「それがどうした」
「だってヤバイじゃん！　他の皆も火祭のこと恐がって誰も近寄らないんだからな。それぐらいヤバイんだよ！」
「もういい」

こいつとは話にならない。別に喧嘩が強くたっていいじゃないか。それは火祭の一つの顔でしかなくて、火祭はもっとたくさんの顔を持っているぞ。今日知り合ったばかりの俺でさえ火祭のいいところはすぐに見つけれたのだから。

「だから火祭はヤバイんだって」
「私はそうは思わないよ」
「お、マミー」
「マミー言うな。私も火祭さんと話したことあるけど素直でいい子だったよ？」

さすが水川。よく分かってらっしゃる。

「二人とも正気か？　頭のネジが取れてるぞ」

「それはお前だ」

放課後、俺はトイレの個室でじっとしていた。別に便意があったわけではない。お腹を壊したわけでもない。これも全て春日と会いたくないというただそれだけの理由のみ。パシリなんてもうゴメンだ。俺にだってプライドがある！　これ大事！

「……そろそろいいかな？」

トイレでの長期滞在を終え、辺りを警戒しつつ鞄を持って廊下を進む。よし、春日の姿はどこにもない。ははは、やったぜ！

「兎月」

……まだいたのかよ。つーかどこから現れた？　人の気配なんて感じられなかったのに……怖いよ。

「どこにいた」

足を一歩下げたかと思いきや、勢いよく蹴りつけてきやがった。春日のローキックが膝にヒットする、って痛っ！

「がっ……と、トイレに行ってた」
「鞄持ちなさい」
「い、嫌だ」
「持ちなさい」
「はい」

……なんか少し慣れてきた。そんな自分に溜め息が出る。はぁ、情けない。
春日の数メートル後ろを歩きつつ校舎を出る。……ん？　あ、そういや春日はバスだったな。けど俺は……

「俺、今日自転車なんだけど……どうする？」

昨日みたいに同じバスなら鞄持ちできるが、今日は自転車だ。つまり鞄持ちはできないというわけですよ。

「アンタ、私の降りる停留所で待ってなさい」
「な、なんで」
「待ってなさい」
「はい」

まぁ、帰り道の途中だしな。特に支障が出るというわけでもないし、その程度のことなら文句一つ言わずにやってやるよ！　つーことで自転車を取りにいこう。

「言っとくけど私より遅れたら駄目だから」

だ、駄目って何！？　何が駄目なのさ！

「……えーと、つまり春日の乗るバスより先に停留所に着けと？」
「そ」
……まぁ、大丈夫だろ。バスごときに遅れを取る俺ではないし、バスもちんたら小銭を両替する奴と老人のゆっくり乗車下車にもたつくだろうし。
自転車のカゴに二人分の鞄を入れ、鍵を外す。自転車に跨がりレッツゴー。颯爽と校門を出る。と、坂道を春日が下りていた。
「アンタは先に行くな」
……はいはい。命令に従えばいいんでしょ。自転車を降りて、のろのろと春日についていく。くそ、坂道を自転車で降りる爽快感を味わえないなんて……じいちゃん！　俺も風になりたいよ！
停留所でバスを待つ俺と春日。いや、俺は待たなくても……。これも春日様のご命令ですか……はぁ。
待つこと数分。バスが来た。
「……これさ、俺とバスの競争になるくね？」
「……」
無視してバスに乗り込む春日。発進するバス。取り残される俺…って、おいおい！？
「い、急がなくちゃ」
慌ててバスを追いかけるが、バスが意外に速い！
「速ぇ！　信号はどうした？」

信号はもれなく全て青だった。グングン速度を上げるバス。差が…
…差が拡がるぅ！

「ぬ、ぬうおおぉあああぁぁぁっ！」

「ぜぇぜぇっ」

全速力で漕いだ甲斐があって、バスとはさほど距離を空けられずに済んだ。だが最後でしくじった。信号が赤になってしまい、バスは通過したが俺は渡れなかった。目の前には春日の降りる停留所……うわ～、春日がバスから降りてきた。春日の命令で先に待っていないといけなかったのに。

「これはまたローキックの餌食になりそうだな……はぁ……ん？」

バスが発車した直後、突然黒い怪しげな車が春日の前に停車。中から二人の黒いスーツの男がぬっと現れた。

「な、なんだ？」

黒スーツの男達は春日の腕を掴むと強引に車内に押し込んだ。そしてドアを閉めて発進。あっという間に消えていった。残されたのは静けさと俺だけ。
その光景を見ていた俺から一言だけ言わせてもらおう。

「今の……誘拐じゃね？」

第7話　誘拐とミッション（前書き）

春日誘拐編です。

第7話　誘拐とミッション

え、嘘。春日が誘拐された？　いやいや、そんなわけ……でも今のはどう見ても……誘拐！？　マジで？

「うわ～…生で見たの初めて……じゃなくて」

おいおい、どうするよ。警察に通報？　なんて言えばいいんだ？同級生が誘拐されて……えっと……なんか黒ずくめの男達が現れて変な薬を飲まされたら体が小さくなって……じゃなくて！　ああああぁっ、誰か助け……いや、待てよ？

「春日はお嬢様。今のはお迎えの車だったりして」

有り得る話だ。よくある話じゃないか、お城のような豪邸に住む金持ちの子供が高級車で送り迎えされることなんて。日曜日の六時頃によく見かけるよ。うん、それなら一安心。じゃあ帰りましょうかね。

「って春日に鞄返してねーや」

鞄を受け取らずに帰るなんて春日もおっちょこちょいだな、ははは…はは……いやいや、これ……やっぱり誘拐じゃね！？なんとなくだけど誘拐っぽいぞ。あの時一瞬だけ空気がシリアスになったもん。

「とりあえず真相を確かめなくては」

ここに春日の鞄がある。もしかしたら鞄の中に……お、

「ありました携帯電話」

良かった、春日の携帯がありましたよ。早速パカッと開く。それはつまりプライバシーの侵害。すいません春日さん。そして電話帳の『父親』のところでボタンをプッシュ。父親なら送迎をしているかどうか知っているだろ。……でも確か社長だっけ？　忙しくて娘なんかの電話には出られないかも。

『プルルルル…プルルもしもし恵？　パパに何か用かい？』

2コール目で出やがった。忙しくないのかよ社長さん。

「あ、僕は」

『誰だ貴様っ！　この携帯は恵のだぞ！　今すぐ消え失せろ！』

うわ、うるせー。なかなか気性が荒いようで。いきなり大声出すから耳がキーンってしたよ。キーンってなったの初めて。よくある感じで耳から携帯を遠ざける。

「す、すいません。僕、恵さんの同級生なんですが確認したいことがありまして。恵さんって車の送迎とかしているんですか？」

『なぜそんなことを貴様に言わなくてはならんのだ。いいから早く恵に代われ』

「それが恵さん、さきほど黒いスーツの男達に捕まってどこかに連れていかれましたよ」

『ぬあぁぁにぃぃぃ！？』

だから声デカイっての！　山倉かよ。あ、山倉ってのは同じ部活の同級生ね。そいつも声デカイから。

「あの、恵さんに車の送迎は……」
『していない！　恵が嫌だと言ったからな』
へぇ、そうなんだ。ってことは……
「じゃあ、やっぱりさっきのは誘拐だったんですねぇ」
『しみじみ言うなこのボケェ！　貴様は何をやってたんだぁ！』
「あ、あまりに突然のことだったので……」
『とにかくお前は今すぐ車を追いかけろ！　携帯のＧＰＳで居場所が分かる。お前が恵にたどり着いたら私にもう一度電話しろ』
「はい？　いやいや、そんなミッション急に言われてましても……」
『いいからやれ！　もし恵の身に何かあったらパパは…パパは……パパはもう生きてい』
ピッ
会話終了。うるさくて最後まで聞いてられるか。……さて、どうする？　誘拐された少女、それは春日。俺を下僕扱いし、使い走りとしてこき使う悪魔のような女。そんな奴の為に俺が頑張る必要があるのか？　警察に通報して適当にあしらうのが一番楽だ。俺がわざわざ誘拐犯を追いかける必要があるか？　……そんなの答えは決まっている。
「大ありだ。春日であろうと誰であろうと助ける。当たり前のことじゃないか！」
待ってろ春日、今助けに行くからな！
……ところであの車、どっちの方向に行ったっけ？

第8話　廃屋ってベタ過ぎる

とりあえず自転車を走らせる。電話していたせいで完全に車を見逃した。というか、のんびりし過ぎた。春日が拉致られた時点で行動しなかった俺のせい。俺の馬鹿野郎！

「くそっ、見つかんねえ！　なんか都合よくまだこの辺にいないのかよ」

混雑した道路。ズラリと並ぶ信号待ちの車、トラック、タクシー、バイク。その中にさきほどの黒い車……ってえぇ！？　いたよ、まだこの辺にいちゃった。都合よく赤信号で停車中。なんてラッキーなんだ。

「よし、早速に春日の親父さんに報告…って発進しちゃった！？」

信号が青に変わり、車は勢いよく発車する。

「やっべ、追いかけないと」

全力でペダルを漕ぐ。うおらぁ、自転車のトップスピードなめんなよ！　……あ、でもやっぱしんどいかも。

全速力で追いかけること約十分。車は町外れの廃屋へと入っていった。

「ぜぇぜぇ……あ、足パンパン」

しかし弱音を吐いている暇はない。車が入っていった廃屋へと足を踏み入れる。あ、自転車はその辺に置いてます。にしても、こんなところに廃屋があったなんて……ぱっと見る限りじゃ工場のようだ。ずっと前に潰れたのだろうか、何やらよく分からない機械やらが埃をかぶって放置されている。

「おい、車から降りろ」

入ってすぐ、前方にある巨大な部屋から男の声がした。俺はこっそりと物陰に隠れて中を覗く。工場の中はかなり広いが、音が反響して離れていても声がよく聞こえる。そして車の中から出てくる春日。おお、どうやら無傷っぽい。ロープ的なやつで体を縛られているわけでもなく、ガムテープ的なやつで口を塞がれているわけでもなかった。春日を囲むように黒スーツの男三人が立つ。

「さて、ここからどうする？」

「まずは上に報告…」

「それは後でもいいだろ」

何やら三人で相談している。身代金でも要求するつもりか？　とりあえず俺も上に報告だ。春日の携帯を取り出して親父さんにリダイアル。コールするかしないかで通話を切り、マナーモードかどうか

確認。あんなデカイ声で話されたら、すぐにバレてしまう。俺の居場所はＧＰＳで分かるらしいし、ずっと移動していた俺が廃屋の中で止まって電話を入れる。これだけの情報で春日がここにいることは、かの有名な江戸川君じゃなくても容易に推理できる。だから早く警察とか呼んできてください。それまで俺はここで待機だ。じっと中の様子を伺う。それにしても春日の奴、ずっと黙ったままだ。さすがに春日も恐いのかな。

「この子、一言も喋らないな」

誘拐犯も俺と同じことを考えてるようで。

「恐いからだろ。悪いなお嬢さん、上からの命令でな」

「とりあえず二、三発殴っとくか」

な、なんだと！？　い、今……殴るって……はぁ！？

三人のうち一人が春日へと近づく。マジで殴るつもりか？

「本気かお前？」

「上から言われただろ、びびらせとけって」

そう言って男は春日の肩を掴む。

「っ…！」

その手を弾く春日。

「無駄な抵抗するなよ。ちょっと痛いだけだからさ」

ヤバイ……ヤバイよ、殴ったら駄目だって。春日は女の子だぞ！

誘拐犯の前にお前らは男だろ。男が女に暴力振るったら駄目だって学校で教えてもらったでしょうが。うわぁ……ど、どうする？　お、俺がなんとかしないと……。でも相手は三人……勝てるわけがない。……でも俺がいかなくちゃ！　警察もまだ来ない、助けられるのは俺しかいないんだ！　勇気を振り絞り、声を上げようとした瞬間、

『ピロリロリ～ン』

俺のポケットから軽快なメロディが。自分の携帯マナーモードにしてなかった。ケアレスミス！　はわわあぁぁっ！

「な、なんだ!?」
「誰かいるのか!?」

気づかれたよ……。どうせなら自分から名乗りたかった。ちなみに誰だよメールした奴！

『新着メール　佐々木米太郎』

お前か米太郎ぉ！　明日覚えとけよぉ！

「そこにいる奴出てこい」
「……ふっ」

不可解な笑みを浮かべて俺は物陰から出る。不可解な笑みというのは俺自身も不可解だからだ。はい、パニクってます。

「だ、誰だお前は」

パニクっているのは相手も同じようだ。三人のうち二人は焦っている。そして春日は驚いた表情で俺を見つめる。お、ビックリしてくれた？　春日のああいった表情は初めて見る。いつも無表情だからなあ。

「お前、こいつの彼氏か？」

一人、落ち着いた様子で話しかけてくる。さっき春日を殴ると言った奴だ。口元を大きく歪ませて汚い笑みを浮かべている。うわ、嫌いなタイプだよ。

「俺か？　そんなこと見れば分かるだろ」

睨みをきかして俺はゆっくりと近づいていく。一歩、また一歩。そう、何を隠そう俺は、

「俺は……下僕だ！」

「げ、下僕なの？」

拍子抜けですいません。でも事実だからしょうがないもん！

「その下僕が何の用だよ」

ニヤニヤと笑う男。こいつさっきから生意気だな。俺の中で誘拐犯Aと呼ぶことにする。余裕な表情が腹立つ。冷静ぶりやがって。それはこっちがやってるちゅーに！

「決まってんだろ。春日を助けにきた」

「お前一人でか？　馬鹿か、こっちは三人だぞ」

馬鹿はお前だ誘拐犯A。俺が助けを呼んでないとでも思っているのか。今にパトカーがファンファンとたくさん来るぞ。

「いいから春日から離れろ」

自分では恐い顔をしているつもりだが、誘拐犯Aはまったく動じない。完全に俺を見下し、鼻で笑っていやがる。他の二人はびびっているみたいだが。

「や、やばいって」

情けない声の誘拐犯B。

「逃げたほうがいいって」

情けない声の誘拐犯C。

「うろたえるな。ただか一人だろうが」

強気な誘拐犯A。だから一人じゃないって。

「おい、誘拐犯」
「あぁ？　俺のことか？」
「……お前さっき春日を殴るとか言ったよな」
「ああ、言ったが？」
「春日を殴る前に俺を殴れよ」
「あぁ？　上等だ、まずはお前からだ」

そう言って誘拐犯Ａは春日から離れて俺へと近づいてきた。よし、とりあえず春日の安全確保。そして俺のピンチ。

「お前みたいな彼女の前でヒーロー気取りする馬鹿はボッコボコにしてやる」

両手を上げてファイティングポーズをとる誘拐犯Ａ。やる気満々ですかコノヤロー。……やるしかないか。ガチの喧嘩なんて生まれて初めてだよ。タイマンなんて俺には縁のないことだと思っていたけど……まさかだよね。

「かかってこいよ彼氏さん」
「……もう一度言うけど俺は彼氏でもなければヒーローでもない」

こうなったらヤケクソだ。腹を括り、玉砕覚悟で俺は全速力で誘拐犯Ａに突っ込む。何の策もない、ただの突撃だコノヤロー。

「ただの下僕だぁ！」

誘拐犯Ａの数歩手前で勢いよくジャンプする。ほとんど喧嘩もしたことのない俺が選んだコマンドはなんとドロップキックだった。しかし、びびってしまい両方の足を上げることはできず、ただのジャ

ンプキックとなってしまった。

「ぐへぇ！？」

そんな拙いキックが見事顔面にヒットしたので超ビックリだ。誘拐犯Ａはモロに蹴りを食らって地面へと倒れこむ。誘拐犯Ａ弱っ！　俺なんかの攻撃を食らうなんて……こいつ口だけの雑魚タイプだ。

「っつ、何だよ不意打ちかよ。セコいし、つーか全然痛くないし。喧嘩のやり方分かってねえし、つーか全然痛くないし。蚊に刺されたかと思った」

ぶつぶつ小声で何言っているのか聞き取れない。あと普通に泣いてるし。歪んだサングラスは潤んだ瞳を隠しきれていない。すごい惨めだな。そんな中二みたいな誘拐犯Ａに追撃を加えようと拳を振り上げると、

「うへぇっ！？　ま、待てよ。二回続けて攻撃だなんて反則だぞ！」

……中二どころか小学生レベルだ。いつターン制を設けたんだよ。

「お前、弱かったのか……」

「いつも威張っているから強いのかと思ってたよ」

呆れたように呟くＢとＣ。

「う、うるさい！　三人がかりでいくぞ」

タイマンでは勝てないと思ったのか、誘拐犯ＡとＢとＣの三人は横一列に並んで構える。一対三ではこっちが圧倒的に不利。けど、今

はこっちの方が都合良いぜ。なぜなら三人の注意が俺に向いている。つまり春日はフリーの状態。警察が駆けつけた時、誘拐犯が春日を人質に取る可能性大だからな。なんとかして春日を誘拐犯の傍から引き離したい。

「オラァ！　いくぜ！」

三人一斉に突っこんできた。

「さ、三人相手なんて勝てっこないじゃん」

誘拐犯に背を向けて俺は走る。後ろから聞こえる誘拐犯Ａの罵倒。

「逃げてんじゃねぇ、ボッコボコにしてやる」

逃げているわけではない。逃げているフリだ。ある程度走ったところで俺は体を切り返して急リターン。誘拐犯三人に突撃する。うおおおっ！

「うわっ！？」

ぶつからないようにのけ反る誘拐犯達。その間に体をねじ込まして三人組を突破。そのまま春日のもとへと駆け寄る。

「春日！　大丈夫か？」

良かった、やっぱ外傷はこれといってない。性格最悪とはいえ春日みたいな可愛い女の子が傷つくのは見ていられないからな。無事で何よりです。

「と、兎月どうしてここに……」
「バス停でいくら待っても春日が来ないから探しにきた」
ニカッと笑うと、春日も安堵したように微笑む。うわ、春日の笑顔が可愛過ぎる。普通にドキッとした。
「この野郎……よくも出し抜きやがったな！　ケツの青い餓鬼のくせして！　ぶち殺してやる！」
俺の切り替えしタックルにびっくりしたのか、のけ反り返って尻餅をついた誘拐犯Ａが悪態を吐き散らす。
「出し抜かれる方が悪いんだよ！　人質から離れるなんて馬鹿じゃねーの？」
「なんだと！」
じりじりと距離を詰めてくる誘拐犯ＡＢＣ。……さっきまでは完璧だったけど、ここからどうすれば……はっきり言ってピンチです。

第9話　ヒーローは遅れて登場するってことは俺はヒーローじゃなかった

なんとか春日だけでも逃がそうと頭をフル回転させて考えを巡らしていると、誘拐犯Ｂが俺に突撃してきた。真後ろには春日がいる。俺が避けたら春日に当たってしまう。

「ぐへぇ」

……まあ、どうせ攻撃を回避できるほどのフットワークは持っていないので、いらぬ心配。誘拐犯Ｂのタックルをモロに食らう。がっ、腹に衝撃が……！　なんとか上体をひねり、春日を巻き込まないようにしたのは我ながらナイスだと思う。ブレる視界、そして背中と頭に激痛。思いきり床に叩きつけられた。いってぇ……頭強打したぞ。上にのしかかる誘拐犯Ｂの体重が腹を締めつけ俺の体を拘束。不快感と焦燥感で頭は混乱し、体中から汗が滲んできた。ぐっ……恐怖と焦りで視界がぼやけてしまう。

「今だ、女の子を捕らえろ」

「よし」

他の二人に呼びかける誘拐犯Ｂとそれに応答する誘拐犯Ｃ。ほの暗い視界の端に映ったのは、つかつか歩く誘拐犯Ｃの姿と怯えて動けない春日……っ、春日がピンチ。俺が助けないでどうする！

「くっ、ぬあぁぁ！」

じたばた暴れるが、誘拐犯Ｂにがっしりホールディングされて全く動けない。く、くそ……このままでは春日が捕まってしまう。また車で移動されたら今度こそ見失ってしまう！　春日を助けられるの

は俺しかいないんだぞ！？　しっかりしやがれ、俺は誰の下僕だ？
　春日恵の下僕だろうが！　主人も守れないで下僕が務まるかあぁっ！　このままでは終われない、終われるわけがない。

「春日は…俺が……守るんだ！」

自分でも恥ずかしいセリフだったと思うが、言っちまったのは仕方ない。有言実行しなくては。腹に力をくわえて一気に暴れる。とにかく暴れまくる。はいややあああぁぁぁぁ！

「うおおおぉぉぉっ！」
「こ、こいつ……っ！？」

渾身の力を振り絞って誘拐犯Ｂを払いのける。息つく暇なんてない。横を見れば今にも春日に襲いかかりそうな誘拐犯Ｃ。させるか！　足を乱暴に振り動かして誘拐犯Ｃに向かってダッシュ。低い姿勢から半ばこけるかのようにして誘拐犯Ｃの懐にタックル。

「ぐあっ！？」

誘拐犯Ｃをぶっ倒して、再び春日を守るように体勢を整える。俺しかいない。今この場で春日を守れるのは俺しかいないんだ。だったら俺は絶対に春日を守り抜く。絶対の絶対にだ！

「春日には指一本触れさせねぇ！」
「と、兎月」

後ろから春日の震える声が聞こえる。俺だって恐いんですよ？

「心配するな春日。絶対になんとかしてみせる」

しかし弱音は吐けません。やっぱ女の子の前ではカッコつけたいもんです。だって男の子だもん。

「こ、この野郎……」

「いい加減大人しくしてくれ」

立ち上がったBとCが再び近づいてくる。なんとか春日だけでも逃がすことはできないものか……さすがに一人で三人相手は厳しい。ズキズキと頭は痛み、歪む視界と焦燥感が吐き気を訴える。経験したことのない緊張感に体は強張り、吸いこむ空気が異様に冷たい。心臓が張り裂けそうなくらい暴れて、まともな意識を保てない。だ、誰か助けて……もう限界……

そう思った次の瞬間、

「うおっ!?」

轟音とともに大量の車が工場内になだれこんできた。激しいブレーキ音とタイヤが地面を擦る音。停車した車から何人もの黒スーツの屈強な男達が溢れ出した。多っ！　車の中にあんな大勢入るものなのか!?

「な、なんだこいつら!?」

「ひぇ！」

「た、助けて」

誘拐犯ＡＢＣの様子からだと、彼らの仲間ではないのだろう。瞬く間に包囲される誘拐犯達。な、なんだこれ!?　怖いよ！

さらにもう一台、荒んだ工場にはまったく似合わない高級リムジン

が入ってきた。滑らかにドリフトし、中から立派なスーツを着た男性が現れた。

「め、恵っ！　無事か？　パパが助けに来たよ！」

この声……聞き覚えがあるぞ。まさか、

「パパ」

春日の声。どうやら間違いないようだ。この人が春日の親父さん、そして有名企業の社長。仕事はいいのかよ。ふぅ……とりあえず一安心だ。助けがきてくれた。俺も緊張の糸が切れてその場に座りこむ。ああ、肝が冷えた。

「その三人組を取り抑えろ」

春日父に従い、黒スーツの男達は三人組に乗りかかる。

「「「ぐあっ」」」

なんだか黒い物体がうごめいているように見える。もみくちゃ状態がしばらく続いた後、黒い物体はばらばらに散っていき、残ったのはロープで拘束された誘拐犯三人。これを形勢逆転と言うのだろうか……。ガクガクブルブル震える三人組に春日父がゆっくりと近づく。

「さて……うちの娘に手を出した以上、覚悟はできているよな」

胸の内ポケットへ手を入れる春日の親父さん。いやいや、もしかして拳銃ですか!?　映画でよく出てくる黒光りするチャカというや

つ……だ、駄目ですって！

「ま、待ってください。俺ら何も危害は加えていません！」

必死に弁明する誘拐犯C。他の二人もコクコクと首を縦に振る。

……ちょっと待て、

「そこの誘拐犯Aが春日を殴るとか言ってましたよ」

危害加える気満々だったよな。

「お、お前余計なこと言うな」

真っ青な誘拐犯A。ガチガチ震えているのに汗が滝のように流れまくる。あ、あいつもう死にそうだよ。そして、それを見ても何一つ表情を変えずに内ポケットを探る春日父。やる気満々…じゃなくて殺る気満々だよ……。

「ち、違うんです。俺達、ある人から依頼されたんです。それで仕方なく」

「ほう、その依頼主とは誰だ」

「そ、それは言えません。それを言うと俺達消されてしまいます……」

沈黙。春日父は誘拐犯達を見下ろし、口を閉じた。こんなに大勢いるのに誰一人として喋らない。初めて工場内に訪れる沈黙とプレッシャー。だ、大丈夫だよね……撃たないよね？　俺、人が撃たれるところなんて見たくないよ。

「……なるほど」

……何が？

「こいつらはこっちで片付ける。警察には通報しなくていい」

一人納得したらしく春日父はそう言うとこちらへ近づいてきた。その後ろで誘拐犯三人組は車の中へ押し込まれていた。

「め、恵ーっ！　ごめんな、パパがちゃんと傍にいてやればこんなことにはならなかったのに。パパは自分が恥ずかしいよ！」

生で聞くとさらに響く声だな。つーか俺は無視ですか。自分で言うのもアレだけど今回のＭＶＰに選ばれてもおかしくないと思うんですが。

「む、誰だ貴様。誘拐犯の仲間か？」

「ち、違いますよ」

「そんなことはお前の着ている制服を見れば分かることだ。馬鹿か貴様」

うわー、ムカつく。こんな奴が社長でいいのかよ。

「パパ、こいつは私の下僕なの」

春日さん、あなたを助けた人をこいつ呼ばわりですか、下僕呼ばわりですか。

「ほう、君が兎月君か。恵から話は聞いているよ。見事な犬体質らしいな」

なんだよ犬体質って。もっと違う印象を持ってください。親子揃って失礼極まりないぞ。

「君には感謝している。車を追いかけて私に居場所を知らせてくれた。君がいなかったら恵はどうなっていたことか……本当にありがとう」

……お、おぉ。ちゃんとした大人だった。礼儀正しく頭を下げる春日父。俺もつられて一礼する。

「また後日お礼をしたいと思う。とりあえず今日は家に帰ってくれたまえ。特に目立った外傷はないようだしな」

まあ確かにナイフで斬られたわけでも金属バットで殴られたわけでもない。タックルされた時に強打した頭がまだ痛いが、たいしたことはないだろう。

「よし、父さんは仕事に戻る。恵はＳＰの方に送ってもらいなさい。ついでに兎月君も」

「あ、僕は自転車なんで大丈夫です」

「人の厚意は有り難く受けとったらどうかね？」

「いや、自転車があるんで」

「いやいや、だから遠慮せずに」

「いやいやいや、風になりたいから結構ですって」

「もういい！　知らない！」

そう言って春日父はリムジンに乗りこむと工場を後にした。だって自転車なんだもん。……にしても、

「あの誘拐犯達、警察に突き出さなくてよかったのか？」

「パパにはパパの考えがあるはずだから」

ああ、そう。あいつら大丈夫かな？　コンクリに埋めるとかないよね？

「まぁ、大丈夫でしょう」

不安ではあるが、俺にはどうしようもないので。それにもし制裁を加えるなら春日父がこの場で下していただろう。そうしなかったのには何か理由があってのこと……俺にはさっぱりですけど。

「……ぶはぁ」

ようやく肩の荷が下りた。あー疲れた。そして後頭部が痛い。たんこぶかこれ。んー……誘拐犯三人相手にたんこぶ一つで済んだのは幸運なことだよな。入院沙汰にならなくて良かったよ。俺も春日も。

「さて、帰りますか。じゃーな春日。帰りは気をつけてな」

「待って」

工場から出ようとしたら春日に袖を掴まれた。うわっ、ドキっとする！

「な、何？」

も、もしかして……お礼のキスとか？　うはっ！？　ど、どうしよ…まだ心の準備ができてないよ。こ、困るって～。

「鞄返して」

……はぁ、一瞬でも期待した自分が恥ずかしい。春日がお礼を言うはずがないだろ。馬鹿か俺。

「はい、どうぞ」

ちゃんと携帯を戻して鞄を渡す。なんか色々と疲れました。帰って早く寝たいです。

「……」

「えーと……まだ何か？」

ちゃんと鞄を返したのにまだ袖を掴んでいる春日。顔が俯いていて、よく表情が見えない。あの……まだ他に何か言いたいことでも？ちょっとぉ、もうパシリは勘弁してよ。もう無理ですって。帰っていいですか！？

「……」

「えっと……なんですか？」

「……あ、あり」

『ピロリロリ～ン』

「お、メールだ…って米太郎！　お前のせいで！」

春日が何か言いかけたようだが、無視します。どーせ命令とかだろうしな。このまま聞かずにこの場を去った方がいい。さあ急いで帰ろう！

「今度こそじゃなあ。また来週」

ちなみに今日は金曜日。明日学校休みでよかった。今日はぐっすり眠れる。俺は米太郎に怒りの電話をしつつ、その場を去った。

「……ありがとう」

第9話　ヒーローは遅れて登場するってことは俺はヒーローじゃなかった（後書き）

春日誘拐編完結です。すぐ終わりました。

第１０話　嬉しくないアドレス交換

その日の夜、ものすごい形相で父さんが帰ってきた。

「将也…お前って奴は……」

これでもかと言わんばかりに顔を近づける父さん。やめてくれ、加齢臭がひどんで。鼻がひん曲がりそうだ。こんな大人にはなりたくない。

「今日、社長からお呼びがあった」

「う、うん」

「平社員の父さんが呼ばれるなんて、ありえないことだぞ」

「へぇ」

「父さんは死を覚悟した。お前と母さんを残して逝くのは心苦しかったよ。特に将也には何もしてやれなかった……すまん」

いやいや、父さんまだ生きてるから。勝手に死んだノリで話を進めないで。

「遺書を書かせてくれと懇願する父さんだったが、社長は『君の息子が私の娘を助けてくれた。社長としてではなく一人の父親として息子さんに感謝しています。有難うございます。息子さんによろしく』とおっしゃられた」

おぉ、やっぱりちゃんとした人だったよ。良かった、ただの親バカではないようだ。

「父さん心臓が停止するかと思ったよ。とにかく！　よくやったぞ

将也。この調子で春日さんの好感度を上げて父さん達をドバイに連れていってくれ！」

「楽しみにしているわ」

そう言って父と母は楽しげに旅行計画を練りつつ夕食を食べ始めた。すぐ調子に乗りやがって。つーか俺がどうやって春日を助けたか聞かないんだね。知りたくないんだね！　なんて親だよ。

週末は家でゴロゴロしたり友達と遊んだりなどして、あっという間に月曜日。休みの日ってすぐ終わるよね。気づいたらもう夕方！？

みたいな。そして何も得られなかった自分に溜め息。人生とは何かを得てこそのもの。何も得ないことは生きていないことと同じだ。うん、馬鹿なりに哲学者みたいなこと言ってみた。誰か共感してくれないかな。今度ブログに乗せてみよう。いや、ブログやってないけど。

「兎月君、一組の春日さんが呼んでいるよ」

一時限目開始前の休み時間、教室で俺が米太郎と週末にあった深夜番組『おねだりブルーベリー』について熱く語り合っていると、クラスの女子にそう言われた。朝からご指名。その相手が……ねぇ…

…。

「春日か……はぁ」

またパシリだろうな。嫌だね～、朝はゆっくりしたいよ。憂鬱な気分で廊下へと向かう。

「ま、将也！　いつの間に春日さんと仲良くなったんだよ？」

さっきまでニヤニヤ顔だった米太郎が驚愕と言わんばかりに声を荒げる。おいおい、目が怖いって。飢えた野犬みたいだぞ。

「いやいや、全然仲良しじゃないから」

単なる主人と下僕の関係ですよ、って自分で言うと空しいな。ギャーギャーうるさい米太郎は無視して廊下へと出る。そこにはいつも通りお美しい姿の春日さんがいました。そして無表情。

「おはよう。今日も紅茶？」

「言ってる意味が分からない」

……いや、あなたが紅茶買ってこいって言うと思ったので。

「兎月、携帯貸しなさい」

「なんで？」

「貸しなさい」

「どうぞ」

今日も絶好調、俺の犬魂。あー情けない。乱雑に俺の携帯を奪い取ると春日は自分の携帯と俺の携帯をくっつける。あ～、赤外線通信

ですね。それならそうと言ってくれたらいいのに。女子と赤外線をやる楽しさを知らないのか。特に可愛い女子とだと、ニヤニヤしそうなのを堪えるみたいな。そういう楽しみがあるのにさ。

「はい」

春日から携帯を受けとる。アドレス帳には『春日恵』とあった。

「用事があったらメールするから。呼んだらすぐに来なさい」

登録したばっかりであるが早速着信拒否にしたい。要は呼びベルじゃねーか。もしかして、春日が俺とメールしたいのかなとか勘違いしちゃった。はい恥ずかしい。春日はそれだけ言うと自分の教室に戻っていった。……う～ん、また俺の勘違いだと思うけど、なんとなく春日との距離が縮まったっぽいんだよな。昨日の頑張りで少しは認めてくれたのか。ちょっとは「あ、こいつ頼りがいある」と思ってくれたかな？

「春日さんとメアド交換だなんて羨ましいなチクショー！」

教室から顔を半分出した米太郎のシャウト。怖いわ。顔半分ってなんか怖いわ。おいおい、どこが羨ましいんだよ。こんなの女子のメアドゲットのうちに入らないから。

「代わってもらいたいぐらいだけどな……ん？」

携帯のランプが点滅する。メールか？　相手は……春日恵……。

『紅茶買ってきなさい』

……だから俺さっき言ったじゃん！

第11話　嬉しいアドレス交換

昼休み、俺は図書室へと向かっていた。今回は春日のパシリではなく、プライベートでの来場だ。階段を上り、図書室の扉を開く。通い慣れた生徒なら「相変わらず本の匂いが鼻をくすぐるぜ」みたいなキザな台詞を言うかもしれないが、俺は指の数ほどしか来ていないので「今日も静かだなぁ」と馬鹿丸出しのことしか思わない。いつも通りの静かな図書室に入り、カウンターで司書さんに本を返す。

「はい、ありがとうございます」

周りに気を使った小声の丁寧な口調で司書さんは本を受け取ってくれた。さて、このまま帰るのも何なので少しぶらつくか。とりあえず難しい書籍とかを読むふりして知的アピールでもしようかな。…誰へのアピールだ？

「ねぇ」

つんつん、と背中を突かれるので後ろを振り向くと、

「あ、火祭」

赤みがかった長髪の女子生徒、火祭がいた。最近知り合った俺のオアシス。すごく可愛い。これ重要。

「本返しに来たの？」
「そうだよ」
「感想聞かせてよ」

俺が借りた本は火祭に勧められたもので、そういえば感想を言う約束をしていたな。

「いいけど……図書室では静かにしないといけないし」
「なら下に行こうよ。コジローにご飯あげる時間だから」
「オッケー」

俺と火祭は図書室を出て階段を下り一階へと向かう。下りた先、建物玄関口には黒ぶち猫のコジローが既に待ち構えていた。いやらしい奴だなお前は。火祭はポケットから取り出した鰹節をコジローにあげる。なんとも微笑ましい光景ですな。

「それでどうだった？」
「あぁ『川の宿』ね。短くて読みやすかったよ。外国人が著者の本を読んだのって初めてかも。なんか頭に寒気が食いこんでくるような……イメージが鮮明に浮かんできた。興味深い内容だし読んでいて面白かったよ」

土日であっという間に読み終わっちゃったんだよな。意外と俺って読書好きかもしれない。この調子なら昔、挫折したハリーも全巻読破できるかも。

「うん、私もそう思う。著者のモープッサンは他にもたくさんの短編集を書いているから、そちらも読んでみるといいよ」
「気が向いたら読むかも」

そこからは本の感想を喋ったり、他愛のない雑談などをしてとても充実した昼休みを過ごした。あ～、ほのぼの。なんて平和的日常。心が安らぐよね。

「あ、そろそろ予鈴が鳴るみたいだね」

火祭とのんびりしていると、図書室から二、三人生徒が出てきた。
それを見て火祭がそう呟いた。

「らしいな」

携帯を取り出して時間を確認。『新着メール　春日恵』の文字が目に飛びこんできたが、見なかったことにしとこう。うん、そうしよう。

「やっぱり携帯持っているんだね」
「ん、まあ現代っ子の必需品だからな。特に珍しくもないし」
「……もし良かったらメールアドレス交換しない？」
「お、いいよ」

少しだけ変な間があったが、そんなこと気にしない。火祭みたいな可愛い女子とアド交換なんて夢のようです。顔には出さないがテンション急上昇！

「じゃあ、俺から送るわ」

「えっと、赤外線ってどこ？」
「そこじゃね？」
「あ、送信できた。良かった」

赤外線通信で必ずもたつくというあるあるネタをした後、無事火祭とメアド交換。ちゃんとアドレス帳のハ行に火祭の名前が入る。うはあ、嬉しい。

「暇だったらメールしていい？」
「君ならいつでも大歓迎だよ。待っているね」

そう言ってもらえると嬉しい限りですよ。思わずニヤケ顔になりそう。

「そろそろ教室に戻るか。そういえば火祭って何組？」
「前に言わなかった？　私は一組だよ」

お～、やっぱ頭いいんだな。うちの学校はそれなりの進学校であり、学力もそれなりに高い。クラス編成は一、二組は特進クラスで、三～五組は進学クラス。あとスポーツ推薦クラスの六、七組といった感じだ。まあ、進学クラスが馬鹿というわけじゃない。それなりです。しかし一組のレベルはかなり高い。同じ特進クラスの二組との差はまさに雲泥もとい天と地の差、月とスッポンと言ったところだ。二組の下位の俺なんか敵いっこない。そういえば春日も一組だったな。やっぱ春日も頭いいのだろう。

「私は図書委員での仕事があるから先に戻っていいよ」
「へえ、図書委員なんだ。いやいや、俺も手伝うって」

ここで戻ると、また春日にパシられる。それはさっきのメールから

言わずもがな。

「え、いや大丈夫だよ。本の整理ぐらいだから」
「いやいや、是非手伝わせてよ」

ここで授業開始まで粘って、なんとか春日を避けたい。そしてもっと火祭とほのぼのしていたい！

「でも……いいの？」
「いいのいいの」
「ありがとう……」

お～、ちゃんとお礼を言ってもらえるなんて……！　春日にも見習ってもらいたいものだ。

「よし、じゃあ図書室に行こう」
「うん」

俺と火祭は仲良く図書室へと向かった。しかし、放課後には結局春日に見つかってしまいローキックを食らったりした。はい痛かったです！

第11話　嬉しいアドレス交換（後書き）

ここで出てくるモープッサンとは架空の人物で、ギ・ド・モーパッサンというフランスの作家がモデルとなっています。『川の宿』もモーパッサンの作品『山の宿』をもじったものです。『山の宿』は新訳の文庫版『モーパッサン短編集』に入っていますので興味ある人は是非一度読んでみてください。まあ、それより『へたれ犬』の方を読んでくださいというのが本音ですけど……。

第12話　ゴールデンウィーク

面倒くさい授業と毎日の小テスト。パシリと鞄持ちで忙しい下僕生活。そんな休息と安らぎのない平日も終わり、ついにきました五月。今日は五月二日、まさにＧＷ（ゴールデンウイーク）の真っ只中。今日は高校の遠足の日である。名前もよく知らない山を登山するとかパン工場を見学しましょうみたいな小学生の遠足とは違って、うちの高校は地元の遊園地に行くのが遠足となっている。おやつに設定金額はなし。高校生だし当たり前だよね。バナナはおやつに含まれるんですかー？　みたいな質問にはＷｉｋｉで調べろボケェ、と言ってやります。そんなのＷｉｋｉで調べることじゃねぇよカスが、と返されたら泣きべそかいて謝罪します。

「将也～、次はあれ乗ろうぜ」

ちなみに班は生徒同士で決めてよい。つまり生徒の自主性。俺のグループには元気爆発ハイテンションの米太郎、

「絶叫系ばっかじゃんか」
「いいだろ～。なぁ、マミー」
「マミー言うな」

可愛い女子生徒で俺のクラスメイトのマミーこと水川。そして、

「でもその前にお昼ご飯にしない？」
「そ、そうですね。火祭さん」

米太郎がびびる火祭。これまた可愛い女子生徒。この四人で遊園地を回っている。つーか、いつまでびくびくしてんだ米太郎は。そん

なに火祭が恐いか。火祭が一人ぼっちだったので俺が一緒に回ろうと誘った途端、米太郎が奇声を上げた。猛反対する米太郎を俺と水川が押し切って火祭の加入決定。片っ端からアトラクションを制覇していき、現在一時過ぎ。

「じゃあ、どこかで食べよ」
「そうだな。俺、ハンバーガー食べたい」
「いいよ」

俺の意見が採用されて俺達は近くのハンバーガーショップへと向かう。火祭と水川が前を歩き、俺と米太郎が後ろからついていく。そして隣をマスコットキャラクターのパーシー君が横切る。なぜかタバコの臭いがした。子供達の夢をぶち壊すつもりか。

「お前さー、いつまで恐がってんの？」

中学時代、米太郎は火祭にボコボコにされたのだ。その時に味わった恐怖が米太郎の中でトラウマとなっているらしい。とはいえ実際はマナーの悪い米太郎を火祭が注意したら米太郎が喧嘩をふっかけてきて火祭はそれを返り討ちにしただけなのだが。つまり火祭は何も悪くないのだ。それをこの馬鹿は勝手に怯えやがって……悪いのはお前だからな。

「だ、大丈夫。午前中一緒に回ったら、大分慣れてきた」
「火祭はすげー良い奴だからな。昔、ボコボコにされたのはお前のせいだから」

火祭はいたって普通の女子高生だ。何がそんなに恐いんだか。今だって水川とごく普通に楽しそうにお話している。なんて微笑ましい光景だろうか。見ているこっちも癒される。

「あっ……う～ん……」

火祭と水川が仲良くお喋りしているのを眺めていると、右端にある一人の女子生徒の姿が目に入った。……なんか、こう……ん～……。複雑な気持ち。ベンチに座り、本を読んでいる女子生徒。俺の知り合い。そして俺の同級生。そして俺の主人（俺は認めねえ）。その名も春日。この台詞、三度目ですが言いましょう。可愛い女子生徒です。春日はどうやら一人のようだ。せっかくだし、こっちの班に誘うか？　……いや、どうせ来ないだろうな。でもまぁ……一人だし……話しかけてみるか？

「米太郎、先に行ってて」
「ん？　排泄か？」
「トイレと言え。お前、女子に嫌われるぞ」

デリカシーの無い米太郎に蹴りを入れて、春日へと近づく。本に没頭しているらしく、俺が接近しても全く気づいていない。本に図書室のラベルが貼られているのを見つけ、またそのうち俺が返しに行かされることには溜め息がでるが、まあそれは置いといて。

「おっす、春日」
「……」

ここからは気づいていないから無視しているにシフトチェンジだ。

「一人か？」
「……」
「いや～、今日は絶好の遠足日和だな」
「……」

「雨だったらどうなったんだろうな？　延期とか？　で、今日は学校で授業しますとか。それは嫌だよな～」

「……」

……お、オール無視。絶対にわざとだろ。こんだけ話しかけて無視されたのは初めてだよ。この娘……恐ろしい。

「……あ～、じゃあ俺もう行くわ。また学校でな」

春日の無視にはもう慣れています。ここはそっとしておきましょうかね。きっと本を読みたいから俺みたいな下僕に構っていられるかといったところでしょう。春日に背を向けて立ち去ろうとすると、

「兎月」

やっと返事してくれました。遅っ。

「何？」

俺が振り返ると、春日は本を閉じて鞄の中に入れていた。お、移動するのか。

「よかったら俺達のグループに入る？」

「ついて来なさい」

話が全く噛み合ってない。異国民族との方がもっとマシなコミュニケーションができそうだ。少しは俺の話も聞いてよ。でも春日お嬢様は聞かない。春日は俺に鞄を押しつけると歩きだした。どこに行くんだか。あ、水川達に言わないと。

「ちょっと同じ班の奴らに言ってくるわ」
「ついて来なさい」

ループ会話しかできない村人ですか、あなたは。ＲＰＧの最初の村でよく見かけるよ。しょうがないメールするか。……えっと……今思うと、なんか俺って友達ほったらかして女の子と遊ぶみたいな奴になってる……？　そ、そんな嫌な奴になってる！？

『ゴメン水川！　用事ができてしまって……。俺抜きで回ってくれる？』
『いいよ。二人仲良く楽しみま～す』

水川の中に米太郎の存在はないようだ。俺もそれでいいと思う。

『ホントにすまん。火祭にもよろしく言っといて』

メールを送信し終えて前方を見上げると、そこには入場ゲートが。いや、出る方から見れば出口と言った方が正しいな。……ん？　出口！？

「ちょ、春日。遊園地から出るの！？」
「そ」

おいおいおいおいマジですかい？　だってまだ集合時間まで二時間以上ありますよ？　いくらなんでも早過ぎるって。

「行く場所があるから」

行く場所って……何か用事でも？　それって私用……なら俺関係ないし。……いや、それより……

「春日さ、どれかアトラクション乗った？」
「……」
一人でベンチにいたのを考えれば、ずっと本を読んでいたのだろう。
それはちょっと……ねぇ。ここは遊園地ですよ。誰もが喜ぶ遊園地だ。読書する場所ではないはずだ。楽しまないでどうする。
「せっかく来たんだから何か乗っていこうよ」
「……」
「いや、無理にとは言わないけどさ」
「……じゃあ、あれ」
春日が指差した方向、そこには、
「観覧車か」
いいんじゃないでしょうか。友達と乗ればワイワイ騒げ、恋人と乗ればイチャイチャしちゃえ！　大人気多目的対応万能アトラクションの観覧車である。ちなみに俺は遊園地に来たら必ず最後に乗ります。
「じゃあ行こっか？」
俺が言う前に春日は移動しちゃってるけどね。……あ、昼ご飯食べてないや。

「一周するのに十八分程となっております。それと中での飲食はお控えください。それでは、楽しい空の旅を」

係員の指示に従って俺と春日は観覧車の中へと入る。こじんまりとした中は足を踏み入れただけでグラグラと揺れ、妙な浮遊感が体をくすぐる。観覧車はそんなに混んでおらず、数分並ぶだけですぐに乗れた。そうでないと春日がしびれを切らしていたところだ。にしても、やっぱ観覧車はいいよなぁ～。徐々に上がっていくこの感じ、遊園地全体を眺めてるとワクワクするよね。おー、早くも四分の一を通過！

「……」

……春日さんよ、そんなつまらなさそうな顔しなくてもいいじゃん。もっとにこやかに笑顔で風景を楽しもうよ。ほら、こんなに高いんだよ。俺達の住む町も一望できるよ？　楽しいじゃん。すごいじゃん！

「うお～、高いな～。お、あれはマスコットキャラクターのパーシー君だ。頭だけオッサンなのは休憩中だからだろうな。ははは」

「……」

はぁ、しんどい。この空気しんどい。連休明けの学校ぐらいにしんどい！　この密室で無視されちゃ心折れちゃうよ。こんな時は落書

きノートにエスケープだ。紐のついた、よれよれのノートを手に取る。パラパラとめくれば中学生の馬鹿な落書きやら、二人はずっとＬＯＶＥとか、卑猥な単語が羅列していたり……と見ているだけで面白い。俺も何か書こうかな。うーん、ここで俺のセンスが試されるな……よし！

「……」
「……」
「……」
「……ねぇ」
「何か？」

ノートに落書きしていると春日が話しかけてきた。ちなみに書いていたのは、俺が考えたヒーロー戦隊。その名も『ローションジャー』という全身ヌルヌルの変態戦隊だ。中でもローションピンクはかなりエロい。……なんてアホな落書きなんだ。自分のセンスが恥ずかしい。

「……アンタ、明日予定ある？」
「明日？　いや…暇だけど」
「そ」

……うん、そう。それが何か？　そこで会話は途切れて、ただただ外を眺めていた。そして気づくと頂上を過ぎていた。……え？

「嘘っ！？　いつの間に半周したの！？」
「さっき」
「うわっ、マジか～。一番の盛り上がりポイント見逃した！」

恋人同士ならキスをする最高のタイミングだったのに。まあ俺と春

日なので、そんなことはありえない。そしてあってはならない。春日の父親に殺されそうだし。

「もう一回！　もう一回乗ろうぜ」

「嫌」

「くあ～残念！」

あとは下りていくのを待つばかり。なんだか夏休みの終わりみたいな気分だな。あ～悲しい。

「あー……地面が近づいてきた……」

お、そうだ。

「はい、ノート。せっかくだから春日も何か書こうぜ」

「……何かって何？」

「え～っと、何か」

「……」

おっ、書きはじめた。何を書いているんだろうか。ペンを走らせること約十秒、書き終えた春日はノートを俺に渡してきた。どれどれ……

「ミスター下僕　　兎月将也……」

まさかの悪口でした。いや、事実ではあるけどさ。いやいや、認めたくないけどね！

「それと個人情報の流出！　これ大事！」

がっつりフルネーム書いちゃってるよ。あだ名とか名字だけならまだしも、フルネームって……この情報社会で……多人数が見るような公共ノートにフルネームって。

「なら、俺だって……悪魔の女　春日恵…と」

春日が書いた上に書き加える。

「どうだ、ざまあみ痛っ！」

春日のローキックが炸裂。こんな狭い中でよくそんなキックができますなぁ。威力は通常時と同じ。つまり普通に痛い！

「消しなさい」

「ボールペンだから無理、ってまたローキック！？」

ちょ、暴れないでよ。グラグラ揺れて怖いって。ど、どうするんだよ落ちたら！？　し、死んじゃうよ！？

「うわあぁ！　お、落ちる……あ、もうゴール？」

春日と暴れているうちに気がつけば一番下に着いていた。窓から見える従業員の呆れ顔が……。

「はい到着ですー。空の旅はいかがでしたでしょうかー。またのお越しをー」

ちょ……なんすか、その「イチャイチャしやがって」みたいな顔は。全然違いますからね！

第13話　同級生にスーツを買ってもらう

観覧車を降りた俺と春日は出口へと向かって……ん？

「なあ春日、そっちは出口じゃないぞ？」

「……」

用事があるから遊園地を出るとおっしゃられた春日。それはあんまりだから、せめて一つぐらい何か乗ろうと俺が提案して観覧車に乗ったわけだが、その後は春日の言った通り遊園地から出るはずなのに……。あれれ、そっちには楽しいアトラクションがたくさんありますよ。

「…あ、もしかして他のやつにも乗りたか痛っ！」

またもやローキック。避けれるはずもなく見事に決まった蹴りに俺は声にならない悲鳴を上げるばかり。痛ぇ……だんだん蹴り慣れてきました？　蹴られる俺としては悲しいことですが。

「で、出口はあっちです……」

「ふん」

……でも、春日は観覧車に乗るのも渋々だったのだから他のアトラクションにも乗ろうなんて思うはずがないよな。じゃあ一体どうして違う方向に……？　うーむ、なぜだろう。

「……やっぱ誰もいないよね」

集合二時間前。遊園地を出てすぐそばの広場の集合場所には誰もい

ない。教師達も遊んでいるのだろう、本当に誰一人としていない。
はぁ…俺もまだ遊びたかったな。水川達は楽しくやっているかな？
きっと楽しんでいるでしょう。米太郎を除いて。

「で、これからどうするの？」

春日個人の用事なら俺は全くの無関係なんだが。その場合、俺はどうしたら……もう一回入場できたっけ？

「これに乗って」

春日の隣にはリムジンが。いつの間に……。そしてリムジンすげぇ。こう間近で見ると存在感ハンパないよ。というか遊園地前にリムジンってのもおかしな組み合わせだよな。

「お、俺も乗るの？」
「乗りなさい」
「はい」

俺みたいな庶民が乗っていいんでしょうか。とりあえずドアを開ける。

「先にどうぞ」
「……気が利くじゃない」

お褒めのお言葉有り難き幸せですー、と。俺だってちょっとは下僕に慣れてきましたよ。情けない話ですけど。続いて俺も中に入る。うおっ、車内も豪華。なんかキラキラ輝いているよ！？　と、興奮していたが次に目についたのは運転席に座る初老の男性。こちらを振り向き、ペコリと頭を下げてくれた。おお、春日家の人でやっと

礼儀正しい人に出会えた。親父も娘も第一印象は最悪だったからな。

「初めまして。私（わたくし）、春日家の運転手を務めさせていただいております、前川と申します」

運転席越しにまた頭を下げる前川さん。

「あ、ご丁寧にどうも。僕は春日の下僕を務めている兎月です」

「アンタは自己紹介しなくていい」

別にいいじゃんかよー。それに随分と惨めな自己紹介だったんだから。下僕を務めているって……人が一生のうちにそんな自己紹介を何回するでしょうか。たぶん普通の一般人なら一回もしないと思うよ！

「兎月将也様ですね。お話は恵様からよくお聞きしております。それはとてもとても…」

「へぇ～」

「前川っ……余計な事は言わないで」

「申し訳ありませんでした」

一体何を話したんだか。悪口じゃないことを祈ろう。

「ちなみにどこに行くの？」

「前川、車出して」

「かしこまりました」

どこ行くの！？　それくらい教えてくれてもいいじゃんか！　しかし返答はなく、俺と不安を乗せて車は走り出す。

走ること十数分、どこに向かっているのか皆目見当つかない。にしてもリムジンすげーな。こんなに車内が広いだなんて。外見が凄ければ中も凄いってか。いつも見ている車のＣＭが鼻で笑えてくる。そしていつも乗っている我が家の普通車が惨めに思えてくる。これが社長と平社員の差か……。

「あ、これ天井が開くやつだ。うわっ、すげー。ねぇ、天井開けてみてよ」
「うるさい」
「すいません」

初リムジンにテンションの上がるのは仕方ないことだ。なのに春日はそれを跳ね飛ばす。なんでだよ。いいじゃん、せっかくだから天井開けてよ。こんな高級車もう乗ることもないだろうしさ。

「もうすぐで到着しますので」

安定した運転をする前川さん。そしてとても礼儀正しい。あなた良い人だよ。とても春日家の人間とは思えない。

「到着致しました」

停車したのは何やら高級そうなお店の前。英語で書かれた立派な金色の看板に豪華な外装。ショーウインドーを見る限りじゃ、

「……洋服店？」

俺にはそれにしか見えない。ってことは服でも買うのか？　おいおい、完全にセレブの休日だよ。さっきまで遊園地にいたことが信じられない。

「行くわよ」
「あ、うん」

俺と春日は店の中へと入る。中も高級そうな雰囲気だな。外見が凄ければ　中も凄いってか。あ、これさっき言った。店内に入ると眼鏡をかけた若い女性店員が俺達を迎えてくれた。かなりの美人。眼鏡美人というやつか！

「いらっしゃいませ」
「予約している春日だけど」
「春日様ですね。承っております、どうぞこちらへ」

洋服店って予約とかするのか……へぇ、知らなかった。浅しき知識は庶民の限界。そして未知なるはセレブの世界！

「行きなさい」
「え、俺？」

なぜに俺？　聞いてないよ。

「行きなさい」

春日に背中を押されて奥へと進む。こ、怖いって。お、俺は一体どうしたら……。

「こちらです」

訳も分からず女性店員に誘導されて向かった先には三十代の男性店員が。これまたキリッとした良い男。あ、俺はそっち系じゃないよ。周りを見渡せばズラリと並ぶ紳士服の数々。

「ではお願いします」

「分かりました」

女性店員から男性店員にバトンタッチ。女性店員は消え、男性店員はメジャーを取り出す。

「では失礼致します」

そう言うと男性店員は俺の身長、座高、ウエスト、肩幅……あらゆる測定をそつなくこなす。俺はされるがまま。まるで呼吸するマネキンのようだ。

「はい、終わりました。お疲れ様です」

メモ用紙に俺の身体データを書き終えた店員さんは奥へと消えていった。周りには誰もいない。なんだか急に心細くなってきたんだけど……。すると男性店員が高級そうなスーツを抱えて戻ってきた。

「では、こちらを試着してみてください。試着室はあちらにありま

すので」
「は、はあ。ご丁寧にどうも」

スーツを受け取り、試着室へと入る。目の前の鏡にはなんとも言えない顔の自分が映っていた。だって何が何だか……俺はどうしたら……？

「とりあえず着ますか」

俺が出来ること、それは試着することだけ。制服を脱いで、シワ一つないスーツを袖に通す。うお～、サイズピッタリ。ズボンも完璧。あとネクタイの付け方分からん。

「よろしいですか？」
「あ、はい」

後ろのカーテンが開かれる。そこには店員二名と春日の姿が。うわっ、こっち見ないで。なんか晒し者みたいで恥ずかしいよ。

「サイズはよろしいですか？」

男性店員が尋ねてくる。ついでにネクタイを付けてくれた。助かります。帰ったら父さんに付け方聞いておこう。

「はい、ちょうどいいですよ」
「とてもよくお似合いですよ」
「あ、ありがとうございます」

女性に言われると嬉しいな。たとえお世辞であろうとも。お店の売り文句であろうとも！

「では、こちらでよろしいですか？」

男性店員が春日に尋ねる。つーか春日は褒めてくれなかった……。

「ええ、これでお願いします」

上品な美しい笑顔で答える春日。普段からその笑顔でいられないものかねぇ。いつも無表情で何考えてるか分からない顔しやがって。

「では包装いたしますので、すみませんが脱いでもらえますか？」

そう言ってカーテンが閉められる。え……これをどうするの？　買うの？　誰が？　春日か？　そしてなぜにスーツを買う？

「ありがとうございました。またのご来店お待ちしております」

全く状況が理解できないままスーツは購入された。俺はスーツを買うお金を持ってないので、支払いは春日がカードでしてくれた。このスーツ一式で一体何万するのやら……それをサラッと支払った春日……もう人間としてのランクが違うよね。

「……なんでスーツ買ったの？」

「……この前のお礼」

この前？　この前って……あぁ、誘拐された時ね。確かに春日の

親父さんもお礼をしたいって言ってたな。それでこのスーツか。

「いやいや、お礼だなんて。そんな気を遣わなくても」
「明日の六時半頃に迎えに来るから、そのスーツを着て待っていなさい」

……全然会話のキャッチボールができていない。一方的過ぎるだろ。ちょっとは会話というものをやってみませんか!?

「えっと、どこか行くの？」
「ご飯を食べに行くだけよ」

食べに行くだけって……こんなスーツ着て行く所って高いんじゃ……今までの流れだと、とてつもなく高級そうなレストランしか思い浮かばないんだけど。

「とりあえずスーツありがとう」
「そ。じゃあ、次行くから」
「次って」
「行くわよ」

だ、だからどこに行くんだよ!?　行き先教えて！

遊園地の集合場所。ぞろぞろと生徒達が溢れるように遊園地から出てきた。

「あ、将也！　どこに行ってたんだよ？」
「よぉ、米太郎。楽しめたか？」
「まあまあだ。俺の存在はほとんど無視されていたけどな！　……ん？　その袋は？」
「これか？　これはスーツと靴だ」
「は？」
「スーツと靴だ」
「何言ってんだお前？」
「……スーツと靴だ」

第１４話　高級レストランに庶民が一人

とあるビルの最上階。オレンジ色の暖光が燦燦と輝くシャンデリアの下、テーブルに広がる様々な料理は極彩艶やかに炸裂する花火のようにその存在感を示し、グラスに注がれたワインは甘美的な香りを漂わせる。視線を外へと向ければ満天の星空のように輝く静穏な夜景。そして沫雪が溶けるかのような柔らかい音色で耳を癒すジャズのバックグラウンドミュージック。……なぜ俺はこんな所にいるのだろうか？

五月三日、何かの祝日。何か知らない。憲法記念日だったかな？そんなことは知らなくとも学校は休みになるので全然構わない。昨日は遠足で一日中遊びまくるつもりだった。が、春日に連れられて洋服店に行き、スーツを購入。そして今日は春日と食事に行くことになっている。時刻は午後六時二十四分。俺は新品のシワ一つないスーツを着て玄関に立っている。家の中にいると母さんとじいちゃんに笑われるので外に出ている。そりゃ俺にスーツが似合わないのは自分でも分かっているさ。それにしても母さん達は笑い過ぎだ。じいちゃんにいたってはブログに載せるとかほざいてやがった。ふざけるな、炎上しやがれ。ソワソワしながら待っていると高級感溢れる車が家の前に止まった。うお～、すげー車……カッコイイ。高級車に惚れ惚れしていると運転席から前川さんが出てきた。前川さん、春日家の専属運転手。すごく良い人。

「こんばんは、兎月様。お迎えに上がりました」

「いやいや、前川さん。そんな敬語使わなくていいですって」

俺みたいな庶民に様付けはもったいないって。

「どうぞ」

前川さんがドアを開けてくれて、俺が車の中に乗りこむ。やっぱり中も凄い……このスーツとマッチしている。俺自身には全く似合わないけど。

「それでは出発します」

車は音もなく発進する。お、これが噂のハイブリットか。すごいよ。

「恵様も今日は楽しみにしておりましてね」

前川さんの思いもしない言葉。春日が楽しみにしていたとは。

「そうなんですか？　俺とご飯食べるだけでしょ」

「それが嬉しいのですよ」

う～ん、信じがたい。あの春日がだぜ？　俺のことを下僕扱いしているくせに、その下僕との食事を楽しみにしている？　ありえないって。

「近頃、恵様は兎月様の話をよくしております。私も嬉しい限りでございます」

「は、はぁ」

「どうかこれからも恵様をよろしくお願いします。あと、このことは恵様にはご内密にしてください」

ミラー越しに微笑む前川さん。なんて良い人なのだろう。

車が走りだして数十分。窓を覗けば連なるビル群が目に入ってくる。どうやら都市へと来たらしい。なんかすごい場所だな。たぶん俺は今までに来たことがない。

「到着致しました。それでは」
「ありがとうございました」

車を降りると目の前には巨大なビルがそびえ立っていた。見上げただけで首が痛くなっちゃった。なんて高さだ。そしてデカイ。あっぱれ日本の建築技術と感服していると、ビルの中からスーツ姿の男性が颯爽と現れて俺を迎えてくれた。

「お待ちしておりました、兎月様。どうぞ、こちらへ」

またも様付け。やっぱり様付けは慣れないや。言われるがまま俺は雲にも届きそうな痛みの塔…じゃなくてビルの中へ入る。そしてロビーの広さに驚愕した。体育館ぐらいあるんじゃね？　そして大きさの比喩で体育館をだすのはおかしいよね。ごめんなさい。あ、あ

と……ロビーがすごすぎるだろ。何十個とあるシャンデリアが惜しみなく吊るされており溢れんばかりの光でロビーを照らす。床には真紅のカーペットが敷かれており、その上を歩くのを躊躇うくらいだ。

「恵様もまもなく到着しますので、もうしばらくお待ちを」

そう言われて俺は待つことになった。エマニエル婦人が座っていそうな椅子に腰掛ける。……俺ここにいていいのか？　辺りを見回せば、立派なスーツを着たダンディな男性やら素敵なドレスを着たセクシーな女性がいるのだが、もれなく全員がすごいオーラを出しまくっている。こ、これが金持ちオーラなのか。そりゃ、こんな立派な所にいる皆さんですから、お金持ちなのは間違いない。たぶん庶民は俺ただ一人……。

「ヤバイ…緊張してきた。こんなセレブのたまり場にいたら庶民の俺は死んじゃうって」

嫌だ、もう帰りたい。この場から消えてしまいたい！　ルーラ！駄目だＭＰが足りない！

「兎月様、恵様がご到着しました」

高級オーラに圧迫されていたが、その声に反応して顔を上げると、

「……！？」

視線の先にはとてつもない美少女が。嘘……か、春日！？　輝くような水色の絢爛たるドレスを身に纏い、真珠のネックレスをしているのだが、もう……綺麗！　もう正直に言います。俺の中でＮｏ．

1です！　まるで本当のお姫様のように美しい……。

「待たせたわね」

数人のSPらしき黒服の男性を引き連れて春日がこちらへと来た。

「い、いや、全然待ってないです」

こ、声が出ない。あまりに美しくて直視できない。他にも美しい女性はいるが、春日はその中でも一際輝いているよ！　眩しいよ！

「じゃあ行きましょう」

そう言って春日は手を差し出してきた。な、何？

「も、もしかして……エスコート？」

「そ」

……む、無理無理ぃ！　エスコートなんてできないよ！　名称しか知らないって。あんなの外国の王族貴族のパーティとかでしかやらないでしょうよ。俺には全くの無縁だと思っていたのに。

「うぅ～！？」

なんかテンパってきたぁ！？

「手を取ればいいのよ」

春日が俺の手を取る。手に広がる温もり。あ、温かい……す、少し落ち着けたかも。かと思いきや、春日と手を繋いだという事実が頭

を振り動かし、またパニくってきた！

「あ、う、うん。ありがとう」

「行きましょう」

手と手を添えるように繋いで俺と春日は並んで歩く。う、うお～、周りから視線を感じる……！　春日が綺麗で見とれているのか、はたまた俺のぎこちない動きを嘲笑しているのか。たぶん両方だな。俺と春日はエレベーターに乗る。エレベーターはぐんぐんと上昇していき、なんか吐き気が……。た、たぶんエレベーターのスピードや浮遊感のせいではなくて、ただ単に俺自身が緊張しているせい。まだ上昇し続けるエレベーター。うそ、二十階を超えちゃう？　何階建てなんだ！？

「緊張してるの？」

隣の春日が話しかけてきた。

「き、緊張？　いやいや、全然っ」

「なら、この手は？」

「え……あっ」

手元を見ると、俺は春日の手をがっちり握っていた。手を添えていただけなのがいつの間に。や、やっちまった！

「ご、ごめん！」

恥ずかしい！　あと春日の手、柔らかったです。

「行くわよ」

前を見ると、エレベーターが開いて眼前には別世界が。オレンジ色の光に照らされて輝く椅子やテーブル。耳を撫でる美しい音楽。鼻をくすぐる何やら美味しそうな匂い。視覚、聴覚、嗅覚が慌てて脳に情報を送るから頭は混乱している。つまり俺は今テンパっている！

「れ、レストラン？」

「そ」

こんな神秘的なレストラン見たことないんだけど。

「ようこそお待ちしておりました春日様。どうぞこちらの席へ」

清楚な姿のウエイターが席へと案内してくれた。テーブルに座る俺と春日。席は二つしかないけど、

「春日の親父さんはいないの？」

「パパは仕事で来れないって」

やっぱ忙しいんだな。さすがは社長。お勤めご苦労様です。

「それでは失礼します」

その声とともにウエイターがグラスにワインを注ぐ。もうなんか緊張して何が何だか……。

「はい」

春日がグラスを持って掲げる。こ、これはもしや……乾杯というやつでは……！？

『かんぱーい！』
『乾杯っ』
『君の瞳に乾杯』
『君のおっぱい』

俺の頭に四つのコマンドが表示される。下二つはやばい。特に一番下は完全アウトだ！

「か、乾杯」

ごく普通の乾杯としか言えませんでした。こんな未知の領域でボケる度胸と技量はありません。チン、とグラスが鳴る。テレビとか見た記憶だと確か少しだけ口に含むんだっけ？　ワインを一口。口の中に広がる苦味と微かな甘み。うっ、ワインって美味しくない。俺って子供～。そして前菜やスープと次々に料理は運ばれてきた。ちょ、見たことのない色のソースがかかっているんですけど？　え、大丈夫？　ナメック星人の体液じゃないよね？　それって捕獲レベルどのくらい！？

「あ、美味しい」

ナメックソース（俺命名）イケるじゃん。超絶に美味い。あれ……なんか食事って楽しい！　さっきまで緊張していたけど…いやいや、せっかくの高級レストランだ。楽しまないと。

「それに夜景も綺麗だし、春日も綺麗だし……はっ！？」

ポロッと漏れた俺の本音が聞こえてか、目の前の春日が俯いてしまった。お、怒らせちゃった？　はあううあぁぁ！？　ヤバイよ、春

日を怒らせるとヤバイって。

「い、いや、今のは思わず言ってしまったというか、本音が出てしまったというか……け、決して悪意はないです」

う、うぅ!?　俺の命が危ない！　春日さん何か返事を求む！

「……」
「……」
「……」
「……」
「……あ、ありがとう」

ごにょごにょと微かな声で春日がそう言ってくれた。おぉ、よかった。怒っていないようだ。

「う、うん」

……なんか変な空気になった。どうしよ？　よし、とりあえず料理を食べよう。

「こちら、オマール海老のクリームパスタでございます」

またもや高級そうな料理が。うは～、美味そう！　テーブルマナーなんか無知の俺は我流で料理にがっつく。周りの視線？　そんなものはもう気にしないさ。

春日と食事すること一時間。次々と出される極上料理を満喫しながら春日と楽しく会話していた。まあ、俺が楽しいだけで春日はどう思ってるか知らないけど。それにしても今日の春日はよく喋るなぁ。普段はそんな喋らないし、俺の質問は無視するくせに。そう考えると、前川さんが言っていたことは案外と正しいのかも。春日も楽しんでくれているのかな？

「俺ボランティア部なんだ。今度よかったら活動に参加してみる？」

「……気が向いたら」

デザートの完熟マンゴーのシャーベットも食べ終わり、そろそろ終わりが近づいてきたっぽい。

「あ～…もう終わりか」

どれも美味しかったし、どれも食べたことのないものばかりだった。でもやっぱ、貧乏舌を持つ庶民の俺には贅沢過ぎたかも。

「春日様、そろそろお時間でございます」

ウエイターが告げるお開きの合図。

「……そ」

「え～まだここにいたいですぅ」

春日に駄々こねてみる。

「うるさい」

怒られちゃいました。そりゃそうですよね。そんなワガママは通りません。

「……私も」

「え？」

何か言いました？　聞き取れなかったんですけど……。

「なんでもない。行くわよ」

席を立つ春日。もうお開きか……良い思い出になったな。俺が将来お金持ちになったらまた来ようかな。そしてお金持ちになれなくても無理して来よう。ロビーでは前川さんが待ってくれていた。

「いかがでしたか兎月様」

「とても美味しかったです。また来てみたいです。それと…本当に代金はいいのですか？」

あのフルコース一人前でいくらするのだろうか……考えただけで恐ろしい。

「構いませんよ。兎月様は恵様を助けてくれたのですから、そのお礼として受け取ってください」

「では有り難く受け取ります。春日もありがとうな。とても楽しかった」

満面の笑みで春日にお礼を言う。今の俺にはこんなことしかできないのです。

「……そ」

顔が少しだけ赤い春日。ワインの飲み過ぎですかい？

「では、兎月様。車を用意しておりますので」

「分かりました。わざわざありがとうございます」

もう一度春日へと顔を向ける。最後にこの美しい姿を脳裏に焼き付けておきたい。心のシャッターを押す。

「じゃあな、春日。親父さんにもよろしく言っといてくれな」

いや～こんな贅沢な食事ができるなら下僕も案外悪くないかもな。

「兎月」

「ん？　何？」

「……また学校でね」

「おぉ、またな！」

庶民スタイル丸出しで春日に手を振る。もう恥ずかしいなんて微塵も思わないぜ！

「じゃあ家までお願いします」

「かしこまりました」

前川さんのパーフェクト運転で俺は家へと帰った。

「……またいつか」

第15話　宿題なんて写すもの

五月四日、祝日。え～と確か…みどりの日だったかな？　とにかく祝日だ。うん、ホリディ。春日との豪華ディナーの翌日。起きた俺を出迎えたのは、ご飯と味噌汁に生卵一つ。あまりのギャップに目眩がしてくる。

「これが現実……か」

朝からコーラをがぶ飲みするファンキーなじいちゃんの横で朝食をとる。はは、なんて質素な朝飯だ。キャビアの一缶ぐらい出せないものかね。俺は高級レストランで食事した将也様だぞ。様付けされたんだぞ。

「将也、宿題は終わったの？」
「うるさいなー。もう少しで終わるって」

母さんの小言を流しつつ朝食を口の中へ流しこむ。あ、味噌汁美味しかったです。

「宿題……はぁ」

GWだからとか言ってうちの担任は大量の宿題を出してきやがった。はっきり言って超迷惑だ。せっかくの連休を宿題なんかで無駄にしたくない。賢い奴なら、一日のノルマを決めて無理なくしっかりとした計画を立てるであろう。だが俺は賢くないので、まだ何も手につけていない。さて、どーしましょ？

「とりあえず、数学からやりますか」

朝食を終えた俺は自分の部屋に戻って椅子に着席。何日かぶりに鞄を開いて宿題の範囲を確認することに。

「えっと数学は……問題集のＰ４５～Ｐ５６、一年の総復習か」

よし早速やりますか。パラパラと問題集を開いてみる。そこにはぎっしりと敷き詰められた数式もとい問題文。開始数秒で問題集を閉じる。戦意喪失だよチクショー。

「……これを見るだけでやる気が０になるって……量が多すぎるだろ馬鹿担任が」

正当な怒りをぶつけて俺は他の教科の範囲も確認する。……どれもこれも大量てんこ盛りだ。これだけの量を一人で裁くのは到底無理。できる奴といえば聖徳太子ぐらいじゃないのか？　いや分かんないけど。今日を入れてあと三日……終わるのか？

「……だ、大丈夫だろ。俺、三日で月の衝突を避けたことだってあるんだから」

まあ、あれはゲームだけど。

「と、とにかく！　やみくもに問題を解くしかないな。行くぜ！」

数学は机からリングアウトさせて、新たに化学の問題集を開く。……あー……うんうん……あ……あぁ！？

「化学難しい！」

モルだかモツだか知らないが化学で計算があるなんて反則だろ。モル比と係数比は同じ？　物質量？　そんなの知るか。アボガドロ自粛しろ。いらん発見するな！　……あー、マズイな。数学と化学の二つで心が折られたのだ。まだ見ぬ強敵、英語は一体どれほど難しいんだ……！？　ヤバイ、これ終わんない。夏休み最終日の悪夢再来だよコンチクショー。

「こうなったら助けを呼ぶしかない」

一人では無理。やはり誰かに助けを求めるしかないでしょうよ。持つべきは友、皆で力を合わせれば不可能はない！　携帯を取り出し、ボタンをプッシュ。まずは……米太郎。

「もしもし、米太郎？」
『夏休みの悪夢再来ぃー！』

ピッとすぐに通話終了。使えねえ馬鹿だったよ。そもそもあいつに助けを求めたのが間違いだった。次は……マミーこと水川ちゃん。

『もしもし？』
「あ、水川？　宿題終わった？」
『大方終わったけど』
「ナイス！　ちょっと見せてくれる？　俺が水川ん家まで取りに行くからさ」
『いいけど、私いま和歌山にいるよ？』
「は？」

和歌山？　なぜに？

『お母さんの実家に帰ってるんだー。和歌山にまで取りに来るなら

いいけど？』

「そんな所まで行けるか……なんだよマミー！」

『マミー言うな！　ピッ』

……ま、まだ他にも助っ人はいるはず。携帯のコールを止めちゃ駄目だ。次は……

「……ふぅ。なんとかなった」

片っ端から電話をかけ、何人かが俺に救いの手を差し延べてくれた。明日学校に集合、皆が宿題を見せてくれる手筈だ。これで英語、化学、国語は安泰だ。ざまーみやがれクソ担任が。クラスの団結力なめるな。男子オンリーだけど。そして、あと一つだけ解決すべき問題がある。それは、

「数学をどうするかだな」

数学だけは誰も終わらせていなかった。皆も数学が大嫌いなんだね。それには共感します。これだけは自分でやり遂げようとは思うけど……無理だな。だって公式が理解できていないんだもん。基礎のできていない俺が応用問題を解けるはずがない。ギラを覚えていない

のにベギラゴンを唱えられないのと同じことだ。

「数学も写すしかないな。でも他に誰が……」

椅子にもたれ掛かり、ぼんやりと携帯のアドレス帳を見つめる。と、一つ気になる名前が。

「春日……」

……まあ頭は良いと思うけど……宿題見せてくれないだろうな。そんなの自分でしなさいとか言いそう。第一クラスが違う。一組に同じ宿題が出されていないかもしれない。うーん、それでも数学を教えることは出来るよな。しかし昨日はご馳走になったばっかりだし、それはさすがに気が引けるよな。スーツ買ってもらって豪華ディナーご馳走になって、さらに勉強教えてくださいって……図々しいにも程がある。

「ん～、他には……おっ」

これはどうだろうか。ボタンをプッシュ。

『プルルルル…プルルルル…プルルルル…』

……。

『プルルルル…プルルルもしもし？』

「あ、火祭？　元気ぃ？」

俺のオアシス、火祭だ。一組だから頭は良いし、きっと教え方も上手いはずだ。つまり数学を教えてもらうには最適の人。

『元気だけど？』
「うん、元気が一番だよねっ。ところで今、時間ある？」
『うん、忙しくはないけど』
「よかったら……数学教えてくれない？」
『数学？　いいよ』

おおっ！　きました、やったぜ！

「ありがとぉ。じゃあ昼から学校に来れる？」
『うん、いいよ』
「恩に着るよ。じゃあ一時に教室で待っているね！」
『分かった』

よっしゃ！　これで完璧だ。皆ありがとう。そして火祭ありがとう！

第16話　微分、積分、嫌な気分っ

時刻は十二時五十分。校内に人気（ひとけ）はなくグラウンドで練習に励む部活生のかけ声がよく響く。声出していこーぜ！　の声がよく出ています。祝日でも学校は開放されており自習をしに来る生徒もいるが、さすがにＧＷにまで学校に来る生徒は少ないようだ。来るといったら大体が受験を控えた三年生だが、中にはガリ勉の二年生もいる。尊敬します。

食堂に寄って自販機でジュースを買い、二組の教室へと向かう。階段を降りて曲がり角を曲がると、

「あ、もう来てた」

数メートル先の廊下に立っているのは火祭。

「お～い火祭」

呼んだ俺が遅れたのはちょっと決まり悪いし、走らないとな。長い廊下に俺の走る音が反響する。誰もいない学校ってホント閑静としているよな。

「あ、来た。十分前に来るなんてしっかりしてるね」

「デートの三十分前にはスタンバイしてる俺にとっては朝飯前さ」

デートなんてほとんどしたことないけどね。

「え、君は彼女がいるの？」

……痛いところを突かれた。ズブリと内臓をえぐられた感じ。

「い、いません……」

彼女いたら今頃は二人でイチャイチャしながら宿題しているさ。……なんかブルーな気持ちになってきた！

「へぇ、いないんだね」

「そ、そういう火祭はどうなの？」

「私？　私もいないよ」

これまた意外。火祭ぐらい可愛い子なら彼氏の一人ぐらいいてもおかしくないのにね。ってことは俺にもチャンスがあったりして！

微かな希望にちょっとだけ気分が晴れた。

「ま、お互い独り身同士ということでね……勉強教えてください！」

「それにしても急だね。何かあったの？」

「実は……」

火祭に事情を説明する。宿題があって、その量が多くて、しかも難しくて。あと水川が和歌山に帰省していて米太郎が使えなくてエトセトラ。

「なるほどね。よし、私に任せて」

おぉ、心強い。これは案外とあっという間に終わるかも。

「ホント助かるわぁ。感謝感激」

「君には前に図書委員の仕事を手伝ってもらったしね」

そういえばそんなこともあったな。いやいや、あれはあれで意外と

楽しかったし。

「それと遠足の時は私をグループに誘ってくれた」

そういえばそんなこともあったな……あっ、

「あ、あの時はごめん！　途中で抜け出して」

あちゃ～……そうだよ。春日に連れられてスーツと靴を買いに行ったから、同じグループの火祭達と別れたんだった。申し訳ないです。俺から誘っておいて抜け出すなんて……最低だよな。塾に誘って一緒に入ったのに言った本人がすぐ辞めるパターンと同じくらい卑劣なことだよ。

「気にしなくていいよ。真美がいたから」

水川には感謝しないとな。あと米太郎にも一応。

「じゃあ、早速始めよう。一組は自習している人もいるから二組でいい？」

「オッケー」

火祭の言う通り、一組には真面目に勉強している人が数人いた。すごいよ、エリートだよ。明日宿題見せ合いっこする自分が惨めに思えてくる。迷惑かけないように俺達は二組へと入る。言うまでもなく二組の連中で自習しに来てる奴なんかいない。いたら編成テストで一組に上がっているはずだ。

「ほら、集中して」

火祭に背中を軽く叩かれた。よし、パパッと終わらせちゃいますか。
数学なんて楽勝だぜ。

「じゃあ始めるよ。分からないところがあったら聞いてね」
「あ、じゃあここ！」
「……最初の問題から？」

こんな馬鹿ですいません。

第17話　悲しげな表情

「この問題は判別式Dが0より大きいことを求めるんだよ」
「……うん」

勉強を開始して一時間、火祭のおかげで少しずつだが問題を解いていけるようになってきたが……

「判別式D＝bの2乗－4ac……」

「あ、ここは方程式の1次項が2の倍数だからD／4で解いた方が計算が楽でいいよ」
「……そうなんだ。……つーか判別式嫌い」
「そう？　なら、ここの問題は二次方程式とx軸が異なる2点で交わるときのαの範囲を求めるものだから違う方法でも解けるよ。まず方程式を平方完成して頂点の座標を求めて、頂点のy座標が0より小さくことなることを求めるといいよ」
「え……は？　今度は0より小さい？　な、うぇ？」

混乱してきた。頭がショートしそうです。む、難しい……。やっぱり数学は強敵だ。そうやすやすと倒せる相手ではないようだ。というか教えてもらうというチートを使用して倒せない俺って……うぅ、恥ずかしい。

「ご、ごめん。説明が下手で…」
「いやいや全然！　火祭の説明すっげー分かりやすいって！　俺が馬鹿なだけだから」

理解できないのは火祭のせいではない。俺が馬鹿なせいだ。ほら、

火祭が貴重な時間を割いて俺なんかのために教えてくれたんだ。少しは功績を出さなくては。

「……よしっ、解けた！」
「見せて？　……うん、合ってるよ」
「本当？　ふぅ、これでやっと四分の一か……疲れた」

一時間ひたすら頭を使い続けたので、もう限界だ。知恵熱で脳がトロトロになりそう。

「ちょっと休憩しよっか？」

そう言って火祭は鞄からクッキーを取り出した。うはあ！

「食べる？」
「いいの！？」

なんて優しいんだ！　春日とは大違い。春日にも火祭を見習ってほしいものだ。

「ありがとう！」
「どういたしまして」

くすりと微笑む火祭。うわぁ癒されるぅ。クッキー食べつつ小休止。このほんわか感が心地好いな。なんだか自然とリラックスできるよね。

「やっぱり火祭って頭良いんだな」
「そんなことはないよ」
「一年の時、順位はどんくらいだった？」

「えっと、一番良いので四番だったかな」

四位!?　学年四位!?　めちゃくちゃ頭良い！　さすがだよ。下から数えた方が早い俺とはランクが違いすぎるよ。

「マジでか……カッコイイ」

「え～？　カッコイイのかな？」

「カッコイイよ。この学校で秀才四天王に入るじゃん」

「何それ」

ははははっと談笑する俺達。は～、ほんわか。

「火祭って可愛くて優しいし頭も良いんだな」

「か、可愛い？」

顔を赤くする火祭。いや～、照れちゃって～。あなたレベルの女性なら可愛いねとよく言われるでしょうよ。

「うん可愛いよ」

「そ、そう？」

「すげーモテるでしょ？」

こんな才色兼備な火祭のことだ。言い寄る男子も多いんだろうな。

「も、モテないよ……」

「そう？　クラスでも人気ありそうだけどな」

「……そんなことないよ」

急に火祭の表情が暗くなった。俯いて声も小さくなり、かすれたよ

うに呟く。明らかに様子が変だ。ど、どうしたんだ？　何か気に障ること言ってしまった？

「えっ、……そ、そうなんだ」

「……」

さっきまでのほんわか空気から一変、場は一気に暗くなり何やら重苦しいものが体にのしかかる。心臓が締めつけられたように苦しい。い、一体何が……めっちゃ気まずい。

「……」

「……」

「……っう、まぁ、その、……べ、勉強しよっか？」

「……うん」

気まずい空気のまま勉強再開。集中できない……。さっきまで楽しく談笑していたのが嘘のようだ。こんなに気まずい状況になるなんて……。

「おっしゃ、ガンガンいこうぜ。こんな宿題すぐ終わらせてやる！」

空元気のフルボルテージＭＡＸでテンションを上げる。なんとかしてこの空気を変えなくては。

「……うん」

火祭も俺の頑張りが伝わったのか、パッと明るい顔にして微笑んでくれた。明らかに無理をしているけど、それを言っちゃおしまいだ。

「これって、正弦定理？」

「うん、そうだよ。でもその前にｃｏｓθを求めてからじゃないとｓｉｎθは出てこないよ」
「あ～、なら先に余弦定理か……」
再開時はぎくしゃくしていたが、段々と元の空気に戻ってきた。うん良かった。……でもさっきのあれはなんだったのだろうか？

「……よって、－２≦ｘ＜３となる。ふぅ、やっと終わった」
数学と格闘すること三時間。長きにわたる死闘を制した俺は安堵の息をつく。火祭のサポートのおかげで何とか宿題を終わらせることができた。問題集を閉じた時の達成感ときたら……くぅ～！　格別だな。

「お疲れ様」
俺を労るように肩をポンと叩く火祭。いやいや、そちらもお疲れ様です。

「ホント助かったよ。火祭がいなかったら、俺の問題集は白紙のまま連休を終えていただろう。長時間付き合ってくれて、ありがとう

な」

気づけばもう夕方。途中、空気が悪くなったり雑談したりしていたので余計に時間がかかった気もするから尚更申し訳ない。

「いいよ別に」

「じゃあさ、お礼に何か奢らせてよ」

「え？」

貴重なＧＷを俺なんかのせいで潰してしまったんだ。何かお礼をしてあげたい。

「そんな気を遣わなくても……」

「いいの、いいの。ジュースとかでいいからさ」

せっかくなら春日のようにディナーをもてなしてあげたいが、生憎俺にそんな甲斐性とお金はない。せいぜいジュース一本ぐらいのものだ。ヘタレ貧乏学生ですいません。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「構わないって。よし、食堂に行こう」

鞄を持って教室を出る。…出る間際、教室を振り返って明日の今頃もここで必死こいて宿題をしていると考えると少し欝になった。

火祭と仲良く食堂へ向かう。二人並んで楽しく雑談しているのって傍から見ればカップルに見えるのかな？　いやー、照れるなぁ！　火祭からしてみればとんだ迷惑かもだけど。

「何飲む？」
「じゃあミルクティー」
「りょーかい」

お金を入れてボタンを押す。ガコンと音とともにミルクティーが出てくる。危うく紅茶のボタンを押しかけたのは普段のパシリのせいだ。春日のよくお飲みになられる紅茶なのだが……押しかけるって相当ヤバイぞ。要するにパシリ慣れているってことだから。はぁ。

「はい」
「ありがとう」

俺もジュース買うか。昼に買ったのは飲んでしまったし。俺は……メロンソーダだな。シュワシュワと口に広がる微炭酸がたまらないよねっ。

「よし、じゃあ俺の数学の宿題が終わったことを祝して乾杯っ」
「乾杯」

缶とペットボトルを軽くぶつける。やっぱ俺みたいな庶民にはこっちの乾杯の方がしっくりくるな。フタを開けてメロンソーダを一気に飲む。…くあ～！　この炭酸が堪らない！　疲れた体に痺れるぜ

い！

「終わった宿題って数学だけ？」
「そうだよ。英語、国語、化学は全くの放置プレイ状態」
「……間に合うの？」
「間に合う段取りは取ってある」

ニヤリと笑ってみせてまたメロンソーダを口に含む。すると、

「お、兎月じゃんか」

突然、誰か俺を呼ぶ声がした。声のした方に目を向ける。

「遠藤」

そこには数人の男子生徒達。その中にクラスメイトの遠藤がいた。
散髪したてなのか、異様に短い前髪に思わず視線がいってしまう。
粗末だなー。これ絶対散髪失敗いたろ。いじらない方がいいのかな？

「宿題の見せ合いっこは明日だろ？　今日は部活か？」
「いや、部活じゃないよ。宿題してた」
「兎月が？　マジかよ……」

驚きと言わんばかりの遠藤。失礼な奴だな。口に出さないけど、その前髪もマジかよ……だからな。床屋さんを変えるレベルだからそれ。

「遠藤は部活か？　大変だな」

散髪大失敗の遠藤は軟式テニス部に所属している。

「まぁな。今終わったとこさ。にしても本当に宿題していたのか？」

しつこいなこいつも。俺が勉強するのがそんなに珍しいか？　自分で言うのもアレだけど確かに珍しい。

「ふふん、ちょっと手伝ってもらってな」

そう言って俺は火祭の方を振り返る。火祭はちょうど俺の真後ろにいて隠れるように立っていたので、少しずれて遠藤達テニス部に見えるようにする。どうだ、俺の女だぜ？　というのは真っ赤な嘘です。調子乗ってすいません。とにかく火祭を遠藤の目に届くようにした。次の瞬間、

「っ！　ひ、火祭……さん」

息を詰まらせたかのような呻き声を上げる遠藤。その顔は引きつり、口をパクパクとさせている。明らかに様子がおかしい。他のテニス部員達もざわざわしだした。

「遠藤？　どうしたんだよ」

何をそんなにうろたえているんだか。……あっ、もしかして火祭のこと？　やっぱり人気高いじゃん。こんな男子がざわつくほどに人気があるとは……凄いぜ火祭。

「兎月……嘘だろ？」

「いやー、悪いな。実は火祭に教えてもらったんだ。おかげで数学はばっちり終わったぜ」

俺が火祭と二人きりで勉強したのが羨ましいんだろ？　独り占めしちゃって悪いね。はっはっは。

遠藤達は俺に嫉妬しているんだと思っていた。次の会話を聞くまでは。

「お、俺達帰るわ」

俺と目も合わせずにそそくさと逃げるようにして遠藤達は去っていく。

「おい、遠藤。あいつ助けなくていいのかよ？」

他のテニス部員が遠藤に問いかける。

「助けに行ったら俺も危ないって。ボコボコにされちゃうって」

「確かに相手があの火祭だからな……。あいつ死んだかも」

チラッと俺を見るテニス部員。なんだそのご愁傷様みたいな憐れむ顔は。そしてもれなく全員が火祭を見て、怯えたように顔を引きつらせた。その顔には恐怖と書かれていた。まるで化け物を見るかのような表情。拒絶するように脱兎の如く消え去ったテニス部。そして取り残された俺と火祭。……以前、米太郎が言っていたことを思い出す。火祭は喧嘩が強いらしく、周りが恐がっていると。……今の遠藤達テニス部の反応を見れば、それは事実だということは明白だ。

「……ごめんね。私のせいで」

顔を俯かせた火祭は消え入るような声を出す。……そんな声出さな

いでよ。なんで火祭が申し訳なさそうなんだよ。別に火祭は悪くないって。

「火祭のせいじゃないだろ？　謝らないでよ」

「……ごめん」

火祭はそれだけ言うと、走り出した。まるで俺から距離を置くように。一瞬、ほんの一瞬だが、はっきりと火祭の顔が見えた。……とても悲しげな表情だった。

「……」

その場に取り残された俺。手に持つメロンソーダはいつもより冷たく感じ、シュワシュワと微弱な音がいつまでも虚しく響いていた。

第18話　噂と陰口、そして決意

GWだというのに活気づいた教室。宿題を終わらせるべく皆がこぞって誰かの答えを写そうと集結したわけだ。呼びかけたのは俺だが、今はそんなことどうでもいい。うわの空で化学反応式を書き写しながら、頭をよぎるのは火祭のことばかり。眉目秀麗で成績優秀、まさに才色兼備。そんなパーフェクトな火祭は人気者だと思っていた。……が、実際はその真逆で皆から恐がられていたなんて……思いもしなかった。火祭を化け物かのように恐れ怯えた目で見たテニス部員達。そして悲しげな火祭の暗い表情。それが頭から離れない。

「おい、将也。お前さっきから同じ反応式を何度も書いているぞ」
「え？」

気がつくと、ノートにはぎっしりと化学反応式が羅列してあった。自分で自分の書いたノートが気持ち悪いと思ったのはこれが初めてだ。ノートのどこを見てもエタンの完全燃焼の化学反応式。

「何ぼーっとしてんだよ。しっかりやれ」

米太郎に指摘されるなんて不覚。こいつにだけは言われたくなかった。

「そう言うなよ佐々木。兎月は昨日あの火祭と一緒にいたんだぜ？」

遠藤がこちらを向く。昨日と変わらず前髪は見るも無残な状態。

「マジかよ兎月!?　怪我とかしてないか？」

遠藤の言葉に反応した他のクラスメイトの奴らもこっちに注目する。

「どうして怪我しなくちゃいけないんだよ」

火祭は関係ないだろ。

「だってお前、相手はあの火祭だぞ？　無傷で生還なんて奇跡に等しいって」

「噂によると、不良十数人相手に無傷で勝ったとか」

「ヤクザの事務所に乗り込んで全員を血祭りにあげたとか」

「うわ～、血祭りの火祭の異名は伊達じゃないな。兎月、よく無事だったな」

「まったくだぜ」

うんうん、と同意するクラスメイト達。……こいつら何も分かっちゃいない。一体火祭にどんなイメージを持っているんだか。あと、俺に同情するような眼差しを向けるな。ひどく不快だ。米太郎のたくあん臭並に。いや、それ以上に。

「米太郎、ジュース買いに行こう」

「……いいぜ」

俺のアイコンタクトが伝わったようで米太郎もペンを置く。

「食堂に行くのか？　なら火祭には気をつけろよ」

ニヤニヤと笑う遠藤。こいつは本当に……

「遠藤も今度散髪する時は前髪切りすぎるなよ。俺はもう吹き出しそうになるのを我慢できないから」

皮肉を垂れて教室を出る。出る間際、赤い顔で短い前髪をいじる遠藤の姿が少しだけ視界に入った。

「ほらな。だから言っただろ？」

食堂横の自販機の前。オレンジジュースを一口啜った米太郎がどうだ、と言わんばかりの顔をする。

「火祭が恐がられていることか？」

「そうだよ。でもあそこまで露骨にしちゃあんまりだよな」

「お前もつい最近まで恐がってたけどな」

「殴られたトラウマがあったからな。ま、話してみると案外普通だったよ。今では親友レベルのお付き合いだぜ」

「火祭のメアド知ってるか？」

「知らない」

それで親友レベル、ねぇ。

「な、なんだその馬鹿にした顔は。将也は知ってるのか？」

「それは置いといて」

「置いとくのかよ」

うわ、米太郎にツッコまれた。屈辱的だな。

「……火祭の奴、いじめられていたりしてるのか？」

「それはないと思うぞ。周りは恐ろしくて近寄らないだけ。遠足の時もさ、一人でいただろ」

「火祭が何をしたっていうんだよ……」

「中学の時に不良や注意しても言うことをきかない連中をこらしめていた。それが噂となり、その噂が段々と大きくなり、そのイメージが皆に恐怖を植えつけたんだろうな」

とんだ勘違いじゃないか。大袈裟な噂だけで火祭を避けるなんておかしい。絶対に間違っている。火祭のことを理解しないで何が恐いだ。真偽も分からない噂ごときで勝手に人の良し悪しを決めて悪口を言う？　そんなのひど過ぎる。

「そんなの駄目だろ」

「確かにな。だけど、危険と噂されている奴に話しかけたりしないだろ？　触らぬ神に祟り無し。接触しないのがベストだと皆は思ってるんだろうな」

「……つーか火祭に悪いイメージがついたのは不良とかマナーの悪い奴らを制裁していたからなんだろ？」

「そうだな」

「なら、お前が原因で火祭のイメージが悪くなったと言っても過言ではないよな」

「え…な、何言ってるの？」

「お前のせいだって言ってるんだよ！」

米太郎にローキックを入れる。お前みたいなマナーの悪い奴がいる

からいけないんだ。

「痛ぁ！　す、すいません」
「……なんとかできないのかな」
「火祭のイメージをか？」

火祭はすげー良い奴だ。知り合って一月も経たない俺だが、それでも分かる。野良猫に餌をあげたり、勉強を教えてくれたりと……そんな優しい火祭のことを皆にも知ってほしい。理解してほしい。恐がらないでほしい。何よりも火祭自身のために……。

「米太郎、俺は決めたぞ」
「何をだ？　火祭に告るのか？」

話がぶっ飛び過ぎだ。会話の流れを考えろ馬鹿。

「火祭のイメージを変える」
「どうやって？」
「考えがある。ま、とりあえず教室戻るか」

火祭には笑顔でいてもらいたい。昨日のような悲しい顔をさせたくない。そのためならどんな努力も惜しまない所存でありますよ、俺は。

「うーむ、将也は春日さん狙いだと思っていたが……こっちも狙っていたか」
「なんの話だよ！」

第１９話　召集ボランティア部

「おはようございます」
「おはようございます」
「おはようございます」

ＧＷも終わり、爽やかな朝の日差しの中、登校する生徒の嫌そうな顔。やっぱり連休明けの学校はしんどいよね。すごく共感します。

「おはようございます」
「おはようございます」
「おはようございます」

特に朝が一番しんどい。ああ…今日からまた学校かよ、という堪え難い現実が重くのしかかり、そう簡単にベッドから抜け出せない。

「おはようございます」
「おはようございます」
「おはようございます」

懐かしいとすら思える制服に着替え、いつも通り通学する。そのいつも通りがキツイ。ま、俺は三日も前から制服を着ていたけどね。

「おはようございます」
「おはようございます」
「おはようございます」

さっきからおはようございますと連呼しているが、挨拶しているのは俺だけではない。水川や米太郎、さらに数名の生徒。そして火祭。

俺達が校門でこんなことをしている理由は昨日に遡る。

「おー、久しぶりの部活だな」

窓から差しこむ陽光がうす暗い階段を明るく照らす。階段に響くのは二人分の足音と、のんびりとした声。声の主は三年生の駒野先輩。背が高く、無造作ヘアーの男子生徒だ。

「それにしても急に呼び出すなんて何の用だよ」

「ちょっと話したいことがありまして。すいません、受験で忙しいのに」

そうだ受験はしんどいー、と愚痴る駒野先輩と並んで部室棟の階段を上がる。バスケ部、文芸部と電気の消えた部室を通過していき、一番奥の明かりが点いた教室の扉を開ける。

「遅いよ！」

教室の中には長テーブル四つが枠のよう並べてあり、その周りに何脚か椅子が適当に置いてあった。その椅子に座る数人の生徒。その中の一人が不満げな声を上げる。その人物とは俺のクラスメイトで

親友の水川真美ちゃん。

「呼んだくせに一番遅いってどういうつもりなの。こっちは和歌山から帰ってきたばっかりだってのにさ」

ブーブー文句たれる水川。そういや和歌山に帰省していたんだったな。

「そう言うなよ。時間には間に合ってるからいいじゃん。……よし、全員来ているし、それじゃあ始めますか」

睨む水川を避けつつ、俺と駒野先輩は適当に座る。

「ボランティア部を」

そう、ボランティア部だ。部員数は俺を含めて七人。三年生が一名、二年生が三名、一年生も三名。部長は駒野先輩。ボランティア部……聞こえ、印象ともに最悪なそんな部活なんて誰が好き好んで入ろうか。いやまあ、こうやって七名もいるわけだし、皆さんボランティアが好きなんでしょうけど。なぜ俺が入っているのか……それには理由がある。一つは評判がいいこと。ただボランティア活動をする。それだけで周りからの評価は上がるし、進学に有利になるから。うわあ、いやらしい。そして二つ目に楽しいから。皆で協力してゴミ拾いや募金活動をする……なんか青春だよね。さらに三つ目、

「早く始めようよ」

ちょ、水川さん……まだ三つ目があるから。もうちょい待ってよ。うん、三つ目に活動は不定期でいいことだ。年に数回大きな活動をするだけで部は成立する。なので非常に楽なのだ。話し合いと称し

て部室で雑談したり、ダーツしたり、のんびりしたりとまさにリラックスルーム。まあ、今回は真面目な話し合いだけど。

「前回の話し合いから一週間ほど空いたけど、皆さんはいかがお過ごしでしたか？」

司会進行は俺が務める。呼んだの俺だしね。リーダーの駒野先輩は欠伸をしてペン回ししているし。

「活動はしていなかったですけど、部室には来て遊んでいましたから」

一年生の矢野が茶化してくる。眼鏡をかけた身長の低い可愛らしい女子生徒だ。先輩を慕う気持ちがまったくない。俺にだけ対してだが。

「つーかGW最終日に呼んでんじゃねぇよ！　こっちは狩りの時間を惜しんで来たんだからな！」

やたら声のデカイこの男子生徒は同じ二年生の山倉。こいつは本当に声がデカイ。常に大声だ。はいはい、狩りは今度付き合ってやるからさ。

「えー、皆を呼んだのは勿論理由がありまして……一つプランを提案したいわけなんです」

「プラン？」

「ああ、明日の朝から挨拶活動しないか？」

「挨拶活動！？」

だからうるせーよ山倉よぉ！　リアクションがウザイって。

「それって校門の前に並んで登校してくる生徒達に挨拶するやつか？」

「そうです先輩。どうでしょうか？」

「ま、いいんじゃね。三年生の俺は朝補習で無理だから、お前ら一、二年生が中心となって頑張れよ」

「なっ！？　ずるいっすよ先輩！　自分はやらないからって！」

「黙ってろ山倉。というわけで、挨拶活動に賛成の人？」

七人中六人が手を上げる。おお、さすが皆さん。ナイス反応です。反対者は山倉のみ。

「俺は嫌だね！　朝はのんびりしたいからな！」

「うるさいなー山倉は。私はいいと思うよ、こういう活動も」

ナイス水川。さすがは水川！　彼女、場の空気を読むのと流れを作るのには定評があります。俺の中での定評だから単なる個人の評価ってことだけど。

「そうですよ山倉先輩。それに楽しそうですよ？」

矢野の声に他の一年部員二人も頷く。さあ山倉よ、どうする？

「くっ……分かったよ！　やればいいんだろ！」

「じゃあ全員賛成ということで兎月の意見は採用なー」

手をヒラヒラと振り上げる駒野先輩。ちょ、おいしいところ持っていかないでくださいよ。

「あと、俺達だけでなく一般の生徒も参加可能ということで」

「それは友達を呼んで、一緒に挨拶活動してもいいってことですか？」
「その通りだ矢野。皆で楽しくやろーぜ」
「ま、いいんじゃね？　三年生はどうせ無理だけどな」
さっきからそればっかりですね駒野先輩。そんな受験勉強が大変ですか。来年から自分もそうなると考えるとなんかブルーになりますよ。
「時間は八時から予鈴が鳴るまで。それじゃあ話し合いはこれで終了。解散ってことで」
俺の声とともに一年生部員の二人が立ち上がって、ダーツへと向かう。お前らハマったんだな。分かるぞ、その気持ち。どんどん投げまくれ。そして上達しろ。ダーツが上手い奴はモテるぞ、たぶん。
「先輩もわざわざ来てくれてありがとうございました。どうぞ帰って勉強なり因数分解なりアメンポテト４世なりしてください」
「アメンホテプ４世な。そう言うなよ。せっかくだし、もうちょい寛いでいくわ。……俺にもダーツやらせろ！」
バッと立ち上がり、ダーツへと向かう駒野先輩。いきなりテンション上がったぞ。さっきまでのナマケモノぶりはどこへいったのやら。
「よっしゃ、皆でダーツ大会だ。負けたら罰ゲームな」
「いいっすよ～先輩！　ダーツを壁にぶつけて火花を散らすこと数知れず！　成長した俺の腕前を披露してやりますよ！」
山倉もテンションが上がる。いや、こいつはいつもこんな感じか。

「兎月もやるよな！？　お前ダーツだけは異常に強いからな！」
「だからボリューム下げろ。悪いけど俺は挨拶活動の許可をもらいに職員室に行ってくる」
「あ、私もついてく」
水川が手を上げる。
「サンキューな水川。じゃあ行ってくるわ」
騒がしくなった部室を出て、水川と二人で職員室に向かう。挨拶活動の許可だが、学校側も反対する理由もないはずだし何の問題もなしにＯＫを出してくれるはずだ。
「それで？」
出るなり早々、水川が話しかけてきた。
「は？」
「どうして急に挨拶活動しようなんて思ったの。何か理由があるんでしょ？」
鋭いなー水川は。さすがといったところか。
「火祭のことだよ」
「桜のこと？」
桜？　ああ、下の名前ね。
「実はさ……」

一昨日、昨日の出来事を水川に話す。火祭を見て遠藤が引いたこと、クラスの奴らも火祭のことを恐がっていること、遠藤の髪が無残なことになっていること。最後はどうでもよかったか。

「……なるほど。つまり兎月は桜のイメージを変えるために挨拶活動を計画したってわけね」

「ああ、火祭も呼んで一緒に挨拶活動する。できるなら放課後にもゴミ拾いとかしたいな。頑張る火祭の姿を見れば周りの評価も変わってくるだろ？」

「そうだね。皆はイメージだけで桜を避けてるからなぁ……すごく良い子なのにね」

まったくもってその通りだよ。そのことを皆にも分かってほしいんだ。

「……へぇ～」

ん？　急に水川がニヤニヤ顔で小突いてきた。なんですか、その面白そうなものを見る顔は。

「それにしても兎月ぃ。火祭さんのために随分と張りきってるじゃん。もしかして……好きになっちゃったぁ？」

「違うって。単純に火祭には笑っていてほしいだけだよ」

「おぉ～言うねぇ。カッコイイ～」

「はいはい。ほら、職員室に行こうぜ、マミー」

「だからマミーって言うな」

「今日は今のが初マミーだぞ」

「初マミーって何よ」

というわけで時間は戻って翌日の朝、挨拶活動一日目。火祭も挨拶活動に参加してくれると言ってくれた。うん、良かった。集合場所に火祭が来た時、山倉が驚いていたが俺と水川がなんとか説得。他の奴らも黙らせた。つーか火祭は何も悪くないんだって。

「あのさ……火祭を呼ぶのは分かるけどさ……なんで俺も参加しているんだ？　あ、おはよーございます」

愚痴りつつ、しっかり挨拶する米太郎。

「お前のせいで火祭のイメージが悪くなったんだろうが。償いということでお前も参加しろ。それとおはようございます」

「それを言われちゃ何も言い返せないな。おはよーございます。でもこんなことで印象が変わるもんか？」

「急には変わらないだろうな。おはようございます。少しずつでいいから変化が見れたらそれで、おはようございます、いいと思う」

「そうだな。変わるといいな、おはよーございます。これで償えるなら、おはよーございます、俺も頑張っておはよーございます」

「そこ二人。真面目に挨拶しなよ」

ベシッと水川に頭を叩かれて注意された。

「おはようございました」
「失礼しましたみたいに言うな」

第２０話　おはようから一気にランチタイム

ひたすら挨拶する俺達ボランティア部と火祭。ついでに米太郎。連休明けでいきなり挨拶されたことに驚く生徒達。ぎこちない挨拶を返す奴もいれば、ウザイとばかりに無視する奴もいる。そしてほとんどの生徒が火祭を見て、なんらかのリアクションを起こす。驚いたり、恐がったりとあまりよろしくない態度ばかりだけど……。それでも懸命に挨拶する火祭。その調子で頑張って！

「おはようございます」
「おはよーございます」
「おはようございます」

ふと、登校する生徒の中に知り合いが。それも最近できた知り合い。それも俺を下僕扱いする人。

「おはようございます、春日」

春日お嬢様のご登校だ。今日もお美しくて何よりです。

「この前はご馳走様。また行けたらいいな」
「……」

無表情でこちらを見つめる春日。あ、あれ？　仲良くなったと思いきや、いつも通りの無視。

「……」

しばらく俺を睨みつけた後、プイッと目を背けて校舎へと向かって

いった。

「ぷっ……将也、春日さんと仲良いんじゃなかったのかよ」

必死に笑いを堪えている米太郎がそんなことを言ってきた。無視されてやんのーみたいな顔がとてつもなく腹立たしい。

「春日がああいう奴なんだよ」

「それにしても無視って……ぷぷぷっ」

「くっ、笑うな気持ち悪い。いいから挨拶しろよ、おはようございます！」

予鈴が鳴り、俺達は挨拶活動を終える。初日からいい感じだったな。

「皆お疲れ様。火祭も来てくれてありがとな」

「別にいいよ。楽しかったし」

そう言ってもらえると嬉しいです。

「はあー疲れた！　声の出し過ぎで喉潰れたかも！」

それだけ大声出せるなら余裕で大丈夫だ山倉。

「ねぇ、兎月先輩」

ちょいちょいと制服を引っ張って矢野が話しかけてきた。やたらと声が小さくて、たぶん俺にしか聞こえてない。

「火祭先輩呼んだのって兎月先輩でしょ？　もしかして付き合っているんですか！？」

キラキラと興味津々な眼差しを送ってくる矢野。……はぁ、水川に続いて矢野までもそんなこと言うとは。

「違うよ。ただのお友達」

「それって今は友達だけど、近いうちに……！　ってことですね」

「それも違う。ほら、朝のホームルームに遅れるぞ」

それでもしつこく迫ってくる矢野を水川に押しつけて、火祭に話しかける。

「放課後も活動するけど、もし良かったら参加してみる？」

「君がいいなら喜んで参加させてもらうけど……一ついい？」

「何？」

「どうして私を誘うの？　君なら他にも呼べる女子がいるだろうに」

いやいや、火祭さん。あなたのイメージを変えるための挨拶活動ですよ。そのためにこの活動は行われているのだから。そんなことは本人には言えないけど。とにかく他の人呼んでも意味がないんですよ。

「俺は火祭がいいんだよ」

こういう風にしか説明の仕様がないな。これで納得してもらうしかない。

「わ、私が？　……あ、ありがとう。嬉しい……」

顔を赤くする火祭。お、俺何か恥ずかしいこと言いました？

「ほらぁ、矢野ちゃん。今の聞いたでしょ？」

「ですね水川先輩っ。やっぱり兎月先輩、火祭先輩のことが……！」

後ろでキャピキャピ騒いでいる女子二人。何言ってるかさっぱりです。絶対変な誤解をしている気がする。

「やっぱ新メンバー加入が良かったな。より個性的になったよ」

「だよな！　でもやっぱ俺は初期メンバーが好きだな！」

前方には深夜バラエティー『おねだりブルーベリー』略して『おねブル』の話で盛り上がる米太郎と山倉。こちらの話はすごく共感できるのにね！

昼休み、水川と火祭が教室で仲良く弁当を食べている。これも火祭の印象を変えるためだ。火祭はごく普通の女の子だということを周りの奴らに認識してほしい。

「あ、あれ？　漬け物パックがない。朝入れたはずなのに……。将也、お前食べただろ！？」

「食べてねーよ」

米太郎が言った漬け物パックというのは普通のタッパーに漬け物を詰めただけのやつ。米太郎はデザート感覚で漬け物を食べるのだ。気持ち悪い。

「も～、テンション下がるわぁ」

弁当に入っていた漬け物をかじる米太郎。いや、漬け物あるし。漬け物パックいらないじゃん！

「ところで将也、お前は加わらなくていいのか？」

「何に？」

「火祭達にだよ。一緒に食べないのか？」

「いや、俺はいいよ」

俺が入ってもしょうがなくね？　できるなら二人で食べていて……お、

「ほら、クラスの女子が来た」

水川と仲の良いクラスメイトが火祭と水川に近づく。

「ああやって女子同士で食べるのがベストなんだよ。仲良くガールズトーク、どうよ？」
「なるほど確かに。将也が入ったら変な空気になりそうだもんな」
「そーゆーこと」

火祭は色んな人と話せばいいと思う。一人ずつの印象を変えていくことも大事なんじゃないだろうか、うん。

「だから俺は米太郎と二人仲良く飯にがっつくわけ痛ぁ！」

痛い！　突如、背中に激痛が。誰かが叩いたに違いない。許せない！　危うくパンが気管に詰まるところだったぞ。

「何しやがる米太郎！」
「いや、俺じゃない」
「じゃあ誰だ……春日ね…」

後ろには春日がいました。心なしか、ちょっと不機嫌っぽい。

「何か用事でも？　その時はメールするって言ってたじゃん」
「……メールした」

えっ、マジすか？　ポケットから携帯を取り出して確認する。ちゃんとメールきてました。あれま。

「あっらぁ～、サイレントだから気づかなかったなぁ。ははは－、痛い！」

また背中を叩かれる。…これ背中が赤く腫れているに違いないよ。じんじんと背中が苦しげな悲鳴を上げている。

「ついて来なさい」
「えっと、どこに？」
「ついて来なさい」

出ました無限ループ！

「はいはい、分かりました」
「早くして」

そんな急かさなくても。そそくさと食べかけのパンを鞄に押し込む。

「わり、米太郎。ちょっと行ってくるわ」
「な、なんだよ。デートか？　デートなんだろ！？　羨ましいなチクショー！」

最後の台詞、以前に聞いたことがある。いやいや、今のやり取り見ていただろ？　俺と春日が恋人同士になんて見えないでしょうに。馬鹿かお前は。馬鹿だろ。

「で、どこに行くの？」
「……」

返事する代わりに春日は移動する。俺はその後ろからついていくしかないよねー……はぁ。

向かったのは食堂。昼休みだけあってかなり混雑している。丸テーブルが一つだけ空いていたので、そこに腰掛ける。気づかなかったが春日はピンクのお弁当箱を持っていた。ふたを開けると中は豪華な料理が。……いやいや……

「お弁当かよ！」

なんだよそれ。言ってくれたら俺だって昼飯持ってきたよ。食いかけのパンがあったのに。

「はぁ……俺、売店で何か買ってくるわ。春日もほしいものある？」

「紅茶」

即答で返ってきた。さっきまで無視してたくせにさ！

「……はぁ」

溜息交じりに売店へと向かう。無論、売店も混み合っていた。もうヤダヤダ。俺はこんな中でパンを買うのが嫌だから、いつも昼休み前の休み時間に買っているのにさ。……春日のせいだ！

人混みを縫うようにして前へと出る。ぐえ、押してくるなよ。もっと譲り合いの精神を持ちやがれ。違う意味でのハングリー精神だなおい。適当にパンを掴む。

「メロンパン百五円ね」

おばちゃんに小銭を渡して昼飯ゲット。うわ、臭い！　おい誰だよ臭い奴。ちゃんと脇洗え。暑苦しい売店を抜け出し、続いては紅茶を自販機で購入。春日の待つテーブルへと戻る。

「はい紅茶」

無言で紅茶を受け取る春日。はぁ、相変わらずだな。ここでありがとうと言ってくれたらどんなに報われることやら。

「んじゃ、いただきます」

メロンパンを頬張りつつ春日をじぃ～と見つめる。……こうして見ている限りだと普通に可愛い女の子なのにな。性格が最悪だと一体何人が知っていることやら。

「……何？」

「ん、いや…どうして食堂に来たのかなーと思って」

「別に」

そう言ってそっぽ向く沢尻…じゃなくて春日。てっきり春日が俺と一緒にお昼食べたいとか思ったけど、そんなわけないよね。ディナー楽しかったの俺だけだと思うし。

「GWは楽しめた？」

「別に」

「や、やっぱ連休明けの学校がキツイよね」

「別に」

つ、強ぇ……！　会話が弾まないよ。ボウリングの玉くらいに弾まないぞ。もっとスーパーボール並に弾ませようよ。

「……あ～、この前のディナー美味しかったな。また行けたらいいな」

「……そ」

……お？　ちょっと違う反応が返ってきたぞ。やっぱディナーは美味しかったよねっ。良かった、俺だけじゃなくて。本当にあの時は楽しかった。春日もすごい綺麗だったし、もう一回は拝みたいものだ。

「……兎月」
「はい？」
「……今朝」
「はい？」
「……何してたの？」

あぁ、今朝ね。つーか、

「春日さ、今朝無視したよね。地味に傷ついたんだけどぉ」
「何してたの？」

また無視ですか。くそー、やってくれますな。こっちの質問には答えないってか。

「……」

対抗して俺も無言。春日とも目を合わせない。

「……っ痛い！」

テーブルの下から脛を蹴られた。見えないはずなのによくピンポイントで狙えるな。

「何してたの？」

「ま、前に言ったと思うけど俺ボランティア部でさ。その活動で挨拶してたんだ」
「……」
「良かったら春日も参加してみる？　意外と楽しいよ？」
「……気が向いたら」
同じことを以前にも言われたような……。
「来る時はメールして教えてね」
「……うん」
おぉ、春日が頷いた……！　見たの初めてかも。
「春日が頷くなんて珍しいね。熱でもあるんじゃ痛い！」
先程と同じ箇所を蹴られた。俺の脛が熱を帯びてきた。すげえ痛い。
「痛い……」
「うるさい」
ひどい……。この前の優美な春日とは思えないよ。
「もうちょっとお淑やかにした方がいいよ？」
「うるさい」
うわぁ、全然応えてないや。
「はぁ……せっかく可愛いんだからさ」
「……うるさい」

お、少しだけ動揺した春日。可愛いと言われて照れてるのかな？
そんな春日が超可愛いなと思ったりしたのは内緒だ。俯いたかと思いきや、すぐに顔を上げてこちらを睨みつける。そんな恐い顔しなくても……はぁ。

第２１話　早くもネタバレ

放課後、俺達ボランティア部と火祭は校内の清掃をしていた。これも部活動であり、火祭のイメージチェンジのため。火祭が学校のため頑張って掃除をしている姿を見れば少しは印象も変わるはずだ。だから頑張りましょう！

「火祭、ゴミ袋持ってきて」
「はい」
「ありがと」

効率よく掃除するために二人一組になろうと水川が提案。次々とペアができていき、余った俺と火祭がペアを組むことに。その時の水川と矢野のニヤニヤ顔が妙に気になった。あの二人は俺をどうしたいのやら。とりあえずそれは置いといて今は掃除に集中しなくては。

「よし、この辺りはこのくらいでいいだろ。次のエリア行こう」
「うん」

ゴミや落ち葉の入った袋を手際よく結ぶ火祭。

「なんか手慣れている感じだけど、こういうのって得意？」
「図書委員の仕事でこれに似た作業をすることもあるからね」
「なるほど、だから上手いのか。そういえば、コジローに餌あげた？」

コジローとは学校内を浮浪する黒ぶち猫のことだ。いつも火祭から餌を貰っている図々しい奴。もし掃除中にあいつの排泄物を見つけた時にはぁ、この学校敷地内から追い出してやる。

「うん、さっきあげてきた」
「そっか」

のほほんとした気分と空気を味わいつつ、火祭を二人で中庭へと向かう。風が木々を揺らし、木の葉が口笛を吹いているかのような軽快なメロディが聞こえる中庭には俺達と同じように箒やちりとりの掃除道具を持った生徒が二人いた。

「あ、駒野先輩」
「おー、兎月。ここのエリアはもう終わったぞ」

自慢げに箒を回す駒野先輩。三年生の駒野先輩は放課後の補習で忙しいから部活動には参加できないと言っていたが、本日の補習は休みになったらしく今日の清掃活動に参加してくれている。さすがは部長。その横でゴミ袋を結んでいる一年生の矢野。

「そうですか。なら一応、今日のノルマ分は終わりましたね。一旦集合しましょうか」
「まーまー、その前に」

先輩は右腕を俺の首に回してがっちりホールディングする。ぐっ、ちょっと苦しいですって。金田先輩はぐいっと俺の耳元に顔を近づけて囁いてきた。

「そこの火祭さんと付き合っているんだろ？」
「先輩まで何言っているんですか。違いますよ」
「照れんなってー。話は矢野からしっかり聞かせてもらった」

……矢野ぉ。視点をずらして矢野を睨む。矢野は先程と同じように

ニヤニヤしていた。こいつに先輩を敬う気持ちはないのか。眼鏡かち割るぞ。

「彼女のためにこうしてお前が率先して活動してんだろ？」

うわぁ、あながち正解だよ。ニュアンスは違うけど。だから彼女じゃないんだって。どうして誰も俺の話を聞いてくれないんだよ。鼓膜に呪いのクリーム塗りたくられているよ。

「じゃあ、もうそれでいいですよ」

「照れるなよー。ホントにさ」

ギリギリと腕に力をこめてくる先輩。い、痛いですって。もうちょっと手加減してくださいよ。

「いやいやホントにさー」

「せ、先輩……？」

突然、先輩の声が低くなった。洞窟の奥底から聞こえてきたかのような重く怖い声が耳を覆い被る。

「兎月ー……部活でイチャイチャするとは随分偉くなったもんだなー。えぇ？　こちとら独り身で受験勉強しているのによー」

駒野先輩は右腕で俺の首を締めつけて、左手で俺の頭をアイアンクロー…って痛い痛い！

「痛たたたっ！　せ、先輩やめてください！」

「次期部長はお前だと考えていたが、やっぱ取り消しだな。こんな女たらしに部のトップは任せられないよなー」

さらに力をこめる駒野先輩。ぐっ、頭蓋骨がメキメキ悲鳴を上げているぅ！

「ぐあああぁぁ！　ギブ、ギブアップです先輩！」

「……ふー」

ようやく力を弱める駒野先輩。すぐに先輩から離れて距離を取らなくては。この人マジで危ない。いつか殺されてしまいそうだ。

「な、なんですかいきなり。違うって言ってるでしょ！」

「あースッキリした。よし、皆に集合するよう伝えてくれ」

爽やかな笑みを浮かべて駒野先輩はフラフラとどこかへ消えていった。人をストレス発散に使いやがって。なんて先輩だ。あれで部長やっているんですぜい？　とんでもないよ。

「それと矢野。間違った情報を流すなよ」

「え、違うんですか？」

「何がだ？」

すると矢野がテクテクと歩いてきて、耳打ちする。

「兎月先輩が火祭先輩のこと好きだってことです」

「……」

……い、いや……火祭のことは好きというか……友達として好きであって、恋愛感情はない……と思う……。いやいや、火祭は女の子としてすごく魅力的ではあるし、もし付き合えるなら超幸せだ。でも今は火祭のイメージを変えることが最優先であって、付き

合うとかはまだまだ先の話であるからして……というか別に火祭のことをそういう風に見ているつもりはないぞ俺は。その……いや、まあ……好きか嫌いかと聞かれたら……す、好きだけどさ……。

「兎月先輩？　勝手に一人で進行しないでくださいよ」

矢野が俺の肩を揺らしてくる。やめて、まだ脳内会議終わってないから。あと一時間は猶予をもらいたい。

「で、どうなんですか？」

目をキラキラしないでほしい。なんだこれ、どうして後輩相手にしどろもどろにならなくてはならんのだ。

「……プライバシーを主張して、黙秘します」

矢野から逃げるようにしてその場を立ち去る。ゲームでも好きなコマンドが『とんずら』の俺ですから！

「あっ、逃げるんですか！？」

「矢野、火祭。他の部員見つけたら、職員室に来るよう伝えてくれ。顧問がジュース奢ってくれるらしい」

「ホントですか？」

今度は違うタイプのキラキラした目をする矢野。よし、注意が逸れた。中庭に二人を残して他の部員探しを始めることにする。山倉とか声デカイからすぐ見つかるんだけどな。

校舎の周りをぐるりと一周したが、ボランティア部員の姿が目に入らなかった。おそらく全員職員室に行ったのだろう。俺も職員室へと向かう。

「お、兎月。遅かったなー。皆もうジュース貰って帰ったぞ。ついでに顧問も用事があるとかで帰った」

職員室の前には駒野先輩がいて、ジュースをシャカシャカ振っていた。つーか、速くね？　皆さん、どんだけジュースほしかったんだよ。

「お前の分な」

駒野先輩の投げるジュースをキャッチ。そしてシャカシャカ振っていたジュースって俺の分だったんですか！　炭酸じゃないからまだしも、常識的に考えて人のジュースをシェイクしますかね……ひどい先輩だよ。これで部長をやっ……さっき言ったからいいや。

「ありがとーございまーす」

「おいおい兎月……先輩に向かってそんなテキトーな返しでいいのか？　まだ痛めつけてほしいみたいだな」

「ありがとうございました！」

くそ……普段はナマケモノのくせして、こういう時にだけ先輩の威厳出しやがって。でもアイアンクローは恐ろしいので大人しく従う情けない俺。

「今日は兎月の彼女も参加していたからなー」

火祭のことか。だから彼女じゃないですって。火祭に申し訳ないよ。俺みたいな取り柄のない奴が彼氏だなんて……火祭に釣り合わないって。

「ジュースが足りなくてよー。お前の分をあげようとしたんだが、受け取ってくれなかったんだ」

俺の分をあげようとしたんですか。俺、正規の部員なんですけど……。いや、それより火祭はジュースを貰わなかったのか……遠慮しなくてよかったのに。

「そうですか。それじゃあ俺は失礼します」

駒野先輩に一礼してその場を去る。まだ火祭が校内にいるとしたら……あそこかな？

図書室の前、俺の予想通り火祭はそこにいた。図書室はすでに閉館時間を過ぎており誰もいないし、いつも以上に静寂に包まれていた。そこに一人、火祭は壁にもたれかかっていた。

「火祭」

俺の声に反応して火祭はこちらを見つめる。その表情はどこか申し訳なさそうに見えた。何かあったのか？

「そこで何してるのさ」
「……ちょっとね」
「皆と帰らなかったの？」
「君を待っていた」

え、俺？　何か用？

「……真美から聞いたよ。君が私を部活動に誘った理由」

……水川さーん、なんで言っちゃうのさ。火祭に本当のことを話してはいけないんだって。水川といい矢野といい俺の周りには口の軽い女子しかいないのかよ。これは言っちゃいけないやつでしょうが！

「……周りの人が持っている私の印象を変えるためにやってくれているんだよね」
「あぁ、まあ……」
「ごめんね、気を遣わせて」

頭を下げる火祭。な、そんな……勘弁してよぉ。

「いや、謝らないでよ。俺が勝手にやっていることだし。もしかして迷惑だった？」
「そんなことない。すごく嬉しい……」
「それなら、ありがとうって言ってくれないか？　俺はそっちの方が嬉しいな」
「うん……ありがとう」

しかし、まだどこか納得のいかない顔をする火祭。う～ん、だからそんな顔しないでよ。俺はあなたのそんな顔を見たくて活動を提案したわけじゃないんだ。決意したわけじゃないんだ。

「水川から俺が火祭を部活動に誘った理由聞いたらしいけど、たぶん違うと思うよ」
「え？」
「俺が誘った理由は、火祭に笑顔でいてほしいから。ずっと笑っていてほしいからなんだよ。俺の知っている火祭はもっと笑顔で癒しと温もりを与えてくれる優しい人のはずだ。それを皆に理解してもらいたいから活動を始めたのも確かさ。でもそれが一番ではない……何よりも火祭が悲しい顔をしないで笑っていられるようにしたいからなんだよ。だからそんな暗い顔じゃなくて笑顔で言ってほしいな」

火祭がいつも笑顔でいられる日々を願って。周りが誰も恐れないで火祭に悲しい顔をさせない日々を願って。それを願って俺はあの日決意したんだ。

「……うん」

火祭の瞳がじわりと潤む。それも一瞬のことで悲しげな表情は掻き消えるようになくなった。

「……ありがとう」

代わりに満面の笑みがその場を明るく照らした。あぁ、やっぱり火祭は笑顔が似合うよ。ずっとこの笑顔でいてほしい。心からそう願う。

「じゃあ、帰ろっか」

俺も笑顔で返す。

「うん」

第２２話　お嬢様だって挨拶する

挨拶活動を始めて一週間、徐々に火祭のイメージが変わってきた。
火祭に挨拶を返す生徒も増えてきて、教室でも火祭がクラスメイトと話す姿を見るようになった。頑張って活動してきた俺にとっても喜ばしいことだ。皆に囲まれて笑う火祭を見ていると、こっちも嬉しくなってきちゃうよ。……けどその半面、火祭と話す時間が減って俺個人としては寂しい気持ちもあるんだが……。でも、やっぱ俺なんかといるよりは色んな人といた方が火祭にとってプラスになるわけだし、寂しいと思うのは俺のワガママでしかない。なので我慢だ。が…ま…ん…。

「おはようございます」

ちなみに今も挨拶活動中だ。開始当初はボランティア部と火祭だけであったが、それに感化されて弓道部やテニス部も活動に参加するようになった。てなわけで弓道部の米太郎とテニス部の遠藤も元気におはようございますしている。

「いやー、挨拶するのも気持ちいいもんだな」

爽やかスマイルの米太郎。

「別にお前はいなくてもいいけどな」
「ひどくね!?　呼んどいてそれはないよ」
「おはようございまーす」
「うわっ、無視だよ。ひど～い」

変な声を出すな、気持ち悪い。そして別に呼んでないし。

「おはようございます」
「おはようございます」
「……おはようございます」

元気よい挨拶が飛び交う中、明らかにテンションの低い声が。それは俺の右隣から聞こえる。聞いているこっちまで気が滅入りそうなくらいだ。

「それにしてもなぁ……」

左隣の米太郎が小声で囁く。

「まさか、春日さんも参加するとはな」

米太郎の言う通り、俺もびっくりだ。今、俺の右隣には春日がいる。人が通る度に無表情で淡々と挨拶している。

「……おはようございます」

いやいや、機械ですかあなたは。何の感情もこもってない挨拶をされて誰が嬉しいんだよ。少なくても俺は嬉しくないぞ。

「春日、もーちょい愛想よく挨拶したら？」
「……」

そ、そんな不機嫌な顔しないでくださいって。つーか嫌ならなんで来たんですかい？　全ては昨日のあるメールからだった。メールの送信者は春日。内容は春日も朝の挨拶活動に参加すると書かれてあった。参加してみないかと俺が誘ったとはいえ、まさか本当に来る

とは……うーん意外。

「……おはようございます」

で、来た割にはまったく楽しそうでない。誘ったこっちが申し訳ないし、挨拶される生徒にも申し訳ないわ！

「だから、もっと感情込めてさ」

「うるさい」

「……ふっ、春日みたいなお嬢様には無理かな痛っ！」

出ました春日のローキック！　激痛が右足を走り抜ける。ほ、骨に響く……軽くヒビが入ったかも。

「……だったら、やってみなさいよ」

「感情を込めた挨拶を？」

「そ」

「……おほんっ……ぅおはぁよう～ござぁいますぅ～」

オペラ歌手よろしく甲高い声を出す。感情も溢れんばかりに入っていたぜ。どうだ、これが正しい挨拶の仕方だ。

「真面目にやれ」

頭を叩かれた。叩いたのは水川。地味に痛い。春日のローキックよりは幾分かマシだが。

「俺は真面目だぞ」

「今のどこが」

「感情込めたんだよ。俺的にはアドリナ海のように広く、マリンブ

ルーのように清らかな、そして遠く離れた恋人を恋い慕う淡い気持ちだったんだけど」

「……何言ってんの？」

そ、そんな訝しげな顔しないでよ。恥ずかしいじゃん。

「か、春日が感情込めろって言うから……」

「知らない」

しらばっくれんなよ春日ぁ！　俺から顔を逸らして挨拶を続ける春日。我関せず、といった感じだ。裏切り者め……！

「あ、春日さん。今日は参加してくれてありがとうね」

そして俺は無視される。……なんだろ、このやるせない気持ち。

「どうだ将也？　俺の気持ち分かっただろ？」

「おはようございます」

そして俺は米太郎を無視。

「でも、春日さんが参加してくれるなんて思わなかったよ」

「……なんとなく」

あれ？　春日が水川と普通に仲良く話してる。

「二人って知り合い？」

「友達だよ。ねー」

「うん」

へぇ、知らなかった。春日に友達いたのか。こんなワガママお嬢様に交友関係があるとは思えなかったけどな、って、

「痛い！　本日二回目のローキック……っ、なんだよ！？」

しかも一発目と同じ箇所。痛みが尋常じゃないんですけど……あ、やっぱりヒビが入ったわ。つーか今、俺の心の中読んだよね……読心術ですか？　それって恐ろしいよ。

「別に」

「出たよ『別に』が！　理由もなく人を傷つけるなんてあるかよ。別に、って……同じ台詞を戦争に巻き込まれた善良な一般市民に言えますか？　ピカソの描いたゲルニカでも見て、考え方を改めたらどうだ！」

「この馬鹿は放っておいてさ、あっちで挨拶活動しよ」

「うん」

これまた俺を無視して、水川と春日は離れていった。くそっ、無視されるのがこんなにも寂しいだなんて……。

「ま、元気出せよ。俺がいるじゃないか」

「おはようございます」

「それでも無視！？　俺達は仲間じゃないのか！？」

米太郎のシャウトが空に響き渡った。お前と一緒にするな。

「よし、予鈴が鳴ったし、終わりましょう」

挨拶を終えて俺達は校舎へと向かう。この一週間、皆もよく頑張ってくれていると思う。褒めてあげたい。……って俺、何様？

「何を上から偉そうに言っているのやら」

「何が？」

「うおっ！？」

隣には火祭が。いつの間に。気づかなかったよ。

「た、ただの独り言」

「そうなの？　ふーん」

「……」

「……」

「……あの、火祭？」

「ん？」

「どうして俺のところに？　水川達と話したらいいじゃん？」

俺なんかと話すより他の人と交流してもらいたい。そのための活動でもあるわけなんだから。

「……今日、君と話すの……初めてだから」

今日？　…あぁ、確かに今日初会話だな。

「……って、そんだけ？」
「それだけじゃ駄目……？」

いや……駄目ってわけじゃないんだけどね。だから火祭にはより多くの人と話してもらってイメージを変えてもらいたいわけであって。

「それとも、私と話すの嫌？」

上目遣いでこちらを覗き見る火祭。そ、そんな目で見つめないでください……。ハートが締めつけられちゃう！

「いやいや、全然。俺的には火祭と話せて嬉しいことこの上ないよ」
「ならいいでしょ？」

う～ん、そんなもんか？　そこからはいつものたわいのない会話をしつつ、教室へと向かっていった。相変わらず前を歩く米太郎と山倉は『おねブル』で盛り上がっていた。あ、今日は遠藤も参加している。皆大好き『おねだりブルーベリー』。

「楽しそうだな」

「そーだな」

昼休み、昼飯を頬張りつつ俺と米太郎はキャピキャピ騒ぐ水川グループを眺めていた。もちろんそのグループの中には火祭もいる。

「何を話してんだろ」

「さあな」

別に内容はたいして気にならない。火祭が笑っているならそれでいい。

「ガールズトークか……。いいな～。俺もして～」

ポテトサラダを口一杯に頬張って米太郎がそんなことを漏らす。ついでにポテトもこぼす。汚い、やめてくれ。喋るか食べるかどっちかにしろ馬鹿。

「ま、火祭が楽しそうならそれでいいんだよ。本当、水川には感謝しないとな」

水川がいなかったら、火祭がこんなにも皆と仲良くなるにはもっと時間がかかっただろう。水川の頑張りに感謝。

「水川もだけどさ。将也、やっぱお前が一番偉いよ」

ポテトサラダを飲みこんだ米太郎の意外な一言。え……俺？

「俺が？　別に何もしてやれてないけど？」

「お前が挨拶活動し始めたんだろ。そのおかげで火祭のイメージが良くなりつつあるんだから、お前のおかげだろうが」

「頑張ったのは火祭じゃん。俺そんな関係ないし」
「謙虚だな～将也は」
なら、お前も見習え。そして謙虚ではない。事実だ。火祭の印象が変わったのは火祭自身が頑張ったからだ。俺はその手助けしかやっていない。こうやって火祭が笑顔でいてくれるのがどんなに喜ばしいことか。もうあの時の悲しい表情は見たくないからな。

「……まぁ、少し寂しくもあるがな」
「どうしてさ」
「火祭が皆と仲良くするから俺と話す時間がないから……って俺の自己中！」
何を米太郎に本音を漏らしているんだ俺は！　これじゃ俺が火祭と一緒にいたいみたいな独占欲の強い奴じゃないか。……そう思っているのも否定できないが。

「ほー、嫉妬しているんだなー」
「う、うるさい」
くそ、とんだ恥さらしだ。穴があったら入りたい。穴がなくても、あなをほるを覚えてでも掘ってやる。よっしゃ、わざマシン持ってこい！

「まーまー、そんな強がんないでさ」
ニヤニヤ笑う米太郎。や、やめい！　全てを知ったような顔でこっちを見るな。今だけはポテトサラダにがっつけ！
「大丈夫、そう心配するなって。火祭は将也といる時が一番良い笑

顔してるからさ」
「俺といる時が……？」
そんなわけないだろ。水川グループを見れば、その中で火祭は楽しそうに笑っている。あんな笑顔、俺といる時にしてないもん。
「あれ以上に良い笑顔だよ。それはお前だけにしか向けられてないの。分かる？」
「そうか？」
「自覚ないのか？　うわっ、ニブっ。怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い～」
なんだその馬鹿にしたような目つきは。無性に腹立つんだけど。
「朝だってさ、わざわざお前のとこに行ってたじゃんか。火祭もお前と一緒にいたいんだよ」
「そうなのか？」
「自覚ないのか？　うわっ、ニブチン。怖い怖いこ、ぶへぇ！？」
ムカつく米太郎にグーパンチをお見舞いする。少し黙っとけ。とにかく、火祭はたくさんの人と交流した方がいいんだ、うん。もやもやする気持ちを米太郎にぶつけ（グーパンチ二発目）、昼飯にがっつく。うん、やっぱメロンパンは美味しいよな。
「ったく、これだから将也は」
「口からポテトサラダがこぼれているっつーに」

第２３話　坂道ジェットコースター

「くはぁ！　やっと終わったぜ！」

箒を投げ捨てて山倉が地面にドサッと座りこむ。だから声デカすぎ。ボリュームを下げろ。声帯引きちぎってやろうか。

「もう動けない！　初号機活動限界！」

「笑えばいいと思うよ」

「会話になってないぞ！？」

うわ、ツッコミも声デカイ。声張りすぎなんだよ。もうボランティア部辞めて応援団に入れよ。そっちの方が適任だって。

「そっちも終わった？」

疲れたと吠える山倉を落ち着かせていると、掃除道具を抱えた水川と火祭がやって来た。

「うん、今終わったとこ。そっちは？」

「こっちも終わったよ。他の皆も呼んでくるね」

そう言って火祭と水川は掃除道具を置いて、また歩きだしてどこかに消えていった。

「なぁ、兎月！」

「うるせー」

「火祭さんって良い子だよな！　優しいし、可愛いし！俺のイメージと全然違ったよ！」

おぉ、やっと理解してくれたか山倉よ。そうなんだよ、火祭は普通にいい子なんだよ。昔のイメージが強いから皆も避けているだけなんだよな。実際に接してみれば分かるもんだろ？

「この活動を通じて火祭さんの印象がすげー変わったよ！」

そりゃ良かった。これと同じことをクラスメイトでテニス部の遠藤も言っていた。他にも色んな人が同様のことを……もう枚挙にいとまがないくらいに。うん…本当に良かった。

「よっしゃ、俺道具なおしてくる！　偉くね！？」

水川達の置いた箒やらを持ち抱える山倉。

「お前、活動限界じゃなかったの？」
「大丈夫、内部電源に切り替えたから！」
「それだとあと五分しか動けないぞ？」
「うおおおお！」

初号機もとい山倉は俺の言葉を無視して、どこかへと消えていった。もしかして暴走？　ゼーレが黙っちゃいないぞ。

「兎月」
「ん、痛っ！？」

振り返る前に謎のローキックが俺の右足にクリーンヒット。蹴ってきたのは勿論、春日。最早キックが春日の挨拶となってきたな。どこの戦闘部族？

「痛ぇ……。か、春日……もう帰ったんじゃなかったの？」
「帰ってない」
「それは見たら分かるけど」
「帰るわよ」
「え？　いやいや、もうちょい待ってよ。もう少しで部活終わるからさ」
「帰るわよ」
「はい」

も～、俺ってば弱すぎ。すぐ折れちゃう。男としての屈強な精神はないのか俺よ。

「あ、俺先に帰るから水川に言っといて」

偶然ボランティア部の一年部員が通りかかったので伝言を託す。

「あ、分かりました」

そう言って一年生部員は去っていく。あいつは良い後輩だ。矢野にも見習ってほしいものだな。

「行くわよ」
「はいはい～」

そんなに急がなくてもいいんじゃないすか。早く帰りたいなら、俺なんかを呼ばないでさっさと一人で帰ればいいのにね。そんなこと本人には言いませんけど。春日と二人並んで歩く。もちろん俺は春日の鞄も持っている。もう慣れましたよ。悲しいけど。

「ちなみに春日、なんでまだ学校いたの？」

「……」

時刻は五時を過ぎており、一般の生徒はもう帰宅しているはず。春日は何か用事でもあったのか。部活があったなら分かるけど、でも春日は帰宅部だし……なんの用事があると？

「……」

「……」

あ、れ？　これは無視？　それとも何か言えない事情が？

「……あ～、もしかして……俺を待っていたとかＯｕｃｈ！！」

春日のローキック！　激痛パネェ！　あまりの痛みに片膝をついてしまう。と、とうぶん立ち上がれそうにないです……。もしかして図星？　いやいや、そんなわけないよね。それは違うって将也よ。

「行くわよ」

俺を置いてスタスタと歩いていく春日。ちょっとひどくないですか？　必死に立ち上がって春日を追いかける。頑張れ俺。負けるな俺！

「今日も良い天気だったよな～」

「……」

春日と二人バス停へと向かう。ちなみに俺は自転車で通学しているのでバスを待つ必要はないけどね。のろのろと自転車を押しながら春日の後ろをついていく。

「今日は挨拶活動手伝ってくれてありがとうな」

「……」
「やってみると結構楽しいもんだろ？」
「……」
「ま、また参加してくれると嬉しいな～」
「……」

はい無反応ー。何にも答えてくれないー。こっちは頑張ってテンションを上げてるのにさ。

「……何か返信プリーズ！」
「うるさい」

山倉ばりの大声を出すと、春日に蹴られた。この人は蹴ることでしかコミュニケーションできないのかねぇ。……ん？　あれは……

「コジローだ」

校門を出て少し歩いたところで黒ぶちの猫、コジローが俺の前を横切る。散歩中のようだな。自由だなお前は。火祭に餌もらって何不自由なく暮らしやがって。下僕の俺とは大違い。

「知っている猫？」

春日がこちらを振り返る。猫の方には食いついたよ。興味示したよ。

「学校に生息してるっぽいよ」
「そ。……猫」

なんすかその興味ありげな反応は。さっきとは大違いだなおい。

「ほら、コジローおいで」

自転車をとめて腰を下ろして、コジローに手招きする。お前とは何度も会った仲じゃないか。ちょっと戯れようぜ。

「コジロー、カモン！」

が、コジローは俺を一瞥した後、校門をくぐり抜けて校舎の方へ消えていった。まるで俺のことなんかどうでもいいみたいな態度だ。

「……」

「……馬鹿みたい」

か、春日さん…キツイ一言ですね。そんなこと言わなくても。

「ね、猫は気まぐれな生き物だからさ」

立ち上がって春日の方を振り返る。呆れ顔の春日の後ろにはバスが……って、あっ……バスが……。

「春日……バス…行っちゃった」

俺の声はバスの発進する音に掻き消されたが、春日には伝わったのだろう。呆れ顔が歪んで段々と険悪な表情に変わっていく。

「……」

「……あー、その」

「アンタのせいだ」

ちょ、何か喋らしてくださいよ。

「いや俺じゃなくてコジ」
「アンタのせいだ」

何か喋らしてください！　俺にも弁明をする権利がありますから。
バスの後ろ姿を見送り、バス停へと向かう。一応ね。

「次のバスは……三十分後……」

マジかよ……春日がそんなに待てるのか？

「あと三十分待っ」
「アンタのせいだ」
「耳を傾けて！　お願ぃ！」

とりあえずバス停で次のバスを待つことに。だから俺は自転車だから待たなくてもいいんだけどね。隣の春日が行くなって言うから。
そして……隣の春日が執拗に俺の足を蹴ってくるんだけど。一定間隔で春日が俺の右足にキックしてくる。気分的には毒状態の勇者だ。徐々にＨＰゲージが減っていく。なんとか打開しなくては。とりあえず春日から離れてみる。しかし、すぐに春日も距離を詰めてローキックを再開。

「あの、痛いんですけど…」
「……」

このままあと三十分も？　無理無理、そのうち足の骨が折れちゃうよ。う～ん、この状況をどうにか打破できないものか……足を機械鎧にするとか？　おお、それなら春日の攻撃にも耐えれそうだ。
そして俺は国家錬金術師になる！　……でも機械鎧整備士がいない

から駄目だな。というか真面目に考えようぜ俺よ。……そうだ。

「春日、自転車で送っていこうか？」

「……」

これぐらいしかまともな打開策が思いつかない。春日を自転車の後ろに乗せて送り届ける。これが駄目なら諦めるしかない。甘んじてキック連打を受け入れよう。

「……」

やっぱ駄目か……お？

「……」

春日が無言で自転車の荷台に腰掛けた。ということはオッケーってことでオッケー？

「よし、じゃあ行きますか」

俺も自転車に跨がる。そういえば女の子を後ろに乗せるなんて小学校以来かも。ちゃんと運転出来るだろうか。お嬢様である春日に怪我でもさせたら俺の命はない。今改めて考えると、とんでもない提案だったな……どうしよ。

「春日、どっか掴まないと危ないよ？」

春日はただちょこんと座っているだけだ。そんな不安定な状態だとすぐ落ちるって。そして落ちたら俺の責任で春日の親父さんに殺されてしまう。い、嫌だコンクリートに沈められたくない！

「……」

春日は黙って俺の両肩に手を添える。うん、これで大丈夫なはず。

「それでは出発進行っ」

「早く行きなさい」

頭を叩かれた。そんなに早く帰りたいのかよ。目一杯ペダルを漕ぐ。

春日は思ったよりも軽く、意外にスイスイと自転車は走る。今の時間、行き交う人は少なく下校する生徒もほんの数人だけ。それでもやっぱり二人乗りは目立つのか、周りから視線を感じる。ちょっとばかしの気恥ずかしさはあるが、右足を蹴られ続けるよりは幾分かマシだ。

「あ～……なんて緩やかな帰り道」

いつもならスピードを出しまくって風と一体になるが、今日は春日を乗せているので抑えて運転する。ゆっくり、のんびりと。春日は無言で大人しく座っている。ここで暴れられるのも困るしね。と、目の前に急な坂道が。

「ここは……」

ここの坂は長く、なかなかの傾斜加減だ。帰りはいつもここを急降下で颯爽と走り抜けるだが、今日は後ろに春日がいる。危険なことはしてはいけない……でもやっぱ一気に下りたい！　風にならずして何を得ようか。行くしかないでしょうよ！

「春日、一気に下りるからしっかり掴まってね」

「え？」

坂道へと差し掛かり、そして一気に急降下。うおー、風が気持ちいい！　これだよこれ。春日も乗っているので、いつもよりスピードが増す。最高っ！

「きゃっふぉ～！　止まれない～！　やべぇ死ぬかもっ」

あっという間に坂道を下りきる。あー、楽しかった。ちょっとしたジェットコースターだったな。もう一回やりたいぐらいだ。

「どうだった春日？　って痛い痛い痛い！」

興奮していて気づかなかったが、春日が俺の肩をすごい力で握っていた。爪が食い込んでいるんですけど！？　ぐうううぅっ、痛いいいぃぃ！

「か、春日…痛いって」

そ、そんなに恐かった？　俺は楽しかったけど。

「……兎月」

震えた声の春日。だから力緩めてよ。血出ちゃうって！

「馬鹿」

「痛い！　背中を殴らないでっ。ごめん俺が悪かったって」

それでも殴り続ける春日。埒があかないので、また漕ぎだす。すると春日は手を止めて慌てて俺の肩を掴む。はっはっ、可愛い奴め。

普段からこんな感じでいればいいのにさ。そこからは安全運転でゆっくりと走った。スピード出すと春日が抓ってくるもん。

第２４話　鞄だって凶器（前書き）

短いです。それだけです。

第２４話　鞄だって凶器

ゆっくりしっかりと安全第一に自転車を走らせる。う～ん、なんて緩やかな運転だろうか。全く風を感じない。風の谷だったら、えらいことだぞ。春日は後ろで大人しく座っている。たまにスピードが出たりすると、ぎゅっと力を入れて俺の肩を掴む。なんかドキドキするんだけど……。そうこうしている内に春日の降りるバス停に到着。ブレーキをかけて停車。

「はい、到着～」

とりあえず春日に怪我を負わせなかったので一安心。かすり傷一つでも俺の命はなかったかも。春日本人より春日の父親が恐い。有名企業の社長だが、娘を溺愛する馬鹿親父でもある。春日の電話には２コール目で出るほどにだ。そんな春日父のことだからな、春日が怪我したとなると怪我を負わせた俺を抹殺するに違いない。一歩間違えたら今日の夜はコンクリートに埋められていたかもしれない。そう考えると恐ろしい……。

「……兎月」
「ん？」
「……」

いや、なんですか？　用件を述べてくださいよ。

「……」
「……」

う～？　何この空気。春日はどうして自転車から降りないの？　だ

ってバス停まで来たんだから、あとは歩いて帰るだけじゃないの。早く帰りたいんでしょ？

「……あっ、そーゆーことね」

ピンときました。気分はまさに名探偵江戸川君。春日が自転車から降りない理由、それは……

「はい、鞄。言ってくれたら取ってあげるって」

そんなことで黙らないでよ～。いつものあなたなら命令形で「取れ」とか言うじゃない。

「……」

無言で鞄を受け取った春日はそのまま鞄を振り上げると、

「痛っ！」

一気に振り下ろして俺の脳天に叩きつける。バンッと軽快なようでどこか重々しい音が響いた。はい痛い！

「な、何すんの！？」

「馬鹿」

「はあ？」

馬鹿とだけ呟いた春日は自転車を降りて歩きだしていった。何あの態度……お礼の一つも言えないのかよ。何か不満でもあったのか……あ～、きっと坂道でスピード出し過ぎたからだな。そうだ、それに違いない。でも、それならさっさと自転車から降りたいはずなの

に降りなかったのだろう？　う～ん……分からない。スタスタと歩いていく春日。どことなく不機嫌に見える。

「と、とりあえず、じゃあな春日。また明日っ」

俺の声は届いたのかどうかは分からない。春日がノーリアクションだったから。

「はぁ……もう後ろに乗せようだなんて安易なことは言わないでおこう」

そう心に誓って自転車を走らせる俺だった。

第２５話　ベジタブルスクランブル

突然、目が覚めた。覚めたといってもまだ視界はぼやけており脳も完全には覚醒していない。というかまだ起きたくない。おぼつかない手つきで携帯を目元に引き寄せる。ディスプレイには５：１６と表示されていた。おいおい、まだ全然寝れるじゃん。どうした俺よ、何かあったのか？　むくりと頭だけ起こして、カーテンの隙間から入る微かな光に目を向けつつ俺はまた夢の国へと旅立った。

携帯のアラーム音に呼ばれてベッドから這いずるように出る。午前七時二分、起床。今日も挨拶活動がある。急いで支度をしなくては。

「おはよう……ってどうしたんだよ」

リビングでは父さんと母さんがテーブルに突っ伏していた。話しかけても微動だにしない。何かあったのだろうか。朝ご飯も用意されていなかったので、戸棚から適当にツナ缶を引っ張り出してご飯の上にぶっかける。そこに醤油とマヨネーズをこれまたぶっかける。はい、朝飯完成。これでご飯三杯はいけますぜ。

「ごちそーさまでした」

朝食を済ませて洗顔に歯磨きと身仕度を終えて、あとは登校するのみ。未だに動かない両親をほったらかして玄関を開ける。う～ん、今日も一日頑張りますか。いつも通り自転車で通学しようとしたのだが、そこに自転車はなかった。代わりに自転車みたいな物体があったのだが、

「いや……これ何？」

前輪は大きく歪み、チェーンはぶち切れて地面に垂れ下がった状態。胴体の半分は右側に垂直に捩れ曲がっており、ひどく不格好だ。これを自転車と呼ぶことができようか、いやできない。

「俺の自転車が……」

登下校を共にしてきた相棒が一夜にしてスクラップと化しているなんて夢にも思わなかった。思わず指先が震えてきた。

「今朝ね、おじいちゃんが事故に遭ったのよ。対向車と激突してね」

疲れた表情で母さんがフラフラとやってきた。

「じいちゃんが！？　大丈夫なの？」

「自転車は半壊したけど、おじいちゃんは無傷だったわ。照れ顔で警察を引き連れてきた時はゾッとしたわ」

自転車がこんなことになっているのに、じいちゃんは無傷かよ。すげーな、じいちゃん。

「そこから事情聴取やら保険会社関係で相手側とも話し合いをしてクタクタ。五時近くに叩き起こされてこっちはグロッキー状態よ」

おお、俺が今朝早くに目覚めた原因はそれだったのか。にしても、じいちゃんもとんだ災難だな。いや、本当に災難なのは母さん達かもしれない。こんなテンションの低い母さんは久しぶりだ。

「ちなみにじいちゃんは？」

「昼から病院で一応検査するから、今は寝室で爆睡中よ」

なんてじじいだ。

「じゃあさ、俺はどうやって学校に行けばいいんだよ？」

「バスで行きなさい」

淡々とした口調で母さんはそう返すと、スーッと滑るようにして無音でリビングへと消えていった。

「……マジか」

改めて壊れた自転車に目を向ける。衝撃的過ぎてこれが事実だと認識出来ていないのか、はたまた感情が一周して逆に何も感じないのか。よく分からないが、別れとは急に来るものなんだなと実感した。とりあえず、じじいは一発殴らないと気が済まない。帰ったら覚えとけよ。

「よう兎月！　ギリギリじゃないか！」

挨拶活動開始一分前。なんとか間に合った。バスで春日と会わなかったのは幸いだった。いやマジで。

「全員来てる？」

朝からやかましい山倉をスルーして水川に尋ねる。

「全員来てるよ。桜もね」

水川の隣には火祭が。

「おはよう火祭」

「おはよう」

ニッコリ微笑む火祭。可愛くてドキッとしちゃうよね。

「それはそうと兎月、どうして昨日は帰ったのかな？」

ドスのきいた低い声で水川が胸倉を掴んできた。あ、そうだった…。

「い、いや違うんだマミー。急用が入って帰らないといけなくてさ」

「マミー言うな。私聞いたんだよ～？」

俺にぐっと近づいて水川が耳元で囁く。

「兎月ぃ、春日さんと二人仲良く帰ったらしいね」

ぐあ、バレてる。マズイ、これじゃ俺が女の子と帰るために部活サボったみたいに思われる。

「女の子と帰りたくて部活をサボるとはやってくれるねぇ」

うわっ、予想通り。なんて言い訳をすれば……。

「どうしたの真美？」

火祭が俺達の会話に割り込んでくれた。ナイス火祭！

「ん～……なんでもないよ。じゃあ挨拶活動始めよっか」

ふぅ、助かった。

「兎月！　俺を無視するな！」

「うるさい、声デカイ」

「おはようございます」

「おはようございます」

「おはようございます！」

この挨拶活動も随分と板についてきたと思う。皆も元気よく声出しているし……まぁ山倉は出し過ぎだが。そして何より、

「おはようございます」
「おはよう火祭さん」
「火祭さん、今日も良い天気だね」

こうやって火祭に挨拶を返す人が増えたことだ。最初は返事をするどころか、火祭にびびっていたことを考えるとすごい進歩だと思う。挨拶を返す人達を見て火祭も嬉しそうに微笑む。そう、それ。火祭にはそんな風に笑っていてほしいんだ。あは、なんだか俺も嬉しい気分っ。

「ニヤニヤしないでしっかり挨拶しなさい」

水川に頭を叩かれた。その後も登校してきた春日に無意味に殴られたりした。そんなにニヤケ顔だった?

「今日はイチャイチャしないのか?」

昼休み、タッパーから取り出した一個丸々のトマトにかぶりつく米太郎にそんなことを言われた。この馬鹿は俺と春日が付き合っていると勘違いしている。どう見ても俺が春日にパシられているだけじゃないか。

「春日のことか。だから俺達付き合ってないし。つーかそのトマトなんだよ。なぜに丸ごと？」

「うちの畑で取れたトマト。塩をふらなくてもそのままで甘くておいしいのさ！」

お前んとこ無農薬だろ。虫とか入ってんじゃねーの？

「トマト最高っ。例えるなら、野菜界の宝石ルビーといったところだな」

米太郎にとって、ごろごろの野菜が味の宝石箱らしい。某グルメタレントもびっくりだろうな。

「ねぇ兎月」

「ん、水川？」

突然現れたかと思いきや、俺のパンを奪い取る水川。

「……何すんの？」

「私達と一緒に食べよ」

そう言って自分のグループに戻る水川。もちろん俺の昼飯を持ったまま。俺に選択権はないのか。人質を取るなんてマフィアのやり方にしか思えない。しょうがない、行くか。

「米太郎も来いよ」
「へっへ～、エメラルドの宝剣きゅうり～」
恍惚とした表情でタッパーから丸ごときゅうりを取り出す米太郎。
こっちの声が聞こえてないみたいだ。ほって置こう。一人、水川と火祭に他の女子一人が仲良く食事する机へと向かう。今からあんな桃色ハーレム郷で昼食を取るのか……俺、大丈夫かな？
「ほら兎月君、早く来てよ」
名前を呼ばれたので素直に出向く。適当にその辺の椅子を引っ張ってきて腰掛ける。
「パン返せ、マミー」
「だからその呼び方やめてよ」
再び手中へと戻ってきたピザパンを頬張る。トマトソースの深い味わい！
「兎月君、いつもパンだよね」
クラスメイトの倉田さんにそんなことを言われる。
「親が弁当作らないから」
「佐々木君はいつも弁当だよ？」
別に米太郎が弁当だからって俺が弁当だというわけにはならないでしょうが。あの野菜馬鹿と同類にしてほしくない。
「そんなことよりっ」

机をバンと叩く水川。あなたそんなキャラだっけ？

「兎月と桜はどこで知り合ったの？」
「はあ？　火祭に聞きなさいよ」
「兎月君、あなたに聞いています」

倉田もノリノリな感じでこちらを見てくる。何これ？　火祭からも視線を感じるし。

「図書室前で会ったのが最初だよな？」
「うん、そうだね」

火祭はコジローに餌をあげていて、そこでちょっと意気投合したんだったな。

「では、次の質問っ」
「え、まだあるのかよ。続くの？」
「ズバリ、プロポーズの言葉は？」

……水川よ、何言ってんの。俺と火祭が付き合っているとでも？　こいつはこいつで勘違いしてやがる。俺の周りには勘違いヤローしかいないのか。少しは話を聞いてもらいものだ。

「えー！？　私も知りたいっ」

食いつくな倉田。プロポーズなんてしてないから。

「あのね、お二人さん。俺と火祭は付き合ってないから」
「「えぇ～？」」

なんだその、嘘だ～みたいな喋り方は！　嘘じゃないっての。

「火祭、お前からも何か言ってやってくれ」

「そ、そうだよ真美。私達まだ付き合ってないから」

「まだ？」

キラリと目を光らせ、ムフフと口元を緩ませる水川。えらくご機嫌だなおい。

「まだ、ってことは……桜は将来的に付き合うことも考えているってことでオッケーですね？」

「ですね？」

水川と倉田の二人に詰め寄られて、火祭は顔を真っ赤にしてしどろもどろになる。今のは火祭のミスだな。勘違いさせるような言い方をしたら駄目だって。

「えぇと、その……うぅ？」

あたふたと言葉を探すも出てこない様子。そ、そんな可愛いアクションしないでよ。ヤバイ、火祭がすげー可愛い！

「でもね、桜。早くしないと他の女子に取られちゃうよ？」

水川、もしかして……春日のことを言ってる？　だから春日と俺は恋人関係じゃなくて主従関係なの！　そして自分で言うとすごく空しい！

「え！？　き、君には意中の相手がいるの？」

机をガッタンガッタン揺らす火祭。いやいや、動揺し過ぎだから。

「いないって。そっちの早とちりな二人が勝手に捏造しているだけだから」

こちらとしては睨みつけているのだが、水川と倉田はまったく動じない。ただ俺と火祭を交互にニヤニヤした目つきで見ていた。マジで何なのこれ？

「へへへっ、黄土色に輝く野菜界のトパーズ、じゃがいも～」

「さすがにそれは生じゃ食べられないぞ米太郎！」

遠くから聞こえる不気味な声にツッコミを入れたところで俺の気力は０になった。もうヤダ。

第２５話　ベジタブルスクランブル（後書き）

題名に大した意味はありません。

あるとしたら……いや、やっぱりないです（笑）

第２６話　まるでトラブル

「来週からは試験一週間前になるので早く計画を立てて十分な勉強時間を確保するように。何度も言うが来年は受験となる。分からない分野はその都度、復習して確実に覚えるように。今のうちから苦手分野克服をしていることが受験成功に繋がるからな」

帰りのホームルームで担任がやたら長く話しているが、一言で返してやる。ウザイです。

「あと、最近うちの学校の敷地内に他校の生徒が出入りしていると耳にした。見かけたら先生達に報告するように」

はいはい、分かりました。分かったんで早くホームルーム終わってください。学生は放課後から忙しくなるんですよ。

「それでは委員長、号令」
「起立、気をつけ、礼」
「ありがとうございました」

鞄に筆箱だけ放りこんで、賑やかになった教室から一目散に出る。教科書類は持って帰りません。重たくなるので。人はこれを置き勉と言う。

「将也」
「どうした米太郎」

米太郎から呼び止められた。

「今からボランティア部の活動だろ？　俺も行く」
「お前、弓道部は？」
「今日は顧問が急用で休みになった。暇だから手伝って差し上げ奉り候ふ」

わけの分からない敬語を使ってきた。さっきの古文の授業に影響されているみたいだ。

「それは助かる。一緒行こうぜ」
「分かったぜ奉り候ふ」
「その喋り方やめろ」

場所は中庭。ボランティア部のメンバーに加えて火祭と米太郎の計八名がいる。各々が箒やらゴミ袋を手に持ち、さあ掃除始めようぜ！　のオーラがギラついており、やる気満々だ。

「えー、今日で掃除活動は終わりますが最後まで気を抜かずに頑張りましょう」

部長代理として俺が活動の旨を伝える。部長の駒野先輩は受験勉強で忙しいから代わりに誰かがまとめなければならない。そこで俺と

いうわけさ。なぜか俺が次期部長らしいからなー……まんざらでもないけどね！

「今日で終わりなのか！？」

山倉がうるさい。サイレスかけてやろうか。

「掃除する場所がもうないんだよ。だから掃除活動は終わりなの」

「水川の言う通りだ。ちなみに来週からは試験一週間前になるので挨拶活動も今週までだ」

火祭のイメージは大分変わったことだしな。この二週間、俺達のやってきた挨拶活動、清掃活動はともに成果を上げたはずだ。そりゃ、最初から反応が良かったわけではない。徐々に、徐々にだけど火祭に対する見方や態度が変わってきた。ほんの少しの変化だったけど、気づけば多くの人達が火祭のことをちゃんと見てくれていた。火祭は変われたはずだ。

「試験一週間前から部活動は禁止になるから、ぶべぇ」

「ってことで今から掃除活動になります。今日は二人一組で活動をしましょう」

水川が押し退けられた。次期部長の俺は邪魔ってか。つーかさ、どうして水川はそんなに二人一組にこだわるんだか。

「じゃあ将也、一緒にやろうぜ」

米太郎が俺の首に腕を回してきた。特に要望もないし、米太郎でいいか。

「ちょ、邪魔するな！」

すると水川が声を荒げて俺と米太郎を引き離す。あらら、俺と米太郎の友情が。

「何すんだマミー。俺と将也の友情を引き裂くつもりか！」

「マミー言うな、太郎」

「おい！　お米が足りないぞ！」

お米だとお前の名前、お米太郎になるぞ？

「アンタは山倉と組んで、おねブルの話で盛り上がってろ」

邪魔だと言わんばかりに米太郎を山倉に押しつける水川。それはちょっとあんまりじゃないか？　せっかく米太郎も厚意で参加してくれているのに。ま、そんなことは口には出さず、ただ傍観しかしないけどね。

「じゃあ、よろしくな山倉」

「おう！　おねブルについて朝まで語り合おう！」

あ、それはそれでいいのかよ。もっと抵抗すると思ったんだけど。

「私は矢野ちゃんと組んで、一年男子同士で組むから……兎月と桜が余っちゃうね～」

なんだその仕方ないね、みたいな顔は。全部水川の采配じゃないか。どうしてそんなに俺と火祭をくっつけたがる。

「よろしくね」

ニッコリ微笑む火祭が最高に可愛いんで良しとしましょう！

「じゃあ、今から一時間頑張りましょう」

俺の合図とともに二人一組になって散っていく。俺と火祭も箒を持って移動する。俺達の担当区域は体育館の裏側だ。意外と広いのだが、日陰になっていて人目につかない場所でもある。だからといって何かするわけでもないけどさ。俺って紳士である前にヘタレだもん。それに火祭は喧嘩が強いらしいから、もし仮に万が一、俺が襲ったとしても俺みたいな雑魚は瞬殺されるだろう。

「燃えないゴミの袋ある？」

「……あ、はい」

「ありがと」

……そっか……そういえば火祭って……。今よくよく考えると火祭が恐がられていた原因は火祭が強いことに依存しているらしいけど……俺は火祭のそういった姿を見たことがない。一体どれくらい強いのだろうか？

「ねぇ」

「…ん、どうかした？」

何か気になることでも？

「何か考え事？　ぼーっとしていたから」

「い、いや特には」

火祭ってどれくらい強いのかな？　と考えていたなんて本人に言え

るわけない。

「……本当？」

俺の返事に不信感を抱いたらしく、じりじりと俺に詰め寄ってくる火祭。そのアクション、水川にそっくりだよ……影響されたみたいだ。

「ほ、本当だって」

「嘘っぽいんだけど」

「ええと、その……」

接近する火祭。ちょ、そんな詰め寄らないで。迫りくる水川2世から逃れるため後ずさりする。と、足がもつれてしまった。

「うあ！？」

「え？」

そしてその足が火祭にも引っ掛かって、二人ともバランスを崩す。大きな音とともに背中に痛みが走る。ぐあっ……どうやらコケたらしく、俺は地面に倒れこんだ。背中が痛い。そして草の匂いがする。ああ、大地に帰った気分。

「いててて……て……って！？」

それに巻き込まれたらしく火祭が俺の上に乗っかるようにして倒れていた。……傍から見れば火祭が俺を押し倒しているように見えるのかも。い、いや……それより……こんなトラブルあるのかよ！？

何このドキドキな状況！？　男女二人が人気のない体育館裏で倒れこむなんて、ありえないでしょ。こ、こんなのラブコメ的展開だ

よ。漫画の読み過ぎだ。これっていちご何%だよ!?　いつから俺はラブコメ主人公になった!?　いーや、なっていない奉り候ふ。

「ご、ごめん火祭」

「……」

む、無言。もしかして怒ってる？　はわわわ、ヤバイよ火祭に嫌われちゃう！

「わ、悪気はなかったんだ。いやマジで。ご、ごめん！」

「う、うん」

顔を真っ赤して火祭が頷く。きっと俺も真っ赤なんだろうな。耳がすごく熱い。抱き合っているみたいな格好のまま俺達はピクリとも動けなかった。ヤバイ、こんな姿を誰かに見られたら……

「きゃっほ～将也ぁ！　お楽しみのところ邪魔するぜぃ」

ぐあああああぁぁ!?　米太郎ぉ!!　なんつータイミングで現れるんだお前は!?　体育館の影から勢いよく登場した米太郎。そして俺達を見てフリーズした。米太郎自身も冗談のつもりで言った台詞がまさか実際に起きていようとは想像していなかったみたいだ。目は大きく見開き、口はパクパクと金魚のようだ。

「……ま、マジでお邪魔みたいだから退散します……きゃあああっ」

驚愕で歪んだ顔を無理矢理動かし、カクカクとした口調でそれだけ告げると米太郎は体を反転、猛スピードで消えた。

「ちょ、待て米太郎！　ご、ご……誤解だー！」

俺の叫びは放課後の空にこだました。

第27話　米太郎は語る

「あー……疲れた……いやホントに」

火祭とのラブコメ的イベントを米太郎に目撃されたが、なんとか誤解を解いて掃除を開始。さっきまであんなに密着していた相手と二人きりでいるのは非常に気まずいが、そこはテンションを上げて吹き飛ばす。それでもやっぱ気まずかった……つーかお互いに恥ずかしくて顔も合わせられなかったよ。おかげでいつも以上に疲れた掃除となった。あー、しんどい。そしてよくよく考えると、人気のないところで掃除しても誰も見てないから火祭のイメージアップにはならなかったな……もう何なのさ！

「休憩なー」

「あ、お疲れ様です」

「休憩だぁ！　疲れたー！」

皆に休憩を呼びかける。良かった……皆のリアクションを見る限りだと米太郎の馬鹿は誰にもさっきの出来事をバラしていないみたいだ。もしバラしてみろ……俺はまだしも火祭のイメージダウンに繋がるかもしれん。その時は顔面をめちゃくちゃになるまで殴ってやるからな。

「あー……ホントのホントに疲れた」

中庭でまどろんでいると、数メートル先から缶ジュースが飛んできた。

「あっぶね」

なんとかジュースをキャッチする。投げてきたのは……米太郎。

「ナイスキャッチ。そんな感じで火祭のことも受けとめたのかな？」

ムカつく。この馬鹿は俺のことをからかっているようだ。米太郎のどや顔がムカつく。もう一度言おう、ムカつく。顔面めちゃくちゃになるまで殴ってやろうか。

「……」

「おいおい、無視するなよ～。分かってるって事故なんだろ」

「だったら掘り返すな」

しかもこいつアセロラジュースをよこしやがった。俺が嫌いなのを知っているなら完全なる悪意なんだが。

「あっ、すまん将也。ジュース間違えた。将也はこっちのメロンソーダだった」

これは普通に間違えたようだ。米太郎とジュース交換。くあ～、やっぱメロンソーダ最高っ！　そしてジュース一杯で機嫌良くする単純な俺。

「それにしても、お前よく無事だったな」

「は？　何が？」

「事故とはいえ火祭に抱きついたんだろ。よく殴られなかったな」

……ちっ……この馬鹿はまだ勘違いしているのか。火祭が暴力的だというのは噂が作り上げた虚像だ。本当の火祭とはかけ離れている。再三言ったが火祭はそんな暴力的じゃない。いつまでもお前の

過去の物差しで火祭を計るな。

「この勘違い馬鹿野郎みたいな目で見てくるなよ～。俺が言いたいのは普通に誰だって突然抱きつかれたりしたら相手を突き飛ばしたりするだろ？　火祭の腕っ節が強いのは事実なんだし、それでよく無事だったな。という意味さ」

「まぁ確かにな。そりゃあそうだよな。火祭だって、好きでもない男子の俺なんかに抱きつかれたら、びっくりして何らかの抵抗をするよな」

「前半部分はバツだが後半はマルだ。そうだろ？　特に火祭は強いからな」

「……それで思ったんだけどさ」

「ん？」

周りに火祭の姿はない。先程、水川と一緒に校内へと消えていったのを目撃した。なら今がチャンスだ。ここで米太郎に聞いておくか。

「火祭ってそんなに強いのか？　俺は実際に見たことないから分からないんだよ」

「……将也、前にも言ったと思うがな」

さっきまでのニヤケ顔が消えて真剣な顔つきになった。アセロラジュースを一口啜り、ゆっくりと腰を下ろす米太郎。目を閉じ、そして低い声で語りだした。

「激強だ。間違いなく最強だ。これは比喩でもなければ大袈裟に言っているわけでもない。本当に火祭は強い。確かな情報によると火祭は幼少期から道場に通っていて今ではありとあらゆる武術を修めているらしい。ついた異名が『武術王・火祭』だ」

前半部分はマルかもしれないが後半は絶対にバツだ。なんだよ武術王って。

「お前はそんな風に言うけどさ、やっぱ俺には信じ難いよ……。どの角度から見ても、鏡越しに見ても火祭はただ普通の可愛い女の子じゃないか」

「鏡越しで火祭見たことあるのかよ。う～ん、そうだよなぁ……高校生になってから火祭が暴れているという噂は聞かなかったし。火祭も中学の時とは違うんだろ。でも俺は中学の時、火祭にボコボコにされた。だから火祭が強いのは確かだ。ボコボコにされた俺が保障する」

そう言って米太郎はまたアセロラジュースを啜る。そんな不味いジュースよく飲めるな。にしても……本当に火祭が強いとはな……あんな可愛い娘がそんなわけないと思うんだけど。

「ん～……そうなのかな……」

「……あとな、将也」

「ん？」

「噂が真実であろうと嘘であろうとそんなの関係ない。噂は噂なんだよ。それがそのまま本人のイメージを固定し、投影する。火祭が凶暴という噂は真偽の確認を通さずに火祭のイメージを作り上げるんだ。人が勝手に、噂を全部信じて、さらに嘘を塗り固めて……。それは本人がいくら否定しようと壊れない堅固な壁となる。本人を閉じ込める鉄壁になってしまうんだ」

びっくりした。米太郎が真面目なことを言ってきた。キャラじゃないキャラじゃない。

「嘘の噂で作り上げられた壁。閉じ込められた本人がいくら叩いて

も壊れない非情で理不尽な壁。……でもな、その理不尽な壁は内からの攻撃には強いけど外側から叩けば簡単に壊れるんだ。第三者が噂を否定すれば噂は消えるんだよ。一人が壊し始めたら他の人もそれに続く……そしていつしか嘘の壁は完全に壊される」

「あの……すげー真剣な表情のとこ申し訳ないが何が言いたいんだ？」

米太郎の話の主意が見えてこないんだが。何を言ってるのやら。だから米太郎らしくないって。もっとボケようよ。

「壁を最初に叩いた奴……それはお前だってことだ」

「は？」

「お前が火祭のイメージを変えようと始めたこのボランティア活動。それが火祭が凶暴だという嘘の壁を壊したんだよ。実際どうだ、たった二週間で周りの奴らが持つ火祭の印象はガラリと変わった。外側から叩くと壊すのは容易なんだよ」

「火祭のイメージが変わったのは火祭が頑張ったから」

「違う。変わったのは……いや、変われたのは将也が頑張ったからだ。俺もお前のおかげで火祭の印象変わったもん」

だから俺は手助けしかしてないの。火祭の印象が変わったのは火祭自身が本気で変わろうとしたからだ。俺はその後押ししか出来なかった。

「将也、お前がどう思うと関係ない。だけどな火祭は間違いなくお前のおかげだと思っている。お前に感謝している。お前がいたからだと絶対に思っているはずだ」

……そうなのか？

「火祭を支えられるのはお前だけだ。だからどうか火祭のことを大事にしてやってくれ。よろしく頼む」
「お前は何様だ。火祭のお父さん気取りか。最後の最後でふざけたな米太郎」
「俺が真面目なこと言うのは似合わないからな～」

いつものようなニヤケ顔に戻った米太郎は立ち上がる。目を細めて遠くを一度見つめ、再び俺へと視線を戻す。

「とにかく俺の言いたいことは伝えた。どう行動するかはお前次第だぞ」
「……何がだよ」

どうして……なぜ米太郎がこんなことを言ったのか。俺には分からなかった。

第２８話　ナンパ襲撃

夕日が校舎を茜色に染める中、ボランティア部は中庭に集合していた。やっと全ての掃除が終わり、皆もどこか誇らしげな表情を浮かべている。要するにどや顔ってこと。そんな俺もどや顔で皆を見つめる。

「よし、皆お疲れ様。顧問への報告ついでに後片付けは俺がやっておくから皆は帰っていいよ」

「しゃあ！　佐々木、今から一狩りしようぜ！　兎月も来いよ！」

山倉よ、俺の話聞いてたか？　俺は今から後片付けするんだよ。狩りなら米太郎と二人で行ってこい。

「じゃあ解散……ん？　そういえば矢野がいないな」

今更ながら一年部員の矢野がいないことに気づいた。おかしいな…さっきまでいたはずなのに。矢野は普段から俺のことを先輩として敬っていない。なんと礼儀を知らない後輩だろうか。もしかして俺の話なんか聞いてられるか！　とか言ってもう帰ったんじゃ……。

「矢野ちゃんはゴミ捨てに行ったよ」

水川が応答してくれた。それなら今はゴミ捨て場にいるのだろう。良かった良かった。

「分かった、矢野には俺が伝えておく。じゃあ解散」

俺の解散の合図とともに皆は鞄を持ってダラダラと校門へ向かって

行った。今日までご苦労様。来週からは試験勉強を頑張ってくれい。残ったのは俺と水川と火祭。

「水川と火祭も帰っていいよ。箒とか掃除道具は俺が片付けるから」
「じゃあ悪いけど兎月と桜に任せるね。お疲れ～」

水川よ、俺の話聞いてたか？　俺一人で十分なの。なんだこれ。どうしてこの部には話を聞かない奴しかいないんだよ。この部をまとめれる自信が私、次期部長にはありません。

「手伝うよ」
「大丈夫だって。顧問に報告するついでに掃除道具を運ぶし、さらにそのついでに矢野も呼んでくるよ。その間に矢野が戻って来て、すれ違ったらいけないから火祭はここで待ってて」
「うん、分かった」

おお……火祭、話聞いてくれてありがとう。山倉と水川とは大違いだよ。

「じゃあ行ってきまーす」
「行ってらっしゃい」

火祭を残して俺は掃除道具を両手に抱える。このくらい持てますって。段々と黒い影に飲まれつつある渡り廊下を一人歩く。おぉ、夕日が沈みつつある。この時間になると校舎内にいる生徒はほんの一握りだろうな。

「あ～……眠たい」

渡り廊下を通過して誰もいない静寂に包まれた中央階段に足をかけ

る。ここを上がって少し歩けば用具入れに着く。そこで掃除道具を戻して、そのまま流れるようにゴミ捨て場に行って矢野と会って、そこから職員室に下りていけば……ん？　何か聞こえてくる……人の声かこれは？　まだ残っている生徒がいるのか。とりあえず階段を登らないと。上の方から声が聞こえてくる。

「君、可愛いね」
「ねぇ、いいじゃん。ちょっとカラオケに行くだけだからさ」
「や、やめてください」

声は階段を登りきった広場から聞こえる。俺はまだ階段の中間地点だったが、ここまで声が響く。誰もいない学校って声がよく聞こえるからな。ま、それがどうしたって話だけど。生徒の他愛の無い話だろうし、聞き耳立てるのもよくないし。無視だな。

「ほらぁ恐がってるじゃん。君、一年生だよね。そりゃ知らない男達から声かけられたら恐いよね～」
「でも安心して。俺らはただの寂しがりなお兄さんだから。ちょっと相手してくれたら、すぐ帰らすからさ」

階段を一段ずつ上がる毎に声が鮮明になって聞こえる。いかにもガラの悪そうな声だな。しかも複数人いるみたいだ。無視しようと思ったけど、聞いているうちに何か変な胸騒ぎがしてきた。これって何やら揉め事の感じだよな。

「あ、あの……その……」
「大丈夫だって～。ひどいことはしないからさ～」
「だははっ、お前が言っても説得力ねーっての」
「いいじゃん、遊ぼうよ」

階段を登りきる。中央広場は階段と同じように影で覆われていた。遠くのグラウンドで光を放つ照明のコントラストでより濃く感じる。一体どこから声がしていたのか……

「あ？」

あ、いた。そして声がした。俺の気配を感じたのか、広場の隅から視線が感じる。こちらを見ている……微かな夕日が差しかかる中、目を凝らして相手を見つめる。三人の男と一人の女子……ってあれは、

「矢野」

「と、兎月先輩……！」

探していた矢野がいた。三人の男から逃げるようにして矢野はこっちに駆け寄ると俺の後ろに隠れる。背中を掴む矢野の手から震えが伝わってくる。何があったんだ……？

「あれれ？　もしかして彼氏さん？」

三人組の一人が話しかけてきた。よく見るとうちの学校の制服じゃない。他校の奴だ。なんで他校の奴がうちの学校にいるんだよ。

「彼氏いたのかー。でもいいじゃん。カラオケだけなら彼氏も許してくれるよ」

「そうだろ？　彼氏さん」

おいおい、三人組がこちらに接近してきたぞ。背中にしがみつく矢野の震えがより一層増す。大丈夫か矢野？　距離は二メートル程。近すぎず遠すぎず。ここまで来たら顔もはっきりと見える。右から

順に茶髪で耳ピアスをした奴とロングの黒髪に金色のメッシュ、そして眉なし短髪男だ。うわっ、こいつら不良みたい。つーか不良じゃん……恰好といい態度といい全てが不良スタイル。あっ……そういえばホームルームで担任が不良に気をつけろとか言ってたな。というかなんで他校の不良がここにいるんだよ。

「この娘の名前なんて言うの？　教えてよ彼氏さん」
「ついでに番号も」
「だからお前図々しいっての」

チャラチャラしたやりとりを始めた不良達。右から順に不良A、不良B、不良Cと名付けよう。ベタベタな不良だな、非常に居心地悪い。こっちがホームなのにアウェイの不良達の雰囲気に飲みこまれそうだ。

「……矢野、大丈夫か？」

不良達に聞こえないよう小声で呼びかける。矢野は相変わらず俺の背中にしがみついている。すごい震えているけど、もしかして……

「だ、大丈夫です。階段を下りようとしたら急に肩を掴まれて、それで……」

矢野の弱々しい怯えた声。不良にカラまれたのか……なんてことだ。恐かったんだな。そりゃこんなコテコテ不良にカラまれたら俺だったら泣いてるよ。すぐにルーラを唱えるね。しかし今は違う呪文を唱えなくては。

「矢野、気づかれないように階段を下りろ。俺があっちの注意を引くから」

まずは矢野を逃がさないと。可愛い後輩を守るのは先輩の役目。矢野をそっと後ろに押し出す。さあ逃げて。

「なー、ちょっと遊ぶだけだからさー。せっかくだしプリクラも撮ろうか？」

「あ、俺あの子と二人で撮りたい」

「それだったら俺も～」

にしてもこいつらホントに典型的なタイプの不良だな。俺のことなんか無視してるし。これなら矢野も逃がしやすい。

「あ、どこに行くんだよ！？」

いきなり不良Ｂが声を荒げる。ヤバ、気づかれた。俺も後ろを振り返る。見れば矢野は階段を下り始めていた。よし、そのままエスケープだ矢野！

「逃がすかよ」

追いかけようとする不良ども。はぁ、こんなの最悪としか言いようがないぞ。しかしここでこいつらをみすみす行かせるわけにはいかない。

「はい！　ちょい待って。ストップストップ！」

俺が止めるしかないよね。不良達の前に立ち塞がり行く手を阻む。いやいや……正直めちゃくちゃびびってますよ！　けど可愛い後輩のためなら盾とならなくては。

「あぁ？　邪魔すんなよお前」

ほら～、すぐ睨んでくる。恐いんだけど。だから不良は嫌なんだよぉ。ちょっと目が合っただけでガン飛ばしてくるし、すぐ威圧オーラを出してくるし。

「まあまあ、ちょっとね？　事情を聞いてもらえないかなー、なんて。実はさっきの女の子は俺の後輩なんだ。すごい人見知りするから、そっとしておいてくれないかな？」

「そんなこと聞いてませ～ん。俺らはあの子と遊べたらいいんだよ。彼氏じゃないならでしゃばるな」

ちょ、顔近づけないで。圧力で押し潰されそうだから。タバコの臭いするし……ホント典型的タイプだなこいつら。

「というか他校の生徒がなんでここに？　ナンパなら駅前でやったらどう？」

至極尤もな意見を提示する。

「うるせえ。テメーに言う義理はない」

そーですか。そう言うと思ったけどさ。さっきからこの三人すげー威圧してくるよ。そんな顔を近づけられたら、こっちはのけ反るしかないじゃん。つまり俺は圧倒的に押されている。

「分かったらそこどけよ。あの娘追いかけないといけないから」

「いや……何も分からなかったんだけど。納得する理由があるなら聞かせてほしいんだけど」

ほら言ってみろよ。ただのナンパに理由なんかあるならな。そしてこうしているうちに矢野が完全に逃げ切ったはずだ。ざまーねーな不良ども。

「だ～か～ら！　お前には関係ないだろうが」

「さっきの子は部活の後輩なんだって。関係あるだろうが。守って何が悪いの？」

なんか段々とイラついてきた。へぇ、ヘタレの俺でも不良と睨み合えるんだな。頑張れ将也。ファイトだ将也。

「なんだその態度。やっちまうぞ、コラ」

そう言って不良Ａは胸倉を掴んできた。でたよジャイアニズム。なんでも暴力で片付けやがって。人が人を殴れる理由を知っていないのかよ。それは人を傷つけるためではなく、人を守るため。だから人は強くなれるんだよ。守る人がいるから人は自身の拳を振るうことができるんだ。決して自分勝手な暴力のためにではない。おお、なんか哲学的なこと言ったな。すごいぞ俺。そして胸倉を掴まれた拍子に両手に抱えていた掃除道具を落としてしまった。おいおい、拾うの大変だぞこれ。あーあー、壊れていないといいけど。

「このっ、こっち向きやがれ！」

不良Ａの叫び声が俺の意識を戻してくれた次の瞬間、強い衝撃が左頬を襲った。耳から音が一瞬消えて、視界がブレた。頬骨が内部でズキズキと痛み、急速に熱がこみ上げてきた。……不良Ａが殴ってきたのだ。

「ぐっ」

バランスを崩してよろける。ヤベ、俺の真後ろって階段……！　咄嗟に手を伸ばして助かった。闇雲に伸ばした右手は運良く階段の手摺りを掴んだ。おかげで殴られた勢いは横へと逸れて背中が壁にぶつかる。がっ、これはこれで痛い！　そして左頬も痛い。異様な熱が頬を襲い、感覚からして腫れているようだ。

「いってぇ……いきなり殴ってくるかね！？」

手摺り掴めなかったら頭から階段の角に落ちていたかもしれないぞ！？　死んじゃうって。何気に九死に一生！？　とんでもねーよ……。

「うるせえ。テメーが生意気だからだ」

生意気なのは思春期で顕著に見られる現象だ。偉大なるルソーさんが言ったのだからそうに違いない。いや、ルソーと会ったことないけどさ。とにかく生意気だっていいじゃないの。思春期だもの。

「だから無視すんなやぁ！」

ぐえっ、不良Ａの追撃。俺の胸倉を掴んで広場へと叩きつける。階段じゃ危ないと思ったのか。不良にしてはなかなか良識があるようだ。

「上等だ。ボコボコにしてやる」
「覚悟しろよ」
「俺達怒らせると恐いよ～？」

不良ＡＢＣが俺を取り囲む。……あ、これリンチだ。私刑ルートだ

なこれ。浅い人生経験と第六感が告げている。これはヤバイと。

「おらぁ！」

そして始まる蹴りのラッシュ。ぐっ……マジで蹴ってきやがる。恐くて目が開けられない。やたらめった乱暴な蹴りが俺の体を無差別に襲い続ける。

「がっ、げほっ」

がはっ、執拗に蹴ってきやがって……マジで痛いわ。こいつら手加減とか知らないのかよ……体中が悲鳴を上げてるって。

「オラオラ！　さっきの威勢はどうした」
「後輩の女の子守るんじゃなかったのか？」
「キャハハハ！　だっせー」

蹴りに混じって三方から聞こえる下品な声。これだけ騒いでいて誰も気づかないのかよ。敷地内で生徒がリンチに遭っているってのに……ぐっ……これマジでヤバイ。痛みと恐怖が体と頭を痛めつける。病院送りされるんじゃ……このまま死んでしまうのでは……不吉なイメージが頭をよぎる。勇気を出して目を開くと……薄暗い空に浮かぶ三つの顔。どれも厭らしい汚い顔しやがって。本格的にヤバイな……意識が遠退いてきた。痛い、とにかく体中が痛い。薄れゆく意識……微かに映る視野が捉えたのは一つの顔が消えたことだ。

「ぐえっ！？」

……え？

止まる蹴りのラッシュ。そして静寂。焦点が定まらない視界で見え

たのは不良A、Cの驚く顔。それと地面に大の字で伸びている不良B。そしてそれら全てを置き去りにしてこの空間に君臨する一人の女子。赤みがかった長髪が宙を舞い、グラウンドの照明が逆光となって顔はよく見えないが、その姿には見覚えがあった。

「火祭……？」

第２９話　血祭りの火祭

「ど、どうしてここに……？」

な、なんで……なんで火祭がここにいるんだよ。下の中庭で待っていたんじゃ……。

「あぁ？　誰だテメー」

不良Ａが火祭を睨みつける。しかし火祭は一切動じない。冷たい目で不良を睨み返す。

「ほらケンゴ、さっさと起きろよ。いつまで寝てるつもりだ」

不良Ｃはケンゴこと不良Ｂに近づくが不良Ｂはピクリとも動かない。体を揺さぶる不良Ｃ。何の反応も示さない不良Ｂ。

「おい、ふざけるなよケンゴ！　ただが女の蹴り一発でダウンとかギャグでも面白くねーぞ」

不良Ｂの上体を無理矢理起こすＣ。いや……ケンゴ君…だっけ？白目剥いてるけど……。白目を剥いて口は半開き、両腕はダラリと垂れ下がっている。

「け、ケンゴ？」

不良Ｂの異変に気づいたＡとＣは顔を歪めてお互いに見つめ合う。不安げな瞳を振り払い再度火祭を睨む不良達。

「お、お前誰だ……あっ！」

頓狂な声を上げたかと思いきや不良Ａは後退りする。さっき以上に顔が歪んでいる。

「こ、こいつ……火祭桜だ！」

「ひ、火祭！？　あの『血祭りの火祭』の異名を持つ噂の！？」

不良Ｃも大声を上げ、不良Ｂを捨てて火祭から離れる。またも訪れる静寂。辺りを一睨みして、不安げな表情を浮かべて俺に駆け寄ってきた。それを見て不良Ａが慌てて俺の傍から離れる。

「大丈夫？」

火祭は俺の上体を起こして俺の腫れた左頬に右手を添えてくれた。ひんやりして気持ちいい。頬の熱が冷めていく感覚がくすぐったく感じた。

「げほっ、げほっ……お、俺は大丈夫。それより矢野はどうした？　会ってないか？」

「矢野さんは先に帰ってもらった、ってそれより君は自分の心配をしないと」

腹とか背中とか体の節々が痛むけど……なんとか大丈夫。とにかく矢野が無事で良かった。いててて……。

「っ、俺は大丈夫だって」

「……本当に？」

そ、そんな詰め寄らないでよ。心配そうな火祭の瞳に映る俺の情け

ない姿。ボロボロでなんて不様なんだ。

「大丈夫だって」

無理に笑顔を作って見せる。が、体中が痛いので満足に笑うことなんてできない。痛みで顔が引きつっているのが自分でも分かる。これじゃ信じてもらえないかもな。俺の予想通り、火祭は悲痛な表情を浮かべる。

「ここで休んでいてね」

もう一度俺の頬を撫でて火祭は立ち上がる。ゆっくりと。瞳を閉じて。その瞬間、火祭の纏うオーラが変わったような気がした。さっきまでの優しい温もりは消え、ひどく冷たく肌を突き刺すような空気が伝わってくる。

「お前ら……よくも私の大切な友達を傷つけたな」

火祭……怒ってる？　俺がボコボコにされたことに怒っているのか……。閉じた瞳をゆっくりと開く。憤怒に満ちた、どす黒く光る目が激しく燃え上がっている。

「ひぃ！？」

「び、びびるな！　ケンゴは不意打ちでやられただけだ。二人がかりでかかれば倒せるはずだ」

まるで自分に言い聞かすように不良Ａは叫ぶ。

「お、おう」

不良Ｃも立ち上がって火祭に接近する。火祭の前に不良Ａ、後ろに不良Ｃの挟み撃ち。なっ、ふざけるな。火祭は女の子だ。喧嘩なんてさせるわけにはいかない。ましてや一対二だなんて。危険すぎる。

「俺が守らないと……ぐっ」

全身がひどく痛み立ち上がることすらままならない。ふ、ざけんな……！　俺が守らなくてどうする！　動け俺の四肢！　痛いだなんて思うな！

「私は大丈夫だから」

しかし火祭が諭すように言った言葉に思わず動けなくなる。体から力が抜けて地面に倒れてしまう。なんてみっともない……ここで見ることしかできないのか俺には……！

「お前らの相手は私だ。その人に手を出すことは許さない」

火祭はそれだけ言うと鋭い眼光で不良ＡＣを交互に睨みつける。そして静寂。空気は張りつめて誰一人として動かない。不良Ｂは気絶し、俺は地面にのたれ、ＡとＣはためらい、火祭は二人を睨む。

「……」
「……」
「……」

何時間にも感じられた数秒の空白の後、

「うおおぉぉぉ！」

右腕を大きく振りかぶって不良Ａは火祭に突進する。不良Ａの拳が火祭の眼前に迫る。ま、まずい……火祭が危ない。

「ひ、火祭！」

しかし火祭は半歩身を引くだけでパンチを躱して素早く不良Ａの懐に入る。次の瞬間、

「がっ！？」

キレイなくの字の形に曲がって不良Ａの体が宙を舞った。火祭の拳が不良Ａの腹を撃ち抜いたのだ。凄まじい轟音が一気に跳ね上がり、空気が乱れる。

夜天・真空極拳流『昇竜烈波』

俺の頭に技名が浮かぶ。こんなカッコイイ技名だったらいいなという願望。丸々一秒間、空中に投げ出された不良Ａは勢いよく地面へと打ちつけられて倒れこむ。腹を抑えて悶えているのを見る限りだと、まだ意識はあるようだ。

「う、うわ」

不良Ｃが叫び終わる前に火祭はすでに動いていた。視界が捉えたのは微かな影のみ。またもや簡単に懐に入ると不良Ｃにも『昇竜烈波』を放つ。

「ぐっ！？」

Ａ同様Ｃも空中に浮かぶ。が、今度はそれで終わらなかった。火祭

は不良Cの胸倉を掴んで、地に引き戻す。息つく暇もなくその直後にはローキック。それは俺が毎日のように春日から食らうローキックとは次元が違った。刃物のように光ったと思いきや、右足の鋭いローキックは不良Cの左足どころか右足をも巻き込んだ。まるで棒のように倒れこんだ不良C。何が起こったか分からず、ただ呻き声を上げるのみ。地面にうずくまる不良Cをまた持ち上げると火祭は一歩踏みこみ、右拳を握りしめて……

「ぐへっ！」

音速の如くハイスピードで右ストレートが炸裂。不良Cの顔面を捉えた。モロに食らった不良Cは一回転して今度こそ地面に沈む。そしてピクリとも動かなくなった。

「なっ……！？」

信じられない……開いた口が塞がらないとはこのことか。不良Aが叫んだゴングから一分も経っていないのに火祭は二人相手に秒殺を決めたのだ。つ、強い……それは少し腕に自信があるとか空手をやっていたなんてレベルじゃない。ただただ強い。それ以上でもなければそれ以下でもない。ただ本当に強い。それしか形容の仕様がない、冠絶した圧倒的な強さ。初見の俺だが、火祭の強さははっきりと分かった。この一瞬、この目の前で痛切に理解できた。米太郎の言っていた通りだ……火祭は本当に最強の名にふさわしい力を持っていたのだ。

「火祭……」

不良Cを一瞥して、火祭は嗚咽の止まらない不良Aに近づく。地面に這いつくばり、悶え苦しみ呼吸すらまともにできない不良A。死

にかけの虫を見るような目で火祭は不良Aを見下ろし、冷たい声を浴びせる。

「おい」

「っ…げほっ、が……がはっ……はっ、ぁ……」

「お前は手加減しておいた。そこの二人を連れて、さっさと立ち去れ」

「がぁ……ぉ、おえっ……は、はいぃ！」

手足を懸命にばたつかせ震える足でなんとか立ち上がった不良AはBとCを両肩で支えつつ引きずりながら必死になって逃げていった。その恐怖で引きつった顔に俺は見覚えがあった。……火祭を見た時の遠藤の表情とまったく同じだった。火祭のことをまるで怪物のように見る怯えた表情。ただ恐怖のみで歪んだ顔……。

「……」

「げほっ……火祭……」

辺りは静かになり、夜風が肌に吹きつける。すでに日は沈み辺りは暗闇へと飲まれつつある。その中で一人立つ火祭。顔を背けていて表情が全く見えない。

「火祭……？」

しかし火祭は俺と顔を合わせてくれない。何も答えてくれない。無言、静寂……な、んで……？

「ひまつ」

「うわあぁぁ！？　あの火祭が暴れてるぞ！」

俺の声はグラウンドから聞こえる声に掻き消された。声の発生源、グラウンドには練習用ユニホームを着たサッカー部員の姿が数人確認できる。こちらを見て騒ぎ立てている。くそ……今更気づきやがって。

「おいおい誰を血祭りにあげたんだ？」

「馬鹿っお前。聞こえたら俺らが血祭りにされるぞ」

「目が合っただけで殴りかかってくる鬼のような悪魔だぞ」

!?　なっ、あいつらデタラメをベラベラと……！　火祭のイメージは変わったんじゃないのかよ……くそっ……さすがに全生徒までには浸透しきっていなかったか。変わってきたと思ったけど、まだ完全には変わりきってないのか。なおも好き勝手火祭の悪口を垂れ流すサッカー部員ども。や、めろ！

「くそっ、勝手なこと言いやがって……やめろお前らげほっ、がはっ」

痛ってぇ……大声出したら咽せてしまう。肺に息が詰まり、うまく呼吸ができない。さっきの不良ども手加減なしに蹴りやがって……声が……。

「ん？　火祭の横に誰かいるぞ」

「おい、そこのお前！　危ないぞ、殺されるぞ！」

「いや、もうボロボロだぞ。可哀想に……」

勝手なこと言ってんじゃねぇ。火祭はそんな狂暴じゃない！　火祭はむやみに人を傷つける奴じゃねぇんだよ！　噂を鵜呑みしやがって。

「火祭、気にする、な……っ！？」

振り向くと火祭の横顔が見えた。影に埋もれた表情……その表情にも見覚えがあった。あの日、宿題を手伝ってもらった日。クラスメイトの遠藤を含むテニス部と会って、火祭を見るや否や一目散に逃げ出したテニス部。そしてそれを悲しげな表情で見つめた火祭。あの表情とまったく一緒だった。すごき悲しげで悲痛でこっちまで悲しくなる表情……っ、なんでだよ。…そんな顔してほしくないから……笑っていてほしいから今まで頑張ってきたのに。こんなのって……！

「火祭！　そんな顔するなって」

お前のせいじゃないだろ。あいつらが何も分かってないから。なら俺が分からすからさ！　お前のこと理解してもらうから！

「なあ火ま、つ……り……」

火祭の両肩を掴んで視線を合わせようとするが、それでも火祭は目をそらす。目を合わせてくれない。視線を暗い影に落とすばかり。

「見たでしょ……私が人を傷つけるところ」

「見たけどさ……」

「だったら分かるよね。私は恐がられているんだよ。あの人達の反応通りの……」

サッカー部の奴らのことなんて気にしなくていい。俺はそんな風に思ってない！　俺はいつでも火祭の味方だ。だから……だからこっちを見てくれ！

「違うって火祭。そんなイメージを変えるために毎日挨拶活動を頑張ってきたんじゃないか」
「それも意味なかったみたいだね。私は変われなかったんだよ。ごめんね……迷惑かけて」
「迷惑なんかじゃない！　なぁ火祭、そんな自分を卑下するなよ」
違う、違うんだよ。こんなことにならないために頑張ってきたのに！　なんでだよ……どうしてこんなことに……。
「聞こえないのかお前!?　早く逃げろって」
っ、まだあのサッカー部員は……！
「っるせえ！　少し黙ってろ！」
視線をサッカー部員に向けたせいで火祭が俺から離れるのを見逃してしまった。俺の手を弾き、再び俺に背を向ける火祭。肩が震えている……。
「火祭……？」
「今までありがとうね。こんな暴力的な私と仲良くしてくれて。すごい嬉しかったし、楽しかった」
な、何言ってるんだよ……なんでお別れみたいなこと言ってるんだよ!?　そんなわけないよな……なあ、火祭!?
「ひまつ」
「こっちに来ないで」

な、なんで……。

「私、恐がられてるのには慣れているの。今までずっとそうだったから。でも……でもね、君には……君だけには恐がられたくなかった。だから君に恐がられたら、もう駄目なんだよ。耐えられないの」

火祭……何勘違いしてんだ。俺が恐がっているとでも？　そんなわけないだろ！　俺を助けてくれたじゃないか。それのどこに恐がるってんだよ！

「それは違う！　火祭待っ」

「ごめんね。さよなら」

伸ばした手は届かず、火祭は暗闇へと消えていった。何も見えない真っ暗闇の中へ。

「火祭、待てよ！」

俺の叫びは暗闇に飲みこまれただけで返事は返ってこなかった。喉は枯れ果て、体は痛み、後ろから聞こえる雑音と眩しい光、それら全てが異様に冷たく感じた。

第３０話　続・米太郎は語る

翌日、朝の挨拶活動の開始時間になっても火祭は来なかった。間違いなく昨日の出来事が原因だ。

「ごめんなさい……私がカラまれたせいで」

「矢野のせいじゃないって。だからそんな落ちこまないで」

それでもまだ涙を流して謝り続ける矢野。他も皆もどことなく不安げな表情だ。こんな状態じゃ挨拶活動なんてできない。

「皆、今日の活動は中止にする。教室に戻っていいよ。水川、矢野に付き添ってやってくれ」

「う、うん」

「将也はどうするんだよ？」

米太郎も今日はわざわざ来てくれたのに悪いな。

「俺はもう少しだけ待ってみる。もしかしたら火祭が来るかもしれないし」

「じゃあ俺も」

「いや、俺一人でいいよ。こうなってしまったのは俺のせいだから俺がやらなくちゃ」

昨日、俺が不良達にやられなかったら火祭が手を出すことはなかったはずだ。そうすれば火祭は傷つかなくて済んだのに。俺が弱いせいでこんなことに……くそっ。

「……じゃあお前に任せた」

それだけ言うと米太郎は皆と一緒に校舎へと消えていった。米太郎も心配だろうが、これは俺の招いた事態だ。俺が責任を取らないと。

「……火祭……」

登校する生徒の波。必死に目を走らせるが火祭の姿を確認することなく朝の予鈴が鳴ってしまった。

「一組の担任に聞いてきたけど、桜は欠席だって」

「そっか……わざわざありがとう水川」

昨日から何度も電話したが、火祭は出てくれなかった。メールの方も音沙汰なし。全く連絡が取れない状態だ。

「こうなったら昼休みに火祭ん家に突撃訪問するしかないな」

「馬鹿か米太郎。誰も火祭の家の住所知らないだろうが」

「一組の担任に聞いたらいいじゃんか」

「今は個人情報がどうたらこうたらあるから教えてくれないかもね。ましてや私達はクラスが違うし」

水川の言う通りだな。これじゃ火祭と会う機会がないじゃないか。くそっ、無理矢理にでも住所を聞いて今すぐ行きたいくらいなのに。

「ところで将也」

「ん？」

「お前、怪我は大丈夫なのか？　さっき聞いた話が正しいなら不良にリンチされたんだろ」

「昨日までは体の節々が痛かったけど朝起きたら何ともなかったな」

確かに昨日は死ぬ思いだったが、幸い顔は蹴られなかったから外見だと無傷に見える。服の下にはアザがいっぱいできてしまったが、歩けないほどではないので問題ない。でもやっぱ痛かった。

「そっか」

「ああ」

「……」

「……」

「……」

……米太郎も水川も黙ってしまった。何か喋りたいけど伝えたい言葉が出てこない。ここで言えることなんて何もないし……火祭本人に言いたいことは山ほどあるのに……。

「……なんでだろうね」

水川……？　俯き、蚊の鳴くような小さい声で水川は喋りだした。

「私達は桜の本当の姿を知っている。だから他の皆にもそのことを分かってほしいから、これまで挨拶活動や掃除活動と頑張ってきたんだよね。皆と一緒に……桜と一緒に笑えるようにさ。順調だった

よね？　桜、変わってきたはずだよね？　それなのにさ……どうしてこんなことになっちゃったのかなぁ」

「うわぁ！？　み、水川何も泣かなくても……」

突然、水川が泣きだした。水川の涙が止まらない。ちょ、駄目だって。泣かないでよぉ！

「そ、そうだぞ。泣いちゃいかんよマミー」

「ぐすっ、マミーって、言うな」

「あー！　兎月と佐々木が水川さんを泣かしてるぞ！」

クラスメイトの一人の声にクラスにいる全員がこちらを見る。いやいや、俺達じゃないって！　まるで犯罪者を見るような目が俺と米太郎に集中する。

「ちょっと！　兎月と佐々木サイテー」

「真美、泣かないで。何されたの？　今すぐ真美から離れろ野菜コンビ！」

クラスから溢れんばかりの怒涛の罵詈雑言。そういや水川ってクラスの人気者だったな。可愛くて明るいし。その水川を泣かした俺らはまさに悪者。クラスのブラックリストに載った気分だ。というか泣かしてないし。

「俺達が泣かしたわけじゃない。つーかなんだよ野菜コンビって。米太郎はそうかもしれないが俺のどこに野菜要素がある！？」

「うるさい！　兎月にこれといって言う悪口がなかったからだ」

それはそれで傷つく！　俺にだって何かあるでしょうよ。探してみようぜ！

「いいから水川さんから離れろ！　水川さんを泣かした罪は重いぞ！」
「放課後のクラス会議でお前ら二人追放してやるからな！」
「最低！　真美～、大丈夫？　ああ、なんて可哀想なの……。最低！」

ぐおおおぉぉっ！？　完全に俺らが悪者じゃねーか。誰もこっちの話を聞いてくれない。好き勝手に俺と米太郎を責めたててきやがる。

「ちょ、待てよ。少しは俺達の話を聞いてくれ。俺達は何もやってないんだよ」
「黙れ！　いつも水川さんと一緒にいやがって。ムカつくんだよ！」
「ちょっとだけイケメンだけど何の取り柄もないくせによぉ。この地味男が！」
「おい今言ったの誰だぁ！？　地味じゃねーし！　あと、ちょっとイケメンって言ってくれてありがとう。何気に嬉しかった！」
「いいから早く真美から離れなさいよ、この虫食い野菜ども」

結局、俺は野菜コンビでまとめられるのね。

「ほぅ、虫食いとは最上級の褒め言葉だな」

黙れよ米太郎！　どーせ、野菜の虫食いはおいしい証拠とか思ってんだろ！

「だから、俺達は水川を泣かしてないの」
「野菜コンビが何言ってんのよ。信じるわけないでしょ！」
「そうだそうだ！」

うわぁ、誰も話聞いてくれない……。こうやって冤罪が生まれていくのか。はぁ、悲しいね。

「米太郎からも何か言ってくれよ」
「コンビの立ち位置、俺が下手(しもて)でいい？」
「お前も話聞け！」

一騒ぎも収まって昼休み。泣き止んだ水川がクラスの皆に説明してくれたおかげで俺達の濡れ衣は晴れた。まったく冗談じゃない。俺が女子を泣かすわけないだろ。女子に泣かされかけたことは多々あるが。主に春日。

「はぁ」
「どうしたよ将也。立ち位置に不満か？」
「違う馬鹿」

まずお前とコンビを組んだつもりはない。大人しく丸ごと野菜かじっとけ。くそっ、火祭に会って話したいのに……こんなことで時間を潰したくない。

「でもさ、見たろ？」

「は？　何が？」
「さっきのクラスの奴らの態度。俺らが水川を泣かしたわけじゃないのに俺らが泣かしたと勝手に決めつけて責める。いくら俺と将也が弁明しようと聞く耳をもたない。火祭の時と一緒だよ」
「……」
「いくら本人が否定しようと周りは誰も信じない。第三者が説明してやっと信じてくれる。さっきも水川が説明してくれたから皆もやっと理解したわけだしな」

……米太郎の言う通りだ。火祭の時も同じだった。俺達が火祭の悪いイメージを払拭しようとしたから、あんなにも簡単に印象が変わった。いや、変わりかけていた。昨日、俺が不良にやられなかったら……俺がもっとしっかりしていれば……弱くなかったら……！

「あのな、将也。お前ちょっと勘違いしているぞ。自分が弱いせいで火祭を傷つけてしまったとか思ってるだろ」
「え？」
「別に将也なんかに守られなくても火祭なら自分の身ぐらい自分で守れるさ。そうじゃなくて周りの持つ印象、評価による火祭に対する冷ややかな目。そんな火祭自身が守れないことから守れって言ったんだよ。意味分かる？」
「う、まぁ大体」
「火祭がお前から離れた理由……それはお前が火祭のことを周りの批難から守れなかったからだよ」
「なっ……」
「お前言ったよな。昨日、現場近くにいたサッカー部が火祭のことを恐がっていたって。それから火祭を守ってやるのがお前の役目だろ」
「そ、そんなこと分かってる」

なんだよ……

「あと最後に。これ一番重要な？」

なんだよ……なんだよ米太郎。お前に何が分かるってんだよ！？

「火祭はな、誰よりもお前から恐がられたくないんだよ」

……同じことを火祭本人も言っていた。俺には恐がられたくないって。それには耐えらえないって。

「だけど不良をボコボコにやっつけるところをお前に見られた。火祭は周りと同じようにお前も自分のことを恐がったと思ったんだろうよ」

「俺はそんなこと思ってない！」

「じゃあお前はそのことをはっきりと火祭に伝えたか？」

っ！　そ、それは……

「伝えていたなら、こんな状況になっていないよな。つまりお前は何一つ火祭を守っちゃいない。何一つだ。サッカー部からの非難も、そしてお前自身の気持ちからも火祭を守れていなかったんだよ」

「……」

俺は……俺はこれからどうしたら……。

「ったく。ここでうだうだ考えても仕方ないだろ。お前のできること、今からでもあるんじゃないのか？」

米太郎のいつになく真剣な眼差しが俺を貫く。

「こんなところで昼飯食ってる場合じゃないだろうが。思いつく限り心当たりのある場所探してみろよ」
「……あぁ」

米太郎の言う通りだ。こんなところにいる場合じゃない。俺にはすべきことがある。火祭に……火祭に謝らないと。そして……誤解を解くんだ！　俺は……火祭のことを恐れていないと！

「サンキュー米太郎」
「野菜コンビも悪くないだろ？」

まったくだ。米太郎とニヤッと笑い合って俺は教室を勢いよく出た。まずは図書室だ。待ってろよ火祭！　ぜってー見つけてやるからな！

キーンコーンカーンコーン

「おらぁ兎月、授業はとっくに始まっているぞ」
「……すいません」

米太郎とカッコイイやり取りをした手前、手ぶらじゃ戻れなかった

俺は学校のあらゆる場所を探し回った。それでも火祭はどこにいなかった。そして授業開始に間に合わなかった。なんて失態。

「……なぁ将也」

席に着くと隣の米太郎がものすごく真面目な顔をしていた。

「よくよく考えると火祭が休んでいる時点で学校にいないことは明白だったよな」

「じゃあなんで探してこいだなんて言ったんだよ！？」

「おらぁ兎月！　遅刻したうえに私語とは舐めた真似してくれるな。廊下に立っておくか！」

「すいませんっした先生！」

第３１話　無力と無気力

結局火祭と会えないまま土日が過ぎていった。毎日メールを送ったが返事は帰ってこないし電話も繋がらない。本当にもう火祭とは会えないのだろうか……。早く誤解を解きたい。火祭、俺は何も恐がっていないからさ。せめてもう一度だけ会えるなら、これだけは伝えたい。そんな気持ちで俺は登校しています。周りには同様に学校に向かう数多くの生徒達。その中に火祭の姿はない。くそ……いや、まだだ。もしかしたら、もう学校にいるのかもしれない。

「おっ、兎月」

それでいつも通り水川と楽しくお喋りしていてさ、また皆で一緒に昼ご飯食べたりするんだ。

「無視かー？」

米太郎がボケて、水川がツッコんで、皆で笑って……そうだよ……火祭の笑う姿。もう一度火祭の笑顔見たいな。

「……兎月ー」

「ん？　誰か呼ん、痛たたたたた！っ？」

誰かによって俺の首はロックされて締めつけられた。すげー痛い！　骨が砕けそうだあぁ！

「先輩を無視するとは偉くなったなー、兎月ー」

「その声は駒野先輩…って痛い痛い痛い痛い！　放してくださいよ！」

「ちっ」

ボランティア部の部長、駒野先輩は軽い舌打ちとともに腕の力を緩めてくれた。すかさずその腕を払って駒野先輩から距離を取る。この人に後ろをとらせたら危険だ。

「おはようございます先輩。三年生は朝の補習があるんじゃなかったんですか？」

「今日は中間考査の一週間前だぞ。朝補習はないんだよ。そういうお前はこんな遅く登校していいのかよ。ボランティア部の挨拶活動はどうした」

「中間テストの一週間前なので部活動は休止でしょ。だからないんです」

「そりゃそうだな。じゃ行こうぜ」

そのまま駒野先輩と登校することになった。別にいいですけど俺の前を歩いてくださいね。後ろは恐いんで。

「兎月、何か元気ないな」

「え……そ、そうですか？」

校門に差し掛かったところで駒野先輩が不意にそんなことを言ってきた。不意すぎてびっくりした。

「俺には分かるぞ。これでも部長だからな」

さ、さすが先輩。何でもお見通しって感じですか。ふぅ……先輩には適いませんよ。大人しく事情を話してみるか。何か力になってくれるかもしれないし。

「はい、実は」
「二年の火祭が不良とやり合ったことだろ」
「えっ！？」
そ、そんなことまで俺の表情を見ただけで分かったんですか……それはもうただの読心術じゃ……いや、それはそれですごいですけど。
「ど、どうしてそれを……！？」
「水川に聞いた」
……なら俺が元気ないことも水川に聞いたんでしょ。前言撤回、この人やっぱ適当だ。はぁ……じゃあもういいですよ。
「先輩に迷惑かけたくないんで、このことは追究しないでもらえますか？」
「もちろん」
「ですからこれは俺らの問題だか……え？」
今、なんて言いました？
「お前らの問題なんだろ？　俺が突っ込むべきことじゃない。というか突っ込みたくない。こっちは受験で忙しいしな～」
うわぁ……なんだよこの人。てっきり関わってくると思ったら、まったく興味なさげだし。やっぱり無気力なんですね……そうですか。
「じゃ、俺こっちの方だからー」
中央階段を下りて駒野先輩は俺と違う方向に歩いていく。

「受験勉強頑張ってください……」

別に先輩に相談する気はなかったけどさ、何かアドバイスとか教えてくれてもいいじゃないか。全くのノータッチだなんて……それはあんまりだろ。

「あ、兎月」

「はい？」

俺が振り返ると、いつにもなく真面目な顔の駒野先輩がいた。え……？

「俺は自主的に動かないだけで、お前らが呼んでくれたら微分・積分ほったらかしてすぐに駆けつけてやる。助けてほしい時は遠慮なく言えよ。必ず力になってやるからさ。それだけは頼りにしていいぞ」

「は、はい……」

「じゃあなー」

な、なんだよ最後はめっちゃ良い感じにしちゃって。いつもヘラヘラしてるくせに。でも……頼りしてます。

「ですから火祭さんに話したいことがあるので火祭さんの住所を教えてもらませんか？」
「それは急を要することなのか。そうじゃないだろうが。火祭からは風邪で休んでいると聞いている。試験前なんだ。安静させようとお前は思わないのか」
だから火祭は風邪なんかじゃねーの！　話聞けよ。
「試験一週間前に随分と余裕だな兎月は。うちのクラスに上がってくるのが楽しみだ。さあもう出てくれ。次の授業の準備で忙しいのでな」
「……ありがとうございました」
くそっ……くそくそくそぉ！　あぁもうなんて頭の固い奴なんだ！　一組の担任はうちの担任よりウザイじゃないか！　ちゃっかりと嫌味も言いやがってよぉ！　俺が一組に上がるだぁ？　そんなの無理に決まってんだろうがぁ！
「あ、将也」
「どうだった？」
「……駄目。全く教えてくれなかった」
教室に戻り、米太郎と水川に結果を報告。一組の担任に火祭の住所を教えてもらおうとしたが失敗。あの石頭教師が。成績のことしか頭にないんじゃねーの。
「桜、どうしてるかな……？」
「元気にしてるさ」
「……そうだといいな」

火祭は今日も来てなかった。先週に引き続き今日も休み。本当にもう会えないかもしれない。もう二度と……誤解されたまま。そんなの絶対に嫌だ。俺は火祭を助けたい。だから……だから俺は……くっ、何もできないのかよ。

「心配するな将也。絶対にチャンスは来る。まだ間に合うさ。そのためにも今は昼飯を食べようではないか」

そう言って米太郎は鞄を漁りだした。……火祭のことを考えると飯が喉に通らないっつーの。授業中だって火祭のことばっか心配してまともに聞いていないし。……火祭の……って、

「米太郎が……パンだと!?」

いつもの野菜タッパーを出すかと思いきや、なんと米太郎は焼きそばパンを出したのだ。完全に米派の米太郎が……。

「うお、珍しい」

水川も同じことを言う。珍しいというより米太郎がパンを食べるなんて初めてじゃないのか？

「これじゃあ米太郎じゃなくてパン太郎だね」
「はい言うと思った！　とても安易な発想をありがとう水川」
「どういたしまして焼きそばパン太郎」
「名前長くなった!?」

ほのぼのした会話してるなぁ水川と米太郎。いや～、ホントにほのぼの……してないよな……。どことなく空気ピリピリしているし、

やっぱり火祭のこと心配なんだな。米太郎だって火祭のことを心配しすぎて弁当忘れたんだろう。水川だってずっと携帯握りしめて火祭の連絡を待っている……と、俺のズボンのポケットから振動が……！

「っ！」

すかさずディスプレイを確認。火祭……？　火祭なのか！？

『新着メール　春日恵』

「なんだよっ！」

「うお、びっくりした。どうしたよ将也」

「なんでもない……ちょっと用事ができたから」

「また春日さんとお昼かよ。のんきだな～将也は」

米太郎が鋭い。なんでメールが春日からって分かったんだよ。あと俺はのんきじゃない。今だって火祭のことで頭一杯なんだから。

「……そうだぜ。俺ってのんきだも～ん。じゃあ昼飯楽しめよパン太郎」

それじゃあ春日のいる一組に向かいますかね。

「……佐々木、兎月のどこがのんきなのよ」

「んなことは百も承知ですよ水川。あいつ、俺達のこと元気ないな

って目で見たけど自分が一番元気ないことに気づいてないだろ」
「兎月の考えてることって顔見たらすぐに分かるもん」
「まったくだ」

人で賑わう食堂。右を見ても生徒、左を見ても生徒。こんだけ大勢の生徒が集まっているんだ。この中に火祭がA定食を食べている可能性が……

「こっち向きなさい」

春日に脛を蹴られて、俺のサーチスコープは真っ暗になった。とどのつまり蹴られた痛みで目をつぶっただけ。

「痛い……」

そうだ、春日に火祭のことを聞いてみたらどうだろうか？　……いや、駄目だな。同じクラスといえど火祭と春日が知り合いとは思えない。それに春日を巻き込みたくない。これは俺の問題だ。俺がなんとかしないと……。

「……何見てんのよ」

あなたがこっち向けって言ったんでしょうが。相も変わらず自己中お嬢様ですこと。

「じゃあパンしか見つめませ～ん」

「……」

ど、どうした？　またローキックがくると思って構えていたのに、いつまで経っても蹴りはこない。い、いつでもきやがれ！　ダメージを受ける覚悟はできているから！

「……兎月」

「な、何？」

「……元気ない」

「……え～っと……俺が？」

「そ」

す、鋭いな～。俺って顔に出るタイプ？

「そんなことないけどな」

「嘘」

……即答されると否定もできませんなぁ。

「元気ない」

「まぁ、ちょっとね」

「……」

「痛い痛い痛い！　無言で頬を抓らないで！」

一体なんなのさっ！？　今のはあなたの機嫌を損ねることは言って

ないはずでしょ。

「元気出しなさい」

俺はドMか！　頬を抓っても元気にならないよ！

「元気出しなさい」

「痛たたた！　わ、分かった、分かったから。ほ、ほら元気１００倍！」

頑張って笑顔を作る。頬抓られて笑ってる俺って、どう見ても変態だよね……。

「……本当？」

「マジでマジで！　もう元気爆発っ」

「そ」

や、やっと放してくれた。赤くなってない？　大丈夫？　ったく、こんなことで元気出るわけ……でもなんか気持ちが軽くなったかも。あれ……元気出たのかな？　あれ……俺ってドMなのかな！？

「……なんだかなー」

思わず阿藤テイストで呟いてしまったが、とにかく元気が出た気がする。心に隙間なく切羽詰まっていた重く冷たいものが少しだけ消えたような……頬抓られただけなのにね。それだけでこんなに気持ちが楽になるなんて……春日マジック恐るべし。

「ありがとね春日。ホントに元気出たよ」

「……別に」

ちょっと気が楽になった。けど……それで火祭が戻ってくるわけではない。俺は……俺はどうしたらいいんだ……？

第３２話　火祭の覚悟

放課後、ひたすら火祭を探して校内を巡る。火祭が来ているとは思えない。けど、じっとしておれず、こうやって歩を進めているわけだ。

「やっぱ、いないよな……」

もしかしたら火祭が学校を辞めてしまうのでは。そんなことを想像すると、いてもたってもいられない。そんなの嫌だ。そんなお別れは絶対に嫌だ。

「火祭……どこにいるんだよ……」

誰もいない二組の教室へと戻る。……そういえば、ここで火祭に勉強教えてもらったりしたよな。つい最近のことなのに随分と昔のことのように懐かしい。数学がてんで駄目な俺に懇切丁寧に教えてくれた火祭。知り合ってまだ一ヶ月。でも火祭との思い出はたくさんある。俺の足は自然と動いた。

食堂。ここで宿題を終わらせた記念に火祭と缶ジュースで乾杯した。あの時のメロンソーダは最高に美味しかった。今でも忘れない。

中庭。一緒に掃除をした。水川の策略で火祭とは頻繁に組んで掃除活動したものだ。二人で和気あいあいと楽しく。

中央広場。……不良にカラまれた矢野を助けようとした俺を助けてくれた火祭。何もできなかった俺。無力な俺。あの日以来、彼女を見ていない。

「……火祭」

最後にたどり着いた場所は図書室前。……ここで火祭と初めて会ったんだよな。コジローって猫に餌をあげていた火祭と意気投合して仲良くなって……ん、あれは、

「コジロー……」

黒ぶち猫のコジローが物陰からひょこっと現れた。いつも火祭から餌をもらっていたよな。図々しい奴だという印象しか残っていないぞお前には。

「なぁ、コジロー。火祭の居場所知らないか？」

俺の問いかけにも一切の反応を示さずに、コジローは外へと出ていった。あの野郎……ガン無視しやがって。少しは猫らしくニャーと鳴いたりゴロゴロしたりしてみろよ。

「火祭が言ってたな、猫は不思議な生き物だって。まったく何を考えているか分からないし、自由気ままに行動。ホントに自由で……はぁ」

……帰るしかないのか。また明日……明日には会える。そんな曖昧で不確かなものにすがるしかない情けない俺。表しようのない虚ろで煩わしい気持ちが胸の中を燃え滓のようにぢりぢりと燻る。歯が

ゆいまま建物から出る。と、出たすぐ傍にはコジロー。まだいたのか。早くお家に帰りな。というかお前の家はどこだ。そしてこっちをジロッと見てくるな。なんだこれ。

「……何こっち見てんだよ」

思わずガンを飛ばすが、猫にそんなもんは通用しない。ただコジローは俺をずっと見つめる。視線を外さないコジロー。俺を見据えて、じっと動かない。……なんだよマジで。猫と対峙したのはこれが初めてではないだろうか。しばらく両者見つめ合い、膠着状態が続いた後、コジローは校舎の方へと歩いていった。なんとなく、なんとなくだけど……コジローがついて来いと言った気がする。いつも俺を無視するコジローが何か訴えかけたような……そんな気がした。もしかして、火祭のところに案内してくれるのか？

「火祭がここにいるのか！？」

藁にも縋る思いで、コジローのあとを追う。

コジローに案内された所。それは体育館の裏側だった。ここも火祭と掃除した場所である。ちょっとした事故で火祭と抱きつくことに

なった俺にしたら良き思い出の残る場所だ。そんな場所で起こっている出来事に驚愕した。

「火祭……！」

この数日、探しに探した火祭がいたのだ。赤みがかった長髪が風になびく。いつもと同じ姿。しかし、その表情はあまりに悲しげだった。俺があんな顔にさせてしまったのか……。俺のせいで……。

「待たせたな、火祭さんよぉ」

そして体育館裏には火祭の他にさらに他にも四人の男がいた。うち三人は見覚えがある。この前学校にナンパしに来ていた不良ＡＢＣの三人。そしてもう一人、長身でゴツい体格をしたゴリラのような男。丸坊主で激太の眉毛が一際目立つ。とても同世代には見えない。不良Ｄと呼ぶことにしよう。とっさに体育館の陰に隠れて、火祭らを覗き見る。何が起こっているんだ……？

「お前が火祭だな。可愛いじゃねぇか」

重く低い声が響きわたる。予想通りの声の低さだな、不良Ｄ。いかにもって感じだ。

「気をつけてくださいよ、内海先輩。あいつ見た目と反して超凶暴ですから」

「マジで怪物っスよ」

「おらぁ火祭！　この内海さんはなぁ県で一、二を争う猛者なんだぜ。覚悟しやがれ！」

あいつら自分が負けたからって強い先輩連れてきたのか。ちっちゃ

い奴らだな。そして内海先輩とかいうあのゴリラは県で一、二に強いのか。そんなのどうやったら分かるんだよ。何か大会でもあるのかコノヤロー。

「……」

「どうしたよ火祭さん～？　内海さんにびびって口も開けないのか～？」

「ギャハハハ！　あの時の恨み晴らさせてもらうぜ」

下劣な笑い声あげやがって……俺が助けないと！

「おいお前らぁ！」と口を開きかけたが、寸前で閉じる。っ、待てよ。待てよ俺！　……ここで俺が出て何ができる？　俺が助けに入ったところでそれは助けにならない。前みたいに不良達にボコボコにされて、また火祭が手を出すことになる。それじゃ駄目だろ！　また火祭を傷つけることになるじゃないか。俺は……何もできない。俺がすることは火祭を傷つけることにしかならないんだよ。火祭を守ることはできない……ここで大人しくしておくしかない……なんて無様で情けないんだ。

「来週はテストらしいな。部活動も休みで誰もこんなところに来ないぜ」

「思う存分暴れたらどうだ？」

「暴れられるなら、な」

あいつら何言ってるんだ？　言っている意味がよく分からない。

「……テストのこと、うちの学校の生徒に聞いたんだね」

「察しがいいようだな」

不良Dがニヤリと汚い薄笑いを浮かべる。な、何がだ？

「火祭ぃ、無関係の生徒を巻き込むのは心苦しいよな？　だったらお前がするべきこと、理解できるよな～？」

あ……そ、そういうことか。火祭が手を出せば、他の生徒を傷つける。汚い手口だな……！　他の奴らも巻き込みやがって！

「無論、お前程度なんか内海先輩にかかれば一捻りだがな……こっちは無抵抗のお前をボコボコにしたいんだよ」

こいつら許せねぇ……！　こんな奴らが火祭の姿を捻じ曲げた。こんな奴らのせいで火祭のイメージは歪んでしまった。こいつらのせいで……こいつらの……違う、俺のせいで火祭をこんな目に……！

「その前に一回ヤラせてもらおうかな……へへっ」

「マジっすか内海!?　ここでしちゃいます？」

「あぁ、野外ってのもいいだろ？」

なっ、ふざけるなっ！　そんなことあってたまるか！　阻止しないと！　でも、俺に何ができる……何が……くそ……！

「……私は何の手だしもしない」

火祭？　何を言って……

「私は何の抵抗もしない。だから他の生徒には手を出さないで」

「ほぉ、見上げた根性だな」

火祭、駄目だ！　お前は自分のことを考えろって。自分を大切にしないと。

「……私はずっと一人だった」

「あ？」

「暴力女と呼ばれ、化け物扱いされ誰も近寄らなかった。『血祭りの火祭』だなんてあだ名もつけられて周りは私を忌み嫌っていた。孤独。私は本当に孤独だった。ずっと一人ぼっち。……でも最近、友達ができた」

火祭……？

「その人はね、私のことまったく恐がらなかった。普通に私に接してくれた。私がどんな人間なのか知ってもその人は何一つ態度を変えず私に笑いかけてくれた。それどころか私の為に色々と頑張ってくれた。私のイメージを変えてくれようとしてくれたんだよ」

俺のことなのか……？

「何言ってんだお前」

「私を変えてくれるって。すごい嬉しかった……。周りの人も優しくて、たくさん友達ができた。つい最近まで一人だったのが嘘みたい。自分は変わったんだと思えた。その人の隣でずっと笑っていけるんだと思っていた。けど……それは勘違いだったみたい。結局私は何も変わってなかった。昔のように人を殴ってしまった」

そ、それは俺を守るためにしたことじゃないか。火祭は何も悪くないんだって。

「変われなかった私。私はやっぱり暴力女の『血祭の火祭』だった。

人から恐れられ忌み嫌われる醜い存在。皆が私を恐れる。恐がられるのには慣れているよ。でも、あの人には……あの人だけには恐がられたくなかった。私を変えようとしてくれたあの人だけには……！　もう手遅れだけど……」

違う！　そんなことない！　俺は……俺は火祭のことを……！

「だから決めたの。もう暴力は振るわない。誰も傷つけない。何よりも私自身が傷つかないために」

火祭、そこまで考えていたのか……。火祭は苦しんでいたんだ。自分の噂、評価、印象。周りの批判、声、悪口。それら全てに。そして俺のことを……。なのに俺は自分のせいだとしか思わず自分のことしか考えていなかった。火祭の気持ちをこれっぽっちも理解していなかった！

「私は手を出さない。だから他の人を傷つけないで」

「……わけの分からないことダラダラ喋りやがって……黙れよ」

ドゴッ

空気が弾けた。視界がぐにゃりと捻じ曲がるような感覚。目の前で起こったことが許せなかった。体中から熱が溢れる。

「っ……」

地面に倒れる火祭。その頬は赤く滲んでいる。不良Dが火祭を殴ったのだ。いきなり、強く、冷酷に。

「うお～、やりますね内海さん」

「ためらいもなく女子を殴るなんて」
「しっかりしろよお前ら。相手は火祭だぞ。このくらいの制裁は受けて当然だ」

ゲラゲラ笑う不良ＡＢＣの声がガンガンと耳に響く。視界は相変わらず歪んでおり、手先が異様に震えてきた。駄目だ……もう我慢できない。体が燃えるように熱い。肩が自然と震える。恐怖じゃない。悲しみじゃない。単純に怒っているんだよ。火祭を殴った不良Ｄと、そして何もしない自分に怒っているんだ！

「じゃあ大人しくしてろよ、へへへっ」

俺が出たところで足手まとい？　火祭を傷つけてしまう？　何もできない無力な存在だぁ？　そんなこと知ったこっちゃない。

「ふざけんじゃねぇ！」

火祭が殴られたのを見て何もしないなんてふざけんじゃねぇぞ俺！
そんなの許せるわけねーだろうがっ！

「なっ！？」
「誰かいるのか？」
「で、出てきやがれ」

うだうだいつまでも考えてんじゃねぇよ。火祭を守るんだろ？　不良からも周りの批難からも何もかも全部引っくるめて守るんだろ！？　だったらここでうじうじしてんじゃねぇよ。守れないだの傷つけてしまうだのそんなの関係ないだろ。行動もしないうちに諦めてんじゃねぇよ！　考える前に動けよ。考える前に叫べよ。考える前に守れよ！　ヘタレはヘタレなりに覚悟決めやがれ！

「俺が……俺が守るんだろうが！」
「あっ、テメーはこの前の」

黙れ不良A。お前なんか眼中にない。物陰から見るのはもうやめだ。堂々と不良どもと向き合ってやるよ。びびってる？　そんなの分からない。今の俺には火祭を見つめることで頭が一杯になっているのだから。

「火祭……」

視線の先には驚きで目を見開いた火祭の顔。どうしてここにいるの？　と言わんばかりの表情だ。そして次に目についたのは殴られた痕。赤く腫れ、なんとも痛々しい。もっと早く助けに入ればよかった。馬鹿だな俺。あとで自分で自分を殴らないとな。俺のせいだっての。うじうじヘタレな俺のせい。

「兎月……どうしてここに？」
「助けにきた」
「な、なんで？」
「火祭を守るのは俺の役目だからだ」

それしか言うことはないです。理由なんていらない。もう何も考えることはない。というか勝手にそういうことにした！

「誰だテメー？」

不良Dがこちらに近づいてくる。真正面で見ると、こんなデカイのか。顔一つ分は高い。１ｍ９０ｃｍぐらいあるぞ。そして屈強な体つき。伊達に県トップを名乗るだけのことはあるようだ。

「大丈夫っスよ内海さん。こいつ、この前俺らがボコボコにした奴ですから」
「雑魚ですよ雑魚」
「おらぁ、雑魚は引っ込んでろ」

俺に近寄るな不良ＡＢＣ。話したい相手はお前らじゃない。こっちのゴリラだ。ゴリラの通訳をしてくれるのならそこに立ってろ。馬鹿。

「おいお前、よくも火祭を殴ったな」
「テメー！　俺らを無視してんじゃねえ！」

うるさい、雑魚に用はない。ただこのゴリラ。火祭を殴ったこの不良Ｄが許せない。何も悪くない火祭を殴りやがって……絶対に許せねぇ。

「そうだが。それならお前はどうするんだ？」

ニヤニヤしやがって、完全に俺のこと見下してんなぁ。馬鹿にしやがって。

「殴る」
「……ぶはっ、何言ってんだお前？」
「ギャハハハ！　お前みたいな雑魚が内海先輩を殴るだってぇ？」
「馬鹿だろお前」

笑うなら笑えよ不良ＡＢＣ。言ったからにはマジで殴るからな。俺はヘタレだ。それに喧嘩なんてクソ弱い。この三人相手にリンチに遭って泣きそうになるくらいにだ。で、それが？　そんなの知るか。

殴る。俺は今そう決意した。絶対に不良Dを一発ぶん殴ってやる。
そう決めたんだ。

「上等だ。殴れるもんなら殴ってみろよ」

そして俺はゴリラと対峙した。

第３３話　一発ぶん殴る

目の前にはゴリラ。とにかくゴリラっぽい。今このゴリラこと不良Ｄを殴る宣言をした俺。これといって緊張はしてないし、恐くもない。そりゃ本当のゴリラだったら、びびるけどさ。いやいや、これも一応は人間だから。

「おーおー、カッコつけてくれるな。俺のことを殴るのか」

「殴る」

だから殴るっての。これもう絶対。火祭を殴ったお前は許せない。はらわた煮えくり返る思いだ。握りしめる右拳に自分の爪が食いこむ。痛いし、なぜか熱くなってきたし。頭の中はなんかごちゃごちゃしていてまともに機能していない。頭に血がのぼるとはこのことか。自分で言うのもアレだけど、俺今すげーキレてます。

「と、兎月君……」

「心配するな火祭。お前の殴られた分は俺が返す」

視界の端に映る地面に崩れ落ちた火祭の姿。その表情は何とも言えなかった。心配、驚き、恐れ……なんか色んな感情が入り混じったような複雑な表情。それよりも何より目にとまる赤く腫れた頬。不良Ｄに殴られた痕……はい許せねぇ！

「へへっ、かかってこいよ。俺は何も手を出さねぇからよ」

両腕をぶらりと下げる不良Ｄ。何もしないから殴ってこいよ、ということなんだろう。下賤な笑みを浮かべやがって。随分と余裕だな、と言ってやりたいところだが、こいつがそうなるのも分かる気がす

る。県トップの腕っ節を誇る奴が俺みたいなごく普通の高校生に負けるはずないもんな。俺だってこんな奴に勝てるとは到底思えない。まともに闘っても間違いなくボロ雑巾にされておしまいだ。実力差は見ただけで一目瞭然。俺なんかに勝ち目はない。

「どうした、かかってこないのか？」

「うるせー。今からやろうと思ってたんだよ」

俺の負けは確定。それがどうした。そんなこと分かって俺はこの場に立っているんだろうが。……やってやる。勝たなくていい。ボロ雑巾にされたって構わない。ただ一発、こいつを一発殴ってやる！

「うおおおおおぉぉぉぉっ！」

考えなしに不良Ｄに突進。右手を握りしめて大きく振りかぶる。狙うは顔面。ただその一点のみを睨み、不良Ｄに突っ込む。近づく奴の汚ねぇ顔。俺を馬鹿にしたようにニヤリと笑っていやがる。そうやって笑っていられるのも今のうちだ。その顔ぶっ潰してやる。足を踏み込み、不良Ｄめがけて飛び上がる。振りかぶった右拳がゴリラの顔面を捉えようとした瞬間、

「やれ、お前ら」

ゴリラがさらにニヤリと歪んだ。それを見れたのは一瞬のこと。その声とともに右腹に強い衝撃が走った。

「ぐっ！？」

横っ腹を突き破り、全身の勢いを持っていかれた。謎の攻撃に俺は抵抗もできず地面に転がりこむ。微かに視界に映ったのは不良Ｂの

姿。そうか……あいつが蹴ってきたのか。不意打ちすぎて全くガードができなかった。モロにキックを食らったようで地面に倒れこんだまま起き上がることすらできない。腹が捻じ曲がるように鈍く痛み、頭がガンガンと内側から叩かれるようにひどく揺れる。

「がっ！？」

さらに不良ＡとＣも加わって、殴る蹴るのボコボコ祭り。全身を激しい連撃が豪雨のように襲いかかる。痛ぇ……本気で蹴ってきやがって。

「ダッセー！　ざまーねーな」
「おらおら、この前の続きといこうか！」
「泣いてもしらないよ～？」

やりやまない殴打の嵐。これじゃあ、前回の二の舞じゃないか。不良ＡＢＣに囲まれてただ無抵抗にリンチされる。視界の隅に見える火祭の姿。ひ、まつ、り……！

「ヒャハハハ！　俺を殴るんじゃないのかよ？　カッコつけた割にその程度か。情けねえな～。お前ら、適当にやっとけ。俺はこっちをヤッとくからよ」
「分かりました内海さん」

こ、の……！　おい、待てよ不良Ｄ。火祭に近づいてんじゃねぇよ。待ちやが…

「おらおらぁ！」
「ぐあっ！？」
「逃がさないよ～」

くそっ、モロに顔面蹴りやがって。口の中に広がる血の味。全身を襲う痛みに吐き気すらしてきた。吸いこむ息はなぜか冷たく、全身は砂まみれ。まさにボロ雑巾状態だ。

「情けないな～。前回と何も変わってねぇぞ」

「ひゃはっ、マジでダッセー」

「何もできなかったね～。おー、可哀想に」

消えゆく意識の中、耳に届いたのは不良どもの俺を馬鹿にした声。情けない、ダサイ、何もできない……全部が俺に当てはまっている。結局、俺は何もできなかったのか……。口では偉そうなことほざいたのに俺は何一つ実行できなかった。こうやって不良どもにボコボコにされ、火祭を助けられなかった。俺は……俺は火祭を守れなかった。……おいおい、どうしたよ俺。

「……はっ」

なぜか笑えてきた。自分が惨めとか情けないとかそういうのもあるけど。だけどそれ以上に、俺は自分の自己完結に嘆いた。なんだよ俺……もう過去形にしちゃってるよ。何もできなかったって、過去のことになっている。今、目の前には俺がすべきことがあるってのに。俺は勝手に終わらせていたようだ。そんな自分が笑えてくる。

地面に座り込む火祭。その火祭にどんどん接近する不良D。このまま終わっていいのかよ。守ると言って、不良にボコられて、それで終わっていいのかよ。そんなのよくねぇだろうが。このままみすみすゴリラを見逃すわけにはいかないだろ！　俺が守らないと……。気合い入れろ俺！　このまま行かせてたまるか！

「う、うおおぉぉぉあああぁぁぁ！」

俺は弱い。喧嘩なんかほとんどしたことない。それにヘタレだ。ヘタレで馬鹿で情けなくて何の取り柄もないただのガキ。だけど一発、渾身の一発をあいつにぶち込まないと気が済まない！　絶対の絶対にだ！

「な、なんだこいつ！？」

「た、立ちやがった……！」

不良にリンチされただけで立てないとか俺の勝手な思い込みじゃい。そんなの気合いで跳ね飛ばせよ。口の中が血の味がするだぁ？　知るか。我慢しろ。全身が痛い？　だから我慢しろ。蹴られているとか関係ない。無理矢理強引にボロボロの体を奮い立たせ、不良ＡＢＣを払いのける。

「おらあっ！」

立ち上がり、視界に映るのはゴリラの背中のみ。あいつには火祭のことしか見えていないのだろう。さっき俺がテメーに言った言葉、忘れてないよなぁ。全身から力が溢れだす。体中ボロボロなのにまだ立ち上がれる。まだ拳を握りしめることができる。まだ走ることができる！　そう思った時には自然と足が地面を蹴っていた。

「う、内海さん危ないっ」

「は？」

今頃振り返っても遅い！　不良Ｄとの距離数メートルを一気に詰め、右拳を振り上げる。空気を切り、砂塵が舞い、全てが肌を駆け巡った。握りしめた右拳に全身全霊を込める。俺の思い、火祭の決意、

こいつへの怒り、自分への怒り、全て。今の俺を突き動かす全ての感情を拳に注ぎ込む。その一撃は見事に不良Dの顔面を捉えた。鼻下をえぐり、メキメキと骨が軋む音が耳に届き、拳に伝わる感触がなぜか心地好い。そのまま一気に腕を振るい、拳を振りぬく。

「ぐはっ！？」

強襲に何の抵抗もできなかった不良Dは背中からぶっ倒れる。ズドンと巨体が地面に叩きつけられる音と奴の口から洩れる呻き声。そして訪れる静寂。聞こえるのは俺の荒い息遣いのみ。

「はぁ、はぁ……どうだこのゴリラ野郎が！　ざまーみやがれ！」

第３４話　クライマックスはド派手に

「う、内海さん！？」

地面にぶっ倒れた不良Ｄに慌てて駆け寄る三人組。さっきまでの威勢はどこにいったのやら、焦燥で顔が歪んでんぞ。それにしても随分とボコボコにしてくれたな。全身のあらゆる箇所が痛い。骨折れてない？　大丈夫？　正直立っていられるのがやっとなくらいだ。っと、自分の心配より先に火祭の心配をしなくては。急いで火祭に駆け寄る。火祭はポカンといった表情をしていた。そんなに俺が来たのが意外？

「大丈夫か？」

痛々しく腫れた火祭の頬にそっと右手を添える。以前火祭が俺にしてくれたように。右手に伝わる熱がチクリと胸に刺さる。

「なんで君がここに……？」

「だから助けに来たの。ごめんね、もっと早く助けられたらよかったのに……」

せっかくの綺麗な顔が……不良Ｄ許すまじ！

「……どうして」

「へ？」

「どうして私を助けるの！？　私なんかのために……。私のなんかのためにそんなボロボロになってまで……。君がそこまでする必要はないのに。それに……」

「それに？」

「君は私のことを恐いと思っているのに……」

はぁ、そっか勘違いしていたんだったな。火祭、お前はす～ごい勘違いをしてるから。俺が火祭のことを恐がる？　いやいや、何を。火祭の肩に手をかけ、瞳をじっと見つめる。

「あのな、火祭」

「う、内海先輩ぃ！」

……いいところで邪魔するなよ不良ども。振り返った視線の先には、むくりと起き上がる不良D。あの巨体がまた目の前に立ち上がった。……マジかよ。俺的に会心の一撃だったのに、それ食らって立ち上がるって……そこはもう空気読んで倒れていてくれよ。完璧にキレイな一撃が決まったじゃん。もうあれで終わりでいいじゃん。

「だ、大丈夫っスか内海さん？」

「お前らは引っ込んでろ」

「は、はい……」

静かな口調だが、その目は怒りと焦りで血走ってギラついた野獣の目のようだ。野獣の双眸が俺を捉えて離さない。ヤバイ、さすがに第2ラウンド闘う気力、体力は残ってないぞ。さっきだって不意打ちで殴れたわけだし、もうあんなチャンスがあるとは到底思えない。さて、どうやって逃げようか……。

「おい、お前」

俺のことか？　唸るように静かで耳障りな声を上げる不良D。

「なぜその女を助ける？」

はぁ？　こいつも火祭と同じことを聞いてきた。

「そいつは誰からも恐れられる『血祭りの火祭』だぞ。誰も近寄らない凶暴女。名前を聞いただけで、顔を見ただけで誰もが恐れ震える化け物だ。そんな奴なんかのためにどうしてお前はそこまでできる！？」

「……はぁ、馬鹿馬鹿しい。そんなことにいちいち理由がいるのかよ」

「何？」

誰かを助けるのに理由がいるかい？　？の主人公の名言にもあっただろうが。俺が火祭を守るのに理由がいるのかよ。そんなものがないと守ってはいけないのかって話だ。なくても俺が火祭を守ってやる。お前ら不良どもからも周りの批難からも何もかも全てまとめて一括して守ってやる。

「そうだな、一つ言うことがあるとするならば……」

火祭、よく聞いとけよ。ガタガタの両足に活を入れ、気合いのみで立ち上がる。空を見上げ、深く深く息を吸い込む。そして一気に声として吐き出す。

「俺は火祭のことを恐いと思ったことはこれっぽっちもない！」

「……え？」

「どうして恐がる？　火祭のような可愛い女の子を。何をどう恐がるってんだ！　猫に餌をあげたり、勉強を見てくれたり、誰に対しても優しく明るくて、本が好きで一日に何冊も読んでしまう。そんなどこにでもいる普通の女の子だろうが。喧嘩が強いだぁ？　別にいいじゃんか。そんなのちょっとしたオプションだ。今時の女性は

一癖、二癖あった方が逆にいいんだよ。そのギャップがグッとくるんだよ！　もう一度はっきりと言ってやろう。俺は、火祭のことを、全く、恐がっちゃ、いない！」

「なっ……」

驚きと言わんばかりの顔の不良Dは無視して、火祭を見つめる。俺の気持ち、伝わっただろ？

「……最後はよく意味が分からなかったけど」

うおぉい！？　ギャップ萌えだよギャップ萌え！　ちょっと変な子の方がいいって意味。いや、火祭が変だということじゃないよ。

「でも……ちゃんと伝わった。ありがとうね」

ニコリと微笑む火祭。あぁ、この笑顔も久しぶりだ。やっと拝むことができた。はぁ～、満足。このためだけに頑張ったと言って過言でない。なんか疲れが吹っ飛んだ気がする。

「じゃあ帰ろうか」

「待てやぁ！」

……あ～、そうだったな。まだこのゴリラがいたな。だからこれでもう終わりでいいじゃんか。無理に出てくるなよ。

「このまま逃がすと思うなよ。二人ともギッタギタのボッコボコにしてやる！」

昭和みたいな表現しやがって。やっぱお前、同世代じゃないだろ。

「それにしてもヤバイな……」

火祭はともかく、俺の体力はもう限界。ＨＰゲージはすでに真っ赤な状態。立つのでやっとの状態。ぶっちゃけ視界はボヤけて見えるし、全身痛くてフラフラのクタクタ。なのに目の前にはまだ元気そうな不良が四人。とても逃げきれそうにない。どうすれば……

「ちょっとお待ちぃ」

突然、まったくの別方向から声がした。凛として透き通るような綺麗な声。そして聞き覚えのある声……。

「な、なんだ！？」
「まだ誰かいるのか！？」

体育館の物陰から現れた人物、それは、

「み、水川」
「真美！？」

俺と火祭の親友、水川真美だった。両手を腰に当てて堂々とした立ち方で現場を睨みつけている。

「誰だお前？　こいつらの知り合いみたいだな」
「そうだよ。そこにいる桜と兎月は私の友達だ」

ズバッと俺らを指差す水川。ものすごい浮いてるけど……。

「どうして真美がここに？」
「桜を助けにきた」

即答する水川。そんな水川を見た不良Ｄは、

「ヒャハハハ！　そいつぁ威勢のいいことで！　お前みたいな女子一人増えたところで何ができる？」

不良Ｄの言う通りだ。水川が火祭並に強いなんて聞いたことない。水川こそごく普通の女子だ。これで水川も火祭並に強かっただなんてことになったら、いよいよ男の俺の立場がなくなってくるし。

「ギャハハハ！　そっスよね～」
「そんなことしないで俺らと遊ぼうぜ」
「君、可愛いしね～」

不良Ｄに釣られて不良ＡＢＣもゲラゲラと笑う。そしてそれに釣られて笑う水川……えっ？

「ふふふっ、確かに私一人じゃどうしようもないよ。私、一人、じゃあ、ね？」

次の瞬間、俺らの周りを群衆が囲んだ。全方位どこを見ても人、ひと、ヒト。固まる不良ＡＢＣＤに驚く俺と火祭。何十人ものの生徒が俺達を囲むようにして立っているのだ。な、なんでこんな大人数がここに……？

「皆、桜を助けるために集まったのよ」
「わ、私を……？」

……ははっ、やりやがったなマミー。こいつぁ最高だ！　ざっと見た感じだと百人近くはいるようだ！　もちろん知っている顔もある。

「兎月ー、だから言っただろ。呼んだらすぐに駆けつけるって。ま、呼んだのは水川だけどなー」

水川の後ろでニヤリ顔で立つ駒野先輩。

「兎月先輩っ、一人で闘うなんて主人公気取りな真似はやめてください」

相変わらず先輩を茶化す矢野。

「兎月！　もっと大声で叫べよ！　ここ探すのに苦労したぜ！」

いつも通りのデカイ声でうっとうしい山倉。他にもボランティア部の一年男子の二人、クラスメイトの倉田に遠藤率いるテニス部、さらに弓道部と大勢の生徒が火祭に笑いかけている。全員が火祭に満面の笑みを送る。

「こ、これって」

動転して、せわしなく辺りを見回す火祭。

「見ろよ火祭。お前のためにこんな大人数が集まったんだ」

「わ、私のために……？」

「そうだ。ここに集まった人は誰もお前を恐がっていないさ」

そうだろ？　皆。

「そうだー！　火祭さんを泣かす奴は俺らが許さないぞ！」

「おー！」

「火祭さん大丈夫？」
「心配したんだからねっ」
「私達を頼っていいからさ」

四方八方から溢れんばかりの声。皆、火祭のために集まってくれた。ここにいる皆は誰一人として火祭を恐がっていない。本当の火祭を知っている。理解してくれている。俺達のやってきた挨拶活動は無駄じゃなかったんだ。こんなにも大勢の人が火祭のために集まってくれたのだから。こんなにも大勢の人が火祭を守ってくれるのだから！

「皆……」

目に涙を浮かべて、両手に顔をうずめる火祭。どうだ、嬉しいだろ？　今まで一人ぼっちだったと言った火祭。皆が私を恐れ、避けていたと言った火祭。だが見てみろよ。今はこんにも大勢の人がいる！　もう孤独なんかじゃない！

「皆……ありがとう……」

周りがうるさくて多分皆には聞こえなかったであろう声、俺はしっかりと聞いたぜ！

「……火祭。もちろん全校生徒全員が来てくれたわけじゃない。やっぱりまだ何人かはお前のことを良く思っていない奴らもいる。それはしょうがないことだ。また時間をかけて変えていこう。けど、少なくてもここにいる……え～っと水川、全員で何人いる？」
「ざっと百十人ぐらい」
「ここにいる百人は火祭のことを理解してくれているからな。もちろん俺もだ。つーか俺が一番理解してると思う！」

「うん……ありがとう」

さ～て、やり残したことがあるよなぁ？　不良ＡＢＣＤさんよ？

「う、内海さん……」

「これヤバイっすよ……」

「に、逃げましょう」

急にうろたえだしたＡＢＣの三人組。一方、不良Ｄはまだ少しばかし元気みたいだ。

「内海先輩でしたっけ。形勢逆転ですが、どうしますか？」

「っ……くっ、調子に乗るなよ！　これだけの大人数が騒いだら、さすがに教師どもが気づくはすだ！　他校の生徒四人をこんな大勢で攻めたとなると、お前ら全員停学だぞぉ！」

唾を吐き散らしてゴリラが喚く。でもゴリラの言った通り、総勢百十人ものの生徒がこれだけ騒いだら先生達も気づくよな。そりゃマズイ。

「その点は心配ご無用だよ、兎月」

「どうしてだよ？」

「ここにいるはずの奴が一人欠けてるよねぇ」

ここにいるはずの？　……あっ！

「そういえば米太郎がいない」

どこに行ったんだあいつ？　あいつがここにいないのはおかしい。

「佐々木は大した男だよ！」

山倉の言葉に水川が力強く頷く。

「佐々木は今頃、職員室前で消火器をぶっ放しているだろうね」

「はぁ？　なんで？」

なぜに職員室前で消火器をぶっ放す必要が？　しかもこのタイミングで。

「先生達の注意を引くためにだよ。誰もやりたがらなかった誘導役を佐々木は率先してやってくれたんだよ」

そういうことか。米太郎……お前最高だよ！　先生にみっちり怒られるのは確定だけどな。

「さーて、これでゴリラの言う不安要素もなくなったことだし、どうしますか？」

全員が一斉に四人を睨みつける。ビクッと身を縮こませる四人。

「やい、お前ら！　覚悟はできているよな」

「うちの生徒に手を出したからには無傷で帰れるとは思うなよ」

「ギッタギタのボッコボコにしてやる！」

「僕らのアイドル桜ちゃんを傷つけた行為、万死に値する。我等、桜ファンクラブが制裁を下す！」

およそ百十人の怒涛の言葉に不良四人組はすっかり弱りきった表情で震えあがっている。あと、火祭のファンクラブとかあったんだな。知らなかったよ……やっぱ火祭大人気じゃん。

「よっしゃ、皆！　やってやろうぜ」
「おー！」

……まぁ、ここで全員でフルボッコ私刑コースでもいいけどさ。それじゃ、こいつらと変わらない。それじゃ駄目だろ。こいつらと同類だなんてな。俺達は俺達のやり方がある。

「待て皆！」

さて、最後の仕事だ。もう気力も体力も底尽きたけど、あとひと踏ん張りだ、俺。気合い入れてやるぞ。俺の声にピタリと周りの野次は止んだ。静まり返った場。俺はゆっくりと口を開く。

「お前ら今すぐここから出ていけ。二度と来るな」
「兎月、正気か！？」

耳元で大声出すなよ山倉。俺は正気だい。

「そうだよ。こいつらをみすみす帰すなんて。兎月だってボコボコにされたんだし、お返ししないと」
「いいんだよ水川。それに俺の分はちゃんと一発殴って返した。俺らが手をあげることはない」
「でも……」

いいんだよ。俺はもう。

「ま、兎月が言うならしょうがないよなー。皆も許してやってくれ」

のんきな駒野先輩の声に周りも渋々頷く。それを見て不良四人は安

堵の表情を浮かべる。

「じゃあ、俺らはこれで……」

イソイソとその場を立ち去ろうとする四人組。いやいや、

「おい不良D、ちょっと待てよ」

「お、俺のことか？」

「そうだよゴリラ。お前何か勘違いしてるよなぁ」

「え？」

「確かに俺と他の皆は手を出さない。けど火祭は違うぞ？　お前に殴られた分返してないもん」

「なっ！？　ふ、ふざけるなよ。そいつを殴った分はお前が返したんじゃないのかよ！？」

「あれは俺の個人的なやつ。本当の返済は火祭自身がやらなきゃ意味ないだろうが」

喚くゴリラを無視して火祭の方を振り返る。

「火祭、できるよな？」

「私は……もう暴力を振るわないって決めた。皆に恐がられたくないから……だからもう……」

「心配するな。誰もお前を恐がったりしない。だから最後に一発、思いきり殴れ。これで最後にしよう。そうしないと皆も納得いかないよな？」

「その通りだー！」

何十人ものの声が重なる。

「な？」

「……うん、分かった」

そして火祭は立ち上がり、ゆっくりと不良Dに近づいていく。

「う、うわ、やめろ。火祭の一撃なんか食らったら……」

「逃げんなよゴリラ。それとも、ここにいる全員から百十発殴られたいか？　それよりはマシじゃないか」

一斉に不良Dを睨みつける百人の鋭い眼光。不良Dは汗を滝のように流して唾を飲む。覚悟決めるんだな。

「わ、分かった。俺も男だ。腹括る」

背筋を伸ばして両目をつぶる不良D。火祭が深呼吸する。そして俺はニヤッと笑う。

「あ、言い忘れたけど」

「へ？」

「火祭の一発はここにいる全員の百十発分より重いからな」

力強く一歩踏みこみ、不良Dの懐に入った火祭。空気は爆ぜ、地面が揺れ、息のむ暇すら与えない。右拳を握りしめ、腕を引く。これで最後だ火祭。もう昔のお前じゃない。過去のしがらみを全て吹き飛ばすんだ！

「いっけぇー！」

学校中に響き渡っただろう。ここにいる全員の声と、火祭の『昇竜烈波』が不良Dの顔面を砕く音が。

第３４話　クライマックスはド派手に（後書き）

どうも腹イタリアです。

今回で『火祭救出編』終了です。一体いつから始まったのかは作者の私もよく分かってませんが（汗）
でも最後まで書き上げることができて満足です。これを自己満と言うのでしょうね（笑）

読みにくいうえに分かりにくいシリアスも終わりまして、またコメディーで頑張っていこうと思います。
ですのでどうか温かい目で見守ってください。

感想、意見、批判、誤字訂正、何でもお待ちしております！

第35話　ちょこっとエピローグ

保健室独特の匂いがする保健室で俺は怪我の手当てを受けていた。
大丈夫だと何度も言ったのに……

「あっ、ここにも痣が残ってる。ちゃんと手当てしないと」

火祭が手当てすると一点張り。つーか痣なんだから治療の仕様がないだろ。消毒液塗られても……痛っ、染みる!?

「ほら、血が出てるもん。絆創膏貼らないと。あと、痣のできてるところは氷嚢で冷やして」
「別にこんなのそのうち治るって」
「駄目!」

そんなたいした怪我じゃないけどな～。火祭は心配性なんだな。

「そういう火祭も頬っぺた冷やさないと」

火祭が俺の体中を診まくるので、俺も空いた手で氷嚢を持って火祭の頬にそっと押しつける。

「あ、ありがとう」

顔を赤くする火祭。あれれ？　おでこにつけた方がいいかな？

「だからホント大丈夫だってば」
「駄目!」
「そ、そうですか」

火祭の最高の一撃を食らった不良Dは気絶。不良ABCの三人に運ばれて学校から逃げていった。それから皆は火祭を讃えて、わあーわあーと火祭に群がりお祭り騒ぎ。山倉は一際うるさいし、水川は火祭に抱きついて心配しただの私達を頼ってとか言って泣いちゃうし。つられて矢野も泣いて、駒野先輩はハッピーエンドだな的な顔で微笑んでいたし。そんなこんなで騒がしい中心部から離れた俺はさすがに体力の限界で、壁にもたれかかり崩れ落ちるように地面にへたりこんだ。自分でも相当無理したんだよなー。それを見た火祭がものすごいスピードでこっちにやって来て、手当てをすると言って俺を保健室まで連れて行ったのだ。ぶっちゃけ、もう意識が消えかけていたのでベッドで眠りたくて仕方なかったのだが、なんか今は逆に意識がはっきりとしている。疲労が一周回ってリセットされたのかも。そんなことってある？

「いや～、やっぱり火祭は強かったな」

俺が渾身の思いで放ったパンチじゃ倒せなかった不良Dを一撃でノックアウトだもん。あれ食らったら三日は目覚めないだろうな。マジで。

「うん、あの一撃は気持ち良かった」

「ははっ、人を殴って気持ちいいだなんてボクサーじゃないんだからさ」

「分かってるよ。これでもう『血祭りの火祭』はおしまい」

「そっか……」

うん、これでもう全て終わったんだ。これで良かった。これで火祭は本当に変わることができた。皆に感謝しなくては。あれだけの人数よく集まったよ。いかに多くの人が火祭の本当の姿を理解してく

れたのかが分かる。とりあえずＭＶＰを決めるとしたらコジローだな。あいつのおかげで火祭の居場所が分かったことだし。そのうち鰹節でも持っていってあげないと。

「……ごめんね」

「な、何が？」

「私のせいで君がこんなボロボロになって……」

そんなこと気にしなくていいのに。どんだけ俺のこと心配してんの？　照れますって。

「俺が自分でやったことだからいいの」

「でも……」

「あのさ、火祭。前にも言っただろ。謝られるより感謝の言葉の方が俺は嬉しいって。俺は火祭の笑顔が見たくて頑張ったんだよ？　そんな申し訳なさそうな顔されてもなぁ」

「……うん。なら……」

顔を上げる火祭。そこにはもうあの暗い影は全く見えなかった。

「ありがとう」

ニッコリと微笑む火祭。……可愛い！　今までで一番の笑顔じゃないか。ハートがズッキュンなんですけど！　うっ、顔が熱い……！

「う、うん」

「……」

「……」

「……あのね？」

「うぇ!?　な、何？」

火祭が俺の手を両手で包むように握ってきた。す、すごく温かい手……な、ななな何でしょう！？

「君にね、伝えたいことがあるんだ……」

「う、うん」

え？　何この感じ？　何この空気！？　も、もももしかして……告白！？　いや、そんなわけ……でも、なんか……そんな気がする……。

「今なら言えると思うんだ」

「う、うん」

「……」

深呼吸する火祭。も、もしかして本当に……告白！？　そ、そんなの……ちょ、まだ心の準備ができてないって。　お、落ち着け俺！　心臓よ落ち着けぇ！　これ以上は破裂しちゃうって！

「……ふう。じゃあ、言うね」

「う、うん」

つかさっきから「う、うん」しか言えてないぞ俺。追いこまれてからの言葉のバリエーション少な！　どれだけ緊張してるんだよ。いやいや緊張するよね！

「……」

「私は君のことが……」

「将也ぁ！　俺の活躍聞いてくれた！？　俺すげー頑張ったお！」

保健室の扉が勢いよく開かれて、ドヤ顔の米太郎が乱入してきた。
ニッコリ満面の笑みで。

「なぁ誉めてくれ、よ……」
「……」
「……」

いや、本当にお前って奴は……。春日誘拐の時も最悪のタイミングでメールしてきたり先週の体育館裏での事故といい空気の読めない奴だな。俺を見て、火祭を見て、俺と火祭の繋いだ手を見て、米太郎の顔は見事に固まった。場は静まり、空気に亀裂が入る。

「は、ははは……お邪魔だった、みた、い、だねぇ……」
「……」

火祭はユラリと立ち上がると、米太郎の肩を掴む。

「ひ、火祭さん？」
「どうして邪魔するの……？」

ひ、火祭から黒いオーラが見えるんですけど……。おいおい、簡単に血祭りの火祭が戻ってきたよ。

「ご、ごめんなさいぃ！」

瞬きした瞬間には米太郎は土下座していた。たいしたスピードだ。
隊長クラスの瞬歩並だよ。

「また今度……いつか絶対に伝えるからね」

俺にもう一度笑いかけて、火祭は保健室から出ていった。一体、何を言うつもりだったのか……気になるぅ！

「この馬鹿米太郎が！」
「痛い、殴らないでおくれっ」

ま、こいつも陰で色々と頑張ってくれたからな。もちろん感謝している。口で言うのは恥ずかしいから言わないけど。

「で、話によると米太郎は職員室前で消火器をぶっ放したらしいな」
「おぉ、そうなんだよ。是非聞いてくれ！」

急に目をキラキラさせる米太郎。そんなに自分の活躍を自慢したいのかよ。

「知ってるか将也？　消火器って白い粉がいっぱい出るんだぜ！？　ちなみに俺のあそこからは白いえき」
「それ以上は言わないでくれ。なんだ、ちなみにって」

下ネタ言わせねぇよ。

「故意でないとアピールしたんだけど、火の『ひ』の字もなかったからな～。わざとやったのってバレてさ」

火の『ひ』の字があったら、それは火だよ。馬鹿なのか？

「そこから担任と学年主任にこってり絞られてよ～。俺も俺の息子も意気消沈しちゃって」
「また下ネタかよ」
「この程度で下ネタと感じていたら、俺の深夜トークにはついてい

けないぜ？　修学旅行どうするよ？」

お前と同じグループにならない。

「それで罰とか言われて試験終わったら一週間校内掃除だってよぉ～」

「それは災難だな」

「まあ、どうせボランティア部の活躍に参加するつもりだったからいいけどな」

「は？　清掃活動ならもうしないけど」

「……うぇ！？」

だって火祭のイメージを変えるための活躍だったからな。火祭のためにあんなにも大勢集まってくれたんだから成果は出たというわけだし、これ以上やる必要ないし。

「そ、そんなぁ。試験前も憂鬱、試験後も憂鬱って……」

「一人で寂しくゴミ拾いするんだな。つーか、いつまでここにいるつもり？　もう帰ろうぜ」

美人の保健の先生と保健体育の勉強するならともかく、米太郎といてもしょうがない。男と二人で保健体育の勉強だなんて違う参考書とテキストじゃないか。考えるだけで身の毛がよだつ。

「そうだな、帰るか」

米太郎と二人で保健室から出る。あ～、もうクタクタ。帰ったらすぐ寝よ。その前に風呂入りたいや。いや、風呂入ったらぜってー傷に染みそうで嫌なんだけどな……俺もちょい鬱だよ。

「……将也」
「なんだ？」
「火祭は変われたんだよな」
「……そうだ」

もうこれで火祭は大丈夫だ。火祭には頼れる友達がいっぱいできたのだから。確かにまだ全員が理解してくれたわけじゃない。まだまだ火祭のことを恐がる人はいるだろう。けど今の火祭にはを守ってくれる友達がたくさんいる。その人達が火祭を守り、火祭の本当の姿を伝えてくれるはずだ。噂と嘘で塗り固められた壁を壊して、そしていつか全員が火祭のことを理解してくれることだろう。その日は来るのはもう近い未来のことだ。

「すげーな、お前」
「は？　火祭じゃなくて？」
「だってよ、一人のためにそんなボロボロになるまで頑張るなんて普通じゃないぜ。すげーよ将也は」

米太郎が誉めてくれるなんてビックリだ。こいつに真面目な台詞は似合わないのにさ。ちょっとばかし照れくさい。いやいや、火祭のためならこのくらい。

「別にそんなたいしたことはしてないけどな」
「謙虚だな～将也。もっとドヤ顔で自慢しろよ。俺なんか消火器ぶっ放しただけで英雄気取りだぜ？」

お前は謙虚じゃなくて自重しろ。とにかく良かった。これで一件落着、ハッピーエンドだ。これからも火祭の笑顔が見られる。もうあの時の悲しい表情にはさせない。

「さあ明日に向かって帰ろう！」
「なんだそれ」
ははっと笑う俺と米太郎。

この時、俺は知らなかった。これはまだ始まりに過ぎなかったことに。

そう、中間考査という黒い影が迫ってきていることに……！

第３６話　土日を挟むテストは余裕を持てる

ヤバイ。これはヤバイ。どれくらいヤバイかと言うとマジヤバイ。今は三時限目、数学？の授業中。高次方程式？　１の３乗根？　人知を超えた不可解で意味不明の式が並ぶ黒板を見て俺はこう思った。ヤバイと。何も理解できねぇ！　授業に全然ついていけない。周りを見渡せば、なるほど理解したといった表情でスラスラとノートに問題を解く級友がた～くさんといる。同級生と思えない。ここ三年生の教室じゃねぇの？　ボランティア部の活動で忙しくてまったく勉強してなかった。さらに火祭のことを心配するあまり授業にも集中できず、ここ最近の授業はまったく聞いてなかったのだ。今日は水曜日、試験は来週の月曜日。残された時間はわずか。

「では、この問題で使う公式だが。兎月、言ってみろ」
「どうしたらいいでしょうか？」
「いや、質問返しされても……」

ヤバイって。ホントどうしたら……？

「誰かに教えてもらうしかない」

昼休み。いつものように昼食を食べていると、たくあんくわえた米太郎がポツリと呟いた。

「教えてもらうって中間考査の勉強を？」

「その通りだ。自分一人でやったところで何も変わらない。というか無理だ。だから誰かに勉強を見てもらうしかない」

米太郎の言い分は尤もだ。俺らのキャパシティーじゃ限界は知れている。間違いなくテストという壁を前に玉砕するだろう。それはつまり赤点を意味する。まだ中間試験だし、期末試験で挽回すればいいと言う奴は正真正銘の馬鹿だ。期末で挽回？　んなことできるなら誰も苦労しないわ。期末テストは絶対悲惨なことになってしまう。だから中間のうちに点数を稼いでおかないとマズイのだ。どれくらいマズイかと言うとマジマズイ。中間と期末の平均が三十五点を下回るとジエンド。そこからは地獄の始まりだ。そうならないためにも中間考査は頑張らないといけないのだぁ。なのに一週間を切ったのに何もやっていないのだぁ！

「でもさ、一体誰が俺らなんかに勉強を教えてくれるんだよ。誰もが自分のことで精一杯じゃないか」

「確かに。テスト五日前に他人にマンツーマンで教えてくれないだろうな。なら、残る手段は一つ……勉強会だ！」

勉強会？

「皆で集まって勉強するんだ。分からないところは教え合うのだ。聞いた方はよく理解できるし、説明した方も復習となり、お互いに向上していく。友達の勉強する姿を間近に見て自分のやる気も上がる。どうだ、いいことだらけじゃないか」

なるほど。中々良いアイデアだと思う。皆と力を合わせれば可能性は無限大。これなら俺らでも学力向上は十分に可能だ。でも、

「でも、誰にご教授願うんだ？　俺らにそんな人脈あるのかよ」

「何を言っているんだい将也君。僕らには最高の指導者がいるじゃないか」

米太郎が指差す方向、そこには二人仲良くランチをする火祭と水川の姿が。とても楽しそうだ。

「火祭と水川……おぉ」

「火祭は一組、ゆえに頭脳明晰なのは確か。そして水川もうちのクラスでトップ５に入る程だ。彼女らに教えてもらえば俺達も安泰ってわけなのさ～」

米太郎の言う通りあの二人は頭良い。うちの学校の一組は特別進学コースという通称、特進クラス。勉強のできる奴が集結している。エリートクラスだ。その一組にいる火祭は無論頭が良いわけだ。実際、俺はＧＷの宿題を手伝ってもらった。教え方も上手かったし、是非とも勉強会に来てもらいたい。対して二組も特進クラスではあるが一組の学力と比べると差は歴然。俺や米太郎みたいな馬鹿だって混ざっている。そんな二組だが頭良い奴は何人かいる。その一人が水川というわけだ。下手すると水川は来年には一組に上がっている可能性すらある。編成テスト次第だけど。

「確かに火祭と水川が加わったら心強い。でもさ、勉強会に参加してくれるのかな？　水川達は一人で勉強できるだろうし」

「俺はともかく、お前が頼んだらあの二人は絶対に来るって」

なんだその根拠のない自信は。米太が背中を押してくる。やめろ、たくあんエキスが制服に染みつく。

「ほら、行ってこい。お前が誘えば絶対に来るから」
「だからなんだよその自信は。どうしたらそこまで言い切れる」
「お前だからだ」

理由になってない。まあ、いいや。とりあえずダメ元で頼んでみるか。二人仲良く喋っている火祭と水川に近づく。

「お食事中失礼します。ちょっといいかな？」
「どしたの？」

話をやめて水川がこちらに目を向ける。火祭もどうしたの？　って顔をしている。

「来週はテストでしょ。だから俺と米太郎で勉強会しようってことになったんだけど、もし良かったら参加してくれないかな？」
「いいよ」

即答かよ水川。そんなパパッと決めていいのか？

「桜もいいよね？」
「うん、私なんかでよければ。それより怪我は大丈夫？」

火祭もすんなり了承してくれた。というかまたそれですか。この前の不良襲撃事件でリンチにされた俺。ズタズタのボロ雑巾にされたのだが、火祭の完璧な処置のおかげで怪我は良好へと向かっている。そして俺と会う度に怪我は大丈夫かと尋ねてくる火祭。どんだけ心配してくれるの。嬉しいけどさ。

「だから大丈夫だって。だから絆創膏を貼り換えようとしないでぇ！」

「……本当に大丈夫？」

「大丈夫！　それより、勉強会に参加してくれる？」

「うん、いいよ」

「良かったぁ。助かるよ、ありがとね」

米太郎にグーサインを送ると米太郎もグーサインで返す。ほら言ったろ？　とドヤ顔も送ってきやがった。しかめっ面で返してやる。

「君のためならお安い御用だよ」

「だよねぇ桜。愛しの彼からのお願いときたらねぇ」

「ま、真美！？」

ぬおっ！？　火祭がいきなり大声を上げた。水川に何か言われたのか？　全く聞いてなかったけど。きっと水川にカラかわれたのだろう。

「じゃあ、いつするの？」

「水川達の都合がいいなら今日の放課後にでも」

「構わないけど場所は？」

あー、場所かぁ。そこんとこ考えてなかったな。

「ちょっと米太郎と相談する」

たくあん貪る米太郎にアイコンタクトを送る。

「……」

いや、教室は使えないだろ。他に勉強する人もいるし。

「……」

ファミレスか……。周りがうるさくて集中できないと思うぞ？

「……」

俺ん家？　別にいいけど。つか米太郎の家はどう？

「……」

あー、そっか。それは厳しいな。

「そんな長いこと目で会話できるものなの！？」

水川がツッコミを入れてきた。

「いやいや、このくらいは慣れたらできると思うよ」

一種のテレパシーと思ったらいいんだよ。

「本当？　じゃあ私に何か言ってみてよ」

「いいよ」

水川と向かい合って目を見つめる。……こんにちは、マミー。

「マミー言うな！」

「ほら伝わった」

「兎月の顔がそんな顔してたからでしょ！　というかそんなことばっかりしてるから成績悪いのよ」

うわ、母さんみたいなこと良いやがって。これじゃ本当にマミーじゃないか。

「それで場所はどうなったの？」

おぉ、火祭。話を戻してくれてありがとう。

「教室は他の人の迷惑になるしファミレスだと集中できないだろうし。俺ん家で案はまとまったけど大丈夫かな？」

「君の家……」

「いやいや！　嫌なら別の場所考えよう。ほら、近くの公民館とか」

「行く！　君の家に行く！」

火祭？　どうして急にそんな大声？

「あ、あぁ火祭がいいならいいけどさ。水川はどうなの？」

「桜がいいなら私もいいよ」

ニヤニヤ顔の水川もオーケーらしい。そしてなんでニヤニヤ顔？

たまにするよね。ま、何にせよ。これで中間考査にも希望が見えてきたな。

第37話　誰かの家に集まると遊んでしまう

「へぇ、立派な家じゃないか」

我が家を見た米太郎がそんなことを言ってきた。随分と偉そうな上目線だが、気にしないでおこう。勉強会しようぜ！　という米太郎発案の下、水川と火祭の協力を得て、俺達四人は俺の家へとやって来ました。俺の立場からだと、三人を招くという形なわけです。上品に言えば、ご招待しました。不良っぽく言えば、ちょっとダチ連れてきたわ。

「兎月の家って一軒家だったんだね。てっきりマンションだと思ってた。兎月だから」

水川……俺ってマンション顔なの？　つーかなんだマンション顔って。どんな顔だよ。

「とにかく入らせてもらおうかな。中を見ないと」

お前は匠か。リフォームのお願いはしてないから。お前は自分の脳の収納スペースを探しとけ。匠気取りの米太郎は無視して、俺と水川と火祭は玄関へと進む。

「ね、ねぇ。あれ……何？」

ドアを開けようとした瞬間、後ろの火祭が制服の裾を引っ張ってきた。何か気になるものでも？

「……なんだこれ」

「自転車……だよね？」

米太郎と水川も引いた物体、それは半壊した自転車だった。邪魔にならないように庭の隅に放置されている。前輪は大きく歪み、チェーンは切れて垂れ下がり、ただのスクラップ。誰がどう見ても使用不可と診断するだろう。

「じいちゃんが事故ってさ。ぶっ壊れたんだ。そのせいで自転車通学できなくてさー、ホント最悪ー」

まあバスも快適だから文句ないけどね。夏になればさらに快適だと感じることであろう。

「お前ん家って結構危ない？」

「質問の意味が分からんぞ。とりあえず普通だと思う」

そもそも自分の家が異常だなんて思いたくない。

「それでおじいさんは無事だったの？」

「じいちゃんは奇跡的に無傷。今日も友達とカラオケに行ってるらしいよ」

「……中々ファンキーなんだね」

そうなんだよ。ファンキーなんだよ。俺の自転車を無断で使って、そんで壊したんだぜ。そのくせ、えへっとか言って黒砂糖飴渡してきやがった。ふざけんな飴一つで納得するわけないだろうが。カラオケ行く金で弁償しやがれ！

「あ、俺達もテスト終わったらカラオケ行こうぜ！」

「とりあえず家の中入ろうぜ」

「俺を無視しないで将也ぁ」

腰にまとわりつく米太郎を無視しつつ、ドアを開ける。カラオケはまた今度な。今はテスト勉強だから。

「どうぞ入って」

「「お邪魔しまーす」」

わらわらと中に入る米太郎達。すると母さんがリビングから出てきた。おい、口元に煎餅のカスついてるぞ。

「おかえり将也……あれ？　お友達？」

「ただいま母さん。うん、学校の友達」

「初めまして、クラスメイトの水川です」

「火祭です」

「佐々木米太郎です」

なんでお前はフルネームで名乗るんだよ。

「あら、初めまして。将也が友達を連れてくるなんて夢みたい」

そんなに珍しいか？　でも確かに高校生になって初めてかも。つーかそんなこと言わないで。なんか俺が友達いないみたいな感じになるじゃん。大丈夫だって、友達一杯いるから！

「しかも女の子二人はどっちも美人さんだし。どっちと付き合ってるの？」

「母さん！？　恥ずかしいからやめて！　そんなの求めてないから」

「えっと、こっちです」

「水川！？　なんで火祭を指してるの！？　付き合ってないから！」

ほらぁ、火祭も顔真っ赤だよ。も、もしかして怒ってる？　ご、ごめんね。変な勘違いされちゃって。もう母さん！　恥ずかしいからやめて！

「ちなみに僕とこちらの水川が付き合っ」
「冗談も大概にしなさい佐々木」

米太郎が言い終わる前に水川がぴしゃりと否定する。

「……すいませんでした」

マジでへこむなよ米太郎……。

「と、とにかく！　俺の部屋二階だから、こっちこっち」

このままだと埒が明かないので無理矢理三人を二階に案内する。階段を上がってると、下から母さんが叫んできた。

「ちゃんと部屋掃除してるんでしょうね。お母さん嫌だよ息子の汚い部屋を見せるの」
「それなりに綺麗にしてるから大丈夫。つーか勉強するから邪魔しないでよ」
「勉強するの？　なら何か出さないとねぇ。ちょっと１００％オレンジジュース買ってくるから待ってて」
「恥ずかしいからやめて！　そっとしといてよ」

息子が友達連れてきたぐらいでどんだけテンション上がってんだよ。

「お母さんと仲良いんだね」

ニッコリ笑顔の火祭。家族愛だね、みたいな顔はやめてくれよ……。

「まぁ悪くはないよ。いたって普通のファミリー」

「将也って一人っ子？」

「ああ」

そんな会話をしつつ俺の部屋の前へと到着。ドアを開く。はい、ここがマイルームです。ベッドに机や本棚、ごく普通の部屋ですよ。

「へぇ、意外と綺麗にしてるじゃん」

意外とはなんだ水川。自慢じゃないが部屋の掃除は結構マメにしているんだからな。

「ここが、君の部屋……」

ひ、火祭さん……そんなじろじろ見ないでよ。恥ずかしいじゃない。

「将也ぁエロ本どこ？　やっぱりベッドの下？」

「黙れ米太郎！」

「へぶぅ！？」

鳩尾に拳を叩きこむ。大人しくしとけ馬鹿。

「下から座布団とテーブル持ってくるから適当にくつろいでて」

「じゃあ適当に漁っておきまーす」

そう言って棚の本に手をかける水川。遠慮というものを知らないのか、お前は。ほって置くと部屋が荒らされそうなので急いでテーブ

ルを取りに一階へ降りる。見られちゃマズイものはないと思うが、色々と漁られるのはあまりいい気はしない。急がなくては。

「母さん、テーブルは？　って、いないし。マジで１００％オレンジ買いに行ったのかよ。……えっと、確か客間にあったような」

客間のふすまを開ける。ビンゴ、テーブルがありました。テーブルと座布団三つを器用に持ち上げる。階段を上がる時は縦に持ち替えるなど結構重労働だった。米太郎にも手伝ってもらえばよかったな。あいつを客扱いした時点でミスだった。あいつはただの米太郎なのだから。

「あ～……なんかもう疲れた」

やっとのことで部屋に到着。ドアを開けると、

「えー！？　これが兎月！？　めっちゃ可愛いじゃん」
「う、うん！」

小学校のアルバムに夢中な水川と火祭。うおおぉぉい、どこから引っ張り出してきたの！？　恥ずかしい！

「なー将也ぁ。お前って巨乳派？　貧乳派？」
「お前はまだエロ本探してんのかぁ！」
「ぐへぇ！？」

俺式『昇竜烈波』！　ベッドに倒れこむ米太郎。

「えへへー、将也君の匂いがするぅ」
「付き合いたてのカップルかっ！　これ以上ツッコませないでくれ

ぇ！」

勉強会なのに勉強する前に気力体力もう０です……はぁ。

第３８話　遊びと勉強メリハリつけましょう（前書き）

キャラ紹介してみたら？　という意見を頂きましたので、ちょっとやってみようと思います。
ということで次回から。

第３８話　遊びと勉強メリハリつけましょう

……なんだよ……これ……。

「おいおい将也、隠しボス倒してないじゃんか。どれ、俺がやってやろう」

仕方ないなとぼやきつつ笑みを浮かべてテレビゲームをする米太郎。

「これは学芸会の劇だね」

「あ、いた！　猫さんの役なんだ。可愛い～」

アルバムに夢中な火祭と水川。なんだよ、これ……皆さんは勉強しに来たんだよね？　ものすっごいくつろいでいるんだけど……。

「小学校の頃の兎月、可愛すぎるでしょ」

「癒される……」

「これじゃ駄目だレベルが低すぎる。それに精霊のイベント終らせてないと、まともにダメージ与えられないぞ。何やってんだよ」

「お前らが何やってんだぁ！　遊びに来たんじゃないでしょうが。勉強するんだろ！？」

試験まであと一週間もないんだぞ。もうちょっと焦ろうよ！　今のところ普通に友達が遊びに来た状態だから。ごく普通にくつろいでいるだけだから！

「えー、もっとアルバム見たい」

「駄目だ没収。今すぐ勉強する準備をしなさい」

「しょうがないなー」

しぶしぶ鞄からテキストを取り出す水川と火祭。アルバム返せ。ティーンズの思い出が詰まっているんだよ。今もティーンズだけどさ。

「サブイベント何もやってないのかよ。せめて武器集めぐらいはやっとけよ」

「お前もいい加減にしろよ。早くゲーム片付けろ。あとセーブはしっかりな！」

米太郎も準備を始めて、ようやく勉強する態勢が整った。やっと勉強開始だ。テーブルには米太郎と水川と火祭に、俺は自分の机に座る。

「兎月はこっちに座らないの？」

「俺は自分の机があるからな。テーブルが広く使えるだろ？」

「んー、しょうがないか」

何がしょうがないんだよ水川。こうした方がそっちがテーブル広々と使えていいでしょうよ。

「じゃあ始めましょ。分からないところは私か桜に聞いてね」

「はい、ここ！」

「じゃあ、ここ！」

「……いきなり？」

こんな馬鹿野郎どもですいません。

「これも解と係数の関係？」
「うん、それで解けるよ」

勉強会はとても順調に進んだ。火祭も水川も教え方がすげー上手で馬鹿な俺と米太郎は質問しまくり。あまりに質問して俺の移動が鬱陶しいらしく結局俺もテーブルで勉強することにした。左に米太郎、右に火祭、正面に水川という座り位置だ。

「この１００％オレンジジュース美味いな。クッキーがあれば最高なんだけどな」

図々しいぞ米太郎。

「はい、クッキー。チョコ味とバニラ味があるからね」
「母さん！？　なんで廊下でスタンバってるんだよ！？」

ちゃんと勉強してるから！　安心して下でドラマ観てなさいよ！

「ちょっと休憩しよっか」

水川が言うならそうしましょう。俺もクッキー食べたいし。ペンを置きノートを閉じて皆ダラダラしだす。

「今何時？」

「六時前だな。皆はいつ頃帰る？」
「今夜は帰らないぞっ」

気持ち悪いぞ米太郎。付き合いたての恋人キャラはもうやめろ！
それもうイラッとするだけだから。嫌悪感しか生み出さないから。

「私は何時でもいいよ。桜は？」
「私も大丈夫だよ」
「なら、あと一時間だけしよっか。あんまし遅くなったらいけないし」

特に火祭と水川は可愛いからな。よからぬ輩がグヘヘなことをしてくる恐れがある。

「あらぁ、晩ご飯食べていかないの？　せっかくカレー作ったのに」

まだいたのか母さん。そんなことしなくていいの。

「お母さん、福神漬け頂けますかな？」

漬け物マニアの米太郎の目がキラリと光った！？
その後、一時間勉強して三人は帰っていった。うーん、勉強した！

第３９話　お久しぶり下僕生活（前書き）

兎月将也（とづきまさや）

好きなもの　ゲーム、テレビ、メロンソーダ、あんパン、掃除、可愛い女の子

嫌いなもの　勉強、担任、いじめ、ウザイ米太郎

一応、本作の主人公。身長、体重ともに平均値のごく普通の高校二年生。顔はそこそこカッコイイらしい。ボランティア部に所属しており、次期部長として人望もちょっとだけある。誰に対しても明るく優しくて普通に良い奴。しかし、春日の命令には有無言わず犬のように従ってしまうというヘタレ体質を持っていて、そうして春日に振り回される下僕生活が始まった。

第３９話　お久しぶり下僕生活

勉強会の翌日、今日は木曜日。試験もあと四日後と迫ってきているが俺に焦りはない。昨日みたいに火祭達に教えてもらったら余裕で間に合うだろうし、土日もあるからな。土日があると気持ち的に余裕が持てるんだよね～。土日最高。よし、今日も勉強会するか！

「ごめん兎月。今日は小学生の妹の面倒見なくちゃいけないから勉強会行けないの」

あ～、そうなんだ水川。妹は大事にしないとね。

「お母さんのお見舞いに行くから私も今日はちょっと……ごめんね」

そ、そっか。火祭も大変だね。お大事に。

「今日は二人きりだな将也」
「今日は勉強会中止だ」
「なんでだよ！？」

米太郎と二人で勉強しても、どうせ遊んでしまいそうだし。

「わざわざメモリーカード持ってきたんだぞ。俺の最強データ見せてやるよ」

ほら遊ぶ気満々！　やっぱり駄目だ。こいつと二人きりだと絶対遊んでしまう。明日の朝までコントローラを離しそうにない。テスト前だってのにオールで遊ぶのはマズイよね……。赤点コースまっしぐらだ。ゲームの世界を救えても、現実の俺らは全く救われない。

「じゃあな、米太郎」

しょうがない、今日は一人で勉強するか。俺一人でどこまでやれるかは分からないけど。分からないところはチェックして明日とかに水川に聞くことにしよう。ギャーギャー喚く米太郎を無視して、教室を出る。ガラリと扉を開け……って、あの……。

「……」
「……」
「……」
「……春日、さん」
「……」

ドアの前で春日とばったり遭遇してしまった。どうやら二組の教室に入るところだったようだ。キツめのちょいつり目が俺をジロッと睨む。普通にたじろぐわ。そんな目で睨まれたら。蛇に睨まれた蛙よろしくぅ。

「あ～……えっと、うちのクラスの奴に用事？　呼ぼうか？」
「帰るわよ」

相変わらずの一方通行での会話。俺の質問には一切答えてくれない。べ、別に悲しくなんかないんだからね！

「……あ、もしかして俺を呼ぼうとして足が痛い！」

そしてローキック。有無を言わずローキック。鋭角なローキックが俺の足を捉えた。痛い、痛すぎる。はぁ……無視またはローキック。これが春日の基本行動パターンなのだ。理不尽すぎる。どちらにし

ても精神か肉体かがダメージを受けてしまう。話しかけても無視。話しかければローキック。それってあんまりだよね……はぁ。

「帰るわよ」
「はいはい」

そして俺は春日の前じゃ何も言えないヘタレなのだ。春日の命令は簡単に従う。春日曰く、俺は犬らしい。どんな命令にも大人しく従ってしまうヘタレな犬。自分自身、情けない体質だと思う。でも体が勝手に反応しちゃうもん。それってもうどうしようもないよね！

はは っ、明るく言っちゃおう！　うん！

「……兎月」
「ぬぁんでござーましょー？」
「うるさい」

痛い痛い。だから蹴らないで。返答しただけでうるさいってそれはもう超がつくほどの理不尽っぷりだよ。つまり超理不尽。あんまりだよね。……はぁ。あー、溜め息が止まらない。しゃっくりみたいにポンポン出てくるよ。

「で、何？」
「……」
「いや……何か言いたいことがあったんでしょ？」
「……その顔……何？」

……質問の意味がよく分からん。その顔何？　って言われましても……。俺の顔立ちのことを言っているのなら、それは俺自身どうしようもありません。神様に尋ねてください。俺だってできることなら女子からキャーキャー黄色い声援受けるイケメンに生まれたかっ

たさ。

「……その傷」

しかし春日は俺のスペックについて聞いたわけではないようだ。どうやら俺の右頬に貼られた絆創膏についてらしい。

「ああ、これね。これは菊丸スタイルだよん」

「……」

ものすごい目つきで睨まれた。びびるわ。ちょっと軽いボケでこの睨みよう。大石先輩でも少しは笑ってくれるぞ。はぁ……どうしようかな。この傷は不良にボコボコにされたものですよー、とは言いたくないし色々と説明するのも面倒くさい。

「階段で転んじゃって。その時に怪我しちゃったんだよねー」

「……」

適当に嘘をついておくのが妥当だな。ま、どうせこのお嬢様は俺なんかの心配なんかしないだろうけどね……って、痛い痛い！

「ぐぐぅ……絆創膏を押すのはやめてください」

なぜかぐりぐりと指で絆創膏を押してきた春日。痛い痛い、まだ完治してないから痛いって！　なんだこの人は。俺を痛めつけて楽しいのかよ！

「……痛い？」

「痛い」

「……大丈夫？」

「大丈夫じゃない！」

傷口が開きそうだよ。もうやめて！　春日の指を手で弾くと、またローキックが炸裂。ぐっ……悪魔かよ。

「転んだの？」

「そうだよ。だからそっとしてください」

今のは春日なりの心配の仕方だったのだろうか。だとしたら今後はもう怪我なんてしようとは思わないね。傷口をえぐられる心配なんてしてもらいたくありません！

「……」

ふぅ、やっと大人しくなってくれた。もうマジでヘトヘトだわ。この状態で帰って勉強？　無理。今日は大人しくゲームしようかな。あ、米太郎呼ぼう。

「……」

「……」

春日と並んで校門へと向かう。何か話題は……

「もうすぐ中間考査だよね。春日はちゃんと勉強してる？」

「してる」

「一組だもんな。やっぱ頭良いんだろうなー」

「別に」

「またまた謙遜しちゃってー。学年で何位くらい？」

「うるさい」

……会話にならないよ。人とのコミュニケーションってこんなに難しいんだね。大人ってすごい。仕事とはいえ初対面の人と円滑にトークできるから。俺なんて下僕として仕える自分の主人（まだ認めてねぇ）との会話だってのに盛り上がったことなんてほとんどないよ。

「はぁ。……ん？」

あれ？　春日が違う方向に歩きだした。そっちは校門じゃないぞ。あるのは自転車置き場。

「あの……俺、今日は自転車で来てないよ」

「……」

ギロリという音が聞こえそうな程のすごい睨みつき。つり目だから尚更キツく見える。

「……早く言いなさいよ」

「ご、ごめん」

踵を返して校門に向かう春日。……え～っと、もしかして自転車の後ろに乗るつもりだった？　いやいや、そんなわけないよね。前回あれだけ恐がってたし。

春日に追いついてバスを待つ。あと数分で来る予定だ。

「……アンタはどうなのよ」

「え？　俺？　……何が？」

ビックリした。急に話しかけてくるんだもん。

「……試験勉強」

あぁ、それね。

「そこそこ頑張ってるよ。昨日とか俺ん家で勉強会したんだ。誰かに教えてもらわないと手に負えないからさ」

「そ」

「いやー、春日が教えてくれたらもう万々歳だけどなー。ははははっ」

「……」

ローキックは勘弁してよ？　ほんの冗談だからさ。春日が俺の勉強を見てくれる？　ないないない～。コミュニケーションもまともに取れないのに勉強を教えてもらうなんて無理だって。

そうこうしているうちにバスが到着。バスは空いており座るには申し分ない。けど俺は立たないといけない。以前、春日に立てって言われたからな～。自分は座るくせに。

「何してんの」

「え？　いや、立つけど？」

「邪魔。座りなさい」

……なんだよそれっ！　あなたが立てって言ったんでしょうが。それを今度は座れ？　もうわけ分かんないっス。こうなったら意地でも座らないからな。

「いや健康のために立つ。立ち続けてやる。」

「座りなさい」

「分かりました」

……久しぶりだな～、このやり取り。命令されると大人しく従順し

ちゃうんだよね～。俺の馬鹿っ！　春日の座った席の後ろに座る。隣に座る勇気はないです。いきなり殴られそうで恐いもん。

「……」
「……」

バスの中でわざわざ話すこともないので黙ってバスに揺られて続ける。にしても、やっぱ春日って綺麗だよなぁ。後ろ姿だけ見ても、ちょっと胸キュンだもの。艶やかなロングの黒髪がバスに揺られ、見るものを惹きつける。けど性格は最悪。こんなに可愛いのに性格最悪。羊の皮被った狼どころの騒ぎじゃないぞ。アイドルのトレーディングカードだと思って開封したら中は昭和プロレスラーのブロマイドだったぐらいの裏切りだ。Ｉ　ｗａｎｔ　ｙｏｕ！の代わりにゴツイ剛腕のラリアットが迫ってくるんだぜ？　ヘビーローテンションだよチクショー。……何の話していたんだっけ？

「どこでズレた！？」
「うるさい」
「痛いっ」

しばらくして春日の降りるバス停に到着。ここで春日とはお別れ。じゃーな春日。親父さんにもよろしくー。のはずだった。しかしバスは止まらず停留所を通過してしまった。えっ？

「あ、あれ？　降りなくてよかったのか？」
「……」

どこか寄る場所でもあるのか？　言っとくけど俺はついて行かないからな。実際には言わないけど。俺は次で降りるますから～。そして俺の降りるバス停に到着。あばよっ春日。

「じゃ、俺ここで降りるから。また明日な」

ちゃんとさようならの挨拶もしてバスを降りる。さ～て、帰ってゲームすっか。君と響きあうＲＰＧでもしましょうかね。世界再生の旅に向かってさあ一歩。右足出そうとしたら、その右足が誰かによって蹴られた。痛い！　誰だ、よ……！？　う、嘘だろ……

「な、なんで春日が……」

なんで春日がここで降りてるのさ！？　親戚の叔父ちゃんにでも住んでるの？

「ど、どうしたのよ？」

「アンタの家どこ？」

お、俺ん家？　どうしてそんなことを聞くわけ？　……はっ……

ま、まさか、

「家に来るつもり！？」

「そ」

うえぇぇ！？　なんでだよ何が目的だ！？　あっ……もしかして勉強教えてくれるの？　いやいや！　確かに春日に教えてほしいな、とは言ったけども。まさか本当に来るとは思わないじゃん。

「俺の家で勉強するの？」

「そ」

「春日が教えてくれるの？」

「そ」

どうやらマジみたいだ。しっかし、春日が勉強教えてくれるなんて……天変地異の前兆じゃないのか？　日本沈没するかも。でも教えてくれるのはありがたいや。俺一人じゃ限界があるし。ゲームする気だったが気分一転。勉強モードへと切り替わりました。試験前だもんね、ゲームしている暇はないよね。数十秒前の自分はなんて愚かだったのだろう。いやいやロイド君は何も悪くないからね！

「分かった。じゃあ、こっち」

春日と並んで家へと向かって行く。もちろん春日の鞄は俺が持ってるぜ。偉いだろ？　なんてったって下僕だからな。

第４０話　今日も勉強始めるまでが長い（前書き）

春日恵（かすがめぐみ）

好きなもの　動物、読書、甘いもの、家族、兎月？

嫌いなもの　爬虫類、怖いもの、辛いもの、ナンパ、しつこい米太郎

本作のヒロイン。長髪の艶やかで優美な黒髪と端麗な顔立ちにちょいキツめのつり目が特徴的な美少女。無口で無表情。バスの中で兎月と出会い、彼のヘタレ体質に気づく。そこでの出会いから兎月を下僕としてこき使う。最初は下僕としか見ていなかったが誘拐事件で助けられて以来、兎月のことを意識している様子。兎月に対してはよく暴力を振るう。兎月曰く、蹴るのが上手くなってきている。兎月とはよく会話するが、他の男子には壁を作って拒絶している。男子人気は非常に高いが誰も近寄せない。基本的に男子が苦手。

第４０話　今日も勉強始めるまでが長い

「ここが俺の家です」
「……」
出ました無反応。春日が良い反応したことなんか俺の知ってる限りじゃ、ほんの数回だ。なのでもう気にもならないけどさ。無反応くらいだったら昨日の米太郎の匠気取りのリアクションの方がまだマシだ。僅差だけど。
「……兎月」
そんなノーリアクション芸人、春日が気になった物があったらしい。俺の背中を軽く小突いてきた。
「……あれ何？」
春日の視線の先、そこには半壊した自転車。やっぱ目に入るよね。前輪は大きく歪み、チェーンが……いやもう昨日も言ったからいいや。省略します。
「じいちゃんが事故ってさ。じいちゃんは無傷だったけど自転車はぶっ壊れてたんだよ」
なんかデジャヴ。昨日も火祭達にまったく同じ説明をしたからなー。そして春日の反応は、
「……アンタ、自転車通学できないじゃない」
「ん、まぁそうだよな」

「……」
「……」

あれ……春日さん？　どうし、

「た痛っ！」

不意打ちローキックっ。ぐっ、痛い……。自分ん家の玄関前で跪ずくのは初めてだよ……悲しい。

「マジいてぇ……」
「ふん」

どうして春日が怒ってるんだよ。もう意味不明。誰か説明プリーズ。

「と、とにかく中入ろっか」

背中に春日の連続パンチがやりやまない。このままではマズイ。まだ不良に蹴られたところが疼くってのに、そこを殴打されちゃあ敵いません。春日にとって何が気に障ったかは不明だが急いで家の中に逃げこむ。

「ただいま～」

リビングには母さんのいる気配がするが出迎えてくれる気配はない。寂しいねぇ、磯野家を見習ってほしいものだ。

「勝手に上がっていいよ」
「……お邪魔します」

春日の声がリビングに届いたのであろう、母さんがバタバタとやって来た。今更かい。

「おかえり将也〜。あら、その子は？　お友達？」

「知り合い」

俺が下僕として仕える主人です、とは言いたくない。春日が喋る前に素早く口を挟む。ぐっ……春日が母さんには見えない位置で背中を抓ってきたが我慢だ。痛いけど我慢だ。ああ超痛い。嗚呼、いと痛し。

「あらぁ綺麗ね。まるでお人形さんのようだわ。お名前は？」

「春日恵です。よろしくお願いします、お母様」

な、なんだその愛想よい態度はぁ！？　いつも無表情のくせして今は微笑んでるぞ！？　そのキャラなんじゃい！

「まぁ、あなたが春日さん。将也から話は聞いてるわ。とっても可愛い娘がいるって」

母さん！？　そんなこと一言も言ってないよ！　勝手に捏造しないでぇ！

「いえいえそんな。お母様の方が若々しくてお綺麗ですよ」

マジかよっ！？　春日がお世辞言いやがった！　大人な対応しやがって……愛想よくできるなら俺にもそうしてよっ！　パッと明るい笑顔でうちの母さんとお話しする春日。こんなの春日じゃない。こんなの俺の知っているあの性悪理不尽暴力お嬢さま春日じゃないぞお！

「あらぁ嬉しいわ。どうぞ上がっていって。あと、うちのお父さんクビにしないでね」

サラッと何言ってんだよ。息子の同級生に言う台詞じゃないでしょうが。恥ずかしいよ。そして惨めです。

「ここが俺の部屋」

母さんはリビングへと戻り、俺は春日を部屋に案内。ニコニコ笑顔だった春日も俺と二人きりになった途端いつもの無表情。そして返事の代わりに脇腹を抓ってくる。地味に痛い。ああ痛し。嗚呼、いと痛ゐ。

「中で待っていてね。下で１００％オレンジジュース持ってくるから」

まだ昨日の残りがあったはず。お嬢様にお出しするお飲みものとしては力不足この上ないかもしれないが、我が家では最高級のおもてなしの品なのだ。庶民なめるなコンチクショー。キッチンで母さんから１００％オレンジジュースを受け取り、部屋へと戻る。

「お待たせ」

ドアを開けると、ベッドに腰かけた春日はアルバムを開いていた。どことなく既視感！　昨日あたりに同じ光景を見た気がするんだけど！

「ちょ、勝手に見ないでよ」

慌ててアルバムを取り上げようとしたが、春日は返してくれない。
それどころか横っ腹にパンチを入れてきやがった。痛い！　がぁぁ、痛いよぉ！

「ぐおおぉ！？」
「……ねぇ」

床にダウンして涙目で腹をさすっていると春日が話しかけてきた。

「な、何か？」
「これ……アンタ？」

そう言って春日はアルバムの一部分を指差した。そこには懐かしき小学校時代の俺がいた。満面の笑みでハムスターの餌箱を持っている。なぜにハムスターの餌箱を持っている！？　どうした昔の俺よ、何があった！？

「そうだよ」

というかこれ卒アルだし。下に名前書いてるから分かるじゃん。そして卒アルなのにどうしてハムスターの餌箱を持っているんだ俺よ！？

「……」

じぃーと写真を凝視する春日。心なしか反応が良い気がする。なぜだ？　なぜ反応が良いんだ？

「本当にアンタ？」
「だから俺だってば」

何を疑ってんだよ。そんなに顔違うか？　ほら、なんとなく面影そっくりじゃん。兎月君だねー、と言われること間違いなしだ。

「ほら、アルバムはもう仕舞って」
「うるさい」
「そう言わずにさ。勉強しに来たんでしょうが」
「……」

ようやくアルバムを閉じたか。はぁ、何を考えているか分からん。今日は意味不明なことばかりだな。

「じゃあ始めようと思うけど春日は机の方がいい？　俺の机使ってくれていいよ」

お嬢様だし、テーブルに座るよりはいいはずだ。俺のチープな薄っぺらい座布団じゃ申し訳ない。セレブの春日に釣り合わせるにはホワイトタイガーの毛皮を買ってこなくてはならない。いや、狩ってこなくてはならないだ。

「……アンタは？」
「俺はテーブルで勉強するよ」
「……」

すると春日は意外にも座布団の上に座った。机じゃなくていいのか。意外だな。

「なら、俺は机で……あう！？」

クイック良く春日の放ったクッキーの空き箱は俺の頭に直撃した。

角っこハンパなく痛い！　思わず上ずった声が洩れてしまった。

「な、何すんのさ」

「座りなさい」

……俺もテーブルで勉強しろってことか。狭くなるけど、いいの？

いやまぁ二人ぐらいなら十分スペースはあるけどさ。

「じゃあ、はい」

春日と向かい合うようにして座る。試験勉強するだけだよね？　ドキドキするけど……べ、別に緊張なんてしてないんだからねっ。うわー、最近ツンデレ使いすぎだな。反省しなくては。

「始めましょう」

「う、うん。分からないところあったら聞いていい？」

コクリと頷く春日。

「じゃあ、ここ！」

「……いきなり」

こんな馬鹿ですいません。そしてデジャヴ！

「このときは商をＰ（ｘ）、余りをａｘ＋ｂとおいて……」
「お～、なるほど」
さすがは一組だけあって春日は頭良す！　教え方も上手いし勉強はとても順調っ。
「えっと、ここは？」
「これはここをこうして……」
え？　う～ん、難しい……。計算が複雑だ。よく見とかないと、ついていけなくなっちゃう。ぐいっと顔を寄せて春日の手元を覗いていると……
「痛っ」
シャープペンシルの先で腕を刺された。鋭い痛み！　駄目だよ、シャー芯は時として凶器になるんだから。
「な、なんだよ急に。何かしましたか？」
「近い」
……あぁ、確かに。あまりに頻繁に質問していたから知らないうちに春日の正面から真横に接近していたのだ。そりゃもう肩と肩が触れるぐらいに。ドキッとするよね。春日からしてみればゾクッとしたのかもしれないけど。
「そ、それは申し訳ない」

慌てて春日から離れる。でも勉強に夢中だったということでご勘弁を。シャー芯をこっちに向けないでね！　まだ刺された箇所が痛むから。

「遠い」
「は？」

最初の正面の位置に戻っただけですけど？

「教えにくい」

……まあ教えてくれる春日がそう言うなら、そういうことなのでしょう。春日の左側へとちょい移動。近過ぎず離れ過ぎずの距離だ。

「数学は苦手でさー」
「そ」
「春日は得意？」
「普通」

おぉ、ちゃんと答えてくれた。いつもは「別に」だから、今の返事は超感激！

「じゃあ、次はここ！」
「ここは……」

第４１話　夜道の帰り道（前書き）

火祭桜（ひまつりさくら）

好きなもの　猫、読書、本の管理、料理、兎月？

嫌いなもの　納豆、湿気、マナーの悪い人、空気の読めない人、空気の読めない米太郎

本作のヒロイン。赤みがかった絹のように綺麗なロングヘアーにアーモンド形のぱっちりとした瞳の容姿抜群の女の子。小さい頃から道場に通っており、武の才能をいかんなく発揮。その腕前の強さでマナーの悪い人や他人に迷惑をかける不良をこらしめていた。しかしそれが噂となり火祭に悪いイメージを印象づけてしまった。周りから恐れられ、火祭はずっと一人孤独だった。だけど兎月に救われ今では学校の人気者になりつつある。火祭自身は兎月のことを家族以外で自分のことを理解してくれた最初の人として特別な目で見ている。

第４１話　夜道の帰り道

「ここで？より……ａ＝３、ｂ＝－２……でオッケー？」
「そ」

ふぅ、やっと問題が解けるようになってきた。この調子なら赤点は取らないで済みそうだ。暗記科目なら一夜漬けで何とかなるけど、数学はそうはいかない。やっぱ公式をしっかり理解しないと問題は解けないのだ。うん。

「ちょい休憩しようか」

あ～、疲れた。ベッドに倒れこむ。ふんわり毛布が気持ちいい～。

「あ、春日はいつ頃帰る？」
「……」
「あんまし遅くなったら、お父さんも心配するだろ？」

あの親父さんだからな～、捜索願いでも出しそうだ。いやこれマジでありそうで怖い。現在六時四十分。晩飯前だし、そろそろかな。

「……もう少し」
「え？」
「……もう少しだけ勉強する」

そう？　まぁ春日が言うなら、そうするけど。

「良かったら晩ご飯食べていく？　今日はカレーなのよ」

母さん！　また廊下で盗み聞きしてたのかよ。つーか今日もカレー？　駄目だって、春日みたいなお嬢様にカレーなんか出せないよ。例え二日目のカレーでもだ！

「いえいえお構いなく！　大人しく下でテレビ見てなさいってば」
「将也に聞いてないわ」
「春日に話があるなら、俺を通してくださいっ」

廊下にいた母さんを追い払う。もうヤダ、このおばさん。もし俺に彼女ができたとしても絶対家には呼べないよ。まあ彼女できたらの話だけどね！

「ごめんね、あんな母親で」
「……本当にこれアンタ？」

ま～たアルバム見やがって！　そんなに他人のアルバムが面白いかよ。確かにちょっと面白いと思うけど。……なんか俺も気になってきた。

「ちょ、俺にも見せて」

一緒にアルバムを見ることにしました。懐かしいなあ、小学校の思い出なんてあんまし記憶に残ってないや。だからこうして見ると、うーん面白い。

「これアンタ？」
「だから俺だって」

お～、昔の俺だ。あの頃はこんなピュアな瞳をしていたんだなぁ。今はどうなんだろ？　加齢で汚れているのかな？　いやいや、まだ

十六歳だから大丈夫だろ。

「おっ、これは遠足の時の写真だな」

可愛い笑顔しやがって！　おにぎり持って友達と楽しそうにじゃれ合っている姿はとても癒される。いやー可愛い……ん？　そういえば……火祭と水川も可愛いって言っていたよな。昔の俺って結構可愛かった？　もしかして春日もそんな風に思っているのかな……？

「なぁ春日、この写真見てどう思う？」

「……別に」

あんだけ写真見て、感想なしはないでしょうよ。こっちから言ってみるか。

「自分で言うのもアレだけど、そこそこ可愛くない？」

「……」

やっぱ無反応か……。

「……ちょっと」

「え？」

「ちょっとだけ可愛い……」

……うおぉ！？　春日が褒めてくれた！　初めての快挙。よくやった昔の俺よ！

「え、そう？　えへへ～」

「笑うな。気持ち悪い」

どうやら今の俺は気持ち悪いらしい。またも接近し過ぎていて春日に突き飛ばされた。フローリングがひんやりして気持ちいい～。

「うしっ、勉強しよっか」

休憩したことだし勉強を再開することにする。次は化学と物理だな。

「……要は三つの公式覚えとけばいいんだろ。あとはベクトルの問題と考えれば」

「そ」

それなら物理は前日に問題解くぐらいで大丈夫だろ。あー、疲れた。化学もしんどかったし、理系科目は苦手だよ。英語と国語も同じくらい嫌いだし……ん？　俺の得意科目って何だ？　ない……。

「い、いや体育は得意だし。あ、そういや時間……」

時計を見ると、すでに八時を回っていた。おぉ結構外も暗くなってきた。つーか真っ暗。

「そろそろ終わろっか。お腹も減ってきたことだし」

母さんの持ってきたクッキーしか食べてないもん。

「そ」

テキパキと帰り支度を終える春日。一緒に一階へと降りると下で父さんと母さんがスタンバっていた。父さん顔が固いよ？　そして真っ青だし。

「こんな愚息に勉強をご教授してくださって誠にありがとうございます！」

ズバッと頭を下げる父さん。恥ずかしいからやめてよ！

「いえいえそんな。私も将也君と勉強できて、とても有意義な時間でした。また来てもいいでしょうか？」

「いつでも来てね。私も将也も春日さんが来るのを楽しみにしているわ。あと、うちのお父さんクビにしないでね」

「お願いします！」

だからそんなことを息子の同級生に言わないでよ母さん。そして父さん、息子の同級生に土下座しないでよ！

「ほらほら、うちの親はもういいから早く行こ」

これ以上両親の醜態を見せたくないから春日の背中を押して家を出る。あ～、やっぱ外はもう真っ暗だな。

「触るな」

出るやいきなり笑顔をやめてローキックをぶち込んでくる春日。くっ、この猫かぶりが。

「春日、どうやって帰る？」

さっき携帯で確認したら次のバスは四十分後らしい。もうちょっと時間のこと考えるべきだった。

「自転車が壊れてなかったら送れたけどなー……」

「……」

「痛い痛い！　無言で抓ってこないでっ」

自転車壊したのは俺じゃないって。今日もカラオケに行っているファンキーじじいのせいだから。

「春日の家って、ここから歩いてどれくらい？」

「……たぶん二十分ぐらい」

案外近いんだな。それなら歩いて帰るには十分だ。

「送ってくよ。ほら、行こう」

夜道は危ないからな。前回みたいに誘拐される恐れがある。

「……」

スタスタと勝手に歩きだす春日。否定でもいいから何か返事くれないかなぁ。春日と並んで歩く。街灯の光も少なく暗い夜道の影から今にもナイフを持った凶悪犯が出てきそうだ。怖いって。自転車も車も人も通らない道は沈黙を貫き通している。うぅ、静かすぎて怖

い。何か会話して紛らわさないと。

「今日は勉強見てくれてありがとね。ホントに助かったよ」

「そ」

「春日って教え方上手いよな～。でも俺に教えてるばっかりで春日自身はあまり勉強できなくてごめんね」

「別に」

「明日からはもう大丈夫。一人で勉強できるから。あとは暗記すればオッケーだしね」

「そ」

「まっ、春日なら中間考査ぐらい余裕だよな～」

「別に」

……さっきから「そ」と「別に」の繰り返しじゃないか。いやいや、返事してくれるだけでもありがたいと思わないと。それにしても……真っ暗だよな。街灯が何個か壊れてるぞ。市長に申請しないと。これだと段差に躓いて転びそうで危ないって。

「あっ」

突然、春日が小さな悲鳴を上げた。俺が横を見た時には春日の体はかなり前に傾いていた。って、あかんあかん！　春日が倒れかけている！？

「危なっ！」

か、肩を掴めて良かった……。前に倒れかけていた春日の体を後ろに引き戻す。良かった……春日が倒れずに済んだ。よくやった俺の反射神経。脊髄の働きに感謝。

「だ、大丈夫？」
「……」
そりゃ、こんな暗い夜道じゃ足を踏み外して当然だよ。やっぱ危ないよ市長！　街灯つけましょうよ。
「そこに段差があったんだね」
「……」
いやこれマジで危ないって。ホント春日に怪我負わせたら春日父に俺が殺されちゃう……。それにこれ以上春日を危険な目にあわせたくない。男として守る義務があります！
「ほら、手」
春日に手を差し延べる。手握っていればこけることもないはずだ。しかし春日はまったく反応しない。いや俺だって恥ずかしいよ。でもしょうがないじゃんか。危ないし。
「俺と手繋ぐのは嫌だと思うけどさ安全のため我慢してくれないかな……？」
「……」
「なぁ頼むよ。春日に怪我させたくないんだよ」
「……」
手に柔らかな感触が伝わってきた。やっと了承してくれたか。帰ったら石鹸で徹底的に洗えばいいじゃんかよ～。俺は傷つくけど。
「じゃ、行こ」

春日と手を繋いで歩きだす。なんか恋人みたいだな、えへへ……
はっ!?　俺の馬鹿。何を考えているんだい！　やましい気持ちで手を繋いでるわけじゃないんだから。春日の安全のため！

「こっちの道？」
「そ」

さっきまで渋ってたくせに意外とがっちりと手を握ってくれている春日。やっぱ怖いんだろ～？　だって俺も怖いもん！　そういえば、春日と手を握るのは二回目だよな。一回目は高級レストランで手を繋いだ。あの時は緊張したなー。良い思い出だよ。そして春日の手、暖かいや。すごい安心する。柔らかいし、えへへ～……やましい気持ちはＮＧだぞっ俺！　馬鹿野郎、落ち着きなさい！

「……兎月」
「何？」
「……元気になった」
「うえ？」
「……月曜日、元気なかった」

あぁ……あの時は火祭のことでいっぱいだったからな。もれなくテンション低かったもん。あの時は本当に辛かった。自分にできること、できないこと、できなかったこと……色んなこと考えていて頭いっぱいだった。自分に何ができるとかすべきこととか……ホントへこんでたよな。

「……元気になった」
「春日のおかげだよ」
「え……」

食堂で励ましてくれたじゃん。正確には頬を抓って元気出せと命令しただけだけど。でも、おかげで随分と気持ちが楽になったのも事実。

「春日が元気くれたんだよ。本当にありがとうな」
「べ、別に」

俺なりに誠意を込めた笑顔で感謝の意を伝える。昔の俺みたいに可愛い笑顔じゃないけど、それなりに良いスマイルなはずだ。うん、たぶん。

「本当に……ありがとう」

思わず、ぎゅっと強く握ってしまった。でも春日は手を離そうとはしない。少しは気を許してくれたかな。

「春日には助けられっぱなしだな」
「……私も兎月に助けてもらった」

俺が？

「いつ？」
「誘拐された時、体を張って守ってくれた……」

誘拐された時か……あの時は無我夢中だったからな。それに誘拐犯A弱かったし。

「あのくらい当然だろ？　だって俺は春日の……」
「わ、私の……？」
「下僕だからな！」

決まったぜ！　完璧な台詞だろ？

「……」
「……」

……あ、あれ？　無反応……？

「馬鹿」
「ば、馬鹿って痛い！」

不意打ちローキックが一番痛いんだよ！？　体の筋肉が弛緩しているんだから。

「な、何よ急に」
「うるさい馬鹿」

そこからは急に不機嫌になった春日と無言で歩き続ける。何か知らないけど怒ってるみたい。えー……やっぱ手を繋ぐのは嫌なんだろうか。よく分からん。何か機嫌損ねること言っちゃったのかな？

「着いた」
「……こ、ここが？」

しばらくして春日の家に到着。ここが春日のお家……すげぇ！　前方には巨大な豪邸が。左側を見れば大きな庭園が。右側には倉がある。そもそも目の前には重厚な鉄の門があり、家を囲む壁は二メートル近い。ま、マジでお嬢様なんだな……俺とは住む世界が違うよ。

「……ここでいい」

「そう？」

俺もそうしてもらいたい。春日の親父さんには会いたくないからな。娘をたぶらかすな！　とか大声で言われそう。チャカを眉間につきつけられたら間違いなくちびるわ。泣いて命乞いしてやるわ！

「じゃ、ここで」

名残惜しいけど離すか。ポカポカした春日の手を離す。あぁ～、なんか寂しい気持ち。もっと繋いでいたかった。

「あ……」
「どした春日？」
「……別に」

何かあったのか？　よく分かんないや。

「じゃあな、春日」
「……じゃあね」

うお、春日が返事してくれた。今日の春日はいつもと違うっ。とても新鮮な感じがする。いつもこのくらい返事を返してくれたらいいのに。もうっ。

「おう」

豪邸に背を向けて俺は家へと帰っていた。……しばらく後ろから視線を感じたけど気のせいだよね？

第４２話　初めての喧嘩（前書き）

水川真美（みずかわまみ）

好きなもの　かき氷、フルーツ、ボランティア活動、正義感の強い人、優しい人

嫌いなもの　ネバネバしたもの、ウザイ米太郎

兎月のクラスメイトで一年生からの付き合いで仲良し。ショートカットで小さな顔の可愛らしい女子生徒で元気で明るい性格。そのためクラスから絶大な人気と信頼を誇るクラスの中心人物。涙もろい一面もあり、水川を泣かした奴はクラス全員を敵に回すことになる。

第４２話　初めての喧嘩

「おはよ、春日」

バスの扉が開き、春日が乗車してきた。ちょいキツめのつり目が俺を見つめる。おぉ～、今日も無表情。

「……おはよう」

無愛想な挨拶だが、してくれるだけマシな方だ。つまり今日は機嫌が良さそうってわけ。春日はバスに乗ると車内を見回す。残念ながら席はどこも空いてないですよ。すると空いてもない後ろへと向かう。……う？　あれ……ちょ、これ……まさか……！？

「そこのアンタどき」

「はいストップ！」

強引に席奪っちゃ駄目だって。まだそれやってたのかよ。出会った時と一緒だなおい。春日との出会い、それは春日の一言からだった。

「アンタ、そこの席譲りなさいよ」だ。度肝抜かれましたよ。そして今もこのお嬢様は同じことをしようとしているのです。ちょ、駄目だって。席を奪うのは駄目なんです。

「……邪魔」

邪魔だろうが何だろうが一般常識的に考えてあなたのやっている行為は異常ですよ。止めに入って当然だい。

「ほら、立とうぜ」

「うるさい」

春日の肘打ちが鳩尾に入ったが踏ん張れ、俺。俺以外にこの非常識お嬢様を止めれる奴はいないのだから。俺がやらなくては！

「ぐっ……ほ、ほら鞄持つから。な、立とう？」

「……」

そんな睨みつけないでよ。びびるって。今にもローキックが襲ってきそうで両足ブルブル震えちゃってるよ。はぁ……なんでこのお嬢様は他人の席を奪うのかねぇ……。親の教育だとしたら、春日父のせいだな。社長になった程の人だ。きっと「いいか恵、他人を引きずり降ろしてでも自分の利益を得ることが成功に繋がるんだぞ」とか言ってそう。そして春日は他人を引きずり降ろして席を取る、と。……なんか意外と当てはまってそうで怖い！　おいおい、やっぱ春日父のせいなんじゃない！？

「……」

つーかまだ睨んでくるし……。ここでどうにかして言いくるめないと他の人に迷惑かけてしまう。俺が何とかしなくては。

「あ～……俺、春日と二人並んで立ちたいなぁ。どうか下僕の俺なんかの願い聞いてくれたら嬉しいんだけどな～、なんて」

「……」

数秒の空白の後、こっちを睨むことをやめて手摺りを持つ春日。やっと分かってくれましたか。あと他の乗客さん達……そんな英雄を讃えるような目を俺に向けないでください。今にもスタンディングオーベーションが起こりそうな車内。勘弁してくださいよ。

「……はぁ」

ちょっとこれは後で注意しとかないとな。いくら春日でも社会の常識は守ってもらわないと。

バスを降り、春日と二人で学校へ向かう。無論もちろん俺は春日の鞄も持つ。そうさ、俺をパシるのはまだいい。それは俺がただのヘタレだし、俺が我慢すればいいこと。しかし他の人は違う。他人にも同じようなことして通用すると思うなよ……春日。

「……なぁ春日、いつもあんなことしてるのか？」

あんなことというのは他の人の席を奪おうとしたことだ。

「……」

「あんなことしたら駄目だからな」

「……なんで」

なんでって……世間一般的に考えなさいよ。庶民のフィルターで見たら、あなたの奇行は浮きまくりですからね。

「他の人のことも考えないと。皆さんも朝早くから通勤してるんだからさ」

「うるさい」

「いやあのね、あなたのワガママで人を振り回したらいけないの。

皆平等が憲法でも説かれているでしょ」
「うるさい」
「痛い」
蹴ってきたよ。あー痛い。朝から蹴ることないでしょうよ。
「……だからさ、席を譲るのは良いことだけど席を奪うのは道徳的におかしいの。マナーとか以前に常識的にそんなことしたらいけないの」
「うるさい」
……なんだよこの人は。さすがに怒るぞ。
「あのな、お前の自分勝手な言い分が何でも通じると思うなよ。お嬢様でも並の常識ぐらいは身につけろ」
「うるさい」
そう言ってまたも俺の足にローキックをお見舞いする春日。……こいつマジでムカつく……！　いやいや、駄目だぞ俺。いくらムカつくからって女の子に手を上げちゃいかんよ。それしちゃあ男失格。ほら、よく言われたじゃん。男は常に紳士であれ。誰かの教えじゃないか。誰かは知らないけど。
「……」
そして俺を睨む春日。はぁ……なんで俺が睨まれるんだよ。俺が悪い？　ぜってー違う。俺は何も悪くない。悪いのはマナーの悪いこの悪い春日。それを注意して睨まれるって……納得いかない。はぁ……なんかもうどうでもいい。色々と言ったけど、このお嬢様には何も伝わってないし。とやかく言うのも疲れた。

「……じゃあもういいよ。勝手にしろ」

もう知らん。席奪うのも何するのも春日の勝手だ。俺はもう知りません。春日から離れ、早足で学校に向かう。鞄はちゃんと教室に持っていってやるから安心しろ。

「待ちなさい」

だ、ダッシュだ俺！　次命令されたら間違いなく服従してしまう。情けないがそれが俺の性質らしい。それはやめて。今だけはやめてくれ。今は春日の命令に従いたくない。ここで春日に従ってしまうと俺の言ったことが全て否定されそうな気がする。ふざけるな、それはおかしい。てなわけで全力疾走で校舎へと入りこむ。へっ、ちょっとは一人で反省なりなんなりしやがれ。

「あらら？　将也、どっか行くのか？」

昼休み、弁当を取り出す米太郎にそんなことを言われた。相変わらず今日も漬け物タッパーは健在だ。そんなに漬け物食べたいのかよ。野菜フェチが。

「トイレ」
「お前今日ずっとトイレ行ってるじゃんか。新型の腹壊しウイルスにやられたか？」
「ウイルスって分かってたらトイレじゃなくて病院行ってるわ。米太郎もついてくるか？　お前は精神科だけどな」
「なんて辛辣なツッコミ！」

別に腹壊したとか便意があるとかで毎時間トイレ行ってるわけじゃない。しっかりとした理由があってトイレに通っているんだ。正確には逃げこんでいるだが。その理由は春日。休み時間になる度に春日からメールがくるわ、無視したら本人がクラスに殴り込んでくるわ。故にトイレにエスケープというわけだ。米太郎によると春日は授業が終わると毎回教室に来てるらしい。間違いなく俺を探している。俺に安息の時間はないのだ。

「どうして春日さんから逃げてるんだよ。喧嘩中か？」

んだよ、気づいてんのかよ。だったら新型ウイルスのボケいらなかったよな。俺のツッコミ返しやがれ。

「喧嘩してるわけではない。俺が一方的に避けているだけ」
「春日さんが可哀想だろうが。あんな可愛い彼女のどこが不満なんだよ」

だから付き合ってないっての。いい加減にしろ。

「お前と話している暇はない。じゃあな、春日が来ても俺についてはノーコメントでな」
「お前は韓流スターか」

どんなツッコミだ。よく分かんないぞ。とにかく急いでトイレへと駆け込む。

……はぁ。まったく、春日一人に何をびくびくしてんだ俺は。ヘタレにも程がある。別にびくびくはしてないけどさー……とにかく今は春日と会いたくない。

「ん？　……また春日からメールか」

トイレの個室で携帯をいじっていたら春日から新着メールがきた。しつこいなこいつも。どうせパシリとかなんだろ。

「え～っと……『話がある。今すぐ来なさい』……誰が行くかボケェ」

行ったらローキックの嵐だろうが。そんな蹴られると分かっていて行くほどマゾじゃないんでね。ったく、ふざけるなって話だ。今朝のことに関しては俺は全く悪くない。というか春日が圧倒的におかしい。なのに何言っても通じないし、睨んでくるし。もう俺は関わりたくない。あそこまで理不尽だとは思わなかったね。

「は、入ってますか？」

「あ？　だったら何？」

「こ、この声……兎月か？　こ、個室どこも空いてなくて……。早くしてくれないか？」

「知るか。そこで野垂れろ。そしてテメーごと水洗されろ」

「と、兎月の機嫌が悪いー！」

クラスメイトの涙声が遠くに消えていった。にしても暇だな……腹も減ったしパン持ってくれば良かった。……いや、昼飯をトイレで

食べるなんて陰気な奴になりたくないや。いじめられっ子みたいになっちゃう。とりあえず我慢すっか。

「おい将也、いるんだろ？」

む、この声は米太郎。

「おう、いるぞ。どうかしたか？」

「水川が呼んでるぞ。早く出てこい」

水川が？　何か用事あるのか……いや駄目だ。今出たら確実に春日に見つかってしまう。

「用があるなら、そっちが来いって伝えてくれ」

「ここ男子トイレだぞ」

そんなことは百も承知だ。それを乗り越えることもいとわない用件じゃないなら、たいした用事じゃないんだろ。

「あと、三年生の駒野先輩だっけ？　ほらボランティア部の先輩さん。その人も来てたぞ」

え、駒野先輩が？　わざわざ二年のクラスに来るなんて……。

「分かった、すぐに行く」

ドアをオープン。駒野先輩が来るなんて何かあったのだろうか……急がなくては。慌ててトイレから出る。そして右足に強い衝撃がきた。ぐ、ぐあぁ！？

「な、何しやがる米太郎……！」

しゃがみこんで負傷した右足を両手でおさえる。痛ぇ……蹴るなよ。

「俺じゃないぞ」

「じゃあ誰だ……よ……うん」

顔を上げると左から順に米太郎、水川、そして春日が俺を見下ろしていた。こ、のお米野郎……！

「は、ハメたな米太郎。お前のことは親友だと思っていたのに」

「勘違いするなよ。俺は水川の手伝いをしたにすぎない」

はぁ？

「恵が私のところに来てね、兎月を呼んでほしいって言われたから佐々木に頼んだの」

「つまり俺は春日さんには何も言ってない。将也との約束は守っているぜ？」

そんなの屁理屈じゃないか。ふざけんじゃねぇ。

「水川の言う通り、駒野先輩の名前を出したらすぐ出てきたな」

「でしょ。兎月は先輩には礼儀正しいからね」

水川ぁ……！

「俺らの関係はその程度だっ痛い！」

同じ箇所にローキックとはえげつないぞ！

「ついて来なさい」
「いや、ちょっとお時間を……」
「ついて来なさい」
「分かりました」

チェックメイト。もう逃げられないね……はぁ。

「ありがとね真美」

ちゃんと水川にお礼を言って歩きだす春日。いつの間にか春日と水川は名前で呼ぶ仲になってるし。

「将也、イチャつくのはいいけどよ。他人に迷惑かけるなよ」
「これは桜まずいかもよ……」

黙れ米太郎。そして火祭は関係ないだろ水川。

「どこに行くんだか……」

無言で歩き続ける春日についていくしかないんだよな……はぁ。

第４３話　仲直り（前書き）

佐々木米太郎（ささきこめたろう）

好きなもの　野菜全て、漬け物、お米、兎月、水川、火祭、春日、可愛い女の子

嫌いなもの　イケメン、モテる男子、バレンタイン

兎月のクラスメイトで背がちょっと高い男子生徒。弓道部。いつも兎月とつるんでおり、ボケては兎月にツッコミを入れられる。その姿から周りから野菜コンビと呼ばれ、米太郎自身すごく気に入っている。野菜が大好きで漬け物をぎっしり詰め込んだ漬け物タッパーを常備している。基本ウザく、空気の読めないことも多々あるが、やる時はやる。

第４３話　仲直り

人でごった返す賑やかな食堂。おばちゃんの愛情が詰まった美味しい学食を頬張りつつ、級友と楽しく雑談しているなんとも学生らしい光景。どこのテーブルでも笑顔が満開に咲いている。……そんな楽しげな食堂のある一つのテーブルでは不穏な空気が漂っている。そこのテーブルだけ異様に空気が重たく暗く気まずさが纏う。……まあ、そのテーブルに座っているのは俺と春日なわけだが。

「おっ、兎月。今日は学食な……じゃあな」

あまりの空気の悪さにクラスメイトが話しかけるのをやめる程だ。それもこれも目の前のこいつが原因だ。

「……」

いつまで睨みつけてくるんだよ。息が詰まってしょうがない。というか空気が重い。しんどい。面倒くさい。

「……」
「……」

もう嫌だよ。黙って人を睨みつけるなんて怒ってる時にする態度だぜ。俺が何をした？　あなたのマナーの悪さを指摘しただけでしょうが。俺が怒られる筋合いも理由もないっての。

「……」
「……」

……これずっと続くの？　つーか何か話せよ。あなたが俺を呼びつけたんでしょうが。なのに何も言わないって……意味分からんというかふざけるなというか。

「……」
「……」

俺からは絶対に話しかけないからな。とことん耐えてやる。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

……。

「ね、ねぇ。あそこの二人なんなの？」
「こ、怖いんだけど……」

あまりの沈黙っぷりに周りが引き始めた。俺だって椅子を引いて、この場から逃げだしたいさ。

「……兎月」
「……ん？」

やっと口を開いたか。用件があるならさっさと言いなさいよ。

「……」
「……」
「……」
「……なんだよ？」

ためるほどの重大なことか？　言えばジュースくらいすぐ買ってきてやるよ。一応はあなたの下僕やってますから。

「……怒ってる」
「はぁ？」

怒ってる？　俺が？　いやいや、怒ってないよ。逆じゃないの？

「……朝から怒ってる」
「いや怒ってないよ」
「……怒ってる」

睨みつけてくるあなたの方がよっぽど怒ってるじゃんか。

「メール無視した」
「返信した。『忙しい』って。俺は無視なんかしてません」
「……怒ってる」

な、なんだよこの無限ループっ！　終わりがないぞ？

「だから怒ってないって。何をどう見たらそんな結論に行き着くんだよ」

「……」
「はいまた黙る」
「……怒ってる」

はいまたそれ！　はぁ……マジで終わらねぇよ。昼休みが終わる前に終わらないぞこれ。俺が怒ってるねぇ……。心当たりは……今朝のことだろうな。いやいや、あれは春日が悪いだろ。マナーの悪さを指摘して、うるさいって言われたら、そりゃ怒るだろ。……あ、俺怒ってたのか。

「……あ～、今朝のことな」
「……そ」
「あれはさ、春日がちょっと非常識だったから……」
「……」
「あ～……ごめん」

ぐあぁ！　謝ってしまった。俺は悪くないはずなのにぃ！

「……」
「でもあれは俺なりの注意だったんだよ。他の乗客の席を奪ったら駄目だよ。空いてなかったら立たないとさ。それがルールだし。いやもうルールとか以前に常識なの」
「……」

……黙ったままじゃ、話を聞いているかどうか分からないんだけど。

「あ～……俺はさ、春日に普通でいてほしいんだよ」
「……」
「春日に他の人から悪い印象を持たれたくないんだ。春日と一緒にごく普通に通学したいから」

「……」
「だからさ、もうあんなことはやめような？」
「……分かった」
おぉ！？　通じた！　春日に通じたよ！　話せば分かるじゃんか。
「それならいいんだ。俺が言いたいことはそれだけ。春日は何か言いたいことある？」
「朝……無視した」
あれは次に命令されたら逆らえないと直感したから急いで逃げたんだけど……。
「あれは普通にごめんなさい」
「……許さない」
うえぇ！？　許さないってなんスか！？　そんなキャラでしたっけ！？
「じ、じゃあどうしたら……そ、それなら今度何か奢るよ」
「……」
「ほら勉強教えてくれたお礼も兼ねてさ、テスト終わったらどっか遊びに行こう。ね？」
「……」
や、やっぱ駄目か……。
「……分かった」
……え……いいの！？　春日さんいいんですか？　俺ですよ？

下僕の俺なんかとですよ？

「い、いいの？」

「うん」

それなら俺も大喜びだけど、ちょっぴり意外だったなぁ。

「……」

「もう怒ってないからそんな睨まないでよ。俺が悪かったって。ホントごめん」

「……別に」

ふぅ、なんとか和解できました。

「ねぇねぇ、あそこのテーブル良い感じだよね」

「うんうんっ」

ちょ、周りの人達冷やかさないでよ。俺なりに頑張って作った空気なんですから。

第４４話　とりあえず学園祭は体育館にいればだいたい盛り上がるから（前書き）

前回でキャラ紹介は一応終わりました。
また新キャラが出てきたらすると思います。

そして感想待っております。あざとくないよね？

第４４話　とりあえず学園祭は体育館にいればだいたい盛り上がるから

「それじゃあ宴の始まりだぜぇ！　皆、盛り上がろうぜー！」
「イエーッ！」
「あー、へいへい♪」

体育館のステージ。照明は落とされ、唯一の光であるスポットライトを浴びるのはクラスメイトの男子数人。拙いダンスと歌を披露している。

「うっ、ゴホッ。む、むせた……」
「お、おい、歌ないと踊れないだろ」
「い、いいから適当に音に合わせろよ。っあ、の、えっと……ぁ、ぇっと……」

あまりにグダクダすぎてリハかと思える程だ。こんな白けた空気は初めてだ。夏前だってのに寒気がした。失笑も起きない完全沈黙の観客。

「……なぁ、米太郎」
「……どうしたよ、将也」
「なんで俺たちはここにいるのだろうか」
「そりゃ遠藤達からステージで演奏するから見に来いって言われたからだろ」

ステージの中央でメジャーなアニメの主題歌を歌うクラスメイトの遠藤。声全然出てないし、他の奴らもまともにステップすら踏めていない。全員しどろもどろ状態。人に見せれる演奏じゃない。恥ずかしいならエントリーするなよ。

「どうするよ米太郎」
「ドロンしようぜ」

なんか古い表現だなそれ。完成度の低さと観客の盛り下がりが見事に比例した体育館から出ると、眼前に映る様々な屋台やお店がズラリと。

「さすがは学園祭、賑やかだな」
「今の体育館内は引く程寒いけどな」

それはもう忘れようぜ。あいつらも頑張ったんだから。あ、俺の中で過去のことになってる。

「何か買ってくか？」
「野菜の何か買おうぜ」
「野菜の何かって何だよ」

六月の始め、今日は高校の学園祭である。隘路であった中間考査も無事終わり、赤点が一つもなかったのは火祭と水川さらに春日のおかげである。勉強教えてくれてありがとう！　赤点回避に加えて、最高順位取れました！

「どこ行く？」
「とりあえず教室に戻ろうぜ」

特に行きたい場所もないしな。ラムネを飲みつつ米太郎と二人で教室へと向かう。学校は開放されており、一般の人も多く来場している。来場者のほとんどは生徒の親とか兄弟とか家族関係だと思うけど。

「……おい将也」

米太郎が小突いてきた。その顔はすごく真面目だった。はい？　どした？

「なんだよ」

「前見ろ」

囁くように小さな声で話す米太郎から視線を前に切り替えると……目の前には廊下をくねくねと歩くスタイル抜群の女性が……！　谷間パネェ！

「……八十七点だな」

「おっぱい大きかったな。あれ絶対誘ってるよ。やべ、興奮してきた」

などと中学生みたいなやり取りをしているうちに教室へ到着。ちなみにいつもの教室ではなく違うクラスの教室を使ってうちのクラスは模擬店を開いている。教室に入ると一人の女子生徒がこっちに気づいた。

「あれ？　兎月と佐々木のシフトはまだでしょ？」

僕らの親友、水川だ。エプロン姿でこちらに寄って来た。

「暇だから」

「遠藤君達のステージ見に行ったんでしょ。どうだった？」

「ひどかった。普通に歌えばよかったのに無理にダンスを取り入れてさ。もう忘れたいくらい。それはそうと、結構お客さん入ってる

じゃん」

ちなみにうちのクラスではドーナツ屋さんをやっている。お店で買ったドーナツをそのまま売っているだけなんだけどね。あとはジュースとか。これもお店で仕入れたやつだ。さすがにドーナツを一から作るわけにはいかないからね。これこそ学園祭クオリティー。

「手作りエプロンの効果かもねっ」

その場でくるりと一回転する水川。確かに可愛らしい。水川のスペックに加え、フリフリのキュートなピンクのエプロンがさらなるパワーアップ効果をもたらしている。その辺の店員より格段に可愛い。俺が一般の客だったら「おっ」とか言ってドーナツを注文していることだろう。

「確かに可愛いな」

米太郎も俺と同じことを考えていたようだ。

「で、これから二人はどうするの？　暇ならお店手伝ってよ」

「コーヒーと一番安いドーナツを二つずつ」

素早く注文して俺と米太郎はテーブルに着席。テーブルと言っても机を四つあわせた上にテーブルクロスを敷いた簡易なものだ。でもこれが学園祭っぽくていいよね。

「クラスメイトでもお金は取るからね」

そう言って水川はテーブルから去っていった。分かってるよ、だから一番安いやつ頼んだんだよ。

「それにしても、いい眺めじゃないか。うへへへっ」

エプロン姿のクラスメイトの女子をじろじろと観察する米太郎。口から洩れる下品な笑い声が気持ち悪い。メイド喫茶にでも入ったつもりか。周りは全員クラスメイトだぞ。

「あ、兎月君だ。お客さんなの？」

クラスメイトの一人が話しかけてきた。やっぱ手作りエプロン姿が可愛い。なんか可愛い。

「うん、普通に客として来ているよ」

「じゃあ知り合いということでドーナツ一つサービスね」

お、マジでか。いやー、なかなか気の利いたことしてくれるじゃんか。ヤバイ、好きになりそう。ドーナツが一つだけ乗った皿がテーブルに置かれる。

「え、将也だけ？　なんで俺の分はないんだよ！？」

向かい側で米太郎が子供のように喚き出した。

「佐々木君、視線がいやらしい」

うわぁ、米太郎嫌われてるよ。そんな目で女子を見てたからだろ。米太郎に冷たい視線を投げかけてクラスメイトの女子は去って行った。

「うっ……は、反省します」

てことは、このドーナツも米太郎への当てつけで持ってきたんだろうな。俺のこと好きなのかな!?　と浮かれた自分が恥ずかしいです……。

「あっ、桜~。来てくれたんだ」

俺達のオーダーの品を運んでいた水川が嬉しそうな声を上げた。教室の入口を見ると、女子数人と火祭の姿が。

「遊びに来たけど……かなり繁盛してるね」
「や~ん、真美ちゃんのエプロン姿かーわいーいーっ」
「えー、ありがとぉ」

女子達がキャピキャピ喋りだした。早くコーヒー持ってきてよ。ドーナツで喉パサパサになっちゃう。

「そういえば桜、ちゃんと兎月のこと誘った?　あいつ野菜コンビで行動してるよ」
「い、いや誘ってないよ……」
「駄目だよ桜っ。ちゃんと言わないと」
「そうだよ。私達とじゃなくて、兎月君と回ればいいじゃん」

いつまでキャピキャピやってんだよ。また米太郎がいやらしい目で観察しだすぞ。

「ちょっとお店の人ぉ?　注文したのがまだこないんだけどぉ」

やたら甲高い声の米太郎。クレーマーみたいなキャラを演じているのだろう。テーブルをトントンと指で連打している。すると、水川

と火祭がこちらへやってきた。

「おぉ、火祭。こんにちは」
「こんにちは」
「お待たせしました、ご注文の品です」
「ぐへへっ、姉ちゃん良いカラダしてるじゃねぇかよ」

四者四様の言葉が飛び交う中、米太郎の台詞と同時に働いているクラスメイトの女子全員が悲鳴が上げた。そりゃ、あんなこと言ったらそうなるわな。

「グループで回っているんだな」
「それなんだけど……」
「皆、箒持ってきて」
「待った水川！　ほんのジョークだって！」

目の前で米太郎が箒でシバかれているけど、気にしないでおこう。

「よ、良かったら一緒に回らない？」
「え、火祭のグループと？」

女子しかいないじゃん。無理無理、恥ずかしくてまともに喋れないって。

「そうじゃなくて……わ、私と二人で」
「火祭と？　他の皆はいいの？」
「皆にはちゃんと言ってあるから大丈夫。……駄目かな？」

いやいや、火祭と二人で学園祭を楽しめるなんて超ハッピーイベントだよ。歓喜で雄叫び上げそうなくらいに。

「俺なんかで良かったら大歓迎だけど」
「良かったぁ」

火祭みたいな可愛い子が誘えば誰だって返事はオーケーだって。もっと自分に自信持つべきだと思うよ。

「じゃ、行こっか」
「うん」

火祭と一緒に教室から出る。

「やったね桜。その調子でカンバッ」
「いててて……あれ？　将也いないじゃんか！　どこ行ったんだよ！？」

第４５話　学園祭　～火祭とボクと、時々、ダーツ～

「で、どこに行く？」
「気になるのがあったら入ってみようよ」

人で賑やかな廊下を火祭と二人で歩く。教室にドーナツと米太郎を置いてきてしまったが水川達が勝手に処理しといてくれるだろう。せっかく火祭が俺なんかを誘ってくれたんだ。思いきりエンジョイしないとね。

「そういえば一組は何やってんの？」
「ホットケーキ屋をしているよ」

ホットケーキか……二組はドーナツだし、一組と若干カブってるな～。確か三組は飲食店やってなかったし。

「お、タピオカジュースだって。入ってみようぜ」
「うん」

火祭と中庭でベンチに座ってタピオカジュースを飲む。こういう時に飲んだり食べたりするのってやたらと美味しく感じるんだよねぇ。どうしてだろ？

「ねぇ、体育館の演奏見に行ってみない？　面白そうだよ」
「……あ～、今は行かない方がいいと思う」

まだ遠藤達がすべっていることであろう。さすがに級友が恥かいているところをもう一度見に行く気にはなりません。

「おっ、兎月ー」

不意に名前を呼ばれた。振り返った先には駒野先輩が。無造作ヘアーにいつものヘラヘラした笑顔。俺の所属するボランティア部のトップ。

「駒野先輩じゃないですか。受験勉強はいいんですか？」

「学園祭で勉強する奴なんていないだろうが」

それもそうですね。三年生も今日くらいは羽を伸ばす的なやつですか。

「ところで兎月、ボランティア部は何もやってないじゃないか」

「文芸部なら作品を展示するとかできますけどボランティア部は何をすればいいんですか？」

「えーっと、ほら、こう、何かあるじゃん」

具体的な案は出ないんですね。確かにボランティア部でも学園祭で何かやろうと会議はしたものの良い案は浮かばず、参加してもどーせ後片付けとか押しつけられるんじゃね？　と最終的にはその結論に至り参加を断念したのだ。ボランティア部はパシリじゃねーっつの。

「さらにところで兎月……彼女とデートとはなかなかやるじゃないか」

火祭と俺を交互に見て駒野先輩はニヤニヤと笑ってきた。ちょ、やめてくださいよ。冷やかしご勘弁。火祭は彼女じゃありません。そりゃ彼女だったら万々歳の拍手喝采ものだけど俺に火祭はもったいないでしょ。ヘタレな俺より火祭には似合う殿方がいるってわけですよ。でもその殿方許さねぇ……！　火祭の彼氏だぁ？　一発ぶん殴ってやる。

「そういう先輩は一人で回っているんですか？」

見たところ、一人だけみたいですけど。

「トイレ行ってたら連れに置いていかれてな。じゃ、学園祭楽しめよ」

ニヤニヤ顔のまま駒野先輩は去っていった。……今考えると、確かにこの状況ってデートなのかな……うぇ!?　デート!?　マジか俺、マジですか俺ぇ！　やべぇ、そう考えると緊張してきた……！

「あ、あああのききき今日は快晴日和ですこぶる元気で」

ぐあぁ!?　テンパりすぎだ俺っ！　落ち着け、落ち着くんだ。クールダウン、そうだ冷静になろう。

「……」

「ひ、火祭？」

なんでそんな顔が赤いんですか？　さっきの駒野先輩の冷やかしはそんな気にしなくていいよ。あの人ノリと気分で会話する人だから。あ、俺と付き合ってるみたいな誤解受けたから？　そ、それはごめ

んね。やっぱり嫌だよね、勘違いされたら。

「とりあえず移動しよっか」

「う、うん」

……なんだろ、この空気。なんかきごちない感がハンパないんだけど。う～ん、よくよく考えると、どうして火祭は俺なんかを誘ったのだろうか……。二人きりでとなるとデートってことだし。も、もしかして火祭は俺のことが好き……なわけないよな。さっきの教室での反省を活かすんだ。そういった勘違いが後に大きな恥を呼ぶことになるぞ。単に火祭は俺に気を遣ったのだろう。どうして気遣ったのかは知らないけど。

「おぉ！　兎月と火祭さん！　良かったらうちの教室で遊んでいけよ！」

何気なく廊下をぶらぶら歩いていると周りの騒音にも負けないくらいデカイ声が俺達の名前を呼んだ。この大声はあいつに違いない。

「どうしたよ山倉」

とある教室から顔を出しているのは同じボランティア部の二年生の山倉だ。特徴、声がデカイ。それだけ。

「うちのクラスで簡単に遊べるゲームやっているんだ！　ちょっとやっていけよ！」

そうか、三組はアトラクションをやっているんだったな。山倉は三組だし。

「寄ってみよっか？」
「うん」

教室の中には輪投げ、ボール投げ、ダーツとどれも投げる系のゲームばっかりだった。単一だなおい。もっとバラエティに富んどけよ。

「それぞれのゲームで得点をつけるんだ！　三つのゲームの合計点に応じて、貰える賞品が変わるからな！」

おぉ、結構面白そうじゃん。凄いな三組。

「ちなみに全てのゲーム終了時に係員の誰かとじゃんけんをしてもらう！　勝てば得点はそのまま、あいこで得点半減、負けたら０点になるから気をつけろよ！」
「おいおい！？　何最後にとんでもルール設けてるんだよ。じゃんけんに勝っても得点そのままって……せめて倍にしろよ」
「甘えるな兎月！　そんなことしていたら皆で用意した賞品がすぐに底をつくわ！　ここはシビアな業界なんだよ！」

まあ無料でやってるみたいだし、しょうがないよな。さすがは学園祭クオリティー。

「んじゃ、やるよ」
「ノリノリだな兎月ぃ！　最初のゲームは『リングスロー』だ！」

ノリノリなのはお前だろ。そして名前。輪投げを簡単な英語に変えただけじゃないか。

「投げれるリングは三つ！　棒の距離、長さによって得点は違うからな！　高得点目指してファイト！」

「火祭、先に投げていいよ」
「私は後でいいよ。君が先に投げてよ」
「俺は火祭に投げてほしいの。ほら、頑張って」
「う、うん、分かった」

ちなみに火祭が教室に入ってきた時点で三組の男子がざわつきだした。もちろん良い意味で。火祭は今や二年を代表する人気生徒になっている。もし男子で女子の人気投票をしたら間違いなく上位だ。今だって火祭とカップルみたいなやり取りをしている俺に妬ましげな視線が集中している。ははっ、かなりのアウェー感。

「え、えいっ」

火祭の可愛らしい掛け声に男子達が、おぉ！と息を呑む。こいつら、アイドルを見るような目で火祭を見てるよ。火祭の投げた輪は緩やかなカーブを描いて一番手前の棒に入った。

「イエーイ火祭さん！　お見事、三ポイントっ！」
「イエーイ！」

山倉に続いて他の男子も歓喜の声を上げる。こんなに盛り上げてくれるんだな。……いや、火祭だからか。次に俺が投げた輪っかは見事に一番遠い棒に入ったのにさっきみたいな大歓声は起きなかった。パラパラと起こる消えかけの拍手。

「はい二十ポイント」

嘘、山倉の声が小さい！？　元気な大声だけがお前の取り柄だろうが！　くそっ、差別だよ。

「やったねっ」

それでも隣で火祭が手を叩いて喜んでくれているから気にもならないけどねっ！　火祭可愛いっ！　嫉妬の矢が体中に突き刺さる中、次のゲームはボール投げ。山倉曰く、

「その名も『一球入魂クラッシュボール』！」

二メートル程先には空き缶が積まれてある。それを倒した数で得点が決まるらしい。投げれるのは一球のみ。

「火祭が投げていいよ」
「でも君の方が上手そうだし、君が投げた方が……」
「火祭がたくさん倒してくれたら、すっげぇ嬉しいんだけどなー」
「が、頑張ってみる！」

一生懸命な姿が超可愛くてもう十分にすっげぇ嬉しいんですけど。そしてどっかから俺に向けて舌打ちが聞こえたよ。火祭人気すげー。

「それじゃ火祭さんのチャレンジです！　……この一球は絶対無二の一球なり！」

山倉、もしかしてこのゲームの度にその台詞言ってるのか？　気合いの入れようも本家みたいだし。

「え、えいっ」

火祭の投げたボールは見事、十個積まれた空き缶のうち六個を倒した。巻き上がる歓声。吠える松お、じゃなくて山倉。

「六個×五ポイントで三十ポイント獲得ー！」
「やったな火祭っ」
「うんっ」

喜ぶ火祭の頭を撫でたい衝動に駆けられたが、彼氏でもない俺がそんなことするのは良くないので我慢した。偉いぞ、俺。

「最後のゲームは『ダーツ』だ！」

なんで最後は普通のネーミングなんだよ。なんか考えろよ。

「投げれるのは三投！　さあ高得点目指してファイト！」

的は中央部分が十点で、そこから円状の白黒のストライプ型で外になるごとに九点、八点…か。

「火祭、俺に任せてくれ」
「え？」
「あっ！　ズリーぞ兎月！　お前がダーツ激上手いのは同じ部活の俺がよく知ってるぞ！」

ちなみにダーツ部でない。ただボランティア部の部室にダーツがあるといっただけだ。そこで一年間磨いた腕前は伊達じゃないぜ！

「パッジェロ、パッジェロ！」

これまでにない大声で邪魔しだした山倉。はっ、その程度の野次で俺の集中は崩れないぜ。

「ねだるな、勝ち取れ、さすれば与えられん！」

「くっ、お前は将也・サーストンか！」
「おらおらおらぁ！」

十点、九点、九点！　ふっ、まあまあかな。

「凄いよ！」

火祭も嬉しそうだ。ダーツ上手くて良かったぁ！

「お、大人気ないぞ！」

山倉になんて言われようが関係ないね。とにかく火祭から好印象持たれるのが何よりも大事なのだ！　ということで全てのゲームが終了。俺達の総得点は、

「な、なんと八十一ポイントぉ！」

それがどんだけ凄いのかは分かんないけど、とりあえず喜んでおく。

「では最後にじゃんけんチャーンス！　勝ったら得点はそのまま、あいこで半減、負けたら０点！　勝負は一回！　さあいってみよう！」

これのどこがチャンスだ。なんのメリットもないぞ。

「火祭いってきて」
「私でいいの？」
「あぁ。でな、出す時に……」
「……うん、分かった」
「さあ、挑戦するのはどっち！？」

山倉の問い掛けに火祭が前に出る。と同時に歓声が起こる。やっぱ火祭大人気だな。俺だったら遠藤のステージ並に白けていたことだろう。

「火祭さんでも手加減はしないからね！　最初はグー！」
「山倉君がグーを出してくれるとすっごく嬉しいなぁ」
「じゃんけ、うえぇ！？　ちょ、いや、そんな……あ！」

じゃんけんポン。火祭パー、山倉グーで勝負は決した。

第４６話　米太郎に任せた

賞品のお菓子を食べつつ俺と火祭はまたぶらぶらと校内を歩く。立ち食いは駄目だって？　まあまあ、今日くらいはいいじゃないの。三組のアトラクションで遊んだ後は古本を売っている文芸部や生態研究レポートを張り出している生物部や自作の漫画を配っている漫画研究部と色々と回っていった。火祭と一緒なら、どこ行っても楽しいよねっ！

「あ、帰ってきた」

ぐるりと一周回って再び二組の営業するドーナツ屋さんに戻ってきた。現在お昼前とあってかなり繁盛している。うお、こんなにも人が来るものか～。

「楽しんできた？」
「すげーエンジョイしてきたよ。ところで米太郎は？」
「佐々木は裏で玄米茶作ってるよ」

米太郎だけに玄米茶か。とりあえず頑張ってるっぽいな。

「桜は何時にお店に戻らないといけないの？」
「私は十二時からだから、そろそろ戻らないと……」

そっか、火祭も仕事があるのか。一組はホットケーキ屋だから今頃からお客さんの入りも増えてきそうだな。というか火祭がいたら売上アップ間違い無しでしょ。

「私も一緒に行くよ。仕事も終わったことだしホットケーキ食べて

みたいし」

そういえば水川はエプロンを着ておらず制服の姿だ。せっかくだから写メでも撮っとけばよかったな。いやだって普通にエプロン姿可愛かったし。

「兎月は今からでしょ？」

「おう」

俺も十二時からのシフトに組み込まれている。つまり働かなくてはならないというわけだ。

「じゃ桜行こっか」

「うん。付き合ってくれてありがとね」

火祭がこっちを向いて笑顔でそんなことを言ってくれた。はぁうわぁ癒される。

「こっちこそ俺なんかと回ってくれてサンキューな。すっげー楽しかった」

礼を言って火祭と水川は教室から出ていった。さて、俺も今から一時間頑張りましょうかね。そう思った矢先だった。

「兎月」

「はっ！？　だ、誰だ……って、春日か」

気がつくと後ろには春日が立っていた。あなたは人造人間ですか。気配を感じなかったぞ。そして戦闘能力も１８号並に高いし。ローキックならたぶん学校二位だと思う。一位はもちろん火祭。

「……仕事？」
「あぁ、ちょうど今からだな」
「……」
「そういう春日はどうなの？　一組はホットケーキ屋やっているでしょ」
「……今終わった」

なるほど、春日と火祭が入れ替わりで交代というわけか。

「良かったらドーナツ食べてく？」
「……」

無言で近くのテーブルに座る春日。食べてくれるようだ。

「どれがいい？」

春日にメニュー表を見せる。

「……これとこれ」
「ちょっと待ってね」

巨大なダンボールで隔てられた裏側へと移動する。そこでは注文の品の準備で慌ただしかった。せわしなく動きまわるクラスメイトの皆さん。

「佐々木、いつまで玄米茶作ってんだよ。お前はレジ係だろうが」

その一隅で一心不乱に玄米茶を作っている米太郎がいた。

「まあまあ、とりあえず飲んでみろよ」
「何言って……うまっ！　この玄米茶ハンパなく美味いぞ」
「ふふんっ」

何やってんだよこいつらは。仕事しろよ。今が一番忙しいんだから。

「酒井、？と？を一個ずつ」
「お、おお分かった」
「将也か。とりあえずこれ飲んでみろよ」
「後でな。お前は紅茶の準備だ」

男性用のエプロンを身につけ、皿とトレイを準備してクラスメイトの酒井からドーナツを受け取る。

「米太郎、紅茶は？」
「はいっ」

紅茶をトレイに乗せ、春日の待つテーブルへと向かう。お待たせ春日お嬢様。

「お待たせしました、ご注文の品です。どうぞごゆっくり」
「……」

春日とは仲良いし（？）、どうやら春日は一人みたいなので向かいの席に座ることにします。春日はしばらくドーナツと見て俺を見た後、一つ手に取る。

「美味しい？」
「……」

黙ってドーナツを食べ始めた春日。なんか小動物みたいな食べ方だよなぁ。もぐもぐって音が聞こえてきそうなくらいだ。とても可愛らしいと思う。

「見るな」

ジロッと睨まれてしまった。ヤバイヤバイ。春日の機嫌を損ねると、きついローキックを食らわされるので注意しなければ。あれってたまに尾を引く怪我になる時もあるからタチが悪いんだよぉ。慌てて春日から目線を外す。僕は何も見ていませ～ん。アウトオブ眼中。……なんか使い方違う気がする。

「……」
「……」
「……これ、何？」
「え？」

もぐもぐ食べていた春日だったが、見ると春日は紙コップを持ったまま、その中身を凝視していた。それは紅茶でしょ。ちゃんと米太郎に指示して……はっ！？

「ちょ、ちょっと飲ませて」

春日からコップを受けとって紅茶を少しだけ口に含む。それは見事に紅茶でなかった。そして見事な玄米茶だった。美味しいだなんて知ったこっちゃない。

「米太郎ぉ！　お前の自信作は出さなくていいんだよ！」

レジの前で、バレちゃった。てへっみたいな顔をする米太郎。あの

馬鹿が。ここにいらっしゃる春日お嬢様はなぁ、紅茶しかお飲みになられないんだよ。毎日パシリやらされているからそれなりに春日の好みを把握しちゃったよ！　ちょっぴり悲しい。

「ごめん、今すぐ新しい紅茶用意するから」

だから蹴らないで。頼みます！

「……これでいい」

……えっ？

「いいの？　これ玄米茶だよ？」

「これでいい」

はあ、春日がいいって言うならそういうことでいいのでしょう。んだよ、いつも紅茶紅茶うるさいくせしてさ～。玄米茶でもいいんですか。だったら今度から紅茶の代わりに玄米茶買ってきますよ。……そしたら春日に蹴られそう。

「んじゃ、俺は仕事に戻るね」

そろそろ仕事に戻らないとね。こうやって春日と二人のほほんとしているのもいいけど、仕事は仕事。責任持ってやらないと皆に申し訳ない。

「何かあったら俺に言ってね」

どうぞごゆっくりドーナツをお楽しみください。春日の座るテーブルを後にして、さあ仕事開始。俺の仕事はオーダー係だ。お客さん

の注文を聞いたり、品を運んだりする仕事。水川みたいに可愛くないが（そりゃそうだろ）、俺なりの接客スマイルで頑張る。今の時間帯は飲食店が特に忙しい。まったく嫌な時間帯にシフトが入ってしまったもんだ。あー、しんどい。でも頑張らなくちゃ。

「ま、将也！　電卓が壊れた。どうしよ？」

レジで米太郎があたふたと喚いている。

「落ち着け、暗算で頑張るんだ」

「数学赤点だった俺に三桁の暗算は辛いよ。もれなく繰り上がりを間違える自信があるね」

「つーか予備の電卓が机の中にあるだろ」

「あ、ホントだ」

昨日の打ち合わせで水川が言ってただろうが。何を聞いていたんだよ。この野菜馬鹿！

「兎月、ステージで恥かいた遠藤が傷心で使い物にならない！　どうしたらいいんだ？」

「広報の方の仕事に回せ。で、代わりに広報から渡部君を連れてこい。遠藤の代理だ。そして遠藤、俺はお前の歌声カッコイイと思ったぜ！」

実際のところ聴いてないけどな。だって寒かったし。とりあえず嘘でもいいから励まさないと。

「兎月君、紙皿が切れかけているんだけど……」

「隣のクラスに余りがないか見てくるんだ。なかったら家庭科室からもらってこい。つーか、なんでも俺に聞かないで！　俺、実行委

員じゃないから」

あぁ！　なんで俺に聞くんだよ。俺だって命令するより命令される方が慣れているんだから。春日のおかげでねっ！

「……」

「ん？」

後ろで誰かが俺の服を引っ張ってきた。お客さんか？　後ろを振り向くと、そこには困った表情をしている春日が。

「……」

「どうかした？」

「ちぇ、彼氏がいたのかよ」

「んだよ」

春日の後ろで若い二人組の男が不愉快そうに舌打ちすると教室から去っていった。ガラの悪い奴らだったな～。もしかして、

「さっきの奴らにカラまれたのか？」

「……」

黙ってコクリと頷く春日。そりゃ春日みたいな美人さんが一人でドーナツ食べてたら声かけられるわな。ナンパされるとはさすがですね。

「ほら、もう大丈夫だから。席に戻っていいよ」

「……」

……えーと春日さん？　服掴むのやめてくれません？　俺も仕事に

戻りたいからさ。春日は俺の服を掴んだまま動こうとしない。え、ちょ、もう大丈夫だって。

「将也」
「ん？　どうした米太郎」

今色々と忙しいんだよ。繰り上がり計算の仕方は今度教えるから。

「春日さんと行ってこいよ」
「はぁ？」
「……はぁ」

俺の疑問「はぁ」を溜め息「はぁ」で返した米太郎が耳元で囁いてくる。

「春日さんはお前のこと待っているんだよ」
「春日が？」
「付き合っているんだから当たり前だろ」

だから付き合ってないから。

「春日さんを一人きりにしていたら、さっきみたいに他の男にカラまれるぞ。だからお前は春日さんと二人で学園祭楽しんでこい」
「店はどうするんだよ」

チーフ気取りで言うのもアレだが、俺がいなくて大丈夫か？

「心配するな、俺がどうにかする。な～に、俺特製玄米茶があれば乗り切れるさ」

そう言って米太郎は俺から離れると後ろの春日に向けて、ニパァと笑いかける。

「ねー、春日さん。玄米茶美味かったでしょ？」

「……」

「……あ、あれ？」

無表情で米太郎を見つめたまま春日は口を開こうとしない。というか服離して。あ、米太郎が泣きそうだ。

「春日、さっき玄米茶飲んだだろ。どうだった？」

「……美味しかった」

だってよ米太郎。

「な、なんでお前の問いかけには答えるんだよ」

再びヒソヒソ声で喋りだす米太郎。そんなこと知るかよ。俺だって無視されることあるし今のもたまたまだろ。

「とにかく行ってこいって。春日さんもさっきまで一組のお店で働いていたみたいだし、どっか回りたいだろうぜ」

俺の肩をポンポンと叩いて米太郎はお客さんのオーダーを取りはじめた。なんか米太郎が頼もしく見えた！　……さて、

「あ～、春日。良かったら一緒に回ってみない？」

「……」

返事もしないまま春日は教室から出ていった。離さなかった服を簡

単に離して。ふぅ、俺も伊達に一ヶ月以上も下僕やってるからな。今の態度がイエスかノーかの判別ぐらいつくようになったよ。

「で、どうするんだよ？」

そのニヤニヤ顔やめろ。お前といい水川といい何がそんなに面白いのやら。分かってるっての。

「春日の代金ツケといてくれ」

エプロンを脱ぎ捨てて教室から出る。待ってよ春日！

第47話　学園祭　～春日とボクと、時々、ボイン～

お店を米太郎に任せて、春日と二人でワイワイガヤガヤと賑やかな廊下を歩く。昼になってさらに人が増えた気がするな～。春日一人だと間違いなくナンパされるね。うーん……俺がいるから安心ってわけじゃないけどさ。とりあえず誰もナンパしてこない。

「どこか行きたいところある？」
「別に」
「お腹減ったから何か飲食店でいいかな？」
「……」

黙って頷いたので、とりあえず飲食店を探すことに。う～ん、そんなにがっつり食べたいわけじゃないし。なんか軽食的なやつ食べたいな……そうだ、ホットケーキを食べよう。てことで一組にレッツゴー。

「ホットケーキ食べようぜ」
「これ」
「……ん？」
「これ」

春日の視線の先には甘味処と書かれた看板が。え～、デザート系じゃ腹はふくれないよ。もっとふっくらしたやつ、そうホットケーキ！

「いや、これもいいけど俺の気分的にはホットケーキ」
「これ」

ちくしょうっ！　この娘は一度言ったら聞かないからなー。しょう

がない、甘味で腹を満たすか。中に入ると、女性客が大勢いた。ヤベ、なんか居心地悪い。

「ご注文は？」

「え～っと、かき氷のいちご味とロールケーキで」

「かしこまりました。少々お待ちください」

つーか春日すごいな。さっきドーナツ食べたばっかじゃん。女の子は甘い物に目がないの～的なやつですか。……ふと、隣のテーブルに目がいった。なんとなく見たことがあるなと思ったら、そこには午前中に米太郎と見た八十七点の女性がいた！　まだいたんだなぁ。今朝と変わらず見事な巨乳だよな～。うわぁ、ムチムチだよ。でへへへっ……痛いっ！？

「ぐっ、なんだよ…春日……！」

いきなり脛蹴りはキツイって！　そしてなぜかいつもより威力が強い気が……。

「デレデレするな」

え、顔に出てた？　マジか。恥ずかしい。お姉さん、俺そんなやましい気持ちはないですからね。だから前かがみになって谷間見せてください！

「いやらしい目をするな」

春日にもう一発蹴られた。だから同じ箇所蹴られると超痛いんだって！　これ絶対内出血してるね……。間違いない、患部が変な痙攣起こしてるもん！

「ぐおおおぉぉぉっ！？」
「お、お待たせしました」

テーブルで悶える俺に引いたのか、店員の生徒は引きつった笑みでかき氷とロールケーキを置くと、すぐに去っていった。気がついたら巨乳のお姉さんもいないし。あ～、もう一回拝みたかったな。Ｆカップはあったよね～、えへへっ。

「いやらしい目をするな」
「別に春日に向けてるわけじゃないし」
「うるさい」
「がっ！？」

またもや足に激痛がっ！　さ、三発目は駄目だって。痛すぎて意識が薄れていく……こ、こらえろ俺。ぐあぁ、弁慶の泣き所！　あの屈強なゴツイ体をしたおっさんでも痛いのだから平凡ボディの俺が耐えれるわけがない。俺の弁慶がこんなに可愛いわけがない！　ん？　なんかごっちゃ混ぜになった！？

「ぬうあぁぁ、とにかく脛が痛い！」
「うるさい」
「がっ……よ、四発目……！　た、食べよっか」
「ふん」

あ～、かき氷ひんやりして美味しいわぁ。この冷たさを異様な熱を帯びた足に持っていきたいぐらいだ。足の痛みに堪えつつ、かき氷を完食。さて、次はどこ行こうかな。つーか午前中に火祭と一通り回ったから目新しいものはないと思うけどね。でも春日は初めてだろうし、付き合ってあげないと。

「文芸部とか行ってみない？　本とか売ってるよ」
「……」
春日の了承が出たので文芸部の教室へと向かう。春日はよく本読んでいるからな、きっと楽しいと思うよ。おかげで俺は図書室に何度も本を返しに行かされたよ。文芸部の教室、じっくりと本を吟味する春日。そういや火祭もこんな感じだったな。芥山の作品が好きとか言ってた。俺は読んだことないから、サッパリだけど。やっぱ頭の良い人は本を読むんだなあ。
「……これ」
「お、何か気になるのあった？」
春日の持ったぶ厚い本。何やら難しそうですね。ゲームのＲＰＧなら『上級魔法の心得・その参』みたいな名前がつきそうだ。めっさ極太。読むのに四年はかかりそうだぞ。そして習得に十年かかりそう。もし『上級魔法の心得・その参』だったらの話だけど。
「五十円って安っ。買えばいいじゃん」
「……買う」
「ありがとうございました」
春日も満足したようだし、文芸部の教室をあとにする。無論、購入した本は俺が持っていますよ。普段から荷物持ちはやっているし、こんな重い本を女の子に持たせるわけにはいかないでしょ。
「ねぇ、体育館行ってみない？　演奏とかやってるよ」
やっぱ学園祭といえばライブでしょ。歌って踊って体育館内はヒー

トアップ、盛り上がりまくるってわけだ。ギター部の演奏とか観てカッコイイもん。俺もギターやってみてぇ！　とか思っちゃうんだよな。そして挫折！　ギター難しいよぉ。

「……」

コクリと頷いてくれたので、体育館へゴー。最近の春日は質問するとちゃんと反応してくれるから助かる。黙って睨まれるだけじゃ何を伝わらないからなー。春日も成長しているんだなぁ、うん。パパ嬉しい。

「お父さんは嬉しいよ！」
「うるさい」
「蹴らないでぇ！」

「メンバー紹介するぜ。ギターのアキト！　ベースのカズ！　ドラムのテツキ！　そしてボーカルの俺、タイガだぜ。よろしく！」
「わーっ！」

体育館内はめちゃめちゃ盛り上がっていた。人でごった返し、館内から溢れんばかりの歓声。そりゃ普通に歌上手いし、ちゃんとした

演奏をしているし。なんだか本当のコンサートに来た気分。テンションが上がるよ！　ヒャッハー！

「前の方に行ってみよっか？」

俺はすごいノリノリだった。ただ、隣のこの方は違ったみたい。

「うるさい」

「え？」

「ここうるさい」

うるさいって……こんなもんでしょうよ。これが学園祭だぜ！　と言っても過言ではない。ステージぎりぎりにまで詰め寄る生徒。熱気、テンションともに最高潮。これを否定されたら敵わないよ。学園祭って何？

「も、もうちょっと見ていこうよ。せっかくだし」

「嫌だ」

ぐあぁ！？　バッサリ切られた！　はぁ……これが春日なんだよなあ。一度言ったら聞かないからな。……しょーがない、来て二分程しか経ってないけど移動しますか……はぁ。

「じゃあどこ行く？」

「うるさくないところ」

学園祭でうるさくないところなんてあるのかよ。どこも人がいて活気づいているんだからさ。

「それなら、もう一回文芸部に行く？　春日、本好きだし」

「疲れた、休みたい」

注文の多い春日さん！　具体的な場所を言ってくれないと、どうしようもないです。ぐっ……痛っ……つーかこの間にも一分程の周期で春日のローキックがきてるんですけど……。痛みが蓄積してきた。ヤバイ、足限界。考えろ、俺。自身の足のために！

「な、なら二組のドーナツ屋に戻っろか」

「嫌だ、疲れた、休みたい」

そんなに休みたいならラブホにでも行きやがれ！　あ～、もう！　他に思いつく場所なんてないよ。でも思いつかないと俺の足は破滅へと向かってしまう。くそっ、マジでラブホって提案してみようかな。……ん、そうだ。

「じゃあさ……」

第４８話　寄り添う眠り姫のボディーブロー

「どうぞお入り～」
「……」

暖かい陽光が差し込み、辺りは静けさで覆われている。いや、ラブホじゃないですよ。そんなピンクの照明とかついてないから。いやいや、ラブホにピンクの照明があるとか知らないけど。いやいやいや、ラブホ行ってみたいけど。……紆余曲折すぎて話の軸が完全に消えてしまった。えっと、俺と春日が向かった先、それは部室棟。学園祭で盛り上がっている校舎とは対照的にここの部室棟に人気は全くない。そりゃ学園祭で部室棟に来るなんてないでしょうし。なので休憩するには持って来いの場所なのである。あ、休憩ってそういう意味じゃないから。相手は春日だし、手を出したら春日の親父さんに抹殺されそうだし。あー、怖い。春日父とは一回しか会ってないけど、できるならもう会いたくないです。

「……ここは？」
「ボランティア部の部室。好きにくつろいでいいよ」

特に何かがあるわけではない。普通に長テーブルとパイプ椅子が数個。あとはダーツがあるくらいのものだ。ごく普通の部室。そして静寂と安らぎの場。ここなら文句ないでしょうよ春日さん。あなたのご要望通り、静かだし休める場所ですよ。

「……」

こちらをじっと睨んできた後、春日は近くの椅子に座って先程買ったぶ厚い本を読み出した。どうやら気に入ってくれたようだ。良か

った良かった。足がやっと苦痛から解放されました。さて、俺はどうしようかな。ステージの演奏を見に行きたいが春日を置いていくわけにもいかないし。ここで時間を潰すしかないか。ま、のんびりしましょう。春日と離れた位置の椅子に腰掛ける。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

……何もやることねえ。え、暇。すごく暇なんだけど……。ダーツしたいけど春日から「うるさい」と言われそうだし、携帯の電池も切れそうだからゲームもできない。つまり、暇なのだ。そう暇。あー、退屈。

「……」
「……」

春日は本の世界に入っちゃったし、俺は一人ぼっち。ホントにやることない。何すれば……妄想でもするか。妄想……そうだ妄想だ。妄想しましょう。よし、ある日突然家に一度も会ったことのない義理の妹がやって来たという設定で。そこから始まる俺と義妹の甘酸っぱい生活ってことで……妄想開始。

「……」
「……」
「……」
「……」

「……」
「……」
「……」
「……」

……うわぁ包丁!?　ちょ、危な……ぎゃあああぁっ!?　はぁ、はぁ……ま、マジかよ……妄想上の架空の義妹に殺されるなんて……！　あああああぁぁ、妄想やめやめ！　なんか疲れたし、寝るか。確か三時までに体育館に集合だったよな。携帯のディスプレイを確認。今は…十二時三十分か……二時間は寝れるな。時間になれば春日がローキックで起こしてくれるだろう。目覚まし時計がバイオレンスなのは我慢するとして、じゃあ寝ますか。おやすみー春日。口では言わないけど俺のモーションで察してくださいね。長テーブルに突っ伏す。ひんやりしてて気持ちいい～。

「……」
「……」
「……」
「……」

……あ、マジで眠たくな…って……き……

「……」
「……」
「…すー」
「……兎月？」
「すー」
「……」

……ぬ、ぬわぁ出刃包丁!?　や、やめろぉ!　……はっ!?　ゆ、夢か。なんで夢の中にまで架空の義妹が出てくるんだよ。そしてなんでヤンデレなんだよ!?　怖いわ。義妹って怖い。俺の義妹がこんなに怖いわけがある!

「つか……マジでぐっすり寝てしまった」

まさか本当に寝てしまうとは。爆睡しちゃったよ。部室が寝心地良いもん。というか寝やすい。ふぁ……なんか暖かいや。もう一回寝たいくらい。

「……今、何時だ?」

開ききってない目でぼんやりと携帯のディスプレイを覗く。なんかポカポカするなぁ。やっぱ二度寝したい。もう目閉じよっかな~。

「……三時三十五分…え……はぁ!?」

一気に体全身が覚醒する。マジか!?　集合時間三時をとっくに過ぎてるじゃないか!　完全に寝過ごしてもうた。ちょ、駄目じゃん!　もう体育館では全校生徒集まって総評とかやってんじゃねぇの!　ちょっと春日っ、どうして起こしてくれなかっ……!?

「な、なんでこんなことに……」

やけに体が暖かいと思ったら、隣で春日が体をくっつけて寝ているではないかっ。……は、はえぇぇぇっ!?　嘘!?　ど、どうして!?　なんで!?　Ｗｈｙ!?　春日は俺に寄り添うようにして頭を俺の肩に乗せている。ち、近い近い近いぃぃっ！　ま、待て。待つんだ俺。とりあえず一回落ち着こう。小説家になろう。クールダウン、はい深呼吸。……色々と疑問があるが、まず最初に……なぜ春日が隣にいるのか。俺の記憶が正しければ春日は俺と大分離れた位置に座っていたはず。なのに今は隣、しかも体がくっついた状態。どうしてだ？　他にも突っ伏して寝ていた俺がどうして上体を起こしているのか、なぜ春日も寝ているのか。疑問がたくさんあるが一つだけ言えることがある。それは……この状況を楽しむべきだ！　春日もまだ眠っていることだし、ちょっとくらい手を出しても……って、だ、駄目だぞ俺っ。春日にバレたら殺されちゃうって。で、でも春日すげー良い匂いするし、サラサラの髪の毛がやけに色っぽく見えるし、スカートがズレて太ももがモロに露出しているし……！　うわぁ、絹のように綺麗な太もも……。俺って太ももフェチだったのか……や、ヤバイ、触りたい。すべすべしていてそれであって柔らかそう。さ、触ってみたい！　つーかスカートズレ過ぎじゃないか！　あ、あと少しで……ぱ、パンツが見えるんじゃないの!?　うわぁ!?　この見えるか見えないかのギリギリ感がより興奮する……って駄目だ駄目だっ！　同級生をそんな目で見たらいかんよ。俺は変態か！　あ～、でもこんな間近でこんなの見せられたら……。だ、だって太もも全部見えてるもん！　眩しくて直視できないよ。いや、しっかり直視するけどねっ。あと春日の顔が近い。横を振り向けば、すぐそこには春日のキュートな寝顔。は、ハンパなく可愛いっ！　整っている顔だとは存じていたが、ちゃんと見たことはあまりなかったからなぁ。こ、

これほどまでに可愛いとは……！　こ、これだけ誘われて何もしないほどヘタレじゃないぞ俺は！　キスの一つぐらいしてや……む、無理ぃ！　できないよぉ！　ヘタレだもん！

「俺のヘタレ弱虫……」

頭がクラクラしてきた。このままじゃイカれしまいそうだ。とりあえず春日を起こさないと。あぁ～、良い匂い～……トロンとしてしまう。

「あ、あの～、春日さん？　起きてくれませんか～？」

「……ん」

ぐあぁぁっ！？　春日の口から洩れた喘ぎ声（？）があぁ！　俺のハートをズッキュンキュン！　悶え死にそう！

「か、春日さん。起きてくださぃ。これ以上は俺の中のビーストが目覚めちゃいそうです」

「……兎月？」

よ、ようやく春日が目を開いてくれた。パチパチと目を瞬く春日。数秒の空白の後、

「き、きゃあぁぁぁぁ！」

顔を真っ赤にして俺にボディーブローをぶち込んできた。ぐはっ！？　普通ビンタじゃね？　なぜにボディーブロー？　すごく痛いし。

「か、春日落ち着いぶぼぇっ！？」

またもやボディーブロー！　ま、マジで痛い……！

「落ち着こう！　とりあえず落ち着こうぜ！　話はそこからだぶへらぁ！？」

がっ、腹が死ぬ……。か、春日と距離を取らないと。近くにいたらフルボッコにされそうだ。

「な、んで兎月がいるの？」

顔を真っ赤にして春日が睨んでくる。なんか、フーッと威嚇する音が聞こえてきそうなくらいだ。うおおぉ、髪の毛逆立っているよ。

「いや、俺も寝ていたから分かんないけど気づいたら春日が隣にいた」

「……」

う～ん、もうちょっとだけあの状態を満喫したかった気もするな……。たぶんもう一生ないだろうし良き思い出として心のアルバムに刻んでおこう。

「あ、大丈夫だよ。俺は何も手出しておりませんので」

「……」

「あー……色々と言いたいことはあると思うけど、とりあえずここから出ない？　今頃、体育館で校長がありがたいお話とかやってそうだし」

「……」

いつまで睨みつけてくるんですか、あなたは。大丈夫、何も手は出してません。出しかけたけど。ギリギリセーフですから。あと一歩

でアウトになりそうでしたけど。

「ほら、行こう。ね？」

「……」

扉を開けて春日を誘導する。春日ったらまだ顔が赤いや。こんなにも慌てている春日も珍しいな。ちょっとした優越感だな。ふふふっ。

「こっち見るな」

「ぐぇ」

ぐっ……ローキックはいつまで経っても慣れないな……！　今日だけで何発食らったことやら。だから睨まないで。ふぅ……ぐっすり睡眠取ったのになんか疲れた。部室の扉を閉めて施錠。春日と二人で部室棟をあとにする。さて今からどうしようかな。今更体育館の中には入れないし、教室の前で待っておくか。

「なぁ、春日」

「……」

「俺の記憶だと春日は本を読んでいたと思うんだが。何時頃から読書はやめたんだ？」

「……」

出ました無視。俺と目も合わせず顔も背ける春日。こうなっては返事は返ってこないだろう。春日はそういう人なのだ。……さっきのことで機嫌が悪いのだろう。いやでもねー……俺もどうしてああなったのか分からないのですよ。

「……すぐ」

「え、何か言った？」

今……返答してくれた？　ごめん、まったく聞いてなかった。

「……」

「痛いっ、ローキックはもうやめにしませんか！？」

あ～、足痛い。結局、春日が隣で寝ていた理由は分からずじまいか。おそらく……宇宙人の仕業だな。……足も痛ければ、頭もイカレたか、俺よ。いやだってさ、俺は全く移動していなかったし。となると春日が移動しなくては俺の隣にいるはずがないでしょ。春日自身が俺の隣に来るなんてありえないっつーわけで、そうなると残された選択肢は宇宙人の仕業としか思えない。てことで宇宙人に感謝。春日との良い思い出ができました。ありがとうございます。

「……あっ、やっと終わった」

廊下から体育館を眺めていると、体育館の正面口が開いて生徒がわらわらと出てきた。となると今から後片付けか。まとめると俺は学園祭で午後は寝ていたんだよな。そんな不良じみたことするつもりはなかったんだけど。

「じゃ、俺行くわ。春日も自分のクラスの後片付けに加われよ」

「……」

返事なし、と。さて後片付けは頑張ろうかな。今日全然働いてなかったし。

「……兎月」

「ん？」

まさに教室に向かって第一歩、のところで春日に呼び止められた。
急に名前呼んでくるんだよね、この娘は。

「……」
「えっと、何か？」

要件はなんですか？　早く片付けに行きたいんですけど。

「……楽しかった」

……えっ？　う、嘘……春日がそんなことを言うなんて……
マジかよ！？　そんな素直なことを言う奴だったか？　びっくり…
…いやいや、それは置いといて。

「うん、俺もすげー楽しかったよ。また二人で回れたらいいね！」

自分で言うのもアレだけど最高のスマイルで返した。自然と笑顔になったのはやっぱり本当に楽しかったからなんだろうか。一緒に甘い物食べて、ちょっとお店を回って、あとは昼寝してただけなのに……それだけなのに、なんか充実した気持ちなんだよなぁ。とても楽しかったという幸福感だけが心に染み渡っている。

「あっ！　将也見っけ。どこ行ってたんだよ」

教室前で皆を待っていると米太郎を先頭にクラスメイトがぞろぞろとやって来た。

「寝てた」
「お前はギャルゲーの主人公か」

どんなツッコミだ。いいから鍵開けろ。片付けしたくてウズウズしてんだよ。

「春日さんと楽しんだか？」

「まあ、それなりに」

ん？　米太郎よ、なんつー顔をしているんだ。怪訝な顔つきの米太郎はこちらに顔をぬっと近づけてきた。近い、きもい、やっぱたくあん臭い。

「一組の奴に聞いたんだが……体育館集合の時に春日さんがいなかったんだと」

「お、おう」

「俺が察するに……お前、春日さんとチョメチョメしてただろ」

「してねーよ！」

そんな甲斐性ないわ！

「……どこにいたんだお前ら？」

「部室」

「学校はラブホじゃねーぞ！　不純異性交遊とはやるじゃねーか将也兄さんよぉ」

意味分からんし。だからそんなことは一切してないっての。ギリギリね！

「いいから後片付けしようぜ。俺の分まで仕事してくれてサンキューな」

「親友が彼女と逢い引きするとなったら、お安いご用さ」

「だ、か、ら！　付き合ってないの。いい加減にしろよ」

「あ、この後クラスの打ち上げがあるけど将也も来るだろ？」

話聞けよ！　えっと……なんやかんやで学園祭楽しかったです。

第４９話　新キャラ登場？

学園祭も無事フィナーレを迎え、大成功で幕を閉じた。今日はその翌日だが学園祭の代休ということで学校はお休みなのだ。平日なのに学校に行かなくていい。大多数の生徒がベッドの上で歓喜の声を上げたに違いない。というか俺も今朝しました。そこに届いた一通のメール。それが全てを狂わせやがった。

「……だる～」
「だるいな！」
「兎月先輩はキビキビ動いてください」
「さっさと働く」

俺のつぶやきに三つのコメントが返ってきた。はぁ……しんどい。代休だってのにどうしてボランティア部が後片付けをしなくちゃならんのだ。全くもって理解できない。というか理解したくない。昨日のうちに終わらなかった後片付け。使い終わった看板や装飾品、ゴミ拾い。それをなぜボランティア部がしなくちゃならないのか。ひたすらゴミを集めては捨て、ダンボールをまとめては運び、使える板や再利用できるものは倉庫に運び……ああ、しんどい。

「兎月、ビニール紐取ってくれ！」
「うるさい。ボリューム下げろ」
「この大声は俺の魂の叫びだ！　そいつぁ無理な話だな！」
「魂がビニール紐って叫んでいるのかよ」

声がデカいんだよ山倉は。こいつなら電話なしでその場で叫んで救急車を呼べそうだ。あー、うるさい。

「兎月先輩、そこ邪魔です。どいてください」
「乗り越えろ。そうして後輩は先輩を越えていくんだ」
「踏みつけますよ？」
「いやもう踏んでるし」

先輩の足をためらいもなく踏みつけていったのは一年後輩の矢野。眼鏡が似合う女の子なのだが、俺に対して全く敬意を見せない。先輩を敬う気持ちがないのだ。なんつー後輩。ああ足痛い。

「どうして矢野は俺を尊敬しようとしないんだ？」
「兎月は尊敬できる先輩じゃなくて、接しやすい友達みたいな先輩だから」
「じゃあ水川は？」
「私は尊敬できる先輩」
「自分で言うなよ」

ショートカットの似合う可愛らしい女子生徒の水川とはクラスメイトの仲良しちゃん。明るくて元気でクラスの人気者ムードメーカーの水川は昨日のクラスの打ち上げでも皆の中心に立っていた。ちなみに俺はドリンクバーに夢中でした。そして親友の佐々木君はサラダバーに夢中でした。あの野菜お米太郎が。

「先輩、こっちは終わりました」
「おう。あれ、駒野先輩は？」
「部長は勉強するとか言って帰りました」

一年生部員男子二人がテクテクとやって来た。この二人と駒野先輩は違う場所で作業してたのだが、駒野先輩の姿が見当たらない。我らが部長が召集を下したのに、その本人がさっさと帰るなんて。そんなに受験勉強で忙しいのかな。さすがは受験生。うわぁ、進級し

たくない。

「部長に、兎月先輩がしんどいって言っていたかどうか報告するよう頼まれたんですけど」

「報告しなくてよし」

ボランティア活動でしんどいとか禁句だぞー、とか言ってアイアンクローされるのがオチだ。普段はのんびりしているくせにアイアンクローする時だけは熊の手なみに速いんだよな、あの人。

「うし、じゃあこれで全部終わったかな。あー、しんど……なんでもない」

危ない危ない。はぁ、やっと終わった。終わった後もやっぱり納得いかない。どうしてボランティア部が後片付けしなくちゃいけないのか。うちは便利屋じゃねーっつーの。片付け終わらなかった、そうだボランティア部に任せよう。そんなことを簡単にヘラヘラと言うのが気に食わない。ただこき使うのをボランティアとは呼ばない。お互いがお互いを思いやり助け合うことがボランティアの意味であり、一方通行では駄目なのだ。相手を思いやることからボランティア。自分のためじゃなく、誰かのため。はいこれ復唱！

「これで終了？」

「あとはこの看板を図書室下の倉庫に運ぶだけだよ」

「そっか」

「よっしゃ、今から打ち上げに行こうぜ！」

やっとこさ後片付けも終わったかと思いきや突然の山倉ボイス。うるさい。

「はあ？　何の打ち上げだよ？」
「ボランティア部の打ち上げさ！」

学園祭の打ち上げなら分かるけど学園祭の後片付けの打ち上げなんて聞いたことない。

「はいはい勝手に言ってろ。看板運んでくる」

モンスターの咆哮のように騒がしい山倉を無視して倉庫に向かう。
あ、この看板、三組のアトラクションのやつだ。火祭と一緒に入ったんだよなぁ。いや～、ホント楽しかったよな。火祭と一緒ならどこへ行っても楽しいのさ。

「あ、火祭」
「あ」

噂をすれば何とかって言うけど心のつぶやきに反応するとは。倉庫に看板を押しこんでいたら上の図書室から火祭が出てきた。火祭だってすぐに分かった。あの赤みがかった綺麗な長髪は火祭だけのもの。あの気品と美しさは彼女だけが持つ特別な魅力。

「どうして休みなのに学校にいるんだ？」
「その台詞そのまま返すよ」

カウンター攻撃ですか。

「学園祭の後片付けだよ。ボランティア部でね」
「大変だね」
「火祭は？」
「私は本を返しに来ただけだよ。あとコジローに餌あげに」

休みなのにご苦労なことで。コジローも喜んでるよ。

「そっか」

「君はもう帰るの？」

「いや今から打ち上げがあるんだけど……あ、そうだ」

火祭を連れて皆のところに戻る。火祭を見て喜ぶ水川。そして皆に説明。

「というわけで火祭連れてきた」

「兎月ナイス！」

山倉が歓喜の雄叫びを上げる。他の皆も嬉しそうだ。火祭とボランティア部は非常に仲良しなのだ。一緒に掃除や挨拶活動と頑張ってきたからな。

「で、どこ行くの？」

「カラオケに行こうぜ！」

カラオケか～。まあいいんじゃないでしょうか。火祭含めて七人か……三、四で分けた方がいいかな？

「桜もカラオケでいい？」

「いいよ」

「やった！　じゃあカラオケに向けてレッツゴー！」

「うるせ」

「さあどんどん歌っていくぜ！　み、ん、な、盛り上がろうぜー！」
「うるせ！　ちょ、こいつ黙らせるか音量下げてくれ！」
「エコーがとんでもないことになってるよ！」

ぐあっ、鼓膜が破れそうだ。なんだこいつ。この馬鹿声の馬鹿山倉が！　うるせーんだよ。誰かこいつの口を縫い針で閉じてくれ！

「さあ盛り上がろう！」
「うるせー！」

山倉からマイクを奪い取り、曲を強制終了。まだ耳が痛いや。もう山倉にマイクは持たせねぇ。そのまま歌わせるからな。

「火祭、大丈夫か？」
「右耳がよく聞こえないよ……」
「テメー山倉ぁ！　なんてことしてくれたんだ！　お前の両耳と両目を潰して償ってもらう」
「と、兎月が怖い！」

当たり前だ。火祭を傷つけてただで済むと思うな。来世をかけてでも償ってもらうぞコラァ。

「ほら次は兎月の番だよ」

水川がマイクを渡してきた。よっしゃ、いくぜ。さあ聞いてくれ俺の美声を！

「俺の出番か。さあ行くぜ、ってこれさっきと一緒の曲じゃん！山倉テメー二回入れやがったな！」

「はい兎月の番終了ー」

「そんな待って水川！」

もう何だよこの感じ。もうグダグダなんですけど……はぁ、喉渇いたし。あ、まだドリンク注文してなかった。

「ドリンク注文するわ。皆は何がいい？」

「アイスティー」

「私も真美と同じやつで」

「コーラ！」

「はいはい、と。すいません、アイスティー二つとコーラとメロンソーダ」

注文を終え、ダラダラと曲選び。隣で水川がノリノリで歌っている。なんか流行りのアイドルの歌らしい。流行りねぇ……あんまし流行の歌知らないからな～。何歌えばいいんだろ？　アニソン？　アニソンって言ってもなー……最近アニメ見てねーよ。昔のアニメしか知らないよ。

「はい次は桜の番」

「うん」

曲を探しつつ、火祭の美声に思わず聞き惚れてしまった。耳を包み

込むように優しく心地好い歌声が心をなごませてくれる。ニコ風に言わせてもらうなら、作業が進まねぇ！　うわ、火祭ちょー歌上手いじゃん。精密採点で九十点台を出しそうな勢いだよ。

「～♪」

「はぁうわぁ……可愛い……！」

山倉がアイドルを見るような目で火祭を見つめる。いやもう火祭アイドルだよね。普通にアイドル並に可愛いもん。総選挙出ちゃいなよ！

「きゃー、桜最高ー！　ねぇ、次はこれ歌ってよ」

「うん」

きゃきゃっと水川と楽しそうに喋っているのも微笑ましい。ああ、なんか楽しい。やっぱ女子とカラオケくると超楽しい。いや男子だけできても十分楽しいけどさ。

「はい兎月！　お前の番だ！」

「うし、今度こそ」

今度はちゃんと入力したので大丈夫。今度はちゃんと俺の歌声披露してやるぜ。聞き惚れるがいいさ！

「よっしゃいくぜ！」

「失礼します」

バッドタイミング！　歌ってる最中に店員がドリンク持ってきやがった。うわ、これ苦手なんだよ。なんか歌いづらくなっちゃう。は、早くドリンク置いて出て行ってくださーい！

「アイスティーとメロンソーダと……ん？」
「～♪」
……な、なんか店員がこっち見てくるんですけど。え、何、何なのさ？　俺ってそんな音痴！？　こ、こっち見ないでぇ。
「……」
女性の店員はじっとこちらを凝視してくる。そしてドリンクをテーブルに置いて立ち上がったかと思いきや、
「将也くーん！」
「うぐぅ！？」
い……い、いきなり抱きついてきた。ショートのふんわりしたくせっ毛の髪の毛からシャンプーの良い匂い。体に伝わる温もりと走り抜ける電流。正面に感じるふくよかな二つの感触に心臓は早鐘のように暴れまわる。な、ななんで抱きついてきたんだぁ！？
「ぬ、ぬあああああぁぁぁぁぁ！？」
思わずマイクで叫んでしまった。あああああああぁぁぁっ！？　なんだこれ！　どうしていきなり店員に抱きつかれたんだ！？　誰この人。こんな美人さん知らないよ俺！
「久しぶり将也君。ちょっと背伸びたんじゃない？」
ちょ、知り合いですか。なんか向こうは俺のこと知ってるっぽいんですけど……。こんな美人なお姉さん、知り合いにいたか？　ふん

やりとした茶色の髪は毛先がくりっとカールしており、整った顔はとても綺麗。そして大人の香り漂う色気ある大人の女性……誰だ！？

「と、兎月……知り合いか！？」

曲を停止した山倉が驚きと言わんばかりの声を張り上げる。うるさい。けどそれどころじゃない。このお姉さん、俺から離れようとしないぞ。

「……」

「ど、どうしたの桜？」

水川の声に反応してそちらを振り向けば、そこにはこちらを睨む火祭の姿が。あの……なんか心なしか目が怒っているように見えるのですが……。

「……誰ですか」

うおっ、なんて低音のそして低温な声なんだ。火祭？　あの、えと……怒ってる？　なんかそんな感じに見えるんですけど。そりゃ確かに店員が邪魔してきたら注意したくなるけど、何もそこまで敵意をむき出しにしなくても。ん？　敵意？　何に対しての敵意だ？　よく分からないけど火祭がめっちゃ怒っている。女性店員を睨む目がすごい。おおおぉぉ！？　一瞬、血祭りの火祭オーラが見えたぞ！？

「えー？　将也君のお知り合いでーす」

対して女性店員はそんな火祭を気にせず抱きついてくる。や、ちょ、なんか柔らかいものが当たっているんですが……。ちょ……ちょっ

とぉ！？

「……離れてください」

火祭の怒気のこもった重音な警告はこの部屋の気温を数度近く下げた。おいおい、火祭がめっちゃキレてるよ。そ、そんな怒らなくてもいいじゃん。な、何が気に入らないですか？

「あれ？　もしかして私のこと分かってない？」

女性店員は火祭の威嚇をシカトでスルーという高等テクで躱した。この人なんかすごい。とうか離れてください。俺の理性が持ちません。

「あの、失礼ですが誰ですか？」

「あ、やっぱり分かってなかったんだ。それとも忘れたかな？　じゃあ、ヒント」

よ、ようやく離れてくれた。お姉さんは胸元にある名前カードを指し示す。あれ……あっ！

「分かった、菜々子さんだ！」

「ピンポーン。大正解」

嘘、菜々子さん！？　髪染めてるから分からなかったよ。それに髪型も違うし。というかどうして菜々子さんがここに？

「うおおぉ！？　菜々子さんだ！」

「うわぁ、全然わからなかったです」

山倉と水川もピンときたようだ。

「……知り合い？」

「大丈夫だよ、桜。あの人は兎月のことただの後輩としか思っていないから」

「真美も知っているの？」

「知っているっていうか桜も知っているはずだよ」

「え？」

うわー、菜々子さんだ。お久しぶりです。去年会った以来ですね。しっかしホント変わったなー。なんかめっちゃ綺麗になった。いやまあ前からお綺麗でしたけど。というか大人っぽくなったな。

「お久しぶりです」

「堅苦しいよー。お久しぶリンゴ！　って言ってよ」

「無理ですって。だって菜々子さんは……って、あれ？」

菜々子さんは俺の横を通って後ろの火祭達に近づいていった。そしてジロジロと火祭を凝視している。そして火祭は身構えている。

「あ、あの？」

「なるほどー。将也君の彼女さんでしたか」

「！？」

ん？　なんか今、俺の名前が聞こえたような。

「呼びました？」

「んーん、呼んでないよ」

そうですか。そして火祭とコソコソ何やら話をし出した。俺の悪口

でないことを祈ろう。

「へー。将也君にこんな可愛い彼女がいたなんて」

「!?　あ、あの、その私……ま、まだそんな……」

「大丈夫だよ。私と将也君はただのお友達だから。警戒しなくていいよ。そして頑張ってね」

「は、はい」

火祭がりんご飴のように真っ赤になっている。おいおい菜々子さん何言ったんだよ。初対面の人を赤面させるなんて下ネタ以外に考えられないよ。

「あ、私のこと知ってる？」

「い、いえ……」

「んー、ちょっとショック。でもいいや。じゃあ自己紹介するね」

火祭からも離れて菜々子さんはマイクを取る。店員さんのとる態度じゃありません。

「私の名前は菜々子。元、生徒会長です！」

「え……」

そうです。そうなのです。この人、昨年まで生徒会長やってました。なので火祭も知っているはずなんだけどね。

「今は大学一年生だよ。あ、仕事戻らないと。じゃあね将也君。彼女さんを大事にしてあげてね」

「っ！？」

さらに真っ赤になる火祭をよそに菜々子さんは颯爽と去っていった。

まるで嵐のような人だったな……散々暴れていって。つーか俺に彼女いねー。

「やっぱりすごいね、あの人」

「くぅ～、相変わらずの美人っぷりに俺もう感動！」

水川と山倉のリアクションに追いつけない火祭がこちらを見てくる。まだ顔が赤いのはなぜだろうか？

「せ、生徒会長だったんだね……」

「俺も会うのは久しぶりだったよ。あの人にはすげー迷わ……いやまあお世話になったのかな。とりあえず色々とあったよ」

「色々って？」

「色々」

ホントお世話になったよ。そして……あの人の持つ秘密に俺は度肝を抜かれた。そう、あれは一年前の冬のことだった……。

第５０話　番外編、去年の出来事（前書き）

どうも腹イタリアです。

今回でへたれ犬も５０話を迎えることになりました。うおっ、節目じゃね？　ということで番外編をやることにしました。はいはい、これも自己満です。

いやだって５０話だよ？　何かやりたいじゃん。５０話アニバーサリー何かやりたいじゃん。そういうわけですよ。

ちょっと長めですので、ゆっくり読んでください。というか読んでもらえると嬉しいです。

こういう番外編ってどうなんでしょう？　もっとやるべきか、やらないべきか。何か意見があったら教えてほしいです。

これからもへたれ犬よろしくお願いします。

第５０話　番外編、去年の出来事

「あー……眠たい」

さっきから欠伸が止まらない。もしかすると昨日夜遅くまでゲームをしていたせいなのかもしれない。その可能性は大だな。というかそれしかねーし。とにかく異様に眠たい。永眠の眠りにつきたいかも。……いやいや永眠はやっぱマズイよ。永遠だもの。でも……眠〜。

「ふわぁ〜……将也ぁ、眠たい」
「米太郎もゲームのしすぎか？」
「理想の彼女について考えていたら朝になってた」
「……で、答えは出たのか」
「可愛い娘なら誰でもいい」
「原点回帰かよ」

ワクワクドキドキの高校入学から月日はあっという間に流れて今日は二学期の終了式。もう外は寒くてホットドリンクがないと歩けないほどだ。吹きつける風は容赦なく人の体温を奪い、空は冬らしく鉛色の絵の具を一面ぶちまけたような感じ。寒々しいことこの上ない。ここ体育館も全校生徒がすっぽり収納しているのに気温は低く外とたいして変わらない。寒いからさっさと話切り上げろ、と目の前のステージで長無駄話を繰り広げる校長に言ってやりたいくらいだ。校長の昔話なんか聞きたくありません。全く興味の湧かないトークに欠伸が止まらない。

「あーあ、誰か俺に惚れねぇかな〜」
「都合の良い話だなおい」

「いったい俺のどこが悪いのやら」
「全部って言ったらどうする？」
「泣く」
「だったら泣け」

高校一年生となった今年も残りあとわずか。波乱に満ちた高校生活が俺を待っていると期待と不安の対照的な感情双方を胸一杯Eカップ並に持って学校に登校した入学式。最初は予想通り不安が的中。中学に戻りたいと思ったりしたものだ。それも最初だけ。次に来たのは期待通りの、いやそれ以上に楽しい高校生活。隣で制服の袖に忍ばせたきゅうりをこっそり食べる親友もできたし、仲の良い女友達もできた。部活だってそれなりに充実している。そう、俺は普通に満喫しているのだ。そんな平凡な高校一年生の男子。でも何か欠けているような気もする。それが何なのかは分からないけど。

「ポリポリうるせーよ」
「良い音でしょ、新鮮なきゅうり。将也も一口どう？」
「テメーの袖に入れたきゅうりはもう新鮮じゃねぇ」

緊張した初々しい四月。着慣れない制服に身を包み一人も知り合いのいない教室で馴染めず机に突っ伏していると一人の男子が話しかけてくれた。

「俺、佐々木って言うんだ。よろしく」

なんて爽やかな奴なんだろうと思った。そいつが持つ野菜タッパーを見るまでは。米太郎との出会いはそんな感じだった。

「以上で終了式を終わります。三年生から退場してください」
「うし、やっと終わった。遊ぼうぜ！」

「今から部活があるかもしれない」
「ボランティア部か？」
「ああ。詳しくはマミーが聞いているはず」
「マミー言うな」
「うお、水川いつの間に」

ショートカットの可愛らしい女子生徒、水川のご登場。水川との出会いは部活見学。仲良くなった米太郎は早々に弓道部に入部し、俺はどうしようか迷っていた。そんなわけでテキトーにぶらぶらと校内を歩いていると、ボランティア部という張り紙が目についた。そこで一言呟いた。

「「ボランティア部か……」」

言ったのは俺だけじゃなかった。隣を振り向けば一人の女子生徒。これ水川。で、一緒にボランティア部に入部。そこから仲良くなりました。

「今年最後の会議だって。山倉にはもう駒野先輩が話してあるよ」
「そっか。じゃあまた後で」
「水川、良いお年を！」
「お米太郎君もね。そして明日も補習で会うから」

水川はどこかに行ってしまい、ホームルームを終えた教室はどんどん人が去っていく。あー、もう年末か……。月日が流れるのは早いな。光陰矢のごとし。英語で言うと、ライトシャドウアローみたいな。うわ、馬鹿の回答だ。ごとしの部分訳せてねーし。あー、英語ペラペラになりたい。そしたら英語のテスト満点取れるのにな。これも馬鹿みたいな回答。

「うあー、彼女欲しい」
「さっきからそればっかだな」
「将也は欲しくないのかよ」
「欲しいと思っても簡単に手に入るもんじゃないだろ」
「だな。でも欲しい。どこかで売ってないかな～」
「お前も馬鹿だな」

いいからさっさと帰れよ。

「さっきと言ったけどさー、理想の彼女って何なんだろうなー。やっぱ可愛い娘だよな！」
「さーな」

理想の彼女ね……なんか具体的なものは出てこないや。とりあえず可愛かったら良くない？　あ、こいつと同じだ。そんな自分に溜め息。彼女ね～……一番近い存在は水川かな？　いや、違うな。確かに水川とは仲良いけど、なんか恋しいって感じではないもん。ただ普通に仲の良い友達。では他に誰が？　……そう考えると誰もいない。もうすぐクリスマスだってのに悲しい……はぁ。

「よし、俺は一組の春日さんが理想の彼女だな。一回も話したことないけど、あの美しさは素晴らしいよね！」
「あ？　ごめん聞いてなかった」
「そうか。ではリッスンワンモアタイム」
「ノーセンキュー」

あ、ちょっとマジで眠たくなってきた。もう帰ろうかな。でもボランティア部の会議があるしー……サボったら先輩怒りそうだしー。ああ、なんか意味もなく疲れたよ。

「もうすぐクリスマスだよな。やっぱ彼女と二人きりで過ごしたいよ……。かぁー、彼女いる奴は異世界にトリップしやがれ！」
「そいつもう完璧な主人公タイプだな。羨ましいね」
「俺だって主人公タイプだい！」

主人公がそんな発言するわけないだろ。季節が春から夏へ、秋を過ぎ冬になろうと相も変わらずこのお米馬鹿は言うことやること何も変わらない。何かあったらすぐ彼女欲しいだの、野菜食べたいだの言いやがって。友達選び間違えたかな？

「将也はどう見てもサブキャラだよな」
「サブキャラで結構。意外とモテるサブだっているだろ」
「将也はモテないサブキャラだから」
「なんで米太郎が俺の設定決めてんだよ。お前は何様だ」
「主人公様だ！」

うわ、ウザイ。今年最後のウザさ爆発か。

「だったら主人公の条件言ってみろ」
「顔がカッコイイ」
「よし、書類審査の前にお前は脱落だ」
「なんでだよ！？」

鏡を見ろ。ブサイクとは言わないが、なんとも冴えない顔が漬け物を貪っているから。

「自分がちょ～っとだけイケメンだからって調子こいてんじゃねぇ！　チクショー、将也なんて死んじゃえばいいのに！　あ、良いお年を！」

だから明日も会うだろうが。勢いよく教室から出ていく……かと思いきや米太郎は開いた扉を慌てて閉める。そしてその場に座り込んでガクガク震えだした。なんだこいつ。

「どうしたよ米太郎、マジで気持ち悪いぞ」
「しっ！　ちょっと黙ってろ。頼むから」
「は？」

震える体を両手で押さえつつ扉にひっつく米太郎。すごい怯えているけど、マジでどうしたんだよ。風邪でも引いたか？

「……行ったか」
「何が行ったんだ？」

教室の前を一人の生徒が通過したようだけど……苦手な人だったのかな。こいつにも苦手なタイプの人がいるのか。

「ふぅ……危うく血祭りにされるところだった」
「はあ？」
「危険は去った。ではアデュー」

再び血色良くなった米太郎はウザさも取り戻して教室から出て行った。教室にいるのは俺一人のみ。……寂しい。あんな奴でもいないよりはマシだったな。あと十分ほどで部活だけど……眠たい。あ～、駄目だ。話し相手がいないと急激に睡魔が肩に腕を回してきやがった。や、やめて……寝ちゃうって……部活遅れたら、駒野先輩に……アイアン、ク…ローが……おやすみなさい。

「……ぐー」

「……すー……はっ、寝過ごした！？」

やば、ちょっとうたた寝するだけだったのにがっつり寝てしまった。な、なんてことだ……軽く三十分は寝ていたようだ……。こ、これもう終わった。今から「遅れちゃった、てへっ」みたいな感じでいっても駄目な気がする。さらに怒りを買ってしまいそうだ。うわー、明日ぐらいに駒野先輩から呼び出されてアイアンクローされちゃう。……もう終わったな。今日はもう無理だぁ、間に合わない。ははっ、なんかまた寝たくなってきた。

「もういいや。もっかい寝よー……」

てことで自分から睡魔さんを呼び寄せる。さあ添い寝しそう。睡魔とベッドに潜りこみ、ではまた夢の世界にゴーといきましょう。

「えー、また寝るのー？」

睡魔が掻き消えた。閉じかけた目がギョロっと見開く。おいおい、なんですか今の声は？　ちょっと耳に残る高めの艶めかしい嬌声。明らかに俺に向けられた言葉。隣から感じる人の気配。机に伏した顔を滑らすように横へ向けると、

「……」
「やっほ。元気～？」
だ、誰だ！？　隣の机に座っていたのは一人の女子生徒。セミロングの髪に輪郭すっきりした顔とニッコリと太陽のような笑顔が眩しい。こちらを見てニコニコしている。え、ちょ、は？　これはなんですか！？
「……」
「あれ、無反応？　眉間にシワ寄ってるよ～」
ぐりぐりと俺の眉間に指を突き刺してきた。なんだこれ。いやマジで。しぐさは可愛らしいのに見た感じと雰囲気はめっちゃ美しいんですが。誰ですか、あなたは？　そんなことを聞く余裕もないくらいにこの目の前の女子生徒にびっくりしてしまった。
「ほら、ぐりぐり～」
「あの……やめてくれませんか？」
「あ、反応した。リアクション遅いよ」
そして指ぐりぐりをやめる女子生徒。こんな女子は同学年にはいなかったはずだ。てことは上級生。二年生か三年生だ。つーか……これは本当になんだ？　二学期終了式の放課後、教室にいるのは俺と見知らぬ女子生徒。これは何かの始まりか？　何か物語のプロローグではないだろうか。そうでないならこれはドッキリだ。あ、ドッキリだなこれ。
「えっと、ネタばらしはまだですか？」
「あはは、面白いこと言うね。ドッキリだと思った？」

部活をサボタージュした俺に対して水川や駒野先輩が仕掛けたドッキリな気がする。これで俺が混乱するとでも思ったのだろう。実際にびっくりしたわけだからドッキリ大成功だ。だから早くネタばらしを。プラカード持って教室の後ろの扉から出てきてくださいよ。

「……」

「また眉間にシワ～。というか全然顔上げないね。まだ寝ぼけてる？」

また眉間をぐりぐりし始めたよ。あれ……ドッキリじゃないの？　なんで、なんでこの人ここにいるの？　何がしたいの？　やば、また混乱してきた。

「あの……あなた誰ですか？」

「え、私を知らないの？　なんてことだ、ガガーン」

ガガーンと口で効果音を表すこの人が普通でないことは今知ることができた。だからもう知りたいことはない。もう結構。ドッキリでないならこれは嫌がらせか。チクショー、部活サボっただけでこの仕打ち。

「仕方ない、ならば自己紹介しよう。私の名前は……」

そう言いかけた女子生徒はピタリと止まる。口を閉じ、天井斜め上をじぃーっと見つめる。停止すること数秒、ぐりぐりしていた指を教室前の教壇に向ける。

「あそこ」

「は？」

「あそこに隠れて」

な、なんで？　しかし有無言わさず女子生徒は俺の腕を掴むと強引に引っ張り、教壇の下に押しこみやがった。な、なんだいきなり？

やっぱり嫌がらせが目的か！

「静かにしていてね」

そう言った直後だった。

「兎月！　どうせ教室で寝ていたんでしょ……あれ？」

扉がバンと大きな音を立てて開き、聞こえてきたのは水川の声。げっ、ヤバイ。見つかったら駒野先輩のところに連行されてアイアンクローだ。うおおぉ、ここに隠れて良かったー。

「あ、あれ？　兎月がいない……って、あっ！？　あ、あなたは……生徒会長さん！？」

なっ、生徒会長だと！？　う、嘘……さっきの女子生徒って生徒会長だったのかよ。うわ、マジか。

「元ね。元生徒会長。今は引退したんだよ」

「ど、どうしてここにいるのですか？」

「兎月君には私の手伝いをしてもらっていたんだ。さっき帰ってもらったよ」

「そうだったんですか……。分かりました、ありがとうございます」

ガラガラピシャリ。扉の閉まる音を聞き届けて、のっそり教壇の下から這い出る。色々とあったな。まず最初に、これがボランティア

部の仕組んだドッキリではなかったこと。そしてこの女子生徒が俺のことをかばってくれたこと。そしてこの人が生徒会長であったということ！

「せ、生徒会長だったんですね」
「元ね。今はただの受験生兼恋する乙女だよ」
「……はあ」
「可愛げないな～。寝ている時はもっと可愛い顔していたのに」
か、可愛いって。喜んでいいのか、恥ずかしいと思えばいいのか……。

「そっか、君の名前は兎月って言うんだね。下の名前は？」
「ま、将也です」
「じゃあ将也君と呼ぶことにしよう。将也君」
随分とフランクな人だ。この人が生徒会長やっていたのか……いや、だから何ってわけでもないけどさ。つーか、すげーこっち見てくるし……。

「えっと、ありがとうございました」
「何が？」
「さっき助けてくれて」
「気にしなくていいよ。部活サボったら殺されるとか寝言を言ってたからねー」

マジかよ俺……寝言呟いていたのか。そしてそれをこの人に聞かれていた。うわ、恥ずかしい。さっきの可愛い発言含めて二乗の恥ずかしさ！

「あの……いつからそこにいました？」
「それは私も知らない～」
いやあなたは知ってるでしょ。はぐらされたよ。
「……」
「他に何か言いたいことは？」
「他に……えっと、どうしてここの教室に？」
「その質問には答えられない」
だったら聞くなよ。最初から聞く耳持ってないだろ、この人。
「そーですか。生徒会長的な仕事か何かだということにしておきます」
「そかそか」
「では俺は帰ります」
「待てい」
エスケープ失敗。肩を思いきり掴まれた。いやだってなんか逃げ出したくなってしまって。この生徒会長さん、なんか得体の知れない怖さがある。
「……なんですか」
「実は私、今学校中を回っているんだ。ほら今日は終了式だし、誰もいないからのんびりと散策できるでしょ」
「ではどうぞごゆっくり」
「だから将也君も付き合って」
なんで俺が……。いやまあ、先ほどはピンチを救ってくれたし無下に断ることもできないか。はぁ……ま、いいか。ちょっと楽しいか

もしれないし。

「ほらレッツゴー。時間は待ってくれないよ。センター試験まであと一か月」

「だったら勉強してください」

「推薦で受かったから勉強しなくていいのだよ私は。受験勉強とおさらばしたのだ」

「さっき受験生兼恋する乙女って言ってませんでした？」

「では訂正しよう。恋する乙女だ」

「そうですか」

とりあえずこの人が元生徒会長で暇だから学校の中をぶらぶらしているのは分かった。にしてもすごいなこの人。自分のペースを完全に維持してやがる。こっちに有無言わせない感がとてつもない。これをカリスマと言うのだろうか……これが生徒会長の技量だと言うのか……とにかくすごい人だ。

「推薦で受かったんですか。さすが生徒会長ですね」

「そうだねー、ごり押しと押し売りのパワー勝負だったよ」

「そんな強引にいったんですか……」

「受かればこっちのものだよ。だから今は暇なんだ～」

「はあ」

「同級生は皆、勉強で忙しいし、遊ぼうとは言えないでしょ」

そりゃ受験生は今の時期は必死こいて机にへばりついていることだろう。そこへ受かった奴が遊ぼうなんて言ってきたら俺だったらシャーペンを手のひらに突き刺してやる。後日、怪我が治っても見れば黒い点ができてる感じにしてやる。

「大学はどこですか？」

「そいつぁ言えない」

ところどころ秘密を作る人だな。ミステリアスな姉さんだ。

「あ、ここ見てみて。ここの空き教室前のロッカーって全部閉まっているように見えて実はここの右から三番目のロッカーは鍵が開いているんだよ」

「へえー」

「持ち物検査とか置き勉する時には便利だよー。是非使ってくれたまえ」

「さすが生徒会長。学校のことなら何でも任せろって感じですね」

生徒の模範である生徒会長が置き勉しているのはちょっと残念な気もするが。

「だから元、生徒会長だよ。今は違うの。それに私には菜々子という立派な名前があるの。だから菜々子ちゃんと呼びなさい」

「そんな初対面の、しかも上級生の先輩をちゃん付けでは呼べません」

「うるさい。生徒会長の命令がきけないの？」

「元、生徒会長でしょ」

なんだろ…これ……。なんとなく楽しいぞ。とても充実しているというか……はっ、もしやこれか？　これが米太郎の言っていた彼女というやつか！　そうだこれだ。中学の付き合っていた頃を思い出す。この女子と二人、良い感じになるこのアレがアレなのか！？な、何言ってんだ俺？

「あはは、将也君は面白いねー」

「生徒会長には及びませんけど」

「だから菜々子って言ったでしょ」
「では菜々子さんって呼ばせてもらいます」
「将也くーん」
「な、菜々子さん」
「えへへ～」

こ、これはなんだ！？　生徒会長そして美人な先輩である菜々子さん。そんなすごい人と平凡ごく普通一年生の俺がこんな楽しげに会話をしているなんて。ありえないことだ。米太郎に彼女ができるくらいありえない。……ってことは米太郎に彼女ができたのか！？
ゆ、許せねぇ！

「どーしたの？　また眉間にシワ寄ってるよ」
「すいません。親友が憎くなってきたので」
「あはは、そうだったのー」

その後も生徒会長さんと校内をブラブラと散策して、あっという間に夕方。かなり長時間一緒にいたな……女子と二人でこんなに校内を歩き回ったのは初めてです。

「うーん、すごく楽しかった！」
「そうですか」

生徒会長さんに奢ってもらったメロンソーダを飲みつつ、夕日が沈む校舎から出る。明日から補習だってのに全く鬱じゃない。むしろ晴れ晴れしい気持ちだ。

「じゃあ僕は自転車なので」
「えー、電車じゃないの？」
「会長は電車なんですか？」

「ストップ！」

うぐぅ、口元を手で塞がれた。ぐいっと顔を近づけられてこっちは息も心も詰まりそうです……！

「菜々子さん！　そう呼べって何度も言ったでしょ」

「す、すいません」

「罰として次会った時は大声で菜々子さーん！　って呼ぶこと。場所、時間、空気、どんな悪条件でもそうすること。図書室でも職員室でも関係ないから」

「そ、そんな」

「明日の授業中に教室の前通ってやるから覚悟しといてね。じゃあね～」

いたずら天使の笑みを浮かべて菜々子さんは去っていった。うおおぉ、一気に疲れがきた。あぁ、ホントすごい人だったな。今日会ったばかりの俺にあんなに親しく接してくれるなんて。優しい人だったな……やべ、好きになりそう。いやまあ普通に好きです。恋愛感情どうこうじゃなく。

「でも……ホントに好きになったらどうしようかな」

年上との恋って燃える!?　と思いつつ燃える夕日を背に学校をあとにした。

「てなことがあってなー」
「て、め……このモテくそリアル充実野郎がぁ！」

翌日、朝のホームルーム前に早速米太郎に昨日のことを自慢。ほくほく笑顔で話すこと数分、冬の冷気に冷えていたであろう米太郎の体温は一気に沸点にまで達した。怒りと妬みで赤く歪んだ顔が俺を捉えて離さない。ははっ、親友の嫉妬の顔がこんなに面白いとは。そしてそれをこんなに優雅に余裕をもって眺められるとは。

「まあまあ落ち着けよ、米太郎君。冷静になろうじゃないか」
「誰が小説家になろうだって！？」
「いや言ってないし。お前なれるのか？」
「とにかく！　ええっと、その美人でお茶目な三年の先輩、今すぐここに連れてこい」
「無理言うな。メアド聞いてないし名前しか知らないもん」
「だったらその名前を教えろよ！」
「い、や、だ、ね」

こいつに菜々子さんの情報は言ってない。名前を言おうものなら、それだけで人物を特定してくるに違いない。まして元生徒会長なんて口走ってしまったらすぐにバレてしまう。嫌だ、菜々子さんは俺だけの菜々子さんだ！

「くっそー、俺も放課後もうちょい教室にいれば……。ああ、こんな馬鹿で変態な親友に彼女を奪われるなんて……」
「奪ってないし。馬鹿で変態な親友よ」

「パクってんじゃねぇ」
「パクってそのまま通用するからいいだろ」

はっは、米太郎の羨ましげな顔が愉快、痛快、爽快、空海。あ、最後のは違う。とにかく俺はこの比喩しきれないほどの優越感を楽しみつつ今日も菜々子さんに会えないかなー、と胸躍らせているのだ！　ひゃっはー、補習の授業なんて目じゃないぜ。……っと、もしかしたら授業中に菜々子さんがやって来るかもしれない。あの人は推薦で受かったから補習は受けてないはずだ。マジでやって来る可能性がある。さ、さすがに授業中に大声で名前を呼ぶのは恥ずかしい。というかもうこの教室でスクールライフを送れない気がする。

「くそ、くそくそくそ！　どうしてまだ俺には春が訪れないんだ！？　作物のように我慢強く精一杯生きているこの俺が……」
「じゃがいもみたいな顔してるよ」
「この声はマミー！」
「マミー言うな」

水川のご登場。しかし今は仲の良い女子より恋する女子の方が先決だ。どうか菜々子さんが二組にやってきませんように。

「聞いてくれよ、この将也に彼女みたいな女性がいるんだ」
「えっ、すごいじゃん兎月～」
「いやあ、それほどでも」
「だからボコボコにしてやろうぜ」

米太郎の目が殺人鬼の目に変わったあたりでチャイムが鳴った。今からホームルーム、そして補習の開始。どうか補習が終わる十二時までに菜々子さんが来ませんように。

「では今日はこれで終わりだ。進路調査の再提出者は今日中に出すこと。それとロッカーに置き勉はするな。見つけたら処分するからな」

帰りのホームルームも終わり何事もなく放課後。授業で何一つ学ぶことなく、帰り支度を始めることに。結局、菜々子さんは来なかった。さすがに授業中に来るのは度が過ぎると考えたのか。または昨日の俺との会話は単なる時間潰しだったのか。所詮は偶然見つけた一年坊主。こっちは本気で接していたけど、あっちは遊び感覚。もう俺の名前も覚えちゃいない。……はぁ、そう考えるとショック。でもそれが事実みたいだから本当にショック。昨日と今日ずっと浮かれていた自分が情けなく、そして恥ずかしい。

「軽く本気で恋してた自分が愚かだった……」

「おら将也ぁ、帰ろうとするな！」

鞄が叩き落とされる。犯人は米。この野郎、人のナイーブな心境を逆撫でしやがって。

「なんでだよ」

「お前の言う美人な三年生に会うためだろうが。また今日も会いに来てくれるんだろ」

「……はぁ」

「あ？　何を溜め息ぶべぇ！？」

肘打ちアンドミドルキックで米太郎を黙らせる。もういいんだよそ

の人は。その人はただ一夜限りの恋だったのだから。まあ正確には一昼だが。

「だいたいお前は部活があるだろ」

「今日はサボる。今は弓道より大切なことがある！」

友の彼女らしき人物を見るのが大事なのかよ。矢で射抜かれてしまえ。俺は昨日、恋の矢に射抜かれたけど。……上手くない。そして切ない。菜々子さんはもう俺のことなんて忘れているのだから。

『生徒の呼び出しをします。二年二組、佐々木君。二年二組、佐々木君。至急、職員室まで』

「なぜだ！？」

突然の放送。この声は……担任だ。好きになれない声だわ～。

「お前、進路志望の紙出したか？」

「出して……ない」

「ためる暇があるなら今すぐ持っていけよ」

一年だってのに担任は今のうちから進路調査をするとか言って俺達に志望の大学名を書かせた。そしてそれを用いて三者面談したのが先週。さらに不備があった者は訂正して再提出。まったくもって面倒くさい。一年生のうちからどこの大学に行きたいかなんて明確に決まってるわけないだろ。馬鹿か担任は。ぜってー馬鹿だ。

「第一志望が農学部で……えっと……」

歩きながら訂正をしつつ米太郎は教室から出て行った。実家が農家だったよな、あいつ。やっぱ将来は農業したいのか。さすが米太郎。

名にふさわしいじゃないか。……さて、ウザイ奴も消えたことだし今のうちに帰るか。

「さよなら米太郎～……さよなら菜々子さん……」

友に別れを、そして昨日の女に永遠の別れを。軽重揃った別れを告げ、教室から出ようとしたら、

「やっほ～、将也くーん」

「……」

この笑顔……このテンション……嘘……!?

「あ、罰のこと忘れてないよね？」

「な、な……菜々子さん！」

「はいよくできました～」

入口の前にはニコッと笑う菜々子さんの姿が。昨日と同じくお美しい。

「な、なんでここに……？」

「へ？　将也君に会いに来たんだよー」

……めっさ……めっさ嬉しい！　うおおぉぉ、マジか!?　これってマジですか!?　あ、会いに来てくれた……。

「てっきりもう会えないかと……」

「えー？　何言ってるのー、そんな一日だけなんてわけないでしょー」

うはあああぁぁ！　なんてことだ！　俺は忘れられていなかった。一晩の恋じゃなかった！　俺は……俺はあああぁぁ！

「もう忘れられたかと思ってました」

「そんなわけないよー。それに将也君だって罰のこと忘れていなかったじゃん」

「はい！」

うふふふ、あははは、なんて良い気分なんだ。これを最高と言わずして何が最高であろうか。今まさに天に登る勢いですよ。

「それに君に会いに来ただけじゃないんだよー」

「へ？」

「おっ、人の気配」

菜々子さんがそう言い終えると同時に後ろの扉が開いた。のっそりと入ってきたのは、

「将也ー、農学部の生産環境と生物機能ってどう違うんだ？　そこ訂正しないとオッケーもらえそうにないんだ」

ぶつぶつと呟くのは米太郎。米太郎が戻ってきやがった。最悪だ、最高から最悪へ転落。天国から地獄……とまではいかないにしろ、この米野郎に菜々子さんが見つかってしまった。菜々子さんを見て絶対に嫉妬するに違いない。ふざけんな、俺と菜々子さんの関係を壊させねぇぞ。

「こ、の、教室から出ていけ！」

「うおっ、あぶね！」

右ストレートを放つが避けられてしまった。くそっ、焦りで狙いがうまく定まらなかった。やばい、逃げられた！

「ったく、なんだよ。何か見られたくないもので……も……」

ひょいと避けて菜々子さんと向き合う形になった米太郎。うわああぁ！？　最悪だ、もう最悪だ。もう無理だ、終わった。菜々子さんをじっと凝視したまま固まる米太郎。用紙を持つ手も顔も何ひとつ動かない。静止したまま時間だけが過ぎる。もう予想できる。次に米太郎が叫ぶであろう台詞。「めっちゃ綺麗じゃねーか！　将也のモテ馬鹿野郎―！」と。そして俺に殴りかかってくるはずだ。くるならこい。

「ね、ね……」

口元が動き出した。そろそろ叫び暴れるぞ……。そう身構えた時だった。

「姉ちゃん！？」

……

……えっ？

「やっほ、米太郎」
「どうして姉ちゃんがここにいるんだよ」
「将也君に会いに来たのとアンタが放送で呼ばれたから気になって」
え……
え、ちょ？
「最近始めたカラオケ店のバイトはいいのかよ」
「今日は午前中だけ。それより、どうして放送で呼ばれたの？」
「進路のやつだよ。ちょっと姉ちゃん手伝ってくれよ」
……は？　嘘、え……嘘……今……米太郎の奴、なんて言った？　ガタンと床が割れた気がした。
「はいはい、後でね。ちょっと将也君が混乱しているから」
ね、姉ちゃん？　誰が？　何の？　意味が分からない。いや、分かりたくない。理解したくない。目の前で起きている現象を体と脳が拒絶している。足元に広がる暗闇。天国は春か彼方、遠くに輝いている。
「改めて自己紹介するね。私の名前は佐々木菜々子。菜のようにすくすくと育つよう願いを込められた名前だよ。十八歳、元生徒会長。そしてこちらは弟の佐々木米太郎。改めてよろしくね」
……嘘だ。こんなの嘘に決まってる。上空に輝く恋という光が消え、辺りが真っ暗闇に取りこまれた。嘘……菜々子さんは米太郎の姉……米太郎は菜々子さんの弟。天国から地獄、最悪どころか

底辺を突き破ってどん底のさらに下、深淵の奈落へと落ちた。

「う、嘘おおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉ！？」

「ぶはははっ、はっは、かぁ、お前……姉ちゃんのこと言ってたのかよ」

立ち直るのに数分かけた後、全ての事情を飲みこんだ米太郎が高らかに笑いだした。目に涙を浮かべ俺を指差し、ひたすら爆笑していやがる。

「あはははははっ、ま…まさか姉ちゃんのことを言ってたなんて…ぎゃはははぁぁ！」

「……うるせ」

最悪だ。まさか米太郎の姉ちゃんが生徒会長だったなんて。こんなお馬鹿な奴の姉が生徒会長だなんて想像もつかないって。そしてその親友の姉に一瞬でも恋心を持ってしまった俺は……俺はそれ以上のお馬鹿野郎だ。

「ひ、ひぃ、笑いすぎて死にそう……」

「俺は恥ずかしすぎて死にそうだ」
「はいはい二人とも静かに。ほら、終わったよ」
さらさらと米太郎の進路調査の紙を仕上げた菜々子さん。米太郎に手渡す。
「ありがと姉ちゃん」
「アンタ農業実習したいなら生物資源にしたら？　生物機能だと室内での研究がメインになるよ」
「そっかー。いやまあ農業実習は家でやってるようなもんだし。もう少し考えてみるよ」
ごく普通に会話する米太郎と菜々子さん。その姿はまさに姉弟……。
「いやー、昨日知り合ったばかりの将也君が米太郎の親友だったとは。これは運命なのかもねー」
「そうだね姉ちゃん……ぷぷっ」
ニコニコ笑う菜々子さんと笑いを堪える米太郎。似てねぇ……態度も顔も何一つ似てねぇのに姉弟……こんなの誰が分かるってんだ。
「つーか将也は知らなかったのかよ。姉ちゃん結構有名だぞ。水川も名前言ったら気づくぞ。というか明日言いふらしてやろっと。将也が俺の姉ちゃんに恋してたって……ぷぷっ」
「一瞬な。ほんの一瞬な！　刹那に満たないぐらいの時間だけ好きだっただけだから」
……最悪だ。もう一生の恥だ。忘れてしまいたい。
「えー？　将也君は私のこと嫌いなの？」

「先輩としては好きです。ただ親友の姉としては嫌いになってしまったかもしれません！」

兄弟とかって似るもんじゃないのかよ。この二人、全然似てねぇもん。遺伝子とかＤＮＡの神秘はどうしたんだよ！

「じゃ、これ提出したら帰るわ。姉ちゃんは？」

「私も帰るよ。じゃあねー、将也君っ。これからも出来の悪い弟と仲良くしてあげてね」

「ホントこれからもお願いします。もっと楽しませ……ぶっ、くはははははっ！」

米太郎の爆笑とともに佐々木姉弟は去っていった。……。

「最悪だあああぁぁ！　チクショー、俺の純情返しやがれ！」

米太郎の机を蹴り、米太郎の教科書を引き裂き、米太郎のロッカーを殴り、それでも消化しきれない思いをなんとか飲みこみ教室を出る。はぁ……明日からの補習を受ける自信がない。

「現実は残酷だな……」

教科書全部を空き教室前のロッカー右から三番目のところに押しこむ。鞄は空っぽになったのに体全体はまだ重い。はぁ……死にたい。

「……図書室で本でも借りるかな」

相当精神的に参っているのか、普段は行きもしない図書室へ足を運ぶことに。無音が支配する図書室、生徒数人が読書している中、俺は何をするわけでもなく館内をぶらぶら。……菜々子さんは米太郎

の姉……ぐはぁ。

「あっ」

壁にもたれかかるつもりで背中を倒したら、どこか本棚に引っかかってしまった。落ちる数冊の本。やば、司書さんに殺されちゃう。いや殺されないけど。今はそうしてもらいたいかも。

「はい」

「えっ？」

差し出された本。一人の女子生徒が本を拾ってくれたのだ。なんて優しいのだろうか……滲む涙で前がよく見えないよ。ん？　なんか髪の毛が赤っぽいような……気のせいかな。

「あ、ありがとう」」

そして女子生徒は自分の本を持ってテーブルへと戻っていった。すごく可愛い娘だった気がするけど……どーせ米太郎の妹かなんかだろ。俺はもう騙されないぞ。

「失礼しました」

特に何も借りず図書室をあとにする。探していた、惚れかけた女が友達の姉だったらどうするかのハウツー本は見つからなかった。明日どうやって米太郎を黙らせるか……くそ、マジでへこみそう。

「あーあ、今日はもうバスで帰ろうかな」

自転車を放置してバス停へと向かう。もう知るか。さっさと帰って

寝たい。今なら永遠の眠りについても構わない。永遠だもの！

「はあー」

溜め息とともに乗車。ユラユラ揺れてぼんやりと外を眺める。冬の寒さが身に染みる十二月。もうすぐで今年も終わる。まだまだ春は遠い。というか俺に春はやって来るのだろうか。来年の春、何か新しい出会いがあるのだろうか。何か出会いがあることを祈りつつ、センチメンタルになっているとバスが停車。ドアが開き、乗る人もいれば降りる人も。つり革に全体重を預けていた俺の横を女子生徒が通る。サラサラの長髪が綺麗だなーと眺めていたら、その女子生徒が定期を落とした。あらあらまぁ。落ちた定期を拾い、差し出す。さっきの図書室での恩はこの娘に返すことにしよう。

「あの、落としましたよ」

「……」

女子生徒はこちらを見つめ、無言で定期を受け取るとすぐにバスから降りていった。ありがとうぐらい言ってほしかったな。ま、今はどうでもいいけど。

「……今の娘も可愛かった気がする」

……いやいや騙されるな。あれは米太郎の従妹だ。騙されるな。もうあんな恥はかきたくない。

……にしても可愛かったような。ちょいキツめのつり目が特徴的だったな……。

けどそんなことはすぐに忘れてしまった。

第５１話　二人目のお金持ち

学園祭の代休の翌日、今日からまた通常の時間割となる。先週は学園祭についての話し合いとかで授業が潰れたからハッピーだったのになぁ。またいつものキツくてだるくて面倒くさい授業が朝から夕方までフルタイム出場。あ～、しんどい。ちなみに俺は今バスの中にいます。さらに後ろの方の席に座ることに成功。なかなかのハッピーである。あ、今週もハッピーかも。

「……兎月」

名前を呼ばれたので視線を横に向けると通路には春日が立っていた。いつの間にか春日の乗ってくるバス停に到着していた。まったりしていると時間はすぐに経つ。それこそ次の停留所なんてあっという間だ。光陰矢のごとし。英語で言うとタイムフライズライクアンアローみたいな。……お、なんか一年前と比べて進歩した気がするぞ。

「おはよう春日」

サラサラの綺麗な長髪、つり目と端整な小顔は可愛らしく、さらに美しくもある。確かに見た目は超絶可愛い。しかし性格は最悪なんだよな。まず同級生を下僕扱いする時点でもう十分に条件を満たしている。そして何を隠そう、その下僕というのは俺のことだ！

「……おはよう」

無表情で無愛想だが、挨拶を返してくるだけでもすごいことなのだ。最初の頃なんて俺の問い掛けにはもれなく全て無視していたからな。俺の隣に座る春日。これまたすごいことだ。それこそ最初は、お前

は座るな。立っていろ、と命令していたのが今では隣に座っていいにまでに昇格したのだから。先週のことだ。今日みたいに春日が乗りこんできて席が空いてなかったので俺が席を譲ろうとした。どーせ奪われるだろうと思って。すると春日が、

「隣に座っていなさい」

と言ったのだ。アタシぁ耳を疑ったね！　隣に座っていいだなんて……俺の評価も上がったよな。初期の称号が『ただの下僕』だとしたら今は『上級下僕』ぐらいになっているのではないだろうか。つまり下僕に変わりないけどさ。

「いやー、今日も良い天気だね～」

「そ」

そうですよ。とても良い天気じゃありませんか～。ハンバーガー持って散歩に行きたいくらいですよ。ＣＭでよく見る感じのなんか原っぱでのんびりバーガー食べたいな。

「兎月」

「……え、どうし」

「聞きなさい」

「がっ！？　ギリ反応したよねえ！？」

足を踏んづけてきやがった……！　態度は若干変わっても、この暴力は相変わらず。下僕を痛めつけて楽しいのかよチクショー。

「聞きなさい」

「は、はい」

「……」

「……あ、あの？」

何か言いたいことがあるんじゃないのかよ。意味もなしに人の足を踏んでくるなんて許されませんよ。それは横暴だ。俺だって反撃してやろうか。そんなことしたら倍返しされるのは目に見えているけどさ。とりあえず待ちます。俺は待つんだ。あなたも今後は待ってね。そして蹴らないでぇ。

「……」
「……」
「……今週の土曜日」

うん、今週の土曜日。それが何か？

「……」
「……」
「……買い物に付き合いなさい」
「別にいいけど」

もしかして……それだけ？　それ言うのにバス停二つ分ものの時間を使ったんですかい？

「ちなみに買いたい物って何？」
「うるさい」

うおっ危ね！　足をずらして春日の踏みつけを回避。

「……」
「ぐふっ！？」

避けられたのが気にいらなかったのか、俺の腹に裏拳を放ってきやがった。不意打ちが一番痛いんだって。腹部は完全にノーガードだったよ。ぐおおぉ、朝食べたトーストがスクランブルエッグと混ざり合ってリバースしちゃいそう。

「げ、げほっ……痛いって」

「……」

「あー……じゃあ時間とか場所とか細かいことはメールで頼むわ」

「……」

その沈黙は了解ってことですね？　勝手にそう解釈しますからねっ。この人ホント必要最低限の会話しかしないんだよなぁ。もっと雑談しようぜ。コミュニケーションは大事だって。どのくらい大事かと言うと、ボス戦前のセーブくらい大事。それは大切だ、と共感してくれる人がいるのならその人は俺と同じＲＰＧ好きの人だ！　一緒に朝までトークしたいです。

「……」

「……」

「……パパのプレゼント」

「へ？」

プレゼント？　お父さんの？　……ああ、買いたい物ってそれなんだ。へぇー、お父さん思いでいいじゃん。あなた良くできた娘だよ。あの父親にプレゼントか……号泣して喜びそうなもんだ。

「お父さん、もうすぐ誕生日とか？」

「そ」

「そっかー。お父さん嬉しいだろうなー。ちなみに俺の誕生日は十月だから」

「聞いてない」
「春日の誕生日はいつ？」
「うるさい」
痛い！　裏拳は普通に痛いから！

バスを降り、春日と二人並んで学校へと向かう。いつも通り。春日の鞄を俺が持つ。いつも通り。多くの生徒が上る坂道も楽しげな会話もいつも通りの光景だ。また今日も平穏な一日の始まり。そんな朝の景色、坂の上には一人の男子生徒と燕尾服を着た初老の男性が立っていた。これはいつも通りではない。は？　なんだあの二人。一人はうちの生徒だ。しかしその隣の方は生徒でない。気品ある初老の男性が補佐のように立っている。そして二人ともキョロキョロと登校する生徒に視線を走らせている。誰かを探しているみたいだけど……あ、こっち見た。

「……あれ？　なんか手を振っているぞ？」

こちらを見るや途端に接近してくる二人。もしかして俺？　……そんなわけないよな。

「おはようございます恵様。朝早くから申し訳ないのですが、少々お時間を貰えないでしょうか」

春日に頭を下げる初老の男性。ほら、春日だった。俺なわけないもんね。そりゃこの感じ、春日関係だろう。お金持ちの匂いがする。

「……」

春日が嫌な顔をしてるけど……知り合いだよね？　燕尾服を着た初老の男性とうちの学校の制服を着た男子生徒。男子生徒は眼鏡をかけており、身長は俺と同じぐらい。色白いのがモヤシっぽく見えるけど、それを上品なオーラが包みこんでいる。背筋を伸ばし、キリッと直立する姿は大人なスタイル。

「おはよう恵さん。ちょっと話したいことがあるから、いいかな？」

男子生徒が春日に微笑みかけた。おぉ、なんて上品な笑い方。社交的な笑みってやつ？　すごく自然でそして愛想の良い笑顔。ニヤニヤ笑う米太郎が馬鹿に思える。

「……分かりました」

すげー渋々だな。嫌なら嫌って言えばいいのに。この二人と会ってから春日の機嫌がすごい悪くなった。普段以上にぶっきらぼうな態度で返事を返している。

「快く承諾してくれてありがとう恵さん。さ、こっちへ」

おいおい、今のどこが快く？　すごい嫌がってじゃんか。そんなことも分からないのか。いや……それより、

「あ、あの～……俺は……？」

よく状況が理解できていないんですが説明してくれませんか？　すんなりと話が通ってますが、俺は何一つ理解していないというか分かってないのですが。

「誰だ君は。関係ない者は立ち去ってくれ」

んだと、この色白眼鏡。俺だって少しは関係あるぞ。だって、

「……こっちの兎月は私の下僕なので、一緒に同行させてください」

そう、下僕だからな……って他人に言わないでよ。なんか恥ずかしいし情けないよ。そこは同級生とかにしてよ。下僕って。一瞬、普通に感じた自分が異常に思えた。おぉ、慣れって怖い。

「下僕……？　恵さんがそう言うなら、いいけど」

訝しげな目で俺を見た色白眼鏡は俺と向き合う。不審げな目つきが俺をじろじろと観察してきやがる。不快感より気まずく感じてしまうのは俺がこの人に圧倒されているせいか。くそぅ、空気感持っていきやがって。

「はじめまして恵さんの下僕君。僕は金田秀明（かねだひであき）という者です。どうぞよろしく」

色白眼鏡もとい金田はそれだけ言うと、さっさと歩きだした。ちょっとぉ、俺まだ自己紹介してないぞ！　三分スピーチの時間よこせよ。出生からこれまでの経緯をまとめて紹介してやるから。くっ、

俺のことなんてどうでもいいってか。

「ちょ、何なのこの二人」

春日に小声で尋ねる。今は無視しないで、頼む。

「……三年生の金田秀明。巨大グループの中の一つの会社、そこの社長の一人息子」

淡々と返答してくれる春日。へえ、三年生なんだな。そしてお金持ちなんだろうという予想は的中。親が社長って……そんな人ってそんなにたくさんいるの？　金持ちが一つの学校に二人もいていいのかよ。

「ここでいいかな。中井」

「かしこまりました、お坊ちゃま」

こっちの初老の男性は執事的なやつか。お坊ちゃま、だなんて生で聞いたの初めてだよ。誰もいない中庭で金田先輩に中井という執事と春日が向き合う。俺は春日のちょい後ろで立っているけど、な～んか居心地悪い。

「貴重なお時間を取らせてしまい申し訳ありません。本日は先日、春日進一様にお話させていただいきましたご内容の確認に参上しました」

春日進一？　たぶん春日の親父さんの名前なのだろう。

「話はお父さんから聞いているよね？」

またもや上品スマイルで金田先輩は春日に尋ねる。この不機嫌そうな春日相手によく堂々と笑いかけれるものだ。恐れ知らずってやつか。

「……聞いていません」

「えぇ？」

少し慌てだした金田先輩と中井執事。どしたの、何か手違いでも？

二人はごにょごにょ相談していようだが、すぐに落ち着きを取り戻した。冷静ですね。

「連絡ミスかな？　まあいいや。じゃあここで言わせてもらうね」

若干のハプニングがあったみたいだけど気を取り直して金田先輩が真面目な顔でこう言った。

「恵さん、僕と結婚してください」

……うえええええええええぇぇぇぇぇぇっ！？

第５１話　二人目のお金持ち（後書き）

春日婚約編です。

第５２話　さらりとエスケープ（前書き）

半端なところで終わります。

そんな半端ですいません。

第52話　さらりとエスケープ

「結婚んんんっ！？」

えぇ！？　マジか！？　ちょ、あ、えっと……マジですか！？

「ちょっと下僕君、静かにしてくれないか」

あ、すいません。でもびっくりするって、いきなり結婚だなんて。男と女が永遠の愛を誓うあの結婚ですよ。共に生きようとプロポーズしたんですよあなたは。うおぁ、驚いた。俺がびっくりしたんだから言われた春日はもっとびっくりしてるって。

「……」

ほら、驚いてるじゃん。というより、すごく不快そうな顔してるよ……眉間にシワが寄りすぎ。無表情が崩れて不快そうなオーラ全開。露骨に嫌がりすぎだろ……。

「もちろん今すぐにというわけじゃない。恵さんが高校を卒業してからでいいんだ。今は婚約という形で」

ペラペラと話しだす金田先輩。うわ～、こんな簡単に結婚って決まるのか？　人生ゲームみたいだ。

「どうして……私なんですか？」

そりゃ、あなたが可愛いからでしょ。

「僕は将来、父の会社を継ぐ。そして恵さんはあの有名な春日グループの社長の一人娘。これだけ言えば分かるよね」

お～、政略結婚的なやつですか。ドラマでよく見かけるよね。こういうことって現実にあるんだなー。いやこれだって小説だろ、というツッコミは禁止っ！　あ、あれ？　俺、何言ってんだ？

「恵さんには悪いけど、これは恵さんのお父さんと話し合って決まったことなんだ」

親の決めた許嫁みたいな？　でも私、本当はあの人ことが……みたいな？　うわぁ、ドキドキの急展開。つーか俺はこれを聞いていいのか？　完全に部外者ですけど……今更ながら後悔しています。

「……」

「お父さんから話を聞いて話し合ってくれないかな。あぁ、中井は帰ってくれ。わざわざすまなかったな」

婚約とかそんな大事なことを娘に言わないなんてことあるか？　何やってんだよ春日父。

「じゃあ教室に行こうか。送っていくよ」

家まで送っていくよ的なノリで金田先輩は手を差し出してきた。さすがは婚約者。手を繋いで行こうってわけね。ラブラブですね。ちょっと妬けちゃいそう。

「……」

「え……」

「……うぇ？」

無言で手を取る春日。ただし握った手は金田先輩のじゃなくて……俺の手なんですけど……。金田先輩の手は空中で静止したまま。違う違う、春日さん。繋ぐ手を間違ってる。こっちじゃない。そっちで、こっちじゃない。

「ど、どうしたんだい？」

それでも上品スマイルをなんとか崩さずに尋ねる金田先輩。この人なかなか出来た人間だよ。大人だね～。

「行くわよ、兎月」
「ふえ、いいの？」

金田先輩固まってるよ？　中井とかいう執事さんも消えて金田先輩は一人ぽつん状態。なんだか可哀相なんだけど……。金田先輩をほったらかしにして俺と春日は手を繋いだまま教室へと向かう。片腕だけで鞄を二つ持つのは結構難しいや。そして春日の手の温もりが心地好い。

「あの……春日？　あの人無視していいの？　なんか失礼な気が……」
「……」

すげーしかめっ面でこちらを睨まないでよ。なんだか機嫌が悪そうですね。そりゃいきなり結婚だなんてびっくりだよな。あと普通に手繋いじゃってるよ。この前とか渋々やっとこさ繋いでくれたくせに。

「金田先輩とは知り合いなの？」

「……小さい頃、遊んだことがある」
「へぇ、仲良いじゃん」
「別に」
「そうなの？　だって二人で遊んだんだろ？」
大金持ちの子供同士の遊びだから……金塊で積み木とか一万円キャッチとかやってそうだな。うお、庶民のひねくれた考え方。
「……二人じゃない。三人だった」
「もう一人いたんだ。その子もやっぱお金持ち？」
「うるさい」
「痛いっ」
手を繋いだ状態でキックしてくる春日。器用だなおい。というか……廊下に人っ子一人いないんだけど、もうホームルーム始まってる感じ？　てことは俺達は遅刻か……うわっ、また担任に怒られる。嫌だね～。まぁおかげで人目を気にせずに春日と手を繋げるから万々歳だけどね。なんか手を離すタイミングを逸したというか、ずっと繋いでいたいというか。とにかく嬉しいッス。
「でも急に結婚だなんてびっくりだよな」
「……」
「さすがはセレブって感じ。俺みたいな庶民とは住む世界が違うよ」
「……」
ま～た無視か。別にいいけどね。いつものことだし。お、教室前に到着。名残惜しいけど、手を離すか。
「今日も一日頑張ろうな。遅刻なんて気にするなよ！」
「……」

はい無視。べ、別にいいもんっ。寂しくないもんっ。

「おらぁ、遅刻かこの野郎」

こっそり扉を開けば担任は……いなかった。うおっ、ラッキー。

「担任は？」

「知らない。そして将也、いつから不良になったんだよ。親友として恥ずかしいよ」

「黙れライス太郎」

「英語！？」

第５３話　日月木の昼休み

「ほぉ、そんなことがあったのか」

昼休み、いつものように米太郎とランチタイム。ここ最近あんパンが美味しい。俺の中で密かに急上昇してます。安くて美味しいあんパンは子供の人気者。ばい菌もやっつけるんだぜ！

「びっくりだろ？」

「確かに」

「あとこの前、菜々子さんに会ったぞ」

「らしいな。茶髪にしてさ～……ププッ」

「……その笑いはどういう意味だ」

「いやいや、去年の将也の醜態を思い出してぶべらはぁ！？」

とりあえずグーパンチ。あんパンを頬張りつつ今朝の出来事を米太郎に話す。今朝の出来事というのは勿論、超スクープ春日結婚！？のことだ。もう大事件だよ。ハプニングだよ。

「ホントすごいな。それにしても許嫁か……。そんな人がいたら俺もう友達一人もいらないや。あ～早く会えないかなぁ、許嫁ちゃん」

架空の許嫁にデレデレする米太郎。気持ち悪い。傘をさすかどうか迷う程度の雨ぐらい気持ち悪い。つーかイラつく。小雨も米太郎も！

「許嫁だからとか関係ない。親父達の決めたことに従う気はサラサラないね。俺のことは俺自身が決める。だから許嫁はもう取り消しだ。……これからは恋人同士だからな。文句は言わせねぇぜ、俺自身が決めたことだから……みたいなっ！」

一人ヒートアップする米太郎。こいつの妄想力と一日の野菜摂取量は人一倍だからな。まったくもって気持ち悪い。野菜のように緑色に変色してしまえ。そしてナメック星に帰還しろ。

「兎月」

「ん？　……春日」

噂をすれば、ってやつか。今朝と変わらず無表情の無愛想の春日。お弁当箱を持った春日が後ろに立っていた。ぬおぅ、だから気配はどうした。自分の意思で消せるのかよ。

「ごめん、メール気づかなかった」

しかし携帯に新着メールはきていなかった。今日は迷惑メールしかきていないことにめげず、顔を上げる。ということはメールしてないってことか。アポなしで来ましたか。

「食堂で食べるんだろ？　わりいな、米太郎。ちょっと行ってくる」

「……ここ」

えっ？

「ここで食べる」

どういった心境の変化か、春日がうちのクラスでランチをするらしい。俺としては食堂に行く時間が省けるからいいけどね。

「そっか。ちょっと待って、椅子持ってくるから」

春日を俺の椅子に座らして、別の余っている椅子を取ってくる。

「米太郎も一緒にいるけど問題ないよな」

「……」

無視するので問題なしということで。一方、米太郎のテンションは急上昇していた。

「やっほぅ！　春日さんと飯が食えるなんて超幸せだぜぇ。こんにちは、俺の名前は佐々木米太郎。弓道部に所属しています。よろしくっ」

「……」

ズバッと挨拶をまくし立てて俺と春日と米太郎の昼食開始。

「ま、将也ぁ。春日さんが無視する……」

涙目の米太郎が耳打ちしてきた。確かに無視してたけど俺はもう慣れたから気にもならないぞ。あの程度の無視、春日にとっては挨拶みたいなもんさ。

「春日はそういう奴だから。さ、食べようぜ」

あんパンをまた一口頬張る。上品な餡の甘みが口いっぱいに広がる。百円クオリティーとは思えない。これでこの美味さ、三ツ星パン屋で売っているあんパンは一体どれほど美味いのだろうか……食べてみたいものだ。いやいや百円あんパンで俺みたいな庶民には十分だけどね。

「春日さんも弁当なんだね～。俺も毎日手作り弁当。野菜を食べて

元気モリモリさ！」

「……」

テンションが空回りの米太郎。春日じゃなくてもこれは無視したくなるわ。あ、また泣きだしそう。こいつメンタル面弱すぎだろ。

「大丈夫だって。表情には出てないけど、すげー喜んでいる。そのまま続けるんだ」

小声で米太郎にアドバイス。

「わ、分かった」

また変なテンションで話しだす米太郎。こうしていれば俺が黙っていても空気は悪くならない。黙々とご飯が楽しめて都合が良いや。だからファイトだ米太郎。

「これで一日分の野菜ジュースみたいなのがあるけどさ、俺からしてみれば野菜はそのまま摂取してほしいね。量とか効率とか云々じゃないんだ。太陽の恩恵を受けた野菜、厳しく壮大な自然の中で育った野菜ってのは温かいものを持っているんだよ。それがどのビタミンよりも大事で人に必要な……ビタミンＬＯＶＥなのさ」

「……」

不意に春日が足を踏んできやがった。痛ぇ！　ま、まずい……米太郎のつまんない話に春日がイラついている……！

「家庭での料理によっても愛情をもらいビタミンＬＯＶＥは発生す」

「はいストーップ！　その話はやめにしような。全然面白くないから」

「はぁ？　待てよ、こっからが盛り上がるシーンだぜ？」
「そんなこと知りません。いいから黙ってなさい」
シュンとする米太郎。もっと気の利いた話ができないのかお前は。
仕方ない、いつもみたいに俺が話しかけるか。
「米太郎は変わってるからさ、気にしないでいいよ」
「……そ」
「どうしてお前には返事するんだよ！？」と叫ぶ米太郎の口を塞ぐ。
モガモガうるさいぞ、米太郎君。
「なんで今日は食堂に行かないの？」
これは気になってたんだよな。食堂に行きたくない理由とかあるのかな？
「……あの人がいるから」
あの人……金田先輩のことか？　そんな毛嫌いしなくてもいいじゃん。
「婚約者なんだから、もっと仲良くしたら？」
「うるさい」
「痛いっ！」
す、脛蹴られた。痛くて涙が出そう……。
「これもビタミンＬＯＶＥの一つの形だな」
「うるせえ米太郎！　ビタミンＬＯＶＥってなんだよ！？」

そのままグダグダと昼休みは過ぎていった。

第５４話　セレブのセレブな登校

春日婚約!?　の翌日、今日もバスに乗る。今日は席が空いておらず立っているのだけど……春日が怒りそうだ。なんとか説得して他人の席を奪うのはやめさせたけど、立つとなったら春日がイラついて俺を蹴ってきそうだからなぁ。ちょっと欝だよ。などと思っているうちにバス停に到着。いつもみたいに春日が乗ってくると思いきや……バス停に春日の姿はなかった。あれ？　おかしいな。春日が乗ってこないなんて。以前、この時間のバスに乗れって春日からメールがきたから乗っているんだけど……言った本人が乗らないなんてな。何かあったのか？　いつもと違う光景に違和感を感じつつ、バスは発進した。

「お、将也〜。おはよう」

一人学校に向かっていると、後ろから声をかけられた。振り返ればそこには米太郎が。朝から爽やかな笑顔しやがって。

「おはよう」

「今日は一人か。いつもラブラブ登校してる相手はどしたの？」

それは春日のことを言ってるのか。別にラブラブじゃないぞ。

「いなかったんだよ。今日は休みかもな」

「そうなのか。春日さん、皆勤賞逃したな～」

それは別にどうでもよくね？　ちなみに俺は一年から皆勤賞だぜっ。昨日の遅刻はバレなかったのでまだまだ皆勤継続！

「ちなみに俺は一年からずっと皆勤賞だからなっ」

「き、聞いてねぇよ！」

くそっ。米太郎と同じ思考回路だった自分が腹立たしい！　なんで同じこと考えてるんだよ。こんな野菜馬鹿と同類になりたくない！

「おい将也、あれ見ろよ」

「あ？」

次の瞬間には一台の黒光りする車が俺の横を通過していった。なんだか高級そうな車だな。黒光りの高級車は高校生の通学路に似合わない。すげー浮いてる。

「あんな高そうな車、うちの学校の教師陣の中で乗っている奴いたか？」

いや、いなかったはずだ。それにあんな車は一回も見たことない。だとすると誰の車だ？　通学する他の生徒らも注目する中、坂を登りきった車が校門前で停車する。ドアが開かれ、出てきたのは……

あっ、

「春日だ。それと金田先輩」
「へぇ、あれが昨日話していた色白眼鏡お金持ち先輩さんか」
色白で眼鏡をかけた優等生オーラを出す金田先輩。対して不機嫌オーラ全開の春日。うわ～、あの春日相手によく微笑んでいられるなぁ金田先輩。俺だったら恐れ多くて無理だよ。
「すげーな、車で登校とはさすがはお金持ち。あと、春日さん皆勤賞続いてるじゃん」
「そうだなー。でも春日、機嫌悪いな」
「そうなのか？　よく気づくな。さすがは彼氏」
彼氏じゃない下僕だ。いや、どう見ても機嫌悪そうだよ。普段から無表情だけど今は超ぶすっとしている。ちょっと怖いぐらいだ。
「春日はああいった送迎が嫌だって聞いたことがある」
「ほー、だからバス通学なのか。ところで兎月」
「なんだ？」
「行かないのか？　春日さんのところに」
俺が？　いやー、今は婚約者の金田先輩といるみたいだし、邪魔したら駄目でしょ。
「許嫁同士の仲良し登校だぜ？　俺みたいなクズ庶民が行ったら邪魔だろ。無理して声かけなくていいんだよ」
「そうか？」
そうだよ。さ、俺達は俺達で仲良く登校しようぜ。米太郎と手を繋いで仲良く登校～、って思いっきり手を弾かれた。繋ごうとした手を弾かれて視線を横に向ければ、そこにはぐにゃぐにゃに歪んだ米

太郎の顔。嫌悪の文字が色濃くはっきりと出ている。

「ちょ、やめてくんない？　俺、野菜と女性が好きなだけの普通の男子だから。そっちの気は全くないから」

おいおいおい！？　ちょっとしたボケじゃないか。そのくらいノッてきてもいいんじゃないの！？

「違うって米太郎、俺なりのユーモアだって。そんなガチに引くなって」

「いやっ、近寄らないで！　カヲル君のことは友達だとしか思っていないんだ」

「誰がカヲル君だあぁ！？　話を聞けよっ！　ほんの冗談だって」

尚も絶叫する米太郎。落ち着けえぇ！　朝っぱらから騒いでんじゃねぇよ！　ほらぁ、周りから変な目で見られてるよっ！　俺ら別にＢＬじゃないからこっち見ないでえぇ！　うがあああぁぁ、軽くボケたらこの仕打ち。俺はツッコミしかしちゃいけないのかよ！

「恵さん？　どうしたの、早く行こうよ」

んあ？　この声は金田先輩のだ。顔を上げれば、坂の上には俺を見下ろす春日とその春日を見つめる金田先輩。……これはあれだな。

「……」

「……うわぁ」

ヤベ、はしゃぎ過ぎた。春日に見つかってしまった。春日と金田先輩、二人は今から仲良く教室まで行くのだ。俺がいたらマズイでしょ……ぐあっ、こっち見ないで。

「……」

無言で横を通り過ぎる作戦実行。どうかこのまま何事もなく……

「兎月」

作戦失敗。なんで呼びとめるんだよ。そこにいるフィアンセと二人で登校しなさいってば。

「……あ～、おはよう」

「……おはよう」

挨拶を交わす俺と春日。こっちをじっと見つめてくるけど……見ないでください。俺はどうしたらいいんだよ。

「また君か。確か、恵さんの下僕君だったよね」

「あ、はい」

軽く牽制し合う金田先輩と俺。いや……なぜ牽制しなくちゃならんのだ。敵視の眼差しをぶつけてくる金田先輩。俺が何かしましたかい？　おかしいおかしい、俺は何も関係ないし。

「君だね、恵さんに変なことを吹き込んだのは」

「はぁ？　変なものを吹き出した？　朝から下ネタは勘弁してくださいよ先輩」

「そんなことは言ってないだろ！　君が無理矢理そう解釈しただけじゃないか！」

おぉ、ツッコミだ。良かった、俺はボケてもいいんだ。ほんのジョ

ークですって。だから俺の脇腹を抓らないでえぇ春日ぁ！　痛い痛いっ。

「兎月、行くわよ」
「え、ちょ、春日？」
「え、ま、待って恵さん」

抓っていた手を離して俺の手を持つと春日は早足で校舎へと向かう。ちょ……金田先輩はいいの？　未来の旦那さんでしょ？

「待っ」
「裏切ったな！　父さんと同じに裏切ったな！」

金田先輩の声は初号機パイロット佐々木米太郎の叫びによって遮られた。

春日と二人、手を繋いで早歩き。婚約者の金田先輩から逃げているようだが、俺的には花嫁を奪った男みたいな気分は一切ない。だって花嫁が自ら逃走したのだから。つーか俺と春日はそーゆー関係じゃないし。……あと、周りからの視線が痛いッス。男女が繋いで登校ってのは普通にありと思うが、走って登校なんて見たことがない。

「何を急いでるの？」と言わんばかりの視線が突き刺さってくる。とても気まずい。

「……」
「……」

あっという間に正面玄関に到着。後ろから金田先輩が追ってくる様子はない。

「早く履き替えなさい」
「はいはい」

そんな急がなくても先輩は来てませんって。露骨に嫌がりすぎでしょ。そんなに嫌なのかよ。上履きに履き替えて、春日と二人教室へ向かう。

「昨日、お父さんから結婚の話聞いた？」

金田先輩が言うには、春日父とは話をしてあるらしい。春日が結婚のことを知らなかったのは親父さんが伝え忘れたからだそうだ。何してんだよ春日父。

「……聞いた」
「やっぱり結婚って本当？」
「……うん」

コクリと頷く春日。やっぱ本当だったのか。へぇ、あの春日父が婚約を認めたなんて。金田先輩の会社と提携結べるのがそんなにいいのかな？　その辺の難しい話はよく分かりませんが。

「なるほど。だから車で仲良く登校ってわけか。金田先輩優しいじゃん」
「……」
あ、れ？　違うの？　いやでも、そうじゃないか。優しいもん。
「……」
「……」
「……兎月、言ったよね？」
「え～っと何を？」
「……私と一緒に普通に登校したいって」
あ～、言ったようなそうでないような……。ああ、そうだ。確かに一度、本音を言ったことがあったな。
「うん、言った」
「……」
でもそれは俺のささやかな願いであって春日が無理に聞くことではないよ。フィアンセの金田先輩のことを優先しないとさ。
「そんなこと気にしなくていいよ。ただ俺は金田先輩と春日の邪魔はしたくないね」
「……なんで」
「なんでって……いや、俺みたいな庶民がセレブ夫婦の仲を邪魔しちゃ駄目だろ。所詮、俺はただの下僕だし」
俺がとやかく言う筋合いも資格もないだろ。金田家と春日家の縁談であって、兎月家の俺には一切関係なし。何も口出ししちゃいけない。

「……兎月はそれでいいの？」
「え……」
だ、だから俺には関係ないこと……それに俺があれこれと言うべきじゃないし……言える立場でもないし。春日に迷惑はかけたくないし……。
「……」
「ねぇ」
「別にぃ？　俺はどうでも？　特にこれといってないですよ」
「……」
「結婚だなんて俺にはまだ縁のないことだし。どうぞご勝手にって感じだよ」
「……」
「俺は何とも思わ……！？」
ふと隣を見れば、そこには春日の顔が。けど、それは今までに見たことのない悲しげな表情だった。ちょ、どうしてそんな顔してるの？　傷つけること言いました？
「えっ……ど、どうしたの？」
「馬鹿」
「ば、なっ、え？」
それだけ言って春日は自分の教室へと入っていった。悲しそうな表情のまま。な、なんですか急に。そんな顔しないでよ。俺なんかやらかしました……？
「……うーん」

第５５話　邪魔者は退散

昼休み、春日と食堂でランチ。どことなく不機嫌なのは金田先輩のせいか、または俺のせいか。どっちにしても不機嫌なのに変わりはない。空気の悪さにちょっとだけ食欲も失せる。ちょっとなので全然食べますけどね！

「なぁ春日、食堂で金田先輩と会いたくないから昨日はうちのクラスで食べただろ。どうして今日は食堂なのさ？」

今日も売店でゲットしたあんパンの袋を開けつつ春日に問いかける。あんパン最高。飽きてきた感が徐々に増えてきたが、まだメーターの半分くらいだ。まだいける。あと二日はあんパンで乗りきってやる。後釜は決まっている。メロンパンだ。

「……」

春日は無言で携帯を取り出すと画面を俺に見せてきた。うわうわ、駄目だって。食堂で食べる教師もいるんだからそんな堂々と携帯出しちゃ。見つかっちゃうよ。

「ん？　これって金田先輩から？」

『お昼休み、教室まで迎えに行くから待っていてください』

これは……お昼のお誘いというやつでは？

「……あの人が一組に来るから、隣の二組にいても気づかれそうだから」

は～、さいですか。って、駄目でしょ。そんな拒絶して……金田先輩が可哀相でしょうが。俺なんかと一緒にいていいのか？

「今日もパン？」

携帯をパタンと閉じた春日がそんなことを聞いてきた。何その急な話題転換。どんだけ金田先輩の話したくないんだよ。

「そうだよ。最近あんパンにハマってるんだ。ところで金田先輩はどうするの？」

「いつもどこで買ってるの？」

「うえ？　っと、休み時間に売店で買ってる。昼は混むからその前に買わないとさ。ちなみに金田先輩は弁当なのかな？」

「自分でお弁当作れば？」

くおぉうっ！？　意地でもそっちの話題には触れないってか？　なんでだよ、あなたの旦那さんの話でしょうが。

「あぁ……いや、俺料理できないから」

「そ」

「……」

「……」

なんで？　そんなに金田先輩が嫌いなのかよ。あの人じゃ不満？それとも他に好きな人でもいるとか？

「……」

「……」

「……」

「……兎月」
「何？」
「……アンタはどうなのよ？」
はい？　な、何が？
「あの人のこと、どう思ってるの？」
金田先輩のことか。いや～、俺は親しいわけでもないし、これといって会話もしてないし。なんとも言えないんですけど。まあ確かにいけ好かない人だとは思うけどさ。
「う～？　いや良い人だなと思うよ」
「……そうじゃなくて」
「じゃなくて？」
「……私とあの人が一緒で兎月は何も思わないの？」
「……」
……そ、それは……いや、俺は何も思うことはないぞ。絶対にだ、うん。お、俺は……別に…何とも……。
「ねぇ」
「お、俺は……」
「ここにいた。探したよ恵さん」
あっ、金田先輩。息遣い荒いけど……走りました？　息を整えつつ金田先輩は春日から視線を外さない。
「メール見たでしょ。どうして教室にいなかったの？」
「……」

露骨に嫌な顔するなよ春日。ちゃんと質問には答えなさいっ。

「まぁいいや。ここで食べようか」

と言って先輩は弁当箱をテーブルに置いた。そして目線を俺へと向ける。

「……」

その目はあれですね、お前は邪魔だからどっか行きやがれ的なメッセージを訴えかけていますね。はいはい、分かってますよ。俺みたいな庶民は立ち去りますって。

「あぁっ！　俺、今から大事な用事があったんだ！　急いで行かなくちゃ～」

パンを袋に戻してエスケープの準備。急げ俺。二人の大切な時間を潰さないように。

「兎月……？」

「じゃあな春日。あんまりアツアツしたら周りから見られるから気をつけてなー」

猛ダッシュでテーブルから逃げる。邪魔者は退散っと～。

「兎月」

「彼はいいから。さ、一緒にお昼を食べよう」

後ろから二人の声が聞こえたが振り返っちゃ駄目だぞ。二人の愛の

ランチタ～イムだからな。俺が邪魔したらいけないんだよ……。

「で、こっちに戻ってきたのか。ヘタレだな」

舞い戻った教室で米太郎にそんなことを言われた。

「ヘタレじゃない。俺なりに気を遣ったんだよ」

「はいはいそーですかーっと」

馬鹿にしてんのか。俺の英断を馬鹿にしてんのか。

「他の男にみすみす彼女を取られるなんて情けないぞ将也」

「あぁ！　だからっ、俺と春日は付き合ってないっつーの！」

「ありえないっつーのみたいな？　花の男子気取りかお前は」

そんなつもりはない。お前が無理矢理そうとらえただけだろうが。

「……う～ん……本当に付き合ってないのか？　えっと、下僕だっけ？　それってマジ？」

「マジだ。春日はな、鞄持たせたりパシリさせたりと俺をこき使うんだ。俺は主人に忠実に仕える犬の性質を持っているんだとよ」

大体なんだよ犬性質って。でも実際、何も言い返せずに従っちゃうんだよな。これこそヘタレだ。情けないことこの上ない。

「……ふぅん」
「なんだよ？」
「いやな、だって将也と春日さんすげー楽しそうにしているからさ」

俺と春日が……？

「春日さんが楽しそうなんだよ。ああいった表情しているの、お前といる時だけだぜ？」
「そんなわけないだろ」

つーか、いつも無表情だから楽しそうかそうでないかなんて分かんないって。

「あと将也も。お前もすげー楽しそうじゃん」
「俺が？」
「ああ。楽しいんだろ？　なんだかんだ言って」
「……」
「ま、要はお前はヘタレだってこと」
「何そのまとめ方！？」

第５６話　偽りの屋上

「起立、気をつけ、礼」

ありがとうございました、と。帰りのホームルームも終わり下校時間となった。最近の授業はとてつもな～く面白くない。故に眠い。でも居眠りすると怒られる。なんてひどい仕打ち。江戸の拷問を思い出すね。拷問されたことないけどさ。とにかくしんどい、だるい、面倒くさい。

「じゃあな将也」

さっさと教室から出ていく米太郎。もうすぐ弓道の大会があるらしく気合いが入っているみたいだ。あれでも一応真面目にやっているのだろう。一応ね。

「兎月、今日は部活どうする？」

「お、マミーか」

「マミー言うな」

言うのは久しぶりだけどな。久しぶりといえば部活も最近活動してなかったな。部室でゲームしたり雑談したりはしているが、まともな会議は一つもやっていない。

「そうだな、今日は話し合いでもしよっか」

「分かった。ボランティア部の皆に伝えておくね」

そう言って水川も教室から出ていった。本来は部長の駒野先輩が決めることだが先輩は受験で忙しいので代わりに俺と水川が活動の有

無を決定しているのだ。火祭のイメージアップ運動の掃除と挨拶活動以来何もしてなかったからな。そろそろ新たなボランティア活動を始めないと。

「ちょっと君」

「へ？」

またも声をかけられた。今日の俺って人気者？　待ちに待ったモテ期到来！？

「君だよ、君。恵さんの下僕をしている君に呼びかけているんだ」

……なんだ、金田先輩か。後ろに立つのは白い肌に眼鏡をかけた三年生の金田先輩。春日の……婚約者。この人が春日の旦那さん、ねぇ……。あのワガママお嬢様をちゃんと相手できるのかねぇ。あの人はそんな簡単に言うこと聞かないからさ。というか聞く気もないぞ、あれは。その春日のパートナーがこの人……大丈夫なのかよ。

「はぁ」

「な、なんだその態度は。こっちは一学年上だぞ」

「その一学年上の先輩が何の用ですか？」

わざわざ二年生の教室にまで来てよ～。あ、春日か。……ん？　『春日を迎えに来た↓（　　）↓俺のところに来た』……これから導き出せる（　　）に入る言葉は……

「春日は俺のところに来てませんよ。残念でしたね」

「違う。勝手に予想しないでもらいたい」

じゃあなんですか。ご用件を述べてください。受験生がこんな馬鹿

の二年生に何の用だよ。春日関連のことでしょうね。下僕の俺に何を聞くのやら。

「君の名前は？」
「兎月です」
「兎月君、君に話がある」

金田先輩に連れられて向かった先は、なんと屋上！

「うほーっ！　高い、怖い、風が気持ち良いー！」

高校で屋上に来たのは初めてだな。へー、こんな感じかぁ。風が吹き抜け、いつも見上げる校舎を見下ろす新鮮なこの景色。グラウンド全体を上から見渡せるこの視点の高さと視野の広さ！　パネェです。おっ、あれは弓道場かな？　米太郎が頑張って練習しているのだろう。うおおおぉぉ、また風がキター！

「きゃっほーい。空が近いぜ！」
「静かにしてくれないかな」

あ、すいません。屋上で思わずテンション上がっちゃいました。そ

れって仕方のないこと。どうしようもあ～りません。

「というより、どうして屋上があいているんですか？」

普段、まあいつもというか基本的に屋上は立入禁止となっている。開放されるのは卒業写真を撮る時ぐらいのものだ。だから屋上で恋人と二人きりでランチというラブラブ展開なんてのは漫画や小説でしかありえないのだ。おいおい、これも小説だろうがってツッコミは言わないでねっ！　……はっ？　あ、あれ何言っているんだ俺は？

「屋上をあけるなんて、僕にかかれば造作もないことさ」

フッと小さい微笑みを浮かべる金田先輩。あ、もしかして……

「先輩がピッキングしたんですね」

「違う、そういう意味じゃない！　鍵をあける職人さんを呼んで、あけてもらったということだ」

鍵をあける職人ってなんすか？　鍵屋さん的なやつ？　つーか勝手にこんなことしていいのかよ。学校サイドにバレたら大変ですよ。俺を巻き込まないでね。

「へー、やっぱ凄いんですねー。おっ、俺ん家見えるかな！？　あっちの方角なんだけど……」

「こっちを向いてもらおうか。話があると言っただろう」

あ～、そんなこと言ってましたな。もうちょい屋上を満喫したいんだけど。その屋上にまで呼びつけたのだ。何か重要な話でもあるのだろう。

「話ってのは？」

春日じゃなくて俺に用事なんて一体……はっ、

「ちょ、先輩やめてください！」

「え？」

「俺、そっちの趣味はないんです。ボーイズ的なやつはホントに苦手で……」

「ち、違うっ！　君は朝からそういう話しかしてないぞ！」

しょうがないでしょうよ。だって思春期だもん。

「ＢＬじゃなかったらなんですか？」

「……君に尋ねたいことがある」

だったら早く言ってもらえますか。部活もあるんで。

「君は恵さんのことをどう思っている？」

……はい？　急に何を言ってるんですかい。春日のことをどう思っている？

「いや、どうと言われても……」

「正直な話、君の存在が邪魔なんだよ」

えぇ～……いきなり邪魔宣言かよ。何にもしてないぞ俺。今日の昼だって二人の邪魔にならないよう気を遣ったりと頑張ったんですけど！？　その俺を邪魔者扱いって……少しは今日のナイス判断についてもっと評価してもらいたいものだ。

「今朝、恵さんを迎えに家まで行ったら車には乗らないと言うんだ。バスで行くと聞かなかったんだよ」
「そうなんですかー。春日は車での送迎は嫌いらしいですよ」
「そうらしい。けど、それだけじゃないんだよ」
え？
「バスには君が乗っているんだろ？　だから恵さんはバスに乗ると言ってきかなかったんだ」
え～？　そんなことないッスよ。別に俺がいるいないは関係ないでしょうが。単純に車の送迎が嫌なだけだろ。
「恵さんのお父さんが説得してくれてなんとか車に乗ってくれたけど……とにかく君のせいなんだ」
おいおいおい、俺悪くないよ？　とばっちりにも程があるやい！　理不尽だろうがおらぁ！
「いやー、それは勘弁してくださいよぉ。ちょっと俺には対処の仕様がないと言うか」
本音をぶちかますなんてことはしません。相手は年上だしね。でもイラつくよね。俺は何もしてないってのにこの理不尽な当たりよう。お金持ちってのは理不尽な輩しかいないみたいだ。庶民をイラつかせるのが上手いのが金持ち。ここ大事。俺が今学んだこと！
「それで君に一つ提案をしようと思っている」
何がそれでだ。勝手に思ってろ、この色白眼鏡がよ。と言うのを年

上敬語翻訳機にかけて口に出すことに。本音は言いませんって。

「それは何でしょう？　教えてもらえますか？」

「……恵さんと会うのを今後一切なしにしてもらおうと思う」

……はぁ？　えっと、それってもう二度と春日と会うなってことだよな……マジかよ。何をこいつは言っているんだよ。

「もちろん僕にそんなことを行使する権力はない。君の意思に従おうと思う。そこでだ」

「そこで？」

「兎月君、君が恵さんのことを何とも思っていないのなら、恵さんに好意がないと言うのなら、もう恵さんに近づかないでもらいたい」

……はぁ。俺は関係ないだろ。春日が思うように、アンタが思うように勝手にやればいいだろうがよ。無理矢理俺を巻き込むな。俺が何を言おうとアンタらの結婚に何の支障も出ないだろうが。

「正直な話、僕はなんとしても恵さんと結婚しなくちゃいけないんだ。会社のためにも……。君にその気がないなら一歩引いてほしいと思っている」

だ、か、ら！　アンタらの結婚に俺は何にも関係ないだろ。俺はただの下僕だろうが。結婚に何の支障が出るって言うんだ。……それに俺が何か言ったところで結婚の話はどうにもならないんだろ。俺の意思とか何の力も持たないんだからさ。もし……もしも俺が結婚を止めてほしいと懇願したら、それが通るのか？　そんなわけない。俺が何言おうとどんな抵抗をしてみようとも覆るわけがない。俺はどうすることもできない。……だったら最初から言わない方がいい。春日に迷惑をかけたくないし、この結婚が春日にとって良い

ものなのかは俺には分からない。少なくても俺は何も手を出すべきじゃない。俺の意思なんて表に出さない方がいいんだよ。

「……君は恵さんのことをどう思っている？」

「……別に？」

本音なんか言うべきじゃない。俺みたいなクズ庶民がこの金持ち相手に何ができる。この金持ちに勝てる要素なんてあるのかよ。身分の違いならもう分かっているさ。俺の意思どうこうじゃないだろ。こんなの適当に流したらいいんだ。

「俺はなんとも思ってないですよ。春日とはただの知り合いだし、別に特別な感情はありません。逆にいつも人を下僕扱いしやがって、ちょっとイラついてるくらいですよ」

……そ、そうだ。毎日毎日、登下校には鞄を持たせて、休み時間にはパシリ。無視するくせして、不満があったらローキック。何を考えているか分からないし、理不尽なことばっかり言いやがる暴力女。そんな奴といて楽しい？　……そんなことを思うはずがない……そうだろ俺？　そうだよな……？

「今の言葉、君の本当の気持ちなんだね？」

「……そ、そうです……その通りです。お、俺は春日と一緒にいたいと思わないですし、春日がどう思おうが関係ないです。俺の存在が邪魔とおっしゃるなら喜んであなた方お二人の前から消えますよ。それが先輩のためになるのでしょ」

「なるほど……君は思ったより聞き分けのいい人だったようだ。わざわざこんなところにまで呼んですまなかった」

金田先輩はそう言うと扉の方へと向かう。一歩一歩遠ざかる人影。

「ではこれで。じゃあ、行こうか……恵さん」

……えっ？　今、なんて……？　遠くに映る影が一つ増えた。後ろを振り返れば、金田先輩ともう一人……別の人物がそこにはいた。

「か、春日……！？」

「……」

な、んで……ここに春日がいるんだ？　いつから？

「兎月君は内緒で恵さんには物陰に隠れてもらっていた。今までの会話は全部聞いてもらっている。君の思いもね」

聞いていた？　全て？　さっき言ったこと全部？　な、何を……！？

「これで彼の気持ちが分かったでしょ、恵さん」

「……」

春日は俺をじっと見てくる。っ……今朝見た、あの寂しげな悲しい表情で俺を見てくる。何も言わず、ただずっと……。

「……」

「か、春日……」

声が震える。手も足も体全体が震えて動けない。聞かれた。さっきの俺の言葉を聞かれた……俺の……

「さ、行こうか恵さん。下僕なんていらないさ」

金田先輩に手を引かれ春日は扉の向こうへと消えていく。一歩一歩遠ざかる。闇の向こうへと沈んでいく。

「っ、待っ」

……っ！　馬鹿か、待つのは俺の方だ。伸ばしかけた手を止める。完全に扉の向こうへと消えていった春日の姿。足音も何も聞こえない。二人は去ってしまったのだ。屋上に残ったのは俺一人だけ。さっきまでは二人もいたのだ。金田先輩と……春日が。

「今更……遅いだろ」

何を今更取り繕うってんだ……今の聞かれたら、もう取り返しがつかないだろ。あれが……あれが嘘だなんて言えるはずがないだろ。

「……あぁ、そっか」

やっぱ嘘だったんだな。自分自身の気持ちに嘘ついていたんだ俺は。春日といて楽しくない。そんなこと……微塵も思ってもないのに……。嘘をついた。気持ちを隠した。それが何を意味するのか。それはこの風を一つも感じない屋上で一人突っ立っている俺が物語っている。正門前に停車したリムジンが物語っている。今日、俺は……春日と別れたのだ。主人と下僕の関係はここで完全に崩れてしまった。冷たい風も吹きつけないのに、心が異様に寒く感じた……。

第57話　さよなら下僕生活

「ちょっと兎月っ、聞いてるの？」
「んあ？」
隣で水川が俺の肩を揺らしてきた。何なの一体。
「話し合い。全然聞いてないじゃん」
「……あぁ、話し合いね」
そういえばボランティア部で会議していたな。部室には俺を含めて部員六名が椅子に座っている。夏のボランティア活動に向けて話し合いをしているんだっけ？
「へいへい！　しっかりしよーぜ次期部長さんよ！」
「だから声デカイのよ、山倉は」
……。
「そういえば兎月先輩。最近、火祭先輩とはどうなんですか？　何か進展ありましたっ？」
「矢野ちゃん、それは話し合いが終わってから聞こうね。私も興味あるしぃ」
……。
「……兎月先輩？」
……。

「ちょっと兎月っ。聞いてるの？」
「んあ？」
「リピートかよ！？」

いきなり大声出すなよ山倉。うるさい。

「全っ然、話聞いてないよね」
「俺がか？」

というか水川よ、何を話しているんだっけ？

「もうっ！　ちょっとは集中してよ。先週もそんな感じで話し合いにならなかったから、また今日もこうやって集まっているんでしょ」

先週……あぁ、もう一週間経つのか。……春日と会わなくなって。一週間前……屋上に呼び出された。追い詰められ、自分の気持ちに嘘をつき、そして失った。いや、失ったって言い方もおかしいけどさ。とにかく……あの日を境に俺と春日の関係は壊れたんだ。バスで春日を見かけることはなくなった。さらにメールでの呼び出しやパシリもなくなった。春日とまったく会っていないのだ。いや、会わないとは言ったけど春日の姿は見かけるし、視界に映る。クラスは隣だし教室移動の際にも見ることはある。ただ、会話もしないし目も合わせない。金田先輩に言われた通り俺は春日と接触しないし、春日も俺と関わろうとしない。その状態で早くも一週間が過ぎた。うん……これでいいはずだ。春日と金田先輩は親の決めた許婚同士、つまり婚約しているってことだ。俺みたいな下僕が突っ込む余地はなし。……いや、俺はもう下僕じゃないんだった。もはや下僕ですらない。春日との関わりは一切なくなったというわけだ。

「…月。兎月ってば！　聞いてるの！？」
「んあ？」
「だ、か、ら！　集中しなさいっ！」

水川に頭を叩かれた。……あ～、春日もこんな感じで叩いてきたり蹴ってきたりしてきたよな……。それも今はもうない……。ちなみに春日ならもっと強く叩いてくるだろうな。

「水川、もっと強めにじゃないと……」
「きゃあああぁぁ！？　兎月がドMに目覚めちゃった！？」

……つーかなんで俺は悲しんでいるんだよ。春日に蹴られない。それって俺の望んでいたことじゃないか。何をこんなに懐かしむ必要が……。

昼休み、最近はずっと春日と食べていたけど、それもなくなった。だから以前のように米太郎と食べるようになっている。

「なぁ、将也」

いやいや、これで良かったんだよ。昼飯をのんびりと食えるし、ジ

ュースを買いにいかなくてもいい。むしろ万々歳だろ？

「なぁってば」

なのに……なんでこう、ムズムズするような形容しがたいモヤモヤ気持ちが燻っているんだ……？

「プチトマト爆弾投入っ」

あ？　何か背中にひんやりするものが入ってきた。何だこれ。

「喝っ！」

今、グヂュって音がぎあぁぁぁぁっ！？　背中に何か液体があぁぁっ！　気持ち悪い気持ち悪い！　変な感触が伝わってくるうぅ！

「米太郎！　何しやがった！？」

「トマト入れた」

「やっていいことといけないことの区別がつかないのかテメーは！」

米太郎に一発蹴りを入れる。そ、それより背中は……？

「お、おぉ……思ったよりはひどくなかった」

若干滲んではいるが、ちょっと乾かせばそんな目立たなくなるだろう。でも気持ち悪い。

「背中気持ちわりー。下のシャツは変えるか」

とりあえずタオルを使って背中を拭きつつトマトを取り除く。真っ

赤でカワイイ形しやがって。食べちゃうぞ。いや、やっぱ食べたくない。

「ほら、お前が処理しろ」

タオルごと米太郎に投げつける。食べ物粗末にするな。

「俺だって自分が育てたプチトマトをこんなことに使いたくないさ。でも将也キュンが私を無視するからぁ～仕方なくぅ～プンプンっ」

「よーし、お前には普通サイズのトマトをぶち込んでやる」

「ちょ、待って！　それはさすがにヤバいって、背中ぐっちょぐちょになるって！」

どうしてこいつはこんなにテンション高いんだよ。鬱陶しい。

「俺、着替えてくるわ。お前は絶対許さねえからな」

「とか言いつつ……？」

黙れ。そんなノリはない。体操服を持ってトイレへと向かうことに。教室には普通に女子がおり、その中で半裸になる度胸はありません。あと女子には嫌われたくないッス。そりゃそうでしょ？

「あ～マジ気持ち悪い……あ……」

ふと前を見れば、数メートル先には……春日が……。長髪の艶やかな黒髪をなびかせて、いつものちょいきつめのつり目。そして何を考えているか分からない無表情。その春日といつもいたのに……今では話したりもしない。何も関わろうとしなくなった。それが金田先輩との約束だし、それが春日のためになるんだろ？　だったら良いことじゃないか。悲しむ必要はない。そうだろ……春日。そ

うだよな……。

「……」

「……」

目も合わせずに俺と春日はすれ違う。手に弁当箱を持っていた。おそらく今から食堂で金田先輩と食べるのだろう。……不思議なものだ。以前はあれだけ命令されてジュース買いに行ったり、理不尽な暴力を受けて、ホント奴隷のように扱われていた俺が今ではこうやって無視されている。前から春日は無視することは多かったけど……その無視とは違う無視。もう俺達は何の関わりもない。赤の他人。それだけのこと。それだけのことによるごく自然な無視。ほとんど一緒にいた人なのにこうも何もないとはね……たった一週間のうちに思い出として昇華している。ホント、人との関係って簡単に崩れるよな。いや……俺が崩したのかな……。どっちにしろもう俺達は戻れない。そして戻る必要はないのだろう。春日にとっては……。

「……」

……なんとなく、なんとなくだけど春日も寂しそう？　……いやいや、そんなわけない。婚約者とのランチだぜ？　何が不満なんだって話だ。フィアンセと高校ライフを共に過ごせるなんて誰もが羨ましがるシチュエーションじゃないか。春日が寂しがるはずがない。

「うん、俺の勘違いだ」

「だったら今すぐ方向転換しなさいよ」

……うん？　目の前には水川が立っていた。目がめちゃくちゃ怖い……な、なぜに？

「そのまま前進するつもりなら兎月、アンタ女子全員を敵に回すことになるよ？」

ギリギリと威嚇する水川は暗い笑みを浮かべて上を指す。上？　何が？

「……あ」

赤色の人間が描かれたボード。おぉー、なるほど。ここは女子トイレ前なのか……うん、まずい、よ、ねぇ……。

「は、ははは……間違えちゃったよマミー」

「マミー言うな！」

水川に思いきり殴られた。あぁー、この感じ春日のパンチに近いなー……。

「これなんだよな……」

「やっぱりドMなんだね！？　もう怖いよ！」

……もう戻れない。俺と春日は……。

第５８話　ドライ・クッション

「てなわけで兎月の様子がおかしいのよ」
「そうなんだ……何かあったのかな？」
「うーん、理由はよく分かんないだよ。とにかく元気がないの。そこで桜の出番ってわけ」
「私？」
「イエスっ。今度の休みに兎月をデートに誘うの」
「え、えぇ！？　わ、私が？」
「イエスっ！　桜が誘えば兎月も喜ぶよ～。兎月に元気になってもらいたいでしょ？」
「そ、それはもちろん。彼にはすごく助けられたから恩返しをしないといけないし……」
「照れなくていいって。桜の気持ち、私はちゃ～んと知ってるからさぁ」
「うっ……」
「だから頑張って誘ってみてよ。兎月のために、そして桜自身のためにね」
「……うん！」

「おいおい、なんでそこでシビレ生肉!?　意味ねーよ!」

山倉がうるさい。いや、いつものことか。それにしてもなんでこのモンスターは生肉を食べないんだ?　せっかく置いたのに。ほら食べろって。

「こっちに気づいているんだから食うはずがないだろ!　いいから早く攻撃しろ!」

「その前に砥石くれない?　持ってくるの忘れちゃって」

「初歩的なミス!　何やってんだよ!?　それでもお前はG級ハンターか!」

山倉の怒号が飛ぶ。すげーうるさい。あ、いつものことか。

「あと回復系のアイテムも頂戴。体力が限か……あ、死んだ」

両手に持つゲーム機の画面にクエスト失敗の文字が表示される。悲しげな音楽が部室の上空に舞う。地面に両膝つくハンターがとても哀れだ。

「またかよ!　またお前のせいでクエ失敗じゃねーか!」

山倉が吠えまくる。果てしなくうるさい。おぉ、いつものことか。ゲーム機をテーブルに置く山倉。それに続いて一年生部員の男子二人もゲーム機を置く。そして三人同時に溜め息をついた。

「あと少しで倒せたのに……。何やってるんですか兎月先輩」

「そうですよ。一人で三回も死んで。僕、尻尾の剥ぎ取りで天鱗出ていたんですかね」

「強走薬Gまで使った俺の努力を返しやがれ!」

三人からの罵詈雑言。こんなに責められちゃ泣けてきそう。つーかゲームごときで熱くなりすぎ。そもそも部室でゲームをすること自体が根本的に間違ってるね。教師にバレたらどうするつもりだ。反省文なんて書きたくないぞ。職員室で朗読なんてしたくないからな。期末テストまで返さないなんて嫌だからなぁ。

「つーか水川は？　あいつが今日も呼びだしたんだろ。その水川がいないってどゆこと」

また今日も話し合いをするらしい。連日話し合いばかりじゃないか。いい加減、次の活動の見通しぐらいつけようぜ。

「なぁ、兎月！　お前最近、様子おかしくないか！？」

山倉が心配してるようで大声という矛盾した口調でそう尋ねてきた。俺が？　そうか？

「……いや、大丈夫だと思う」

「……」

え～、何その疑わしいと言わんばかりの目つきは。何が言いたいんだよ。くそっ、山倉ごときが俺の変調に気づくなよ。俺だって自分がおかしいことぐらい分かっているっつーの。

「……そーいえば腹が痛い気がするな。帰っていい？」

「そうか！　腹が痛かったのか！　なるほどな！　よし、今日はもう帰っていいぞ！」

合点がいった、と山倉は両手をポンと叩く。ベタな行動に寒気が走

った。

「じゃあな兎月！　お大事に！」

ちなみに腹は痛くない。ただ部活が面倒くさいから仮病を使ってエスケープすることにした。じゃあな、皆。部活ガンバ。部室から出ようと扉を開く。そして開くと同時に水川が入ってきた。

「お、兎月～。気が利くじゃん」

「……だろ？」

「おいおい水川！　兎月はな、腹がムグッ！？」

せっかく水川の好感度が上がったんだから本当のことは言うな。いや、腹痛いのは嘘だから本当のことじゃないのかな？　とにかく喋るな。シャラップ山倉。

「腹痛は治ったから。さっそく話し合い始めようぜ」

手で山倉の口を押さえたまま耳打ちする。シャラップ馬鹿山倉。水川はテクテクと部室に入る。ふと、気になることが……。

「火祭じゃん」

水川に続いて火祭も部室に入ってきた。途端にテンションアップの男子三人。

「こんにちは火祭さん！　元気でしたか！？」

なんだその挨拶は。もっとまともなことは言えないのかよ。

「こんにちは山倉君。とっても元気だよ」

そんな挨拶にも笑顔で答える火祭。すごくできた娘だよ。もう素晴らしい。こんな良い娘はなかなかいないって。

「たまたまね、たまたま桜とばったり会ったから部室に遊びに来てもらったんだよ」

水川よ、二回もたまたま言わんでいい。強調する部分じゃないでしょうに。たまたまってアクセントによっては卑猥に聞こえちゃうよ。

「そいつは最高っ！　火祭さん、ダーツしようよ！　楽しいよ！」

ハイテンション山倉はデレデレでダーツを投げる。見事に壁に的中、火花が散る。あ、また壁が削れた。ちゃんと的に当てやがれ。

「その前に話し合いしよっか。桜も参加してね」

「うん」

そんなこんなで火祭と水川を加えて話し合いが始まった。

「兎月っ」

「ほぇ？」

「……また聞いてなかったでしょ」

「い、いや聞いていたよ？」

「じゃあ言ってみて」

「え……っと、初期装備でいかにボス戦を切り抜けるかだろ」
「縛りプレイについては一切議論してないよ！　ほら、全然聞いてないじゃん」
すいません。ぼーっとしていたもので。
「こんな調子なの」
「うん……元気ない……」
火祭と水川がヒソヒソと話しだした。もしかして俺の悪口？　本人を目の前にして陰口!?　めちゃへこむんですけど！
「とにかく、今日まとめたことは駒野先輩と顧問に伝えて検討します。じゃ～解散っ」
水川の合図とともに山倉がキャッホーイ！　と騒ぎ出す。
「火祭さん、一緒に遊ぼうよ！　何する!?　ダーツ!?　トランプ!?　一狩りする!?」
だああぁ、うるせえ。テンションが上がりすぎだろ。ただでさえ大声なのがより一層ボリュームアップしていやがる。喉を潰してやりたい。テメーの喉先にダーツを刺してやろうか。
「七人もいるからねぇ……どうしよっか？」
「あ、私は交換日記書くので、数には入れなくていいですよー」
一年生部員の紅一点、矢野がそう言って日記を書きだした。つーか交換日記って、今でもやってるもんなの？

「矢野ちゃんが抜けるから六人か……」
「いや、五人で」
「え、どうして？」
「俺帰るから」

話し合いは終わったんでしょ。なら帰らしていただきます。

「兎月は帰っちゃ駄目」

はあ？　なんでだよ。五人で大富豪でもやればいいじゃん。盛り上がるだろうに。しかし水川に椅子に押し戻されテーブルにトランプが配られる。

「ババ抜きしよ」

結局ババ抜きかよ。

「はい革命っ」
「どうして六人プレイで革命が起こせるんだよ！？」

ババ抜き、七並べ、神経衰弱とやっていき、最終的には大富豪で落ち着いた。水川曰く、やっぱ大富豪だよねとのこと。

「はい上がりー」
「水川三連勝じゃんか！　強すぎだろ！」
「私も上がり」

「火祭さんも!?　くっそー、出せるカードがない！　パスだ！」
「……」
「兎月？」
「え？」
「……兎月の番だよ」
「あぁ……はい」

5か。なら7が出せるや。

「兎月先輩、革命中だから出せないですよ？」

え？　いつの間に革命起こったの？　誰の仕業だ。どうして六人プレイで革命ができるんだよ。

「全然集中してない……」

呆れたように水川が呟いてきた。そんな目で見ないでぇ。

日が傾いてきたので帰ることになった。ボランティア部六人と火祭でぞろぞろと校門を出ていく。この時間帯なら春日も帰っただろうし、バス停で鉢合わせってことはないはずだ。ばったり会うなんてことは起きない。……って俺は何を春日のことを気にしているんだよ。もう春日とは関係ないだろ。何も気にしなくていいんだよ……何も。

「兎月ってバスだよね？」

「……そうだよ」
「何その間？」
水川は電車だろ。つーか俺以外全員電車だし。
「あっ、部室にノート忘れちゃった」
突然、不意に水川が立ち止まる。……すげーわざとらしいんだけど。
「兎月と桜、悪いけど取ってきてくれない？」
「なんで俺と火祭？　水川の忘れ物は水川が取りに行きなさいよ」
俺が行く道理がないぞ。もちろん火祭にも。
「足痛めちゃって。兎月ぃ、お願い……」
うおっ、うるうる上目遣いだなんて反則だぞ。ぐっときちゃうよ。
「行こ」
火祭は了承したようだ。なら俺だって！
「取りに行けばいいんだろ？　ちょっと待ってな」
めんどくさいけど水川の頼みとあっては断るわけにはいかない。つーかなんで火祭も？　俺一人でも大丈夫だって。一人で出来るもん。
そんなわけで火祭と二人で部室へとカムバック。なぜか水川は部室の鍵を持っていた。……おかしくね？　さっき返したんじゃなかったのかよ。

「ごめんね、付き合ってもらって」
「ううん、構わないよ」

ニコッと微笑む火祭。うわー、この子超良い娘だよ。もう惚れちゃいそう。さすがは火祭ちゃん。

「……あのね」
「ん、どしたの？」

水川ノートも回収して、戻ろうとしていると火祭が立ち止まった。

「今度の土曜日、空いてるかな？」
「土曜……まぁ、暇だけど」
「そ、それなら……」

第59話　晴れの日デート

六月中旬、晴好の青空。夏本番前なのになんだこの暑さは、と愚痴りたくなるほどに太陽が燦燦と輝いている。憎い野郎だな。もし太陽がブログしていたら炎上しているぞ。二つの意味で。そんな太陽に相対して俺は駅前の広場で突っ立っている。無意味に立っているわけではない。そんなクレイジーじゃないぞ俺は。本日、土曜日。火祭とショッピングモールに行く約束をしているのだ。しかも火祭と二人きりなのだ。それはつまり……デートというわけなのだ！　なのだ！　なんて幸せなことだろう。今や二年生の中で一、二位の人気を誇る美少女、火祭からデートのお誘いなんてテンション上がりまくりってわけだ。太陽と向き合うのも全然苦にならないってわけだ！　わけだ！

待ち合わせ場所、駅前の広場。待ち合わせの時間、十二時。たったこれだけの連絡事項を遠足のしおり並に確認しまくった俺にミスはない。なんと三十分前にはここでスタンバっているのさ。おかげで二十分間近くも直射日光に晒され続けているのだが……あ、それはミスだった。

「だ～れだ？」

突然、両目が眩しい日光から遮られた。人肌の温もりが優しく両目を覆い、視界は真っ暗。そして後ろから聞こえるのは耳をくすぐる心地好い美声。こ、これはもしや……！

「ひ、火祭……？」

「正解」

パッと視界が明るくなり、振り返ればそこには予想通り火祭が。な、

なんと……私服だ！　いや、そりゃそうだろ。そして私服姿の火祭……超可愛いっ！　うわぁ、制服から私服になるとこうも印象が変わるのか……！　なんか新鮮というか……思わず見とれてしまう。もう普通にモデル雑誌とかに載ってるんじゃねぇのってくらいに私服姿の火祭は可愛かった。やっぱ火祭自体のポテンシャルが高いのは当然のこと、私服姿がさらなる相乗効果を生み出しているというか……うん超可愛い！

「待った？」

「いや全然っ。ちょうど今来たところ」

デートの王道マニュアルを実行。本当は待ち合わせ三十分前から太陽と根比べしていたけどね。しかしそんなこと言わないのが男らしさ。

「ところで火祭、あの……なんで目を塞いできたの？　そんなカップルがやるようなイチャイチャアクションをしてくるなんて……」

俺と火祭は付き合っていない。というか俺みたいな奴が火祭と付き合えるはずがない。高嶺の花なのだ。桜だけに。あ、上手い。

「これをしたら君がテンション上がりまくるって真美が言っていたから……」

水川の野郎……！　その通りだよ、超嬉しいよ。顔には出さないけど心の中ではハイテンションの浮かれまくり！　あぁ、俺に彼女ができたら毎回これやってもらおう。火祭もそんなに顔を真っ赤にしてまでわざわざやってくれてありがとうね。そりゃ恥ずかしいわな。

「じゃ、行こっか」

「うん」

向かうはショッピングモール。駅から徒歩で三分ほどのところにある。様々なお店や専門店がずらりと並ぶ、地元では一番の品揃えを誇る大型ショッピングモールなのだ。火祭は何やら買いたい物があるとのこと。それを選ぶのを手伝ってほしいと頼まれたのだ。だからデートというのは言いすぎ浮かれすぎなのだが、デートと言った方が俺のテンションが上がるので勝手にデートと解釈しています。

「ところで買いたい物って何？」

買いたい物が一体何なのかはまったく聞いていない。

「それはまた後でね。とりあえず先にお昼ご飯食べない？」

確かにもうすぐお昼休みはウキウキウオッチングの時間だからな。お腹も空いてるし、何か食べるか。

「何食べよっか？」

ショッピングモールへと到着。さすが休日とあって大勢の人で賑わっている。家族連れが多いな。お昼時だし、飲食店は混雑していそうだな。

「私は何でもいいよ」

火祭よ、何でもいいってのがお母さん一番困るのっ。毎日晩ご飯考えるのは大変なんだよ。

「うーん、ガックとかどう？」

ガックとはガクトナルドというハンバーガーチェーン店名の略語だ。イケメン男性がマスコットキャラクターを務めており子供受けの良いおもちゃもセットでついて、味とボリュームも最高な大人気ハンバーガーショップなのだ。

「うん、それでいいよ」

「よし、じゃあレッツゴー」

おー、とノッてくれる火祭。やっぱ出来た娘だよ、火祭ちゃんは。

案の定、ガックは混んでおり少しばかり待つ必要があった。

「お待たせしました。ご注文は？」

適当にハンバーガーセットを頼んで火祭と空いているテーブルに座る。この時間帯に座れたのはラッキーだった。神様ありがとぅ！あなたに感謝するのは高校受験以来ですわ。

「う～ん、さすがはガック。美味いよな～」

「うん」

ハンバーガーを両手で持ってモグモグと食べる火祭が……小動物みたいで可愛い！　うはぁ、キュンとするわぁ。

「？　どうかしたの？」

俺の視線に気づいた火祭は不思議そうにこちらを見てくる。なんてピュアな反応だろう。春日なんて見るなって言ってきたからな。……って、また春日かよ……もう春日とは関係ないだろうが。全くの赤の他人なんだよ。いい加減忘れましょうよ。何をそんな未練タラタラと……っ。

「……大丈夫？」

「へっ？」

俯いた俺の顔を覗きこむように火祭が上目遣いで見てきた……くあぁ！？　マジでドキッとした！

「だ、大丈夫ぅ。ちょっとフリーズしてただけ」

そ、そうだよ。今は火祭と二人きりなんだよ。春日のことなんて気にかける必要はないんだから。何を俺は昔の女のことを……。いやいや！　別に春日とはそんな関係じゃなかったし、現在火祭ともそーゆー関係ではない。モテ男気取ってんじゃないわよ！　俺の馬鹿っ。

「本当～？」

うっ、そんな疑わしげな目を向けないでぇ！　この辺り水川に似てきたな……。水川ぁ、火祭に変なこと教えちゃ駄目だからね！

「ほ、本当だよ」

「何か考えていたんじゃないの？」

くっ、鋭いぞ火祭さん。何か上手くごまかさないと……。

「ひ、火祭の私服姿が可愛いなーと思っちゃいまして……みたいな？」
「っ！？」
うおっ？　火祭の顔が一気にトマトみたいに真っ赤になっちゃった。ボンッみたいな音が聞こえてきそうだ。そ、そんな恥ずかしいこと言いました？　なんか俺も恥ずかしい！　きゃー恥ずかしい！
「あ、ありがとう……」
ごにょごにょと小さい声で火祭はそう言ってくれた。……ぐはぁ！　可愛いすぎ！　なんて純粋な子！　春日とは大違い、って……くそっ、なんでここで春日が出てくるんだよ。か、春日は関係ないって……俺は何を考えているんだか。何をこんなに春日のことを……あぁぁっ！？　俺の馬鹿野郎、春日のことは忘れろって！　あの人と俺は住んでる世界が違うっての。
「可愛いって言われない？　男子人気も凄いらしいよ」
「そ、そうかな？」
俺は庶民であっちは婚約者も決まった親が社長の大金持ち。……俺が傍にいていいわけがないんだから。俺なんか相応しくないんだよ。金田先輩のようなお金持ちで将来社長みたいな人が春日にはお似合いなんだ。今頃もきっと二人で高級レストランでランチでもしていることだろう。夜はオペラを観に行ったりとか……レベルが違いすぎるんだよ。
「水川情報だと五人ぐらいから告白されたんでしょ？」
「う、うん……」

「すげーじゃん。誰かと付き合ったりしないの？」

火祭ともレベルが違うや。ファンクラブもある程の人気の火祭とこうしているだけでも俺には勿体ないってわけだ。

「付き合わないよ。だ、だって……」

「誰か好きな人でもいたりして？」

「ふぇ！？」

「おっ、その反応はいるんだな？　いいねぇ～青春だな」

こうやって火祭と楽しくお話ができるんだ。春日さんのことはもう綺麗さっぱり忘れて今を楽しもうじゃないか。そうでもしないと気持ちがモヤモヤして気持ち悪い。こう……消化しきれないこの表現のしようのない感情が胸の中をのたうち回ってすっきりしない。なんだよ、この気持ち……。って、いかんいかん！　何も考えるな、今を楽しめ。それがベストじゃないか！

「好きな人って誰？　俺の知ってる奴？」

「え、その……」

火祭の好きな奴って誰だろう？　俺の知ってる奴だと……米太郎かな。い～や、ないないない。そんなわけないっしょ。あんな野菜馬鹿を好きになるはずない。なら……山倉？　う～ん、それもありえないわな。だとしたら……俺とか……な～いないないないない。そんなわけないだろ。火祭とは仲良いけど、それは友達としてだし。火祭が俺のことが好き？　そんなことは天鱗が出る確率くらいにありえない。

「へぇー、いるんだ。告白とかしないの？」

「い、いつかするつもり……」

そりゃなんともまあ！　火祭なら絶対成功するって。

「その時は俺も呼んでよ。陰ながら応援するから」

相手が誰か気になるしね。その相手思いきりぶん殴ってやる。火祭のハート射止めやがって。憎いったらありゃしない。

「も、もちろん必ず呼ぶよ！」

うおっ？　そ、そんながっちりと約束してくれなくてもいいよ。俺がいなくても告白は成功するだろうし、もし相手が米太郎だったら俺立ち直れそうにないし。……米太郎よりは先に彼女作ってやるからな。米太郎には負けないから！　宣戦布告として米太郎に、負けないからな！　とメールしたら意味が分からん、と返ってきた。そりゃそうだな。

第６０話　呼び止める者

火祭と楽しくランチをし終えて建物内をぶらつく。いやー、周りからは俺達カップルとして見られているんじゃないだろうか。うはー、照れちゃうっ。いつもはカップルなんて幸せ二人組を見たら、死ねばいいと毒づいていた俺が今やその死すべき対象となっているのだ。ふっ、昔の俺よ、俺は死なないぜ。そしてカップル万歳！　イチャつけばいいじゃない。立場が変われば主張も変わるもんだい！

「あ、本屋」

ん？　本屋？　確かに目の前には本屋がある。店頭には最近話題の本やエッセイが置かれてあり、なかなか大きなスペースを取っている。そっか、火祭って本が好きだったよな。図書委員もしているし。

「ちょっと見ていく？」

「え、いいの？」

いいも何もあなたが誘ったんだからあなたの好きなようにしてくれたらいいのさー。俺は特に寄りたい店もないし。

「買い物は後でもいいだろ。ならちょっと本屋にも行ってみようよ」

「うんっ」

案の定、火祭は嬉しそうに本屋に入っていった。さすがは文学美少女。本の虫とはこのことか。推理小説のコーナーでピタリと静止し、本の世界へと旅立った火祭。どうやら戻ってくるのに時間がかかりそうだ。俺は本とか小説とか読まないので、漫画コーナーへ直行。

と、その前に参考書のとこへ向かおうかな。参考書でも眺めて知的

アピール。誰にかって？　とりあえず俺の自己満足。可愛い女の子とかが見ていてくれたら、という願望をこめてます。H大と書かれた赤くて分厚い本をペラペラとめくるが……全く理解できない！　難しいというか無理というか……まず英語の長文の長さに引いた。いつも授業で見る長文レベルをはるかに超えている。授業の英文なら、マイクが頼まれたケーキを間違った種類のやつを買ってきてアイムソーリーのところが、ここではアーノルドとジェニファーとシンプソンがおそらくバイオテクノロジー技術の実用性とその在り方について小生意気なディスカッションをかましていやがる。アンビリーバボー！　自分にはH大は無理だと痛切に理解して、漫画コーナーへ逃げこむ。最新巻出てるかな？　おぉ、あるってばよ！

三十分経っても火祭が根がついたように動かないので無理矢理火祭を引っ張って本屋から出る。あの調子だと何時間もいそうだったからな。

「も、もう少しだけ……！」

「だ～め！　お買い物に来たんでしょうが」

本来の目的を見失ってはいかんよ。あなたは買いたい物があるんでしょうに。

「そういえば火祭の買いたい物って？」

なんやかんやで聞いてなかったな。一体何だろ？　下着とか勘弁してよ～。

「お母さんへのプレゼント」

……下着とか思っちゃってすいません。変態思考回路だった自分が恥ずかしいッス！

「お母さん、もうすぐ誕生日とか？」

「えっと、お母さん病気で入院していたんだけど最近退院してね。そのお祝いとして何かプレゼントを贈りたいと思って」

うお！　なんて親孝行なんだ！　お母さん泣いちゃうよ。良い娘さん持ったね火祭のお母さん！　親へのプレゼントかぁ。そういえば春日も親父さんにプレゼントするって……ああぁ、もうっ！　だ、か、ら！　春日のことは忘れなさいって！　何をそんなに気にする必要が……そういや春日と親父さんへのプレゼントを買いに行く約束していたよな……。もう先週のことだけど……春日、ちゃんと買えたかな……？　い、いや俺が気にすることはナッシング……のはず。約束守れなかったこと謝るべきかな……？

「それでね、何を買えばいいか分からなくてさ、選ぶの手伝ってくれる？」

「っお、おう！　喜んで協力しましょう」

「ありがとね」

……謝るくらいは喋ってもいいよね？　それくらいの接触なら……

あとでメール送ってみよう。

「どんなのがいいのかな？」

「う～ん、花とか。ベタかな？」

「お母さんお花好きだから、いいかも」

とりあえずは火祭母のプレゼント選びに集中しないとな。

「こちらプレゼント用に包装いたしましょうか？」

「はいお願いします」

とある雑貨店、今はお会計中である。プレゼントとして買ったのはアニメキャラクターのミトンとなった。使っているミトンが古くてちょうど買い替え時だったらしい。あと、お母さんはあの有名な白い猫ちゃんのキャラクターが大好きとのこと。

「ありがとうございましたー」

「うふふ、良かった」

満足そうな火祭。ホクホクとした笑顔に思わずこっちも嬉しくなっちゃう。

「選ぶの手伝ってくれてありがとうね」

「そんなのお安いご用ですよっ」

可愛らしい火祭のためならば、たとえ火の中、水の中であろうとっ

てやつ？

「せっかく来たから色んなお店回ってみる？」

「勿論！」

火祭と一緒ならどこへ行っても楽しいぜ！　それは学園祭で実体験済み。じゃあ行きましょう。

「兎月様」

「え？」

突然の様付け、そりゃびっくりするさ。振り返るとそこには紳士服を着た清楚な佇まいの初老の男性。あ、この人は……

「前川さん」

春日家の運転手、前川さんであった。礼儀正しくて俺の中で良い人ランク、トップ3に入る人物である。

「お久しぶりです、兎月様」

「だから様付けはいいですって。普通に呼んでくださいよ」

俺、庶民だから。なんかこそばゆいんですよ。

「ねぇ、知ってる人？」

火祭がちょいちょいと服を引っ張ってくる。そりゃ火祭は知らんわな。

「まあ、そんなとこ」

あなたのクラスメイトの専属運転手とは説明できない。ただの知り合いということにしておく。

「こんなところで会うなんて奇遇ですね。お買い物ですか？」

何買ったんだろうか。車のワックスかな？　運転手だからという安易な発想でごめんなさい。

「いえ、実は兎月様にお話が……」

俺……？

第61話　ふらりとエスケープ

ショッピングモール内のとあるコーヒーショップ。ブルーマウンテンだかキリマンジャロだか知らないが、とにかくコーヒー独特の強みある香りが漂う店内の一角、簡易なテーブルで俺と前川さんは向かい合って座っている。手元には二つのカップ。湯気がユラユラと舞う。

「やはりコーヒーはいいですね。私、カフェインを取らないと調子が出なくてですね」

「はあ……」

「これは失礼。連れのお方を待たせてありますね。では単刀直入にお話します」

連れのお方とは火祭のことか。前川さんは俺に話があるらしく、火祭には席を外してもらっている。今は本屋でトリップしているであろう。あとでまた引き剥がすので苦労しそうだ。それにしても俺に話ってなんだろう……この人との接点は春日だから間違いなく春日関係のことだとは推測できる。つーか俺は前川さんとこうして話をしていいのか？　いやまあ、春日に会ってはいけないというだけで春日家の人とは会ってもいいのか。

「あの……どうして俺がここにいるって分かったんです？」

先程の遭遇は偶然ではない。意図的に会いに来ている。しかしどうやって俺の居場所を知ったんだろうか。

「大変失礼だとは承知の上で兎月様のご自宅に訪問させていただきました。そこでお母様からここにいるとお聞きしまして」

なるほどね～。母さんにショッピングモール行ってくるって言ったからな。普通に考えたら分かることだったよ。

「貴重なランデブーのお時間を割いてしまって申し訳ありません」

「いやいや、そんな頭を下げないでくださいよ。どうぞお構いなく」

つーかランデブーって……表現古くないっすか？

「で、話ってのは？」

「はい、実は……」

そこで区切って前川さんはコーヒーを一口啜る。ちなみに俺のコーヒーは砂糖とミルク入れまくりです。苦いの苦手なんで。

「恵様についてなのですが……」

予想通り春日関連。なら溜める必要ないよ。スパッと言ってください。こっちに推測する時間をあ与えないでほしい。色々考えちゃうから。

「ここ最近、恵様が元気なくてですね……」

「はあ」

金田先輩とうまくいってないのか？　駄目だよ、結婚前にそんな感じだと。もう早くも赤信号みたいな。

「以前のように楽しげにお話することがなくなりまして、いつも寂しそうにしているのです……。もう兎月様に頼るしかありません。お願いします、どうか……どうか今一度また恵様と並んでもらえな

いでしょうか！」

「う、うわっ！？　ちょ、頭を上げてくださいよ！」

いきなり椅子から下りて頭を床につける前川さん。いわゆる土下座というやつ。いやいや！　勘弁してくださいよ。周りからすげー見られてますって！　さっきまでコーヒーを満喫していたお客さん達がこちらを興味津々に見てくる。見世物か俺らは！　ぐあぁぁ、こっち見ないでぇ。皆さーん、俺は何もやってないですから！　どうぞコーヒー豆をご堪能してくださいましぃ！

「あ、頭を。どうか頭を上げてください！　周りからの視線で悶え死にそうですので！」

前川さんを立たせて、椅子に座らせる。な、なんだよマジで。こんな年配の方に土下座させるなんて心苦しいどころか心死ぬわ。

「す、すみません」

「いえいえ、とにかく座って話しましょうよ。……えっと話に戻りますけど、春日と並ぶというのは？」

コーヒーをまた一口啜る前川さん。落ち着きました？

「恵様の隣にもう一度立って、恵様と一緒にいてもらえないでしょうかというお願いなんですが……」

……つまり俺にまた下僕をしろってことだろ。……何を今更。前川さんに言ってるわけではない。俺自身にだ。何を今更また未練タラタラと。

「事情は重々承知しております。それでも！　どうか恵様の傍に…

…！」

「無理ですよ」

「そこをなんとか」

だから無理なんですって。俺に何ができる。何もできないし、何もすべきじゃない。ただそれだけ。

「事情知っているんでしょ。俺は春日と会ってはいけないんですよ。そう約束されています」

金田先輩にね。

「それは分かっています。しかし私にはもう恵様の悲しそうな姿を見るのは耐えられません。恵様の笑顔を戻すには兎月様が必要なのです。どうか……」

……。

「そもそも間違ってません？」

「え？」

「春日が元気ないこと、俺がいれば春日が元気になること。それ自体間違っているんですよ。俺がいようがいまいが春日に何の影響もないですよ」

俺がいなくて春日が悲しいんでいる？　そ～んなわけないっしょ。別に恋人でもなければ許婚でもない。俺はただの下僕なのだから。いや、下僕だったのだから。

「そ、そんなことないですよ。恵様はいつも兎月様のお話ばかりされています。兎月様といるようになってから恵様は一段と明るくな

りました。兎月様がいるからです」
「それが違うって言っているんです。俺に何ができます？　鞄持ちとパシリですよ。そんなの誰にでもできます。俺が春日にしてやれることなんてありません」
「それこそ間違いです！」
バンッと立ち上がる前川さん。びっくりするわ。周りも人もこっち見てくるし、恥ずかしいです。コーヒーの湯気に視線を落として周りの目を回避。
「たとえ鞄持ちだろうとパシリだろうとそんな些細なことでも兎月様がするから意味があるのです。兎月様ではなければならないのです！」
土下座された人に今度は熱く語られるなんて……俺って変な奴ぅ。コーヒーの水面に浮かぶ自分の顔が変に歪んでいた。なんつー顔してんだよ、俺は。
「……第一、金田先輩から言われてますもん。春日に近づくなって」
「それは」
「これ大事ですよ？　金田先輩は俺が邪魔だそうです。そりゃ自分の婚約者に近づく男は排除したいでしょうに。そして俺がそれに対して意地になる必要なんて全くないですし。それに春日が元気ないとかはあなた方の問題であって俺は関係ありません」
春日が元気ないのは俺じゃなくて金田先輩に相談にしてください。元下僕の俺に相談するのは筋違いだ。まるで俺が原因みたいな言い方。そしてそうであってほしいと思っている自分が腹立たしい。
「で、ですが」

「それにこの相談は前川さん個人のものでしょう？」
「……はい」
「本人からの相談であれば乗りますが、そうでない人からそんなこと言われても、って感じですよ。それに春日自身は望んでいないかもしれませんよ？」
「それはありません！　恵様は口では言わないだけで本当の気持ちは間違いなく……」

そんなことよく分かりますね。春日っていつも無表情だから何考えてるか分かんないでしょ。

「前川さん、さっき言いましたよね、春日の笑顔を取り戻してくれって。俺は春日が笑っているところなんて数回ぐらいしか見たことないですよ」
「た、確かに恵様は感情をあまり表に出しませんが身近にいる人には分かるはずです。恵様が笑っていることを……兎月様も分かっているはずです。最近の恵様が元気ないことも」
「っ！」

そ、そんなこと分かるかよ。最近廊下ですれ違う春日の姿は寂しげだったなんて……思うはずがない！

「……俺には分かりません。分かりたくもありません。そんな俺に春日を励ますことはできません。ではこれで失礼します。わざわざ俺なんかに相談してくださってありがとうございました。力になれなくてすいません。今度は婚約者の金田先輩に相談することをお勧めします」

自分のコーヒー代をテーブルに置いて、逃げるように前川さんから離れる。後ろから何か声が聞こえるが無視だ。俺には関係ない。…

…関係ないんだから。本音を言う必要もないし、本音を言う勇気もない。だから俺はこうやって逃げたんだ。前川さんかも、自分の気持ちからも……。

前川さんから逃げて、本屋に向かう。さすがに追ってきてはいないみたいだ。かなりの速度で逃げ回ったのは意味なかったみたい。いやまあ少し頭が冷めた。……何を頭に血を登らせる必要があったのやら。……そうだよな？　って、駄目だ駄目だ！　もう何も考えるなっ！　はい思考停止、強制終了だ。とりあえず火祭を探さないと。まだ本に夢中になっているはず。

「……お、いた」

本を立ち読みする火祭。本をめくる指と文字を追う目以外はピクリとも動かない。すごい集中しているなおい。

「火祭」

「ん？」

あ、意外と早く反応してくれた。

「お話はもういいの？」
「ああ、大丈夫。そんな大した用件じゃなかったよ」
「……そうなの？」

え、何か疑ってますかい？　ヤバ、俺って顔に出やすかったかな。

「元気ないよね……」

げ、元気ない？　俺が？　そうかな？　よく分かんないけど火祭に心配にかけちゃ駄目だ！

「全然っ、ボクチン超元気だもん！」
「元気ない」

うぅ、ぴしゃりと言われちゃ返す言葉もないよ……。

「元気ないのは最近ずっとだよ？　だ、だから私とで、デートしたら喜ぶって真美が言うから……」

……そっか、火祭と水川にそんな心配をかけさせていたのか。

「火祭……ありがとうな」
「う、ううん！　君が元気になってくれたなら私も嬉しいし……」
「ヤベ、火祭のことマジで惚れちゃいそうだよ」
「！？」

ついでに水川にも惚れちゃうかもっ。周りにこんな心配してくれる良い人達がいるなんて……俺、幸せ者だなぁ。

「わ、私も惚れてるよ……」

「ん？　何か言った？」

ちょっと感慨深い思いに浸っていて聞いてなかったんだけど。

「ううん、なんでもないっ！」

「？　とりあえず服でも見に行く？」

ずっとここにいるのもアレだし。

「う、うん」

火祭と本屋を出てショッピングモール内をぶらぶらと歩く。……さっき火祭が言っていたけど俺って元気なかったのか……それっておかしくないか？　だって、春日のパシリをしなくていいんだから喜ぶべきはずなのに……。どうして元気がないんだろ……モヤモヤしたものがじりじりと胸を焦がすような苦しい気持ち……何だろうこの感じ……。

第６２話　皮肉な再会

「金田？　ああ、知ってるぜ。同じクラスだからな」

食堂に通じる通路。その壁にもたれかかる俺の横で駒野先輩がズコーと音を立てて紙パックのジュースを飲んでいる。ガヤガヤと奥の食堂から賑やかな声がＢＧＭとして耳に流れる。

「クラス一緒なんですか」

「同じ一組だぜ。金田は特に頭良くてな。Ｈ大を目指しているんだとよ」

へぇ、頭良いんだな。Ｈ大学って相当レベル高いぞ。この前、参考書見たけど全然理解できなかったもん。いやまあ俺は馬鹿だから当たり前か。とにかくＨ大はすごいや。かなりの秀才のようだ。さすが未来の社長さん。

「だから金田は勉強ばっかりしていたんだよ。ところが最近、何やら女の子と仲良くなってさー。クラスの皆もびっくり」

女子と仲良く……春日のことか。

「いきなりだったんだよなー。別に好きな女の子がいたわけじゃないのに、急に付き合うようになったんだよ」

「……へぇ」

「でもおかしいんだ。Ｈ大に行きたいからって彼女は作らないって言ってたのに、この時期になって突然。ガリ勉眼鏡の金田が彼女を作るなんて考えられない、とクラスは盛り上がっているのさ」

……なるほど。やっぱ金田先輩も親が決めたことだから無理矢理って感じなのかな？　……もし、春日が結婚を望んでいなかったら、それはまさに政略結婚。……いや、だから俺に何ができるってわけじゃないけどさ……。

「それにしても、どーして兎月が金田のことを知っているんだ？」
「え～っと……なんとなくです」
「ふーん。なんとなくとかで受験で忙しい先輩を呼び出すとは、お前も偉くなったもんだなー」

せ、先輩？　暴力はあきまへんって！？　ジュースを持たない方の腕がフラリと頭上に……！

「手は出さねーよ。受験以外のことで体力使いたくないんだよ」

ゆっくりと下がる鬼の手。た、助かった。マジで痛いんだよ、この人のアイアンクローは。りんごを握り潰せるんじゃね？

「わざわざ俺を呼ぶなんて何かあったんだろ？」
「……い、いや特には？　別にどーでも良かったんですけどね」
「アイアンクロー！」

痛たたたっ！　先輩痛いですって！　手は出さないんじゃなかったんですか！？　ぐあああぁぁぁっ、骨が軋むぅ。意味もなく吐血しそうだ！

「生意気だぞー兎づ……お、噂をすればご本人登場ってやつ？」
「え？」

駒野先輩はアイアンクローしている手をぐりっと回して俺の視線を

変える。痛い、首がもげそうだ。向かされた方向には金田先輩と……春日……っ！　って、こっちに向かってくる!?

「駒野君か。ここで会うとは奇遇だね」

「よう金田。ちょっと部活の後輩に呼ばれてな。ボランティア部の活動内容についてちょっと話し合いをな」

駒野先輩……俺が金田先輩のことを聞いてきたこと黙っていてくれている……？

「後輩……ああ、君か」

俺を一瞥する金田先輩。お久しぶりですね。

「お、知り合いだったか？　まあ一応紹介するな。これは俺の後輩の兎月って奴だ。兎月、こちらは俺のクラスメイトの金田だ。頭良いぞー」

知っているけど知らないフリをした方がいいのかな……差し当たり無難な挨拶をしておくか。ちょっと口裏合わせの大人な対応を実行することに。高校二年生いもなると、こういった臨機応変な態度が必要になってくるのだなー。あら大変。

「こんにちは」

「……こんにちは」

やや間があったが、金田先輩も上品スマイルで返す。やっぱ社会人としてこの人はなかなかできるようだ。社長の息子なだけある、その辺の教育は行き届いているのか。さすがはセレブ。庶民は何もできません。

「ちなみに金田。そっちの女子が噂の彼女か？」

駒野先輩は金田先輩の後ろにいる春日を指差す。春日はいつも通りの無表情……いや、やっぱりどこか悲しげな……うっ、目が合いそうになった！？　駄目だ、そらさなくては。あの後結局メールできなかった。やっぱり春日とコンタクト取るのはメールであっても控えた方がいいよな。……なんとなく視線を感じるけど、気のせいだよな……？

「彼女……少し違うよ、駒野君。恵さんは僕の婚約者さ」

堂々とよく同級生に言えるもんだな。恥ずかしくないのか。

「へー、婚約者かー。羨ましいなー」

「駒野君、このことはあまり言わないでくれよ。結婚はまだ先のことだからさ」

だったら言うなよ。

「だったら言うなよー」

駒野先輩も同じことを思っていたようで。

「駒野君は僕の親友じゃないか。君なら信用できるからさ」

え、駒野先輩と金田先輩って親友だったの？

「え、俺と金田って親友だったのか？」

駒野先輩も同じことを思っていたようで、ってさっきから駒野先輩とシンクロしちゃってるよ。シンフォニーだね。

「同じH大学志望じゃないか」

駒野先輩もH大なのか。意外と頭良いんですね。いやこれって失礼だな。口に出さなくて良かった。……つーか春日やっぱり、ものすげー無表情だな。ものすげー無表情ってのも変な表現だけど、それくらいしか表す言葉がない。なんつーか……寂しげ？　悲しげ？　前川さんの言ってた通りだな。そんな顔するなよ……なんでそんな顔しているんだよ……っ。

「そーだよなー同志だからなー。なら一緒に飯食おうぜ」

駒野先輩が金田先輩の首をホールディングする。あれはたぶんそう易々と逃げれないだろう。経験者は語る！

「いや、僕は恵さんと……」

「お前最近ダラけてるぞー？　飯食う時間も勉強しやがれ。同志として昼飯も付き合ってやる」

「し、しかし恵さんが……」

ちょっと駒野先輩てば強引じゃないすか？

「彼女さんは俺の後輩に任せとけって」

お、俺？　俺が春日と？　いや……駄目……なんでしょ……金田先輩。

「彼は……ちょっと……」

はいはい、分かってますって。約束守りますよ。

「駒野先輩、俺ちょっと用事があるんで失礼します」

さっさと退散しましょうかね。金田先輩もちょっとは評価してくださいよ。

「ほら、彼もいないし……やっぱり僕は恵さんと……」

「いいからこっち来い。ベンゼンからアセチルサリチル酸までの作り方について詳しく話し合おうぜ」

「ち、ちょ……」

何か後ろから聞こえるけど、気にしないでおこう。さ～て、ちゃっちゃと昼飯食べようかな、と。

「……えっ」

誰かが後ろから制服を掴んできた。え……まさか……う、嘘だ……そんなわけない。だって俺達は会ってはいけないんだ。そして今までもそうやって互いに無視してきたのに。なんで……なんで今このタイミングで……どうしてだよ。なぁ……

「……春日」

第６３話　十秒の命運

「……」
「……」

……なんでここにいるのだろうか？

「……」
「……」

駒野先輩と金田先輩は教室に戻ったし俺も教室に戻ろうとしたら……春日に引き止められた……。俺と春日って会ったらいけないんだから、これはマズイんじゃないの？　食堂に二人でいていいのかよ。

「……」
「……」

俺と春日……こうして二人きりでいるのは数週間ぶりだ。こうして顔を見るのも……いや、まともに直視できない。テーブルに座ってからも春日と顔を見合うだなんて一回もしていない。気まずいんだよ。照れとかそんなことを言っているんじゃない。ただ気まずい。俺と春日……二人は会ってはいけないのだから。だったらなんでここにいるんだよ……俺達は。

「……」
「……」

春日も何にも喋んないし、どうしたらいいんだよ……。視線をテーブルに落とすが、そこに何もない。何もないのだ……。耳を掠める

周りの騒音がやけに静かだ。視界の端でうごめく生徒の姿がモノクロとなってぼやけて見える。なんだよこれ……どうしたらいいんだよ。

「……とりあえず二週間ぶりだな。こうやって二人でいるのは」

「……」

とりあえず無視、と。相変わらずだな。これじゃ金田先輩も大変だろうに。

「親父さんのプレゼント選び、付き合えなくてごめんな。金田先輩と行ってくれよ」

「……」

なんだよ……。

「この前さ、前川さんに会ったよ。春日のこと随分と心配していたぞ。何かあったのか？　あんまし心配かけさせんなよ」

「……」

なんだよ、これ……何なんだよ……俺。なんで、なんで、こんなに声が震えているんだよ、俺は……。まともに春日と目も合わせず淡々と喋る俺は一体何なんだよ……どうしたんだよ……くそっ。

「あの、さ……俺と春日って会ったらいけないんだろ？　だったらこうしていたら駄目だろ……」

「……」

逃げ出したい。この場から今すぐ立ち去りたい。居づらいとかそうじゃなく、ただとにかく逃げたい。こんな真正面から春日と向き合

いたくない。そんな勇気なんて俺にはない。だから何なんだよこれ……どうしたんだよ俺。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……何か喋ってくれませんか？」
「……」

頼むから何か喋ってください。もう俺から問いかけるのは無理です。これ以上は震えが止まらなくなりそうだから。

「……兎月」
「……何？」
「……何か言いたいことない？」

はい？　俺がですか……ない……はず。な、何を春日に言うことがあるんだってんだ。……もし、仮に、ひょっとして、万が一、何か言うことがあっても……言うべきじゃない……。そんなの言うべきじゃない。

「っ……と、特に言うことはないよ。強いて言うなら末永くお幸せに、とかぐらいだな」
「……そ」

すると、春日はスッと立ち上がり、

「さよなら」

俺を見ることなく、ただそれだけ言うと春日は去っていった。会話した時間、たったの十秒。その十秒で俺達の関係は完全に壊れた。正直、今まではなんとなく曖昧だった。ただ会わないだけの微妙な関係。でも今ので全て終わった。……さよなら、か……。もしかすると、ここで俺が本音を言っていれば……あるいは……。いや、そんなこと……っ、

「……はぁ」

あ～……これ間違いないな。今のわずか十秒の会話、今までの俺の人生の中で一番重要な場面だった。あそこで俺は決断するべきだった。言うべきだった。そうだったに違いない。

「……マジで後悔するわ……」

春日も……ひょっとしたら俺が言ってくれることに期待していたのかな……俺が言っていれば春日も頷いてくれていたのかな……？……どっちみち、もう遅いけどね。俺達はたった今、終わったのだから。下僕どころか、もう全ての関係を絶ったのだ。俺の言葉と、春日の、さよなら、の一言で。もう戻れないのだから。

「……はぁ」

テーブルすらも白黒の無感情な色に見えて、声の震えはずっと止まらなかった。

第６４話　くすぶるハートにケジメをつけろ

七月の初め、夏がやってきた。通学路の坂道を登るだけで少し汗ばんでしまうくらいに気温が高い。連日３０℃越えが続く中、今日は期末テスト最終日である。

「来週はクラスマッチだ。忙しいスケジュールだとは思うが、夏の暑さに負けずに頑張ってくれ」

担任のありがたーい話を聞いて、ようやく期末テストから解放された。

「しゃっ、やっと終わったぜ。部活が俺を呼んでるよぉ！」

隣で米太郎がキャーキャーと騒いでいる。さっきまで机に突っ伏して「死んだ……」と呟いていたくせに。ちなみに俺も死んだ。赤点が三つはありそうだ。せっかく水川と火祭が教えてくれたのに……面目ない。

「将也、お前も部活行くか？」

キラキラ笑顔で米太郎が尋ねてきた。

「いや、俺はいいわ」

ボランティア部は俺が行かなくても水川がなんとかしてくれるだろう。部活に行くのもキツイし、どうでもよく感じてしまう。

「いいのか？　夏休みは近くの河川でゴミ拾いするんだろ。ちゃん

と打ち合わせしないと」

あ、そうなの？

「ゴミ拾いするのか……」

「知らなかったのかよ。ボランティア部の活動を将也が知らなくて、どうして俺が知っているんだよ」

知らん。いいから弓道部行ってこい。大会頑張れよ。

「ま、いいや。じゃーな」

「じゃあな」

荷物をまとめて米太郎は教室から出ようとする。……もう帰ろう。何も考えたくないや。帰ってベッドで寝たい。でも最近眠れない。……普通に不眠症だったりしてな。

「……なあ、将也」

「ん？」

入口でピタリと止まる米太郎。急にどうしたの？

「部活行かないなら時間あるよな」

「ああ、まあ」

お昼休みはウキウキウオッチングの時間、つまり十二時なのだが。テストも終わって教室に残っているのは俺と米太郎だけである。俺は自分の机の上に、米太郎は教壇前の机に座っている。静かな教室に米太郎がたくあんを噛む音が異様に響く。

「……で、なんだよ？」

米太郎は俺と話したいことがあるらしい。白昼堂々とエロい話はしたくないな。でも二人きりでする話なんて限られてくるし、一体何を……。

「おぉ、そうだな。俺も部活行きたいし、ちゃっちゃっと話すわ」

よっぽどの内容だろうな。くだらなかったら許さないぞ。

「最近、春日さんとうまくいってないみたいだな」

……春日のことか。

「お前と春日さんが一緒にいるの一ヶ月ぐらい見てないぞ」

……はっ……そっか。もう一月も経つのか……春日と会ってはいけないと言われて。

「喧嘩してるのか？」

「喧嘩じゃねーよ」

「早く仲直りしろよ。春日さんにフラれるぞ」
「だから付き合ってないの」
「ふーん」

なんだよこいつは。米太郎は俺に背を向けているから表情が分からない。ただポリポリとたくあんを食う音だけする。背中に睨みをきかしても意味がない。視線を指先に落とす。春日……あっ……また視界がモノクロになってきたな。

「……つーか、もう手遅れだし」

今更春日に会うことなんて出来ないし、するべきでない。

「俺なんかが出来るは何もないし、何もしない方が春日のためにもなる」

金田先輩と春日の結婚は両家の問題であり、俺がとやかく首を突っ込んではいけない。そんなこと一ヶ月前から分かっていることだ。そんなこと一ヶ月も前から思い知っていることだ。そしてそうしたのも俺が原因だってことも一ヶ月前から悔やんでいることも……。

「知ってるか、米太郎。春日って婚約者がいるんだぜ」
「へー」
「その婚約者から俺は春日に近づくなって言われたんだよ。だから俺は春日と会ってはいけない。つーか会いたくもないしな」
「そっか」
「俺は春日の下僕でしかなかったし、それから解放されたんだし、何も悲しいことはないってわけ」

そうだ。何も悲しいことはない……はず……。

「結婚だなんて勝手にしろって話なんだよ。俺は関係ないじゃん。それなのに金田先輩も前川さんも色々言ってきやがって。俺が何をしたってんだよ」

俺は一切関わらないから。それでもういいだろ。それで春日との関係は壊れたんだから。それで丸く収まったんだから。悔やむのは俺だけでいい。俺が引けば丸く収まったんだ。俺が何もしなければ。

「そーだったんだ」

たくあんを食い終えたらしく、米太郎は立ち上がる。ゆっくりと静かに入口へ向かっていく。俺はそれを見つめるだけ。教室が一瞬、静寂に包まれた。

「つまり将也は何もやっていないんだな？」

「ああ、そうだよ。何もしない方がいいのだから」

「なるほど。なあ、将也」

「ん？」

「お前って本当にヘタレだったんだな」

……は？

「以前から思ってはいたけど、まさかここまでだとはな。マジでヘタレだよ、お前は」

「……馬鹿にしてんのか」

「ああ。お前すげー馬鹿だろ」

……米太郎に言われるとムカつくな。なんだよ急に。

「さっきから聞いていれば他人がどうのこうの言いやがって。うる

せーんだよ」
「……お前マジで何なの？」

喧嘩売ってるようにしか聞こえない。マジでムカついてきたぞ。やけに米太郎の言葉が突き刺さる。いつも感じる冗談交じりのイラつきじゃない。本当に米太郎がムカつく。なんだよ……こいつ……！

「俺には関係ない？　ならどうして駒野先輩に金田先輩のこと聞いたんだよ」
「は……？」

な、なんで米太郎がそれを知っているんだよ。誰にも言ってないぞ。

「駒野先輩も水川も火祭も皆お前を心配してるんだよ。俺もそうだったけど気ぃ変わったわ。お前みたいなヘタレなんてどーでもいいわ」
「……黙れよ」
「クール気取んな。中二かお前は」
「黙れよ！」

っ……なんだよ、なんだよお前は！　後ろを向いたまま言葉を発するこいつの背中が憎い。何も知らないくせに偉そうに言いやがって……。

「黙ってんのはお前だろうが。自分の気持ちも言えねーくせしてよ」

バッとこっちを振り向く米太郎。その顔にいつものヘラヘラした笑顔はなく、強面が睨んできた。黒く冷たく光る目が俺を捉えて離さない。

「俺には関係ない……そんなことを言ってお前は逃げてるだけだろうが。自分の本当の気持ちを言えてねーだけだろうが」

「……」

「周りがどうこうじゃねえ、テメーの本音はどうだって聞いてんだよ！」

っ……さっきから聞いていりゃ、勝手にベラベラと喋りやがって。

「るせえ……うるせぇよ！　お前に何が分かるんだよ!?」

「分かんねーよ。お前が何も言わないから分かんねーよ！　俺も春日さんもなぁ！」

「え……」

春日、も……？

「テメーの本当の気持ちも言えねーくせして、ここでぐちぐち言ってんじゃねえ」

気がついたら米太郎が俺のすぐ傍に近づいていた。米太郎が異様に高く大きく感じた。思わず怖気づく。と、次の瞬間、

「っ！？」

左頬が弾けた。激しい痛みが衝撃となって体を突き飛ばし、床へと叩きつけられた。左頬、背中の二か所が痛い。がっ、げほぉ……こ、こいつ……殴りやがった……！

「が、がはっ、てめ……何すんだよ米太郎ぉ！」

「いい加減素直になれよ」

胸倉を掴んでも米太郎は眉一つ動かさない。噛みつく勢いで顔を近づけても米太郎は何一つ顔色変えない。

「はあ？　素直？」

「春日さんと別れて、どうだ？　この一ヶ月楽しかったか？」

「……」

「お前が本音を言わないから本当のことは分からないけどな、俺の見る限りじゃ全然楽しそうじゃなかったぞ」

「……」

左頬がじんじんと痛む。異様なまでに熱を帯びた頬が微かに痙攣しているのが伝わってくる。痛い、ただ痛い。頬も痛いがそれ以上に別の部分が痛い。……米太郎の言葉が心に突き刺さるように痛い。

「前に言ったよな。お前と春日さんがいる時、楽しそうに見えるって。お前だけじゃないんだよ。この一ヶ月、春日さん……楽しそうだったか？」

「……っ」

「お前だって気づいていたはずだ。お前と春日さん、同じ気持ちだったはずだ」

俺の手を弾いて、今度は米太郎が胸倉を掴んできた。やけに目尻が熱くなってきた。嗚咽が出そうになる。頭も胸の中もぐちゃぐちゃに描き乱れたように感じて気持ち悪い。

「取り戻すチャンス、あったんじゃないのか。お前が本当の気持ちを言う場面があったんじゃないのか？」

……確かに。まさに先週、それを言えるタイミングがあった。もしかして駒野先輩が金田先輩を強引に連れていったのは……俺のため

に……？　そしてあの時、春日が聞いてきたのは春日も俺に言ってほしかったから……？

「……そうだな。でも……」

でも……もう遅い。その最後のチャンスも逃した。春日にさよならと言われた。もう間に合わない。

「もう遅いんだよ……」
「はいヘタレ馬鹿ー」
「がっ！？」

また米太郎に殴られた。しかも同じ左頬を。

「いってぇ……」
「このヘタレドアホが。もう遅いだぁ？　そんなの勝手に決めつけんな」
「な、なんだと……？」

米太郎の双眸が俺を見下ろす。先程の冷たい目ではなく、何か訴えかけるような熱い眼差しが俺を貫く。

「少なくても！　火祭を助ける時のお前はもっと諦め悪かったぞ！　あの時くらいの根性見せやがれ！　勝手に終了してんじゃねぇよ。あと一回くらい抵抗しようと思いやがれ」
「……！」
「ここで言い訳する暇があるなら、もっとやるべきことがあるだろうが。さっさと立てよ！　動けよ！　走れよ！　叫べよ！　自分の気持ちをよぉ！」

……くそ……くそくそくそくそくそぉ！　あああぁぁぁぁっ！

「っ、いいから離しやがれぇ！」

「ぬおぅ？」

ぜぇ、ぜぇ……あああっぁぁあっ、っしゃ！　あ～、二回目のパンチは効いたっ。痛いとかじゃなくて心に響いた。一気に気持ちが吹っ切れた。さっきまで頭に血が登っていたけど今は冷めてきたよ。はっ、米太郎なんかに気づかされるなんて……一生の恥だコンチクショー。

「……ふぅ。マジで頬痛いわ。明日覚えとけよ、テメー」

「はいはい」

見上げればニヤニヤ顔の米太郎。こいつはホントに……最高だよ。なんかここ最近で一番元気出たわ。今なら空も飛べそうだぜ。立ち上がって米太郎に向けてグーサイン。

「サンキュー米太郎。気持ちに整理がついた。やっぱ部活は行けないや。ちょっと用事できたから」

「ったく、やっと目ぇ覚めたか。……行ってこい。お礼は福神漬けな」

米太郎もグーサインを返す。ったく、マジで馬鹿だろ俺。まだ間に合うんだよ。まだ伝えることは出来る。出来ることがあるなら行動しないでどうする。よし、完全にケジメついた。……行きますかぁ。

春日のところに！

第６５話　伝え伝わるもの

誰もいない廊下を全速力で走り抜ける。風が肌にぶつかり、そして掻き消す。空を切り抜けつつ携帯を取り出してプッシュ。

『もしもしー』

「駒野先輩ですか？　兎月です」

階段を一気に下りる。五、六段分の衝撃が両足にきたが何のこれしき。そのまま勢いに乗って走る。途中、先生らしき人から何か言われた。が、そんなの関係ない。正しき注意を無視して廊下を疾走。

『なんだよ、兎月かー。俺、今からカラオケ行くんだけど』

「受験勉強はいいんですか？」

『テスト終わった日ぐらい遊ばせろボケェ』

そりゃそうですね。

『で、何か用か？』

「そこに金田先輩いますか？」

下駄箱で靴に履き替える。鞄を教室に置いてきてしまったが、どうでもいい。携帯がバレてもいい。とにかく、とにかく……とにかく急いで春日の所へ行きたい。駆けつけたい！　その気持ちがさらに自分の中のエンジンを吹かす。足が勝手に進む。心臓が跳ね上がる。

『金田は、いねーぞ。あいつは確か彼女……あ、違う、婚約者か。その人の家に行くって言ってたぞ』

春日の家か……。超都合良いぜ。目的先も分かった。後ろから聞こえる教師の叫び声なんて知ったこっちゃない。

「ありがとうございます。どうぞカラオケ楽しんでください」

『ちょ、待てよ兎月。お前元気で』

ピッと通話終了。すんません先輩。これ以上話してる暇はないんで。春日の家か。一回行ったことあるから場所は分かる。さて、どうやって行こうか……。

「そこの君、校内で携帯を使うなー！」

背中にぶつかるのは教師の警告。そりゃ校内をビーダッシュで走り、さらには堂々と携帯で電話していたら目につくよな。ここで捕まって職員室で説教……なんて時間のロスは絶対にしたくない。今は一秒も惜しいんだ。いち早く春日と会いたい。春日に俺の気持ちを伝えたい。ケジメをつけた俺の本当の気持ちを！

「こらーっ！」

「どこのクラスの奴だ。今すぐ止まりなさい！」

声が二つになった。大人しくテストの採点していろよ。何人も出てきやがってさ。ちっ……さて、自転車もないこの状況。走って逃げ切るしかないみたいだ。上空で輝く灼熱の太陽がどれほど体力を奪うのか……春日家に着くまで俺の体力がもつのか……正直不安だが、やるしかない。教師を撒きつつ春日の家へ向かうことに。業火のように照り返し光るグラウンドの向こう正門に視線を据えて、さあ逃走スタート。

「うおおおぉぉ……って、うおおおぉぉぉっ！？」

全力ダッシュ六歩目のところで異常事態発生。後ろから教師が来るのは分かる。しかし前から……正門から一台の車が突進してきた。ぐぅおおおぉぉっ、やべえマジかよ！？　ちょっと校則違反しただけで車を使ってでも追いつけるのかよ。思わず急ブレーキ、グラウンドの中心地で止まってしまった。そして車は勢いよくドリフト。激しい轟音を撒き散らして地面に荒々しい線を描き、俺の真正面にピタリと静止した。車と後ろから教師……挟まれた。くそっ、なんて執念だよ教師ども。だが、まだこの程度で諦めるわけにはいかない。まだ俺は本当の気持ちを春日に伝えていないんだぁ！

「到着～」

目の前の車と後ろの教師どもの双方相手にどう切り抜ける頭を悩ましていると、軽いノリの声とともに窓が開き、さらなる衝撃が……なっ！

「菜々子さん！？」
「よっ、私の可愛い後輩く～ん」

車の運転席には昨年の生徒会長である菜々子さんがいた。茶色のショートな髪を揺らしてニッコリ微笑む菜々子さん。この人は元生徒会長……そして、米太郎のお姉さん！

「な、なんでここに菜々子さんが？　え、ちょ、ていうかなぜこのタイミングで！？」

てっきり教師が乗っていると思ったのに……つまりこれは教師達のコンビネーションの賜物じゃないんだ。後ろをチラッと見れば、教師達のうろたえた表情。あちらさんも、いきなり謎の車の強襲に面

食らったようだ。狼狽しているのがよく分かる。

「早く乗って。急いでいるんでしょ？」

え……な、なんでそれを？

「さあ早く！」

「は、はい」

「しっかり捕まっていてねっ」

後部座席に飛びこむ。と同時に菜々子さんはアクセルを踏み、砂埃を盛大に撒き散らして学校を飛び出た。バックミラーを覗けば教師達のアホ面が……砂塵で何も見えない。

「バレてないといいけどね～。元生徒会長が車で母校を襲撃！　なんてスクープ記事が翌日の朝刊に載らないことを祈りましょうっ」

のんびりと軽くそんなことを口ずさみつつ車を走らせる菜々子さん。スピードかなり出ているけど……いやさっき乗りこむ瞬間にさ、初心者マーク見えたから……だ、大丈夫？

「ってそれより菜々子さん！？　ど、どうしてここに？」

今は大学生で忙しいはずじゃ……この前カラオケで偶然会ったけどさ。

「ふふっ、可愛い後輩のためなら、どこへでも参上するのが先輩ってもんでしょ」

「はあ……」

相変わらず自分のペースを作るのが上手い人。思わず何も言い返せなく力を持っているんだよな……。

「なんてね。本当は米太郎から連絡があったの。で、将也君を迎えに来た」

っ！　米太郎……ホントあいつには助けられっぱしだな。明日は福神漬けとたくあんのセットを納品しなくては。グングンとスピードを上げる菜々子さん。学校があっという間に見えなくなった。

「で、今からどこに行きたいの？」
「あ、はい！　このまま真っ直ぐ進んでください」
「……ふ～ん」

と、バックミラー越しにこっちを見る菜々子さん。すごいジロジロと観察してくるんですが……あ、あの？

「どうかしましたか？」
「うーん。米太郎が、最近将也君がとっても元気なくて精神が壊れかけているって言ってたの。話していても全然面白くないって。だからどれだけ落ちぶれたのかと思っていたけど……うん、大丈夫。将也君とっても良い顔しているよ。私の知っている真っ直ぐで明るく元気な将也君だよ」
「……はい」
「このまま進んでいい？」
「はいっ！」

このまま真っ直ぐ……もう曲がったりしない。気持ちを曲げて嘘をついたりなんかしない。真っ直ぐな思いを貫き通してやる！

菜々子さんのちょい危なげな運転で走ること十分。目の前には見事な鉄の門が威圧するように立ち塞がっていた。

「……やっぱデカイな」

目の前には超デカイ豪邸が。春日家に到着したのだ。前来た時は夜だったから昼の今はまた違う印象を受ける。とりあえず言えるのはデカイってこと。思わず身構えてしまう。

「ここでいいの？」

「はい。ここまで送ってくれてありがとうございます」

「礼なら私より米太郎に言ってあげてよ。じゃ、今からバイトだから。事情は分からないけど将也君なら大丈夫。頑張ってね」

ニコリと微笑んで菜々子さんは颯爽と去っていった。……本当にありがとうございました。この気温の中、教師から逃げてここまで走ってきていたら途中で倒れていたかもしれない。うしっ、体力も気合いも十分。全力を持ってぶつかってやる。

「とはいえ……さて、ここからどーしましょ？」

普通にピンポーンとインターホンを押しても庶民の俺なんかを入れてくれるはずがない。さらに金田先輩に見つかれば即アウト。と、なると……最初から考えていたけど侵入しかないよねぇ。

「しかし……どっから侵入すればいいんだろうか」

重厚な鉄の門と二メートル近い壁。敷地内に入れば警報がウーッって鳴りそうな雰囲気だ。ヤバイって、俺ルパンじゃないもん。侵入なんて無理だって。ハイラル城になら何度も侵入して姫様と密会したけども……あれはゲームで、これは現実。しかもゲームと違ってコンテニューは出来ない。でも……春日に会うためにはやるしかないっしょ！

「行くぜ！」

決意はさらに固め、鉄の門に手をかけた瞬間、

「あの」

こ、後方から声が……！

「うひゃあああぁぁぁっ！？　す、すいません！　決して不法侵入じゃなくて、ちょっとボールを拾いにいいぃぃ！」

ウルトラC級の大技、即半回転ひねりジャンプ土下座を繰り出す。ぐっ、侵入前から見つかってしまった。ゲーム開始前にゲームオーバーになってしもうたぁ！

「いえ、あの……兎月様ですよね」

「へ？」

顔を上げればそこには眼鏡をかけた礼儀正しそうな男性。春日家の運転手の、

「前川さん!?」

「どうして兎月様がここに?」

「実は……」

前川さんに俺の決意を告げる。すると前川さんの表情は安堵でホッと緩んだ。そして嬉しそうに微笑んでくれた。

「兎月様ありがとうございます。どうか恵様を……また恵様に笑顔を……」

「それは分かりません。俺はただ自分の本当の気持ちを伝えるだけです。それで春日がどう返すかまでは分かりませんので」

俺の気持ちを伝えて春日がどう感じるか、どんな返事を返すかは分からない。それはそうだ。俺も春日も自分の思いを口にしなかったのだから。互いに無視していた。それがこの状況を作ってしまったのかもしれない。

「それで十分です。恵様は自分から言えないだけで、兎月様が言ってくれれば恵様も素直になってくれるはずです」

春日が素直に、ねぇ。だといいのですがね。

「あっ、そこでなんですけど……どうやって侵入したらいいですか?」

「侵入? 中に入るのでしたら……」

「この廊下を右に曲がったところの一番大きな扉の部屋にいるはずです」

前川さんのおかげで堂々と門から侵にゅ、じゃなくて進行できた。家の中に侵にゅ、じゃなくて入ったけど……なんつー広さだよ。学校みたいに長い廊下だなおい。有名な画伯の絵が飾ってある廊下をコソコソと歩く。今のところ誰にも会っていない。てっきり中はメイドやお手伝いさんがわらわら働いていると思っていたけど、そうでもないらしい。皆さん、お買いもの、お洗濯、お料理、お掃除、お寝んねで忙しいのだろうか。お勤めご苦労様ですってことにしておこう。

「こっちですね」

コソコソと無人の廊下を壁づたいに忍び足で歩き抜ける。後ろを歩く前川さんが道を案内してくれている。

「今は旦那様と恵様と秀明様のお三方で話し合いをしていらっしゃるはずです」

春日父と春日と金田先輩ね。こりゃやっぱ都合がいいかも。春日父か……正直あの人のことはかなーり苦手だ。けどやるしかない。腹括りましょうかね、ヘタレなりに。そして廊下の端まで来た。あとはここを曲がれば目的の部屋に到着する。ふぅ、我ながら馬鹿だったな。こんな立派なお屋敷を一人で攻略しようなんて。うしっ、ここまで来たらあとは俺次第だ。やってやるぜ。

「ではお気をつけて」
「ありがとうございます。それじゃあ行ってきます」
「どこへ行くのですか？」

えっ？　何今の声……？　前川さんが言って、俺が受け答えて、違う人が質問してきた。あ……つまり誰かいる……ぬあっ！？

「ただ今、お坊ちゃまは大事なお話をされております。すみませんが静かにしてもらえますか」

曲がった先、扉の前には燕尾服を着た初老の男性。キチンと整えられた服装と姿勢、何を思うわけでもない無色の瞳でこちらを見つめるその姿はまるで門番のようだ。この人は確か……そうだ、金田先輩についていた執事の人。名前は……中井さん。金田先輩の執事、中井さんが扉の前に立っていたのだ。

「あなたは恵様のお知り合いの方でしたね。どうしてこちらに？」

至って冷静な態度で尋ねてくる中井さん。おいおいおいおい、こっちは冷静じゃないっつーの。もれなく頭の中でエンカウントの音が流れているんだから。こちらの返事を待っているのか、ピクリとも動かず中井さんはじっとこちらを見てくる。み、見つかってしまった。この人は金田家の人間。さらには金田先輩の執事。今回の結婚についてはかなり詳しいことを知っているに違いない。実際、金田先輩が春日に結婚の話をした時も隣にはこの人がいたのだから。ということはつまり、金田先輩にとって俺が邪魔な存在であり俺と春日が会わない方がいいということも分かっているはず。その俺がここにいるのだ。なぜ？　そんなの簡単に理解が及ぶ。主人の妨げになる奴が目の前で唖然としているのを見過ごすほど、この人があま

いとは思えない。となると下手な言い訳は出来ない。小細工も通用しそうにないしね。

「ちょっとある人に伝えたいことがありまして。すみませんが、そこをどいてもらますか」

「申し訳ございません。先程述べましたように、お坊ちゃまがこのお部屋で大切なお話をしておられます。中に入るのはご遠慮してもらってよろしいですか」

「嫌です。どいてください」

子供染みた言い方だろ？　だって俺は子供だ。だから自分の思うように行動する。自分の決意は絶対に譲らない。もしそこをどかないって言うのなら……

「それは出来ません。誰一人として、お坊ちゃまの邪魔はさせませぬ。それが私めの務めですから」

「じゃあ力づくでどいてもらうしかないですよねぇ……！」

この人と遭遇してしまった時点で最初から話し合いで済むなんて思ってなかったよ。頭の中でエンカウントの音楽が流れたんだ。それはつまり戦闘の合図。なるほどね、中井さんは中ボスってわけだ。そしてこれはゲームじゃない。さっきからやたらと比喩しているが、それは本当にただの比喩。ここからどうなるかなんてプログラムで決まっていない。それは俺が決めるのだ。俺自身が決めて俺自身が行動する。そして俺は決めた。春日に会うと！　だからこんなところで足止めを食らうわけにはいかないんだっての！

「こちらは春日様のご自宅。あまり派手に暴れるわけにはいきませんが」

「だったら素直にどいてくださいよ。静かにしないといけないんで

しょ？」

「……そうですね」

無色の目が閉じ、一瞬だけ中井さんが微笑んだ。そう、一瞬だけ。次に目を開いた時には微かに開いた細目から覗く赤く燃える鋭光が俺を貫いた。

「申し訳ありません、お坊ちゃま。少々うるさくなります故」

姿勢正しく直立していたのがフラリと前屈みになる。腰を据え、両腕を前に構えた途端、一気にオーラが変わった。威圧をするかのように一歩、また一歩と近づくその姿は門番というよりまるで番犬。薄く伸びた口から吐かれる息が唸っているように圧迫してきた。おいおいおいおいおいおいおいぃ！？　何よこれ。なんだあれ、番犬じゃないかよ！？　対してこっちはヘタレ犬だぞおい！？　やっべ、調子乗ってた。相手は老人だと思って完全に油断していた。完全に勝てると思っていたよ！　こ、この人……できる。いやもう間違いないよ。俺でも分かるって、この百戦錬磨の気迫が。さすがは大金持ちの未来社長に仕えることだけはあるみたいだ。執事だけじゃなく、ボディーガードも兼用していたとはね。

「お坊ちゃま、すぐに済ませますので」

そう言い終えないうちに床を蹴った中井さん。コマ送りするかのように黒い物体が接近してきて気づけば目と鼻の先には中井さん。突き出した両手が大きく巨大な手のひらに見えて迫ってくる。急激なバトルシーン突入。そして早くも終わり。駄目だ、躱せない。そう思って目を閉じた。……あ、あれ？　痛くないぞ。あの勢いだと三メートルは吹っ飛ばれそうだったのに、どうし、て……なっ！？

「大丈夫ですか、兎月様」
「ぐっ、貴様は……！？」

ま、前川さん！？　俺の前に入りこんだ前川さんが中井さんを抑え込んでいた。な、いつの間に！？

「兎月様、ここは私にお任せください。兎月様は早く部屋の中へ」

うぬぅ、と重低音の唸りとともに中井さんを押し返す前川さん。体から溢れんばかりのエネルギーを感じるよぉ！？

「なるほど、あなたが『日輪の守り手』の異名を持つ前川殿か。噂は存じております」
「そちらも『番犬・金獅子』ではありませんか。お初にかかります」

な……何これぇ！？　えええええぇぇぇっ、何このバトル漫画的展開は！？　ち、違うって、こんなことになるなんて思ってもいなかったんだって！　突然、達人の風格を漂わせだした執事と運転手の初老二人。ふ、二人とも有名な武人だったのかよ。

「よしてください、それは昔の名。今はただの専属運転手ですよ」
「ただの運転手にしておくのには惜しいですな。ひとつ手合せ願いたい」

睨みあったまま静止する猛者二強。お、俺はただ自分の気持ちを伝えに来ただけなのに……なんでこんあことに。いやいや、もうこの二人に俺のことは見えてないようだ。か弱い高校生男子を置き去りに強者老人二名は同時に飛び上がる。

「はっ！」

「ふっ」

二つの巨大なオーラが爆発したように感じた。ぶつかる両者。そして両虎は拳を交わしつつ長い廊下を高速で駆けていった。

「ここは私が食い止めます。兎月様、あとは頼みました！」

そう叫んで前川さんと中井さんは廊下の端へと消えていった。な、何よあれ……。一人廊下に取り残された俺は一体……いや違う！これでいいんだ。

「……よし」

すぐ傍には春日達がいる部屋の扉。……ここからが本番だ。俺の闘うべきフィールドはこの先にある。ここまで来るのでさえ大変だったのに、この向こうはさらにキツイと思う。嘘をつかず自分の気持ちを言えるかどうか……。いや、絶対に言わなくては。そうでないと自分自身が許せない。それにここまで俺を導いてくれた皆に申し訳ない。俺だけじゃここまで来れなかったのだから。身を挺して闘ってくれている前川さん。気持ちに気づかせてくれた米太郎。他にも駒野先輩、水川や火祭そして菜々子さん。皆いたからここまで来れたんだ。決意できたんだ。頼りある仲間のおかげで俺は今ここにいるんだ。……ん？　何この主人公な感じ。俺って主人公！？おいおい、調子こいたらいかんよ。俺ってどー見ても脇役キャラなんだから。

「さて、行きますか」

正直マジ怖ぇ……！　勝手に家の中入っちゃってるし、その家の主とご対面。さらにはとんでもねぇ発言するつもりだからな。父さん、

ごめん。父さんクビになっちゃうかも。許してね。

「……だから……」

「それ……お……き…」

ん？　何やら声が聞こえる。扉の向こうから話し声が聞こえてきた。春日父と春日と金田先輩が何か話しているのか。そっと耳を扉に近づけると、

「……り、結婚は……はく…」

け、結婚？　ヤバイ、これは本格的な会話をしとる！　駄目だ、今すぐ言わなくては。ここで躊躇っている暇はない！

「ちょっと待ったあぁっ！」

ノックなんかしてられるか、突撃してやるよ。勢いよく扉を開けて、お邪魔します！　中央にテーブル、サイドにソファー……どうやら応接間のようだ。左手のソファーに座る春日の親父さんと春日。反対側には金田先輩がいる。三人とも驚いた表情でこちらを見つめ、静寂が部屋を支配した。さて、ここまで来たらもう後には引けない。全力で俺の気持ちを伝えないと。シン、と静まり返る室内。目を見開いた金田先輩はポカンとほうけている。今この状況が理解できていないようだ。

「貴様は……兎月か」

最初に口を開いたのは春日の親父さん。Ｙシャツ姿のラフな格好とはいえ、やはりオーラは大富豪。そしてライオンのように猛々しい双眸で俺を睨んできた。怖い。足が震えてきた。しかし意識はちゃ

んとはっきりしていた。頭が揺れそうなくらい血の巡りが悪いが、気持ちは鈍っていない。決意は固まったんだ。自信持って言うんだ！

「突然の襲撃、真に申し訳ないと思っております。ですが、どうしても春日に伝えたいことがありまして」

「恵に……？」

春日と目を合わせる。びっくりだと言わんばかりの表情。ま、そりゃそうだよな。春日のそういった表情、見るの久しぶりだな。最近は無表情と悲しげな顔ばかりだったから。

「なっ、君は……どうして君がここにいる！？」

一呼吸遅れて金田先輩が声を荒げてきた。

「すいません、約束破ってしまって。でも春日に言いたいことがあるんです。ちょっとばかし黙っていてください」

「なっ……！」

金田先輩がどんな表情をしているかは分からない。今の俺には春日しか映っていないのだから。両目一杯に映る春日……やっとだ。やっと春日とまともに正面から向き合えた。一月も前から出来なかったことがやっと出来た。やっと向き合えた。春日と……そして自分自身と。

「……春日」

「……」

春日は口を閉じたまま俺をじっと見つめる。微かに揺れる瞳は何を訴えかけているのか……それは分からない。そして春日も俺がこう

やって見つめて何を訴えかけているか分からないだろう。だから言うんだ。はっきりと、そして素直に向き合った真っ直ぐな気持ちを。

「お前と最初にした会話、覚えているか？」

「……」

「アンタ今日から私の下僕になれ、だぜ？　冗談じゃねぇって思ったよ。初対面の人間に問答無用で鞄持ちさせるわ、パシリさせるわ。いつも無視するくせして俺が無視するとローキック。というか何かあったらすぐに暴力。とんだ理不尽暴虐女だと思ってたよ」

「……」

最初のうちはね。

「でもさ、なんだろ？　そうやってパシリして理不尽な暴力を受けているうちに……春日と一緒にいるうちにそれが当たり前になってきてさ。……まあ単なる慣れかもな。そう考えると慣れって恐ろしいけど。とにかく、たとえ慣れであろうと何だろうと俺は……俺は……」

言うんだ……言うんだ俺！　今度はちゃんと自分の本当の気持ちを言うんだ！　春日に伝えないと！　俺がこの一ヶ月間ずっと言いたかった言葉を叫ぶんだ。もう嘘はつかない。もう逃げない。もう後悔しない。だから……だから！　この伝えたかった思いを今ここで叫ぶんだ！！

「俺は……俺は春日といるのがすげー楽しくなったんだよ。パシリ、暴力、そりゃキツイこともあるけどそれでも！　春日と一緒に登下校したり、昼ご飯食べたり、学園祭を回ったり……全てが、春日と一緒にすること全てが楽しくて仕方ないんだ！」

「……！」

「だから春日が結婚するって聞いた時、正直ショックだった。金田先輩に春日に近づくなと言われた時、正直嫌だった。春日にまとわりつく金田先輩が憎くて妬ましかった。このまま終わりたくなかった……まだ春日と一緒に学園生活を過ごしたいって思った！　俺は春日と一緒にいたい！　これが俺の本当の気持ちだ」

言いきった……。もう全てをさらけ出した。嘘一つない俺の１００％の気持ち。言いたかった本音、伝えたかった真実の気持ち。ごまかしたりしない、ただ俺が思う純粋な思い。

「春日……」

「……」

ずっと黙ったままの春日は俺から視線を外さない。その瞳はピタリと止まっていた。もう揺れていない。いつも見てきた無表情。そして……

「……私も……兎月と一緒にいるのが……楽しい。これからもずっといたい……！」

いつも……いつも見てきた無表情が崩れて、本当の春日の笑顔が現れた……っ！

第６６話　エンディング（前書き）

春日さん視点から始まります。

第６６話　エンディング

「さよなら」

そう言うしかなかった。これで最後だと決めていたから。だからそう言う以外になかった。……もしかしたら、兎月はまだ私のことを見ているって。そう期待してしまったから彼を引き止めた。けど、兎月は何も言ってくれなかった。期待するような言葉を返してはくれなかった。……兎月がどう思っているのか分からない。ずっと逃げてばかりだもの、あの人は。今までは違ったのに……無理矢理命令しても理不尽な暴力を振るってもどんなことをしても兎月はいつも答えてくれた。私を見ていてくれた。なのに……最近の兎月は逃げてばかり。分からないのだろうか、どうして私が何度も気持ちを確かめてくることを。……私があなたに問いかけるのかどうして分かってくれないの？　それは……私とあなたが同じ気持ちだからだと、私はそう信じているから。あなたの悲しげな表情をこっそり見ていた。会えなくなった後も遠くからずっと見ていた。楽しくなさそうな兎月を見ていると、自分もそうであることに気づいた。だから尋ねた。兎月にも気づいてもらいたかった。あなたと私、同じ気持ちのはずなのだから。……でも兎月は何も言ってくれなかった。だからもうおしまい……私から言うことなんて出来ない。私から気持ちをぶつけることなんて出来るわけない。いつも黙って気持ちを押しこんで暴力にして理不尽にぶつけている私に真正面から言葉で伝えるなんて出来ない。だから兎月に……って思っていたけど、それも駄目だった。もう私達はおしまい、そう結論づけるしかなかった。……嫌なのに。本音を言えばそんなの絶対に嫌なことなのに……そう言えなかった。言えなかったから私と兎月は離れ離れになり、こうして私は顔も見たくない男と向き合わないといけない。

「つまりまだ結婚は早いと私は考えている。まだ先の話ということだ」

「それについては僕も追々話していって決めていこうと考えております。両家にとって好ましいものにしたいですからね」

「つまり、結婚はもう少し待ってはくれぬか？」

パパと金田が話している。それを私は聞くしかない。それが私が逃げることで選ばざるを得なかった道。でも……もう一度、兎月に会えるなら……もし、また兎月と向き合えるなら、今度は言えるよう頑張ってみたい。そう思った時だった。扉が力強く開き、一人の少年が勢いよく部屋に飛び込んできた。……私を真っ直ぐ見つめてくれるあなたに出会えた瞬間だった。

「春日……！」

春日も俺と同じ気持ちだった。俺と同じように一緒にいたいって思ってくれていた……！　良かった……お互いの気持ちを分かり合えて……うぅ。勇気を出して気持ちを吐露して良かったと心の底から喜べた。

「待て」

感無量の俺を低い声が貫く。ズブリと胸を突き抜け、全身を一気に冷やされた気分。声の主は春日父。無表情の顔に二つの鈍く燃える瞳がこちらに向けられた。燃えているのに冷たく感じる。思わず体が硬直してしまった。

「随分と勝手なことを言ってくれたな」

ふらりと立ち上がる春日父。ヤバイ、怒っていらっしゃる。このまま俺をコンクリに沈めるに違いない！　ぅ、ぬおおぉぉ、あぁ俺はもう終わりだ……視界の右下にジエンドの文字が浮かび上がった。で、でも悔いはない！　本当の気持ちを伝えられたんだから。そ、それだけでもう十分だいっ！

「つまり貴様は結婚に反対、というわけだな」

「……そうです」

「この婚約は春日家と金田家のことだ。貴様には関係ないはずだが？」

そりゃそうだな。じゃあ……

「春日はどう思う？」

「嫌。こんな奴と結婚したくない」

こ、こんな奴って……バッサリ言いやがったな。金田先輩が可哀相だよ。

「だそうです」

「……それも恵の気持ちでしかない。この結婚は決して悪いものではない。金田家と繋がるのは我がグループにとって大きな前進となるんだ」

「それもあなたの気持ちでしかない。親なら子供のことを第一に考えたらどうですか？」

「子供なら親孝行したらどうだ」

親孝行、ねぇ。俺なんか一度もしたことないよ。今だって下手したら父さんをクビにしてしまうかもしれないという親不孝を絶賛実行中だからな。親の仕事を奪い、揚句には親より先に旅立つというんでもない親不孝ぶり。超最悪奇天烈馬鹿息子として歴史の教科書にエントリーしたいものだ。ごめんね父さん、やっぱ俺って馬鹿ですわ！

「……兎月」

じっと春日が見つめてくる。今なら春日の目を真っ直ぐ見つめることが出来る。春日の気持ちが手に取るように分かる。だって俺と春日は同じ気持ちだから。大丈夫、春日の気持ちはちゃんと伝わったから。ここは俺に任せてくれい。

「春日のお父さん、先月誕生日だったんでしょ？」
「そうだが」
「春日からプレゼントもらいましたか？」
「……いや」
「春日はあなたに誕生日プレゼントをあげるつもりだったんですよ」
「恵が……？」

親父さんの横で春日がコクリと小さく頷く。

「ま、結婚がなんたらかんたら～で色々とごたついてしまってプレゼント買いに行けてないみたいですが。……さっき親孝行って言いましたよね。娘が嫌がる相手と結婚、娘が父親のためにプレゼントを贈る……どっちが本当の親孝行だと思いますか？」
「……」
「少なくても俺と春日は後者です。あなたはどうですか？」
「……」

考えてもみろ。あなたも人の親ならどっちが嬉しいか。会社とか社長とか関係ねえよ。そんなのただの逃げだ。俺が自分の気持ちから逃げていたように、アンタも自分の気持ちから逃げているだけじゃないか！

「アンタはそれでいいのかよ。自分の気持ちに嘘をついて、自分の気持ちを隠して、自分と向き合わないでさ。それで本当にケジメがついたのかよ。まともに自分とも、そして娘とも向き合えないで出した嘘の答えで終わってしまっていいのかよ。絶対に後悔しない選択をしたと胸張って言えますか？」

俺にも突き刺さる言葉。俺もそうであったから。嘘ばっかついて逃げてばかりで。今の春日父もそうに違いない。だからこそ、この言

葉が深く突き刺さっているんだろ!?

「会社がどーのこーの言って、くだらない馬鹿なことを理由にして隠れているだけじゃないか。それで隠し通せるほどアンタの気持ちは小さいわけないだろ。だから今こうして迷っているんだろうが！

ただ純粋に自分の気持ちに問いかけたらどうだ。結婚とプレゼント、どっちが嬉しいか聞いているんだ。どっちが心の底から喜べるかって聞いているんだよぉ！　会社のためだぁ？　それがアンタの本心なわけないだろ。社長だなんて偉い立場じゃなく！　ただ娘を思う一人の父親としてアンタはどうなんだ!?」

「っ……ええぇい、うるさい！　ぐおおおおぉぉっ！」

うおっ!?　突然立ち上がる春日父。あ、あかん。調子に乗り過ぎた。やっぱ殺されちゃうぅ？　コンクリが目の前に流れてくるよぉ!?

「……春日グループの社長でなく一人の父親として……私も結婚は賛同出来ない」

「お、お義父さん!?」

「お義父さん言うな！」

「えぇ!?」

うろたえる金田先輩に怒鳴る春日父。うお～、このやかましい大声こそ春日父だよ。静かに喋る春日父なんて春日父じゃない。そうです、そうやってあなたも本音を言ってください。馬鹿みたいに叫べばいいじゃないか。

「金田家の一人息子だか何だか知らないが、こんな色白のひょろひょろ野郎に娘はやれん。というか誰にもやらんからな、ばーか！私の大切な娘は誰にも渡さんわ！」

と思いきや、爆発しちゃったよ。本音ぶちかまし過ぎだろ……。やっぱこの人、本当の親バカだったわ。聞いているこっちまで清々しくなるぐらいだ。

「だからこの話はなかったことにする。恵、すまんかった。お前の気持ちも分からず、勝手にこんなことをしてしまって……」

「ううん。パパは悪くない」

春日も父親を許してくれたみたい。良かった、これで一件落着。

「ちょっと待ってください！」

金田先輩が声を荒げて立ち上がる。フラフラと上体が揺れつつも、なんとか踏み止まる金田先輩。この人もまだ言いたいことがあるのだろうね。

「そんなの困ります！　うちの会社はこの話でまとまりかけているんです。今更、婚約破棄だなんて……冗談じゃない！」

金田先輩の言うことも尤もだ。しかし、

「うるさい」

春日が一蹴する。とんでもない理不尽親子だなおい。そして金田先輩、あなたも同じでしょ。俺達と。

「金田先輩、あなたは本当に春日と結婚したいんですか？」

「な、何を。当然じゃないか」

「俺、あなたが春日のことを好きだとか愛してるだとか聞いたこと

ないですよ。ただの政略結婚ならやめた方がいいですって」

どう見ても金田先輩は春日のことを好いているようには見えなかった。ただ自分の会社のためにやっているようにしか思えない。それこそ仕方なく、という感じに。ただ目的を果たそうとするだけの何の気持ちもこもっていない空っぽの使命感のみ。

「秀明君、別に君のお父さんの会社は春日グループと繋がらなくとも十分に大きな会社ではないか。君らの上にはあの超巨大企業グループがあるのだから」

何やら会社の話になってきた。その辺ちんぷんかんぷんなんですけど……。

「そ、それじゃ駄目なんです」

まだ引き下がらない金田先輩。そんなに春日と結婚したいのかよ。いや、違うはずだ。

「金田先輩、あなたはH大を目指しているんでしょ。そのために彼女も作らずひたすら勉強していたって聞きました。そのあなたが急に結婚だなんて、何かあったんじゃないですか？」

すると金田先輩の体がビクッと震えた。ほら、やっぱ何か事情があるっぽいぞ。

「……だ、駄目なんです。僕は恵さんと結婚しないと……。会社のために……！」

重たいものを感じる。金田先輩から何やら大きな決意と責任を感じ

るんだけど……一体何をそんな結婚にこだわる必要が……？

「……なるほど」

春日父がポツリと一言呟く。納得といった顔をしているけど何が分かったのやら。

「秀明君、少し話を聞かせてもらおうか。君の会社のために」

再び春日父はソファーに座る。そしてこれまた俺をギロリと睨みつける。怖いです。ひるみますって。

「貴様は恵を連れてここから消え失せろ！」

ぐっ、なんつー言い方。俺に対して当たりキツくないか？

「恵、本当にすまなかった。今度好きな物買ってあげるから」

子供か。小さい子供をあやすんじゃないんだから。それが高校二年生になる娘に言う台詞かよ。

「貴様は早く失せろ！　本来なら不法侵入者としてコンクリに沈めて海に落としてやるところだが、今から大事な話がある。埋められる前にさっさとこの場から消えるがいい！」

「は、はい！　失礼しました！」

ガチでコンクリに沈めるつもりだよあの顔は。もう怖すぎて涙が出そう！　その場で頭を下げて、そそくさと応接間から脱出。ぐぬあ～、緊張した。もうこんな肝が冷えることはしたくないね。

「……兎月」

隣には春日。いつもの無表情。しかしどことなく嬉しそうに見えるのは俺の気のせい？

「え～っと、ごめんな。急に押しかけて。びっくりした？」

「……」

「あ～……この前は適当なこと言ってごめん」

「……」

「春日は何度も俺に問いかけてくれたのに俺はそれを無下にして……ごめん」

「……」

や、やっぱり無言……。いつもの春日に懐かしさを感じつつも、この状況でこの沈黙はかなり辛い。もうこれ以上は……どうしよ？俺にはひたすら謝ることしか出来ないッス……。

「え～、その……ご」

「もういい」

え？

「もう喋らなくていい」

「春日……っ」

右手が温かくなった。じんわりとした温もりが伝わってくる。春日が手を握ってきたのだ。しっかりとそして優しく。途端に気持ちが軽くなった。

「兎月が来てくれた。それだけで十分。……ありがとう」

横を見れば……今までで一番ニッコリと輝く眩しい春日の満面の笑み。こんな笑顔できるんだ……ヤベ、正直マジで惚れた。右手どころか体中がポカポカとしてきた。春日の笑顔がまるで太陽のように俺を優しく温もりで包みこむ。

「え、えへへー」
「でも来るの遅い」
「へ？　がっ！？」

ぐうぅぅ、右足に激痛がっ。ひ、久しぶりだな春日のローキック……！　忘れかけていたこの痛み！

「いってぇ……」
「馬鹿」
「ぐあっ！？　痛っ、だから同じ箇所に続けて蹴るのは反則だっての」
「うるさい」

相変わらずの理不尽っぷり……ま、それが春日なんだけどな。思わず、くすっと笑みがこぼれちゃう。ドMじゃないよ！？　ふぅ、このやり取りも懐かしいな。約一ヶ月ぶりだもん。やっぱ俺達はこうでないとな。さて、廊下にぶっ倒れている汗まみれで死にかけの初老男性二名はほって置くとして。まずはあなたとの約束が最優先ですからね。約束果たすの遅くなってすんません。

「んじゃ、プレゼント買いに行きますか」
「行くわよ」

だから行きますかって言ったじゃんよぉ。勝手につかつか歩きやが

って。その辺りも全く変わってないよね。

「早くして」

相変わらずの命令口調ですか。ホント、一ヶ月経っても何も変わっていないみたい。俺達の関係は変わり、また元に戻ったのにね。そう、俺達は戻れたのだ。いつもの、いつもの俺達に。

「早く。ついて来なさい」

はいはい、もちろんついて行きますよ。

「だって兎月は私の……」

だって俺は春日の……

「「下僕だから」」

第６６話　エンディング（後書き）

どうも腹イタリアです。

今回で『春日婚約編』完結です。グダグダとよく分からない内容の、心情も読み取りにくくて長ったらしい下手くそな文章でした。シリアスって難しいですよね、なんて言う資格もないぐらいですよ。ここまで読んでくださった方々、読みにくい物語で大変申し訳なかったです。そして読んでくださって本当にありがとうございました。

ぶっちゃけ今回のお話で完結ってことも出来そうですが、そうはならず。まだしつこく続いちゃいます。次からはコメディーに戻りますので、どうかこれからもよろしくお願いします。

そして感想とか意見とかリクエストとか何でもお待ちしておりますぅ！ｗ

第67話　ハイテンションクラスマッチ

「へいパス。こっちこっち！」
「一回下げて。右サイド空いてるよー」
「3番のマーク外れてるぞ。フリーにさせるな！」
「遠藤！　こっちにパスだ」
「兎月っ！」
「しゃあナイスパス！　うおおぉぉっ、タイガーシュートぉ！」
「キーパー、顔面ブロックだ！」
「こ、怖い……」

壁に穴をあける勢いで放った俺のシュートは見事にゴールネットを揺らした。それと同時に試合終了のホイッスルがグラウンドに鳴り響く。

「1対0で二年二組の勝ちです！」

審判の声に俺達二年二組は歓喜の声を上げる。

「しゃあ！　二回戦突破ぁ！」
「イエー！」

期末テストも終わり（二つの意味で）、春日婚約のごたごたも集結して今はクラスマッチの真っ只中。俺はサッカーのメンバーの一人として決勝点をあげるという大活躍を果たした。いやー気持ちいい。俺を称えるチームメイト。もうドヤ顔が止まらないぜ。最後のシュートは我ながら最高だったね！

「次勝ったらベスト4だぜ？」

「俺のパスのおかげだな」
「遠藤の活躍が全てじゃないだろ。俺達全員がすげぇの。マジで優勝できるかも！」
「馬鹿かお前。次の相手は三年七組だぞ。スポーツクラスに勝てるわけねーだろ」
勝った余韻に浸りつつギャーギャー騒ぐチームメイト達。いかにも青春って感じだ。こいつら眩しいぜっ。
「まあまあ。とりま、他の奴らの見に行こうぜ」
「ＭＶＰの兎月がそう言うなら。よし、バレー見に行こうぜ」
俺ってＭＶＰなの？　いやー照れちゃうな。てなことで移動します。次の試合まで時間はあることだしー。やっぱクラスマッチは盛り上がるよね。もう最高に楽しいよ！　うちの学校のクラスマッチは二日間に分けて行われる。種目はソフトボール、サッカー、バスケ、バレー、バドミントン、卓球の六つで、俺はサッカーを選んだわけだ。一、二回戦を順調に勝ち進み次の三回戦は午後からとなっている。暇なので他のところを見てみようと思ったわけだが、
「クラッシャーボール！」
どこかの特戦隊の技名を叫びつつ、米太郎はバレーボールを叩く。
「くっ」
米太郎のサーブをかろうじてレシーブする相手チーム。
「弾き飛ばした！？」

お前それ言いたいだけだろ。ボールが足元に転がってきた。拾って米太郎に投げつけると、

「おぉ、将也んー。見に来てくれたのか。よし、一緒にパープルコメットクラッシュだ！」

だからどこの特戦隊だよ。俺は青いハリケーンになった覚えはない。そうこうしてるうちに試合再開。

「負けた……」

体育館の壁にもたれかかる米太郎。相当ショックらしく、やたら長い溜め息をついている。あの後、相手チームの反撃により、うちのクラスは惜しくも敗れた。うーん、いい試合だったのにね。

「はぁー……あー」

「ま、ドンマイ。相手は経験者が三人もいたんだぜ。健闘した方だよ」

「ちっ、右足が完治していれば……」

おいおい、小学生みたいな言い訳しだしたよ。急に痛そうな顔してんじゃねぇよ。

「うちのクラス、あとどれが勝ち残っている？」

えーっと確か……、

「ソフトは負けたしバスケも一回戦敗退。サッカーが残っていてミントンと卓球は知らん」
「ふーん」
「どれか見に行くか？」
「そうだな。女子を見に行こう」

種目で言え馬鹿。女子が見たいって、どストレートじゃないか。

「えへへ、巨乳ちゃんいないかなぁ？　ぶるるん揺らしながらおっぱいバレー」

もはや言ってる意味が分からない。そしてえらく興奮したらしく、ピョンピョン跳ねだした米太郎。右足怪我してたんじゃないのかよ。普通にジャンプしているけど？　やっぱりただの馬鹿野郎なようだ。

「バドミントンと卓球見に行こうぜ」
「えへへー」

会話はできていないが、ちゃんと後ろからついて来る。つい最近、こんな馬鹿に自分は殴られて説教されたのかと思うと吐き気がしてきた。こんな大馬鹿で野菜馬鹿でただの馬鹿野郎に気づかされるなんて……そんな俺も馬鹿だったりして。とまぁなんか良い感じにまとまった辺りで、バドミントンと卓球の試合が行われている第二体育館に到着。ピン球の跳ねる音、シャトルの弾かれる音。それらを飲みこむ声援と応援。お～、すげー盛り上がってるじゃん。インドアスポーツも良い感じやな～。皆さん、いつも以上に声を出して楽しんでらっしゃる。

「ぬおおぉぉぉっ！　せいやあぁぁっ！　ういいぃぃぃっ！」

特に山倉。フルスイングでピン球を打ち返している。声デカ過ぎだろ。あんな奥の方の卓球台なのにここまで声が届くなんてさ。米太郎が野菜馬鹿だとしたら山倉は声デカ馬鹿だ。あいつは無視でいいな。ということでバドミントンの方を観戦しようと僕は思いました。……あれ、作文!?

「せっかくだし、上から見ようぜ」

お、米太郎にしたら良いアイデアだな。よし、上がろうぜ。

二階から下を見下ろす。ここって二階なのかな？　よく分からんけど。体育館の両端の上、なんか上から見下ろせるところに上がって観戦する。女子がキャッキャとバドミントンしているのが何とも微笑ましい。

「うほっ、素晴らしい眺めですな。グフフッ」

隣のお米ちゃんが汚らしい声と笑み吐き散らしている。キメェ、そう思う俺は間違ってない。この犯罪的エロティックな友が違う意味で恐ろしい。こいつの将来が不安だよ。いつか新聞で名前が載りそうで怖い。その時は、昔は良い奴だったんですとインタビューに答えなくては。

「そういや姉ちゃんが気にしていたぞ。あの後将也がどうなったか」

そしていきなりなんだよ。ニヤニヤやめたと思ったらいきなりなんですか。えっ、菜々子さん？　あー、あの後のことね。はいはい。

「お前から言っといてくれ。あとお礼も。本当にありがとうござい

ました、って」
「いやはー、それほどでも～」
「お前じゃねぇよ」

……いやまあ実際は米太郎のおかげでもあるんだけど……でも米太郎に感謝の意を述べるのは恥ずかしい。うん……恥ずかすぃ。

「照れなくてもいいんだよー、将也きゅぅん。俺はただ親友のためにやったまでなんだから。ふっ……だってお前の悲しげな瞳はもう見たくないからさ」
「テラキメェ！」
「ぐぬぅへぇ！？」

右ストレートを決めてやったのに米太郎は倒れなかった。この野郎、俺はお前のパンチで地面に叩きつけられたってのに。だが効いたらしく、両目にはうっすら涙が溜まっている。

「ぶったね。親父にもぶたれたことないのに！」
「黙れアムロ太郎」
「アムロじゃない、桂だ。あん、違った。米太郎だ！」
「ギガうるせぇよウザ太郎ぉ！」
「とぼぐるくぅ！？」

腹に蹴りをぶち込むと今度は床に倒れ込む米太郎。よく分からん奇声を上げた辺りがまだウゼェ。そして倒れたあとも、そのアングルから下の女子を眺め出しやがった。タフにも程があるよ！

「ぬふふ、やっぱ素晴らしい眺め……ん？　あれは……おい将也」
「あ？」

ちょいちょいと米が示す先。手前のコートにいるのは……春日。ラケットを持ってコートに立つのは春日さん。その長い髪をなびかせて華麗にシャトルを打ち返して……いない。というかピクリとも動いていないんですが……。ラケットも持ってはいるが全然振らないし、全く戦意がない。全然動かないって……手塚ゾーンじゃないんだからさ。相手もどうしたらいいか分かんないで戸惑ってるし。それでも試合は続く。相手の点がひたすら増えていっている。

「将也、あそこにいるのって……なあ、応援してやれよ」

はぁ、俺が？　なんで俺が……いや、うん……オッケーだ。

「……よし」

すぅ、と息を吸いこむ。応援してやれば春日もやる気を出してくれるかも。

「春日！　頑張れー！　スマッシュぶち込んでいこーぜ！」

「……」

山倉ばりの大声で応援する。……うっ、すげぇ睨んできた。こっちに戦意が向いちゃったよ！　ヤベ、こっからでも伝わってくる。春日の不機嫌オーラが！　こいつぁマズイです！

「米太郎、逃げるぞ！」

「なんでだよ。まだおっぱい見てねーぞ」

「絶対に見れないから！　いいから行くぞぉ！」

ここにいちゃマズイ。春日の試合が終わる前にエスケープしなくては！

「ゲームセット。互いに礼」

あっ、終わった。二つの意味で……。

「兎月」

「うわっ春日、痛っ！」

こんな強いローキック打てる力あるなら試合の方に使えよ！

「す、すいません……」

とりあえず謝っておく。なぜかって？　俺がヘタレだからさ！

「お邪魔な俺は退散しましょうかねー」

「待て、米太郎」

行かないでくれ。お前が消えたら誰が俺を守ってくれるんだ！

「あぁん？　んだよ、イチャイチャするのを見せつけるだけだろうが。嫌がらせでしかないわ」

別にイチャイチャはしてねーよ。どう見ても単なる一方的なバイオレンスだろうが。

「なぁ頼むよ。いてくれよ。春日のおっぱい見せるから痛い痛い痛いぃ！」

ぎゃあぁぁ！？　殴る蹴る抓るの乱舞が炸裂！　驚異的な速さでHPが減っていくぅ！　ピコンピコンの警告音が頭に響く。

「す、すいません……」

今のは１００％俺が悪い。反省してます。だからもう蹴らないでくださぁい！

「じゃあ、俺行くわ。アディオス、イチャイチャカップル」

くそ、見放しやがって。

「……やっぱお前達、二人でいる方が楽しそうだな」

そう言って米太郎は早足で去っていった。……ま、まぁ楽しいには楽しいけど……他人に言われるとちょっと恥ずかしいな。それにこうやって春日といれるのも米太郎のおかげでもあるし……あいつって実際は良い奴なんだよな……。素直にお礼は言えてないけどさ、本当に感謝しているよ。ありがとうな。ってこんな台詞ぜってー言えないけどね。

「……兎月」

「ん、何？」

「……」

何か用ですかい？　米太郎の後ろ姿を見送り、振り向けばそこには俯く春日お嬢様。どしたの？　呼んだだけ～、みたいな可愛い感じのやつですか？

「……」

「……」

マジで何も言うことなかったみたいだぞ！？　変に気まずくなったじゃないか！

「……え～っと、試合残念だったな」
「……」
「もうちょっと真面目にしたら良かったのに～」
「うるさい」
「がっ！？」

またもやローキック。……はぁ、あの事件以来何か態度が変わるかなと思ったけど、前と変わらず黙って無視してローキックの非常識アクションの数々。常にツンツンしてるもん。ま、それが春日なんだけどね。デレる春日なんて春日じゃない。でも、デレる春日も見てみたいな。いつか見れるのだろうか。うーん、たぶんないでしょう。

「っ……兎月」

極端に小さい声を出して春日が俺の後ろに隠れる。え、何？　急に何なのさ？

「あの……」

……あ。ふと前を見れば、そこには金田先輩が。いつもの眼鏡にいつもの色白な肌。いつもと同じでないのは何やらやつれた顔。げっそりしてますけど？

「兎月君、先週は本当に申し訳なかった」
「いやいや、俺の方こそ。乱入しちゃってすいませんでした」

実質、俺が二人の婚約をぶっ壊したようなもんだしな。あれって金田先輩からしてみれば俺はただの悪役だもんね。

「それでちょっと恵さんに話があるんだけど……」

春日に？　もしかして、また結婚しようとか？

「……兎月」

痛い痛い。そんな力一杯しがみつかないでよ。ギュウ、と服を掴んでさらに後ろに隠れる春日さん。そんな怯えなくてもいいじゃん。

「だ、大丈夫。もう結婚しようなんて言わないから。ただ今回の謝罪をしたくて……」

ほら、金田先輩も求婚するつもりはないってさ。話くらい聞いてあげなさいよ。

「……」

「春日、俺もついて行くから。話聞いてあげなよ」

「……分かった」

「よ、良かった。兎月君、ありがとう」

はあ。なんか先輩の上品スマイル弱々しいですよ？

第６８話　友達になりました

金田先輩が何やらお話があるということで場所を移動することに。
てことでやって来たのは食堂。辺りを見渡せば体操服姿の生徒だらけ。もちろん俺も春日も金田先輩も体操服姿である。クラスマッチだからね。春日も金田先輩もテーブルに座ったことだし、目の前に置かれたメロンソーダをがっつり飲んじゃいます。この爽快な炭酸がたまらねぇ！

「メロンソーダ奢ってくれてありがとうございます」
「構わないよ。そのくらいはさせてもらうよ」
「そういえば金田先輩はクラスマッチどれに出場してるんですか？」
「僕は卓球だよ。やたら声の大きな二年生の男子に負けてしまったけど」

山倉だ。間違いなく山倉だ。

「早く話して」

こら春日。せっかく人が軽い雑談でもして、場を温めようとしているのを壊すんじゃありません。

「そ、そうだね。恵さん達に時間をとらせるわけには」
「早く話して」
「ご、ごめん」

うおおぉ、すげぇ嫌っているし……。えええぇ～？　そんなあからさまに拒絶しなくてもいいじゃん。あなた達は小さい頃からの付き合いなんでしょ？　だったらもうちょい愛想よくしなさいよ。春日の

尋常ではない険悪な態度に俺まで萎縮してしまいそうだ。嫌な空気が沈黙として数秒流れた後、金田先輩が口を開く。頑張ってください。

「その、先週は本当にごめん。僕の勝手な都合で結婚なんて大事なことを軽率に発言してしまって。ろくに恵さんの気持ちも考えずに……申し訳ありませんでした」

お～、誠意のこもった声、きっちり垂直に頭を下げるその姿はもう立派な社会人ですな。体操服着てるけど。とにかくさすが未来社長、ホント礼儀正しいよ。

「こっちにも色々と問題があって……その……でも進一さんのおかげでなんとか収まりそうだ。本当に感謝しているよ」

進一さん？　ああ、春日の親父ね。あの後何か話をしてたからな。金田先輩にも何やら深い事情があったみたいだし。春日父はそれについて思い当たる節がありそうな雰囲気だったけど……はいその辺はそちらサイドの問題ですよね。それこそ本当に俺には関係のないことー。

「それでお詫びとして何かしたいんだけど……」

「いらない」

即答で拒否。おいおい？　あんまりでしょ、せっかくのご厚意だってのに……これだからお嬢様は困るぜ。喜んで受け取りなさいよ。

「で、では兎月君」

は？　俺？

「君にもお詫びしたいんだが……何か受けとってくれないか？」
「いや、このメロンソーダで十分ですよ」
庶民の俺はこれで満足してますから。
「そう言わず、何かさせてもらえないか？」
んー……とは言ってもなー。今そんな欲しい物はないし、さすがに現金はいやらしいから駄目だし。うーん……何かいいものは……おおっ、そうだ！
「でしたら自転車買ってくれませんか？」
「自転車？」
そう自転車。人が移動手段として活用する便利なグッズ。あるシリーズのゲームではもう定番アイテムだ。あるとないとでは移動時間が大きく変わってくる。そして意外と高級品。うん、高校生にとっては高級ですぅ。自転車だなんて代物、普通はおじいちゃんとかに買ってもらうべきなのであろう。でもうちのじいちゃんは買うどころか壊しやがったし。自転車が壊れてしまってから最近はずっとバス通学だったのだ。てことで自転車が欲しい！　てことで金田先輩金持ちだし、てことで思いきって頼んでみた、てことで！
「自転車だね。うん、構わないよ。一流メーカーのスーパー電動自転車を贈らせてもらうよ」
「そ、そんな高いやつじゃなくていいです。フツーの自転車でいいですから」
そんなの乗ったら逆に恥ずかしいわ！

「そうか。分かった。後日、自宅に届けるよ」
「ありがとうございます」

やった！　これでまた自転車通学出来るぜ！　もうじじいには乗せないからな。家で大人しくしているがいいさ！

「では僕はこれで失礼するよ。恵さん、これからはまた友人として付き合っていこう」

立ち上がって上品スマイルで手を差し出す金田先輩。しかし春日はそれを無視する。そして代わりになぜか俺の手を握ってきた。え、なぜ？

「あっ……え、えっ……？」

ほら、先輩が困ってるじゃんか。どうして俺の方の手を握るんだよ。俺が超嬉しいだけじゃねーか。

「お、俺も金田先輩と友達になっていいですか？」

自転車買ってくれるし、フォロー入れないと。

「もちろんさ」

左手は春日と、右手は金田先輩と手を繋ぐ。なんか仲良し三人組みたいになっちゃった。春日と金田先輩も手を繋いだら輪ができるんだけどな。春日は金田先輩の方を一切向かないしさ。そんなに嫌いなの？　ここまでくると金田先輩が可哀想になってきたよ。

「それじゃあ失礼するよ。時間をとらせてすまなかった」

金田先輩は上品スマイルのまま食堂から去っていった。受験勉強頑張ってくださいね。目指せH大学！

「……兎月」

「どした？」

まだ手握るんだね。いや、俺はとてつもなーく嬉しいからいいけどさ。

「自転車で通うの？」

「まー、そうなるな。やっぱ運動したいし」

「……」

ん？　何か問題でも？

「……バスは？」

「いや、バスはもう乗らな……あ、そっか。春日はバスだったよな」

ここ最近は金田先輩の車で通学していたけど春日は元々バス通学だ。あー、春日を一人でバスに乗せたら……また他人の席を奪いそうだな。そりゃいかん。しかし俺も自転車で行きたい。

「良かったらさ、自転車に乗せていこうか？」

まぁ軽い冗談だって。一回乗せたことあるけど嫌がってたしね。春日が自転車の後ろに乗りたいなんて言うはずないしー、今のも本気にはしていないっしょ。

「なーんて冗だ」
「うん」
「……え？」
「乗せてくれるんでしょ？」

……あ、ヤバい。もう戻れない。この感じ、なんかもう決定してしまった。う、うぇ？　このクソ暑い中、後ろに人を乗せて自転車を走らせるとか……汗ダラダラになっちゃうって！

「……た、たまになら、ね？」
「そ」

ち、ちょっとこれは替えのシャツがいるかもしれないぞぉ？

「あ、いたいた。兎月！」

ん？　サッカーのメンバーである遠藤がこちらにやって来た。なんだ遠藤か。どうしたんだい？

「あと一時間で三回戦だぞ」
「いや、まだ一時間あるし」
「練習するんだよ！」

マジ？　どんだけ張り切ってんだよ。

「ちょ、俺まだ昼飯食ってないぞ」
「んなもん適当にパンでも押しこんどけ。ほら、行くぞ」

肩を掴まれ、ずるずると連行される！　ぐっ、離せ。俺はまだ昼ご

飯を食べていな……ぐぅ、いなーいのにっ！　ぐあああ、遠くなる春日の姿。俺を無表情で見つめている。た、助けてくれないのねー。

「じゃ、じゃーな春日！　またあとでメールするわ」
「イチャイチャする暇があったら練習だ」

はぁ、今更練習なんかしても意味ないと思うけどな。つーかイチャイチャしてねーし。

第６９話　白熱の三回戦

「では三年七組対二年二組の試合を始める。出場選手は小グラウンドに集合しろ」

男教師がラウドスピーカーで叫ぶ。うるせえ。んなもんなくても十分聞こえるっての。パス回しをしていた我ら二年二組チームは足を止める。そして各自、屈伸したり、腕を回したり、空を仰いだりとなんらかのアクションを起こしている。なんだよお前ら、何をすましているんだよ。

「……よし。行くぜ野郎ども！」

「おう！」

チームメイト全員がキメ顔で歩きだす。ちょっとギャラリー増えたからってカッコつけすぎだろ。完全に周りを意識しているチームメイト達。カッコつけているのが見え見えだ。なんつー奴ら。さっきの練習の時も、どーも集中が散漫していた。おいおい、勝つ気あんのかよ。いやまあ勝てばさらに注目が集まるから絶対勝とうと思っているだろうけどさ。

「兎月ぃ」

「ん？　おぉ、マミーじゃないか」

「マミー言うな」

カッコつけチームメイトに続いてグラウンドに行こうとしたら、後ろから声をかけられた。振り向けばそこには水川がいた。そして、

「おっ、火祭も一緒か」

「うん。久しぶりだね」
「そうだなー、久しぶ……ん？　何を基準で久しぶり？」

とにかく水川の隣には火祭もいた。ちょいと赤みがかった長髪が風に揺れてキラキラとなびき、端麗な小顔とアーモンド形の可愛らしい瞳がこちらを見つめる。その姿にキュンとしてしまうのはどうしようもない。純情だもの、ドキッとしちゃうって。

「どしたの二人して」」
「兎月の応援に来たんじゃん。ねー、桜」
「う、うん。その……頑張ってねっ」

おいおい！？　こんな美少女二人から応援されたら超テンション上がりますよっ！　ぐううぅ、ニヤケ顔になりそうなのを懸命に我慢。

「ああ、勝ってくるぜ」

はれれえぇ？　俺もカッコつけてもうた！　俺もあいつらと同類かよ。でもやっぱ可愛い女子の前ではカッコつけたいよね。純情だものぉ！

「おい兎月、早く来いよ！」
「あ、うん今行くー。じゃ、試合頑張ってくるわ」

水川と火祭に別れを告げ、チームメイトに追いつく。ん、何その嫌そうな顔は。遠藤がしかめ面でこっちを睨んでくる。なんだよ？

「春日さんだけでなく火祭さんと水川さんまで……。兎月っていつからモテモテになったんだよ」

いや、モテモテじゃねーし。三人とも普通に仲良い友達でしかないっての。悲しいけどさ……春日にいたっては主従関係だから。モテモテじゃないからぁ。

「ほら試合始まるぜ。集中しよーぜ」

グラウンド中央に並び、相手も整列。互いに向き合ったところでサッカー部の審判が大きく手を挙げる。

「互いに整列、礼！」
「しやーす」

相手は三年七組、スポーツクラスだ。スポーツクラスだけあってガタイのいい奴がずらりと並んでいる。三年生だけあって体格も俺達二年より一回り大きい。こんな奴らに勝てるのか？　とてもじゃないが勝てる気がしない。

「はっ、二年か。こんな奴らに負けるはずがないぜ。ちゃっちゃっと終わらせようぜ」

うわー、負けフラグ立ててくれたよ。そんなこと言う奴に限って負けるんだよな。なんだろ、なんか勝てる気がしてきた。

「試合開始！」

ピーッとホイッスルが鳴る。フィールドに散らばる我ら二年二組の勇士五人。サッカーと言っても、九人ではなく五人でするフットサルみたいなやつで、前半後半十五分ずつの計三十分の試合だ。試合時間三十分とはいえ現役ではない俺にとっては十二分にキツイもんです。

「へいへい！」
「ボール回していこうぜ」
「楽に楽にー」

軽快なパスワークを見せる三年七組。やはりボール回しは上手く、さすがスポーツクラスあってフットワークが軽やかだ。あっという間にゴール前まで持っていかれ、

「シュート！」

ネットが揺れ、笛が鳴る。開始三分でゴールを決められた。やっぱ強いわな。　さすがはスポーツクラス、あんな台詞を言うだけのことはあるみたいだ。

「ドンマイドンマイ！　まずは1点返していこーぜ」

すると勝手にドリブルしだしたチームメイトの一人。おいおい、すぐ取られるぞ？

「あぁ！？」

予想通り、すぐにボールは奪われ相手のカウンター攻撃。そして、

「はい2点目ー」

か、開始五分で2対0……。もう敗色濃厚じゃねーか！　さっきの相手の負けフラグはどうしたぁ！？

「個人プレーすんなよ！」

「一人でカッコつけんな」
「だ、だって火祭さんが見ているんだぜ。カッコつけたいよ……」
「お、俺この前フラれた……」

あーあーもう仲間割れしだしたよ。最後の一人にいたっては単なる私情だし。

「まだ始まったばっかりだろ。まだまだ挽回出来るって。パス回していこうぜ」

しょーがない、俺がまとめないとな。

「そうだな。兎月の言う通りだ」
「チームワークで勝利を掴もうぜ！」
「おー！」
「フラれた……」

一人まだ傷心中だが、まぁ上手くまとまった。うん、皆で力を合わせれば何とかなるはずだ。とりあえず1点返していこう。これ以上点差を広げられると厳しい。

「うしっ、慎重にいこう！」

ボールを受け取り、前を見る。とはいえスポーツクラス相手。どいつもこいつも構えが慣れている。サッカー経験ないにしろ、運動神経だけで十分に強敵だ。運動神経の良い奴は周りがよく見えている。周りがよく見えているということはサッカーにおいて一際大事なことだ。攻めるのはなかなか難しそう。うーん、どうしたもんか。

「兎月、ファイトー！」

ん、この声は……水川だ。グラウンドの横で水川と火祭がこっちを見ている。手を振って応援してくれている。おおぉ、嬉しい。

「頑張れー」

火祭が応援してくれている。なんかすげー力が湧いてくるよね。テンション上がってきたぁ！

「勝ったら桜がデートしてくるよー」

!?　で、デート……？　火祭と……デート!?　で、デー……デートだとぉ!?

「ま、真美!?」

「しゃあぁぁぁっ!」

俄然やる気出てきたぞ！　体中からエネルギーが溢れる！

「やったるでぇっ！」

「と、兎月？　パスは……」

知るか！　俺一人で十分だ！

「な、なんだこいつ？」

「すごいスピードだぞ!?」

デートのため……ただそれだけのために。俺はボールを蹴り、グラウンドを走り抜ける。加速よくドリブルして強行突破！　まずは二人抜いて続いて目の前にはまた二人。

「一人スカイラブハリケーン！」
「なんだよ一人スカイラブハリケーンって！？　無理だろ！」

相手がツッコミ入れてるうちに二人をドリブル突破。その程度のプレスで俺が崩れると思ったか。甘いわ。四人を抜き去り残すは一人。うろたえている姿を確認した時点で勝利を確信した。腰が浮いてるぜ？　それで俺の動きについてこれるかよ！

「くっ、こいつ……！」
「おらぁ！」

ラスト一人を抜き去り、目の前のゴールはガラ空き。そして俺はフリー状態。これで外すほど俺はヘタレじゃないんでね。

「もらったぁ！」

華麗にシュート！　そしてゴール！　奇跡の五人抜きだぜ！

「しゃあ！　これで1対2。皆、まだ逆転出来るぞ！」

やったぜ、俺やったよ！　……ん？　どした皆。もれなく全員ひどく苦い顔してるけど……？

「ちょっと待てよ兎月。なんだ今の……完全に個人プレーじゃねぇか！　チームワークで頑張ろうって言ったばっかりなのに！」

ぐわっと牙を剥くチームメイト達。遠藤なんて睨んでくるし。一人だけ活躍した俺がそんなに憎いのかよ。お、落ち着けって。1点取ったんだから結果オーライじゃないか。

「火祭さんがいるからってカッコつけやがって！」

そ、それは仕方ないでしょ。カッコつけて何が悪い！　男はカッコつける生き物なんだよ。

「火祭さんにフラ」

「それはもういい！」

「負けた……」

普通に負けた。2対3とかなりいい勝負したんだけど負けた。俺は2点も決めたけど負けた。もう、その……負けた！　くぅ～、接戦を制せなかった。

「惜しかったな、将也。ま、三年のスポーツクラス相手によく健闘した方だよ」

何やら米太郎が慰めにきた。

「はぁ……膝の故障さえなければ……」

「さっきの俺状態になってるぞ！？」

米太郎にしては珍しくまともなツッコミをしてきた。いつもボケるだけのくせして。お前にツッコミを入れるのも疲れるが、ツッコまれるのはそれ以上に苦痛だ。こんな非常識野菜馬鹿に言われるとムカつく。はぁ、あと少しで勝てたのになー。あと少しで……でぇとぉだったのに。

「兎月ぃ」

あ、水川と火祭がこっちにやって来た。せっかく二人が応援してくれたのに勝てなくて面目ないです。

「あ、マミーと火祭」

「マミー言うな佐々木ごときが。お前は黙ってろ。そして消えてちょうだい」

「す、すいません」

水川って米太郎に対しては当たりキツめなんだよな。もしかして米太郎のことが好きだったりして！

「み、水川さー、俺に対してだけキツい態度だよな。……もしかして俺のことが好きなんじゃねーの！？」

「それは本当にない」

俺の勘違いだった。こんな冷えきった目をした水川は見たことない。すっげぇ拒絶オーラを出している。米太郎のことを本気で嫌がっている。冷水の睨みを放つ水川を見ているとこっちまで辛くなってきた。てことは米太郎はそれ以上に……

「将也ぁ……俺フラれたよ」
「ドンマイ」

泣く米太郎の肩を叩いてやる。お前もそんなマジで好きじゃないだろうが。普通に友達だろ？

「試合、惜しかったね。でもカッコ良かったよ」

火祭が慰めてくれた。カッコ良かった？　それは嬉しいな。火祭に言われると超嬉すぃ。

「あともうちょいで勝てたんだけどなー」

火祭がデートしてくれるって言うからかなり気合入れて頑張ったけど……うぅ、駄目でした。悲しい。負けた以上に悲しいです。

「ぐあ～、デートはなしか……」
「そ、それなんだけど……よかっ」
「将也ぁ、バレー見に行こうぜ！　もうおっぱいバレーを拝まないと俺はやってけねぇよ！」

おいおい米太郎？　俺と火祭の楽しい会話を邪魔してんじゃないよ。手を引っ張るな。

「ごめん火祭。またあとでなー」

火祭との会話を強制終了された。ムカついたので米太郎にグーパンチ。あ～、勝っていたらデートだったのに……くそ～。

「……行っちゃった」
「桜っ！　どうしてデートしようって言わなかったの？」
「佐々木君が……」
「ちっ、あの馬鹿お米太郎が……空気読めよ！」

「ぶえっくしょい！」
「どした米太郎？」
「変なクシャミが出た。きっと誰か可愛い子が俺の噂をしているな」
「なんで可愛い子限定？」

第７０話　自転車通学よ再び（前書き）

金田秀明（かねだひであき）

好きなもの　勉強、化学平衡、駒野、家族との旅行

嫌いなもの　激しい運動、マラソン、お酒、邪魔する人

兎月や春日の一つ上の先輩の三年生。ある会社の社長の一人息子で、いずれは会社を継ぐらしい。色白くモヤシのように貧弱で眼鏡をかけている。礼儀正しく、学生とは思えない大人びた態度と笑顔を振りまく。春日に婚約を迫るが、最後の最後で兎月に見事に邪魔されて婚約は破棄されてしまう。しかし金田も自ら望んだ結婚ではなかった様子。

第７０話　自転車通学よ再び

クラスマッチ一日目も終了し、のんびりと家に向かって歩く。ぬあー、疲れた。サッカーも三回戦で負けてしまったし、俺の夏は終わってしまったのだ。明日もまだクラスマッチは続くが、負けてしまった俺に出番はもうない。大人しく応援するかサボるかのどっちかだな。サボるなら食堂でのんびりしていたいなと考えているうちに家に到着。補習もない平日はとってもハッピーだ。ゆっくり休んでゲームでもしましょうかね。

「ただいまー」

壊れた自転車の処分と新しい自転車がくることは晩飯の時に話そうかあぁあぁっ!?　ぐっ、なんだ!?

「ま、さ、や～!」

玄関に入るなり誰かが首を絞めてきやがった。ぐっ、息が……だ、誰だ?　強盗?　強盗なのか!?　家の中に強盗って……か、母さんは無事か?　ぐぇ、揺さぶってくるなよ。恐怖に負けじと目を前に向ければ……んっ?

「父さん?」

そこには見慣れた父さんがいた。父さんが首を絞めてきたのだ。なんつー親父だ。何の恨みがあってこんなことを?

「は、なせ、クソ親父」

「将也……お前って奴は～!」

がぁぁ、この馬鹿親父はさらに力を込めてきやがった。窒息するっての！

「な、なんだよ。父親が息子の首を絞めるなんて、とんだＤＶだなおい」

「父親のクビを縮めた息子が何を言っていやがる。このクソ駄目親不孝ドラ息子があぁぁ！」

ドラじゃねーよ。いいから離しやがれ。十代の若きパワーでおっさんを突き飛ばす。しかし父さんはフラリと立ち上がって、こちらを睨む。目が怖いって。

「……今日な、社長からお呼び出しがあった」

「そいつぁ結構なことで」

「結構コケコッコーなんだよ！」

うわっ、アラフォーのギャグ線は面白くないどころか吐き気がしてくるな。その程度なら米太郎の方がまだマシなボケをするよ。米太郎の方がボケキャラとして百倍優秀だ。

「……お前、何かやらかしただろ」

「……へっ？」

な、何のことやら俺にはさっぱりですけど～？

「シラを切れると思うなよ。誰かが勝手に社長のご自宅に無断で入って、しかも好き勝手暴れて、しまいには春日家の大事な結婚の話をぶち壊したのは今日たっぷりと聞かされたんだ」

春日父めぇ……何もうちの父さんに話さなくてもいいだろうが。ヤバ、だから父さんこんなに怒っているのか。牙を剥き出しにして今にも喉元に噛みつきそうな剣幕だ。父親の威厳どうこうとかじゃなくて単純に生物として恐怖を感じた。

「その不届き者が誰なのか……父さんだって馬鹿じゃない。社長に呼び出され、その話をされた時は死を直感した。せめて死ぬ前に孫の顔が見たかった。ま、どーせそれは今後生きていても無理だろうけどな」

それは俺が結婚出来ないと言いたいのか。ふざけるな、幸せ家庭築き上げてやるよ。そして孫の顔見せてやるよ！　って、今はそんな話じゃないだろ。

「とにかく父さんは死を受け入れた。最後に冥土の土産に社長椅子に座らせてくれと泣き喚く父さんに対して社長は思いもしない言葉をお送りなさった」

何やってんだよアンタは。

「社長は『君の息子さんに気づかされた。私も娘も自分に嘘をついていたようだ。それを気づかせてくれた息子さんには本当に感謝している。有難うございます。今後も娘をよろしくお願いします』……だそうだ！」

「なんで若干キレ気味なんだよ！」

「その後『次また息子さんが不法侵入したら家族ごと消すかもしれないなー、ははっ』って笑いながら言われたんだよ。ジョークだとしてもこっちは全然笑えなかった！」

そう叫んだ父さんは涙目で睨んだ後、リビングに転がりこんでいっ

た。ったく、テンションがおかしなことになってるぞ。……まあ実際、俺のやったことってとんでもないことだよな。人の家に侵入して人の問題に首突っ込んだ挙句、ベラベラと説教染みたことほざいてさ。一歩間違えたら本当にうちの家族は終わっていたのかもしれない。うぅ、今更ながら背筋が震えてきたよ。えええい、それはもう終わったこと。そして俺は全く後悔していない。例え春日父が俺の父さんをクビにして、うちが樹海に行かざるを得なくなったとしても俺は自分のやったことを胸張って言えるぞ。俺はもう気持ちに嘘をつかない！

「お届け物でーす」

「ん？」

クラスマッチ二日目の朝。俺のテンションはハンパなく上がりまくっている。なぜかって？　うふふ、なんと……自転車がきたのだ！

昨日お願いしたばっかりなのに昨夜にはもう届いたのだ。仕事が早いというか素晴らしいというか……もう最高。金田先輩、最高じゃないですか！　こんな立派な自転車を贈ってくださって。もう……最高っ！　さっきから最高って言葉ばっか連発しているけど……もう最高！

「風が気持ちいいー」

今日は涼しくて絶好の自転車日和。このままサイクリングにでも行きたいぐらいだ。ちょっとコンビニ寄ってサンドイッチでも買って遠出でもしたい気分……と、コンビニの前に寄る場所があるか。

「お、来た来た。春日ちゃーん」

「……」

春日が家から出てきた。いつも通りの無表情、何考えてるか分からないんだよな。せっかく可愛いんだからもうちょっと笑顔でいればいいのに。

「おはよう」

「……おはよう」

「今日は涼しくていいよなー」

「……」

無言で鞄を前のカゴに入れて無言で後ろの荷台にちょこんと座る春日。

「ちゃんと掴んでいてよ？」

「……」

きゅっと俺の脇を掴む春日。くわっ、なんかムズムズするぅ。そしてドキッとするぅ！

「それじゃあ出発進行」

春日を乗せて自転車を走らせる。一度だけでこうやって下校したこ

とはあるけど通学するのは初めてだよなぁ。ちょっと周りからの視線が気になるかも。こんなカップルみたいなことしちゃって……恥ずかしいよね！

「二人で自転車に乗るの久しぶりだよなー」

「……」

うーん、基本的に無視だから構わないけどさ。なんか寂しいよね、返事が返ってこないのって。

「毎日こうやって通学したいけどさ、さすがに俺がキツイから、さ……。二日に一回はバスで行くこと、に、しねぇ？」

ここの坂とか超しんどいし。額に汗がじわっと滲んできた。足も疲労が蓄積してきたし……！

「……」

「へ、返事して、よ…」

ぷはーっ！　やっと坂を登りきった。二人乗りってこんなにキツイんだな。

「なぁ春日？」

「……分かった」

「じゃあさ、バスで行く時はバスで行くってメールしてよ」

そしたら俺も合わせられるし。

「……分かった」

ふぅ、良かった。春日と一緒に行きたいには行きたいけど、さすがに毎日はしんどいからな。くそぅ、俺に体力があったら。

「早く行きなさい」

「痛い！　抓るなよ、今出発しますから！」

「お、まっさやー！　朝から会うとは奇遇だな」

学校前の坂道を上っていると後ろから米太郎が名前を呼んできた。奇遇って言うけど俺達かなりの頻度で会ってるぞ。奇遇で遭遇みたいな？　ラップみたいな？

「あ、春日さんも一緒なんだな。春日さん、おはよう！」

「……」

「あ、れ？　どうし、て……？」

「おいおい！？　泣くなよ！」

お前、春日に対して相当打たれ弱いぞ！？　それ程度の無視で泣いていたら俺なんて号泣してるって。

「春日、おはよう」

「……おはよう」
「だってよ、米太郎」
「将也に言っただけじゃねーか！　俺に対しては言ってくれていないもん。ねぇ、どうして将也なの？　こいつなんてしょーもない男だよ。俺の方が断然カッコイイぜ」
こ、こいつ俺の評価を下げにきやがった！　とんだとばっちりじゃないか。
「名前覚えてる？　佐々木米太郎だよ！　好きなものは野菜とお米。特技は米粒に文字を書けること。春日さん、グッドモーニング！」
そんなぐいぐいくるなよ。うっとうしいだけだろうが。
「兎月……」
ほらぁ、春日も怖がってるじゃん。俺の横にぴたーっとくっつく春日。よほど怖いのか、俺の腕を掴んできた。うお、そんな腕握られたらドキッとしちゃうって。と、米太郎の方からギリギリと歯ぎしりの音が聞こえる。何をそんな悔しそうに……お前自身が招いたことじゃないか。
「つーか自転車ってことは……後ろに乗せてラブラブ登校かコノヤロー！」
ちなみに今は自転車から降りている。ここの坂道になると登校する生徒が多くて、さすがに視線が痛いですから。
「別にラブラブじゃないし」
「うるさいやい！　勝ち組の言い分なんか聞きたくねーよ！」

お前の方がうるさいって。この負け組が。

「まあまあ、いいから行こうぜ」

「ねぇ春日さん、好きな野菜って何？　俺は全部！」

クソつまんねー話題出しやがった。春日引いちゃってるし。つーか俺もドン引き。

「将也ぁ、無視される……」

「話題変えろ」

「そっか……よし。ねぇ春日さん、好きな漬け物は何？」

「さほど変わってねーよ！」

第７１話　頭なでなでと睨む奴ら

米太郎の話が面白くないといったハプニングがあったものの、無事に登校して今は朝のホームルーム。全員が体操服に着替えている。そりゃクラスマッチなんだから着替えますよね、ええ。

「今日はクラスマッチ二日目だ。うちのクラスで残っているのは卓球とバドミントンの個人戦のみだが、皆でしっかり応援するように」

あ～、今日は暇だな。俺はもう出場しないし、やっぱりサボろうかな。

「なぁ将也、食堂でのんびりしとこうぜ」

米太郎も同じことを考えていたようだ。そうだな、食堂でダラダラしとくか。

「よし、食堂行くか」
「ちょっと待った兎月」
「ん？」

どうしたよ水川。

「今から桜の試合があるの。見に行こうよ」
「火祭が？　どの種目？」
「バドミントンだよ～」

へぇ、ミントンか。バドミントンは昨日から個人戦が行われているから二日目の今日まで勝ち残っているってことはかなり勝ち進んで

いるに違いない。つまり火祭はなかなか頑張っているってことだ。
そりゃ是非応援に行きたいよ。

「兎月が応援したら桜はもう無敵だよ。ね、来てよ」

俺が来たら無敵になる意味は分からんけど、もちろん行きますよ。

「行く行く。なぁ米太郎、お前も来いよ」
「えー？　んー、火祭のおっぱいが見られるなら行く」
「ごめん、お前絶対来るな！　いいか、絶対だからな！　昨日からそればっかりじゃねーか！」

場所は第二体育館。卓球とバドミントンの個人戦が行われている。来る途中に水川から聞いたけど、次で準々決勝らしい。つまり勝てばベスト4。火祭すげーよ。えっと、火祭は……お、いたいた。というかギャラリー多いな。え、これって全員、火祭を見に来てるの？　わらわらと集まっている生徒達（男子しかいない）はどいつもこいつも火祭に注目している。すげー人気だな火祭。もはやアイドルだね。試合はもう始まっているようで、火祭が動く度にギャラリーが騒いでいる。あんなのただウザイだけだろうに。それでも嫌な顔しない火祭は偉いと思います。つーかこいつらムカつくな。

「桜ファイトー」

水川の声に反応して火祭がこっちを振り向く。ニコッと微笑み返す可憐な笑顔にグッときた！

「ほら兎月、応援して」
「ああ、うん。火祭頑張れー！」
「勝ったら兎月が何でも願いをきいてくれるよー」

「水川！？」

何言っちゃってんの！？　そこそこリスキーなこと言ってるよ！？

「ちょ、勝手なこと言うなよ」

「こう言ったら桜のやる気が格段に上がるからさ」

「そんなわけないだ、ろ……はれぇ！？　火祭からすごいオーラを感じるんだけど！？」

やる気どころか戦闘値も格段に上がったよ！　火祭の放つ威圧感で相手が萎縮してしまうぐらいだ。

「私、頑張る！」

テンションが上がったのか、火祭は叫ぶように声を出してラケットを構える。これマジで敵無しじゃねぇの？　オーラがハンパねぇ！

「いいぞ桜ー、気合い入ってる～。頑張って、勝てば兎月が好きな願いを三つまで叶えてあげるからぁ」

「いつの間にポルンガにランクアップしたんだよ！？」

そして火祭の試合はさらに熱を帯びる。準々決勝だけあってハイレベルな戦い……的なことはなかった。なかったって言うか、ハイレベルではあったよ。ただ圧倒的……火祭が圧倒的に強かったのだ。なんつー強さだよ。放たれるスマッシュの音が爆発音に近い。シャトルが勢いよく床を跳ねる。シャトルが床を跳ねるって相当じゃね？　あの可憐な容姿からミサイル級のスマッシュが放たれるなんて驚きだ。相手もそれなりに強いはずなのに手も足も出ない。まるで大人と子供、メジャーリーグとリトルリーグ、ワールド８－４とワールド１－１ぐらいの差がある。相手も涙目だよ。一方的なゲーム

展開。そして周りのギャラリーはハンパなく盛り上がっていた。恐らくあれが火祭ファンクラブの皆さん方なのだろう。ちっ、ウゼー。とまあ火祭の強さと人気を再認識したところで試合は終了した。勝者はやはり火祭。彼女はもはや世界レベルの選手だよ！

「やったぁ！　桜、カッコ良かったよ」

「ありがと」

ニッコリと笑う火祭。確かにカッコ良かった。昨日の俺の数十倍カッコ良かった……。

「そ、それでね？」

ん？　な、なぜに俺に詰め寄ってくる？　嬉しそうに、そしてどこか恥ずかしそうに顔を赤らめて火祭が接近してきた。思わずたじろいでしまう。ぬぅ、顔を赤くするのは反則だって。キュートすぎるって。

「何でも願いをきいてくれるんでしょ？」

それは水川が勝手に言ったことであって俺が言ったわけではないんですが……。

「兎月ぃ、言ったからには責任を持たないとね」

あれえぇ！？　水川さん！？　何ふんわりと発言者を俺にすり替えているんですか！？

「ねぇ……」

!?　ぐうっ、火祭からそんなうるうる上目遣いされたらイエスと言うしかないじゃん。ある意味魔性の女だよ！

「え～と、俺なんかでも出来る範囲であれば、とりあえずは何でも」

不老不死とか死人を蘇らせるのは無理だからね。ギャルのパンティーぐらいならなんとか……いや、パンティーも結構しんどいぞ！？

「三つ叶えてくれるから……」

しかもちゃっかりポルンガで考えるし。ここは地球だから。

「じゃあね……こ、今度の休みにで、デートしてくれる？」

で、デート？　それって昨日の俺が叶えられなかった願いじゃん。昨日のサッカーで勝っていたら火祭がデートしてくれるって約束してくれた。でも負けちゃって……。も、もしかして俺のために？　俺の願いを叶えるために？　うぅ……この子超良い子だよ。よし、その願い叶えてしんぜよう！

「俺なんかで良かったら全然いいよ」

「あ、ありがと」

むしろ俺が感謝したいくらいだよ。やったね、また火祭とデートに行けるよ！

「じゃあ二つ目のお願いは……」

というか周りからの視線が痛いんだけど……。火祭のファンクラブ団員らしきメンバーからすごい睨まれているんですけど。火祭人気

すごいなおい！

「う～……真美、どうしよっか？」
「パシリでもさせたら？」
「パシリはやめて、頼む！」

パシリなんて春日一人で十分だっつーの。あの子一人で手一杯なのに……あ、また後で紅茶買いに行かないと。

「んー、じゃあさ、頭を撫でてもらったら？」

「「えぇ！？」」

俺と火祭の声が重なる。そして周りからもどよめきが。頭ナデナデ！？　そ、そんな恋人みたいことできるわけないでしょ！

「マミー！　ちょっと無理あるでしょうが」
「マミー言うな。せっかくだし、よく頑張ったなとか言いながら頭なでなでしてもらうといいよ」

話を聞いて！　そんなこと恥ずかしくて出来ないし、第一火祭が嫌に決まってるだろ。

「……うん」
「ひ、火祭？」

どうして俺の方に頭を向けるんですか？　そ、それって……やれってことですか！？　えぇっ！？

「む、無理だって。ポルンガでも叶えられない願いですぅ」

「何でもやるって言ったよね。大人しくポンポンと優しく撫でてあげなさい」

言ったのは水川テメーじゃねぇか。くっ、やるしかないのか？　そんなラブコメみたいなウフフな展開があっていいのか！？　こんなシチュエーションって漫画とか小説の世界だけじゃねぇの？　おいおいこれも小説だろうが、ってツッコむのはタブーでお願いします！

「ねぇ……駄目、かな？」

うぐぅ！？　だ、だから上目遣いは反則だって。そんな顔されたら……やるしかないじゃんか！　ええい、ヘタレでもやる時はやるんだからな。

そーっと右手を火祭の頭に持っていく。火祭の頭まであと数センチで……う、手が震える……。いかんいかん落ち着け、俺。何を緊張しているんだ。ただ優しく頭を撫でるだけなんだから。簡単なことだろ。あと数ミリ……ぐぅ……そ、そうだ簡単なことじゃないか。ひ、火祭のことを彼女だと思って。彼女にしてあげるように……。

「……いい試合だったよ。この調子で次も頑張って」

火祭の頭を優しく撫でる。サラサラの髪がまるで絹のように滑らかで最高の触り心地。手の平に伝わる触感がどことなくこそばゆくて気持ちいい……っ、女子の髪ってこんな手触りのいいもんなの？

「ん……」

火祭も目を閉じて、トロンとした表情を浮かべている。ヤベ、これエンドレスでしていられるわ。火祭の髪の毛やわらけー。サラサラで柔らかいってどゆこと？　神秘だよ。あぁ……なんかこっちも癒

されるわぁ……。うわっ、もうこのまま抱きしめたい。なんだろこれ？　すげー落ち着くような幸せに満ちたこの気持ちは……これが頭ナデナデの威力なのか……！

「ん……」

「……っ、はいおしまい！」

あ、危ない。これ以上していたら理性がぶっ飛んでいたかも。永遠に撫で続けていたかもしれん。人の心奪うなんてすごいです。

「……えへへ」

顔を真っ赤にして火祭が幸せそうに微笑んでいた。ぬあぁっ！？そんな笑顔されたら悶え死んじゃうって！　つーか俺も顔真っ赤だし！？　顔が熱いんだけどぉ！　嬉しいと恥ずかしいがミックスしちゃって顔が沸騰するぐらいに熱いぃぃ！

「こ、これで良かった？」

「……もっと」

「へ？」

「も、もっとなでなでしてくれない……？」

えぇ！？　あかん。あかんよ、火祭さん。こーゆーことは本来、彼氏とかにやってもらうものなの。ただの友達がやっていいものではございません。というかこれ以上したら俺が持ちませんって。完全に火祭にメロメロになってしまうよ！

「も、もう無理です。これ以上は彼氏さんにお願いしなさい！」

「えー……」

だ、駄目だぞ俺。もっと火祭をなでなでしたいだなんて思ったら駄目だから。あああああぁっ！？　でも名残惜しい……い、いや駄目だって、これ以上は……ん？　なんか……周りから視線、いや死線を感じるんだけど……。気づけば俺達を囲むように男どもが集まっていた。そしてもれなく全員が俺を睨んでいた。

「あ、あいつ許せねぇ」

「堂々と桜ちゃんの頭をなでなでするなんて何様だ！」

「桜ちゃんは僕ら皆のアイドル。独り占めするとは万死に値する！」

うおぉっ、火祭のファンクラブ（非公式）の皆さんから黒いオーラが見える。妬み、恨みの憎悪が俺に注がれている。今にも俺に向かって飛びかかってきそうな勢いだ。これヤバイかも。

「兎月……マジで殺す」

あ、クラスメイトの友達も睨んできているわ。友を殺すつもりか。

「兎月！　許さない！」

なぜか山倉もいるし。お前も火祭ファンクラブ団員だったの？　うわぁ、なんか俺が悪い奴みたいになってるし。別に火祭のお願いをきいただけであって俺がしたかったわけじゃないのに。ちょっと何なのこれ？

「ねぇ、もっと……」

そんな周りに一切気づかず再度お願いしてくる火祭。なんか火祭のキャラ変わってきているし……。この状況、どーしたらいいんですか！？　じりじりと距離を詰めてくる猛獣達。憎い、ただそれだけ

の感情を俺にぶつけてきやがる。

「まずは奴を桜ちゃんから引き離す。その後は全員でリンチってことで」

「了解」

あ、ボコボコにされる。もう何なのさ、火祭の頭を撫でただけじゃん。火祭って人気あるんだな。再々認識したよ。

「かかれ！」

その合図とともに火祭ファンクラブが一斉に突進してきた。誰しもが俺を睨んでいる。あ、終わった……またいつかの不良みたくボコボコにされちゃう。もう駄目だ、そう思って目を閉じた時、

「待ちなさい！」

一人の救世主が現れた。声を張り上げ場を一気に沈めた。静まり返った中心部に立つ人物、それは水川だった。水川が俺の前に立って両手を広げていた。まるで俺を守るかのように。

「なんだよ水川！　なぜそいつをかばう！？」

「山倉、アンタは黙ってなさい」

み、水川が俺をかばってくれた。おかげでファンクラブの皆さんもひとまず止まってくれた。しかしまだ威嚇してくる。なんとか気持ちを抑えているって感じだ。今にも襲いかかってきそう。み、水川。どうしよう？

「皆さ……自分勝手だよ」

へっ……水川？　声が震えてるけど？　水川の方は震えていた。小さく震える姿が目に飛び込んできた。

「今は桜を受け入れているけど三ヶ月前はどうだった？　避けていたじゃない」

三ヶ月前……まだ火祭が恐がれていた頃か。

「喧嘩が強いからって狂暴だと勘違いして避けていたでしょ。今みたいな態度じゃなかったでしょ！」

「それは……」

ファンクラブの奴らも声が小さくなった。誰もが気まずげに目を伏せる。え、この空気……シリアス？　いつの間にシリアス？

「でもね、兎月は違った。兎月だけは違ったんだよ。桜と普通に接していたよ。それに桜のイメージを変えようと必死に頑張ったんだよ！　不良にボコボコにされてもなお頑張ったんだよ！　ただ桜のために……！」

「……」

火祭が俺の手を握ってきた。……思い出したのかな……あの頃のことを……皆に恐がられていた頃のことを……。今でも覚えている。火祭に学校で宿題を手伝った時、偶然会ったクラスメイトとその部活仲間の態度。火祭を見るなり顔を引きつらせて逃げたあの怯えた顔。そして陰でいい加減な悪口。そんなイメージを変えようとして始めた挨拶活動。それも最初は火祭を見るだけで恐がって無視していた奴らばっかだった。……今でこそ火祭は人気者だ。こうやって

ファンクラブができるほどに。それは火祭自身が頑張ったから。俺はそう思っている。けど、どうやら火祭本人と水川は違うみたい。

「兎月が桜を変えてくれた。兎月が皆の持つ印象を変えてくれた！　皆が桜をそんな風に思えるように変えてくれたのは兎月だよ？　ぐすっ、その兎月を、桜とイチャついたからって……恨むのは、ぐすっ、間違ってるよ。自分勝手だよ……うぅっ～」

「み、水川！？　な、泣かないでよ」

分かったから、水川の言いたいことは分かったから。だから泣かないで。あなたが他人のことで涙することは知っているからさ。俺が火祭を変えたって言うけど、俺からしてみれば水川だって火祭を変えてくれた一人じゃないか。だからこうやって火祭のために泣いてくれているんじゃないか。顔をうずめる水川にそっと寄り添う火祭。場の空気は一変、気まずげな雰囲気が流れてきた。

「……その……」

水川の懸命な説教にファンクラブの奴らもすっかり落ち込んで、どことなく気まずそう。目を伏せて何も言葉が出ない様子。さっきまで大人数でギャーギャー喚いていたくせに。まあ水川の言ってることは正しいと思う。前まで無視していたくせに今は手の平を返したようにわらわら寄ってきて。俺的には火祭の印象が変わって良かったなと思う一方でふざけんなとも思っていた。都合のいい奴らだなコノヤローって感じだったよ。でも火祭の本来の姿を見たら、そうなってしまうのもなんとなく分かる気もするから言わなかったけど。とにかくこいつらの自分勝手な行動に俺はムカついていた。そして水川も。

「水川……ごめん。兎月もごめん。それに……火祭さんもごめん」

声がデカイというキャラを忘れて山倉が細々した声で申し訳なさそうに頭を下げてきた。それに続いてファンクラブの皆も次々に謝罪してきた。俺達三人を囲むようにして全員が頭を下げている。ちょ、頭なでなでしただけでここまでの事件に発展しますかね!?

「まあ俺はいいけど……火祭も大丈夫だよな？」

「うん」

「ひっく、私も……分かってくれたなら、いい」

水川もやっと泣き止んでくれた。水川って結構涙もろいよね。

「でもね」

ん？　火祭がギュッと俺の手を強く握ってきた。力強くそして優しく。

「もし君が誰かに危害を加えられそうだったら私はもう一度『血祭りの火祭』になって君を守るよ」

う、うおぉ……火祭がいつか見た闘気オーラを纏う。今日は色々なオーラを見れる日だな。

第72話　戦いは終わった……とカッコイイ感じで締めくくるのに憧れる

火祭ファンクラブとの騒ぎもひとまず落ち着いたところで、とりあえず食堂へやって来ました。テーブルには俺と火祭と水川が座っている。

「ごめんね。あんな騒ぎになるなんて……」
「水川は謝んなくていいよ」

まあ誰が悪いってわけでもないしね。とりあえず俺的には火祭をナデナデ出来たので大満足です。

「ところで火祭、次は準決勝だろ？　何時から？」
「えっと、あと三十分後」
「んじゃ、もうちょいのんびり出来るな。ここでまったりしていよーぜ」

最初は食堂でダラけるつもりだったからな。あ～メロンソーダが美味しい。二日連続でメロンソーダを飲もうとも味は落ちない。むしろさらに美味しくなってきた！

「君はもう競技出ないの？」
「俺？　俺はサッカー負けたし。あと一応ソフトボールのメンバーにも登録していたけど俺が出る前に負けちゃった」

サッカーの一回戦と時間帯がかぶったんだよなぁ。ソフトの方も参加したかったのに。

「それはそうと桜、三つ目のお願いは？」

えっ、それまだ続いているのかよ。

「もういいじゃん。頭ナデナデしたんだから。それで終わりでいいじゃないか」

「だ～め。自分の言葉には責任を持ちなさい。兎月が言ったんでしょ、どんな願いでも三つ叶えてやるって」

だから言ったのは水川じゃん！　もう完全に忘れているよね！

「う～ん、三つ目……」

火祭もそんな真剣に悩まなくていいよ。無理難題言われても困るし。

「叶えられる願いを百個にしてもらったら？」

「子供か。そんなチートは通用しないからな」

「えー」

えー、じゃないよ。駄目だって。それ許したら何でもアリになっちゃうから。

「うーん、考えておくね」

「あんまし無茶のないように頼むわ」

簡単なやつにしてほしいものだ。

「桜、優勝したら兎月が願いを百個叶えて」

「やめろぉ水川！」

そしてあっという間にクラスマッチ閉会式。全校生徒が体育館に集合している。今からは三位までに入賞した生徒にはメダルと賞状が贈られる表彰式が行われる。ちなみにうちのクラスで入賞した奴は一人もいない。ちょっと情けないよね。俺もだけど。

「続いてサッカーの表彰です。三位、三年五組。二位、二年七組。一位、三年八組」

俺達を倒した三年七組も普通に負けたし。どーせまた負けフラグ立てたんだろうな。校長が入賞した生徒にメダルと賞状を渡す。パラパラと起こる拍手。この時間って暇だよな。知り合いが表彰されているなら見るけど、知らない奴だもんなー。暇で暇でしょうがない。

「将也、暇」

前に並ぶ米太郎も同じこと考えてたようだ。こいつと考えることがよくカブるんだよな。非常に不愉快だ。

「将也ぁ、何かしようぜ」
「何かって何だよ」
「ＡＶ女優の名前でしりとり」
「却下。気持ち悪いわ」

なんで暇つぶしでＡＶ女優の名前でしりとりしなくちゃならんのだ。周りから引かれるわ。というかそんな発案をしたこいつにドン引き。今日はホント米太郎に引きまくりだよ。

「バドミントン個人戦。優勝、二年一組、火祭桜さん」

お、火祭の名前が呼ばれた。すげーよな、あの勢いで優勝しちゃったんだから。火祭の強さはシリアスを挟んだ後でも健在で、準決勝でも相手を圧倒。さらに決勝でも相手にほとんど点を与えることなく最強ぶりを発揮した。決勝の相手は中学で全国大会まで勝ち進んだほどの経歴を持っていたのに、火祭を前に為す術がなかった。そして火祭の優勝。水川とハイタッチを交わして喜んでいた火祭の笑顔は眩しかったよ。

「火祭ってバドミントン強かったんだなー」

米太郎が感心したように呟く。

「火祭は運動神経が良いからな。たぶんどのスポーツも器用にこなすと思うぞ」

「へぇ、夜のスポーツも？」

「お前マジで黙ってろ！　さっきのＡＶ女優に話もっていかれてんだよ！」

こいつって下ネタと野菜の話しかしないよな！　ネタの引き出しが少ないし面白くないし！　っ、と馬鹿な米太郎はほっといて。知り合いが表彰されるのは是非とも見ておきたいな。ステージに上がる火祭。最大級の拍手を持って称えようではないか。まだ火祭のことを良くない目で見ている人も絶対にいる。それは仕方ないと思う。

だけどこうやって火祭が活躍することで少しでもその人数が減っていけばいいなと俺は願うわけで、つーわけで全力で拍手してやる。手が痺れるくらい叩いてやるぜ。

「火祭　桜。はい、『ら』から」

「だからしりとりしないっつーの！　あと火祭をＡＶ女優扱いするな！　それはマジで許さないぞ、おらコラァ！」

米太郎の胸倉を掴もうとしたら逆に俺の胸倉が掴まれた。んだよ、やんのかコラァ。上等だコラァ。コアラァのマーチ。思いきり睨んでやろうとしたら……俺を掴んだのは米太郎ではなく、うちのクラスの担任だった。目がめっさ怖い。あれれ、どうして担任がここに？　なんか俺達やらかしました？　あ～、うるさいとか。うーん、そうですか。そ、そうなので、すね……あー、やってしまった。

「佐々木、兎月。ちょっと外に出ようか」

そのまま俺とエロ太郎は強制退場。あ、火祭の表彰されるところ見れないや。でも外からでも拍手は出来る！　鳴り響け俺の賛辞！

第７３話　両者激突

くそっ、米太郎のせいで俺まで怒られた。せっかくボランティア部で頑張っているのに遅刻とかこんな態度で帳消しにされているような気がする……。あーあー、来週は再テストがあるし、もう最悪と言っても過言ではない！

「じゃーなー将也。放課後ライフを楽しんでくれ」

担任に説教されて教室に戻ってそしてホームルームも終わり、はい放課後。ぐったりする俺を余所に軽快な足取りで米太郎は教室から出ていく。同じように怒られたのになんであいつはあんなに元気なんだろうか。もうすぐ大会だかなんだか知らんが、この程度ではへこたれないみたいだ。あのポジティブな性格は羨ましいね。担任によって外に放り出されたせいで火祭が表彰されるところを見れなかったし、かと思えば火祭の頭を撫でたりデートを約束してもらえたりとホント今日は色々あったな～。……まだ何かあったりして？これらを越えるさらに大きな事件が発生したりとか？

「……兎月」

「はいぃ！　危ない！」

背後から春日の声が聞こえたので横へジャンプして回避！　脳内で十字キー左と×ボタンを同時押し！　それが俺の中でジャンプ回避のコマンドだ。ふぅ、危ない危ない。あと少し反応が遅れたらローキックの餌食になっていた。後ろを振り返ればそこにはやはり春日が立っていた。

「……何してるの」

「だ、だっていつも蹴ってくるから」
「……蹴らない」
とか言って左足を半歩下げているのは何なのさ。蹴る気満々だよね！？
「もうちょっとおしとやかになりなさい」
「うるさい」
「ぐっ！？」
油断した、いつも通りローキックが炸裂ぅ。ふ、普通に痛い。普通に泣けてきたわ。くすん、でも私負けない！
「……段々、蹴るの上手くなってきたよね」
「帰るわよ」
無視ですか。一応これでも褒めたつもりなんですけどね。なんて言うのかな、こう、痛みがクリアに伝わるというかキックが的確で無駄がないというか。つーか足を蹴りますか？　今からあなたを乗せて自転車を漕ぐこの私の足を蹴りますか？　それは車を運転する人に酒を飲ませることと同義ですよ。……例え分かりにくくてごめん！
「帰るわよ」
「はいはい、と」
春日お嬢様の仰せのままに～。だって俺は下僕だもの。もう最近は下僕であることにちょっとした誇りすら感じるようになった。それは間違いなく俺の感覚が麻痺しているのだろうな。な、なんか悲しい。人間知らないうちにその環境に慣れてしまうものらしい。下僕生活復活から数日程度だが、もう慣れている。これが俺の本来ある

べき姿なのかなぁ～……んー、進路に迷うよね。いや大学進学とかじゃなくて下僕で生きていくかどうかに！

「帰りも後ろに乗る？」

「……」

はい出ましたその名も無視～。春日はホントよく無視するのだ。絶対聞こえているはずなのに平気で無視する。俺が無視したら怒るくせにさ。そのまま喋ることなく春日と二人でのほほんと下校する。あ、そういや火祭の三つ目の願い聞いてなかったな。一つ目はまだ約束しかしてないけど二つ目は一応叶えたし、三つ目はまた今度会った時にでも聞いてみるか。もう一回頭なでなでだったらいいなぁ。えへへ、火祭の髪の毛の触り心地最高だった。あ～、火祭のトロンとした表情……あれも可愛かったな～。

「無視するな」

「痛いです！」

ローじゃなくてミドルキックかよ！　痛い、お尻が痛いよ。くっ、人が幸せな思い出に浸っているのに！

「ごめん無視してた？」

蹴られたのに謝る俺って本当にヘタレだな。や、やっぱり悲しい！

「ちょっと今日を振り返っていてさ、話聞いてなかったよ」

「……」

「で、何か言った？」

「……」

「あ、あの？　春日さん？　お返事は？」

「……」

もうなんだよ！？　俺が聞いたら喋らなくて、俺が聞いてない時に喋るって単なる嫌がらせじゃないの！？　意図的に空気を重くしているようにしか思えないよ。空気を白けさせるスペシャリストか。あなたの無言には『芸人殺し（コメディーブレイカー）』が宿っているのかなー！？

「はぁ」

まあ、それが春日だから別にいいけどさ。

「……乗る」

「え？」

乗る？　乗るって何？　乗る、乗る乗る乗るノル載る乗る……うーんと……自転車の後ろに乗る？　ああ、さっき俺がした質問の返事ね。いやいや、言うのが遅いっすよ。ミドルキックと無言挟んで言う台詞かね。

「はいはい、了解しましたー」

メールの返信はそこそこ速いくせに、こういった返事は遅いんだよな。ちなみに春日とはちょくちょくメールしています。メールだと会話が結構弾むんだよね。電話はしたことないけど。だって電話しても春日たぶん無言だし。通話料金の垂れ流しだよ。

「そういや、お父さんにプレゼント贈ったでしょ？　反応どうだった？」

婚約騒ぎで三週間程遅れたけど俺と春日で選んだ誕生日プレゼントを春日父に贈ったのだ。なんて親孝行な娘さんなんでしょうか。素敵だね。うん、？の名曲だよ。聴くだけで涙が出てくる……って閑話休題！

「……喜んでくれた」
「そりゃ良かった」

贈ったのはネクタイ。いつぞや俺がスーツを買ってもらった店で選んだやつだ。けど、娘が選んだ物なら父親は何であっても嬉しいだろうな。特にあの春日の親父さんのことだから、涙を流して喜んだに違いない。「恵ーっ！」とか叫んでいそうだ。絶賛親バカ中なのだろう。春日の将来の旦那さんが可哀想だ。デットオアアライブの覚悟で挨拶に行かなくてはならないのだから。って、また逸れた。とにかくプレゼントを贈って、親父さんは喜んでくれた。うん良かった。俺も今度父さんに何かプレゼントでも……やっぱやめとこう。

「おっ」

昨日の父さんのギャグに、思いだし笑いならぬ思いだし寒さを感じて身を縮まらせつつ図書室のある棟の前を横切っていると、建物の中から猫がひょっこりっと現れた。あの黒ぶちの模様は……コジローだ。黒ぶち模様の猫。学校の敷地内をよく徘徊している。つーか住みついている。

「コジロー、元気にしてたか？」

しゃがみ込んでコジローに話しかける。こちらをじっと見つめ返すコジロー。お、目を合わせてくれるのか？　久しぶりだよな、俺のこと覚えているかな。

「最近暑いからって夏バテするなよ」

気さくなアドバイスに対してコジローは大きな欠伸を一つ、そしてそのまま俺を振り返ることなくトテトテと歩きだした。な、なんだあいつは。馬鹿にしてる？　俺のこと馬鹿にしてる！？　なんつー無愛想な態度。春日そっくりだね。

「行くわよ」

「ぐっ、痛い痛い痛い！　耳を引っ張らないでぇ！」

春日が俺の耳を持ち上げるように引っ張ってきた。痛いって！　ちょっと猫と戯れるくらいの時間はくださいよ！　あなただって猫は好きでしょ？

「行くわよ」

「こ、このまま行くの！？　マジで痛いって、耳がちぎれちゃうよ！」

悪戯した子供を連れ帰るお母さんみたいじゃん。待ってよお母さん、僕は猫さんとお喋りしてただけだよ！？　心配しなくても帰りはバスじゃなくて自転車なんだから。いつかの時みたく乗り遅れるってことはないさ。それでも力を緩めることはしないのねー！　ぐあああっ、片方だけ耳なしになっちゃいそう！

「か、春日ぁ痛いですぅ」

「……あれ？」

……ん？　あれ、返事が返ってきた。と言っても、この声は春日じゃない。春日の声はもっとぶすっとしている。こんな無垢な声を出

せるはずがない。ってことは他に人が？　と、横を見れば建物の入口に赤みがかった長髪をなびかせる美少女、火祭がいた。なんとまたも会いました。表彰されているところ見れなくてごめんね。米太郎のせいなんだよ。

「お、火祭ー」

どうやら図書館から出てきたところみたい。そういや火祭は図書委員だったか。それに本は大好きだし火祭が図書室を訪れる頻度は高いようだ。それにもう一つ理由があるかも。それは、

「もしかしてコジローに餌あげていた？」

「うん」

火祭は無愛想猫コジローに餌をあげているのだ。そっか、だからさっきコジローが建物から出てきたのか。餌もらった帰りね。そら満足して俺なんかは無視するわな。

「君は今帰り……ねぇ、隣の……」

ニコっとしていた火祭の顔が少しだけ曇ったような……隣？　ああ、春日ね。つーかまだ耳引っ張ってんのかよ！　未だに引きちぎる作業を続行中の春日。いい加減放してください。

「こっちは春日。同じ一組だから知ってるでしょ？」

「……うん」

あ、待てよ。そっかー。今こうやって振り返ると、春日と火祭が一緒にいるところは何気に一度も見たことないな。でもクラスは同じだから教室では絶対会うし、会話もしているはずだ。てことで俺が

互いに紹介する必要はないか。うん、どーぞガールズトークしてください。

「……」

あれ……火祭？　何をそんな訝しげな表情をしてるの？　さっきまで微笑んでいた火祭は何を考えているのか分からない表情でこちらを見ている。俺と春日の顔を交互に見て、そして俺の耳を引っ張る春日の指へと視線を向ける。そのまま沈黙……数秒が経過。そしてまた俺と春日を見る。次の瞬間、火祭の顔がムッと不機嫌そうになった。……へ？

「……春日さん、その手を離して」

火祭が春日を鋭く睨む。威嚇するような声を出してきた。なっ、あ、ふえ？　ど、どうしたの急に？　いつもの可憐な笑顔がどこにいったのさ？　火祭は不機嫌そうに春日を睨み続ける。な、何か気に触れました？

「……」

春日は春日で黙ったまま火祭を睨み返している。俺の耳は引っ張ったまま。痛い。けどそれどころじゃない。そんな耳の痛みなんてちっぽけに感じるほどに空気が痛くて重い。え、何この空気？　なんでこんなに重苦しいの？　息が詰まる……日差しの強い夏の学校にあるべき雰囲気じゃないよこれ。

「あ、あの～？」

「……」

「……」

駄目だ、俺の声なんて届いていない。二人は睨み合ったまま動かない。そして俺も重い空気感に押されて身動きが取れません。と、火祭が口を開いた。

「春日さん、離してよ。……まー君が嫌がってる」

ま、まー君!?　ふえええぇ!?　なっ、え……まー君って、俺のこと?　そんな呼び方してなかったじゃん。たった今いきなり変えた……なぜ?　将也だから、まー君か。なんだか彼女に呼ばれてるみたいでこそばゆいな……。いやなんで急に呼び方を……?

「まー君?」

春日の眉がピクリと動いた。火祭もだけどさ、春日もそんな不機嫌そうな顔するなよ。つーかどうして二人とも不機嫌そうなの?　俺が何かやらかした?　心当たりは皆無。それでもこの二人の機嫌はさらに悪くなっていく。

「離して」

「……」

ゆっくりと耳を離してくれた春日。うあー痛かった。赤く腫れてないよね。大丈夫だよね?　耳をさする俺を無視して春日は火祭と向き合う。な、何をこれぇ、なんだか険悪なムード……。

「火祭さん。何、まー君って」

おいおい!?　春日がこんなはきはきとしっかり喋るなんて珍しいぞ。どうしたんだよマジで!?

「まー君はまー君だよ。私はそう呼んでいるよ」

たった今からね。普段とかは君って呼んでいたじゃないの。

「……」

「……」

な、何これ？　よく分からんけど、これは……修羅場というやつではないか？　もしかして春日と火祭って仲悪い？

「……」

「……」

空気がピリピリして痛い。二人は未だに睨み合ったままだし……お、俺が和まさないと。頑張れ俺、空気に負けるな俺。

「えっと～……あはは、今日は良い天気だね」

へ、下手くそか俺は！　そんなんじゃ全然和まないって。くそっ、自分のトーク力の無さを痛感した。野菜の話でもしようかな？

「……春日さん、まー君の何？」

火祭？　ちょいと怖いですって。

「兎月は私の下僕」

「げ、下僕！？」

春日……はっきりと言いすぎだって。うぅ、火祭に情けない一面が

バレちゃったな……悲しい。

「ま、まー君を下僕扱いしないでっ！」

うおっ、火祭!?　今度は怒りだした火祭。俺を下僕扱いしないで、と言ってくれるのは嬉しいけどさ……す、すごい勢いだね。

「兎月は私の下僕」

「駄目」

「……下僕なの」

「駄目ったら駄目なの！」

へ、変なところで口論が始まった。俺が下僕かそうでないかで口論しないでよぉ。高校生が学校で議論すべきことじゃないよ。なんか俺が恥ずかしいじゃんか！

「……火祭さんは兎月の何なの？」

「っ!?　ま、まー君は……その……私の……す、っ……大事なお友達だよ！　そういう春日さんはまー君の何なの？」

「兎月は私の下僕」

「だから駄目なの！」

こ、これってエンドレス？　終わりが見えないんだけど。つーか二人とも俺の存在忘れてるよね？　下僕かそうでないかの議論テーマの人物である俺はここにいますよー。

「……火祭さん……兎月のことが……」

「っ……!?」

あれ、火祭？　顔赤いよ？

「……春日さんも、でしょ」
「……っ」

あれ、春日？　顔赤いよ？　マジでどうしたのさ二人とも。さっきからおかしな発言と行動ばっかりだよ。

「む～」
「……」

火花が散ってる……二人の間で火花が散ってるよ！？　二人の関係がよく分からん！　クラスメイトでしょ。もっと仲良くしようよ。

「兎月、帰るわよ」

いきなり春日が俺の左手を掴んで歩きだした。ぐっ、急すぎるって。反応が追いつかない。

「まー君、今から図書委員の仕事があるの。手伝って」

させるかと言わんばかりに火祭は右手を掴んできた。右手には火祭、左手には春日……え？　何この状況？　ハーレム？

「帰るわよ」
「手伝って」
「い、痛い痛い痛い！　両方から引っ張んないでよ！」

ぐあぁぁっ！？　痛いいいぃぃ、体がちぎれそうだ！　拷問かこれは！？　二人の美少女から手を握られてハーレムかな？　えへへー、と一瞬でもニヤけていた自分が愚かで馬鹿だった！

「……帰るわよ」
「む～！　手伝って！」

ぐぅうぬぅへえぇぇ!?　ふ、二人とも女子とは思えないハイパワーの力で引っ張ってくる。ありえねぇ、なんだこの痛みは！　不良でボコボコにされる方がまだマシかもしれない！

「帰る」
「手伝う」

そう言って俺を睨む春日と火祭。そ、それは俺にその言葉を言えってことですか？　それを言ったらこの苦しみから解放してくれるんだね？　解き放ってくれるんだね!?

「ぐっ、帰る手伝う」
「「どっちよ」」

ぎゃあああぁぁっ!?　さらに力が強くなったぞ!?　どーなってんだチクショー！　何なのこの二人っ、俺に何の恨みがあってこんなことを！

「兎月、帰るわよ」
「痛い！　春日、引っ張るに加えてローキックだなんて器用な真似はやめて！」
「まー君が痛がってる。春日さん、暴力はやめて」
「だったら火祭も手を離してよ！」

だ、誰か助けて……このままだとアメーバみたいに分裂しちゃうよ。誰も望まない分裂が起こっちゃうよ！　体の中心部に亀裂が入るか、

または両腕がちぎれるか。いずれにしろ俺の分裂は避けられない！
だ、駄目だ……耐久値が減っていく。二人がさらに引っ張りさらに睨み合っている。挟まれし俺に誰か救いの手を……

「誰か……ヘルプぅ」
「と、兎月！？」

こ、この声は……水川ぁ！　なんとか頑張って首の向きを変えて後ろを見ればそこには水川ぁ！

「桜と恵も何してるの！？　兎月が死んじゃうよ。二人とも手を離して」

天使だ。水川が天使に見える。死ぬかと思った……でも助かった！
水川に止められて謎の凶暴化を遂げた春日と火祭も一旦手を離してくれた。良かった、まだ腕はくっついている。

「あ、ありがとう天使マミー」
「マミー言うな。聖天使真美ちゃんと言いなさい」

あ、天使ってフレーズは気にいったのね。

第７３話　両者激突（後書き）

戦いはまだまだ続きます。

そして感想待っております☆

第７４話　第2ラウンドは食堂で

「おっ、兎月だ。珍しいな、まだ残ってい……ま、またな」

話しかけてきたクラスメイトが慌てて踵を返して逃げた。そりゃこんな重い空気が漂っているものねー、俺だって逃げたいよ。場所は食堂、放課後だけあって生徒はごくわずかしかいない。楽しげに雑談をしている生徒がいるその中のとあるテーブル、俺に春日に火祭と水川が座っているこのテーブルの空気はもれなく最悪だ。これが最悪と言わずして何が最悪であろうか。ものっすごい空気が重い。

「……」

「……」

誰一人として口を開こうとしない。俺も春日も火祭も水川も机に目を伏せて口を閉ざしたまま。沈黙がさらに沈黙を呼び、不穏な雰囲気がさらなる気まずさを纏う。空気が悪いっつーか空気が痛い。まるで腐臭ガスのようにじりじりと俺の肌を蝕んでいく。気まずさ濃度は最高値にまで膨れ上がっている。冬の池に放り込まれる方がまだいいくらいだ。こんな心臓に悪い場面なんて十六年の人生の中で初めてだ。逃げていいなら今すぐ逃げ出したい。何なら助けを呼びたいくらいだ。おい米太郎、この局面でなぜお前はいない？　ふざけるな、何とかしてくれ。さっきから何十回とルーラを唱えている俺のピンチを察しろ。指を額に添えて出来もしない瞬間移動を何度も試みている友のヘルプに気づけよぉ！

「あ、真美ちゃんだ。何して、ぃ……る……また明日！」

水川の友達が近寄ろうとして、すぐに去っていった辺りで水川が口

を開いてくれた。

「え～っと、恵と桜は一組だよね」

「……うん」

「そうだよ」

「あ……っ、だ、だよね～」

淡々と答える春日と火祭。水川は言葉が途絶した。そして再び訪れる沈黙。み、水川なんとかして。

「え～っと……」

頑張れ水川！　春日と火祭の両方と親しいあなたじゃないとこの場を収めることは出来ないッス。なんとかこの悪い空気を換気してください！

「……き、今日は良い天気だよね～」

水川あぁ！？　俺と同レベルじゃん……って、なんとかしろって目線をこっちに送ってこないで！　助けてとアイコンタクトを送ってくる水川。いやいや俺もお手上げですって。何をどう処理したらいいんだか……というか何が原因でこうなったのかも掌握しきれていないってのに。

「……えっと、とりあえず何かジュースでも買ってくるよ。水川は何がいい？」

「わ、私はオレンジジュースで」

「火祭は？」

「私もオレンジジュース」

「了解。春日は紅茶だよな。買ってきまーす」

早足でテーブルから脱出！　これ以上あの空気は耐えられないわ。ノミの心臓、兎月将也です。ＲＰＧで『にげる』のコマンドがある理由がよく分かったよ。どんな勇猛な勇者パーティでも逃げたい場面ってのは絶対にあるものだ。俺にとってそれは今だと思う！

「兎月、私も手伝うよ」

あ、水川が追ってきた。うっ、なんですかその裏切り者を見る表情は。そして背中を殴らないでよ。

「何をしれっとエスケープしてんのよ。いたたまれないのは私も一緒なんだからね」

「んなこと言われても……あれ以上いたら気まずさで心が潰されてしまうよ。マスクをしなければ五分で肺が腐ってしまうって」

「風の谷には帰らせないよ」

厳しいなおい！

「はぁ……で、どしてあの二人はあんな不機嫌なのさ。仲悪いの？」

「いや、仲悪くはないよ。三人でガールズトークしたこともあるし」

「女子がするトークなんだからガールズトークに決まってんだろ」

「人の揚げ足を取るな。とにかく恵と桜は仲悪くはないの」

「んじゃあ、どうして不機嫌なんだよ？」

俺には見当つきません。二人は初対面ではない。水川によれば仲も悪くない。ならどうしてあの二人は睨み合ったまま互いに威嚇しているんだよ。もう一度言う、俺には見当つきません。

「うーん……原因は兎月なんだけどなー」

俺？　俺が何かした？　これといって思い当たる節はないのですが。

「俺が原因って……そりゃ意味不明ですな」

「鈍感か。ラノベの主人公気取ってんじゃないわよ！」

「だ、誰がラノベ主人公だあぁ！？　俺の右手に幻想殺しは宿ってねーぞ！　主人公要素ないっつーの！」

結局、二人が不機嫌な理由は分からずじまい。ノープランでこのテーブルにカムバック。さーて、ここからどうしましょう？　とりあえずジュースを配る。

「はい、オレンジジュース。春日は紅茶な」

「ありがとう」

「……」

ちゃんとお礼を言う火祭に、何も言わない春日。どっちが愛想良いかって？　火祭に決まってる。

「……ねぇ、まー君」

「はいなんでしょうか火祭」

不意に火祭が話しかけてきた。ん？　そのジト目はなんですか？　俺に向けられてるけど……？

「どうして春日さんには何も聞かないで紅茶を買ってきたの？」

へ？　……あ、さっきのね。そりゃ、

「そりゃ、いつも春日のパシリで買ってるもん。春日の好みくらい把握してますよ」

「……むぅ」

あ、れ？　火祭の不機嫌オーラがさらに膨れ上がった。俺、何かＮＧワード言っちゃいました？　そして春日はどことなく機嫌良くなったみたいだし。もう訳分からん！

「どうして恵のパシリしてるの？」

「俺が春日の下僕だから」

「どうして恵の下僕してるの？」

水川よ、立て続けに質問しないでくれ。

「どうしてって言われても……春日に命令されたから」

「そんなのおかしいよ！」

ぬおっ！？　声を荒げる火祭はさっきと同様、またも春日を睨みつける。対抗して春日も睨み返す。両者の間でバチバチと火花が散る。

「……兎月は下僕」

「下僕じゃない」

「……下僕」

「じゃない！」

おいぃ、また始まったぞ無限ループが！　終わりなき戦いに終止符を打ってよ水川ぁ！　頼みます。

「まあまあ、とにかく兎月はヘタレってことで」

なんだその締め方!?　俺がヘタレって言っただけじゃん。そして二人がまだ睨み合っている。火花が散って俺に降りかかる。めっちゃ痛い。はいはい比喩ですよ。しかし本当に痛い。この空気を打破すべく、俺は何をすればよいのか……とりあえず、がぶ飲みメロンソーダ。

「……はぁ」

ゲップの代わりに溜め息。なんでこんなことになったんだよ……春日と火祭が会ってはいけなかったのだろうか。もう俺には分かりません。プレッシャーのあまりメロンソーダを飲んでも喉が全く潤わない。すぐにカラカラになってしまう。なんで俺がこんな思いをしなくちゃならないのか……なんとなーく、この二人の機嫌が悪いのは俺が原因な気がするからだ。水川もそう言っていた。しかし俺は何もやっていない。身に覚えはない。ないったらない。もし俺のせいで二人が険悪だという明白で確固たる証拠が提出されたなら、俺は年の数だけ土下座してやる。なぜ年の数なのかは知りません！

「と、とりあえず俺達は帰るわ。火祭は図書委員会の仕事頑張ってね」

とにかく確かな原因が分からないのだ。根本的理由が定かでないし、これ以上この二人を接触させるべきじゃない。なんか俺が押し潰されそうです。早々に切り上げなくちゃ！

「俺達？　達って、兎月と恵って家近いの？」

「まあ近いというか同じ通学路だな」

「確かバスだったよね？」
「いや、今日は自転車だな」
「自転車？　……まさか、二人乗りで！？」
「ま、まあそういうことになるのかな？」
やっぱおかしいかな？
「……む～」
う、うおおぉっ！？　またさらに火祭の不機嫌オーラが大きくなった。ぶっすーと頬が膨れた顔をしてるよ……場によっては可愛いと思えただろうが、今はそんな風に思う余裕なんてありはしません。
「兎月、帰るわよ」
春日が立ち上がった。なんか勝ち誇った表情浮かべているように見えるけど……何に勝ったんだよ？
「じゃあ、また明日」
「帰るわよ」
「わ、分かったから。さよならの挨拶くらいさせてよ」
このお嬢様はせっかちなんだから。どんだけ早く家に帰りたいんだか。
「水川、あと頼むわ」
火祭のことは水川に任せて、俺は春日を送り届けないと。春日と二人で食堂から出ていく。ようやくあの場から解放された。時間にしてほんの数分だけど俺には何時間と感じられたね。美女三人といる

ってのになんでこんなにも俺は疲れているんだよ。クラスマッチより今日の放課後の方が疲れたわ。体力的でなく精神的に。安堵の息がつけて身も軽くなった感じだよ。

「……兎月」

学生で賑わう楽しくて憩いの場である、はずの食堂から脱出して春日と二人で下校する。向かうは自転車置き場。その道中、春日が話しかけてきた。

「ん？　何か？」

「……火祭さんとはどういう関係？」

「火祭と？　普通に友達だよ」

「……」

はい？　それがどうし、痛い！？

「不意打ちローキックは痛いんだって……」

今のキックは何なのさ！？　春日を怒らせるような発言はしてないはずなのに……いよいよ無差別殺戮マシーンになったか。あの場で暴れなかったのが唯一の幸運かな。火祭と対決したらエライことになっていただろう。

「……」

ま～た無言モードだよ。あなたさっきから黙る蹴る睨むの三パターンしかないですよ。ボタン三個で操作できるじゃん。簡単設計の無差別殺戮マシーンか。ボタン一つで俺の足を破壊できるなんてあら便利、じゃねーよ！？

「ホントどうしたのよ？　火祭と何かあったの？」
「……はぁ」

……え！？　ま、マジかよ、春日が……春日が溜め息ついたぞ！？　無表情だけど少し落ち込んでいるように見える。なんで溜め息ついたんだ？　つーか溜め息つけるんだね。今まで聞いたことなかった。操作ボタン四個いるじゃん。

「……」
「どしたの急に？」
「……別に」

元気のない沢尻さんだな。気になることでもあったのか。う～ん、ホント分からん。春日が溜め息をつくなんて、それほどに落ち込む出来事があったのかな？　と、そうこうしているうちに自転車置き場へ到着。ここから春日を乗せて家まで送り届けなくてはならない。精神力が底を尽きた状態でも懸命に漕がなくてはならない。春日に怪我を負わせたら兎月家が終焉を迎える。春日父によって海に沈められてしまうだろうね。俺はまだ人生にピリオドを打ちたくない。だから死ぬ気で送迎してやりますよ。可愛い娘と二人乗りだなんてラブラブイベントを死亡フラグにしないために！

「とりあえず乗ろっか」
「……うん」

自転車に跨がり、春日も後ろに座る。キュッと俺の脇に腕をまわす春日。っ、これやっぱムズムズする。そしてニヤニヤしちゃいそう。だって嬉しいんだもの。

「……ねぇ、兎月」
「ん？」
「……私と兎月は……どういう関係？」
春日と俺の関係？　そんなの決まってるでしょ。
「主従関係だろ。春日が主。俺が従者つまり下僕」
「……それだけ？」
はいぃ？　それだけ、って言われましても……他には……友達？
「友達かな？」
「……そ」
「そ」
「……真似しないで」
「痛い痛い！　すいませんでした！」
横っ腹を抓らないでぇ。普通に痛いから！　はぁ、やっぱ春日は春日だな。

第75話　ベジタブルスクランブル2

「真美は知ってたんだ」
「黙っていてごめんね。だけど兎月と恵は付き合っているわけじゃないから」
「でも春日さんも、まー君のこと……だもん」
「だよねぇ。幸い兎月は馬鹿だから気づいてないけど」
「仲良さそうだった……」
「う～ん。佐々木に聞いたんだけど、ちょっと前とかって兎月ずっと元気なかったじゃん？　あれって恵が原因だったんだって」
「春日さんが？」
「恵が結婚するとかで、それを阻止するために一人で恵の家に乗り込んだらしいよ」
「す、すごいね」
「いや馬鹿なんだよ」
「春日さんのためにそこまでするってことは、まー君は春日さんのことを……」
「大丈夫だって！　桜の時も兎月は死に物狂いで不良と戦ってくれたでしょ」
「まー君は優しいから」
「馬鹿なだけだと思うけど」
「……私、春日さんには勝てないよ」
「どうして？」
「だって春日さん可愛いし……」
「桜も可愛いよぉ？　自信持ってよ。ここで諦めちゃ後悔するよ！　これくらいで諦める程度の気持ちなの？」
「そ、そんなことない！」
「なら頑張ってみようよ。大丈夫、桜なら兎月なんて簡単に落とせるって」

「うん……頑張ってみる」
「しっかし、兎月はモテるんだね～」

「どうして将也はモテるんだよ」

昼休み、米太郎が不意にこんなことを呟いた。……はぁ？　何言ってんの。俺がモテるだって？

「ははは、面白い冗談だな。俺がモテる？　そんな色男キャラにジョブチェンジした覚えはない」
「い～や、お前のジョブはモテ男だ。ふざけやがって」
「だったら米太郎も、たまねぎ剣士から色男に転職しろよ」

野菜好きだから米太郎はたまねぎ剣士ってわけだ。

「んな簡単にジョブチェン出来るか。つーか俺は一生たまねぎ戦士として戦い続けるわ！」

ガルーダ戦で渋々、竜騎士にジョブチェンジしちまえ。

「いや……何なの急に？　俺みたいのがモテるはずないだろ」

地味で普通でこれといって特技もない、ごく一般の男子高校生ですけど？　そんな俺がモテ男だなんて、ある意味エッジの効いた悪口と捉えることもできそうだ。嫌味ですかコノヤロー。地味に嫌味で意味不明みたいな？　韻ふんでるよね。

「ちっ……お前、後ろを見ても同じこと言えるか？」

「は、後ろって……お、春日じゃん」

振り返ると春日がこっちに近づいてきていた。米太郎に言われなかったら気づかずにローキックの餌食になっていたことであろう。ナイス米太郎。

「別に春日はお友達であって、お前の言うような関係じゃないって」

「嘘つけよぉい。今から二人でイチャイチャランチタイムだろうが」

米太郎は春日の持っている弁当箱をジト目で見る。確かに最近は春日と二人で食べることが多い。だって春日から来るんだよ。俺が呼んでるわけじゃないしー、って米太郎よ聞いてる？

「別に羨ましくないし～？　勝手に二人で食べれば？　俺は除け者にして二人で食べれば～？　ぷいっ」

これでもかというぐらいに米太郎が拗ねだした。このまま放置して食堂行くのは気が引けるし……しょうがない。

「何を言っているんだい米太郎君。君も一緒に食べようではないか」

「え……いいのかい将也君。僕もご一緒していいのかい？」

「勿論だよ米太郎君」

「うるさい」

「がっ！？」

春日に頭叩かれた。痛い。

「春日、今日はここで食べようぜ」

「……」

「よしオッケーな。椅子持ってくるから」

「おいおい将也？」

あ？　どしたの？

「春日さん何も言ってないだろ。勝手に決めていいのか？」

「いや春日も了承してくれたけど？」

「え？」

驚く米太郎の前で春日は俺の椅子に着席し、静かに弁当箱を開けている。

「何も言わなくても、なんとなく雰囲気で分かるよ」

春日って無表情アンド無口だからな。その場の空気で察するしかないんだよ。

「フィーリングで通じているなんて……熟練夫婦か！」

意味分からん。ツッコミの意味が全然分からん。お前がツッコミをするのはホント不似合だ。適材適所、米太郎はボケたらいいんだよ。

「いいから食べようぜ」

着席し、春日と俺と米の三人で食事を再開しようとしたら、

「ねぇ兎月、一緒に食べよー」

声をかけられた。声の主は水川、そしてその後ろには火祭がいた。二人とも弁当箱を持っている。やっぱ皆さん弁当なのね。弁当派が多いな～、いつもパンな俺はどうしたらいいのやら！

「俺らと？」
「そだよ～」
「やったぜキャッホー！」

米太郎がはしゃぎだしたから米太郎的には全然オッケーなのだろう。しかし隣のお嬢様は違ったようだ。フィーリングで分かる。俺が尋ねる前から春日は嫌々オーラを出している。なんでだよ、火祭と仲悪くはないんだろ？

「駄目、かな……？」

火祭ぃ！　そのうるうる瞳は反則だってばぁ！

「全然構わないよ！　むしろ大歓っ、痛ぅ……だ、大歓迎だよ」

喋っている途中で春日が机の下で蹴ってきた。痛いけど我慢だ。嫌そうな顔に見えたら、火祭達に申し訳ない。

「良かった。じゃ、失礼しま～す」

近くから椅子を持ってきて座る火祭と水川。昼飯パーティーが五人になって食事再開。二つの机を合わせた周りに右回りで俺、火祭、

米太郎、水川、春日の順番で座っている。

「うほ～、こんな嬉しいことはないね！　二年を代表する美女三人と一緒に食事ができるなんて……超ハッピーだぜぇ！」

ハイテンションの米太郎。

「佐々木はいなくても良かったんだけどね」

ボソッと呟く水川。

「まー君っていつもパンだよね」

超絶可愛い笑顔の火祭。

「……」

超絶無表情で俺の横腹を抓ってくる春日。

……何この状況？　このメンバーって俺が一番仲良くさせてもらっているのに、どうしてこんなに居心地悪いんだ？　つーか春日からハンパないオーラを感じる。ナチュラルに抓ってきているけど、いやいや痛いから。

「ねぇ、まー君」

「へ？　ど、どうかした？」

火祭が話しかけてきた。春日よ、火祭が喋る度に抓るのやめてくんない？　まー君って火祭が言う度に抓ってくるけどさぁ……なぜに？

「今度のデートさ、映画を見に行こうと思うんだけど」
「痛たたたああああぁぁっ！」
「ぬぅうあぁあにいぃっ！？　デートぉ！？」

俺の悲鳴は米太郎の叫び声で掻き消された。か、春日ぁ！　五指全部で腹を抓るなよ！　それはもはや抓るじゃなくて、えぐるだぞ！

「おいおい将也ぁ！　俺に内緒でデートとはやってくれるなぁ。ヘイヘイヘイ！　モテモテじゃねーか！　ヘイヘイヘイ！」
「佐々木うるさい。大人しく漬物食べてろ」

水川ぁ……できたら米太郎じゃなくて春日の方をフォローしてくんねぇかな？　この娘、俺の内蔵えぐり出すつもりだよ！？

「ぐぁっ……で、デートね。そういや約束したよね」
「うん。でね、映画でいいかな？」
「うぐぅ……そ、そだね。何か見たいやつでもある？」

か、春日さん！　えぐるから抓るに戻しても痛いのは痛いからね。

「おい将也、見るならおっぱいバ」
「だから佐々木はシャラップ！」
「むぐっ！？」

水川にトマト丸ごと一個を口に押し込まれた米太郎はじたばたと暴れだした。

「うん、今話題の映画なんだけど」
「ああ、あれね。俺も気になっ痛い！？　……き、気になっていたんだよ」

マジで血が出たかと思った。つーか出てるかも。春日、一点集中で抓るのもやめてよ！　尋常じゃない痛みが腹を駆け抜けた。皮膚が痛い、涙が出てくるのをぐっと堪える！

「良かった。じゃあ日曜日に行こうよ。詳しい時間はまたあとでメールするね」
「オッケー」

はぁ、腹が痛い。お腹の中じゃなくて外部破損がハンパない。鋭い痛みが俺を襲い続ける。

「……」
「春日ぁ、とてつもなく痛いんですけど……。やめてくんない？」
「ふん」

や、やっと離してくれた。これ絶対赤くなってるよ。なかなか尾を引く怪我じゃないでしょーか。誰か治癒魔法を唱えてプリーズ。

「兎月って馬鹿だよね～」
「急になんだよ水川」
「別に～？」

うわ、完全に馬鹿にしやがって。頼りの水川がこれだと、また前回みたいに春日と火祭が喧嘩しちゃうって。あなたが頼りなのにー。

「くほ、なんふぇ将也ばっかモふぇんだよ」

米太郎よ、モゴモゴ言ってて聞こえづらいんだけど。

「まー君……あのね？」

急に火祭がしおらしくなった。もじもじみたいな効果音が聞こえてきそうだ。こっちを見つめる瞳に引き込まれそうになる。

「三つ目のお願い……言ってなかったよね」

んん？　……ああ、昨日のやつね。そういや、あと一個残ってたな。

「今言っていいかな？」

「うんいいよ。約束は約束だし」

最長老様の命が尽きる前に叶えないとね。いや、関係ないけど。

「じゃあ……」

昨日と同じで頭なでなでだったらいいなぁ。なんてね。

「昨日みたいにあ、頭を……撫でてくれる、かな……？」

空気が凍った。一瞬、心臓が止まったような気がした。ひ、火祭？

今なんと……！？

「あ、あああ頭ナデナデだとぉ！？」

バンと机を思いきり叩いて米太郎が立ち上がった。弁当箱から漬物がこぼれて床に落ちたがまったく気にしていない。野獣のように唸り、血走った眼がギロリと俺を捉える。今にも襲いかかってきそうな勢いだ。しかしその表情はすぐに穏やかなものへと変化した。優

しく頬笑む米太郎は静かな口調で喋りだした。

「マジか将也……お前がそんな領域にまで登りつめているとは。感服だよ。もうお前と俺とじゃ住む世界が違うようだ。いや、別にお前を非難しているわけではないんだ。そこは勘違いしないでくれ。俺達はいつだって親友だろ？　そういうことじゃなくて単に俺が拗ねているだけさ。そう、ただ俺自身が情けないだけさ。ははっ、なんだか自分が馬鹿みたいだな。いつまでも幼稚な子供みたいに野菜で嬉しそうにはしゃいでいた自分が愚かだよ。目の前の野菜に食いつくだけで俺には何も見えていなかった。そして見ようとしなかった。そうさ、俺は何も考えちゃいなかったんだ。これまで俺は彼女が欲しいと阿呆のようにやかましく喋っていたが、じゃあ俺が何か努力したかと問われたら、それに対する回答を出せずに口ごもるしかないだろう。そうだ、そんな何も成し遂げていない俺なんかに将也を非難する権利もなければ妬むこともしちゃいけない。頭なでなでは将也が勝ち取ったものだ。将也が努力したからだよな。すげぇよ、お前は。むしろ俺は親友として誇りに思うよ。そしてさらに自分が醜く感じてしまう。親友と呼べる一人の友は既に幼いという名の皮を脱ぎ捨てて、男として汚く、しかしどこか魅力的で立派な人参を剥き出していただなんて」

「長いんだってば！　長文過ぎて頭入ってこないし意味不明な内容だし、最後にいたっては訳分からん下ネタだなんて！　だからアンタは黙って永久に野菜をかじってろ！」

水川怒涛のツッコミと野菜を詰め込まれて米太郎は椅子から転げ落ちた。

「ねぇ……駄目かな？」

火祭よ……再三言ってきたが、その上目遣いは反則です。つーか断

るわけないじゃん。寧ろ大歓迎っ。

「全然。喜んでや……らさせてもらいます？」

「なんで疑問形？」

水川ぁ、俺の隣を見たら分かるよ。春日がこっちをすっげえ睨んでくるんですよ！　視線がここまで痛く感じたのは初めてだ。矢で射抜かれた気分だ。恋の矢じゃなくて、もうただの殺傷力抜群の矢ですよ。鮮血が溢れだすイメージが！

「まー君？」

既に火祭は頭を俺の方に向けている。あとは俺が手を伸ばすだけ。しかし俺は蛇に睨まれた蛙よろしく、筋一本も動かせない状態になっている。春日のローキックが怖くてビクビクしちゃうのです。な、何この板挟み状態は？　うー、どうしたらいいのですか！？

「……まー君」

火祭の物欲しげな声。それが耳に届き、うるうる上目使いの瞳がこちらを覗いた次の瞬間には、大脳の情報処理なしで素早く無意識に俺は手を伸ばしていた。手のひらに伝わる手触りの良い心地好い感触、そして柔らかさ。

「ん……」

こそばゆそうな声を漏らす火祭。その表情はトロンと崩れており、こっちもニヤニヤとしてしまう。心地好い髪触り、サラサラでもありフンワリともしている髪の毛に心奪われてしまう。ずっとこうしていたい。しかし幸福は長くは続かなかった。

「うぐあっ！？」

左足を襲ったのはこれまでに経験したことのない痛み。まるで象に踏みつけられたようにグシャリと鳴ってはいけない音が聞こえた気がした。足の甲から緊急信号が伝わってきて、頭の中は幸せ桃色から危険を知らせる真っ赤なランプに変化。あ、足が……足がぁ！？

「ま、まー君？」

痛みで涙が溜まった目を開くことが出来ず、驚いた表情をしているであろう火祭の顔を見ることも叶わない。ただその場で悶えるしかなかった。足が痛い。それこそ本当にガチで折れたと思えるくらいに足は激痛で痙攣を起こしていた。

「か、春日……今までで一番痛いです」

「ふん」

なんでノーモーションであんな威力のある踏みつけができるんだよ……人間凶器かよ。

第７６話　引退する部長と新部長の誕生

天国と地獄がコラボしたような混沌ランチタイムを終え、あっという間に放課後。フラフラと倒れそうになりながらも懸命に足を動かし、部室棟に到着。これまたフラフラと倒れそうになりながらも階段を登り終えて、扉を開く。長テーブルとパイプ椅子が置かれた質素で馴染み深い部室。そこに他のボランティア部はメンバーがもう集まっていた。とりあえず目の前の椅子に腰掛ける。

「あれ？　兎月先輩なんだか疲れた表情していますよ。まだ部活始まってないのにだらしないですね」

向かい側のテーブルで一年の後輩、眼鏡女子の矢野が馬鹿にしたようにペラペラと喋る。うるさい、本当に疲れたんだよ。

「あ。山倉先輩、このモンスター足を引きずってます」

「よっしゃ！　俺が閃光玉を投げるから、お前はシビレ罠を仕掛けろ！　捕獲麻酔玉の準備もしっかりな！」

「了解です」

今日もイキイキと狩りに没頭中の声デカ山倉と一年男子部員二人。楽しそうだなおい。

「つーか水川よ、夏の活動は決まったのに今から何を話し合うんだよ」

「もうすぐ分かるよ」

隣の水川はただそれだけ言って正面の矢野とお喋りしだした。一体何なんだか。呼び出した水川がこの調子なので、何をするのか分か

らない。ぼーっとして時間を浪費することに。そして部員各々が有意義であろう過ごし方をして二十分ちょい、いきなり扉が力強く開かれた。

「おらぁ！　お前ら何やってるんだ！」

和やかな部屋に怒りの咆哮がなだれ込む。その声に人一倍敏感に反応した山倉達は慌ててゲーム機を隠す。もう遅いけどな。教師に見つかったかと思いきや、

「はっはっはっ、どうだビックリしただろー？」

入口に立っていたのは俺らの部長、駒野先輩だった。イタズラ大成功みたいな満足げな表情を浮かべている。

「ちょ……マジで心臓止まりそうでした！　勘弁してくださいよ～部長！」

山倉は安堵したらしく、また笑顔に戻ってポケットからゲーム機を取り出している。そこから聞こえるのはクエスト失敗の音楽。

「ぬあぁぁぁっ！？」

三人が同時に悶絶した叫声を上げ苦悶に顔を歪ませる。ドンマイ。

「ハンター達はほっといて。悪いな、呼んだ俺が遅れてしまって」

「え、駒野先輩が呼んだんですか？」

そりゃまた珍しい。三年生の駒野先輩は受験勉強で忙しいから、なかなかこっちには顔を出さない。その先輩が皆を呼び集めるなんて、

何かあったのだろうか。

「とりあえず皆座ってくれ。ちょいと大事な話がある」

駒野先輩は静かに長テーブルの前に立つ。その姿は何か決意した面持ちだった。ただならぬ空気感に山倉も黙って席に座る。部員全員がじっと駒野先輩を見つめ、じっと言葉を待つ。

「この時期に俺が皆を集めた理由は察しのいい奴なら気づいていると思う。まー、俺の口から言わせてくれ。……もうすぐで三年の俺は部活引退だ」

七月の上旬、夏休みを控えたこの時期は三年生最後の大会が始まる。けどボランティア部はそのような大会の類はない。もし大会が開催されたらどんな感じだろうか？　審査員がボランティア活動を見て点数をつけるとか？　行動力、統率力、気持ち、効率性とかを五段階評価みたいな？

閑話休題っと。つまりボランティア部とか文芸系の部活は正確な引退の線引きがされていない。この辺りのタイミングかなー、みたいに自分達から申し出る感じだ。そして我らの部の長、駒野先輩は今日その決意をしたのだ。

「部の発足は一年前、二年生の俺が一人で立ち上げた。中途半端に二年生になって部を作っちゃってさ。同級生で入る奴はおらず、新入生も入って来ないのではないかとすごく不安だった。けど……兎月、水川、山倉。この三人が部室の扉を叩いてくれた。こうして俺を中心とするボランティア部は始まった」

駒野先輩はここで言葉を切り、ふうっと一呼吸入れる。

「最初は分からないことだらけだった。一年生の三人が戸惑うのは当たり前なのに、先輩の俺も戸惑ってた。本当に情けない先輩だったと思う。教えることより、教えられることの方が多かった。こんな頼りない先輩だったけど……ここまでついて来てくれて、ありがとうな」

駒野先輩は小さく微笑むとくるりと背を向ける。その背中はいつもより大きく感じた。部長として、皆をまとめる一人の先輩として、その姿は一段と強く見えた。誰も口を開かない。ただじっと先輩の言葉を聞くことだけに集中している。

「そしてこれからはお前達が中心となって部を作り上げていくんだ。最後に先輩として一つ頼むとするなら……一つだけ贅沢を言わせてもらうなら、俺がこの部を作って良かったなと思えるような、そんな立派な部にしてくれ」

駒野先輩は背を向けたまま、上を見上げる。天井しか見えないはずなのに、それはまるで遥か高い空を見上げているようだった。

「……勿論ですよ先輩」

山倉が静かに口を開き、立ち上がる。

「私達が立派にしてみせます。先輩に恥じないような立派な部にしてみせます……ぐすっ」

うっすら瞳に涙を溜めた水川も立ち上がる。ふ、まったくだな。

「駒野先輩、俺達はあなたにいつも助けられっぱなしでした。生意気でしょうもない後輩です。そんな俺達に出来ることなんてたかが

知れています。この部をより良いものにするなんて無理です。……けど、ここにはそんな頼りない俺達を頼りにする後輩がいます。こいつらと一緒にならやれる気がします。助け合い、教え合い、協力し合いって頑張っていけそうです。先輩と俺達がそうであったように、今度は俺達とこいつらで部を作り上げていきます。先輩がこの部を作って良かったと胸張って誇れるように守り続けていきますから」

「山倉……水川……兎月……！」

先輩が振り返る。感涙に目を滲ませ、俺達を一人ずつ見ていく。そして、

「うし、じゃあ頼むな。それじゃ次の部長決めるぞー」

「「「軽っ！？」」」

感動シリアスムードが一気に壊れた。長文をベラベラとカッコつけて言った俺は何だったんだよ！？　いつもの調子に戻った駒野先輩は軽やかに椅子に座る。そのいつものヘラヘラ顔に俺達の感動の涙も渇いてしまった。

「部長だけどなー、皆が信頼できるような奴にしたいと思う」

次期部長か……となると二年生の俺と水川と山倉のうち誰かだよな。

「ぶっちゃけ言うとー、次期部長は兎月だなって春ぐらいから決めてたんだ。だが……」

ええ！？　マジすか、俺ですか！？　そんな部長だなんてプレッシャーですよ。でも俺が適任だと言うなら、喜んで務めましょう！

「し、しょうがないですね。めんどくさいっすけど、ちょっくら頑張ってみ……ん？　駒野先輩？　最後に、だが……って言いました？」

「ああ。だが……最近の兎月のだらし無さはひどかった。夏の活動についての話し合いにもろくに参加せず四六時中ぼーっとしやがって。こんな奴に部長は務まらない。ってわけで水川、お前が部長な」

え？

「私ですか？」

あれ？

「ああ、そうだ。お前ならこの部を任せられる。皆を頼んだぞ」

あれれ？

「これからもよろしくな水川部長！」

「頼りにしてます部長っ」

あれれれ？　水川部長？　俺は？　兎月部長は何処に？

「そして兎月ぃ」

水川の部長就任に盛り上がる山倉達と違って、駒野先輩は俺の方へゆらりと、おかしなオーラを纏ってやって来た。あれれれ？　何これ？

「さっきも言ったが、お前のここ最近の態度は目に余るものがあった。引退する前に先輩として最後の仕事を作ってくれてありがとな

ー」
「し、仕事って？」
「だらし無い後輩を厳しく指導する仕事だよ」
熊みたいな勢いで駒野先輩の右手が俺の頭をわしづかみ。
「アイアンクロー！」
「痛い痛い！　マジで痛いですって痛たたたたたたたぁ！」
さっきカッコつけて長文をベラベラ喋ってた自分が超恥ずいです…。

第77話　夏休みスタート

暑い……。今の俺の口からは、その言葉と喘ぎ声しか出てこないです。流水の如く溢れ出る汗は呼吸する度に滴となって地面へと落ちていく。遥か上空で大スター気取りで熱光線を放ち続ける太陽。それに加えて、地面のアスファルトの照り返しによる熱光線二重攻撃が体力を急激に奪っていく。目に入りそうになる汗がとても気持ち悪い。間脳視床下部とか交感神経といかいうものが発汗作用を促しているらしいが、脱水症を引き起こすところまでいくと、それはやりすぎだってわけで。しかし俺は倒れるわけにはいかない。後ろに座る春日を無事に学校まで送り届けなければならないのだから。それまで俺はペダルを漕ぎ続けなければならない。汗で滲むハンドルを握り続けなければならない。

「ぜぇ、ぜぇ……」

良い天気だなー、と浮かれていたつい最近の自分にパイルドライバーをぶち込んでやりたい。まさに今日こそが猛暑日、夏の到来なのだ。先週なんかと比べものにならないくらいに暑い。炎天下とはよく言ったものだ。まさに文字通り、炎の下にいる気分だ。そんな灼熱の通学路を一人のお嬢様を乗せて自転車を走らせる俺はすごく偉いと思う。よく頑張ってるね、と自分で自分を褒めてやりたい。人はそれを自画自賛と呼ぶ。

「ぜぇ……しんどい」

「早く行って」

しかし後ろの春日お嬢様はまったく褒めてくれない。応援もなければ、早く行けとの催促。可愛い女子と自転車で仲良く登校？　そん

なのくだらない幻想じゃないか。現に今の俺はちっとも嬉しくない。キツくてしんどくてもう倒れそうだ。しかし倒れるわけにはいかない。本日二回目になるが、俺は春日を無事に送り届けなければならないのだ。

「はぁ、はぁ……到着」

やっとの思いで学校の門にまで到着。門は門でもここは裏門といった場所だ。正門とは真逆に位置する。正門へと続く坂道は非常にしんどいし人も多いので注目を浴びやすい。それに春日ともっと一緒にいたいという俺のささやかな願いから、こっちの裏門から登校することにしたのだ。激しいアップダウンはなくて道は平坦だが距離は通常よりかなり長くなる。だからこんな猛暑日はかえってこっちのルートの方がキツイ。それ故に以前の浅はかな自分にパイルドライバーをぶち込んでやりたいのだ。

「うあー、疲れた」
「早く行きなさい」

僅かな休息も許さないスパルタお嬢様。こんな悪女のために俺は汗水垂らして朝から頑張っているのだ。なぜなら俺はこいつの下僕だから。俺の父さんが勤める会社のトップ、いわゆる社長がなんと春日の父親なのだ。春日が父親に何か良からぬことを告げ口したら平社員の俺の父さんは即刻クビ。うちの家族は路頭に迷うことになってしまう。だから俺は春日に逆らえない。何とも情けない話なのさ。

そしてもう一つ、

「ちょっと休ませろよ」
「早く行きなさい」
「はい」

……俺は春日の命令に大人しく従順してしまうのだ。最初一回目は抵抗出来るが、二回目には必ず了承してしまう。俺の意思云々は関係なしに。春日曰く、俺は犬だからとのこと。主人に忠実な犬のように命令に従う。それが俺の性質らしい。ふざけるなと大声で叫びたい。しかし叫ぶと春日から殴られそうなので、口は呼吸を整えることに使う。俺はヘタレですから。

「ふぅ……」

自転車置き場で自転車を留めて、鍵をかける。自転車から降りた春日は何も言わずスタスタと校舎へ歩きだしていた。せめて、ありがとうとか一言でいいから何か言ってほしかったね。これじゃ俺が報われないわ。

「はぁ……よく頑張ったよ俺」

自分で自分を褒める。人はそれを自画自賛と呼ぶ。……トイレで下のシャツ替えるか……はぁ。

「……兎月」
「はい？」

んあ？　どうかしましたか。下僕はもうクタクタでしばしの回復する時間を頂きたい所存です。だから先に教室に行っててくださいな。

「……日曜日、デートに行ったの？」

へ？　なんで春日がそれを知って……ああ、そういやデートの約束は昼休みにしていてその場に春日もいたっけ。うんそうだったね。

そしてデートとは、まさに昨日のこと。なんと火祭とデートしてきたのだ！　はいこれ超すごいこと。火祭一つ目の願い事として俺とのデートを提案してきたのだ。なんて良い娘なのだろうか。ということで火祭と二人で映画館に行ってきたのだ。もうね……すげー楽しかった。一緒に映画観て、お昼も仲良くランチを取ってその後は買い物したりと……俺の人生で最高のデートでした！　その日の夜はずっとベッドでニヤニヤしていたくらいに。今は汗まみれでダウン寸前ですが。

「ああ、うん、まあ行ったよ。それがどうかしたの？」

「……」

……？　なんだよ、また無言リターンエースです、かぁ！？　ぐうぅぅ、痛い！

「な、なんで蹴ってきたの……」

こちらへ戻ってきたと思ったら、いきなりのキック攻撃。痛い、そりゃもう痛い。こちとら体力はもう尽きそうだってのに。追い打ちをかけるかのように蹴ってきた。い、意味が分からない。

「……」

何も返さず、ただ俺を睨んで春日はまた歩き出した。……駄目だ、理解不能。意味不明だ。なぜ蹴ってきたのか、なぜ春日が機嫌が悪そうなのか、なぜ俺は朝から地面に倒れているのか、なぜ朝から死にかけているのか。どれもこれも分からないことだらけ。誰か教えてくれ。ベストアンサーを求む。

「……とにかく将也よ、お前はよく頑張った」

それを自画自賛と呼……いやもういいや。さすがにくどいよ。はぁ、しんどい。

トイレで替えのシャツに着替えて、冷却スプレー的なやつで熱く火照った体を冷やす。なんか卑猥な表現ですいません。タオルで汗も拭いたことだし、急いで教室へ向かう。早くクーラーで冷えた教室でのんびりしたいものだ。教室の扉をガラリと開ける。途端に俺をひんやり包んでくれる冷房の風。そして、

「キャッホーイ！　将也ぁ、おはようござーませぃ！」

変な挨拶で米太郎が迎えてくれた。いつも通り、鬱陶しいことこの上ない。

『たたかう』
『じゅもん』
『アイテム』
『にげる』

頭に浮かんだのは四つのコマンド。こんな馬鹿に体力は使いたくな

い。迷わず『にげる』を選択。

「おいおい将也、無視するなよ。この～」

しかし回りこまれてしまった。ふざけるな、1ターン返しやがれ。ムカついたので思わず『たたかう』のコマンドを押してしまった。

「ぐふっ」

右フックが見事に顔面に決まった。拳に伝わる心地好い感触。ざまぁ。さて、今日も一日頑張りますか。

「待てよ将也、その程度で俺は倒れないぜ」

「いや頼むから倒れてくれよ。頭下げるから」

「とか言いつつ～？」

ちっ、朝からウザ米モード全開か。殺意が沸いてきたぞ。なかなかのウザさ。中級レベルといったところだ。上級になると、クラス全体の士気に影響を及ぼしてしまう。それほどに米太郎はウザいのだ。頼むから普通の太郎になってくれ。佐々木太郎ってなんとも平凡な名前だよね。大人しそうな生徒だ。そうなってくれないかな。米は消えてくれよ。ニコ風に言うとしたら、コメ自重しろ。

「はぁ……」

「おいおい、どしたのよ～？　もっと明るくいこーぜ。まー君っ」

ニヤニヤと汚らしい笑みでウインクしながら、まー君と呼びやがった。

『たたかう』

「おらぁ！」
「どみにくぅ！？」

どこの少尉だそいつは。変な悲鳴を上げるな気持ち悪い。

「ホント朝からウゼーな。はいはい、おはよう米太郎君。朝からハイテンションだね」
「対照的に将也はテンション低いな。下げるのはクーラーの設定温度だけでいいんだぜ？」

上手くない。米太郎はドヤ顔しているが全く上手くない。

「もっとアゲアゲでいこうぜ。なんたって今日から……夏休みだぞ！　イヤッホーイ！」

そうなのだ。この馬鹿が言う通り、今日から夏休みなのだ。いやまあ正確には先週から始まっているけど、なんか今日からって感じなんです。その辺はこう、なんて言うか、あの……フィーリングでなんとなくなんですよ。

「英語で言うとサマーバケーションだな」
「英語で言わなくていいけどな」

夏休み。こんなにも耳くすぐる響きの良い言葉はそうそうない。台風で休校ぐらい嬉しい言葉です。そりゃテンション上げたいところ……だが、

「夏休みって言っても普通に補習があるからな」

一応うちの高校は進学校ということなので、補習という名の嫌がらせがあるのだ。前期と後期に分けて補習は行われて、前期補習は今月末まで続く。さらに大量の宿題を出しやがるという悪徳ぶり。テンション上げたくても上がらんわ！　ってわけです。若手芸人風に言うなら、ちょっと勘弁してくださいよ～。辛辣に口悪く言うなら、死ねよ校長。

「補習って午前中までだろ。昼から遊べるからいいじゃんか」

「米太郎……去年を忘れたか」

去年の夏休み、ウキウキワクワクと遊びまくった結果、宿題をまったく終わらせておらず、最終日に泣くハメになった。あの忌まわしい記憶が蘇ってくる。泣きながらシャーペンを握っていたなぁ。そして今年も悪魔のプレゼントは健在だ。先週の終業式にドッサリもらいましたよ。まず英語の長文プリントと文法プリントが合わせて八枚。数学は学校オリジナル問題集、さらに化学と物理が詰まった鬼畜プリント集。加えて漢文の句法暗記ノート。補習中に小テストするらしい。しかも夏休み中に新たな宿題の追加もあるとか……どんだけぇ～！？

「確かに去年の八月三十一日、あの日は地獄だった。山のような量の宿題を捌くことが出来ず、担任にボロクソ怒られたよな。もうあんな辛酸は味わいたくない。それは俺も同じだ。故に今回は宿題をいち早く終わらせる秘策を用意した」

ニヤリと笑う米太郎。気持ち悪いが今は気にしないでおく。

「何だよ秘策って？」

「ま、それは放課後にな」

そんなわけでチャイムが鳴り、補習一日目の開幕。通常なら五十分授業なのに補習の時は一時間という理不尽さ。十分しか違わないとはいえ、その差は大きい。体感時間だと余計に長く感じる。

「ここで求める軌跡だが、ＡＰ＝２ＢＰより、方程式を作ることで……」

「この文章でのｔｏは不定詞の副詞的用法であり、文章に合うように訳すと……」

「えー、義理の妹と実兄の義人が付き合っていると気づいてしまった雄太の心情だが、六十八行目に書いてあるように、ちょっと兄が羨ましかったと述べてある。これより、義人と雄太は兄弟揃って義妹萌えだという……」

「まだ補習は始まったばっかりだ。気を抜かないように」

数学、英語、国語、ホームルームと終えて今は放課後。初日から言わせてもらうけど、超しんどいです。相変わらず数学と英語はまったく理解出来ないし国語に至っては理解しようとも思わない。あんな文章がセンター試験に出てもみろ。みんな呆れて勉強やめるわ。『僕と兄と義妹　～密接なトライアングル～』と題名うたれたページを勢いよく閉じて鞄に押しこんでやった。もう明日から国語の授業を受けれる自信がない。

「将也、行くぞ」

授業のほとんどを睡眠で過ごしていた米太郎が俺を呼ぶ。

「行くぞってどこにだよ」

確か、宿題を終わらせる秘策だっけ？

「ふっ、それは……一組だ」

一組？

隣のクラス、一組の教室の前に俺と米太郎は立っている。やべ、廊下暑い。教室との温度差がとんでもない。

「どうして一組なんだ？」

「あの殺人的な量の宿題をこなすには協力者が必要だ。頭が良くて面倒見も良く、優しくて可愛い女の子。その条件を満たす人物がいるのは一組なのさ」

別に可愛い必要なくね？　まあとりあえず米太郎の言いたいことは分かった。

「つまり、頭の良い奴に宿題を手伝ってもらうってわけね」

「ご明察だ、将也きゅん」

「きゅん言うな。それなら水川でいいじゃん」

わざわざ一組に来なくともクラスメイトの水川を頼ればいいことじゃないか。

「水川か……。できたら火祭がいいんだけどなぁ」

うわ、本音がポロリと出ちゃったよ。単純にお前が火祭に気があるだけじゃねーか。

「それで火祭に頼むわけね。つーかそれなら水川に頼んで、そっからの流れで火祭にも協力してもらったらいいだろ？」

「……そ、そんなついでみたいな感じは駄目だろ」

そりゃそうだ、って顔してるぞ。お前やっぱ馬鹿だろ。

「そ、そんな計算高いことをするなんて、将也はずる賢い野郎だな！」

うわ、自分の失敗なのに俺を使って塗り消しやがった。ずる賢いのはどっちだ。

「じゃあ俺は水川に頼むから、お前は火祭に頼めよ」

「ま、待って将也ぁ！　お前がいないと駄目なんだよ」

「別に俺がいなくても大丈夫だろ」

「お前がいなくて火祭が了承するかね？　俺一人で頼みに行っても断られてしまうっての。だからお前の助けがいるの。お前は餌なんだよ」

「じゃあな」

「待って待って待ってぇ！　ごめん言いすぎた。俺が馬鹿だった。将也がいないと駄目なんだって！」

ころころ態度変えやがって、見苦しいぞ。そして足にしがみつくな。米太郎が足を掴んで離そうとしない。やめて暑苦しいから。くそ、離せ。暑いんだっての。見苦しくて暑苦しくてホントこいつは苦しいことだらけだな。こんな友達を持って俺は心苦しい。

「行かないで……私、あなたがいないと生きていけないの」
「どんな昼ドラだ。いいから離れろ、鬱陶しいから」
「行かないでぇ」
「はいはい、分かったから。じゃあ入ろうぜ」

米太郎と廊下でモメてもしょうがない。俺も宿題を手伝ってくれる助っ人は欲しいもの。つーわけで一組の教室の扉に手をかける。

第78話　まさかの第3ラウンドへ突入

「火っ祭ー。ちょっとお時間いいかなー？」

ズカズカと一組の教室に入っていく米太郎。お目当ての火祭は自分の席で本を読んでいた。本が好きなんだよね。俺もたまにオススメの本とか紹介してもらっている。難しいのは読めてないけど。

「佐々木君？」

本を閉じて米太郎に視線を合わせる火祭。不思議そうに見つめている。そりゃまあいきなり米太郎がやって来たのだ。普通なら警戒レベルを一段階上げてもいいくらいだが、そこはさすがの火祭ちゃん。持前の気品の良さと愛想さで米太郎にも動じず自然と接してあげている。つーかなんで俺は廊下で待機なの？　俺は後から登場するのが米太郎プランらしい。何を出し惜しみしているのやら。俺が必要じゃなかったのか。よく分からん。

「えっと、どうかしたの？」

「ちょっと火祭に頼みたいことがあってさー」

米太郎のデカイ態度にも嫌な顔一つもせずにちゃんと聞く火祭。偉いよね。けどさ、無暗に誰にでも心開くのは良くないと思う。世の中良い人ばかりじゃないからさ。例えば米太郎とか……はっ、火祭が危ない！？

「私に？　私なんかより真美に頼んだ方がいいと思うよ」

謙虚にそしてやんわりと拒否の意思表示を示した火祭。今は本が読

みたいから適当にあしらっているのか、または米太郎のことが嫌いなのか。俺的には後者であってほしい。お願いだから。

「いやいや火祭がいいんだよ。なー、将也」

早くこっち来いよ的な手招きをする米太郎。分かってるよ、行けばいいんでしょ。二組の生徒Ａに引き続いて二組の生徒Ｂの入室です。やはり他クラスだけあって、うちの教室とはなんとなく雰囲気が違う。一組って後ろの黒板も使って授業しているんだー、すごいな。とまあ思いつつ火祭の席へと向かう。

「まー君？」

バッと俺の方を振り返る火祭。俺がいることにそんな驚くかね。何やら嬉しげな表情ですけど……あ、そりゃ米太郎なんかよりは俺の方が印象良いよね。それには俺も自信持って言えますよ。

「おい将也、ここよろしく」

火祭の傍まで近づくと米太郎が耳打ちしてきた。要するに誠意をこめて頼めばいいんだろ？　はいはい、分かったからライスは後ろに下がってろ。

「えっと、昨日は楽しかったね」

まずは軽くお話を。昨日の幸せデートを振り返りましょう！

「私も楽しかったよっ。また一緒に行こうね」

なんと嬉しいリアクション。思わずニヤけそうになったけど、そこ

はなんとか平静を装う。爽やかに笑みを返して本題に入ることに。

「実は火祭に頼みたいことがあってさ」

「うん！　任せて」

さっきとは打って変わって快く了承してくれた火祭。さっきは断ったのに。どうやらこれは米太郎のことが嫌いという線が濃厚になってきたな。ドンマイだよ米太郎君。

「米太郎、お前嫌われてんじゃねぇの？」

ボソッと囁く。

「違う。将也が……なんだよ」

すると意味不明な答えが返ってきた。俺？　俺が嫌われている？　そ、そんなわけないだろ。何言ってんだよ。グーで殴ってやろうか！

「それで頼み事って何？」

「あぁ、そうだね。実はさ、夏休みの宿だ」

「兎月」

「い……春日？」

俺の言葉を遮るように春日が割り込んでいた。横を振り向けばそこには春日。いつの間に……気配がしなかったぞ。いつものつり目でこちらを見つめる春日。そっか、春日も一組だから一組の教室にいて当たり前か。とりあえず春日との間に米太郎を挟んでおく。蹴られたくないので。

「……どうして一組にいるの？」

半歩下げていた足を戻す春日。蹴る気満々だったのがバレバレだぞ。でも蹴らなかった。米太郎シールドは意外と役に立ちそうだ。今後も使っていこう。

「火祭に用事があってさ。もうちょっとだけ待っていて」

帰りも自転車で春日を家まで送り届けないといけないからな。早く済ませなくては。このお嬢様は気が短い。暴れられたら敵わない。

「でさ、火まつ、り……？」

「む……」

な、なんすかその不機嫌そうな顔は。さっきまでにこやかだったじゃんか。さては米太郎、何かやらかしたな。ホント空気の読めない奴め。

「言っとくけど、悪いのは将也だからな」

俺の心を読んだかのように小声で囁く米太郎。俺？　俺が何かしたのか……覚えがないけど。

そうだった春日さんもいたんだ、とボソボソ呟く米太郎はほっといて。再び交渉しなくては。

「えっと、夏休みの宿題なんだけど、よかったら手伝ってくれないかな～？　なんて」

「宿題？」

ムッとした表情を少しだけ緩めた火祭。そして一転、パッと明るい笑顔になって口を開く。おっ、これは引き受けてくれそうな感じ。

やったね！

「うん、私で良かっ」
「待って」
「たら……？」

火祭の言葉を遮ったのはまたもや春日。

「こら春日、人が話しているのを邪魔しちゃいけないだろ。めっ」

普段ならここでローキックが襲ってくるが、米太郎シールドのおかげで春日は蹴ってこようとしない。ホント助かる。つーか春日はいきなりどうしたのだろうか。春日が話に割り込んでくるなんて珍しい。火祭を見つめる春日。ちょっとばかし沈黙が流れた。

「……春日さん？」

驚いた表情を浮かべる火祭を無視するかのように視線をこっちに向ける春日。うはっ、春日さんと目が合った！　と喜ぶ米太郎。

「……ねえ」
「俺？」

コクリと頷く春日。

「……夏休みの宿題……手伝ってあげる」

……え？　今、なんて……？

「それって春日が、ってこと？」

またコクリと頷く春日。春日が手伝ってくれる……ふえぇ？　確かに春日は頭良いし、教え方も上手だ。宿題を手伝ってくれる助っ人としては申し分ない。けどさ……えっと、なんで？　どうして急に手伝ってくれるとか言ってくれたのだろうか？

「待って！」

うおっ、火祭？　突然立ち上がるからビックリしたよ。その表情はムッどころかムムムッといった感じに不機嫌そうだった。今日はやけに感情の入れ代わりが激しくね？　誰のせいだよ。

「お前だよ」

だからなんで米太郎は心の中を読めるんだよ。スネイプ先生に開心術を教えてもらったのか？

「まー君は私に頼んできた。だから私が手伝う。だから春日さんは手伝わなくていいよ」

立ち上がって春日を真っ直ぐ見つめる火祭。喧嘩を売っているかのような言い方で言葉を放つ。その瞬間、どこからかゴングの音が聞こえた気がした。へ？

「……私が手伝う」

「駄目、私が手伝う！」

え、ちょ……どしたのよ二人とも？　火花散ってるよ!?　睨み合って固まる春日と火祭。こ、こんなことが先週もあったような……。

「私が手伝う」
「駄目っ、私が」

なんか春日と火祭で変なバトル始まっちゃったよ。先週といい、この二人は会うとこうやって睨み合うんだよな……どうしてだろ？

「だから将也のせいだっての」
「だから開心術はやめい」

うわー、どんどん空気が悪くなっているし。バチバチと火花は威力を増すばかり。このままではかなり危険だ。まずはこの二人を落ち着かせないと。

「まあまあ、二人とも落ち着いて」
「春日さんは知らないと思うけど、まー君はすごい馬鹿だからね。教えるのは容易じゃないんだから」

火祭？　ば、馬鹿って言いました？

「知ってる。兎月は馬鹿」

春日！？　はっきりと馬鹿って言ったね！？　普通に傷つくわ！　つーか俺が馬鹿かどうかは関係ないと思います！

「……そもそも春日さんはまー君に勉強教えたことないでしょ。私はあるから。どう教えたらいいか熟知しているんだよ。佐々木君、そうだよね」
「まあそうだな。将也の家で勉強会したよなぁ」

米太郎の言葉にフフンと胸を張る火祭。どうだと言わんばかりに勝

ち誇った表情を浮かべている。

「……私もある」

「え？」

「私も兎月に勉強教えたことある」

そうでしょ、と目で伝えてくる春日。そうなの！？　と目で尋ねてくる火祭。二つの視線が俺に集中する。びびった。

「う、うんそうだな。春日ともテスト勉強したことあるぞ」

「二人きりで？」

「へ？」

「二人きりで！？」

火祭、なんでそこを強調して言うの？　そしてなぜか俺は緊張気味だし。落ち着け俺、居心地悪いとか思わなくていいって。俺は何も悪いことはしていない……はず。だから素直に事実を言えばいいんだよ。

「そ、そうだけど」

「……むぅ」

頬を膨らませてまたも不機嫌な顔に戻った火祭。どうやらお怒りのようだ。さっきからコロコロと表情が変わる。そんな火祭も可愛いと思ったのは内緒です。

「春日さんと二人きりでか～。そいつぁ羨ましいな」

……なんとなくだけど今の米太郎の発言が火に油を注いだような……。

「……むむぅ」

さらに不機嫌オーラが増した火祭。ヤバ、米太郎シールドは火祭に向けた方がいいかもしれない。春日は何やら機嫌が良いみたいだし。

「なら……今度は私がまー君と二人で勉強する」

すると火祭が俺の手を握ってきたかと思いきや、ぐいっと引っ張ってきた。えぇ!?

「火祭!?」

が、がっちり掴まれたんですけど!?　ドキドキしちゃうんですけどぉ!　火祭の手、柔らかいし暖かいや……。さらに火祭と急接近!　二人でカップルみたいに並んでいる。フワッと良い香りがしちゃいました!　うおおおぉ、昨日のデートでもこんなに接近していないのに!　何この幸せイベントは!?

「……兎月」

……はっ!?　う、浮かれすぎた!　興奮していた心臓が一気に萎縮する。クーラーよりも冷たく、そして鋭く突き刺さる声のした方に視線を向ければ……春日が尋常じゃない鬼オーラを纏っていた。ヤバい、春日がお怒りだ。米太郎シールドなしの無防備状態……う、ああ、春日に殺されちゃう。目を閉じて攻撃に備えて身構える。骨の一、二本くれてやる。

「……」

うえ……？　あ、あの……春日さん？　いつものあなたならローキックをぶち込んでくるのでは？　なぜ……なぜ俺の手を握る！？　ぎゅっと手を握ってきた春日。暖かさが手のひら一杯に広がる……うお、心奪われてしまった。って、そうじゃない。よく自分を観察してみろ。右手は火祭、左手は春日に握られているんだぞ。こんな美女二人にさ。俺はもう……何なんだろう！？

「むぅ……」

「……」

俺を挟んで再び睨み合う火祭と春日。ちょ……これ何？　俺はただ宿題を手伝ってほしかっただけなのに。どうしてこうなった？　どこで話がズレた！？

「おい将也。お前って何なんだよ」

俺が聞きたいわ！

第79話　宿題を早めに終わらせるなんてマジ尊敬

「で、結局皆ですることになったわけね」
「そーゆーわけだ。なので水川っちも参加してくれ」
「人をたまごっちみたいに言うな」

あのままだと埒があかないので、米太郎に助けを求めた。すると、

「皆ですればいいじゃん」

とナイスアイデアを出してくれて、まーるく収まった。なんとか収めた、と言った方が正確なのだが。つーことで俺と米太郎に春日と火祭、そして水川の計五人で夏休みの宿題殲滅部隊を結成。皆で協力していち早く宿題を終わらせようではないか！　てことで今日から早速開始します。恐ろしいくらい早いスタートダッシュだよ。

「にしても……兎月も大変だねぇ」

何が？　と言いたいところだけど思い当たる節があるからなぁ。おそらく春日と火祭のことだ。あの二人はとにかく会う度に喧嘩するのだ。水川の話だと仲悪くはないはずなのに。なぜか俺がいると、いがみ合うんだよな。んー、謎だ。

「いや……兎月より恵と桜の方が大変かも」

そして意味不明なことを呟いた水川。どうしようもない馬鹿を見るような目が俺に向けられる。

「言ってる意味が分からんぞ、マミーっち」

「だからその、っちはやめて。そしてマミー言うな！」

とにかく今から教室で宿題をやり始めるわけで、俺と水川皆の分のジュースを買いに食堂へ。教室には火祭と春日に米太郎が待機している。……米太郎とあの二人の組み合わせって大丈夫か？　不安な気持ちで教室に戻ると、

「……将也ぁ」

予想以上に空気が淀んでいた。春日と火祭のせいなのか、または米太郎のせいなのか。

「俺が野菜について熱く語ったのに、この二人全然聞いてくれないんだよ」

米太郎のせいだった。明らかにトーク内容のつまらなさが招いた結果だった。野菜の話で盛り上がるわけないだろ。

「それはどうでもいいとして。早速始めようぜ」

皆にジュースを渡して、さあ宿題開始。皆で勉強しやすいように机を五個くっつける。小学校とかで給食を食べる時にする感じのやつだ。う～ん懐かしい。

「どれからする？」

「まずは数学からしない？」

「そうだな」

てなわけで数学から開始。数学教師が作った特製オリジナル問題集を取り出す。『この夏で数学が好きになる』というタイトルが腹立

たしい。仮に好きになれても作った教師のことは大嫌いになりそうだ。そしてパラリとひとめくり。

「ぇ……これするのか？」

米太郎よ、その気持ち分かるぞ。最初のページ見たけどさ～……難しすぎだろ！　ゲームで例えると、ダンジョン入ると突然ボスが出てきたみたいな。アイテムが村長からもらった毒消し草しかないのにボス戦みたいな。そのボスは毒攻撃はしないのにみたいな！

「……す、数学はまた後に回さない？」

「それだと去年と一緒でしょ。電話越しに泣きついてきたこと忘れてないでしょ」

うっ、水川にズバッと指摘されてもうた。確かに、これじゃあ去年の二の舞だ。嫌なことから逃げていたら何も始まらない。困難は立ち向かうためにあるものだ！　お、カッコイイ台詞が浮かんだ。

「将也よ、水川の言う通りだ。困難ってのは立ち向かうからこそ困難と呼ぶんだぜ？」

「だ、黙れ米太郎！　俺と同じようなことを考えるなっ！」

な～んか俺と米太郎って同じ思考回路なんだよな。同じ馬鹿だからだろうか。その線が濃厚だな。非常に嫌だ。

「いいから始めようよ。恵はもう解き始めてるよ」

「え、早っ！？」

目の前の机に座る春日はサラサラとペンを走らせていた。すっげぇ！　軽快に問題を解いていく春日。カッコイイ……！

「いやいや、火祭もすごいぜ」

感心したように呟く米太郎。その横を見れば火祭もスラスラと数式を書いていた。こ、この人らは天才か！？

「さすがはエリートクラスの一組。俺達とは頭の出来が違うよ」

破竹の勢いで問題を解いていく春日と火祭。ペンが走る快音が心地良いくらいだ。俺と米太郎はただそれを眺めるだけ。なんとも情けない話だ。

「兎月達も早く始めたら？」

水川よ、そうは言っても問題が難しくて手のつけようがないんだけど。どう解いたらいいのか、まず最初に何をすべきなのかも見当つかない。何これ、公式とか使うの？　解き方のヒントとか載せてくれないかな。可愛いキャラクターが「こう解くんだよ！」と吹き出しで喋ってる感じにさ。うぅ、分からなくて混乱してきた。これはもう一人ではどうしようもない。

「か、春日ぁ。ここってどうしたらいいの？」

すぐさまヘルプを求める。だって分からないんだもん。

「……これは接線の方程式を求めるから……」

「え、えっと、公式は……」

「……これを使う」

「うんうん。あー、じゃあこれは2点A、Bの座標から……こう？」

「そ」

「おぉ、なるほど。サンキュー春日」

すげー分かりやすい。なんと上手な説明。馬鹿な俺がすぐに理解出来たぞ。さすが春日、頭良い人は教え方も上手いのかな？　とにかく感謝です。

「うおぉ！？　進む進む、ペンが進むぜぇ！」

「ちょ、将也？　俺を置いてかないで！」

馬鹿な米太郎なんか知るか。スタート地点でいつまでも戸惑っていな！

「春日、ここは？」

「……これは線と点の距離を求める公式を使って、範囲を求めたらいい」

「公式って……これだっけ？」

「そ。絶対値がつくから」

「おー。ってことは……こうなる？」

「そ」

よっしゃ、意外と簡単に解けるぞ。類似問題が多いから一度理解したらあとは同じ要領で解いていける。こいつぁ順調だな。

「将也待て」

犬扱いするな。していいのは春日だけだ。……それも何か悲しいけども！

「なんだよ、勉強の邪魔をしないでもらおうか」

「あ、ごめん。いや、あのさ、なんか……お前と春日さんがめっち

ゃ良い感じだったからさ」

そうか？　別に普通だと思うけど。

「兎月、教科書貸して」

「ん、はい」

「ほらぁ、その感じ！　その自然なやり取りが恋人みたいでムカつく！」

変な言い掛かりはやめてくんない？　別に春日と俺は付き合ってないから。ただの主人と下僕の関係だから。って、この説明何回したんだろうか。そろそろ飽きてきた。……それもまたかなり異常だよ。なんで呆れ気味に俺は下僕って説明をしなくちゃならんのだ。おかしいよ。

「いいからお前も早く始めろよ。何なら俺が教えてやろうか？」

「馬鹿にしやがって。ふん、お前に春日さんがつくなら俺にはもう一人の天才、火祭ちゃんがいるわ！　ねー、火祭ぃ。ここの問題教え、て……あ、あれ？」

フリーズする米太郎。その視線の先にいる火祭はすごく不機嫌そうだった。手を止めて俺と春日を見つめていた。

「む～……」

ど、どうして俺の方を見てくるんだよ。何か気に食わないことでもあった？　特に悪いことはしてないと思うけど……たぶん。

「兎月、消しゴム貸して」

「ん、はい。消しゴムないの？　帰りにコンビニ寄って買っていこ

うな」
「……うん」
「あ、ついでに本屋にも行っていい？」
「別に」
「そっか」
「ぬあぁんだそれはぁ！？」

突然立ち上がり、ズバッと俺を指差す米太郎。歯を剥き出しにして狂ったように叫びだした。うるさいキモいやめてくれ。

「ぬぁんだそのほのぼの会話は！？　将也達の周りがピンク色になっているんだよ！　ラブラブな感じが一杯だっての！」
「はぁ？　言ってる意味が分からん。日本語もっかい習え直せ」
「くそ……リア充が。豪雨に打たれて死ね！」

さっきからギャーギャーうるさいな。騒音おばさんか。

「……むぅ」

そして火祭はムスッとしてばっか。マジでどうしたのよ？　米太郎がうるさくてムカつくとか？　それは俺も同じだよ。

「大丈夫か火祭。難しい問題にでもぶつかったか？」
「……そうじゃない」
「じゃあ何？」
「まー君の馬鹿」
「えぇ！？」

すげぇカウンター！　不意打ちすぎてダメージがデカイわ。つーかまた火祭から馬鹿って言われるなんて……普通に傷つく。

「いきなり馬鹿呼ばわりはあんまりだ。水川もそう思うだろ？」
「うーん、でも兎月が馬鹿なのは事実だし」
み、水川！？
「まー君の馬鹿」
火祭ぃ……。
「馬鹿」
か、春日まで……！？
「将也のばーか。死ね」
「お前に言われるとすげームカつくな！」

第８０話　鈍感フェスティバル

火祭が不機嫌になったりと色々なハプニングがあったものの、皆で宿題をすること一時間。予想以上に順調に進んでいった。

「なんだよこれ～。思ったより簡単じゃん。楽勝、楽勝」

米太郎の涼しげな声にも頷けるってもんだ。

「全部の問題教えてもらって、やっとこさ解いているくせに。何言ってんのよ」

うっ……確かに俺と米太郎は質問しまくりで、その上問題の考え方、解き方、途中計算をこと細かく説明されてやっと問題に取り組んでいる状態だ。そんなんでよくもまあ楽勝とかほざいたな米太郎。調子に乗るな！

「で、でもさ、こんな早い段階で宿題に手をつけるなんて俺達じゃ考えられないよな、将也」

「そうだな。宿題なんて七月のうちにやるもんじゃないって教えられたし」

「誰に？」

それは知らない。とにかく、宿題は追い込まれてするものだ。ギリギリになって初めて本気になるのが美学……というのは馬鹿だった過去の教えであり、なるべく早く終わらせるというのが今の主流だ。本当に賢いってのはこういうことなのさ。てことで因数分解にゃもう慣れましたぜ！

「兎月と佐々木は無計画過ぎでしょ」
「男がチマチマやってられるか。無鉄砲に自由気ままに生きるのが男のロマンだろ。そう、それが男のポリシーっ」
「計画性の無い男はモテないよ？」
「ごめん嘘。俺、一週間のスケジュールしっかりと立てているから」
あっさりポリシー変えやがったよ。テキトーなことしか言わないお米はほって置いて、はい来た解と係数の関係。もうマスターしました！

「それにしてもホント順調だな。この調子で頑張ったら今日中に全部終わるんじゃね？」
「まー君、さすがにそれは無理だよ……」
「馬鹿」
「おいおい春日!?　どストレートに言い過ぎだろ。もっとオブラートに包んで言えないのか」
「大馬鹿」
なぜにパワーアップした!?　包むどころか全面に出しちゃったよ。うわ、泣きそう。

「いやー、ほのぼのしていていいね。この五人でどこか遊び行きたいくらいだな」
急に米太郎が嬉しそうに喋りだした。皆に伝えたい感がハンパないぞ。こいつ、言うタイミング狙ってたな。
「例えば、海とか行きたいよなっ」
米太郎は海に行きたいのか。自分の欲望出しまくりだな。

「えー、人が多そうじゃん」

水川が不満げな声をあげる。そしてスタンダードな理由だ。

「んだよマミー！　火祭達の水着姿が見たいという俺の密かな思いを潰す気か」

「マミー言うな。あと、密かな思いモロに出ちゃってるけど？」

「あ……」

やっぱ馬鹿だこいつ。

「はいはい、と。米太郎の下心も分かったことだし、どんどん宿題進めていこうぜ」

「待てよ将也」

あ？　まだ言いたいことあるのか。お前の賤しい欲望はよ～く分かったから。

「将也、お前はどうなんだ？」

はい？　俺？　何が？

「お前は春日さんと火祭の水着姿、見たくないのか？」

「……」

「っ！」

なぜか春日と火祭がぴくりと反応したのは置いといて。……俺が見たいかだって？　ふっ、愚問だな。

「そんなの決まってんだろ……普通に見たいわ！　つーか見させてください」
「……兎月も欲望剥き出しだね」
水川よ、そんな冷たい目を向けないで。だって見たいものはしょうがないじゃん！
「ぐふふ、皆とても似合いそうだもんな」
「えへへ、そんな汚らしい笑顔してると引かれるぞ、米太郎」
「そういう将也だって」
あはは、そう？　春日達の水着姿……うはぁ、想像するだけでニヤニヤしちゃうって。
「引くわー」
「まー君……」
「……」
ぐっ！？　脛蹴りは反則だって春日ぁ……。どうやら女子三人を敵に回してしまったようだ。状況が悪化しないうちに話題転換しなくては。
「で、でも米太郎の言う通り、皆でどこか遊び行きたいよね」
「んー、確かにそうかも。夏ならお祭りとか？」
よし、話題逸らしに成功。そっちの方向で盛り上がってくれ。
「でもそれなら海にも行きたいね」
「海行ったら、兎月と佐々木の変態コンビがいるからなー」

あれ！？　三ターン程で話戻ってきやがった。それは忘れてくださ
い。だって……痛っ！　足の脛が痛いってば！

「ぐっ……」

「……」

春日が蹴ってくるんだよ……。あ～、鋭い痛みがジンジンと響く。
マジで痛いってことです。

「誰かの家にも行ってみたくね？　そんでお泊りとかしたくね？」

米太郎が言うと何かいやらしく聞こえるんだよな。

「佐々木が言うと何か下品に聞こえてくるんだけど」

水川も同じこと考えていたようで。あ、米太郎がしんどそうな顔し
た。さすがに何度も言われてるとキツいよな。ちょっと可哀想かも。

「将也の家は行ったからな。もういいや」

「水川、あいつに対してもっと当たり強めでいいよ」

なんだか俺の家が馬鹿にされたみたいで腹立つわ。

「俺的には春日さんの家に行ってみたいな」

チラリと春日の顔を覗く米太郎と、まったく無反応の春日。だから
米太郎よ、その程度の無視で泣きそうになるなって。

「まー君は春日さんの家に行ったことある？」

「あるよ。あれを豪邸と言うんだろうな」

「おぉ！　そいつぁ楽しみだな」

おいおい、米太郎の中で行くこと決定しちゃってるよ。

「……」

春日もそんな嫌そうな顔するなって。そして俺の方を見ないで。睨むなら発言者の米太郎にしてよ。

「そういう佐々木の家はどうなの？　農家なんでしょ」

「よくぞ聞いてくれた水川。俺の家は中々デカイぜ。なぁ、将也」

「兎月は行ったことあるの？」

「一度だけな」

一年の時、一回だけ米太郎の家に遊び行ったことがある。しかし……

「俺はもう二度と行きたくない」

「なんでだよ!?　畑で収穫して楽しかっただろ？」

そーゆー問題じゃないんだよ。

「お前ん家、すげー遠いじゃん。片道一時間半って何だよ」

「一時間半……マジで？」

水川もびっくりって顔をしている。こいつ、毎日往復で三時間もかけて通学してるんだよ。

「毎日大変だね」

火祭だけがそう言ってくれた。

「火祭も電車じゃん。どのくらいかかる？」
「私は二十分くらいだよ」
「私もそのくらい～。兎月と恵だけだよ、こんな近くに住んでるのって」

そっか。俺は自転車で二十分ちょいだから、かなり近いんだよな。高校も近いという理由でここを選んだようなものだ。おっ、今のって流川っぽくね？

「思ったんだけど、将也と春日さんって中学校とか一緒じゃないの？　家近いみたいだし」
「いや、高校で知り合った。というか最近」

んー、家が徒歩圏内にあるから同じ中学校でもおかしくないのにな。春日なんて名前見なかったし。

「ホントに？　馬鹿な兎月が気づかなかっただけじゃないの？」
「馬鹿はいらんぞ、水川っち」
「っちはいらないって。わざとでしょ」

すいません。カブせボケしてみたくて。

「つーか気づかないってことはないだろ。春日可愛いし、普通に気づくと思うけど」
「……っ」
「まー君……！」
「やるねぇ、兎月ぃ」
「だな」

あ、あれ？　何この空気？　スベってはいないけど、なんか温度が下がったというか……。場の雰囲気がフワッとしてる。お、俺のせいですか！？

「今のはわざとか、もしくは無意識に言ったのか……後者っぽいね」

な、何がだよ水川？　何が……痛い！？　肩が痛い痛い痛い！

「っ、なんだよ、いきなり殴ってくることはないだろ！？」

突然に春日が俺の肩をポカポカと殴ってきた。その顔は真っ赤に染まっていた。耳の先まで赤いし……どしたの？

「大丈夫か？　暑いなら、冷房下げようか？」

「そういうことじゃねぇだろ……どアホが」

ど、どアホ！？　米太郎にそんな真顔で言われるとは思わなかった。俺は一体何をやらかしたんだ？

「……」

「ちょ、だから肩パンやめい！　いつまで殴り続けるつもりだよ」

一向に顔の熱とパンチのラッシュが収まらない春日。う～ん、顔が赤いし何やら慌てている様子……もしかして、照れてる？　いや、それだと照れる意味が分かんないよな。そんな恥ずかしくさせるようなことは言ってないはずだし……謎だ。

「気づくって言ったけど、兎月は二年生になるまで恵のこと知らなかったじゃん。気づいてないし」

あぁ、確かに。でもあのバスでの出会いは衝撃的だった。まさかの席譲れ、だもん。あれには驚いたな。

「まー君って二つの意味で鈍感なんだね」

二つの意味ってどゆこと？　つーか俺が鈍感？　それもどゆこと？

「そーだよなー、将也はその辺に疎いというか。最初とか火祭のことカサイって言ってたもんな」

「そ、そうだったかな？」

いや、それはしょうがなくね。初見で火祭をヒマツリとは読めないでしょ。

「まー君は私がどんな人か知らなかったんだね。『血祭りの火祭』とか」

「うん、全然知らなかった」

俺以外皆知ってたもんな。有名過ぎて俺の耳には届かなかった的なやつか。

「それに、知ってからもまったく態度変えなかったよね。恐がらずに普通に接してくれたよね。すごい嬉しかった……」

あれ、火祭？　顔赤いよ？　春日に続いて火祭まで……マジで暑いんじゃないの？

「とりま、冷房下げるな」

「鈍感！」

「馬鹿か！」

うわっ、なんだよ！？　水川に米太郎と二人して叫びやがって。冷房下げちゃ駄目なの？　エコか？　エコなのか！？　地球に優しいエコってやつか！

「まー君は優しいんだよね」

エコは地球に優しいけど、俺はそれほど優しくないと思うが。

「いや、馬鹿なんだよ」
「だな。見事な馬鹿野郎だ」
「……馬鹿」

な、なんだよっ！　今日だけで馬鹿って何回言われたのだろうか。悲しくなってくる。

「……馬鹿」
「ばーか」
「大馬鹿」
「リピートするなよ！」

第81話　ハプニング発生

「でも恵の家には行ってみたいよね」
「そうだよな～。泊まりまでとは言わないから普通にお邪魔してみたい」

皆でワイワイと雑談しつつ着実に問題を解いていく。しかしまだまだ宿題は山のようにある。あ～、しんどい。いつもの俺ならあっさりとギブアップしていたことだろう。しかし今の俺には頼りになる友達が四人もいる。いや待て、米太郎は使い物にならないから三人だな。春日と火祭に水川、この三人は本当に頼りになる。教え方はとてつもなく上手だし、大学に進学したら家庭教師のバイトをすればいいと思う。俺と米太郎じゃ無理だろうな。保険体育なら教えられるけど。

「兎月、聞いてる？」
「んあ？　どした水川」
「だから、今から恵ん家に行くことになったの」

え、春日の家？　マジか。

「そりゃまた急だな」
「それで宿題の続きは恵の家で宿題しようってことになったの」
「ふーん」
「いや、ふーんじゃなくて。将也しか春日さんの家知らないじゃんか」
「春日も知ってるぞ」
「この場合、本人はノーカンだろうが。話の軸を折るな。で、お前が案内してくれってことなんだけど」

なるほどね。春日の家に行くから案内しろと。

「いや、春日の家だから春日に案内してもらったらいいじゃん」

「だからこの場合の本人はノーカンだって」

「いやいや、今この場合はノーカンじゃねーよ。つーか春日はいいのか？　急に家にお邪魔して」

「……大丈夫」

ならいいけど。

「でさ、春日さんの家までどうやって行くんだ？　バスとか？」

そうだな、春日の家に行くならバスだよな。でも俺今日は自転車だしなー。うーん、どうしたもんか……おっ、そうだ。

「そうだ、前川さんを呼ぼう」

「「誰だよ」」

綺麗にハモった水川と米太郎。誰だ呼ばわりとは失礼な。前川さんを知らないのかよ。

「春日家の運転手だよ。ちょっと待ってて」

携帯を取り出して、電話帳で『前川さん』のところでプッシュ。プルルルと呼び出し中。

「どうして将也が春日家の運転手と知り合いなんだよ」

「なんとなく。あ、もしもし兎月です。この前はおいしいコーヒー豆を教えてくれてありがとうございます。家族全員で楽しんでます」

「どんな関係!?　友達感覚じゃんか」

米太郎うるさい。黙ってろ。

「えっと実は、かくかくじかじかってことなんですけど」

『分かりました、すぐに向かわせて頂きます。少々お待ちを』

「ありがとうございます。……ふぅ、今から車が来るから」

「……お前すげーな」

そうか？　俺というか春日の家がすごいと思うが。専属の運転手がいるって庶民の俺からしたら考えられないことだ。やっぱ春日とは住んでる世界が違うわ。

「……兎月」

「あ、ごめんごめん。勝手に前川さん呼んじゃって。俺がすることじゃなかったな。でも、この場合春日はノーカンだから」

「意味分からない」

痛い痛い！　蹴らないで！

「お待たせしました兎月様」

「わざわざすいません。あと、様付けはやめてくださいって」

場所は変わって校門前。俺達の目の前には立派な車が一台。その横を通る学校教員の軽自動車が惨めに見える。

「すげーな！　高級車ってやつ！？」

米太郎もテンション上がりまくりだ。水川と火祭も感嘆とした表情を浮かべている。そりゃそうなりますよね。俺だって最初はびっくりでした。

「こっちは俺と春日の友達です。佐々木と水川に火祭」

「「よろしくお願いします」」

「佐々木様に水川様に火祭様ですね。どうぞ、お乗りください」

お～、と興味津々で車内に入る庶民三人。俺も庶民だけど。

「さ、どうぞ恵様も。私、久方ぶりに恵様をご送迎できて嬉しい限りです」

「……」

ん？　どした春日、乗らないのか？　この車に似合う人はあなたしかいないって。さあ乗りなさいよ。

「どしたの？」

「……兎月は乗らないの？」

俺？　いや俺は、

「俺は自転車で行くからいいよ。春日の家は知ってるし」

つーか五人全員は乗れないもん。最初から俺は自転車で行く計算だったんで、申し訳なさそうな顔をしないでくださいよ前川さん。

「悪いな将也。ま、庶民のお前は頑張って自転車で来るといいさ」

米太郎の見下した笑みに虫酸が走った。ごく自然にイラッとしたわ。

「んだとこのお米野郎が。農家の子供は今すぐ降りやがれ！」

「あぁ？　農家を馬鹿にするな。汗水垂らして作ったお米を食べて人は生きているんだからな」

「だったら車に乗らないで汗水垂らして歩きやがれ」

「い、や、だぁ～」

こいつ、ムカつくわ……！　なんだその勝ち誇った顔は。ムカつく以外の感情が出てこないぞ。ムカつく……ああムカつく。米太郎がムカつく！

「恵様？」

ん？　まだ乗ってなかったのか。早く乗りなよ。春日は車には乗ろうとせず、一歩も動かない。何かあったのか、俺には分かりませんが。とにかくあとは春日が乗れば車は発進、俺も自転車で追いかけれるのだが。

「……」

「どうしたんだよ春日……え？」

「……」

ちょ、なんで……なんで俺の横にピタッとくっついているんだよ。

ようやく動いたかと思ったら俺の横に移動って……いやいや間違ったアクションですって。コマンド入力ミス？

「恵様、どうぞ中に」

「……私は兎月と一緒に行くから、いい」

「……へ？」

俺と一緒？　車には乗らないってこと？　おいおい、何を言ってらっしゃるのですか。

「いや……せっかく前川さんが来てくれたんだから車で行きなさいよ」

「……」

俺の自転車で行くより前川さんの車の方が安全だし早いし。どっちが快適かは明々白々だ。なのにどうして？

「兎月、察しなさい」

車の中から水川が顔を出す。察するって何を？　どんな事情だよ。分かりません。って……あ、あと火祭ぃ……あの……ものすっごい不機嫌そうだけど……そっちはそっちでどうしたのさ。

「春日さん、私が降りるから車乗っていいよ。私がまー君と一緒に行くから」

「……大丈夫」

「私が大丈夫じゃない」

な、何よこれぇ……。またもや火花散ってるよ？　二人ともどうした？

「兎月、察して」
「たぶん無理だろ」

水川と米太郎はそればっかりで助け舟出さないし。どうしたらいいんだよ！？　教えてナビィ！　ヘイ、リッスン！

「……」

春日、服を引っぱるな。ちょ、なんすかその目は。何か俺に求めてる？　何か言えばいいのか？

「えっと、俺と春日は自転車で行くから、前川さん達は先に行っていてください？」
「なんで疑問形？」

なんでだろ？　俺自身も分からないッス。

「そうですか。兎月様になら安心してお任せできます。では春日様をよろしくお願いします。私達は先に行っておりますので。あ、それと鞄は預かっておきましょう」

おぉ、ありがとうございます。前川さんに俺と春日の鞄を渡すと、前川さんは運転席に乗り込んで、車を走らせる。火祭のむすっとした顔が最後までこちらを見ていた。ど、どして？　そしてあっという間に車は消えていった。残ったのは俺と春日のみ。んー……とりまチャリ取ってくるか。

「えっと、自転車取ってくるから待ってて」
「……うん」

……しかし、なんで春日は車に乗らなかったのだろう？　あ、もしかして俺に気をつかったとか？　一人で寂しい俺のために？　そうだとしたら春日さん……あなた良い奴じゃん！　そんな優しい娘だとは知らなかった。僕とっても嬉しいよ！　とまあ感動しているうちに自転車置き場へと到着。鍵を外して自転車に乗る。

「春日ー」

「……」

無言で後ろの荷台に座る春日。ちなみに鞄は前川さんに渡したから、前のカゴには何も入ってない。軽くて運転しやすいや。

「ついでにコンビニで消しゴム買っていこっか」

「……」

無言は肯定の表れ、と。俺の定めたルールに従います。じゃあ行きますかね。この辺りで一番近いコンビニは……

「ありがとうございましたー」

コンビニでお目当ての消しゴムを購入。お嬢様だけど、消しゴムは普通のやつで十分なはずだ。というか、高級な消しゴムなんてあるのか？　純金が練りこまれていて、ラフレシアの匂いつき消しゴムみたいなやつ？

「あったら、すげーな！」

「早く行きなさい」

ぐっ、ノーモーションで蹴りやがって。なのにこの威力……数分ほど自然治癒の時間が欲しい。

「い、行きます」

しかしそんな時間は許されない。春日を怒らせると、さらなる追撃が待ち構えている！　休むことなく働き続ける植民地奴隷の如く俺はペダルを漕ぎまくる。朝は舌打ちが出るほどに暑かったのに今では雲で太陽が隠れて気温はぐっと下がった。とてもありがたい。快適に運転できるぜぃ。おー風が涼しい。

「ふふふ～ん　気分絶好調～♪」

「うるさい」

痛い、口ずさむことも許されないのか。優しいと思ったら春日は相変わらず春日だったようで、いつもどーりの厳しさ。はいはい慣れてますよー、と。めげずに自転車を走らせる。コンビニに寄ったので、いつもとは違う道を通りながら春日の家へと向かっている。河川沿いの爽やかなところだな～。綺麗な川を眺めていると心洗われる気分だ。ちょっとばかしゴミが目立つけど。いけないよねー、ゴミのポイ捨ては。せっかくの綺麗な川を台無しにするつもりか。とまあ思いつつ風が涼しいー。あ～、なんか良い感じ。

「風が気持ちいいよなー」
「……」
軽く話しかけてみたが無視された。この心地良さを共感したかったのに……。春日は無視が基本パターンだ。最近は無視の回数も減ってきたが、今みたいにどーでもいいことには反応してくれない。いつもの愛想のない態度。そして無表情で睨んでくる。これで男子にモテるときたもんだ。水川情報によると、一学期で七人から告白されたとか。火祭に並ぶほどの人気ぶりだ。兎月ー、焦っちゃうよねぇ。と水川がニヤニヤと言っていたが、よく意味が分からなかった。なんで俺が焦るの？　別に俺は全然モテないもんね！　うぅ、悲しい。
「春日はさ、もっと喋った方がいいよ。無愛想じゃモテないぞ」
「……」
実際のところモテまくりですが。ちょっと嫌味を言ってやったのにそれすらも無視ときましたか。
「いや、モテなくていいのか。だって実際の春日の性格はもう最悪だからな。最悪に最悪を混ぜたような最悪な性格。近寄った男もすぐに逃げちゃいそうだ」
「うるさい」
「痛い痛い、脇腹を抓らないでぇ！　運転に支障が出るって」
ぐっ、反応したかと思えばすぐに暴力。コミュニケーションを取るだけでも一苦労だ。何言ってもリアクションは薄いし、何考えてるか分からないし、理不尽に暴力を振ってきて。俺が一方的に疲れるだけだ。はぁ……なんで俺はこんなことしてるんだか。全然分から

な……いや、分かってるか。そんなの決まってるよな。それは……
……俺が望んだからだよなぁ……。俺がそうしたいと願って、望んで自ら選んだものだ。だから春日の家に乗りこんで金田先輩との婚約をめちゃくちゃにしてやったのだから。そうまでして俺は春日の下僕であることを選んだのだ。春日といると落ち着くというか、居心地良いというか……。いやいやMってわけじゃないよ。そういう意味じゃなくて、何かこう、心から落ち着けるんだよな。……楽しい？　そういった感情なのかな……。心がポカポカするんだよ。綾波さんの台詞を丸パクリですいません。とにかく全身が暖かくなる感じ？　春日といると安心する……って感じ。そりゃ蹴られたり、無視されたり、下僕扱いされたりするけど、それも含めて俺は満足してる気がする。しんどいとかキツイとか思う時もあるけど、それ以上に春日といるのが楽しくて仕方ない。

「……なあ、春日」
「……」
「俺はだけどさ……ずっとこれからも一緒にいたいって思っちゃったりするんだよなー」
「っ！？」
「だからこれからもこうして一緒にいていいか……って、春ぐえっ！？　うぐうううぅぅ！？」

ぐっ！？　か、春日！？　急に暴れだすなよ！　春日がすごい力で脇腹を掴んできた。痛たたあああぁぁ！　肉がもげちゃうよ！

「か、春日！　離してっ」
「……っ」

パッと痛みが消え、春日の手の感触も消えた。後ろを振り向けば、両手を完全に放した春日が。その顔は真っ赤で目は見開いている。

って、

「春日!?　そのままだと落ちちゃうって!」

春日の両手は宙に浮いた状態で何も持っていない。つまり春日は荷台に座ってるだけの状態。普通に危ない。さらに春日が暴れたせいで自転車も不安定に揺れている。

「あっ……」

「春日!?　ぐえっ!?」

ぐ、ぐぅうわぁ!?　春日ぁ、なぜに……なぜに首を掴む!?　テンパるのは仕方ないけど、首掴むのは勘弁してくれ!　い、息が……

「ぐっ、うわあっ!?」

春日のテンパりが俺に移り、完全にパニック!　ハンドル操作を誤って……

「ぐっ!?」

道を外れ、下の斜面となってる芝生に投げ出される。いてぇ……自転車でコケたのって小学生以来。全身を軽く襲う痛み。コンクリじゃなくて良かった。芝生はふんわりしていてクッションの役割を果たしてくれた。おかげで無傷だ。

「いてて……って春日!?」

俺が倒れたのなら後ろに座っていた春日も同様だ。慌てて振り返れば、芝生の上に倒れている春日の姿。か、春日あぁぁ!?

「大丈夫か？」

慌てて春日の上体を起こす。芝生の草が髪についていたり、頬が少しこすれているが、それより目についたのは春日のこれほどかと言わんばかりの真っ赤な顔。さらには自転車から落ちたことがよく理解出来ていないのか、驚きの色も混じっている。

「……っ」

はっ！？　や、ヤバい……殺される！　お嬢様の春日をこんな目にあわせて……これはマズイ！

第８２話　自己嫌悪に励まし、そしてこれからどうしましょう？（前書き）

米太郎「夏休みだな～」

兎月「そうだな」

米太郎「何か夏の目標とかあるか？」

兎月「英検準２級」

米太郎「堅実だなおい！」

第８２話　自己嫌悪に励まし、そしてこれからどうしましょう？

「ご、ごめん春日。怪我はないか？」

春日の髪についた草を取りつつ全身を確認する。……これといって怪我は……っ！？

「か春日、膝……」

「え……あっ」

春日の膝が赤く滲んでいる。よく見れば膝の表面が切れており、そこから鮮やかな血が……血がぁ！　うわあっ！？　血だ！　血だよこれぇ！　血液ですかはなんやなんあんあんきゃあぁぁぁ！？

「……っ」

「だ、だだだ大丈夫？」

あわわわわっわあわわっ、どうしよぉ！？　こんなシチュエーション今までに経験したことがないからどう対応したらいいか分からない。うぅ、誰かマニュアル本持ってきてぇ！　血が流れてるってば！

「……っ」

春日の歪んだ表情……やっぱり痛いんだ。お、俺がなんとかしなくては……！

「待ってて、確か財布に絆創膏が……」

ポケットから財布を取り出す。え～っと、確かこの辺に……ん？

なんで手の甲に水滴が？　さらに首筋に何かが落ちてきた。冷たくて液体のような伝わり方は……汗じゃない。この感触はもしや……雨か？　え……まさか、雨が……？　見上げれば、どんよりと鉛色の雲が空一面をうめつくしていた。いつの間に……雨降る感じバリバリだぞ。そう思った瞬間、ゴロゴロと空が鳴った。そしてポツポツと雫が落ち、それが連続してきて……雨となった。辺りは一気にザーザーと騒がしくなって……って！？

「嘘、このタイミングで雨だなんてアリかよ！？」

ドラマ的展開だなおい！　このタイミングで雨が降りますかね。最悪にも程がある。ヤバイ、まだ小雨だけど徐々に強くなっている。こーゆー雨は何度か経験したことがある。故に分かるぞ、これはさらに激しさを増すことが！　どっか避難しないと、あっという間にびしょ濡れになってしまう。くっそ、ホンマにバッドタイミングやなあ、最悪や。……なんで関西弁？

「とにかくどこか雨宿りできる場所は……」

もちろん傘なんて文明の利器は所持していない。あったらすぐに装備そしてオープンザアンブレラ～しているさ。道外れの芝生、上に戻ってもただの一本道。建物もお店もまったくない。屋根なんて見当たらねぇ……。くそっ、上の道に雨宿りできる場所はない。下は河川だし、雨を凌げる場所なんてないぞ……あっ、待て待て。あれは……河川の先をたどっていくと橋が見えた。橋……そうだよ、橋の下……これだ！　漫画でよくあるじゃん、橋の下に雨宿りするパターンが。これを応用するしかない！

「春日、あっちに避難するぞ」

予想通り雨が強くなってきた。こりゃ、本格的に降ってきたな。そしてさらに勢いが増すこと間違いない。急がなくては。自転車を起こして走り出す。こいつは金田先輩がくれた新品だ。汚すわけにはいかない。

「春日、急げ…って……おい！？」

「……っ」

雨が降り注ぐ中、春日はうずくまっていた。何をやっているんだ、ここで停止している時間はないってのに。急いで避難しないとずぶ濡れになっちゃうよ。何をもたついて……ん？　春日……足を押さえている。ま、まさか、

「さっきの怪我で動けないのか……？」

たいした怪我じゃないと思ったけど……歩けないほどまでに痛むのか……っ！

「春日！」

次の瞬間には自転車を離していた。金田先輩からもらった大切な自転車？　知るかそんなもん。大事なのは春日だ！

「春日、歩けないのか？」

滑るようにして芝生を駆けて春日の傍に近寄る。俯いたまま春日は何も答えない。何か返事しろよ！　と言いたいけど、それどころじゃない。天候は小雨から豪雨へ超進化を遂げている。このままだとマジでヤバイ。春日が歩けないなら……こうするしかないっしょ。

「行くぞ！　しっかり掴まってろ」
「と、兎月」
春日を無理矢理おんぶ。はいはいめっちゃ恥ずかしいですよ。しかしそんなことを言ってる暇はありません！　濡れた芝生に足が滑る。ぐおっ、バランスが取りにくい……。だがそんなの気にしていられるかい。足場の悪さなんぞ無視して全速力で橋の下へと急ぐ。滑りやすい芝生の上を走り抜ける。ぜってーコケるわけにはいかない。俺は今、春日を背負っているのだから！　俺には春日を守る義務があるのだからぁ！　打ちつける雨に目を細めつつそのまま一気に橋の下に滑りこむ。降り注いでいた雨の圧から解放されて体が軽くなった。髪の毛から落ちる水滴が点々とコンクリートの地面を黒く滲ませる。上からは雨が橋を打ち続ける轟音が反響して聞こえる。耳に広がる雨音、体に伝わる水の感触と重さ。一機に疲労が襲ってきた。きっつ……。
「はぁ、はぁ……最悪だな」
もう七月の中旬だぞ？　こんな雨が降っていいのかおい。遅れた反抗期ならぬ遅れた梅雨なんざお呼びじゃねぇんだよ。自粛しろ馬鹿！
「っと春日、怪我見せろ」
おぶっていた春日をそっと地面に座らせる。雨でうまい感じに血が流れ落ちており、切り傷がよく確認できる。見れば赤く腫れているし……葉か石か何かで切ってさらに打ちつけてしまったのか。これじゃあ歩けないよな。
「とりあえず絆創膏を……」

財布から絆創膏を取り出して丁寧に貼る。ふぅ、一安心。とりま止血は完了。あとは人間の治癒力に任せて良好へと向かうことを祈るしかない。

「大丈夫か春日？　まだ痛むか？」
「……」
「あの……大丈夫、ですか？」
「……」

ちょ、何か言ってくれよ。この状況で無視されるとどうしようもありませんって。

「なあ、春日」
「……大丈夫」
「……そっか」

大丈夫なわけない。歩けないくらい痛いんだろ。嘘言ってるのは見え見えだ。何を強がっているんだよ。ったく、できれば春日本人から言ってほしかったね。こんなところで嘘言ってどうするんだよ……はぁ。

「……最悪だな。雨止む気配ないぞ」

にわか雨かと思ったが、勢いは増す一方。こんなゲリラ豪雨、梅雨のシーズンでもなかったぞ!?

「傘もないし、自転車で行くのは無理だし。どうしたら……あ、前川さん」

頭をよぎったのは頼りになる前川さんの顔。今頃は米太郎達を家に

送り届けたはずだし、電話で呼んだら来てくれるはず！

「携帯で呼べば……あれ？　携帯は……はっ！？」

そうだ……携帯は鞄の中。そして鞄は……前川さんに預けてしまった。手元に携帯はない……！　携帯電話なのに携帯してない！？

「春日、携帯持ってるか？」

「……ない」

……終わった。連絡手段がない以上、前川さんを呼ぶことは出来ない。となると他に対策はない。出来ることはここで待つことのみ……。ショックからか、または制服が吸収した雨の重みか、体がずるりと落ちた。ペタリと地べたに座って空を見つめる。予想通り雨は全然止まない。遠くの景色が霞んで見えるぐらいに降りまくっていやがる。目の前の河川の水位が上がってくるんじゃないかと思えてくるほどの勢いだ。本格的にヤバイぞこれ。傘を差しても足元がぐちゃぐちゃになるレベルの豪雨っぷりだ。

「……」

「……」

そして沈黙。俺も春日も一言も喋らない。聞こえるのは雨が降る音のみ。気まずさＭＡＸだ。けどいつものように喋るだなんて出来ない。だって……こうなったのは俺のせいだし……。俺が自転車のハンドル操作ミスで転倒。春日に怪我を負わせた挙句、ずぶ濡れにさせてしまった。最低極まりない行為だ。春日になんて言えばいいのやら……罪悪感で胸が締めつけられる。自分のふがいなさに自己嫌悪に陥りそうだ。何が下僕だ、何も出来ていないじゃんか。

「……」
「……」
「……ごめんな」
「……」
「怪我させちゃって。俺がちゃんと運転出来なくて……ホントごめん」
「……別に」

最低だ。謝ることしか出来ない自分が愚かで仕方ない。

「それにこんなことになってしまって……。俺が無理矢理にでも春日を車に乗せておけば……ごめんな」
「……それは兎月のせいじゃない。私のせい」
「そんなことない。ただの下僕のくせして調子乗ったから……ホントごめん」
「兎月」

って痛い痛い痛い！　今かなりブルーな状態なんだから、ほっぺを抓らないで！

「な、なんだよ！？」
「兎月は悪くない」
「いや……悪いのは俺だって。最低だよ俺は……春日をこんな目にあわせてしまって……ごめん」
「謝るな」

痛い！　捻りを加えてきた！？　ぐりぃと頬が変形しているんですが……。

「……だって俺のせいで」

「兎月は悪くない。雨が降ったのはしょうがないでしょ」

……俺をフォローしているのか。優しいんだな、春日は。やっぱり春日は優しい。そんな春日に怪我を負わせてしまった俺は最低野郎。前川さんに合わす顔がない。前川さんは俺を信用してくれて春日を任せてくれたのに……。

「でも……」

「終わったことをぐちぐち言うな。兎月は悪くないんだから」

雨が降る轟音の中、いつもは小さい春日の声がなぜかはっきりと聞こえる。その声一つ一つが俺の全身に入ってくる感覚。……なんだろ、この安心するような感じは……。さっきまで自嘲気味だった俺だが、春日と少し話しするだけでこんなにもスッと気が軽くなるとは……。やっぱ、春日といると安心する……心がポカポカする。

「……ありがとな。そう言ってくれると助かる」

「……そ」

よし、切り替えよ。ネガティブになってもしょうがない。これからどうするかを考えないとな。

「雨は止む気配なし。携帯もなく、誰かと連絡する手段もない……か。春日、何か良いアイデアは？」

「ない」

即答っ！　もうちょっと考える余地とかはないのかよ。……マジでどうしよう？　雨が止むまでここ待つか。それしか思いつかないや……。

「……」
「……」

そして訪れる沈黙。ザーッと雨の降る音が気まずさを紛らわせてくれるがそれでもなんか気まずい。……な、何か喋った方がいいかな？　この調子で待ち続けるのはもたないと思うし……。

「……」
「……」

そ、それに……今更だけど……ほら、雨に打たれたじゃん？　……制服が透けてるんだよね。いやいや！　いやらしい気持ちはないよ！？　そうじゃないけど……ドキドキするっていうか……。直視はできないけど、チラッと見た限りじゃ……えっと……よ、よく分からないや！　ただ今、俺と春日は二人横に並んでいる状態。横目で見ただけじゃ、はっきりと見えないな……っておいいいっ！？　何見ようとしているんだ俺は。いかんぞ俺、グフフな下心を出しちゃ駄目だ！　春日に嫌われちゃう。そして申し訳ない。下心より罪悪感の方が勝ってなんとか視線を前に固定していられる。けど……俺の見たマンガでは、こういう場合は女の子の制服が透けて下着が見えて、うわあっ！？　的なシチュになるはずだ。いちごがウハウハで１００％みたいな感じ？　というか冷静に考えると……この状況って結構マズイ……よね？　橋の下だなんて野外プレイの定番スポットだし……え？　エロマンガの見すぎ？　すいません、自粛します。とにかくこれはヤバイ。奥底に眠る野獣が目覚めるかもしれない。いや、俺ヘタレだからそれはないか。いちご３％にも満たないもんね。しかしやはり意識してしま、っておいおいおいおいおい！　だから落ち着けぇ。何も考えるな何も意識するなっ！　無心無心無心無心無心無心無心無心無心無心無心無心無心無心無心無心！　ピンクな妄想は掻き消せ！

「……」
「……」

沈黙が重くのしかかる……。だって何を話せばいいのか見当もつかない……この状態で盛り上がるトークなんてあるのか？　野菜の話？　それじゃあ米太郎の馬鹿と一緒じゃないか。とにかく落ち着け、いいから無心になるんだ。変に意識するから気まずく感じるんだ。気を紛らわせたらいいんだ。ほら、等速直線運動について考えろ。等速直線運動について思い馳せろぉ！

「……っくし」
「か、春日？」

横から聞こえてきたのはなんとも可愛らしい小動物の鳴き声……じゃなくて春日のくしゃみ。え、もしや……！？

「寒いの？」
「……」

雨で濡れて体が冷えてしまったのだろうか、春日の顔はいつもより白く不健康そうな色に染まっていた。これは本っ当にマズイ！　春日に風邪をひかしたとなると、春日父がブチギレる。そしたら俺達家族は……ジエンド。路頭をさ迷い、樹海にふらりふらりと……あかんあかん！　それだけは阻止しなくてはっ！　と、というか……春日に怪我を負わせた時点でもうアウトだったり？　ははっ、そりゃそっか。ははっ……ごめんよ父さん。だけど今はそんなの問題じゃないんだ。春日に風邪を引かせるわけにはいかない。

「春日、寒いんでしょ？」

「……」

やせ我慢なのか、ひたすら無視する春日。これだとキリがない。よし、カマかけてみるか。

「こういう時って二人が裸になって抱き合うことで体温保持を痛い痛い！　肩パン痛い！」

よ、よし反応してくれた。これで無視だったら、いよいよ制服に手をかけるところだった。そんな変態、もとい露出狂にはなりたくない。

「寒いんだろ？」

「……」

「あー……さすがにさっきのは冗談だけど、その……えっと、手を繋ぐってのはどう？」

「……」

「いやいや、やましい気持ちがあってじゃないよ？　ただ少しは暖かくなるのではないかと思って……」

ヘタレの俺に出来ることはこれしかない。なんとしても春日に風邪を引かせるわけにはいかない。春日父が怖いとかもあるけどさ、ただ春日に辛い思いをさせたくないから。こんな目に遭わせてしまったんだ、せめて俺に出来ることはやりたい。

「あ、あの……」

「……」

で、無視。こうなってくるとこっちはやりようがないわけで……はぁ、どうしよ？　とりあえず春日のすぐ隣に移動してみる。肩と肩

が触れるかどうかの距離。一瞬、春日がぴくっと身じろいたが、その場から離れようとはしなかった。しかし、両腕を組んでおり手を繋ぐつもりは全くないようだ。それ以上近づいてみろ、咬み殺すぞと言わんばかりの威圧。絶対寒いはずなのに……俺と手を繋ぐのがそんなに嫌なのかねぇ。ま、そりゃ嫌ですよね。下僕なんかに手を繋がれたくないよね。俺だって、もし米太郎と体を暖めなくてはならなくなっても絶対にしたくない。凍死を選んでやるさ。春日もそれと一緒か。

「寒いでしょ？　だったら」

「しつこい」

はい一蹴されました。ズバッと切り捨て。心配したこっちが怒られるなんて……悲しいね。そして雨は尚も降り続ける。かれこれ二十分は経過していることであろう。携帯もないから正確な時間も分からない。

「……っくし」

隣で春日はくしゃみしてるし……このままでは埒があかないな。……行動を起こしますか。

第８３話　握る手はそっと優しく

よっと腰を上げる。体が重たく感じるのは雨に濡れてなのか、気分的に乗らないからなのか……どちらか定かでないが、やるしかないでしょ。春日はああ言ってくれたけど、やはり俺のせいな部分も大きい。なら償いというか、少しは役に立てって話だ。いくぞ、やるしかない。

「……兎月？」

「近くでタクシー拾ってくる。春日はここで待っていて」

いち早く春日をこんなところから解放しなくては。ホント風邪を引かせてしまいかねない。そうしないためにも行動しなくてはならないのだ。もう雨が止む気配なんざないし、となると待つだけ不毛。こちらから打破するしかないっしょ。この超豪雨の中、タクシーを探し回るのはしんどいけど……これ以上春日をこんなところにいさせるわけにはいかない。頑張れゴエモ、じゃなくて頑張れ俺！

「雨降ってる……」

んなことは既知の事ですよ。相変わらずの凄まじい雨、さらには強風も吹いて視界は最悪。これを嵐と言わずして何が嵐だ。もはや台風じゃねぇの？　この調子だと明日学校休みになるかも。それはかなり嬉しい。しかしそのためには今日を生きなくては。

「タクシーが見つからなくてもコンビニがあれば傘とか買えるし、公衆電話で春日の家に連絡も取れる。とにかく行動しないと」

ここでじっとしているよ動いた方が明らかに賢明だ。ただその場合、

一つだけ問題があるのだが……

「……春日、大丈夫か？」

俺がここを離れると春日を一人で待たせることになる。……こんな声も届かないような暗い場所に春日みたいな可愛い娘を置いていくとなると……グヘヘな強姦魔が襲ってくる恐れがある……っ！　や、やっぱ危険だよな。一人にさせるのは危ない、俺がいないと。で、でもここにいても助けは来ないし春日の体力も減っていく一方。やはり動くしか……

「……兎月」

春日が座ったままの状態で俺の制服の端を掴んできた。ぎゅっと小さな指が力強く制服を持つ。これはつまり、行くな……ってことだろう。……そうだよな、こんなところに一人ぼっちなんて怖いに決まってる。不安で心細いに決まってる。春日は無理して気丈に振る舞っているけど、実際は寒くて怖いはずだ。俺が傍にいなければ……けど、

「大丈夫、すぐ戻ってくるから。ここで待ってて」

超心配だし超不安だ。けどここで待っていてもどうしようもない。急がないと春日の容態も悪化するし、本当に風邪を引かせるわけにはいかない。春日に怪我を負わせて風邪も引かせたとなると、春日父に殺されるとか以前に自分自身が許せなくて惨めになってしまう。もう春日と一緒にいる資格も失くしてしまう。嫌だ、それに春日を守ってあげたい。

「……駄目」

うっ！？　そ、そんな上目遣いでこっちを見ないで。春日は服の端をぎゅっと握り、さらにはウルウルの上目遣いでこちらを見つめてくる。な、なんつー威力。そんな風に言われると下僕じゃなくても従っちゃうって。火祭並の破壊力だぞ！

「い、いや俺もそうしたいけどさ、やっぱ助けを呼ばないと。雨も止みそうにないし」

「……」

「怖いのは分かる。すぐに戻ってくるから。待っていてくれる？」

「……」

春日はじっと俺を見つめたまま掴んだ制服を離さない。潤んだ瞳と濡れた前髪がどこかいつもの春日と違った艶美的な風情を惹き出している。うっ……こんな状況だけど今、春日がすげー色っぽく見えた。ドキッとしてしまった。おおおぉぉい、最低だぞ俺。こんなシリアスな場面で何を興奮しかけているんだ。反省しろ、自粛しろ。

「……兎月」

「だ、大丈夫だって。ほんの十分だけ離れるだけだから」

春日の手を両手で優しく包みこむ。そのまま手を引き剥ごうとしたが……うわっ、こんなに冷えてるなんて……。氷漬けされたかのように冷たい春日の手。何度か繋いだことがあるから分かる。春日の手はいつも温かくてポカポカしていた。落ち着きと安らぎを与えてくれる温かい手。その手が今はこんなに冷えている。病人のように白く冷たくなっている……やっぱ寒かったのか。それに震えているし……っ！　くそっ、なんだよ俺は。ただのアホじゃないか。何も考えちゃいなかった。馬鹿だろ俺……この状態の春日を一人ぼっちにさせるなんて出来ない。春日をほって置くなんて出来ない！

さっきまでの俺は本当の本当に馬鹿か。どうして春日を一人置いていこうとした。助けを呼ぶ？　そうじゃないだろ俺のすることは。俺がするべきことは春日の傍についてやることだろうが。春日を守るんだろ。ならこうして手を持ってやることが何よりもすべきことじゃないか。

「ごめん……やっぱり俺もここにいるよ。ずっといるから安心して。……ずっとこうしているから」

自然と春日との距離が縮まる。ぎゅうっと握る手に力がこもる。安心させてあげたい。その気持ちが溢れ出す。

「兎月……」
「春日……」

冷えていた身体はなぜか暖かくなり、心も温もりに包まれた。ああ、最初からこうしておけば良かった。さっきまでの気まずい沈黙は何だったんだろう。トロンと和んだ空気が俺達の周りに広がる。湿気と薄暗さなんざ跳ね返してやるぜって感じ。ああ、やっぱ俺も不安だった。けど今は春日とこうしているだけで気持ちも落ち着いて笑っていられる。やっぱり春日といると……と、次の瞬間、

「ぐおぉ」
「！？」
「えっ？」

ずさあっ！　と誰かが橋の上から滑り落ちてきた。雨にも負けない豪快な音を立てて地面にどしゃりと崩れ倒れている。雨による視界の悪さと暗さでよく見えないが何か黒い物体がうごめいて暴れているような……。

「と、兎月……」

突然の出来事に春日の手がより一層震えだす。ぎゅううぅと手を握ってきた。ヤバイ、ヤバイヤバイヤバイよ。不安は的中、やはり春日を狙って何者かが襲いにやって来た。や、やるしかない。お、俺が守らないとぉ！

「う、後ろに隠れて。お、おお俺が何とかする」

テンパりつつも謎の物体から春日を守るように後ろに下がらせる。落ち着け俺、落ち着くんだ。何とかするしかない。黒い物体……やはりそれは人だった。手と足が四方に伸び、ガラクタ人形のようにもぞもぞと地面を這いずっている。こ、怖ぇ！　ホラー映画かよ！？

「兎月……」

怯えた声とぎゅっと背中にしがみつき身を寄せる春日の震えた手の感触が俺を奮い立たせた。俺がびびっているわけにはいかない。お、俺が春日を守るんだぁ！

「……っ、おおお前は誰だ！？　春日には指一本触れさせやしないからぬぁ！」

それでも怖いものは怖い。謎の人間の両手は地面を這いずり回り、徐々にこっちに接近してきている。不安と焦り、さらに雨の降る音と寒さによって未知なる相手の恐怖がより一層に増す。そして、静かに、のそりと低い声が耳をかすめた。

「眼鏡、眼鏡……」

……へ？　な、なに？　今……眼鏡って言った？　コロス、殺す……の間違いじゃないの？　あと、今の声ってもしかして……

「ああ、あったあった。いやあ、探しましたよ春日様、兎月様」

地面に落ちてあった眼鏡をかけて、すっと立ち上がったのは……前川さん。ま、前川さぁん！　服はずぶ濡れのボロボロだが、あの気品ある佇まいと微笑みは前川さんで間違いない。た、助かった……。二つの意味で。

「ちょっとぉ！　びっくりしたじゃないですか。どこから現れているんですか！？」

何も上から滑り落ちなくても。

「も、申し訳ありません。河川沿いに兎月様の自転車を見つけたので急いで駆けつけようとして足を滑らしてしまって」

曇天の下、俺の自転車は風で倒れていた。ぬあぁ！？　自転車を避難させるの忘れていた。ああ、せっかく金田先輩に頂いた自転車がずぶ濡れだよ……。って、それより！

「前川さん、急いで春日を……」

謎の人間が前川さんだと分かって安心したのか、春日はふにゃりと地べたに座り込んでいた。俺の制服を掴んだまま。

「め、恵様！？　お、お怪我は……！？」

「足を軽く怪我したぐらいです。それと多少雨に打たれてしまった

ので急いで家に送り届けてください」

本当に助かった。さすが前川さん、あなたは頼りになります。いつもいつも俺はあなた様に助けられていますよ。ありがとう前川さん。

「前川さん、車は？」

「う、上に。す、すすぐ上に停めてあります」

あ～あ、混乱してます？　春日は大丈夫ですから落ち着いてくださいって。なんならあなたのホラーチックな怖い登場のせいでこうなっていますからね。

「め、恵様こちらへ」

前川さんは春日を起き上がらせると、どこから取り出したのか傘を差してゆっくりと道の方に上がっていく。足元気をつけてくださいね。上の道には車が停めてあった。そして車に乗り込む春日と前川さん。そして車は発車、雨の中を颯爽と走り消えていった。そして俺は取り残された。そして……えっ？　あ、あれ？　あの……ま、前川さん？　俺は？　俺は……あれ？　取り残され……え？　ちょ、嘘でしょ？

「い、いやそんなわけ……」

だ、だってさ、ほら、これ、分かるじゃん？　お、俺はここにさ、いるわけでして……車に俺は乗ってないわけで……なのに車は発進したわけで……ちょ、あの、え、嘘、マジで……？

「ま、前川さぁん！？　まだ俺ここにいるよぉ！」

俺の悲痛な叫びは雨に掻き消されたのは言うまでもない。

第８４話　風邪の引き始め

「へぇ。それで将也はどしゃ降りの中、自転車を走らせて帰ってきたわけね……ぷっ」
「笑うな」

部屋のベッドの上、毛布に包まれた俺を嘲笑うかのように米太郎が手で口を押さえている。口元は見えないが目は完全に笑っていやがる。ムカつく。超殴りたい。結局雨は止むことなく、俺は寒さと心細さに耐え切れず自転車に乗った。雨ニモマケズ、風ニモマケズの宮沢スピリットで家まで走り抜けたのだ。あ～、寒かった。春日のことで頭一杯だった前川さんは家に着いてから俺のことに気づいたらしい。さっき前川さんから電話越しに何度も謝罪された。床が擦れるような土下座している音が聞こえたのは気のせいであってほしい。電話で土下座されても、ねぇ。

「将也と、佐々木君～。ご飯できたわよ」
「は～い、今行っきま～す！」

下から聞こえる母さんの声に嬉しそうに反応する米太郎。なぜ我が家に農家の息子がいるのか。豪雨と強風の勢いは増して、ついに電車も止まってしまった。なので春日の家に遊びに来た水川と火祭、米太郎は帰ることが出来ず春日と俺の家に泊まることに。水川と火祭は春日の家に、米太郎は俺の家に泊まることになったのだが……

「あ～あ、どうせなら春日さんの家に泊まりたかったな。あんな豪邸、こういう機会がないと行くこともないし」

晩飯を食べ終えて俺の部屋に戻ってきた米太郎がぐちぐちとそんな

こと言ってきやがった。ああ？　俺ん家なめてんのか。つーか勝手にゲームしてんじゃねぇよ。レベル上げを着実にこなしていく米太郎。攻撃役と回復役をバランスよくパーティ編成、アビリティの活用や戦闘での無駄のない動き、最適なタイミングでの回復。完璧過ぎて逆にウザい。なんだこいつ、なんでこんなにやり慣れているんだよ。

「今頃あっちでは水川と火祭と春日さんが楽しく豪華な食事でもしているのかなぁ。おもてなしのクッキーであの美味しさだったから、ディナーとなったら……くぅ～惜しいことした！」

ほう、俺が大粒の雨に激しく打たれていた時、お前は快適な春日の家で悠々とクッキーを頬張っていたんだな。……む、ムカつく！

「あるいは入浴中とか？　ま、まさか三人一緒に入っちゃったりして……！　うひゃあ、興奮するぅ。俺もその中に混ざりたいっ。裸の付き合い……でへへへ～」

「さっきからうるさいな。大人しくレベル上げしとけ！」

「あぁ！？　いつの間にかパーティー二人が混乱状態に……エスナしないと」

混乱状態なのはお前だろうが。……はぁ、キツイ。これぜってー風邪のひき始めだよ。体がだる重い。帰るまでずっと雨に打たれ続けたからな。プールに飛び込んだってぐらい体はびしょ濡れになった。

「あっちはあっちで楽しんでいるんだろうな……。女子の泊まり会ってどんなんだろ？」

知るかよ。春日達は春日達でウキウキお泊り会……いや待て、春日は大丈夫かな？　風邪引いてないといいけど。後でメールしとくか。

「佐々木君、お風呂沸いたから入っていいわよ」

廊下から母さんの声が。わざわざ上がって来なくてもいいのに。

「あ、分かりましたぁ。じゃあ風呂入ってくるな。……覗くなよ？」

「お前の死に際は是非とも拝みたいけどな」

コントローラーをこちらに渡すと米太郎はうふふと上機嫌に部屋から出ていった。代わりに入ってくる母さん。手に持ったお盆の上には水の入ったコップとカプセル状の薬があった。

「あ、将也！　風邪気味なのにゲームしちゃ駄目でしょ！」

ちょ、違うって。これは米太郎が……って全滅してるし！　うわ、なんで隠しボスに挑戦してんだよ。勝てるわけないだろ、レベル低いんだから。あーあー、せっかくレベル上げたのに……最悪だなおい。

「はい薬ね。ここ置いとくから一気飲みしなさい」

な、なんで一気なんだよ？　悪ノリ大学生か。いや普通に飲むから。

「じゃあ安静にしておくのよ」

そう言って母さんはすっとゲームの電源を消して部屋から出ていった。よく電源のボタン分の場所分かったな……。まあいいや、また後で米太郎にやってもらえばいいし。

「……寝るか」

体だるいしキツイし。薬を飲んで、ベッドに沈みこむ。はぁ～今日は疲れた。今日一日で色々あったな。あー、思い出すのも疲れそうだ。机に置かれた米太郎の漬け物タッパーに舌打ちをしてそのまま俺の意識は深い奥底へと落ちていった。

「……さや。将也、おい将也。起きやがれ」

「……あ？」

誰だ、人の安眠を妨げやがって……うわ、頭痛ぇ。それに何か熱っぽいし完全に風邪ひいてしまったか？

「起きろって将也」

目を開けばそこには米太郎の姿が。もう起きたから体を揺らすのはやめてくれ。頭がグラグラするから。どれくらい寝ていたのだろうか、今の何時なのかよく分からない。例えば、今は九時だよと言われても、それって朝の九時？　それとも夜の九時？　みたいな感じになりそう。

「グッドモーニング将也」

「もう朝か……」
「いや今は夜の八時半だ」
「グッナイ米太郎」
「待〜て待て待て待て。水川から電話だ」

あ？　水川からって一体何の用だよ。ズキズキと痛む頭を押さえつつ米太郎から携帯を受け取る。あ〜、しんどい。

「もしもし？」
『あ、やっと兎月が出てくれた。兎月の携帯にかけたのに佐々木が出て鬱陶しかったんだよ』

米太郎は嫌われているんだな〜、可哀想に。

『なんでもう寝てるのよ？　早過ぎや。自分はええ坊ちゃんとこの小学生か』
「関西なツッコミはやめてくれ。体調悪いから軽く横になっていただけだよ」
『え、体調悪いの？　風邪引いちゃった？　大丈夫なのそれ、って桜？　ちょ、桜待っ……わ、分かったって代わるから』

ん？　何やら向こうでバタバタと騒いでいるけど……どしたの？

『と、兎月、今から桜に代わ…もしもし!?　まー君？』
「火祭？」

急に水川から火祭に代わった。あとあんまし大きな声出さないで。頭に響くからぁ。

『だ、大丈夫？　熱があるの？　ちゃんと水分取っている？　暖か

い格好してる？　お薬飲んだ？』
「多い多い、質問が多いってば！」
なだれ込むように怒涛の質問ラッシュ。心配してくれるのは嬉しいけど、ちょっと落ち着いてよ。
『だ、大丈夫なの？』
「まあ、そこそこ」
『ちゃんと寝てないと駄目だよ？』
あ、あなた達が起こしたんでしょうよ。何言ってるのさ。いや、水川達は俺が風邪気味だと知らないで電話したのだから悪くないよな。悪いのは風邪引いた俺……ってあれ？　俺が悪いの！？
「そっちはどうなの。三人仲良くやってる？」
火祭と春日が心配だ。あの二人、俺と絡むとどっちかが機嫌悪くなるからな。ちゃんと仲良くしてる？
『うん、こっちは楽しいよ。三人で大きなお風呂に入ったよ』
「マジかよ！？　うはーっ！」
米太郎うるせーよ！　俺のすぐ傍で聞き耳立てていた米太郎は火祭のお風呂発言を聞くや突然奇声を上げて踊りだした。き、気持ち悪っ。ふしぎなおどりはやめい。
『な、何今の声？　佐々木君の声？』
「あ、ごめん聞こえちゃった？　そう米太郎が興奮しちゃって」
『……真美がサイテーだって』

どんどん嫌われていくなぁ米太郎は。行く末は変態貴公子だな。隣でテンション上がりっぱなしの変態貴公子はほって置いて火祭と会話再開。

「楽しくやっているならいいんだ。あんまし夜更かししたら駄目だぞ？」

『えー？　そうはいかないよ。春日さんとは色々と話したいし』

春日と？　何を話すのやら。喧嘩だけはしないでね。

『あ、ちょっと待って。春日さんと代わるね』

火祭の声が途切れて、そこからはひたすら無音。

「……ん？」

『……』

……春日さん？　お電話代わったんじゃ……あれ？

「もしもし、春日？」

『……』

この感じ……春日だ。電話じゃ分かりにくいが電話の向こうに人の気配を感じる。明らかに春日がいる。そして俺の問いかけに無視しているのだ。こ、こいつ……！　人が痛む頭を上げて電話に出ているってのに無視はあんまりでしょうが。

「か、春日？　応答願いますぅ」

『……』

またもや無言。しょうがない、押して駄目なら引いてみろってやつか。

「出ないか。じゃあ切るな、おやすみ」

『待って』

「出るじゃん！」

ほ～らカマかけたら、すぐに返事きた。電話でも無視してんじゃないよ。

『……別に』

「何がだよ。それより体調はどう？　風邪ひいていない？　怪我は大丈夫？」

あ、俺も質問しまくりだ。火祭のこと言えないな。

『……大丈夫』

おぉ、良かった。春日が風邪引いたとなると、それは俺のせいなわけで。電話越しに頭を何度も下げなくてはならなかった。前川さん状態になるところだったよ。

『……兎月は？』

「俺も大丈夫だよ」

『……さっき体調悪いって』

「少し気分が悪いだけだって。寝れば良くなるよ」

『……早く寝なさい』

なっ……だ、だからあなた達のテレホンで起こされたんだって。何この俺が悪いみたいな感じは！？　やっぱり俺が悪いのか！？

「ね、寝ます。そっちも夜更かししたら駄目だからな」
『……』
「……ほどほどにね」
『……うん』

はぁ、返事してくれた。何をそんなに深夜まで話すことがあるのやら。

「じゃ、おやすみ」
『……うん』

そこはおやすみって言ってほしかったな。うん、ってそんな無愛想にしなくても……。

『あっ……もしもし？　まー君？』

春日の声から火祭の声に代わった。火祭が無理矢理奪ったのかな？
何やら電話の向こうが騒がしいけど。

『ちゃんと寝るんだよ。水分取って、しっかり着込んでね』
「う、うん、分かった」

まるでお母さんだな。火祭はきっと良いお母さんになるであろう。
春日と違って。

「じゃ、おやすみ」
『うん、おやすみなさい』

……き、キター！　これだよこれ。このおやすみなさいを聞きたか

ったんだよ。耳を撫でるかのように柔らかで心地好い響き。あぁ…毎日聞きたい。つーか火祭と結婚したい！　ははっ、調子乗っちゃいました？　すいませんね、興奮しちゃって。

「おい将也、俺に代われ」
「ぐあっ」

ささやかな幸せに包まれていた俺を薙ぎ払うように米太郎が押しのけやがった。そして奪われる携帯。こ、この野郎！

「もしもし、佐々木だよ。ねぇねぇ、お風呂三人で入ったんでしょ？　誰の胸が一番大きかった？　ねぇ、教え……あれ？　プーップーッ言ってるけど……もしもし、聞こえてる？　あれ、嘘……切られた！？」

電話も切ったし、火祭達もキレてると思う。この変態貴公子に常識とデリカシーはないのか。

「将也ぁ、電話切られた」
「ドンマイ。つーことで俺は寝ます。いい夢見れよ米太郎」
「待て」

あ、まだ何か言いたいことでも？

「人がせっかく泊まりに来たんだぞ、遊ばなくてどうする！」

そう言ってゲーム機の電源をオンにする米太郎。いやいや、俺自身はもうオフ状態だから！

「ふざけるな、俺は体調悪いんだよ。夜更かしでゲームなんてした

らさらに悪化するっての」

やるならお前一人で勝手にやれ。レベル上げよろしく。しかし隠しボスとは戦うな。その楽しみは俺にやらせろ。

「ほう、そう言って逃げるのか。情けないな」

「そんなもやし並に安い挑発に乗るとでも思ったか。頭を品種改良して出直してこい、馬鹿お米太郎が」

「やれやれ、まさか将也がこんなヘタレもやしだとはな。や～いチキン野郎」

……んだと？　今……ヘタレって言ったか？

「……上等だ。確かに俺はヘタレだがなぁ、お前に言われるとすっげームカつくんだわ！」

こんな安い挑発でムキになるのは馬鹿げている。けどここで引き下がるのは我慢ならねぇ！

「お、やるか？」

「俺の格ゲーの強さ教えてやるよ……完膚なきまでにぶっ潰してやる！」

「イエー！　それでこそ将也だ。朝までバトろうぜ！」

うおおっ、やってやるぜ！

そこから朝までの記憶は残っていない。

第85話　熱が上がる看病

「ごほっごほっ……」

……最悪の朝だな。しかめっ面で朝を迎えたのは中間考査の完徹の時以来だ。あ～、気持ち悪い。

「38度4分か。おほ、見事な風邪だな。夜中ずっとゲームしていた将也が悪い」

「だ、誰が誘ったと、ごほっごほっ。く、そ……」

ベッドで寝込む俺の横には涼しげな顔を浮かべた米太郎がいる。どうしてこいつはピンピンしているんだ……風邪移りやがれ！　くそ、マジで頭痛い。米太郎の安い挑発に乗ってしまい夜通しゲームにのめり込んだのが愚かだった。テンションと共に熱も上がってしまい風邪気味から正式な風邪とランクアップ。最悪だ……。

「ま、今日は学校休みだし大人しく寝とけよ」

昨日の豪雨は台風上陸の影響だったらしく今も強風が窓を叩きまくり。先ほど学校から今日の補習は休みだと知らせが入った。こんな嬉しいことはない。風邪さえ引いていなければ。

「いやーホント楽しかったな。やっぱ深夜にするゲームは面白い。変なテンションになっちゃうからさ」

「変な顔のお前に言われたく、ごほっごほっ…ないわ……」

「おいおい、ツッコミのキレも声も出てないぞ。いいから安静にしとけ」

な、なんだそのやれやれ世話のかかる奴だなみたいな感じは。誰のせいでこうなったと思っているんだよ。お前のせいだからな！

「佐々木君、お迎えの車が来たわよ」

下から聞こえる母さんの声。お迎えの車……前川さんか。

「前川さんによろしく言っておいてくれ」

「将也が直接言えばいいじゃんか」

この状態で言えるか。それに俺が風邪引いたのが前川さんのせいだと勘違いされたくないし。風邪が悪化したのは俺自身のせいであって、前川さんに土下座されるのはとても気まずい。前川さんは何も悪くないのだから。

「将也は大丈夫です、って言えばいいんだろ？　任せとけ」

「ありがとな米太郎」

「友達のピンチを助けないなんて友達じゃないだろ？」

そのピンチを作ったのは誰だ。お前は友達じゃねぇ。電車は動いてないから米太郎は前川さんの車で帰るらしい。と、さっき電話しているのを聞いた。

「じゃ、俺行くわ。後のことは任せてあるから」

えっ、後のことは任せてある？　どういう意味だよ。それだけ言って米太郎は部屋から出ていった。残されたのは俺と頭を襲う痛みと熱。……寝るか。寝れば大体の病気は治るしな。勇者一行だって宿に一泊するだけでＨＰ全回復するし。おやすみなさい……っと。外から聞こえる車の発進する音と共に俺も夢の国へと旅立った。

……ん、おでこがひんやりする。なんだろ……気持ちいい。瞼は重く閉ざされていて、どう頑張っても開かない。ただ、おでこから心地好い冷気が全身に広がり、体がどことなく軽くなる。あ～気持ちいい……なんだろこれ？　誰か傍にいるのか？　真っ暗な視界の片隅から聞こえる微かな音。母さん？　うん、そうに違いない。カラオケでオールしたじいちゃんを迎えに行くついでに買い物するからアンタの面倒なんか見てられない。と冷淡に突き放していたけど……やっぱ母親だな、子供のことが心配なのか。きっと冷えピタを貼ってくれたのだろう。あ～涼しくなった……おかげで、また眠たく……なっ……

……大分寝たな。……んっ、なんだろこれ……？　ペタペタと俺の顔を触ってくるのは……。これは……手？　どうやら手みたいだ。執拗に俺の顔面を触りまくってくる。何、これ？　くすぐったいんですけど……うわっ、頬をぐに～してきた。ほっぺが左右に伸びるのが伝わってくる。だ、誰だ……母さんか？　何してるんだよ……。

「……うっ」

「きゃ」

きゃ？　何いまの可愛らしい声は……。あんな可憐な声、母さんに出せるわけない。あれは間違いなく若い女の子の声……だ、誰だ？

重たい瞼を懸命に開く。途端に入ってくる眩しい光と……一つの可愛らしい顔。そうそれはまるで……女神様？

「お、起こしちゃった？」

「……火祭？」

ぼんやりとした視界が徐々に明細色鮮やかになっていき、ようやく頭も覚醒した。ベッドの横には火祭が座っていた。ってことは、

「頬引っ張ったのは火祭か」

「う、うん」

……なんでそんなことしたのさ。俺はおもちゃじゃないぞ。って、それより、

「なぜ火祭が俺の部屋にいるの？」

おかしい、おかしいぞ。昨日俺の家に泊まったのは米太郎だけ。火祭は水川と一緒に春日の家に泊まったはず。俺の記憶ではそうなっている。ではどうして火祭がここにいるのか。説明プリーズ。

「佐々木君から電話があって、まー君が風邪引いたから看病してやってくれって頼まれたの」

「……あー、そうゆうことだったのか」

米太郎の謎の置き台詞の意味はこれだったのか。最初からそう言えよ、あの野菜馬鹿が。

「ってことは冷えピタ貼ってくれたのも火祭か。母さんはどうした？」
「お母さんは買い物に行かれたよ。馬鹿な息子の面倒は見たくないって」
あのババア……しっかり有言実行しやがって。少しは息子の心配しろよ。
「熱測ったけど３８度もあったよ……。大丈夫？」
熱下がってないのか……頭の痛みは大分引いてるんだけどな。よし、これなら起きれそうだ。
「よっ、と」
「起きて大丈夫なの？」
「うん、大丈夫っぽい。朝よりは気分も良くなってる」
それにしても、マジで女神様かと思った。聖母のように穏やかで温かく全てを抱擁するかのような愛しい微笑み。水川のあだ名がマミーなら、火祭のあだ名はマザーだな。
「今、何時？」
「十二時前だよ」
「火祭はいつからここに？」
「九時から」
「そっか……暇だったでしょ？」
「ううん。アルバムとか卒業文集読んでいると楽しかったし」
ふと机を見ると、小学校のアルバムから中学校の卒業文集まで思い出の品がズラリと。俺の過去が全て暴露された気がする。は、恥ず

かしい……。

「まー君はどうして彼女と別れたの？」

「えぇ！？　いや……別々の学校行くから」

なぜか元カノのこともバレてるし……！　も、もう嫌だ！

「そ、それより俺なんかの看病なんて退屈だろ？　もう帰っていいよ、後は一人で大丈夫だから」

「駄目っ、まー君は安静にしていて。私が面倒見るから」

ベッドから起き上がろうとしたら火祭に押し戻された。いや、看病してくれるのは嬉しいけど……なんか介護されてる老人みたいでさ、面目ないというか。

「お腹すいてる？」

「いや、食欲ないや」

「駄目だよ、ちゃんと食べないと。栄養取らないと病気には勝てないよ。お粥作ったから持ってくるね」

え、お粥を……。火祭が作ってくれたの？　しばらくして火祭が戻ってきた。両手に持ったお盆の上には湯気だった土鍋とコップ。食欲そそる良い匂いが鼻をくすぐる。

「はい」

「これ、火祭が作ったの？」

「そうだよ。……駄目、かな？」

「全然！　つーかすごくね！？　ここまで作れたら立派だって」

見た目完璧だし、すげーおいしそう。これはもう母さんのやつを越

えたに違いない。見た目で大勝だ。これで味は最悪だなんてオチは勘弁願いたい。つーか火祭が作ったなら大丈夫なはず。

「食べていい？　見てたらお腹減ってきちゃって」

「う、うん！」

れんげを受け取り、一口分を掬う。フワッと広がる湯気とお粥の良い匂い。ふーっ、とほどよく冷ましてから口へと持っていき、一口ぱくり。……、

「ど、どうかな……？」

「……美味い。これ美味いよ！」

普通に美味しかった……！　見た目完璧で味最悪みたいな裏切り展開じゃなくて良かった。ヤバい、マジで美味い。お粥の甘みが全身に染み渡る……ああ、最高。火祭の手作りってだけで美味しさ倍増だしね！

「ホント？　良かったぁ」

火祭も安心したように両手を合わせる。俺、幸せだなぁ。あ、もう止まんないこれ。美味しすぎて手が止まらないよ。あぁ～、こんな幸せで俺はいいのだろうか。

「……ちょっと貸して」

美味しくバクバクと食べていると火祭がれんげを指差した。言われた通りにれんげを渡す。すると火祭はお粥を掬って、

「ふー、ふー」

息を吹きかけて冷ます火祭。……ちょ、まさか、だとは思うけど……これは……！？

「は、はい！　あ、あーん」

っ！？　こ、こいつぁもしかして。あーんって……あーんって！？　ラブコメの王道イベントじゃないか……。い、いいの？　こんなことあっていいのか！？

「ひ、火祭さん……それはさすがに恥ずかしいから。一人で食べますから」

「わ、私だって恥ずかしいよ。けど……まー君に早く良くなってほしいから……」

ぐうっ、ヤバい……グッときた！　ど、どストライク……可愛すぎるでしょ……！　こんなこと言われちゃあ、

「はい、あーん」

「あ、あーん」

もう甘えちゃうって！　反則だよその台詞は……！　うおっ、火祭に食べさせてもらうことでさらに美味しく感じる。比喩なしに本当に美味しく感じる。これなら風邪もまんざらじゃないな。週一でなりたいくらいだ。

「はい、あーん」

「い、いや後はもう一人で食べるって」

「あ、あーん！」

「ちょ……」

「あーん」
「……」
「あーん……」
だから上目遣いは反則だって！
「くっ、あーん！」
……ずっとこれ？　恥ずかしくて悶え死にそうなんですけど……。
風邪とは関係なしに顔が真っ赤なんですけどぉ！？
顔から火が出る思いをした昼食を終えて、またベッドでぐったりする。別の意味で疲れた。他に誰もいなかったからまだマシだったけど、あんなの教室でされたら……。ラブコメの主人公はたくましいな……尊敬するよ。
「ちゃんとお薬飲んだ？」
食べ終わった食器を片づけた火祭が戻ってきた。
「飲んだよ。ごめんね、何から何までやってもらって」

「まー君は病人なんだからしょうがないでしょ。私に任せてよ」
「そう言われても……やっぱ申し訳ないというか、ごめん」
「まー君っ」

ガッと両手を掴まれた。な、何どしたの？

「まー君は言ったよね、謝るよりありがとうと言ってほしいって。その台詞そのまま返すよ。私もありがとうって言われた方が嬉しい」
「そ、そう？　なら……ありがとな」
「うん、どういたしまして」

……ズッキュンときた！　熱の影響かな？　火祭がいつもより可愛く見える。本当に好きになりそうだよ……。思わず、好きだ！　って言いそうになっちゃう。いかんいかん、火祭の厚意に対して失礼だろうが。自粛しろ俺！　爆発しろ俺ぇ！

第８６話　負けるな理性

「お加減はどう？」
「うん、大分良くなったと思う」

ご飯も食べたし、テキトーに寝ていたら治るでしょう。というか治さないと火祭に申し訳ない。てことで俺の回復力よ、何が何でも治せ。いいか、絶対にだぞ！　……ん？

「あの、火祭？　それは何？」

ふと気になるものが視界の端に写った。火祭のすぐ横にはタオルと洗面器。洗面器からは湯気が出ているけど……お湯？　なぜお湯が……それにタオルって……っ、はは、ちょっと嫌な予感……。

「あの……まさかと思うけど、それって……」

いやいやそれはないでしょ。漫画の見すぎだって。ありえないって。そんなわけがない。いくらなんでもそれはない。

「まー君、汗かいたでしょ。お風呂に入れないから、これで……」
「……嫌だ！」

いやあぁっ！　出たよ、病人イベント第２弾！　よくドラマで見かけるやつきたよこれ。怪我して入院した男性が看護婦さんにタオルで拭いてもらうやつでしょ。あ、あんなの恥ずかしくて出来ないよ！

「駄目、お風呂入ってないでしょ？」
「昨日ずぶ濡れで帰ってきてすぐにシャワー浴びた」

「そこから時間も経っているし、意外と寝汗かいてるはずだから。はい」

手の平を前に差し出す火祭。な、何ですか？

「ハイタッチ？」

「違うよ。服、早く脱いで」

「……い、嫌ぁ！」

絶対に嫌だぁ！　こんな辱めを受けるなんて聞いてないぞ！

「どうして？」

「恥ずかしいから。それ故に！」

なんで同級生の前で上半身裸にならなくてはならんのだ。しかも自分の部屋で。その状況で誰か入ってきたら勘違いされるじゃないか。

「駄目、体拭かないと」

そう言って火祭はタオルをお湯につけだした。ヤバい、強制執行だ。言い逃れなくては……！

「つーかお風呂ぐらい入れるって。なにもこんなことしなくても……そんな重傷じゃないよ俺？」

「３８度越えは安静レベルでしょ。だからまー君は大人しくベッドで寝ていないと」

安静レベルって何だよ！？　い、いやだから服脱がそうとしないでぇ！

「わ、分かったから！　だったら自分でするから火祭は廊下で待ってて！」
「駄目！　私がするっ」
「それが恥ずかしいのぉ！」

「はい、服脱いで」
「……はい」

結局その後、火祭必殺の上目遣いアンド「まー君に早く良くなってほしいから……」のダブル攻撃にノックダウンしてしまった俺は大人しくされるがままになった。な、なんでこんなことに……。こんな展開になるなんて思ってもみなかった。恥ずかしくて涙が出てきそう。そして決して嬉しいだなんて思っちゃいけない。そいつぁいけない。う、嬉しいだなんて思っちゃいけないの！　はぁ、こんな精神を擦り使わなくてはならんのだ。これくらい自分で出来るっつーに。

「なんでここまでムキになってするんだよ……」

思わず溜め息がこぼれる。こんなのもうお嫁に行けないよぉ……。

「……ここでリードしておきたいから」
「ん？　リード？」
「う、ううんなんでもないっ」
何ですかリードって？　よく分からない。
「いいから早く！」
「はいはい……」
しゃーない、腹括るか。恥を捨てろ、もうプライドだなんてものは燃えるゴミに出してしまえ。はぁ、脱げばいいんでしょ脱げば。上体を起こしてシャツを脱ぐ。あらわになる胸部と艶やかな肌、って何言ってんだ俺……気持ち悪いわ。これといってたいした運動もしていない俺はマッチョでもないし、たくましい上腕二頭筋も持ってない。ごくフツーのボディです。
「う、後ろ向いて」
そして赤くなる火祭。ちょ、俺の方が数倍恥ずかしいからね！
「じゃあ…拭くね……」
火祭に背を向けて俺は壁と睨み合い。壁と話してろ、とどこかのガンブレード使いも言ってたな。こんな状況じゃ話すどころか呼吸もままならないわ！
「……」
温いタオルが撫でるように背中を行ったり来たり。こそばゆくて背筋がブルブルッと震える。な、何だろこの感覚……すっげぇムズム

ズする。

「痛くない？」

「う、うん大丈夫。つーか気持ちいいくらい」

「そ、そう？」

背中を拭き終えた火祭は俺の手首を持ち上げる。うぅ！？　恥ずかしくて顔が燃えるように熱い……！　腕を優しく包みこむタオルと火祭の手から伝わる温もりが……うあぁっ！？　頭おかしくなりそう。早鐘のように心臓が激しい鼓動を打つ。ま、マジで口から心臓が飛び出そうだ。心臓ゲロって吐きそうなくらい動悸が激しくて逆に汗が滲んできた……これ以上は、もう……。

「じ、じゃあ前向いて……」

右腕、左腕と拭き終えて残すは前方のみ。くるりと体を反転させて火祭と向き合う。

「え、えっと……」

「あ……っと…」

火祭の顔が真っ赤なら俺の顔も真っ赤っか。あ、ありえないもん…火祭と半裸の俺がベッドの上で向き合っているなんて。間違いが起きる一歩手前じゃないか。Ｒ－１５のタグをつけなくては。

「じゃ、じゃあ前も……」

そしてゆっくりとタオルを持った火祭の手が俺の胸に近づいてくる。くっ、さっきまでは後ろ向いていたから大丈夫だったけど、顔を合わせるとなると……さらに心臓バクバクだ。いつ破裂してもおかし

くない。
よく見たら火祭の手も微かに震えている。徐々に荒くなっていく俺と火祭の呼吸。正面から漂う火祭のシャンプーの香りと息遣いに頭がクラクラしてきた。

「あ……」

ピタッと胸部に張りつく濡れタオルにピクンと体が反応する。火祭もベッドに乗りかかってきて、ぐっと二人の距離が近づく。……あぁ……これ以上は……

「もう無理ぃ！」

ぐあああああぁぁぁっ！　なんだこれ、やっぱマズイよ！　死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ、精神的に死んでしまう。これ以上はヤバいって！　俺の中の野獣が目覚めちゃう！　まさか…暴走!?　とかリツコさんに言わせたくないし。
茹で上がった頭をフラフラさせながらも火祭からタオルを奪い取る。ぶっ倒れそうなのは風邪のせいか、はたまた火祭のせいか。

「あとは俺がやるから大丈夫！　火祭は廊下に出ていてぇ」
「ま、まー君？」

ベッドから跳びはねて火祭を部屋から押し出す。扉を閉めてその場にへたれこむ。あ～……死ぬかと思った。回春サービスじゃないんだから興奮したら駄目だって。あ、ある意味貴重な体験だった……。

「大丈夫？」
「大丈夫だって、あとは寝れば回復するから」
火祭にはお粥食べさせてもらったり、体拭いてもらったりと世話になった。この恩はいつか返さなくては！
「今日は本当にありがとう。火祭のおかげで随分と元気になったよ」
「わ、私もまー君が元気になってくれて嬉しいよ。もう夜更かししちゃ駄目だからね」
俺が夜通しゲームしたこともバレるし……米太郎め、言いふらしたな。
「あ、真美から伝言預かってたんだった」
「水川から？」
「えっと、『馬鹿、能無し。そのまま消えてしまえ』……だって」
「ひ、火祭に言われているみたいで、すげー傷つくんだけど……」
水川から直接言われるならまだしも、火祭の口から聞くとなるとね。涙が出てきそうだよ。
「わ、私が言ったんじゃなくて、真美が言ったの」
「マミーめ、明日覚えとけよ。あ、そういや春日は大丈夫だった？」

風邪引いてないか心配だし、怪我の容態も気になる。もし尾を引く怪我だったら……春日の親父さんに土下座で謝罪しなくてはならない。

「恵は元気だよ。足の怪我も今日安静にしていれば治るらしいよ」
「それは良かった……ん？　今、恵って言った？」

確か火祭は春日のことを春日さんって呼んでいたはず。いつの間に下の名前で呼ぶようになったんだ？

「うん、昨日いっぱいお話して仲良くなったの」
「へぇ、そりゃめでたい」

あの二人は俺といると、ギスギスしていたからな。仲良くなるのはいいことだよ。

「友達でもあるし、ライバルでもあるからね」
「ライバル？　何のライバルなのさ？」
「ううん、なんでもない！」
「？」

ライバル……ああ、勉強とか？　二人とも頭良いからね、お互いに切磋琢磨していこうというやつか。いいねぇ、そういう関係。サトシとシゲルみたいだ。いや、レッドとグリーンか？　まあどっちも同じだけど。

「じゃあ私帰るね。お大事に。ちゃんと水分はこまめに取るんだよ？」
「オッケーオッケー。大丈夫だよ」

現在三時前。台風も過ぎ去って、外は打って変わって快晴。またいつもの蒸し暑い夏へと戻っていた。

「本当にありがとうな。火祭がいなかったら俺は死んでいたかもしれないよ」

「大袈裟だよ」

「いやいやホント。この恩は必ず返すよ」

「そんなのいいって。まー君は私を助けてくれたんだから、寧ろこれが私からの恩返し。ありがたく受け取ってよ」

ひ、火祭……！　嬉しすぎて俺泣きそうだよ！　こんな親友を持てて俺は幸せ者だよ。

「あ、ありがとう……。じゃあまた明日」

「うん、バイバイ」

天使の微笑みが部屋から出ていって、残されたのは俺とポカポカした幸福感。うふふ、早く風邪治さないとね！

第87話　来訪、春日家

とある高級車、簡単に言ってしまえばリムジン。庶民は乗るどころか一生のうちに拝むことすらないであろう金持ちの象徴。そのリムジンさんに乗るのはまさかの庶民、俺。さらには似合いもしない高級スーツを着ているのだからびっくりだ。俺こと兎月将也、今年で十七を迎えるまだまだ親の脛をかじる子供。そんな高校二年生の俺がリムジンに乗るのもスーツに身を包むのもおかしくて奇天烈なことこの上ない。世界不思議発見としてピックアップされてもいいくらいだ。なぜ庶民の俺がこのような金持ち的ビックな扱いを受けているかクエスチョンを問いかけたい。正解者にはスーパーまさや君人形を贈呈しよう。

「着きました、兎月様」

そして今の俺にそんなジョークを楽しんでいられるほどの余裕なんてものはない。こんなスーツを着てリムジンで送迎されて俺が今から何をするのか、そして何をされるのか。それを考えるだけで吐き気を催すのには十分だ。気持ちが悪くなってくる。恐怖と不安で胸一杯、ガクガク震える膝はどう押さえても止まらない。落ち着こうとして一度深呼吸、すーはーと気持ちを静めようとすれば車のドアが開いた。そのせいでさらに動悸が激しくなった。さっきから心の警鐘が止まない。これはヤバいと告げられているような感覚。そりゃもうさっきからずっと第六感の俺がこう言っている。「おいヤベェってマジで。なんかヤバげな感じがすごいぞおい。俺ってばこういうの分かるんだよ、これってヤバいやつだぜ。命に関わるような危険な匂いがするって。なあ、帰ってウイイレやろうぜ」と。残念ながら戻るという選択肢はないのです。大人しくリムジンから降りる。

「さ、どうぞこちらへ」

顔全体が真っ青であろう俺を丁寧に案内してくれるのは、清楚できちんと身なりを整えた初老の男性。この人はとある家の専属ドライバーの前川さんという人だ。とても良い人。しかしそんなことは今はどーでもいい。前川さんには失礼だが、ホントにど～でもいい。それより俺は窮地に立たされているのだ。前川さんは運転手。どこの家の？　それは……春日家だ。はい正解、スーパーまさや君人形……じゃなくて。クイズしてる場合じゃない。そう春日家だ。はいはい春日の家に到着でっせ。目の前に見えるのは超がつく豪邸ですよ。超豪邸。さすがは金持ちといったところだ。とまあ門をくぐり玄関へと足を進めるのだが、恐怖で足が思うように動かない。呼吸もしづらくなってきた。だって死へのカウントダウンが近づいて……

「応接間でお待ちになられております。どうぞこちらへ」

前川さんに誘導されて家の中を突き進む。さてと、いよいよ死が現実味を帯びてきた。ちょっとまあ走馬灯がてらここまでの経緯をおさらいしましょう。

俺こと兎月将也は春日恵の下僕をやっています。春日の命令には逆らえないヘタレな犬体質なのは今回は関係ないので省略。つい先日、台風が来たのですがその時、俺は自転車に春日を乗せて帰っていました。そこで運転操作を誤り、転倒。春日に怪我を負わせた挙句、台風による豪雨で春日をずぶ濡れにさせてしまった。結果を述べると春日はたいして体調は崩さず、足の怪我もさほど悪くなかったのだ。うん良かった、ハッピーエンド。とはならない。なぜなら春日父、もとい親バカ野郎がいるからだ。この春日父という者は非常に厄介だ。娘を愛するばかりに周りが見えず常識を忘れた非道な行動に出る。平然とチャカを取り出すような奴だ。そして俺は今、とあ

る人物が待っている応接間へと向かっている。うん、一応最後の抵抗としてもう一度確認してみたけど間違いないよ。俺はもうすぐ……殺される。第六感、お前の言ったことは正しい。ウイイレやろうを除いて褒めてやる。そうさ、俺は親バカの逆鱗に触れ、こうやって絞首刑の階段を登っているんだよ。第六感の俺よ、見事正解だ。冥土の土産としてスーパーまさや君人形を贈呈。

「入れ」

……うん、渡す暇もなくボッシュート。そして俺の命もボッシュート。全然笑えない。さっきから恐怖で膝は笑いっぱなしだが。扉の奥から聞こえた重低音の声。体全体にのしかかる寒気と殺気がおぞましい。

「……失礼します」

入る前に横をチラリ。前川さんが哀愁漂う顔で敬礼していた。あ、この人がこうするってことは本当にもう駄目なんだね。本当に俺ってば終わりなんだ……ははっ、あっという間の人生だった。ごめんね父さん母さん、親より先立つ親不孝な息子を許してくれ。そしてじいちゃん、この前俺のゲームを勝手に売ったこと、俺は死んでも許さないから。

「前川さん、今までありがとうございました」

前川さんに微笑みかけてグーサイン。最後の強がりを見せ、いざ入室。応接間とあって部屋の中央にはテーブル、それを挟んでソファーが二つ。前に見た時と同じ配置だ。しかし今の俺には酷く捻じ曲がって見えた。テーブルが斬首台に見えて仕方ない。ソファーが電気椅子に見える。そして春日父がレッドピラミッドシングに見えた。

怖い。なんだこの人、怖いよ。ソファーに腰掛ける春日父。その手元には日本刀。おかしいおかしい、クレイジー過ぎるぞ普通に考えて。だがこの人は普通でないので普通という概念を懇願するだけ無駄。とにかくこの人ヤバい。部屋には俺と春日父の二人だけ。おいおい、もうホントに終わりじゃん。ジエンド極まりない。

「そこに座れ」
「……はい」

渇いた口をパクパクと動かして応答。震える足でソファーまで移動して着席。電気が走った。マジ死ぬかと思った。いや実際に電流が流れたわけじゃなくて春日父と対峙しただけでビリビリィと戦慄が奔っただけ。もう怖くて死にそう。

「お父さんは元気にしているかな」
「そ、それなりです」

なんだその差し当たりのない会話は。んなもんいらねぇだろ。だってアンタは俺を殺すつもりなんだから。日本刀持った奴にお父さんは元気？　だなんて聞かれたくねぇよ。

「そうか」
「はい……」

春日父。この人とは二度会ったことがある。一回目は春日誘拐の時。あの時も無表情で銃を取り出していたな。誘拐犯を殺す気満々だった。そして次に会ったのはまさにこの部屋。春日と金田先輩の婚約騒ぎの時だ。俺は部屋に乱入して結婚をぶち壊しにした。それはなんと結果的に春日と金田先輩の両方にとって良いものになった。それもあってか、その時の春日父は俺に対して殺意はさほど向けず、

それどころか感謝の意を述べてくれた。そう、俺は一応これまで曲りなりに春日父に尽くしてきたのだ。春日を助け、春日を救い。そして今回は春日を傷つけてしまった。それが何を意味するか。そして一度の失敗はこれまでの功績を全てぶっ潰す。それはあの腰に据えた日本刀を見れば分かることです。

「簡単に話を済まそう。君も覚悟していると思うが」
「はい……」

あなたから直接電話が来て、スーツで来いと言われたらそんなの誰でも察しますよ。

「先日、家へ帰宅すると私の愛する愛しの愛娘の恵が怪我をしていた」

愛って字が三回も出てきたぞ。どんだけ愛してんだ。

「どうしてそうなったのか。私は胸締めつけられる苦痛に耐えながら尋ねた。恵みは答えてくれた。下校中に怪我してしまったと。そして兎月は何も悪くないとも言っていた」
「春日……」

春日がそんなことを……。お、俺を守るために……あ、ありがとう。これならこの人も……

「よって貴様を抹殺する！」
「やっぱ駄目か！」

日本刀を抜く春日父。いやもう親バカでいいっか。いやもういいっそのこと馬鹿でいい。馬鹿は刀を抜き、俺に突きつける。対して俺は、

「すいませんでしたぁ！」

土下座。

「いや本当にすいませんでした！　俺の不注意で恵さんに怪我を負わせてしまって。全て俺のせいです。どうかお許しを！」

全身全霊を込めた我が思い、渾身最高の形で見事な土下座で謝罪しまくる。もうこれしかない。十六歳の若造が懸命に土下座しているんだ。せめて命だけは、

「安心しろ、一太刀で済ませる」

何も感じねぇのかよ！？　ゆっくりと近づいてくる馬鹿。あ、終わった。さよなら父さん、母さん、じいちゃん、米太郎、水川、火祭、そして……春日。今までありがとう……。

「よくも私の愛娘をぉ……このクソ野郎がぁ！」

「はーい、そこまでぇ」

……っ、ぁ……あ、あれ？　おかしい、どこも痛くないぞ。痛みもなく俺は葬られたのか……。恐る恐る目を開いてみると、

「あ、あれ？」

そこには床に倒れこんだ馬鹿と一人の女性。だ、誰だこの人？　そして馬鹿はどうして倒れているんだ？

「ごめんね脅かして。この人も本気じゃなかったからさ、許してあ

げて」

そう言って謎の女性は俺の手を取って立たせてくれた。いやいや、それは嘘でしょ。だってこの馬鹿、俺の方すっげぇ睨んでますよ。これが本気じゃなくて何だってんだ。ガチだろこれ。ガチで殺すつもりだっただろ。

「ママ……どうして邪魔をするんだ」

ほらこんなこと言ってるぞ……って、ママ？　えっ、あ、ちょ？

「あ、あなたは……」

「あ、そうよ私は恵の母です。いつも娘がお世話になっております」

そう言って謎の女性、もとい春日母はペコリと頭を下げてくれた。いえいえ、おっしゃる通りホント娘さんにはいつもふりまわされてばかりです。しかしまあ、母親かぁ。確かに似ているかも。そしてさすが春日の母だけある。めっちゃ綺麗。なんつーか上品で清らかな雰囲気がもうすごい。そして綺麗。うん綺麗。第一～六感の俺全員もれなく意見一致、お綺麗です！

「あなたが兎月君ね。あら～、ホント恵は良い人を見つけたみたいね」

「な、何を言っているんだママ！　そいつは敵だ。今すぐ抹殺するんだ！」

床に崩れて叫ぶ馬鹿は未だにこちらを睨んでいる。呪い殺すつもりか。視線が血走ってるぞおい。

「あなた、いい加減にしなさい。恵の大事な人よ。そんな物騒な物

は片付けてください」
「何を言っているんだママ、こいつは恵を傷つけ……」
「恵の話を聞いていなかったんですか馬鹿。むしろ逆に兎月君は恵を守ってくれたんです。その恩人に刀と殺意を向けるとは何事です。馬鹿ですかあなたは」

げすげすと馬鹿に蹴りを入れまくる春日のおふくろさん。なんだろ、あのキック……なんとなく春日にそっくりだ。さすが親子ってやつか？

「とにかく私はこいつを斬りころぶべぇ！？」
「話を聞けないのですか。だったらここで大人しく悶え苦しんでいてください」

馬鹿は春日母に踏みつけられて悲鳴を上げた。何度も踏みつける春日母。そりゃもう執拗に。踏みつけ攻撃は数分に及んだ。そしてボロボロになって悲鳴も上げなくなった馬鹿を放置して部屋から出て行く春日の母親さん。

「さ、兎月君。こっちこっち」
「はい……」

なんとなく、なんとなくだけど。この人、春日の母親で間違いないと思う。

第８８話　これがお金持ちの日常？

春日の母親に案内されて向かったのはリビング。まあ広いリビングだこと。テレビ何インチだよ、そして天井高いよぉ。

「ちょっと待っていてね、お茶用意するから」

「あっ、いえいえお構いなく」

ベターなやり取りをした後、春日のお母さんはキッチンへと向かっていった。立っているのもどうかと思うのでソファーに座る。うわ、こっちのソファーはふんわりしているのか。さきほどの応接間のソファーはもっと固くて、しっかりした素材だったような。しっかし……こうして改めて見ると、やはり春日は金持ちなんだなぁ。今更だけど俺はすごい人の下僕をやっているんだなと感慨深いものがあったりする。ちょっとくらい誇りに思ってもいいよね？　うーん、ホント広い家だなあ。何坪あるんだ？　ホントこの家に来てからは驚くことしか出来ていない。あ、春日父は大丈夫だろうか。春日母にボコボコにされていたけど、もう復活したかな？　となるとまた俺を殺しにやって来るのでは……？　もうヤダよあの人。この際言いますがね、俺はあの人がチョー苦手なんです。父さんの会社の社長という人物だから恐ろしいってのもあるけど、一番の理由は親バカだからである。娘の為なら躊躇なく日本刀を抜く男だ、恐ろしくて仕方ない。ホント、未来の春日の旦那さんが気の毒だ。あの親父相手に結婚を申し込まなくてはならないのだから。二の句も言わず抹殺しようとしてくるだろうよ、あの親バカは。春日の未来の旦那さんのご冥福を今からお祈りします。

「……あ……」

ガチャリとドアが開いた。まさか春日父が来たのか？　ソファーに沈みこんで身を隠す。が、遅い。姿をばっちり確認された。さらに言えば、そこにいたのは春日父ではなかった。春日、本人だった。やべ、私服姿が可愛い。つり目にサラサラの長髪、整った小顔。容姿端麗がピッタリ当てはまる彼女、春日恵はこちらを驚愕と言った表情で見ていた。目は見開き、小さな口をぎゅっと一文字にして。顔の表情だけでびっくりと言っているようなものだ。そしてほんのり赤い顔。俺と春日が見つめ合うこと数秒、春日がこちらへと……

「馬鹿兎月」

「うおっ、危ね！？」

突進しながら蹴りをぶち込んできやがった。早い話、飛び蹴り。食らえば尾を引く怪我になりかねない。脊髄の反射に助けられて、のけ反ってなんとか蹴りを回避。ソファーから転げ落ちて、後ずさり。春日と距離を取る。と、こちらをギロリと睨んでまた接近してくる春日。怖い怖い怖い怖い怖い小岩怖い怖い怖い怖い。ん？　一回、小岩って言ってた？　とにかく目の前には春日。立ち上がれないまま春日を見上げる姿勢に。ヤバイ、蹴りは勘弁。

「……なんで兎月がここにいるの？」

静かな口調。しかし目が荒々しく、顔は赤く染まっている。あれ？　春日父に何も聞いていないんだ。あの馬鹿、春日に何も知らせずに俺を殺すつもりだったのか。とんでもねー奴だな。

「えっと……謝りに来た」

「……何を？」

「あ、あれだよ。ほら、春日に怪我を負わせてしまったことについて」

パッと足元を見れば、春日の足には包帯が巻かれていた。なんと痛々しい。思わず心がチクリ。しかしさきほどの蹴りの破壊力を考えれると寒気が走った。良かった、と言いたくないが、まあ良かった。怪我はたいしたことなく、もう大丈夫みたい。本当に良かったよ。蹴られかけたことを除いて。

「……」

「あ、あの春日さん？」

赤い顔でこちらを睨む春日。ちょっとでも動こうなら蹴りを入れてきそうだ。恐ろしくて一歩も動けない。蛇に睨まれた蛙とはこのことか。なんだこの家は。父親といい娘といい、来客をいたぶるのがこの家のもてなしなのかぁ！？

「あら恵、下りてきたの。今から呼びに行こうと思ったのに」

救世主の登場。お母さん、あなたに助けられたのはこれで二度目です。春日母はお茶とお菓子を持ってきてくれた。ニコリと優しげな笑みを浮かべてこちらを見つめる。

「ママ……」

「さ、兎月君も座って。お話しましょう」

「はあ……」

まだ落ち着きを取り戻さない春日もまあ一応ソファーに座り、俺も春日から距離と取るため違う椅子へと腰かける。春日母だけがニコニコと笑っている。え、何これ？　今からティーブレイクですか？

一体何を話せばいいんだよ。

「えっと、すいませんでした。僕の不注意で恵さんに怪我をさせてしまって」

とりあえず謝罪。テーブルに両手をついて頭を深く下げる。こんなスーツを着てまで春日の家に来たんだ。しっかり謝罪しなくてどうする。

「あ、気にしないでいいわよ。恵から話は聞いてるわ。あなたは何も悪くないのだから」

なんて話の分かる人。そして優しい！　親父さんとは大違いだな。そして失礼ながら、あなたは本当に春日のお母さんなのですか？　容姿だけで判断するなら間違いなくそうでしょうが、性格が春日と大違いだ。春日はこんなに優しい笑みを浮かべたりしない。ん……いや待てよ、さっき春日父を蹴っていたあの姿から考えると……やっぱ親子なんだろうな。

「本当にすいませんでした……」

「だから謝らなくていいの」

そう言ってお茶を飲む姿もまあ美しい。そう言ってもらえると気持ちが楽になります。ありがとうございます。お茶美味しいです。

「……」

そしてこちらのお嬢様はずっと俺の方を見てくるのですが……えっと、謝った方が良さげ？

「……風邪、大丈夫？」

「へ？　ああ、うん。おかげ様で治りましたよ」

雨に打たれた俺はフツーに風邪引きました。春日は引かなかったので全然オーケーですよ、風邪を引いたのが俺で良かった。一日寝込みましたが、火祭の完璧な看病のおかげで良好へと向かい、翌日起きたらけろりと治ってました。ありがとう火祭、と朝から連呼していました。ええ。

「……本当？」
「なぜ疑う」

じとー、とこちらを訝しげに見てくる春日。なんか恥ずかしいよぉ。とりあえずお茶を飲んで視線を逸らす。さすがの春日も母親の前では大人しいようで、いつもみたく蹴ってこようとはしない。まったく、普段からそんな感じに落ち着いていればいいのに。蹴る、殴る、抓る、えぐるの攻撃は使用禁止してもらいものだ。そうすれば俺のライフゲージもかなり楽になる。少なくても肉体ダメージが激減するのだから。暴力駄目、絶対。

「……そ」

な、なんすかその納得いかないような言い方は。別に嘘をつくようなことでもないっちゅーに。

「ごめんねぇ、兎月君。この子かなり屈折しているから、いつも大変でしょ？」

そうなんですよー、ホント理不尽過ぎて頭痛くなるんですよ。と溢れんばかりの不満をぶち撒けたくなったが、そこは常識とモラルで抑えこむ。代わりに違う言葉を言うことにしまーす。ニコリと我ながら素晴らしい良き笑顔で受け答える。

「いえいえ、いつも恵さんとは仲良くさせてもらっています。僕なんかに話しかけてくれますし。恵さんと一緒にいて本当に毎日が充実していますよ。どうかこれからもよろしくお願いします」

どーだ、春日。お前が俺の家で母さん相手にしたように俺だって猫かぶりぐらい出来るんだい。チラッと春日の様子を伺えば、すげー嫌そうな顔をしていた。俺が猫かぶっているのを分かっているかであろう。ははっ、俺もそうでしたよ。俺だってあなたがうちの母さんに対して表向きの愛想笑いをしていた時、こいつぅぅ……！　と思っていたもん。今の春日は以前の俺と同じ心境のはずだ。春日が不満げに俺を睨んでいるが、へらーと笑って対抗してやる。

「あら本当？　理不尽でワガママでいきなりローキックとかしてこない？」

「その通りでっ……ゴホン。いえそんなことはないですよ。恵さん優しいですから」

おいおいすげーな母親って！　ジャストに言い当てたよ。やっぱ親って子供の性格とか分かるもんなのかなぁ。

「無理しなくていいのよ。この子、私にそっくりだもん。私も学生の頃は、よく理不尽な事を言っていたもの。特に好きな人相手には暴力を振ったり命令したり。一緒にいようとして色々やっていたなぁ」

「ママっ！？」

しみじみと目を細めて話す春日母と、なぜか慌てだした春日。対極的な二人の行動がシュールで面白いので、お菓子をいただきながら眺める。

「何か不満とかあったらローキック、嫉妬したらローキック、恥ずかしくて気持ちをごまかすためにローキック……懐かしいなー」

何回ローキックって言ってるんですか。はいやっぱりこの人、春日のお母さんで間違いなし。春日は見事にローキックの遺伝を受け継いでいやがる。

「恵もそういったところは私にそっくりみたいだから、兎月君は大変だと思うわー、頑張ってね。そして恵も頑張りなさい」

「な、何を……」

母親に対して、しどろもどろな態度で顔を俯かせる春日。何やらごにょごにょ言っているようだ……って、なんだそのリアクションは。俺に対してそんなのしてくれたことないよ。そんな可愛い仕種が出来るなら今度から俺にも見せてください。

「ホント素直じゃないんだから。二年生になってからずっと話す内容は兎月君のことばっかりでしょ」

「っ、ママっ!?」

ばたつきながらも上目遣いで懸命に母親を睨む春日。その睨み方はいつもの無表情でただ冷たく俺を睨むのとは全然違った。なんか、こう、可愛らしい女の子のキュートな睨み方。ちょ……そんな春日がいたなんて。知りませんでした。あなたがこんな可愛い反応をするだなんてえぇぇ！　チクショー、いつも無愛想にしてるくせに……家では普通の娘ってか。えぇ!?

「私は賛成よ。兎月君になら恵を任せられると思う」

それは下僕として俺が優秀ってことですね。それに対してちょっと嬉しく思ってしまう俺は軽度の精神病なのかもしれない。

「色々と話を聞いているわ、誘拐された時のことや金田さんのところの秀明君との騒動も兎月君が解決して、そして恵を守ってくれたんでしょ♪」

「……」

ニッコリ微笑むお母さんと無言でジロリと睨んでくる春日。だから俺に向ける感情の温度差激しすぎるって。うーむ、春日は機嫌が良いのか悪いのか分からないなぁ。春日は睨んでくるが別に嫌って感じでもないようで、俺をどう思っているのか分からない。やはり春日はよく分からない人だ。そして父親の方はそれ以上に理解不能だ。

「おらあああぁぁあぁぁ！」

リビングのドアが吹っ飛んだ。勢いよく現れたのは馬鹿。いやまあつまり春日父だ。手には日本刀を持ち、殺気立っている。この野郎、ついに来たか。春日母にボコボコにされたのにもう復活したみたいだで。元気よく日本刀を構えている。てことは当初の目的通り、俺を殺しにかかるよね～、ははっ。……あかん、ティーブレイクしている場合ちゃう。

「見つけたぞぉ兎月ぃ、覚悟しやがれ」

ギロリと俺を睨み、捉えて離さない春日父。うあー、もう嫌だこれ。なんすかこの家、どんだけ非日常だよ。精神が崩壊しそうだ。とりあえず美味しいお茶を飲み干して、春日父から距離を取る。近くにいるとやられてしまう。

「この野郎、逃がすかどぼるべぇ！？」

どうやって逃げようか打算していたが、問題は解決した。足元から崩れ床に倒れ伏せる春日父。その横には春日母。あれれ、この光景さっきも見た気がするぞ。

「あなたまたですか。いい加減にしろって言ってるでしょ。私と恵が楽しく兎月君とお喋りしていたのに邪魔しないでください」

そう言いつつローキックを連発する春日母。蹴りが当たる度に小さな呻き声を上げる馬鹿。ざまーみやがれ。

「ま、ママの方こそ邪魔しないでくれ。こいつは今ここで始末しておかな痛い！」

「だから、いい加減に、しろって、言ってんだろ、この馬鹿」

言葉を紡ぎながら強烈な蹴りを放つお母さん。まるで扇風機の『弱』から『強』に切り替えたかのようにさきほどとは格段に威力の上がったローキックをお見舞いしている。怖い、その姿が怖いと思った俺は春日の下僕である証拠！

「兎月君、ちょっと邪魔が入ったから今日はもう帰ってもらえる？また今度ゆっくりお話しましょう。ほら恵、兎月君を送っていってあげなさい」

俺に可憐な笑顔を向けつつ、蹴りは止めない春日母。さすがに苦笑いしか出来ず、ペコリと頭を下げて部屋を後にすることに。にしても春日父も馬鹿だなぁ。さっき春日母にボコボコにされたのにまた懲りずにやって来るとは。しかし、あの床に倒れた姿を見ていたら、自分の姿と重なってしまい同情の念がこみ上げてきた。春日父も大

変だな、と親近感が湧いてしまった。

「……兎月」

「あの、痛いんですけど」

そしてこの娘、リビングから出るなりずっと蹴ってくるんですが……。つり目でこちらを睨んでくるよぉ。そして後ろから悲鳴が聞こえたが、聞こえないふり。

「……」

しばらくして蹴りを止めて普通に歩きだす春日。二人並んで長い廊下を進む。

「春日、その服可愛いなぐえっ!?」

「……うるさい」

褒めたら殴られた。とんでもねー仕打ちだ。うぅ、ただ春日の私服姿が可愛くて褒めただけなのに。あ、待って置いていかないで。

「いやー、あれだね、なかなか個性的なお父さんとお母さんだな」

「……」

で、無視と。まあいいですけどね！　ぷんぷんっ、ってキモイよね。まあ今日はこの家に来て良かったなと最終的には思えたよ。死を覚悟していたが、結果的にはまあ許してもらえたみたいだし、それに春日母と会えたので満足です。また来れたらいいなと思います。春日父のいない時に。

「……兎月」

「ん？　何？」

玄関に到着。既に車に乗って前川さんがスタンバイしていた。あとは乗って家に帰還するのみ。うん、本当に命助かって良かった。さらば春日家、と思ったら春日が話しかけてきた。

「……」

「どうかした？」

「……またね」

「ああ、うん。また学校で」

間をかなり開けていたが、要は普通にさよならってことだった。それだけかい！　とは思わない。だって春日がこうして言ってくれるだけでもすごいことなのだから。無視していたのが、今は自分からさよならを言ってくれるのだ。それだけで俺は超嬉しかったりする。

……やっぱ俺、感覚麻痺してるのかなぁ。

第89話　ボランティア部＋α集合

「え～、皆さん今日は暑い中お集まり頂いて真にありがとうございます」

あ～……暑い……。地獄の猛暑日が続いたかと思いきや、先週には梅雨顔負けの大豪雨に台風上陸。そしてまた身を焦がす灼熱の太陽と再会。熱い抱擁を交わすが如く熱気が纏わりつく。

「昨今、マナーの悪い人が増えてきておりゴミが平然とポイ捨てされている状況です」

よくテレビで地球がおかしくなっていると言われているが、それも頷けるってもんだ。この暑さは尋常じゃない。このままだと地球はいつか滅びてしまうのであろう。それは遠い未来なのか、はたまたすぐそこにまで近づいているのか。

「やはり綺麗な地球があってこその我々人間だと思います。その地球を壊す側に我々は傾いています。それでは駄目だ、我々は地球を守る側にいなくてはならない」

それにしても本当に暑い。遠くの方から蝉がミンミンと鳴いている声が余計に暑苦しくさせる。雄の蝉が鳴くのって雌を呼ぶためにだろ？　で、交尾して子孫繁栄。すごいよね。人で言うところの、道端でいきなり「ヤラてくれ！」と叫んでいるようなものなのだから。普通に捕まるって。犯罪だもの。あ、カラスの鳴き声。ガサガサと木の枝が揺れる音。……弱肉強食だなぁ、自然界は厳しいよ。

「それでは皆さん、ただ今から『地球を守ろう河川クリーン作戦』

を開催します」

色々と喋っていた町内会の偉い人の長い話も終わったことだし、話をまとめると、今日はボランティア部の活動日である。

「兎月、話聞いてなかったでしょ」

隣の水川がジト目でこっちを見てくる。おいおい、馬鹿にしないでもらおうか。

「地球を守ろう爆裂クリーンレンジャー戦隊だろ？」

「違うし！」

夏休みに入って早一週間。相変わらず補習がキツイし、春日のパシリもキツイ。そんな中、今日は地域で開催される掃除活動の日だ。河川沿いを清掃するもので、近くの住民やら中学生が多く参加している。そして俺の所属するボランティア部もこの活動に参加することになった。これが夏の一大活動だったりする。

「いやー、暑いなぁ。でも学校は公欠～」

うちの学校からはボランティア部しか参加していない……なのだが、なぜか米太郎がいる。

「なんでお前がいるんだよ。今日も補習だろうが」

今日、俺達ボランティア部は学校公認の欠席、つまり公欠で補習は出なくていいことになった。それだけでこの活動には感謝しなくちゃいけない。だがボランティア部でない米太郎がここにいるのはおかしい。

「はは、これに参加したら公欠で補習受けなくていいって聞いたからな。水川に言って押しこんでもらった」

「それならそうと俺にも言っとけよ」

「ただの平部員の将也に言っても意味ないじゃん。やっぱ部長のマミーに言わないと参加は厳しいだろ？」

なるほどね。つまりこいつは補習をサボりたいがために参加したのか。……ボランティア活動なめてるだろ？

「マミー言うな」

突如、俺の真横を白い物体が通過した。

「痛っ」

まっすぐにブレることなくその白い物は米太郎の顔面に直撃。ポトリと地面に落ちる。白い丸まったビニール袋だった。

「道具持ったら移動するよ。早く準備しろ、野菜コンビが」

野菜コンビで一括りにしないでくれ。声の主である水川にそう言い返そうと後ろを振り向けば……そこには清掃服姿の美女三人がいた。つーか水川と春日に火祭の三人。

「なんで火祭と春日もいるんだ？」

「私が呼んだから」

すげーな水川部長。ボランティア部の活動にボランティア部じゃない奴を三人も呼んでさらには公欠扱いにまでさせるとは。

「まー君が部長だと思ってたけど、違うんだね」

今日も絶好調に可愛い火祭。灰色の地味な清掃服がドレスに見えてきそうなほどだ。

「……兎月」

今日も無表情に不機嫌そうな春日。お嬢様の春日に清掃服はまるで似合っていない。……あと、そんな嫌そうにするなら参加するなよ。なんですかー、掃除終わった後のジュース目当てですかー？

「あれ？　春日、軍手は？」

火祭や水川はちゃんと両手に軍手をしているが、春日だけは何もつけていない素手のまま。今から清掃活動だってのに軍手なしはキツイだろ。草むらで手を切る恐れもあるし、絶対汚れるよ？

「……これ」

春日がポケットから取り出したのは穴の空いた軍手。随分とくたびれている……古いやつか。

「意外と参加者が多かったからな。新しい軍手はなくなったのか」

参加人数およそ七十人。平日なのに町を愛する人がこんなにも集ま

ってくれたことに感動しつつ、その多いがゆえに道具も足りないという現状。そのままだと何も出来ないだろうし、春日の手を汚すわけにはいかないからな。……よし！

「ほら、俺のマイ軍手使っていいから」
「マイ軍手って何だよ！？」

うるせー米太郎。ボランティア部は掃除とかの活動が多いから、ある程度の道具は持っているのさ。さすがにマイ箒はないよ。ホグワーツじゃないから。

「……兎月は？」
「そっちの古いやつ使うから大丈夫。ほら、両手出して」
「……うん」

春日の両手に軍手を丁寧にはめていく。ったく、こんな繊細で綺麗な手なんだから大事にしないと。それにしても、よく周りに軍手を変えろと言わなかったな。最初会った時は席譲れとひどいワガママっぷりだったのに。偉いぞ春日。

「はい、これで大丈夫」
「……ありがと」
「どーいたしまして」
「待ちやがれ将也」

ずいっと米太郎の顔がすぐ横に現れた。キメェ、俺から離れろ。

「なんだそのラブラブムードは。今から掃除だってのに浮かれてんじゃねぇよ」

はぁ？　別に浮かれてないぞ。むしろ浮かれているのは公欠でサボれたお前だろうが。

「別にただ春日に軍手貸しただけじゃんか」

「そんなもんパッと渡せばいいだろうが。な、ん、で！　お前がつけてやる必要があるんだよ？」

……あ～、確かにそうだけど……いや、その……

「…えっと……その、流れ的なやつで自然としちゃった感じ？」

「それがラブラブなんだよ！　イチャイチャと両手握りやがって…

…そーゆーことは余所でやってろ！」

うわ、妬みかよ。寂しい奴だな～。俺みたいに誰かの下僕したらどうだ？なんなら俺と代わる？　このお嬢様の相手は骨が折れるぞ～？

「……むぅ」

「火祭？　ど、どうしたの？」

視線が痛いと思って春日の隣を見れば、不機嫌そうな火祭がこちらを睨んでいた。さっきまでニコニコしてたじゃん。何があったのさ……。

「み、水川なんとかしてくれ」

「まぁ、とりあえず移動しよっか」

こういう時に頼りになる水川。さすがは部長さん！

場所は変わって、河川の下流。緩やかな川の流れとせせらぎが気持ちをのほほんとさせる……と思いきや、暑くてそんなの関係ない。風流だなんて知るか。暑いものは暑い。あー、暑い。

「じゃあ人数確認するぞ！　はい番号！　いーち！」

クソ暑いってのに馬鹿な山倉のデカイ声で余計に暑苦しくなる。

「普通に数えるからお前は黙ってろ」

「兎月は冷たいなおい！　第７１話以来の久しぶりの登場なんだから、もうちょっと見せ場くれよ！」

メタな発言は控えろ。今までそーゆーことはなしでやってきたんだから。ギャーギャーうるさい山倉は無視して人数を確認しとくか。まずは二年生から、ボランティア部の山倉と水川そして米太郎に火祭と春日。俺を含めて二年生は六人だ。続いて一年生、

「兎月先輩、早く点呼してください。私、早く掃除したくてウズウズしてるんですよ。兎月先輩と違って」

いつも通りの先輩を敬することを知らない（俺に対してだけみたいだが）、一年生女子の矢野。それと仲良し男子二人。この二人が小学校からの付き合いで大親友だという裏設定は何の伏線にもならない……というメタな発言は控えておこう。

「合わせて九人、と。よし、全員いるな。というか多いくらいか」

ちなみに三年生の駒野先輩は来ていない。引退したし、そもそも三

年生は俺達以上に補習で忙しいので来れるはずもない。やはり受験生は大変だ。夏を制するものは受験を制するらしいよ？

「よし、じゃあ今から清掃活動始めるわけだが……詳しい説明は水川、よろしく」

時間とか場所などの詳細は部長である水川が全て把握している。「知らないなら、でしゃばらないでください～」と矢野から野次が飛ぶ。

「えっと、私達が担当する区分はここの下流で、時間は三時半まで。途中に昼休憩もあるから無理はしないように。あと気温も高いからこまめに水分補給して熱中症には気をつけてね」

おぉ、さすが水川部長。見事な説明に思わず感嘆の息がもれたよ。水川はこーゆーの得意だからな。やっぱ俺より部長に向いているよ。俺を部長にしなくて正解ですよ、駒野先輩っ。

「それじゃあ始めましょう。皆で地球を守るのだー！」

「おーっ！」

今の何!?　それって今日のスローガンですか？　もっと良いのがあったんじゃないのか？

第９０話　清掃活動と腕の痛み

そして始まるクリーン大作戦。俺達の担当区域は下流側で草も青々と生い茂っている。虫刺されとかに気をつけないとな。

「将也、虫よけスプレー貸してくれ」
「ほら」
「あはぁん」

気持ち悪い声出すな。虫よけどころか人もよけだすわ。

「兎月と佐々木！　こっちに行ってみようぜ！」

山倉の大声が草むらの中から聞こえてきた。探険気分かよ。俺達掃除しに来たんだぞ？

「まあ草むらの中とかゴミ多そうだもんな。よし、行くか」

ボロボロの軍手を装着。さあ、草むらに足を踏み入れようとしたら、

「まー君」
「兎月」

後ろから両手を捕まれた。ガクンと上体が前に倒れかける。ちょ、なんだよ!?　この声は……火祭と春日か。

「二人してどしたの？」
「一緒に掃除しよ」

俺と？　いや俺は米太郎達とするし、この二人の面倒は水川に任せてあるはず。

「水川は何やって……ん？」

水川を見れば、アイコンタクトで「頑張って」と送ってきやがった。部長のあなたが面倒見るべきだと思うけどな～。はあ、しょうがない。

「まー君？」

「ああ、いいよ。道具持ったら、こっち来て」

つーわけで俺と火祭に春日のスリーマンセル。山倉ごめんな、お前の相手は出来ないんだ。

草むらや茂みは山倉達に任せて、俺達三人は河岸の平坦なところで作業しているのだが、

「うわー……これ終わんなくね？」

ビニール袋とか空き缶とかのゴミが多すぎて、拾っても拾ってもキリがない。河川敷はゴミ捨て場じゃねぇってのに、ポイ捨てしちゃ駄目だろうが。マナーの悪さに溜め息が出てくる。情けない話だよ、自分達で住んでいる地球を壊しているのだから。

「まー君、燃やせるゴミの袋取って」

「ん、はい」
「……兎月」
「ああ、それはそっちに集めて。あとでまとめて持っていくから」

そしてすげー大変だ。火祭はともかく、春日はこういうのに慣れておらず色々と教えないといけなくて忙しい。やっぱ春日の家とかは召し使いを雇っていて、掃除なんてやったことないんだろうな。春日みたいな人ほどこの清掃活動に参加してほしいものだ。掃除の大変さを知れば絶対にポイ捨てなんてしないはずだ。いや、春日がポイ捨てしてるって意味じゃないよ？　春日は人にパシリさせるけど、ポイ捨てはしないから。下僕の俺が保障します！

「ふぅ、キツイ……」

この炎天下、ひたすら作業しているから汗ダラダラだよ。じりじりと直射日光が首筋を焦がす……暑い！

「春日、大丈夫か？」
「……大丈夫」

ちなみに春日と火祭はその優美な長い髪を結って、帽子をかぶっている。いつもと違う雰囲気と姿にズキュンときたのは内緒だ。だって可愛いだもん！　この美女二人と一緒に掃除出来るだけで俺はもう幸せです。

「皆はちゃんとやっているかな？」

さっきから米太郎と山倉の姿が見えない。草むらの中でサボっているんじゃないだろうな。蚊に刺されてしまえ。

「うおおおっ！？　来たぞー！」

噂をすればなんとやら、茂みから山倉の大声が轟いた。いつもより二割増しなのはどうしてだろうか。

「佐々木やったぜ！　ついに見つけたぞ！」

「マジかぁ！　でかした山倉！」

茂みがガサガサと騒がしく揺れて、ひょこっと米太郎のニヤニヤ顔が出たかと思いきや、すぐに引っこんだ。そして米太郎と山倉の嬉しそうな叫び声が響いてきた。おいおい、マジでサボってるじゃんか。馬鹿かあいつらは。

「ほら、これこれ～！」

「うほっ、こいつぁ素晴らしい。エロエロだなっ」

茂みから二つの下賤な笑い声が聞こえる、って……あいつら、まさか……！？

「やっぱ巨乳だよな～。このムチムチとした肉感的な感じがたまんないぜ」

「これで十六歳！？　犯罪じゃん！　うはっ、スケスケ下着最高！」

……い、いや、そんなわけ……。今はボランティア活動中だ。いくらなんでもそれは……。

「これ一冊だけか？」

「いや、他にもズラリと……！」

「ナイス！　これだけのエロ本よく見つけれたな」

「ふふん、こういうのは河川沿いによく捨ててあるものさ！」

はい間違いない。あいつら……エロ本読んでやがる！　住民が一致団結して町を綺麗にしようと掃除してる中、あの二人は欲望のままにエロ本を貪っているのか。汚れた町を掃除する前にお前らの薄汚い心と存在自体を綺麗さっぱり消してやろうかコラァ！　そりゃ健全な男子なら興味あるのは当然なのだが何も今見なくても……おうちでこっそり読みなさいよ。

「……最低」
「最低だね」

春日と火祭の超絶冷たい目が米太郎達のいる草むらに向けられる。まるでゴミ虫を見るかのような軽蔑の眼差し……女子って恐ろしいな……！

「おい将也ぁ、お前もこっち来いよ。ロリ特集満載だぞ！」

そしてその冷たい目は俺へと矛先を変える。ちょ、俺は何も見てないし関係ないよ！？　冗談じゃない！　俺まであいつらみたいな変態扱いされるのは御免だ。

「お前の好きな素人特集もあるぞ！　早く来いよ」
「俺がいつ素人モノが好きだと言ったぁ！　でも一応見させてくれい」

べ、別に素人モノが見たいわけじゃないからね！　ただあの二人を注意するついでにちょこっとエロ本を鑑賞だけなんだから！

「ったく、しょうがない奴らだなー、うふふっ。ちょっと注意しなくちゃ～、ぜぇ！？　ぐっ！？」

魅惑の桃色茂みに向かってさあ一歩っ……のはずが体が動かない。そして両腕を激しい痛みが襲う。ぐぎぎ、と鳴ってはいけない骨の悲鳴に呼応して汗がどっと流れる。この汗は気温のせいではない。だって暑くない。後ろから二つの凄まじい冷気を感じる。

「い、痛い……」

両腕は背中に回されて、ありえない方向に曲がっている……！　軽く失神するレベルの気持ち悪い光景。腕ってこんな曲がるのかよ……!?

「……まー君、何しようとしてるのかな?」

バケツ一杯の冷水を頭からかぶったような凍える寒さに心臓が止まりそうになった。なんつー冷たい響きの声を出すんだよ……火祭。

「い、いや米太郎達を注意しようと……」

「嘘」

春日に一蹴された。そしてさらに強い力で俺の腕を締め上げてくる……。い、いてぇ……！　春日と火祭は二人がかりで俺の両腕をへし折るつもりのようだ。ヤバイ、これマジで折れちゃうって。全身から滲む脂汗が止まらない。呼吸するだけで骨が軋んで呻き声が漏れてしまう。だ、誰か助けて……！

「ど、どしたの二人とも?　何をそんなに怒っているのさ?」

明らかに春日と火祭は怒っている。米太郎達がサボっているからか?　それともエロ本を読んでいるから?　どっちにしろ俺は関係な

いぞ。そりゃ、エロ本読む気満々だったけど、まだ読んでいないから俺は潔白だ！　ギリギリセーフのはず。たぶん。

「まー君……最低」
「馬鹿」

ちょ、なんだこの人達は！？　米太郎達に比べて俺への当たりが強い気がするぞ……。し、仕方ないじゃん。健全なる男子だもん！　そういうのに興味があるのは普通だろ。逆にそうでない奴とかいるのか？　いるなら出てこい、意味もなくそいつにもこの苦しみを味わせてやる！

「まー君は行っちゃ駄目」
「行くな」
「わ、分かった、行かないから！　エロ本なんて読みに行かないから！　だから腕を締め上げるのはやめてぇ！　折れるぅ！」

第９１話　喜怒哀楽の昼食

……死ぬかと思った。土下座して春日と火祭に詫びを入れ、米太郎達をボコボコにしてやった。くそ、あいつらのせいで無実潔白の俺の腕に変な痣ができてしまったじゃないか。触ると激痛が走る。……帰りに病院寄っていこ。

「佐々木と山倉は昼ご飯抜きね。そこで正座していなさい」
「はぁ！？」
「それはあんまりだろ！」

米太郎と山倉の非行は水川に漏洩し、彼らにはペナルティが科せられた。ざまーみやがれ。

「将也、お前もだろ。一緒に正座するぞっ」

おいおい、もう俺を巻きこむな。濡れ衣を着せられて俺の両腕は折れかけたんだからな。

「兎月だって興味あるだろ！？　だったら同罪だ！　共に昼抜きを味わおう！」

嫌だ、普通に昼ご飯を味わいます。そして否定出来ないことを言うな。興味がないと言ったら嘘になるし、あると言えば鬼神の二強が暴れだす。……俺に逃げ道はないじゃんか。

「でも、まー君の部屋にそういう本はなかったよ」

……ちょ、火祭さん？

「い、いきなり何言ってるの？」
「先週、まー君を看病しに家に行った時に部屋中探したの。ベッドの下とか机の引き出しとか。でも見つからなかったの」
……き、きゃあぁっ！　恥ずかしい！　この娘、俺が風邪でうなされている横でエロ本探していたのかっ！　だから昔のアルバムとかいっぱい机に乱雑していたんだね、って何やってんですか火祭ぃ！
「一冊もなかったの？」
「うん」
ちなみに俺はエロ本の類は持っていません。単純に買う勇気がないから。エロ本をレジに持っていく度胸がない情けないヘタレですので。
「どーせ将也は買いに行く勇気がなかったんだろ。情けない奴だな」
そしてそれをバラす米太郎。あいつマジで許さねぇ……俺のヘタレエピソード暴露してんじゃねぇよ！　汗顔の至りだ。超恥ずかしい。
「まあまあ、とりあえず昼ご飯食べよう」
ナイスフォローの水川に拍手。空気の読めない米太郎と違ってとても素晴らしい。大好きだぁ！
さて、大変そうでどこか楽しくもある清掃活動も半分終わった。今からは皆嬉しい昼食タイムだ。こういうイベントの時に食べるご飯って格別だよね～。
「兎月先輩、持って来ました」

「おう、ありがとな」

皆のお弁当や荷物は近くの民家に預けてあり、一年男子部員の二人が取りに行ってくれた。ありがとう後輩。芝生の上に大人数用の巨大ブルーシートを広げる。皆それぞれ適当に座って、自分のお弁当を取り出す。

「ほら、山倉と佐々木も座りなよ。ご飯食べていいから」

「ま、マジで!?」

「イャッホー、水川優しいー」

寛大なる水川部長殿は馬鹿二人のお咎めをあっさり許した。良かったなお前ら。

「さて、俺のお昼ご飯ちゃんは～……ん？　あれ……は……え、ちょ……ない」

おかしい。なぜだ。後輩が運んでくれた鞄の中に俺の昼食がない……。俺の昼食、俺のパン、俺の楽しみがない！　はぁぁっ!?

「ちょ、待って。なんで？　カツサンドの姿が見当たらないんですけど……えぇ!?」

他の皆が次々と自分の弁当を取り出している。が、俺の鞄には何も入っていない。馬鹿な、ちゃんとパンは入れたはず。嘘だろ……なんでないんだ……？

「お前ら持ってくる途中で落としたんじゃないのか!?」

真っ先に後輩二人を疑う最低な先輩の俺。でも後輩二人は首を横に

振るだけで彼らを疑うのはまったくのお門違い。じゃあ、どうして……？

「わり、将也。さっき俺が食べた」

「米太郎テメーかぁ！」

ふざけんなよ！　何してくれてんだ！　カツサンドがないと、カツサンドがないと俺は……昼抜きじゃねーか！

「なんで俺が昼飯抜きなんだよ！　エロ本も読まず真面目に掃除した俺がなんで！」

「あはは、めんご～。朝どうしようもなく空腹でさ。いい感じにカツサンドがあったから、つい」

「つい、じゃねーよ！」

歯噛みする俺をスルーして米太郎は涼しげに自分の弁当を食べていやがる。こいつの弁当奪ってやりたいが、おかずが野菜だけの弁当なんて食いたくもない。この野菜馬鹿が……！

くそっ、盗み食いして掃除そっちのけでエロ本読んでいた米太郎がなんでのうのうと昼食を楽しんでいるんだよ。世の中不公平だチクショー。

「はぁ……」

文句を喉が枯れるほど叫んでやりたいが、そんなことしてもカツサンドは返ってこない。これはもうどうしようもないな……はぁ。

「あ～、外の空気は美味いな～……」

悲しい……。他の皆は仲良くきゃぴきゃぴとランチしているのに俺

は一人寂しく風に吹かれる。ぐるるる、と腹がひもじそうに鳴く。俺も泣きたいわ。なんだろーな最近……なんか不幸が続いているような気がする。先輩に暴力を振るわされるわ、風邪は引いてしまうし、春日父に殺されかけるし。どうしたよ神様、俺が何かしましたか。真面目に頑張った俺がなぜこんな仕打ちを受けなくちゃならんですかぁ。

「あの、まー君」

「ん？」

うなだれる俺に火祭が声をかけてくれた。火祭の可愛い顔が空腹を紛らわせてくれ……ないか。腹減った……。

「えっと、その……」

よくよく見ると火祭はお弁当箱を二つ持っている。

「火祭って大食いだったんだな。ちょっとびっくり」

「ち、違うよ。こっちはまー君の分」

え？　俺の分？　ま、まさか……！

「え、えっとね、まー君の分もお弁当作ってきたから、その…良かったら……た、食べてくれる……？」

「いいの！？　もちろん頂きます！」

即答で火祭から弁当箱を受け取る。うはぁ、やったぜ！　棚からぼた餅、略してたなぼた！　こ、こんなことがあるなんて……嬉し涙が止まらない……！

「ありがとう火祭！」
「う、うんっ」

貧しい民に救いの手を差し延べるかの如く、今の俺にはガチで火祭が天使に見えた。いや、涙で視界が潤んでよく見えないや。嬉し涙が止まらない。

「すげー嬉しいよぉ……！」
「おいおい将也ぁ！」

あ？　なんだよ米太郎ごときが。人が幸福に浸ってるのに邪魔するなよ。

「火祭の手作り弁当だと？　見せつけてくれるなぁおい。調子乗ってんじゃねぇよ！」
「はぁ？」

それはあんまりだろ。お前のせいで昼食なしになったのを火祭は助けてくれたんだろうが。お前にとやかく言われる筋合いはない。

「女子の手作り弁当、しかも火祭の……！　俺によこしやがれっ」

自分の弁当箱を置いた米太郎が襲いかかってきた。奴の狙いは俺の持つ弁当！　ふ、ふざけるな！　もうお前なんかに弁当はやらないぞ。ぜってー死守してやる！　命より大切な弁当箱を庇うように両腕でがっしりと抱えこむ。もう失いたくないんだ。もうこれ以上大切なモノを失いたくないんだ！　ぎゅっと目を閉じて襲撃に耐えるために身を強張らせる。……あれ？　米太郎の卑しい手が襲ってくると思ったが一向に来ない。弁当はホールドされたまま、俺自身も無傷。なぜだ？

「ぐっ……火祭」

目を開けば、そこには地面に沈みこんだ米太郎と俺を守るように立つ火祭がいた。米太郎の口から白い泡……みたいな白米がダラァと垂れていた。地面に倒れこんだ米太郎は死にかけの虫のようにピクピクと痙攣している。な、何があったの？

「佐々木君、私言ったよね。ま一君に危害を加える人がいたら私はそれを排除するって」

「お、俺は聞いてないぞ……。クラスマッチ編の話は一部俺が出ていないシーンもあったし」

おいおい、物語をぶち壊す発言はやめてくれ。タブー連発だぞさっきから。どうやら火祭が米太郎をぶっ飛ばしてくれたようだ。さすが喧嘩最強と名高い火祭。二回ほどしか戦う姿を見たことないが、その腕っ節は無双の強さと存じております。

「ま一君大丈夫？」

「俺も弁当も無事だけど」

米太郎は無事じゃないな。午後の作業に支障をきたしそうだ。

「手加減したから直に歩けるようになるよ。ま一君、一緒に食べよ」

もちろん俺も米太郎なんかに同情しない。自業自得だバカヤロー。

「中学の時を思い出すなこれ……忘れかけていたこの痛み。うぅ……」

知るかよ。お前が中学時代に火祭に殴られたことなんてもう忘れたわ。そんな米太郎はほって置いて、火祭と一緒にランチタ～イム。ワクワクドキドキ気分で蓋を開けると……

「おおっ」

パアッと光が溢れ出したかのように輝く色彩見事なおかずの山々。卵焼きにウインナーと定番のおかず、大人気ハンバーグも。うぅ、これが人生のピークかも。それくらいに嬉しい！

「がはっ……どーせ見た目は良くて味最悪のパターンだろ」

悪態をつく米太郎に今度は水川がパンチを放っていた。おいおい、火祭の腕前を見くびるな。

「じゃあ頂きまーす」

高鳴る胸の興奮を抑えつつ、まずは卵焼きを一つパクリ。

「……ど、どうかな？」

「美味い！　やっぱ火祭の料理は美味しいな！」

「良かった……」

普通に美味い！　絶妙の味つけに口元が思わず緩んでしまう。あぁ～美味い……。火祭が作ってくれたという喜びと外の新鮮な空気、自然の中で食べることでおいしさは倍増に倍増。疲れた体と心に卵焼きの甘さが染み渡る。

「残念だったな米太郎。火祭の料理は絶品なんだよ。俺はよ～く知っているぜ！」

「ということは兎月先輩って前に火祭先輩の料理食べたことあるのですか？」

矢野よ、良い質問だ。気分最高潮の俺がテンション高くお答えしましょう！

「先週、俺が風邪ひいた時火祭が看病してくれたんだ。で、お粥をご馳走になった」

「ぬぁにぃぃっ～！？」

うるせー山倉。米太郎の二の舞になりたくなかったら黙ってろ。そして驚いたのは山倉だけじゃなかった。辺りを見回せば、矢野がびっくりといった感じに口を開いているし、水川は「おぉ、やるねぇ～」とニヤニヤ笑っているし。米太郎は草の上で悶えているが、一番気になったのは春日だ。……あんな怖い顔した春日は見たことない。俺に殺気ごもった目線を送ってくる。な、何かまずい発言しちゃいました？　でも体を拭いてもらったことは言ってないわけですし。さすがにあれ言うとヤバイ気がする。すると火祭が、

「看病って兎月先輩にお粥を食べさせたりとかしたんですか？」

「うん。あと、まー君がお風呂入れなかったからタオルで体を拭いたりとか」

と、爆弾を投下してくれた。一瞬にして場が凍った。さっきまでの和やかな雰囲気は火祭の爆弾発言で一気にぶち壊れて俺の顔からは汗が止まらない。殺伐とした空気が肌を締めつけ、口から水分が奪われる。そ、それ言っちゃ駄目でしょうよ！　や、ヤバイよこの空気……。俺の直感がヤバイと告げている。そう思った次の瞬間には、

「マジかよ兎月！？　ふざけんなよ、リア充か！」

「やるねぇ桜」
「二人がそこまで進展したなんて……キャーっ」
「う、嘘だろ……将也ごときが……」

喜怒哀楽の様々なリアクション。は、恥ずかしい……。今思い返してもあの時のエピソードは顔から火が出るくらいに赤面ものだ。それをこんな大勢の前で暴露されてしまったら……キャー！　恥ずい！

「ひ、火祭……なにも今言わなくても……」
「ごめんね」

そう言ったのに言葉とは裏腹に全く反省の色を見せない火祭。ちろっと舌を出す小悪魔な仕草にむしろハートをがっつり掴まれた。か、可愛いから許しちゃう！　この辺が水川に感化されたよな。ナイス水川。

「……」
「っ！　痛い！？」

ぐりぃ、と背中の肉が捻れた。い、痛い！　なんだ急に！？　背中がものすごく痛い！

「な、何これ……」

ギャーギャー騒ぐ皆と違って、無言でただ俺の背中を抓る……春日。その表情は……怖かった。今まで見たことない般若みたいな顔をしていた……こえぇ。

「か、春日痛い」
「……」

何も言葉を発せずただ抓る春日。怖いし、痛いし、怖いし……どうしたの!?　なんか怒ってらっしゃる……？　つーかマジで痛い。意識が飛びそうなくらいだ。

「恵、離してっ！　まー君が痛がってる」

俺の異変に気づいてくれた火祭。俺から春日を離してくれようとしている。は、早くこの娘を落ち着かせてぇ！

第９２話　清掃服着た執行人

火祭の暴露と春日の暴行に頭と背中を痛めつつ、午後からの活動開始。午前中と同様、ゴミを拾い、拾って、拾いまくる。気づいたらゴミ袋は何十個となり山を築いていた。いやー、すげー頑張った！　俺達の頑張りがこの山を見るとすごく分かる。なんかこう、達成感があるよね。

「あ～しんどい！」
「でもなんだか清々しいよな」

今頃になって掃除の楽しさを実感しだした山倉と米太郎。午後からはサボらないように水川監視の下、誰よりも汗水垂らして働いている。そのくらいやってもらわないと午前のサボリは消化できないからな。そんな俺もシャツは汗で濡れ濡れだったりする。え、発言が気持ち悪い？　すいません。とにかく！　この炎天下、ひたすらゴミ拾いしていたら疲労も溜まるわけで……きっつ～…。

「火祭、春日ぁ大丈夫か？」
「大丈夫だよ」
「……」

そんなに疲労の色が見えない火祭と春日。あ、あれ？　キツイのって俺だけ？　皆さん体力あるんだね……俺の運動不足っ。

「はぁ……」

自分の体力のなさにげんなりしながらも手を休めるわけにはいかない。あ～……しんどい。

「やっと終わった……」

フラフラになりつつもなんとかやり遂げた。つ、疲れた……。

「お疲れ様っ。はい、ジュース」

頑張った皆を労るかのように水川がジュースを配る。じゅ、ジュース！

水川の持つビニール袋の中に素早く目を通していち早く目標を捉える。あった、メロンソーダ！　こういう時に飲むメロンソーダは格別なんだよな～。ぷぱー、激ウマ！

そして川のせせらぎが耳を癒し、疲れを取ってくれる。せせらぎってこんなに心地好い音色だったんだな……癒されるぅ。

「しゃあ！　今から打ち上げ行こうぜ！　カラオケがいいな！」

山倉は元気だな。こっからカラオケに行く体力と気力はないっつーに。あ～シャワー浴びたい。

「え～、皆さんのおかげでこれだけのゴミを集めることができました。河川が綺麗になり、我々の心も清く澄んだものになりました」

またも町内の偉い人が締めの挨拶をしているが、俺達は一切聞いていない。つーか他の皆さんものほほんと心地好い達成感に浸っていて誰も聞いていない。だって、ねぇ？　もう自分らで満足しちゃっ

てるんで、お話は勘弁してくださいってわけですよ。

「じゃ～打ち上げ行く人は山倉について行って。そうでない人はここで解散ってことで」

「おいおい兎月、何その投げやりな感じは!?　まさか、お前来ないつもりか!?」

そのとーりだよ山倉くぅん。汗だくで気持ち悪くて、こんなんで打ち上げに行きたくないわ。

「ノリ悪いな～将也は。だから将也なんだよ」

米太郎も何やら言っているが、そんなの関係ない。大体なぁ他の皆だって、

「私もパス～。今日はもう帰りたいし」

「私も。山倉先輩、お疲れ様でした」

「僕らも……すいません」

「……」

ほら、皆もこう言ってるわけだし、今日はやめとこうぜ。また明日にでも行けばいいじゃないのさ。

「ちっ、どいつもこいつも付き合いの悪い奴ばっかだな！　いいもん、俺と佐々木だけで行くもんね！　あとから仲間に入れてって言っても入れてあげないからな！」

小学生みたいなことを言って山倉と米太郎は走り出した。元気だなこいつら。そんな汚い格好でお店に入れるのか？　申し訳ありませんと断られるのがオチだ。

「あ、将也」
「ん？」
「……気をつけろよ」
「だな！」

去り際にニヤリと悪そうな笑みを浮かべた米太郎と山倉。……な～んか嫌な予感がする。あれは何か企んでいる顔だったな。土まみれで去っていった馬鹿二人。さて、俺達は大人しく帰りましょうかね。

「火祭、俺の鞄取ってくれない？」
「うん」

あ～疲れた。早く帰ってシャワー浴びてベッドにダイブしたいや。

「……まー君」

川のせせらぎを押し潰して耳に響いたのは今までに聞いたことのない火祭の低い声。嫌悪の色が濃厚に染み出している。え……ちょ、火祭さん？

「ど、どしたの？」

見れば俺の鞄の周りに火祭、水川、矢野、春日の四人が集まっていた。そして俺を貫く白い視線が四つ。は、はい……？

「まー君……」
「サイテー」
「軽蔑します」
「……」

は？　え、ちょ、なにが…あの……ま、待てい！　まったく意味が分からない。なぜ俺がこんなに攻められているのか全然分からない。俺が何をしたと？

「…まー君、これは何……」

「うえ？　何を言っ……へ？」

俺の鞄を広げる火祭。中を覗けば……エロイ姿でセクシーポーズをしたお姉さんが表紙の本が。しかも何冊も束になって出てき……はあぁぁっ！？

「え、あれ、はぁ？　ちょ、何これ……俺も知らないって！」

こんな大量のエロ本がなんで俺の鞄から……！？　おかしい、ありえない。だって俺はエロ本を買う勇気もないヘタレ軟弱野郎。そんな俺がこんな堂々とエロ本を持ってくるはずがない。勇者にもほどがある。

「まー君……最低」

「えぇ！？　いや、ちょ、待って！　これは何かの間違い……」

マズイ。このままだと俺の評価は最低値にまで下がってしまう。つーかもう手遅れっぽいけど！　仲の良い女友達から嫌われ、後輩からは軽蔑の眼差し。うぅ、なんでこんなことに……。

「恵、やっちゃっていいよ」

「分かった」

水川のゴーサインと共に春日がどす黒いオーラを出しながらこっち

に近づいてきた。や、ヤバイ！　鬼神・春日のフルボッコ私刑コースだ。殴る、蹴る、抓る、えぐるの百烈乱舞。し、死ぬ！　あまりの恐怖に尻餅をついてしまった。こ、腰が抜けて動けない。どんどん近づいてくるよぉ！？

「ま、待って春日ぁ！　俺は潔白だ！　これは何かの間違いで……」

「うるさい」

駄目だ、完全に目が据わっている。獲物を見る狩人の目をしているよ。ガチでヤバイ！

「うっ、あぁ……っ……や、矢野！　お前は信じてくれるよな？　俺はこんなことしないって」

「軽蔑します」

そ、それしか言わないじゃん。俺をゴミ虫を見るかのような目で見ているし……。

「ひ、火祭なら……」

「まー君、最低。信じていたのに」

見事に見捨てられた。いつも春日の暴行から俺を守ってくれていたのに。その女神が冷たい目で俺を見放してしまった。お、俺が何をしたっていうんだ。そうしている内に春日は目と鼻の先にまで接近しており、もう既に攻撃体勢。死刑執行人の双眸が俺を見下ろす。俺の死はカウントダウンへと突入した……！

「結局、兎月も佐々木達と一緒じゃん。男は皆、獣だね～」

……米太郎……おいおい、まさか……あいつらぁ！　そうだ、そ

うに違いない！　去り際のあの意味深な台詞、午前中の行動と俺への謎の嫉妬……あいつらが俺の鞄にエロ本を仕込んだのか！　あ、あの馬鹿ども……とんでもないことしてくれたな！

「春日、これは米太郎達の陰謀だ！　だから俺は無実なんだ」

「言い訳はそれだけ？」

こ、こえぇ！　あわわわ、まったく聞く耳を持たない。俺を殺すことしか考えないよ！　なんか春日父の姿が重なった。刀を持っているのか！？

「落ち着いて春日、それでも僕はやってない！」

頼むから信じて！　ヘタレの俺が拾ったエロ本をお持ち帰りテイクアウトするわけないだろ。そこまで腐っちゃいないからさ。そして度胸もないよ！

「うるさい」

しかし弁明及ばず、春日が止まることはなかった。大きく振りかぶった右足。あまりの殺気に息が詰まった。そこからは刹那の世界。ゆっくりと近づいてくる足がギロチンのように光り、空気を置き去りにする。全てが永く感じられ、なぜか俺は天を仰いだ。あぁ、なんて綺麗な空色なんだろう。この空はどこまでも広がっている。俺の知らない世界のさらに隅々にまで。空は全てを見ている。鳥が飛ぶのも、人が歩くのも、何もかも。全てを見守っている。米太郎の馬鹿がサボっていたのも、米太郎の馬鹿が俺の鞄にエロ本を入れたのも、全て知っている。だから空よ、今から俺がボコボコにされるのも見守っていてくれ。さぞや見事なボロ雑巾になるだろう。でもどうか笑わないで見ていてくれ。あなただけが記憶するちっぽけな

俺の最後を……

なんてことを思っているうちに刹那は終了。眼前には死神の鎌よろしく春日の右足が。視界は一気に暗くなり、そして俺の顔面を弾き飛ばした。バキィっと何かが折れる音が耳の内側から聞こえ……たぁぁ！

「ぎゃあぁぁぁっ！」

痛いぃっ！　皮膚が！　肉が！　骨が！　脳が！　顔の全てが痛いぃぃぃ！

「まだ……」

ぼやける視界が捉えたのは春日の握りこぶし。そして今度は何の猶予もなくギロチンは下ろされた。立て続けに襲う激痛に俺の脳は機能停止。ぐにゃぐにゃに曲がった空と途切れる意識の中、俺はこう思った。

……オチ……これ？

第９３話　カラオケに行きましょう

夏のあつ～い日、今日もまた補習。補習ったら補習。ふざけるな、どうしてこんなに勉強しなくちゃならんのだ。

「え～と、空欄の後ろにｂｅがあって、さらに時制が過去のことだから、空欄に入る答えはｗｏｕｌｄ……なのか？」

現在は放課後、辛くキツイ補習も終わり、偉く真面目な生徒である俺は教室に残って宿題を片付けている。サラリーマンで言うところの残業ってやつだ。出来もしない英語を必死に解き進めていく……のだが、

「なぁ将也～、この単語の意味が分かんないよ。教えて」

「辞書で調べろ馬鹿」

隣の米太郎がうるさい。邪魔しかしてこない。妨げ以外の何者でもない。いつも通り水川と春日と火祭に俺ら二人を合わせた五人で宿題を片付けていたのだが、なぜか女子三人は鞄を置いてどこかへと消えていった。ジュースを買いに行ったのか、または食堂でのんびりしているのか、馬鹿な俺ら二人に愛想尽かして遊んでいるのか。よく分からないが、とにかく勉強を教えてくれるお三方がいないわけで、俺達の宿題迎撃スピードは著しく低下したわけです。

「仮定法過去完了？　仮定してそれは過去のことでさらにもう完了しちゃってる？　は？　なんだこれ、意味が分からなすぎる。仮定法過去完了って……略して３Ｋ？」

む、無理だ。俺に英語は解けない。難解っつーか、理解出来ない。

無理だ、ギブアップ。さじを投げるかのようにシャーペンを放る。

「んだよｔａｋｅって意味多すぎるだろ。一人何役？　とんだ売れっ子だなおい」

そして隣の米がうるさい。あーもー、水川達はどこに行ったんだよぉ。迷える子羊を救ってくれよ。んー、水川達に頼りすぎだったのかな……。これは自分の力だけで解け、という水川の暗示なのか？

そんな殺生な。

「カラオケ行きたいよな～」

相変わらず隣のライス太郎がうるさいが気にしない。気にしたら負けかなと思う。

「なぁカラオケ行こうぜ」

「こっちは仮定法過去か。さっきとどう違うんだよチクショー」

「おい無視するなよ！」

プリントを凝視していたら、米太郎の顔に変わっていた。気持ち悪い、顔を近づけるな。問答無用、シャーペンを突き刺す。が、ギリギリで避けられた。

「危ねぇ！　なんだよ将也、無視するなよ」

「は？　さっきから俺に話しかけていたのか？　てっきり俺には見えない菌に話しかけているとばかり思っていた」

「おい、かもすぞ」

佐々木惣右衛門米太郎が何やら言ってるが無視だ。とりあえず英語は放置、俺にも出来そうな教科をやっていこうと思う。あーあー、

なんだかなー。夏休みに入ったのに勉強ばっかしている気がするぞ。なぜ宿題に追われなくてはならんのだ。彼女も欲しいし、遊びたいし、彼女欲しいし！　もー嫌だ。なんでこんな宿題が多いんだ。馬鹿だろ教師どもは。来年は受験なんだから、どーせ遊べないんだ。だったら今、この二年生の時に遊ばなくてどうする。そうだ、どこか遊びに行こう。そうだよ、遊ぼうよ！

「よし米太郎、カラオケ行こうぜ！」
「さっきから俺ずっとそう言ってるけども！？」

宿題なんかやってられるか。てなことで教科書やらプリント類を机の中に押しこんで（人々はこれを置き勉と言う）、さあカラオケにゴー！　と、その前に。米太郎が喉渇いたと喚くので食堂に寄ることに。そこで見たのは、

「あ、兎月ー」
「まー君だ」
「……」

すごくとてもとーても楽しそうに談笑している水川、火祭、春日がいた。ジュースとお菓子を広げて仲良くお喋りにしているではないか。ははー、なるほどね。あなた達三人は僕ら馬鹿二人をほって置いて、ここで楽しく仲良くガールズトークに花咲かせていたんだね。く、くそー！　隣の米太郎もブーブー文句垂れている。

「なんだよ水川！　お喋りするなら俺にも言っといてくれよ。俺も

参加したかったのにー」
「佐々木なんかに言うわけないでしょ。もちろん兎月にも。だってガールズトークなんだしぃー。三人だけで話したいこともあるんだから」
と、涼しげな表情を浮かべ、また水川達はキャピキャピと楽しげに談笑しだした。とてもとーてもと～っても楽しそう。なんだろう、この気持ちは。この惨めで悲しくゆらめく思いは。さっきまで教室で必死に出来もしない問題を解いていた俺は。そして米太郎は指をくわえて羨ましげに水川達を見つめている。ふ、ふん、別に羨ましくなんかないんだからっ。
「というか兎月達はなんでここにいるのよ。私達の鞄ちゃんと見といてよ。それになんで兎月達は鞄持っているのよ」
一気に三つも質問しないでくれ。聖徳太子ジュニアか俺は。
「へへん、今から俺と将也はカラオケに行くんだ。いいだろー？」
俺の代わりに米太郎が自慢げに話しだした。
「えっ、カラオケ？　宿題はどうしたの？」
「……」
そう聞かれた途端だんまりになる米太郎。めんどくさい、また明日にでもやればいいや。と高らかに吠えて放棄したなんて言いにくいもんね。ということで俺も黙ったまま斜め上に目線を泳がしています。
「まあどうせサボったんでしょ。よし、じゃあ私達も！」

「へ？」

「何歌うー？」

「真美から歌いなよー」

「えー、どうしよっかなー。ほら恵も選んで選んで」

「うん」

場所は変わりましてカラオケボックス。しかし目の前に広がる光景はさきほどの食堂となんら変わりない。三人娘はまたキャピキャピと嬉しそうに騒いでいるし、俺と米太郎は隅っこで、だらーとしているし。

「なあ将也」

「どうしたよ米太郎」

「俺がカラオケ行こうって提案したのに、どうして俺はこんな端っこでめそめそしなくてはならんのだ」

それに対して俺は返してやれる言葉はない。そして気づけば水川がノリノリで流行の歌を歌っていた。なんかサビは知っているぞ。うん、可愛いのでぼんやり見ておくことに。……しかし、今こう考えてみると、春日がいるんだよなぁ。まさか春日とカラオケに来る日が来るとは……お嬢様もカラオケぐらい行くよねー。

「いえーい！　ほら次は桜の番だよっ」

「うん」

水川の歌も終わり、続いては火祭。マイクを受け取り、その歌う姿は……はうわぁぁ！　拗ねてる米太郎もあんぐりと口を開けて、次の瞬間には満面の笑みでアイドルのコンサートに来たかのように腕を振っていた。そのくらい火祭の歌う姿は可愛くて素敵だった。もうね、可愛いの。うわー、素敵すぎる。

「ま、将也。俺、今日カラオケに来て良かったよ！」
「まだ一曲も歌ってないのにか」

心奪われた数分間、火祭が歌い終われば全員拍手喝采。さすがは火祭、歌も料理も勉強も喧嘩も全てにおいて完璧だ。そして可愛い。こんな才色兼備な方とカラオケに来れるなんて幸せだよね。

「はい、次は恵の番だね」
「ありがと……」

火祭からマイクを受け取ったのは春日。次は春日の番か……えっと、あの……大丈夫かな？　いやさ、あの、春日はお嬢様なのだが、果たしてどんな歌を歌うのだろうか。予想出来なくて怖い。きっと歌は上手いと思うのだが。

「なっ……」

隣の米太郎が絶句した。もちろん俺も。水川と火祭は笑顔でキャーキャーと騒ぐ。それはなぜか……なぜなら春日の歌っているのは超流行りのアイドルの歌だったからだ。なんて予想外。外国の国家とか歌うのではと考えていた俺からしてみれば予想外以外の何者でもない。そして……上手い。こっちは予想通りだった。春日の歌声は、まるで天使が地上に奏でる愛しき癒しの声のように繊細で美しく、聞く者を虜にするかのように綺麗な歌声だったのだ。そりゃ米

太郎も絶句して嬉し泣きするわな。水川と火祭も盛り上がるわけだ。
そして俺も見惚れるかのように春日の歌う姿をじっと見ていたのだが、春日は歌い終わると同時に俺を蹴ってきた。痛い。なんで？

「きゃー、恵ってば歌上手いっ」
「うん！」
「……ありがと」

またしても三人で楽しそうに盛り上がっている。さて、次は俺の番。

「すいません、ドリンクの注文いいですか？」

歌う代わりに電話している。ううぅ、俺はやっぱり注文係なのね。
と、俺がドリンクの注文をしている最中に米太郎が勝手に歌を入力。
アニソンを熱唱していた。あっ、それ俺が歌いたかったやつ！

「～♪」
「きゃー、恵サイコーっ！」
「イエーイ！」
「佐々木は黙ってなさい」
「ひどっ！」

その後も五人で歌いつつ盛り上がる。うん、やっぱ女子と行くカラオケって最高だよね。それにつられてなんかテンション上がって上手に歌えない歌に挑戦したりする。そしてグダグダになるみたいな。
それを米太郎は絶賛実行中だったりする。

「佐々木、アンタにそんな高音は出せないんだから出しゃばらないで！」
「俺の限界を勝手に決めないでもらおうか。喉のリミッターを解除すれば俺にだって美声が出せるんだい」
「桜、あいつの喉にエルボーぶち込んじゃって」
「ごめんごめん！　今すぐ歌中止するから！」

仲良くはしゃいでいる米太郎と水川。そして火祭と春日も仲良く二人で曲を選んでいる。……あ、トイレ行きたい。てことでトイレに。

「ん？　将也、どこに行くんだ？」
「ちょっとお手洗いに」
「行ってらっしゃ～い～♪」

米太郎の微妙な高音ボイスに見送られドアを開く。えっと、確かこっちにトイレがあったよな……えっ？

「……」
「……」

違う部屋から出てきたのはお盆を持った店員さん。その店員さんとばったり遭遇。そりゃ、ただの店員なら別に何の問題もないけどさ。ふんわりと毛先がカールした茶色のショートカットの髪、綺麗な小顔に大きな可愛らしい瞳がこちらを喜々として見つめてきていた。

「えへへ～」
「あの……なな」

こちらが言い終える前にその人は一度床に座り込んで、お盆を置く。
そして一気にがばっと抱きついてきたあああぁぁぁぁぁ！？　うわああぁぁ！？

「将也くーん！　えへへへ～」
「ちょ、菜々子さん！？」

ここで働いている元生徒会長の菜々子さんだ。って、また抱きついてきたよ！　うわあああぁ、何か柔らかいものを感じるー！　って落ち着け俺よぉっ！

「またお店に来てくれたんだ～。ご指名ありがとう」
「ここはキャバクラですか。それに指名していませんし」
「将也君が冷たーい」

うっ、そんな上目遣いのウルウルな瞳をこちらに向けないでください。騙されるな将也よ。この人はあれだぞ、元生徒会長でありながらなんと、親友の米太郎のお姉さんでもあるんだ。変に恋愛感情を抱いて恥をかいた一年前を忘れたか。この人にドキッとしてはならんのだ！　ええ！　そしてまだ抱きついているんですか。もう離れてください！

「将也君一人で来たのー？」
「一人カラオケだなんて勇気ある行動なんて出来ません。友達と来ています」
「あっ、じゃあ後ろの子はお友達？」
「え？」

菜々子さんの目線は俺の真後ろ。振り返ればそこには……春日がいた。

「……兎月」
「あっ……か、春日」

カラフルな色とＢＧＭで明るく染まる廊下が一気に凍った。少なくても俺の背筋は凍りました。後ろ数メートルに立っているのは春日。そして俺の胸元には抱きつく菜々子さん。なぜか血の気が一気に引いた。ガクガクと足が震えだす。脳による警報がガンガンと響き、店内のＢＧＭを打ち消す。ヤバイ、よく分からんけどなぜかそう思った。ぎょっと驚く春日の表情はすぐに切り替わり、鬼神のオーラを纏いこちらに近づいてくる。一歩一歩、恐怖を引き連れて。

「……菜々子さん、あれはお友達じゃないんですよ」
「へ？　そうなの？」

そうですとも。そして離れてください。なんかこれが原因で春日が怒っているような気がするんですよ。とか喋っているうちに春日はもうギロチンを構えていた。早い話、右足を振りかぶっているのだ。菜々子さんに被害が及ばぬよう菜々子さんを突き放す。もちろん優しくそっと。離れ際、「ああ、将也君……」と悲しげにこちらに手を伸ばしていたが、こっちはもう後ろの鬼神が怖くてもう仕方ない。よし遺言を残そう。

「菜々子さん、この人はですね、俺の、主人でして……俺は、この人の、下僕なんですぎゃあああぁぁぁ！」
「……馬鹿兎月」

第９４話　カラオケに行きましょうの続き

「ヤッホー皆さんっ」
「なっ、姉ちゃん！？」
「菜々子さんだー」
「お、お久しぶりです」

部屋に戻れば米太郎達が温かく菜々子さんを迎えてくれた。菜々子さんもダブルピースに元気な笑顔を振りまいて部屋に入る。続いて春日も。その後ろから俺は足を引きずりながらの入室。菜々子さんと廊下でばったり遭遇。そして抱きつかれ、そしてその姿を春日に見られ、そして……俺の足は赤く腫れた。ズキズキと痛む足に悶え苦しみながらも春日に菜々子さんのことを説明。しかし、

「馬鹿兎月」

と、まあこの一言にローキックを添えるだけのシンプルかつ強烈な返事しか返ってこず、足は悲鳴を上げるばかり。このまま廊下で春日に弁解しても聞く耳を持ってくれない。なんだこの状態は！？と思い、とりあえず一度部屋に帰還しようと。そこで改めて菜々子さんに自己紹介してもらうことに。あー、足痛い。

「はじめまして春日恵さん。私の名前は佐々木菜々子。そこにいる米太郎の姉であり、あなたが通う学校の元生徒会長であったりするものですっ」
「え……」

今さらそのリアクションかい！　俺が何回その説明をしようとして返り討ちに遭ったことやら。小さな口を開けて菜々子さんを見つめ

る春日。やっぱ驚くものなのかなー。火祭も最初は驚愕びっくり、と表情で物語っていた。そんなポカン状態の春日、なぜかせわしない火祭。その両者二名を交互に見つめる菜々子さんはニヤニヤとしている。ホント表情が豊かな人だな。

「この人が生徒会長……？」

「わ、私も初めて会った時はびっくりしちゃった」

春日と火祭、そんな会話をしているのを菜々子さんは面白げに見つめている。むふふ～、と口から何やら楽しげな声が聞こえたが気にしない。この人がやること言うこと全部を処理していたら頭がショートする。そして俺のハートは奪われかけたのだからっ！

「恵ちゃんは初めまして、桜ちゃんは久しぶりだね。……へぇ、なるほど～。これはこれはとてつもなーく面白い展開になったもんだね～」

口元をにんまり緩ませて菜々子さんは俺に向かってグーサインを送ってきた。意味が分からん。仮定法過去完了ぐらい意味が分からない。そんな菜々子さんを火祭はおどおどと、春日は物憂げな表情で見つめている。春日から敵意を感じるような気がするような……。

「恵、そんな警戒しなくていいよ。この人は兎月のただの先輩さんだから。ってこの説明、桜の時もやったような」

「……」

菜々子さんを見つめることをやめた春日は代わりに俺の方を睨んできた。うへぇ、まだ蹴り足りないとか？　勘弁してください、足はもうクタクタです。

「ふーん、二人とも大変だねぇ。そして将也君はもっと大変かもね」

その言葉の意味とウインクに対して俺はなんと返せばよいのか。まあ春日のローキックを受けている点に関しては確かに大変ですよ。そのお嬢様はかなりの理不尽っぷりを発揮しますからね。

「よし、真美ちゃんはこれまでの経緯を話してちょうだい。そしてそこの男子二人はトイレにでも行ってなさい」

「へ？」

「は？　何言ってんの姉ちゃん」

なぜか俺と米太郎に退場処分がなされた。いよいよ意味が分からなくなってきた。いや最初から意味が分からなかったけど。とにかくなぜ俺と米太郎はトイレに行かなくちゃならんのだ。いや待て、もともと俺はトイレに行くつもりだったのだから別にいいじゃん。あれ？　理に適っている？

「いいからどっかに出ていきなさい」

「姉ちゃんの方こそ出ていけよ。バイト中だろ」

「サボります」

「堂々と言うぬあああぁ！？」

菜々子さんに掌底を食らい、米太郎は部屋の外へと押し出された。そんでもって菜々子さんはこちらに手のひらを向けてくるので、大人しく退出する。やれやれ、なぜ店員に部屋から追い出されるのやら。ホント疑問が尽きない。

「あーあー、またガールズトークか」
「何を話しているんだろうな」

米太郎と俺はトイレで待機。自分の何とも言えない憮然とした表情が鏡に曇って映っている。今ごろ部屋で水川、菜々子さん、春日、火祭の四人が何を話しているのか。もしかして普通にカラオケしていたりして。

「何を話すって……そんなもん決まってんだろ」
「は？」
「いや……将也にそれを察しろっていうのは酷過ぎたな。鈍感まー君には難易度特Ａ級だった」

タバコを取り出すかのように円滑な動きでポケットから小さなタッパーを取り出した米太郎はその中からにんじんスティックを摘み、口にくわえる。これまたタバコを吸うかのような感じで天井を見上げて息を静かに吐いている。カッコつけているようだが結果的にお前は野菜くわえているだけだからな。

「お前がまー君言うな。そして鈍感とは何だ。俺はお前と違って空気は読めるぞ」
「空気が読めても春日さんと火祭の気持ちは読めてねーだろ」
「は？　なんでそこで春日と火祭の名前が出てくるんだよ？」
「……出たよ、鈍感馬鹿将也が」

冷めた目でこちらを一瞥し、続いてきゅうりのスティックを頬張りだした米太郎。なんだお前は、完全に俺のことを馬鹿にしてるよな！？

「何だよ米太郎。全く意味が分からないんだが」
「あー、はいはい。もうそれいいから。その反応見飽きた。もうお腹一杯だから」
「だったら野菜なんか食うなよ」
「物理的満腹じゃねーよ。俺の精神はお前らの甘々イベントを見て聞いて、もう腹一杯。ゲロりそうってことだ」

呆れ顔で米太郎は野菜スティックを飲みこみ、ほらもうそろそろ行こうぜ。という言葉を溜め息と一緒に吐き出した。なんか今日の米太郎はクールだな。お姉さんがいるから？

「遅いぞ二人とも～」

しばしのトイレ休憩の後、部屋に戻るとマイク片手に熱唱している菜々子さんがノリノリでそんな台詞をほざきなさった。あなたが出ていけと命令した挙句、そんなことを言われるとはね～。生徒会長には驚かされるばかりです。引退した後でもなお！

「ガールズトークは終わりましたか？」
「おかげ様でね。恵ちゃんと桜ちゃん……可愛いっす！」

そーですか。そりゃ良かったですね。

「じゃあ俺歌うな～」

米太郎は曲を選びだし、他の三人は……ん？　何やら様子がおかし

い。水川は普通だ。いつもみたくニヤニヤしたりして嬉しそうだ。様子がおかしいのは春日と火祭。春日がギロリとこちらを睨んでくるが、俺と目が合うと視線を逸らす。……ん？　何かあったのかな？　そして火祭は……いやホントどしたの？　火祭はさきほど以上にそわそわしておりキョロキョロしている。どことなく顔は赤く、何やらブツブツ呟いている。そんな二人を見て菜々子さんは嬉しそうにニタ～と笑う。またなんか変なことを言ったに違いない。前に火祭と会った時も初対面の火祭を真っ赤にさせていたし。やはりこの人は恐ろしい。

一体菜々子さん達が何を話したのかは不明。そのままカラオケは続き、菜々子さんは途中でバイトに戻っていった。その別れ際、「どっちも頑張って！」と言った意味もこれまた分からない。なんかな～……今日はずっと女子が内緒にお話ばかりしていたような。あれ……今日の俺ってなんか活躍したっけ？　ヤバイ、何もしていないぞ。嘘！？　そんなんでいいのか！？

「春日どうしよう！？」

「うるさい」

痛い！　け、蹴らないでえぇ！　……えっ、オチ……これ？

第９５話　真夏のパラダイス

じりじりと肌を焼く真夏の太陽、一面に広がるのは真珠のように細やかな砂浜、遠くの地平線までキラキラと澄んだ青色、空に浮かぶ雲は綿菓子のようだ。連想ゲームというわけではないが、上記のワードからここがどこなのかは察しがつきそうなものだ。そう、海に来ています。しかもただの海ではございません。なんと……

「プライベートビーチだあぁ！」

「てめ米太郎ぉ！　人の台詞を盗るな！」

米太郎が叫んだようにここはプライベートビーチ。なんと孤島。一般の客は入ることを禁じられたセレブだけが許された極楽地なのである。今この地平線にまで続く壮大な景色を俺達が独占しているのだ。無論、俺みたいな馬鹿ヘタレ貧乏庶民がここにいるのは場違いであることは重々承知である。しかし、これには理由があったりするわけで、時間は遡ること四日前の七月最終日……

遂に十日にも及ぶ地獄の補習もフィナーレを迎えた。ざまーみろ数学。ざまーみろ英語。ざまー……いや、国語はいいや。とにかく忌ま忌ましい補習も終わり、明日からは八月の始まりであり自由の始まりでもあるのだ！　いっ……やったぜー！　この瞬間を待っていたのさ！

「きたきたきた～。こっからが夏休み本番だな」

「馬鹿だなぁ将也は。夏休みは始まる前が一番盛り上がるんだぜ？
始まったらそれほど楽しくないものさ」

米太郎の大馬鹿野郎がふざけたことをほざいているが気にしない。
少なくとも今日までの補習漬けよりは楽しいだろうが。水を差すなら明日からも勉強していろ。

「でもな将也……そんな楽しくない夏休みを楽しくする方法があるんだぜ？」

楽しくない前提かよ。今日からゲームし放題で浮かれている俺はなんだってんだ。

「この夏を有意義に過ごすためにはお前の力が必要なんだよ」
「ナンパなら一人でしろよ」
「当たり前だ。将也みたいなヘタレ呼んだところで逆効果だから絶対お前は呼ばねえ」

ムカつく。コントローラ握れなくていいから、こいつを思いきりぶん殴りたい。

「だったら一人で楽しめ。じゃあな」
「ちょいちょいちょい！　ま、待ちたまえよ。可愛い女子と遊びたいだろ？」
「ナンパじゃねーか」
「違うって。春日さん達とだよ」
あ？　春日？　なんで春日達と？

「俺達と春日さん達って仲良しだろ？　やっぱ誘うならあの三人で

しょ」

実は春日が米太郎のことが苦手だということは置いといて。三人というのは春日、火祭、水川の美少女三人娘のこと。確かに俺達はあの三人と仲良くさせてもらっている。二年生の男子で俺たちのＮｏ．１って企画をすれば間違いなくこの三人の名前が挙がることであろう。実際に火祭などが告白されたという話はよく耳にする。すごい人気なんですよ彼女達～。そのせいで仲の良い俺はよく恨み妬みの視線をぶつけられる。ヘタレの俺にそれはしんどいのです！

「しか～し！　なんと俺と春日さんはさほど仲良くはない。休み時間に野菜トークを嗜む程度だ」

そんな光景見たことない。お前が一方的に話して春日が無視しているのは何度も見たけどな。

「そこでやっとこさ将也の登場だ。待たせたな」
「待ってねーよ」
「そうか。とにかくお前の登場だ。春日さんの彼氏であるお前が誘えば絶対に来るだろ？」
「彼氏じゃない、下僕だ」

こいつは何回同じ説明をさせる気だ。俺は春日の下僕だっつーに。そんでこの説明すると自分自身で悲しくなってくるってのはもう言い飽きた。

「ほぼ付き合っているようなもんだろうが。いいから恋人の将也が誘えよ」
「恋人じゃない、桂だ。あ、間違えた下僕だ。つーか春日達をどこに誘うんだよ」

「海だ！　夏と言えば海！　定番だろうが。へへへっ、ピチピチのギャルが俺を呼んでるぜっ」
「結局ナンパじゃねーか！」

とかこんなわけで春日達を誘った。そして快く承諾してくれた。普通に皆さんが行く海だと思っていたのに、誰かのおかげでこんな立派なビーチを貸し切り状態にできた。そして日帰りだと思っていたのに、誰かのおかげで孤島の別荘で二泊三日の旅行になったりした。その誰かなんだけど、

「すまない、色々と忙しくてね。遅れた」

浜辺で突っ立っていた俺と米太郎に向かってある男子が近づいてきた。不健康な純白の肌に痩せぎみの体型、そしてインテリ眼鏡をかけている黒髪の青年。彼こそが俺達を招待してくれた人物。その名も、

「金田先輩」

同じ学校で一つ上の三年生、金田先輩だ。大企業の社長の一人息子で春日の元婚約者。俺が暴れたせいで結婚の話は消えてしまったのは今でも申し訳ないと思っています。でも後悔はしていない！

「うわ、金田先輩って色白だとは思っていたけどここまでだとは…。ちゃんと野菜取ってますか？」

おいおい米太郎、招いてくれた恩人になんつー無礼な。そういうことは心のツイッターでそっと呟け。

「はは、昔から虚弱体質でね……」

すいません金田先輩、こんな馬鹿な奴連れてきてしまって。あとでキツク言っておきますから。

「それにしてもこんな立派な別荘を持っているなんて、さすがはセレブっす」

しかも孤島だよ？　どんだけって話だよ……俺みたいな庶民には考えられない。宝くじで一億円当たるなんて夢のまた夢。その夢夢が叶ったとしても孤島に別荘を建てるなんて無理なのだから。お金持ちってすげーな。

「父が持っている別荘でね、好きなだけ遊んでもらって構わないよ」

「そりゃ遊びまくりますよ！　ヒャッハー！　将也ぁ、行こうぜ」

海パン姿の米太郎がブンブンと腕を回す。うぜぇ、小学生か。

「まあまあ佐々木君、もう少し待とうか。まだ女性陣が来ていないから」

今のところ砂浜には俺達三人しかいない。女子メンバーの春日、火祭、水川はまだ着替えてる最中だ。

「あぁ火祭達の水着姿……くぅ～楽しみだぜ」

隣で痺れている米太郎。まあ、その気持ちは俺も分かる。二年生の

トップ3だと評される春日達。そんな彼女らの水着姿を拝めるなんて……最高だぜぃ！　といった気持ちでテンション上がりまくりです。

「女性陣が来たら、ちゃんと褒めるんだよ」

さすがはスーパー紳士の金田先輩。大人の気品が溢れてますよ。

「じゃあ俺は水川を褒める」

「では僕は恵さんを。他の二人は認識がないからね」

なんで予約制？　そしてなんで一人が一人を褒める制度？　三人で女子三人を讃える形式でいいじゃんか。そして俺は火祭。すげぇ楽しみ！

「お待たせ～」

水着姿を想像してニヤニヤしていた俺達の耳に水川の声が届いた。バッと高速で振り返る男三人。そ、そこには……予想を遥かに越えた素晴らしき光景が……！

「マジか……」

「す、すごい」

左右から二人の感嘆とした声が漏れていた。いや……俺も思わず見とれてしまった。目の前には水着姿の水川に春日に火祭。普通にアイドルかと思ってしまった！　水着姿が似合いすぎでしょうがぁぁっ～。

「へへ～、どうかな？」

その場でくるりと回る水川。水色のビキニが眩しい！

「うんすっげぇ似合っているよ水川！　エロ可愛い！」

打ち合わせ通り水川を褒める米太郎。目が血走っているって。怖い怖い。

「恵さん、とても似合っているよ。まるで砂浜に降り立った女神のようだ」

「……」

さらっとすごい台詞を言った金田先輩。そんなの恥ずかしくて言えないって。……でも確かに女神のようだ。麦わら帽子に無地の白いワンピース姿パネェ……透明感がすごいよ！　キツめのつり目がこっちを睨んでいなければ最高だよ。

「ま、まー君」

そして火祭……超可愛い！　は、は、ハンパない！　まさにビーチクイーンの名にふさわしい。この娘のことをコケティッシュと呼ぶのかぁ！？

「す、すっげぇ似合ってるよ……！　直視出来ないくらい……」

「あ、ありがと……」

赤くなってもじもじしている姿もグッとくるぅ！　あぁ……夏休み最高……！

「いやー皆可愛すぎるよ！　俺もう倒れそうなくらいだ」

テンション最高潮になった米太郎がやたらと騒ぎまくる。空へと拳を突き上げている。完全に顔がデレデレしており、鼻の下伸びまくりだ。ったく、こいつは。

「キャッハー！　……けどな～。う～ん……こう見ると三人とも胸はないんだよな。一人くらい巨乳ちゃんがいても良かったのによ～」

こ、こいつは……！？　やらかした。米太郎がやらかした！　俺でも分かる。今のは言っちゃいけない台詞だと！　米太郎のデリカシー無しの発言によってピシッと空気が割れた。割れ目から一気に冷気と殺意が溢れ出す。

「ま、火祭が一番か……。それでもどんぐりの背くらべだな。はぁ、残念」

お、おいおい米太郎。もうやめないと……

「桜、あの馬鹿やっちゃっていいよ」

水川……笑顔だけど超怒ってる。顔は笑っているけど、目は完全にキレている。ひどく冷たく鋭く、怒りが荒れ狂う瞳は米太郎を射抜いていた。水川がめっちゃキレている……ガチで怒りマークが見えるってすごくない？

「言われなくてもだよ……」

火祭も怒っていた。静かに息を吐き、火祭のスイッチが血祭りモードに切り替わる。放たれる黒いオーラが太陽以上にピリピリと肌を焦がす。こ、これはヤバいぞ……！　いつの日か、不良達と対峙し

た時の空気を思い出した。あの時もこうやって火祭は凄まじい気を放っていたのだ。

「ひぃ！　ひ、火祭、さん……」

やっと自分の過ちに気づいた米太郎。顔が引きつっている。しかしもう手遅れだ。血祭りの火祭は右拳に全パワーを集中させていた。荒れ狂う波、ざわざわと空気は揺れていた。ガクガク震える親友に対して、俺はドンマイと心のツイッター。

「朝まで目覚めないと思った方がいいよ……！」
「う、うわわわあぁっっ！」

バキィ！　と耳を覆いたくなるような痛々しい音と共に米太郎が宙を舞い、浜辺に頭から突き刺さる。そして赤く染まる砂。真夏のパラダイスは時として処刑場に早変わり。相変わらずすごい威力だな～。あと、火祭が段々と手を出すようになってきたな……。いや、悪いのは米太郎か。

「お、俺……死んだ……」

死体が喋りやがった。

第９５話　真夏のパラダイス（後書き）

ここから『真夏のパラダイス編』としてしばらく続きます。

第９６話　全力スイカ割り

「きゃははっ、気持ちいい～」
「うん、冷たい……」
「ほら、桜も早く～」
「まだ準備運動の途中だから」
「そんなのショートカットバージョンで大丈夫だって」
「ショートカットバージョンとかあるの？」

どこまでも続くオーシャンブルーの前方を見れば、海で美女三人がキラキラと水浴びをする天使のように無邪気に戯れている。なんと素敵な光景だろうか、見ているこっちも楽しく幸せになってくる。

「将也ぁ、抜いて」

横を見れば、ピザの斜塔よろしく砂浜にぶっ刺さっている米太郎。なんと不快な光景だ。眉間にシワが寄ってくる。殴りたい。自然と拳がグーの形に。

「知るか。自分でなんとかしやがれ」
「おらあ！　ふんふんふんっ！」

その場で暴れ回って砂から脱出した米太郎。本当に自分でなんとかしやがったよ！　まさにやれば出来る子か！

「ふぅ、ギャグパートじゃなかったら死んでいたぞ」
「逆に言えば、シリアスな場面で巨乳なんてワード出す奴は死ぬべきだろ」

地面に倒れこむ米太郎。ギャグパートとはいえダメージが思いのほか残っているみたいだ。さすがは喧嘩最強、火祭ちゃんの一撃。俺なら三日は目覚めないだろう。ま、俺は火祭に殴られないけどね。だって米太郎みたいな馬鹿なことはしないから。

「このまま真夏の太陽に焼かれて眠りたりところ……だ、け、どぉ！　そんなの男じゃねぇ！　イヤッホーイ、俺も混ぜてぇ」

次振り返った時には米太郎は立ち上がり雄叫びを上げて海に向かって走り出していた。なんつー回復力。さすがはギャグパート。

「はは、兎月君の友達は皆元気だね。若いっていいなあ」
「年一つしか変わらないですよ、金田先輩」

パラソルの下、金田先輩が暑そうに座っている。隣には執事の……え～っと……中井さんだっけ？　一回ほどしか会ったことないけど。金田先輩の横にいつもいる人だ。初老の温厚な人に見えて武術を修めているらしく、春日家に特攻した際に一度やられかけた記憶がある。その時は前川さんという強い味方がいたので助かったが。つーかスーツ着て暑くないのかな？　涼しげに立つ中井さんと、弱りかけている金田先輩。この人熱中症で倒れそうだよ。嫌だよ、自分のプライベートビーチで倒れるなんて。

「じゃあ夕方頃に呼びに来るから、それまでは自由にしていていいよ。何かあったら中井に申してくれ」

そう言って金田先輩はフラフラと立ち上がると海から離れるように別荘に向かっていく。これまた別荘が大きいこと。見事なもんですよ。ザ・別荘と言うべき、そのくらい立派な別荘が海岸から少し離れたところに建ってあるのだ。

「あれ？　金田先輩は遊ばないんですか？」
「ああ、部屋で勉強するから。すまないね。どうしても……」
そっか、受験生ですもんね。H大目指しているから大変なのに、俺達をこんな素敵な所に招待してくれて……。
「ありがとうございます。忙しいのに俺達の相手をしてくれて」
「構わないよ。むしろ僕から言ったんだから。君と恵さんにはいつか謝罪しないといけないと思っていたから。あの時は本当にすまなかった」
いやいやこちらこそ的な感じで金田先輩も頭を下げてくれた。いやいやカウンター、あなたは悪くなかったですって。
あの時とは金田先輩と春日が結婚するとなった六月頃の出来事。金田先輩と春日は両家の親が認める仲、良い風に言うと許嫁となり結婚することになったのだ。下僕として春日の傍にいる俺が邪魔だと思った金田先輩は、俺に対して春日に近づくなと警告。持ち前のヘタレ魂の発揮もあってか、俺は春日と離れ離れになった。しかーし！　俺は春日と一緒にいたいという自分の本当の気持ちに気づき、決意を固めて春日家に乱入。その場の空気も雰囲気も一切読まず、ただ自分の言いたいことだけを散々と吐き散らして二人の婚約をぶち壊した。実際には春日の家に突撃して自分の気持ちを告白しただけなのだが。そんなとんでもねークラッシャー告白によって金田先輩は自身の将来を滅茶苦茶にされたのだから、俺なんてものは恨むべき相手のはず。しかし俺はなぜか感謝されているんだよな～。
「あの時は本当にすまなかった……。兎月君と恵さんに辛い思いをさせてしまった」

「はあ。……あの、ずっと気になっていたんですが……なんで急に結婚しようとしたんですか？」

大企業の子供同士の政略結婚だと聞いたが、あのタイミングでの急な申し出……なんか違和感があったんだよな。

「……それについては僕は何も言えないんだ。本当にすまない。何も言うなと口止めされているんだ」

顔に暗い影が落ちる金田先輩。何やら訳ありのようだ。金田先輩にも事情があっての結婚だったということか。

「僕も恵さんも望まない結婚だった。お互いに気持ちに嘘をついて、自分自身を偽り、本当の気持ちを言えなかった。けど兎月君は違った。ただただ自分の気持ちをさらけ出した。何も臆せず堂々と……それがどんなにすごいことか。そんな君に気づかされたよ、僕も恵さんも」

い、いやいや！　俺は別にすごいことはしてないですって。本当にただ自分の気持ちを言っただけなんですから。それって子供と一緒だもんねぇ。

「だから今回はそのお礼をしたいんだ。どうか遠慮せず全力で遊んでくれないかな？　あともう一つ……恵さんを幸せにしてやってくれ」

「ちょ、最後のはおかしいでしょ！？」

遊ぶついでに幸せにしろなんて、さらっととんでもないこと言ったよ。春日を幸せにする？　ははっ、俺じゃあ絶対無理だな。身分が違い過ぎる。俺なんかと春日は釣り合わないッス。

「では、お言葉に甘えて。先輩も受験勉強頑張ってください」
「ああ、ありがとう」

さ～て、俺も遊びますか！　せっかくの海だし思いっきり遊ばないとね。

「……兎月君」
「ん？　なんでしょうか？」
「……事情は言えないが、これだけは言わせてくれ。……あの時のことで君は目をつけられた。気をつけてくれ……」

それだけ言うと金田先輩は別荘へと歩き出していった。……最後の言葉はどういう意味だ？　目をつけられた？　気をつけろ？　なんのことやら……。う～ん、まったく分からん。

「兎月～！　兎月も早く来なよ。準備体操なんてショートカットバージョンでいいからさ～」

……ま、考えもしょうがないか。とにかく今はこの時を遊ばないとな！　ヒャッハー！　海が俺を呼んでいるぜっ。

米太郎と遠泳勝負をしたりとかでこれでもかといわんばかりに泳ぎまくった。いやー、すごいな。ここの海を今は俺達だけが独占している。誰にも邪魔されない完全な貸し切り状態。ああ、海ってこんなに静かだったんだな。こう耳を澄ますと海の声が聞こえてくるよ……はぁ～癒される。俺は皆と離れたところでのほほんと海に揺られている。全身を投げ出して、どこまでも広がる青空を眺める。そして海のハンモックに身をあずけて心地好い眠りへと誘わ、れ……

「……兎月」

「ぶばぁっ！？　がぼぼぼっ」

腹を襲った痛み。そのせいで体はバランスを失い、沈んでしまっ……溺れるぅ！

「ぶはあっ……がはっ……死ぬかと思った」

口に海水がぁ、しょっぱい！　鼻に海水がぁ、思い出す小学校の時に溺れた記憶！　鼻が痛い痛い痛いの痛い痛い痛い。心地好い眠りじゃなくて永遠の眠りにつくところだった！

「か、春日…死ぬ……」

「私は死なない」

「俺がだよ！　人を殴っといてそれはないだろ」

なんつー態度。人が溺れかけたってのに表情一つ変えないなんて……悪魔かよ。デビルですか。英語で言えばデビルですか！　発音良く言えばデェビィルですか！？

「げほっ……で、何か用でも？」

「別に」
「ほお～。人の腹を不意打ちで殴って溺れさせるためだけに来たのか。泣かせてくれるねぇ、違う意味でな」
「別に」

この娘に皮肉は通じないようだ。つーか普通の話も通じないことがしばしば。無視するか、一方的に話すだけだからな。コミュニケーションの難しさで言えばシーマンのそれとは比べ物にならん難易度だ。会話していて意志疎通出来たことはほとんどない。もしその原因が春日ではなく俺にあるとするならば、俺は会話、意志疎通、人間関係の本を買い占めてやる。てか俺が悪いのかな？　いつも俺から頑張って話の話題とか振っているのですが。

「それにしてもすごいよな、こんな孤島を持っているなんて。春日のところもこんな感じ？」
「……島はない」
「なら別荘は？」
「……ある」

おお、やっぱお金持ちは別荘を持っているものなんだな。羨ましいや。お金持ちは高級車と豪邸そして別荘を保有しているという庶民のしょっぱいイメージは当たっていた。

「へぇ、山の中とか？　バーベキューとかやったりして楽しそうだな」

俺もバリバリ働いて金持ちになって別荘を買いたいものだ。んで、休みの日に家族と過ごしてさ。都会では見られない満天の星空を眺めたりして……ああ、いいなあ。別荘欲しい。そして綺麗なお嫁さんも欲しい。

「あ～、俺も社長になろうかな」
「無理」
うぐっ。そ、そうですよね、俺みたいな馬鹿が社長になれるはずがないよね。精々、課長だろうな……悲しき自分の限界！
「兎月、恵～。戻ってきて～」
浜辺から水川が手を振っている。何やらするみたいだ。
「春日、行こうぜ」
ま、俺が言う前から泳ぎだしているから意味ないけどね、はぁ。

「スイカ割り？」
「イエス！　金田先輩からの差し入れだよ。せっかくだからスイカ割りしようと思って」
俺達の立つ中心には丸々と大きなスイカ。これはなんとも立派なスイカだな。見事な西瓜だ。漢字にしたら少しだけ戸惑うよね。そうだったこれでスイカと読むんだった、とかなるよね。
「米太郎、どう見る？」
「俺の家スイカは作ってないから分からん。トマトのことなら何でも聞いてくれ」

トマト割りなんてないだろ。

「はい、木刀」

どこから取り出したのやら、普通にスッと木刀を渡してくる水川。
いやいや、なぜに木刀がある。誰の私物だよ。

「木刀か。どうせなら本物の真剣でしたかったな」

お前は哀川の兄貴か。

「いいから、まずは兎月からいってみよー」

水川に無理矢理タオルを巻かれる。ぐあぁ目が圧迫されるぅ。何も見えない真っ暗闇。ＲＰＧで言うと、くらやみ状態だ。誰か目薬持ってきてぇ。万能薬でも可！

「じゃあ出発進行っ」

ったく、しょうがない。ちょっくら俺の腕前を見せてやりましょうかね。華麗に一刀両断してやるぜ！

「やったるぜ。米太郎、サポートよろしく」
「よーし、まずは前進だ」

米太郎の指示通り、とにかく前進する。目が見えない状態ではかなりの恐怖が乗しかかってくるが、ここは何もない砂浜。何も恐れることはない。熱い砂が足の裏を焦がす感触を頼りに歩いていく。

「はいストップ！　そこから右側向いて」

右？　こっちか。

「あ～、行き過ぎ。ちょっと左に戻って」

こうか？

「う～ん、そこから前に三歩進んで」

水川の声だ。前に三歩？　そうなのか……？

「あ、そこから九時の方向に進んで」

「こうか？」

「そうそう。で、右を向いてストップ。そこだ！」

米太郎と水川の指示に従い、どうやらスイカの前にまで辿りついたようだ。木刀を握る手に自然と力が入る。

「やったれ将也、思いきり振り下ろせ！」

言われなくてもだ。スイカ割りなんて綺麗に割れるもんじゃない。ひびが入ったりと粉々になったりと現実はそんなもの。終わって残るのは微妙に砕けたスイカと儚さと虚無感。し～かし！　そのしょぼくれた現実をここで覆してやる。スパーンと真っ二つにしてやんよ！

「集中……」

目ではなく肌で。目ではなく心で見るんだ！

「……見えた。目の前に気配を感じる……」

自分の呼吸、砂の呼吸、そしてスイカの呼吸。幾千ものの呼吸が折り重なる中、一つの小さな呼吸を捉えることが出来た。確かに目の前でスイカが息づいている。ふっ、目で見えずとも姿を捉えるなんて造作もないこと。

「ふぅ……はあ……！」

気持ちを落ち着かせ、刀を構える。風が空を走る音が消え、海が波打つ音も消えた。気を高めるにつれ、音は消えていく。そして次第に無が周りを支配しだす。聞こえるのは己の鼓動のみ。トクン、トクン、と……。そして鼓動の音も消えて、全てが無になった。……

……今だ！

「はあぁっ！」

寝かせた刀身を真っすぐに起こし、空へ掲げる。ピンと張りつめた空気を一掃い。全身の力を解き放つ。

「銘天一刀流・刹那蟋蟀（せつなこおろぎ）！」

天仰ぐ刀を一気に振り下ろす。風を斬り抜け、全霊を込めた刃がスイカを一刀両断……のはずが耳に響いたのは砂を叩く音。ボスッと乾いた音がなんとも拍子抜け……って、あれ？

「は、外した……？」

おかしい、かすりもしなかった。なんで……？　明らかな違和感。

思わず目隠しタオルを外すと……

「ちょ、スイカないし！」

目の前に緑の丸いアレがいない。一面に広がる砂浜。と、急に後ろから笑い声が聞こえてきた。バッと後ろを振り向けば、ゲラゲラ笑う米太郎に水川……そして数メートル手前には丸々と輝くスイカが、って全然場所違うじゃん！

「ちくしょう！　騙しやがったな！」

こいつらぁ、全く見当違いの場所に誘導しやがって。

「ぶはははっ、空振ってやんの～」

「きゃはははっ、スイカの気配を感じる……だって」

腹抱えて爆笑の米太郎に水川……む、ムカつく！

「お前らぁ！　笑ってんじよねぇよ」

「けほっ、けほっ。あ～面白い。刹那蟋蟀！　……だってよ、ぎゃはははっ！」

「ボスッって……カッコ悪ぅ。あっはははっ」

「だから、やめろよぉ！」

第97話　夏と言えばバレーと結びつくものなんだなぁ

米太郎と水川の嫌がらせでとんだ赤っ恥をかいた。あの後、スイカは普通に切って皆で食べました。うん、美味しかったよ。ただ俺は恥かいたけどね！

「よ～し皆ぁ、バレーボールしようぜ」

米太郎がボールを投げてきた。あ～ムカつく。なんとなくムカつく。米太郎ムカつく！

「おい将也、顔が歪んでるぞ。まだ根に持ってるのか」
「そうだ」
「そうか。いいからビーチバレーしようぜ。せっかくの海なんだ、ビーチバレーしようぜ！」

しようぜ、しようぜ、うるせーよ。ムカつく、あぁムカつく！

「ネットも準備されているし、やろうよ。ね？」

火祭に言われちゃあ、やるしかないっしょ！　気分一転、気持ちはビーチバレー！

「オッケーやろう！　チーム分けだ、チーム分け。はい、グーチョキパーで分かれましょい！」
「兎月、さっきから感情の入れ替わりが激しいよ」
「つーか、どうやって分かれる？　五人だと中途半端だし、あと一人いれば……」
「やあ、皆。楽しんでいるかい？」

都合よくご登場、金田先輩。ナイスタイミングで賞。

「これで六人だな。よっしゃ、グーチョキパーで分かれましょい！」

「あの、待ってくれ。僕はいいよ。運動は苦手だし」

「まあまあ金田先輩。せっかくの海なんだから、ちょっとは遊びましょうよ」

受験が大事なのは分かりますが、ちょこ～っとぐらい遊んでも大丈夫ですって。

「う～ん、そうかな？　なら、僕も参加させてもらおうかな」

つーわけで金田先輩も参加。これでチームがきれーに分けられる。やったね。

「じゃあグーチョキパーで分かれましょい！」

この台詞もう三回目。

なんやかんやとあって今からビーチバレーをしまーす。チーム分けは、

「よろしくな火祭」

「うん、まー君」

俺と火祭、

「頑張ろうぜマミー」
「マミー言うな」

米太郎と水川。そして、

「恵さん、よろしくね」
「……」

金田先輩と春日。うんまあ、なかなか良い感じにチーム分けできたと思う。

「……兎月」

春日が手を挙げる。おぉ、珍しい。春日が自分から発言するなんて。その表情から察するに何か不満があるようで。

「どうした？」
「チーム変えしたい」
「め、恵さん!?」

いきなりチーム変更を要求しやがったよ。どんだけ金田先輩のこと嫌いなんだよ。一応、元婚約者同士じゃん。小さい頃とか一緒に遊んだとか言ってたよね。そんなに気嫌いしなくてもいいじゃないっすか。

「けどチーム決まっちゃったし。金田先輩には申し訳ない台詞ですが、これで我慢してよ」
「そ、そうだよ……」

すいません、金田先輩。でも、この娘はこういう性格ですから。

「嫌」

「まあまあ。な？」

「……嫌」

うーん、本気で嫌がってるよ。そんなに嫌かね……。俺も金田先輩に気ぃ遣ったりと色々大変なんですが。金田先輩は俺達をこの島に招待してくれた方なのだ。その人に無礼があってはならないと尽力を持ってフォローしなくちゃならんのは当然のこと。しかし春日は露骨に嫌な態度を取る。はぁ、じゃあどうしたらいいんだよ。

「なら、恵は誰とがいい？」

ナイスフォロー水川。少し気まずい雰囲気になりかけたのを水川が打ち消してくれた。うん、彼女に任せたらこの気まずい感じをなんとかしてくれるでしょう。

「……兎月」

まさかの俺指名。そして嬉しい。なんか、こう、春日から信頼されているというか、やっぱ下僕として頑張ってきただけのことはあるな、みたいな。

「駄目！　まー君は私と組むから」

すかさず火祭が反論。これまた嬉しい。火祭からもこう言ってもらえるなんて俺は感無量です。これでモテモテだと自惚れはしないけど、慕われてるなぁとぐらいは思ってもいいよね？

「……兎月」
「駄目っ」
「め、恵さん……」
「いいから始めようぜ。どうせ俺らのチームが一番強いんだから」
どいつもこいつも自分勝手に言いやがって……もう収拾つかないって。水川ぁ、なんとかして。
「じゃあさ、恵。あとで兎月が一発芸するからさ。それで我慢してね」
「……分かった」
とんでもない解決策を出しやがった。一発芸って……今まで一回たりもしたことないぞ!?
またもなんやかんやとあったけど、やっとこさビーチバレー開始。ちゃんとネットもあるし、なんて立派なビーチなのでしょう。一体誰が用意したのやら。金田家に仕える人達と言えば簡単に答えが出てしまうけどね。
「しゃあ！　水川、やるからには勝つぞ」
「はいはい」
「頑張ろうね、恵さん」
「……」

まずは水木チームと日金チームの試合。つか……さっきから春日がこっちを見てくるが、どうしたらいいのやら。そのチームで納得してもらわないと。どんだけ嫌がってるんだよ。

「はっは～！　元バレーボール部エースの実力を見せてやるよ」
「いいから早くサーブしろ」

お前の自慢は何度も聞いてきた。体育の授業、クラスマッチとな。そしてろくな結果を出していない米太郎。

「はあぁっ！　くらえ、刹那蟋蟀～」
「ぐあぁぁっ！　コノヤローまだそれ引っ張るかぁ！　もうやめてくれ！」

さっきのスイカ割りのことはもう忘れろ！　恥ずかしいんだって、ちょっとカッコイイ技名考えた自分が恥ずかしいんだって！　うぅ、もうあんなことはぜってーしない。もっと普通に生きよう。

「私はカッコイイと思ったよ」

慰めてくれる火祭の言葉も今の俺には傷口に塩の如く。さらに惨めな気持ちになるだけ。などと俺がブルーになるのとは対照的に試合はどんどんヒートアップ。

「刹那蟋蟀サーブ～」

しつこく何度もイジってくる米太郎。すげー嫌な奴。加減を知らない小学生のようにひたすら馬鹿にしやがる。そろそろ本気で泣いちゃいそう……。

「恵さん、そっちにいったよ！」
「……」
おろおろと動き回る金田先輩と、完全停止の春日。あれれれ、春日に戦う気は微塵もないようだ。クラスマッチのバドミントン同様、両手をだらんと下げている。一切ファイティングポーズをとらない。ボールをぼんやりと目で追うだけで動かない。そしてたまにこちらを睨んでくる。俺が何かやりましたか？
「め、恵さん……」
金田先輩も動き回るだけで何も出来ない。ただボールを追ってそれで終わり。ちゃんとレシーブとして返せていない。とどのつまり試合は水木チームのパーフェクト状態。おいおい、ひど過ぎるだろ。
「春日、もっと真面目にやりなさい」
「うるさい」
一蹴されちゃいました。俺をギロリと睨むぐらいなら、ボールを追いかけなさいよ。
「ひゃはは！　どうだ、これがバレーボール部エースの実力だぁ！」
完全に調子に乗った米太郎は遠慮なしにサーブを連発。一方的なラブゲームが続く。あいつに手加減という概念はないのか。ちょっとは空気読めよ。
「ぜぇ、ぜぇ……」

散々動き回った金田先輩の体力は底をつきそうだ。いつダウンしてもおかしくない。まともなレシーブは一回しかなかったぞ。

「と、兎月君……僕はもう……」

「しっかりしてください。先輩は会社を継ぐんでしょう？　こんなところで倒れちゃあいけませんって」

とはいえ、金田先輩はもう限界。フラフラのボロボロだ。ビーチバレー程度の運動でボロボロのフラフラなのだ。勉強も大事ですけど、もうちょっと運動した方がいいですよ。

「どうか、僕、の代わ、りに……会社を継いで…く……」

熱々の砂浜に崩れ落ちる金田先輩。

「か、金田先輩ぃー！」

力尽きる金田先輩。か、金田先輩ぃー！　死んじゃ駄目ですって。つーか俺に会社は継げません！

「お、俺はなんてことを……」

今更気づいても遅いわ米太郎。そこで反省していろ。

「……」

「お、おい春日。黙って見てないで助けろよ」

動かなくなったネジ式人形を見る子供のように、無感情の瞳で金田先輩を見下ろす春日。何も動じず何も喋ろうとしない。怖いわ！

手を差しのべるとかやることはあるでしょうが。

「か、金田先輩？」

慌てて駆け寄るが、金田先輩はぐったりしている。あ～、日頃の疲れが溜まっていたのかな。こりゃ当分起きないかも。そして春日、俺を蹴らないで。

「中井さーん！」

「お呼びでしょうか」

名前を呼べばすぐに駆けつけてくれた執事の中井さん。素晴らしい瞬発力。

「金田先輩を運んでくれませんか？　そのうち目覚めると思うので」

「かしこまりました」

金田先輩を抱えて中井さんは砂浜から去っていった。う～ん、無理に運動させたのがまずかった。招待してくれた先輩をダウンさせるなんて……よくもしてくれたなぁ、米太郎！

「火祭！　金田先輩の仇だ。あいつをボコボコにしてやろうぜ」

「うん」

つーことで二回戦。春日と代わって、俺と火祭がコートに入る。待ちに待った月火チームの登場だい！

「ほほぅ、この俺に勝てるとでも？　浅はかだな」

こいつは一度ぶっ飛ばさないとな。金田先輩の仇、そして……

「じゃあいくぜ。刹那蟋蟀ぃ」

俺のプライドのため。まだ引っ張るかコノヤロォ！　ぜってー許さねぇ！

「私に任せて」

米太郎のサーブを軽やかに返す火祭。さすがは運動神経抜群の火祭、見事なレシーブ。ボールは俺の頭上。いつしかの体育の授業みたいに春日の邪魔がないなら余裕で返せる！

「火祭っ」

我ながら完璧なトス。次の瞬間には火祭は飛んでいた。砂浜を翔ける天使のように。白くて細い綺麗な右腕を大きく振り降ろして……

「はあっ」

最高の形で決まったスパイク！　鋭く空中を走るボールは真っすぐ米太郎の右足にヒットした。

「ぐあ！？」

右足が弾け飛び、バランスを崩して米太郎は地面にぶっ倒れる。ぶはははっ、情けない姿だな！

「や、やってくれたな……！」

よろけつつ起き上がろうとする米太郎。これで終わりとでも？　まだまだだぜ。

「火祭」
「うん」

今度はこっちのサーブ。素早いクイックで放たれた火祭の高速サーブはブレることなく米太郎目がけて一直線。体勢を整えられていなかった米太郎はボールに反応出来ず、ボールが顔面に激突。呻き声を上げてまたも倒れる。痛みで顔が歪みまくりだ。なんと無様な。

「おらおらぁ、まだ俺らのターンは終わってないぜ！　ドロー！」
「どこの遊戯だ、ぶべぇ！？」

ツッコミをさせる瞬間すら与えねぇよ。さらなる追撃で米太郎をぶっ飛ばす。連続尻餅状態の米太郎。なんと無様な。

「火祭！」
「うん！」

そしてきました火祭の弾丸サーブ。華麗なジャンプサーブはプロかと思えてくるほどだ。その華奢な体からはありえない威力の弾丸サーブを放つ。

「ぐはぁ！？」

砂浜をのたうち回る米太郎。その姿は死にかけの虫のようだ。ピクピクと足が痙攣している。

「あれれ～？　元バレーボール部エースの実力はこの程度かぁ？　こりゃ俺もエースに立候補しちゃおうかな」
「くっ、将也ぁ……！　調子に乗……げほっ、げほっ」

死にかけの米太郎。もうそろそろ楽にしてあげないとな。

「おらぁ！」

渾身のサーブを放つ。しかし米太郎は片膝をつきながらもそれを返す。まだ粘るか。

「み、水川頼む」

「はいはい」

水川がポーンとトスしたボールを米太郎が決死のスパイク。こんな状態で反撃に転じるとはさすがバレーボール部エース。ま、自称だけど。

「任せて」

残念ながらエース火祭の前には意味をなさない。何事もなかったように冷静にボールを受け止める。上がったボールを俺がトスし、火祭が舞い上がる。

「はあっ」

「ぶべらぁっ！」

火祭の強烈スパイクは至近距離で米太郎の顔面を捉えた。パァン！　と銃弾が撃たれたような衝撃音。頭からぶっ飛ぶ米太郎が宙を飛んだ。さすがにグロテスク！　しかしさらにボールは生きている。米太郎の顔面にぶつかったボールがまたこっちに戻ってきた。

「とどめだな」

火祭のトス。俺は両足のバネを使い、一気に飛び上がる。広がる視界、上空は燃えたぎる太陽、下には砂浜に倒れこむ米太郎。

「もう二度とイジれないようにしてやるよ。くらえ、刹那蟋蟀！」

恨みと怒りを込めた全霊の刹那蟋蟀は米太郎の顔面を弾き飛ばした。顔面に二発連続でくらった米太郎は砂浜を転がりこみ、ピクリとも動かなくなった。

「すいませーん、中井さん」
「お呼びでしょうか」
「こいつも運んじゃってください」

第９８話　一発芸とディナー

完全にノックアウトした米太郎をその辺の邪魔にならない所に運んでもらって俺達四人は仲良くウフフフとビーチバレーを楽しんだ。うはー、美女三人と遊べて超幸せ。皆で海で遊ぶこと数時間、気づけば夕日が地平線に落ちかけていた。もうそんな時間か……楽しい時間はあっという間だったな。

「うわぁ、夕日が綺麗」

水川が感嘆と上げる声に大いに共感する。夕日がすごい綺麗だ。いつも見るやつとは違い、遥か彼方の地平線に沈む夕日は空を、海を、全てを茜色に染めている。こんなにも夕日が眩しいと思ったことはない。これが自然の中で見る夕焼けなのか……。

「あぁ、ここに住みたい」

そう思えてくるほどに夕日は綺麗だった。こんな素晴らしい所はない。隣で米太郎が呻き声を出さなければ、こんな最高な場所はない。

「皆、そろそろ戻ろうか」

復活リボーンの金田先輩が半袖の服に着替えてやって来た。あ～、楽しかった……まだ遊び足りないや。

「……ぐか～」

おいおい……。

気づけば眠っていた米太郎を叩き起こして、別荘に戻る。着替え終えた頃には外は茜色から紫色へと変わっていた。おぉ、夕方と夜の中間。とても珍しい景色。

「疲れたー」

などと感動しつつ、ベッドにダーイブ。うはぁ、これがキングベッドか！　なんて大きさだ、マツコもぐっすり眠れるサイズだぞ。フカフカで気持ちいいし、まるで綿雲の天然ベッドだな。例えが分かりにくくてすいません。

「将也、おやすみ……」
「おはよう米太郎」
「ぐはぁ！？」

米太郎にムーンサルトプレス！　悶える米太郎。超面白い。

「くそっ、なんで将也と同じ部屋なんだよ！」
「いや、お前がそうしたいって」

最初来た時は一人一部屋だったのに米太郎が寂しいだとか喚いて、俺達は二人部屋になったのだ。なのにキングベッドが二つも入るこの部屋の大きさ！　あっぱれでございやす。部屋が広い！　天井が高い！

「これじゃあ水川達が夜這いに来づらいじゃんか。ふざけんなよ～」

「安心しろ、それ絶対にないから」

いらぬ心配にもほどがある。しかも、達って何だよ。春日と火祭も来る可能性があるとでも？　ふざけんなよおらぁ！　春日を馬鹿にするなぁ、下僕の俺が許さねぇ！

「ダイビング・エルボー・ドロップ！」

「ぐぶべぇ！？」

こいつの妄想とはいえ春日達を汚した罪は重い。俺が制裁を加えてやる。

「キャーッ！」

米太郎をホールドして3カウント取っていると、どこからか水川の悲鳴が聞こえた。ど、どうしたんだ？　何か事件が！？

「おっちゃん、事件だ！」

「おっちゃんじゃねーし。そしてお前はコナン気取りか！」

眠りの米太郎はほって置いて現場に急行。えっ～と、水川の部屋は……あった。

「大丈夫か水川！？」

部屋に入ると、キングベッドが三つもあった。どんだけ部屋デカイの！？　そして水川と春日に火祭の三人が固まった目の前には一つのバッグ。一体何が……？

「大丈夫？」

「う、うん……ちょっとびっくりしただけ」

すぐに起き上がる水川。すると、バッグを拾って米太郎に向けてぶん投げた。後ろで「ぶべぇ」と気持ち悪い声が聞こえる。どうやら原因はあのバッグみたいだ。

「それ佐々木のバッグ。間違えてる！」

「え？」

米太郎の荷物が何かの手違いで水川達の部屋に置かれていたようだ。つーかそれだけで悲鳴を上げるなんて……バッグの中に一体何が入っていたのだろうか。

「はは、ごめんあそばせ～」

「消え失せろ」

水川に追い出された米太郎。どうせ中身は野菜だらけでびっくりしたんだろうな。ったく、迷惑だなおい。

「まあ、良かったよ無事で。じゃあ俺も失礼しましたー」

女子の部屋にずっといるのもなんか気まずいので俺も退散しようとしたら、

「兎月は待てい」

ガッと背筋を掴まれた。ぐっ、喉が絞まるぅ。

「な、なんすか」

「まあまあ、ちょっとね」

水川による強制ストップ。俺は部屋に留まることに。春日がじぃ～と見てくるんだけど……。

「いや～、海楽しかったな」
「うんっ」
「……」

笑顔で答えてくれる火祭と無言で睨む春日。態度が極端過ぎて、どうしたらいいのやら。せめて愛想笑いとかできないのかよ。春日の笑顔って久しく見てないや。

「兎月ぃ、約束覚えてる？」

突然ニヤニヤと水川が迫ってきた。なんか怖い。普通に怖い。

「なんだよ」
「一発芸」

……あぁ、一発芸ね。……あぁ、さっき約束させられたね。…あぁ、一発芸……あぁ！？　うあぁぁぁっ、しまったあぁっ！　一発芸するって言ってた……水川がね。

「い、いや、あれは水川が勝手に言っただけで……」
「そうだっけ？　兎月が自分からしたいって言ったじゃん」

うわっ、捏造しやがった。俺が自ら一発芸すると言うとでも？　そんなわけあるか。今までに一発芸をしたことなんて一回たりとないぞ。

「はい、ではどうぞー」

こいつ……とんだムチャぶりを……俺を呼びとめた理由はこれか。

「まー君の一発芸……わぁ」

火祭さんよ……そんな期待でワクワクとした目で見ないで。ハードルが上がるだけだから。

「……」

こーゆー時は春日の方がありがたいや。まったく期待していないみたいだし、春日が相手なら何をやってもスベる気がする。まさに芸人殺し。

「ほら、早く～」

くっ……はぁ、腹括るか。ものすごい嫌だけど、やるしかないみたいだし。スベるの覚悟、当たって砕けろ魂でやりますか。

「よし……布団が吹っ飛んダックスフント！」

どうだ、このベタなギャグにダックスフントの動きを加えた斬新な試み。こりゃ受けたに違いな……お、おぉふ。

「……」

「……ないわ～」

火祭と水川の顔がこれでもかと言わんばかりに引きつっていた。あの優しい火祭ですら何も言わない。ただただ俺のギャグに引いてい

た。ちょ、え、そんなに面白くなかった？　俺的には満点なんだけど……。

「ど、どう？」

「面白くない」

水川にズバッと斬られた。ひ、ひどい。一発芸やれって言うから、やったらこんなにスベるなんて……。あまりのスベリっぷりに自分でも寒く感じた。おぉ、これが大スベリというやつか。

「……」

そして極めつけは春日。普段よりキツイ無表情に加え、眉間にシワが寄りまくりだ。すっげぇイラついているのが分かる……そ、そんなに睨まなくても……こえぇ。

「……」

「え、えっと今のは俺なりの会心ギャグだったんだけど…」

「消えなさい」

「ぐばぁ！？」

春日におもっくそ蹴られて部屋から追い出された。い、痛い……心も体も。はぁ、辛い。さっきまで幸せだったのに……はぁ。

「あ、兎月君。そろそろ夕食だから、下に降りてきて」

廊下で転がっていると、前方から聞こえたのは金田先輩の声。

「夕食ですか」

「ああ、うちのシェフが腕によりをかけて作ったディナーだ。皆の

口に合うといいんだが……」

うははははっ、きたきたきたぁ！　待ちに待った夕食のお時間です！　こんな立派な別荘を持つ金田先輩。それなら専属の一流シェフの一人や二人、いるに違いないでしょうよ！　つーかさっきいるって聞いた。つまり夕食が楽しみで仕方ないのですよ！　さっきのスベったことなんてどーでもよくなったな。

「うほぉ、なんだこのテーブル!?　高級レストランみたいだ」

米太郎もテンション上がりまくりのようだ。一階の大食堂。巨大な窓からは暗闇に揺れる海景色が見え、純白の壁はゆらゆらと輝くランプが橙に染めて神秘的な美しさを醸し出す。これはまさに高級感！　セレブの香り！　そりゃ俺や米太郎みたいな平民はこんな経験はないから楽しみで仕方ない。あ、これ二回目だ。とにかく夕食が楽しみで仕方ないのだ！　はい三回目！

「す、すごいね」

隣に座る火祭が小声で話しかけてきた。だよね～、分かるよその気持ち。火祭もごく普通の庶民だからな、俺と同じ感性なのだろう。

この場で平然としているのは金田先輩と春日ぐらいだ。

「それでは乾杯しようか」

ウエイトレスみたいな人からグラスにジュースが注がれた。さすがにワインじゃないか。春日とレストラン行った時はワインだったけどね。でも雰囲気はあの時に近い感じだな～。

「じゃあ皆、グラスを持って」

金田先輩の合図とともに皆がグラスを掲げる。米太郎や水川はおぼつかない手つきだが。

「乾杯っ」
「かんぱ～い！」

おぉ、さすがは金田先輩。なんと見事な乾杯なんだ。キラキラ上品スマイルが眩しい。俺なんかびくびくしながらやったのに……これが品格の差というやつか。セレブと庶民の違いか。

「おぉ！」

米太郎の嬉しそうな声。見れば次々と運ばれる料理の数々。おいおい、すごすぎるよ！

「うちのシェフ自慢のフルコースだよ。さ、遠慮なく食べてくれ」
「いただきまーす！」

もはや興奮に近い勢いでディナーにがっつく米太郎。野良犬かお前は。そして絶叫する米太郎。その表情は恍惚と幸福感で緩んでいた。

「美味い！　こ、こんな美味しいご飯は初めてですよ！　うちの漬け物を越えるなんて……」

当たり前だ。庶民の漬け物ＶＳ金持ちの一流フルコースなんて勝負にならないだろ。

「ほ、本当に美味しいです」

「うん！」

火祭と水川も夢中になって夕食を頬張る。こんなにテンションの上がった二人を見るのは初めてだ。なんて幸せそうな表情だろうか。

「口に合ったようで何よりだよ。さ、兎月君と恵さんも」

「おいおい将也ぁ、まさかびびってんのか？　早く食わないとお前の分も俺が食っちまうぞ」

下品な笑みを浮かべて米太郎はスープをじゅるじゅると飲み干す。汚い食い方だな。マナー知らずめ。

「いただきます」

俺は一度、春日と高級レストランに行ったことがある。つまりこういう上品な食事は二回目なんだよ。格の違いを見せてやる。まずは、

「すいません、赤ワイン頂けますか？」

「酒飲むのかよ！？」

がっつり飲むわけじゃねーよ。ちょっと前菜と一緒にな。

「わ、私も」

お、真似したな火祭ぃ。新たに用意されたグラスに注がれる深紅のワイン。薔薇のような上品な香りが鼻を撫でる。

「火祭、乾杯」
「か、乾杯」

チンと軽やかなグラス同士の音。なんと心地好い。グラスを回してテイスティング。口に広がるワイン独特の苦み。

「苦いね……」
「はは、こんなもんだよ」

これだよこれ。これがセレブの嗜み方だ。俺は学んだのさ、もうあんなヘボな醜態はさらさないぜ。生まれ変わりしニュー兎月将也です！

「兎月ってセレブだっけ？」
「違うよ、この程度は紳士の嗜みさ」

ははははっ、水川よ俺を見直すがいい。そして敬え！

「も、もう一回乾杯しよ？」
「お、いいよ」

つーことでまた乾杯することに。何度もするものじゃないが、気分上々なのでやっちゃいます。火祭と向き合って、お互いに見つめ合う。ゆらゆらと揺れる火祭の瞳。ランプに照らされる表情がまるでお姫様のようだ。グラスを掲げて微笑み合い、

「乾杯っ」

またも耳をくすぐるグラスの交響音。なんかクセになりそう。

「な、なんだか夫婦みたいだね」

「だとしたら俺は幸せ者だな。火祭が奥さんで」

ボンッと真っ赤になる火祭。ふっ、決まったぜ。

「なんだその台詞はぁ！？　そんなの将也じゃないぞ！」

向かい側で米太郎が騒がしい。嫉妬かい？　俺の完璧な振る舞いを嫉んでいるかなぁ？　ぶははっ、そこで汚らしく厭らしく食べているがいい。俺は上品に火祭とディナーを楽しむから。

「へぇ、冷製スープか」

「美味しいよ」

そうか、えへへ～。どれもこれも美味しいだぞ。目移りしちゃうな～。食事って楽しい！

「まー君、乾杯」

「お、乾杯」

いやー、何回やってもいいもんだな。今度は君に乾杯っ、とか言ってみようかな。今の俺なら言える気がするぜ。

「……兎月ただ酔っ払ってるだけじゃん。ねぇ恵…って」

「……」

「……そうなるよね」

第９９話　酔い覚ましのハイキック

「ふぅ、食った食った。さすがは金持ちの食い物だな。見たことのない料理がいっぱいだったよ」

皆（特に火祭）と楽しいディナーを終えて、部屋に戻ってきた。やっぱ皆（特に火祭）と食べるとより一層美味しく感じるよね。満腹感と幸福感で腹一杯……と言いたいが、

「そしてどれも美味しかったー……って将也、聞いてるか？」

「……だるい」

頭がボーッとする……。ベッドに沈んだ体がピクリとも動かない。視界に映る米太郎の輪郭がぼやけて見え、るぅ。

「完全に酔ってるな。ワインおかわりしやがって。調子乗りすぎだっつーの」

ぐあっ、耳の近くで声出すな。頭に響くわ。あー、気持ち悪い。うー、気持ち悪い。

「ったく、何が紳士の嗜みだ。醜態じゃねーか」

だって夕食が楽しくて。思わず飲めもしないワインを頼んでしまうのもしょうがないじゃん。皆（特に火祭）に良いところ見せようとしたはずがこんなことに……。反省してます。

「さっきのお返しにムーンサルトプレス決めてやってもいいが、俺は優しいからそんなことはしない。そこで大人しくしてろ。水持っ

てきてやるから」

部屋から出ていく米太郎。あぁ、あいつなんて良い奴なんだ。ちょっと涙出てきそうだよ。静まり返った室内。米太郎の帰還を待ちつつ、ゆっくりと目を閉じる。決めた。俺はもう酒は飲まない。なんてアル中のおっさんがよく呟き台詞を思いながら静かに夢の世界へ……と……

「兎月」

「ぐはぁ！？　げほっ、がはっ」

は、腹がぁ！？　腹が痛い！　うっ、リバースしそう。だ、駄目だ、こんな簡単に吐いちゃいかんよ。踏ん張れ俺よ！

「……」

「ぐうっ！？　がっ……だ、誰？」

誰かが俺の腹を殴ってきやがった。体を襲う痛みと酔いにフラフラになりつつも目を開く。眼球の周りをチカチカと光る星に目を回しつつ、犯人の影を捉える。誰、だ……米太郎か？　いや、それにしては早い。なら一体……？

「……兎月」

「か、春日か」

良かった、てっきり殺人鬼だと思った。いや、春日もある意味殺人鬼だけど。とにかく春日だった。一体何の用だよ。

「げほっ……あ～、しんどい」

「兎月」

「はいはい俺ですよ。何か？」
「……」
黙ったと思ったら、突然のキック。ローではない。ミドルでもない。なんとハイキックだった。う、うおおぉぉっ！？
「ぐはっ」
あまりの不意打ちに避けれるはずもなく、俺の頭はぶっ飛んだ。
「っ！？」
は、ハイキック……！　頭を激痛が走り抜け、眼球の表面を流星が目まぐるしく暴れ回る。ぐ、ぐわぁっ！　割れる割れる、頭が割れるぅ！
「……」
「す、ストップストップ！　春日ストップ。頭痛いし意味分からんし！　一体何だってんだ？」
なんだよマジで！？　人の寝込みを襲うわ、人が弱っているところを襲うわ、あなたは悪魔ですか！
「……」
「もしかしてパシリ？　紅茶なら中井さんに言えば用意してくれるよ」
「……違う」
じゃあ何だよ。無意味に俺をボコしに来たんですか。

「……」
「……あの～、頭フラフラするから寝ていい？」
「駄目」
即答。マジか、寝たら駄目って……うぅ、頭だるい。米太郎はまだか。早く水と助け舟を！
「……」
「えっと、俺に何か用？」
「……別に」
用事なしですか。おいおい、それじゃあ本当にただの暴力事件だぞ。人を吐かせかけといてそれはあんまりだ。さすがの下僕も怒りますぞ。
「あ、の、馬鹿兎月が。恵の気持ちも考えなさいよ……！」
ん？　今、廊下から声がしたような……気のせいか。
「……」
「……」
「……」
「……あ～、何も用事がないなら、その…水持ってきてくれないかな？」
下僕の俺が主人の春日にこんなことを頼むのは多少なりと気が引けるが、今はマジで水が欲しい。もう頭がフラフラで倒れそうなのだ。それはワインのせいか、はたまた春日のせいかは定かではないが。
「……」

「頼む、この通りだ」

水一杯ごときで土下座する俺。プライドなんてない。俺はいつも春日のためにジュース買いに行ってたんだ。今日くらいは春日が俺のために水を取ってきてもいいじゃないか。た、頼みます……！

「……」

「……」

だ、駄目か……。

「……分かった」

……え？　うそ……本当に？　あ、あの春日が俺のために！？　涙が出そうなくらい感動！

「あ、ありがとう」

「……」

スーッと床を滑るようにして歩く春日。忍者か。部屋を出た春日はわずか十秒足らずで戻ってきた。手には水の入ったコップ。いやいや……早っ。早過ぎるだろ。一階に取りに行かないといけないってのに十秒って……悟空みたく瞬間移動使えないと不可能だろ。

「ありがとう……」

しかし細かいことを気にしてる余裕はない。早く水が欲しい。春日からコップを受け取り、水を一気飲み。……ぷはぁ、生き返った……ちょっと頭が軽くなったかも。

「本当にありがとう。俺の命は救われました」
「……大袈裟」
つーか米太郎は何してんだ。あいつが水持ってくるって言ったんだろうが。なんで春日の方が早いんだよ。使えねぇ奴だな。
「あいつ今ぜってー俺のこと使えない奴だって思ってるよ」
「佐々木、声大きい」
また扉の外から声が聞こえてきたが気のせいだろう。おそらく酔って幻聴が聞こえるのだろう。
「……」
「……」
落ち着いたところで状況整理。目の前には春日。いきなり殴る蹴るの暴行。なのに水を持ってきてくれる優しさも見せてくれた。俺の所に来た理由、……別に。はい、状況整理終了。結論、意味不明。
「……」
「……」
今はひたすら見つめ合うだけ。びびったので視線を違うところへと逃がす。春日はまったく口を開こうとしない。……超気まずい。はぁ、何があったんだよ。俺のところにわざわざ来る意味が分からん。
「ぅ……ゆ、夕食とても美味しかったな」
「……」
春日の無言は肯定の表れ～。そう勝手に解釈してます。そうじゃな

いと話が進まないので。

「二人でレストランに行った時のことを思い出すよな」

「……別に」

そう言うなよ。良い思い出じゃないか。

「うおぉ、マジか！？　二人だけでレストランって……きえぃ！」

「佐々木落ち着いて。兎月に気づかれちゃう」

ガタガタと廊下がうるさい。奇声も聞こえてきた。少し酔っただけでこんなにも幻覚作用に陥るとは。アルコールって恐ろしい。

「それに皆で食べて楽しかったな」

あんなに楽しい夕食は初めてだよ。そうだろ？

「……」

はい、無言は肯定の表れ～。

「……楽しくなかった」

え？　……今、楽しくなかったって……はい？

「た、楽しかったよね？」

「……楽しくなかった」

無言は肯定と解釈していたが、春日にこんなはっきりと言われちゃあ。え～……楽しくなかったって……マジか。俺的にはすげー楽し

かったけど、春日はそうでなかった、か……。

「な、なんで？　料理も美味しかったし……嫌いな食べ物でもあった？」

「……」

黙っちゃあ分かりませんよ。う～、苦手なものがあったのかな。とにかく春日は不満があったようで、それを俺にぶつけに来たようだ。俗に言う八つ当たり。ははっ、とんだ災難～。下僕もつらいよ。

「嫌いな食べ物があるなら金田先輩に言っとけよ。明日の朝食に出てこないようにな」

「……違う」

は？　違うって……もう何がだよ。もっと分かりやすく言ってください！　俺には一体なんのことやら。

「もう訳分からん」

「アンタが夕食の時に恵をほったらかしにしたからでしょ！　あぁイラつく！」

「み、水川暴れないでぇ」

なっ、扉がガタガタ揺れているぞ。マジで怖くなってきた。酔いも醒めてきたわ。ここって、いわくつきじゃないの……！？

「……」

「痛い痛い、突然殴ってこないで。もう情報処理が追いつかないよ」

無言でデリケートな頭を殴ってくる春日。長考に長考を重ねても痛いとしか思いつかない。長考に長考を重ねても意味が分からない。

むむ、とりあえず謝っとくか。

「春日……ごめん、俺が悪かった」

しっかりと春日の目を見つめ、頭を下げる。またも土下座するヘタレな俺です。とにかく謝って損はないはずだ。何が原因かは未だに謎だが。

「俺が自分勝手なことばっかして、春日の気持ちも知らないで……本当にごめん」

「……」

よく意味は分からないが、それっぽいこと言えば……。

「将也ってば意味分かってないで謝ってるぞ」

「そうだね。でも良いラインだよ～」

いよいよ廊下に人の気配がしだした。幽霊騒ぎだよおい。夜中寝れないかもしれない。

「……」

「春日、このとおりだ」

土下座そして土下座。さっきから土下座しかしてないな俺。情けないや。

「春日……」

「……もういい」

顔を上げれば眼前には足が、あぁ！？　春日のキックに顔面がぶち

抜かれる。は、鼻が……！

「ぐ、ぐおおぉぉぉっ！？」

顔面にまさかの二発目が炸裂。いってぇ……鼻血出てないこれ？
つーか折れてない？

「ふん」

死に悶える俺をほったらかして春日は部屋から出ていった。か、あ……なんだったんだよ。まとめると春日は俺を殴って蹴って殴って蹴っただけじゃないか。あ、その途中に水持ってきれくれたけど。はぁ、マジで何だったんだこれは。鼻には激痛が走り、頭もハイキックでダメージが蓄積状態。本っ当に疲れた。リゾート地に来て、遊び疲れたというよりも蹴られ疲れたといったところだ。ったく、春日は何を言いたかったのやら……皆目見当つかない。

「あ～あ。まぁ、これでいいか」

ニヤニヤ顔で米太郎が入れ替わりに戻ってきた。手ぶら状態。おい、水はどうした……！

第１００話　番外編、米太郎の一日（前書き）

こんにちは、腹イタリアです。

今回でへたれ犬が１００話を迎えました。ここまで来れたのも今読んでくださっている皆様のおかげでございます。てことで番外編をやります。ただの自己満足～。

なんか長々と話していても面白くならないので早速いってみようと思います。
それでは、どーぞｗ

ちなみに今回の話は本編とは違う時間帯のお話です。夏休み前ぐらいの頃です。

第１００話　番外編、米太郎の一日

どーもども皆さん。いえい！　やぁふー、こんにちは。気がつけば初投稿から半年が経っ……まだ半年は経っていないのか。とにかくまあそのくらい月日の流れというのは早いのだわさー。いつも俺の活躍を見てくれてありがとう！　と、読み手側に話しかけるというタブー連発をぶちかましている俺なのだが、一体誰なのかお分かりいただけるだろうか。ヒントを与えるとしたら、このナレーションしている俺はこの物語の主人公なんです。俺の視点で物語を見ていくわけだしー、それなら世界の中心は俺だ発言をしても構わないっしょ！　てことで主人公は俺だぁ！　なら主人公らしく能力の一つもなくてはならない。カッコイイのがいいよね、やっぱ超電磁砲とか？　レベル５みたいな！　でも、あまりに強すぎると敵キャラが可哀想だよな～。初めは弱い方がいいか。いやでも最近は無敵チートの異世界でハーレムなファンタジー系が人気だからな、やはり最強なやつがいいか。ん？　待て、ハーレム……そうだハーレムだ。まずはそっちだよ。能力は後々に目覚めるとして今はハーレムを形成しなくては！　とはいえ現実はそんな甘くないよな。世の中やっぱ厳しいものだ。ハーレムなんてそうそうあるわけ……い～や、待て。待つんだ俺よ、ハーレムはない？　そんなことはない。だって俺は知っている。ハーレムな友達を俺は知っている。そんな憎たらしい奴が俺の近くにいるのだ。忌ま忌ましいが、いるのだ。サブキャラのくせにモテモテなのだ。ムカつく、超電磁砲を放ってやりたい。よし食らえ！

「死ね将也ぁ！」

「危な、はしゃぐな米太郎」

殴ろうとした対象は横にずれ、俺の拳は空を切った。なっ、避けら

れただと？　そしてカウンターパンチが俺の顔面を捉えぶべぇ！？

「痛い！　鼻がすごく痛い！」

「うるせー、休み時間くらい大人しくしてろ馬鹿太郎」

く、くそ……将也のくせにぃ！　あ、すまない皆。この無礼な奴の紹介がまだだったね。こいつは兎月将也という俺の親友だ。さっき言っていたハーレム野郎とはこいつのこと。ちょ～っとイケメンだからって調子こいてるスカした野郎だ。サブキャラのくせに生意気な奴なんだよチクショー。そ、し、て！　長らくお待たせしました。俺が誰なのか、という最初の話に戻ろうか。つーか、途中で話の内容がズレていたよね。チートな異世界だなんて俺には縁遠い話だったよ。うぅ、コメディーからファンタジーに移籍したい。うあ、またも話が逸れたが俺の正体を明かそう。俺は……俺の名は……佐々木米太郎だ！　ふふふ～、多くの方が驚いたことだろう！　まあ実際は、こんな小説読んでる人なんて数人なんだけどね……おっと、ネガティブになってしまった。とにかくだ、俺は米太郎、この物語の主人公だ。野菜が大好きな高校二年生の十六歳。超イケメンで長身で運動神経抜群のクールガイなのさ。将也と比べたら遥かに良い男。うほっ！

「いつまで寝てんだよ。通行の邪魔だ、寝るなら自分のロッカーに入ってろ」

とまあ長々と話してきたけど、その間ずっと教室の床に伏せていた俺。だが、それでもカッコイイので無問題。嫉妬の声が聞こえるので起き上がろう。

「ったく、将也はらんぼーだな」

「乱暴な。俺は森を半裸で駆け巡ったりなんかしない」

華麗なツッコミ。まあこれくらいが将也の良いところだな。ツッコミの腕はそこそこだ。ボケると気持ち良く返してくれるんだよなぁ。

「で、なんで米太郎はいきなり殴りかかってきたんだ？」

「おお、そうだった。いやさ、らんぼーがモテモテだなと苛立ってよ～」

「へぇ、らんぼーはモテモテなのか。知らなかった」

他人事か。お前のことだってのー。皮肉が通じないのかよ。あー、そうだった。将也は鈍感だったんだ。ホント信じられないくらい馬鹿だからなー……二人の気持ちに気づいてないとかどんだけだよ。まあ、だからモテモテなのかもしれないのだが。

「おい、なんか馬鹿にしてるだろ」

「そんなことないさー」

「いや、その米太郎のアホな顔は俺を馬鹿にしているに違いな……ぐぅっ、痛い！？　痛たたたたぁ！？」

突然、将也が顔を歪めて暴れだした。見慣れない人が見れば、どうしたんだろうと焦るかもしれないが……ちっ、またかよ。見慣れている俺にしてみればこんなの日常茶飯事だ。親友が悲鳴を上げているなんて。

「痛い！　か、春日、だからいきなり背後から蹴ったり抓るのはやめてぇ！」

将也がのけ反った後ろに立つのは一人の女子生徒。これがただの女子生徒ではないのだ。もうね、すげー可愛いの。ロングの黒髪は艶やかで心奪われ、綺麗に整った小顔に心奪われ、将也を睨むつり目

もこれまた魅力的で心奪われ……何回ハートを奪われたことやら。それくらいに美しくて可愛いのだ。全てにおいて可愛過ぎる。ん、いや……まー、そうだな。強いて言うなら胸はあまりない。良い風に言えばスレンダーなんだろうけど、俺的には巨乳が好きなので減点だな。そこを除いてパーフェクト、そんな女子生徒。

「か、春日……痛いです」

「……」

黙ったまま将也を見つめる女子生徒。彼女の名前は春日恵。お隣り一組の生徒で、二年生の中で可愛いランキング上位に間違いなく入るであろう人だ。そしてさらに、春日さんはなんと大企業の社長の娘なのだ。えぇ、驚き。父親が社長ということで春日さんは超金持ち！　セレブなのだ。この美貌でお金持ちって……すごいとしか言いようがない。ごく平凡な高校生には手も届かないお方なのですよ。しかーし！　なんと、なんとぉ！　こ、の、平凡でたいした取り柄もないこの将也は……春日さんと非常に仲良いのだ！　はあぁぁぁっ!?　ふざけるなあぁぁん！

「つぅ、なんでいつも蹴ってくるんだよ」

「……別に」

「会話が成り立たない！」

ほーら、またいつもみたく二人でイチャイチャしだした。俺の存在はどーしたんだい。それに将也ぁー、なんで春日さんが蹴ってくるかって？　んなの分かるだろーよー。お前と接したいからだよ。一緒にいたいからだよ馬鹿！　いつも春日さんから将也に会いに来ている。将也に会いに……あーぁ、その羨まし過ぎるポジションを大多数の男子が欲しているというのに。それが、なんでいつも蹴ってくるんだよ、だと？　ふざけるな、気づけバカヤロー！

「……兎月」
「はいはいワターシの名前は兎月ぃですよー？　何か言いたいことでもありマスかー？」
「うるさい」
「痛い痛い痛い！　言いたいことはそれかよ！」

ついでに春日さんは無表情で無口でクールな人なのである。男子とは全然喋らないし、女子と話している時もそれほど表情に変化はない。感情を表に出さないのだ。その美しさに一目惚れする男子が後を絶たないのだが、春日さんはそれら全てを丁重に……というか冷淡にキッパリと断っている。一年生の時とか目が合おうものなら、ギロリと警戒心バリバリで睨んできていた。さらに噂によると、バス通学している春日さんはバスの中で席が空いていないと他の乗客から席を奪っていたとか。そんなこんなで性格はかなり屈折しているようだが、それでも春日さんの美しさにときめく男子達は別に性格なんて構わないさ！　な状態で。一年生の頃から告白する男子は多くいたのだ。しかし最近それが減ってきている。いやまあ減ったと言っても、以前と比べると少ないだけで今でも告白する奴はいたりする。なぜ告白が減ってきたのか、それは将也という存在が現れたからだ。いつも春日さんは将也のところに行く。将也と一緒にいることが多いのだ。昼休みは一緒にご飯を食べて、放課後は一緒に帰って。それらの光景を見て男子達は「あぁ……駄目だ」と、落胆してしまう。だってあんだけ一緒にいられると誰でも分かってしまうよね（鈍感で馬鹿な将也を除いて）……そうなのだ、将也がいるから告白出来ないのだ。というか告白してもフラれるのは分かりきったことだから告白なんてしないのだ。しかしそれが男子達をさらなる悪夢へと突き落とす！　最近の春日さんは……もう可愛過ぎる。前までは無表情で冷たかったのが、近頃はよく笑うようになり明るくなっているからだ。将也といる時、くすりと笑った笑顔とかその

時の仕種がとてつもなく超可愛いのだ！　今まで不機嫌そうだったのから楽しそうに笑う春日さん。そのギャップによって多くの男子達がキュンキュンとハートを奪われてしまった。そら惚れるわな。しかし将也がいる。あぁ……駄目だと再度思うわけだ。しかしそれでも行ってやる！　そんな哀れな男子は愚かにも成功率０パーセントの勝負に特攻して砕け散る。絶対オーケーもらえるわけもないのに挑戦する。なんと可哀想な……同情するよ。そして将也よ、お前はいい加減気づけ馬鹿。春日さんからローキックを食らって床で苦しんでいるこいつにそう言ってやりたい。

「こ、米太郎助けてくれ」

出たよ。なぜ俺に助けを求める。そのままずっとラブラブしていればいいだろうに。将也の顔は困惑と疲労で染まっていた。蹴られる理由がマジで分からないみたいだ。けど知るか。テメーがどれだけ幸せなポジションにいるのかも理解していないくせに、のうのうと馬鹿みたいに助けを求めるなコンチクショー。

「俺には何もできねーヨホホ～。とにかく頑張れ」

「見捨てないでくれ痛たたたぁ！？」

「……兎月」

また抓りだした春日さん。床に不時着陸する将也。こんなの別に助けなくていいのだ。こんなのは傍観しているに限る。なぜなら……二人とも楽しそうだから。将也も嫌がっているように見えて実際のところ嬉しいのだから。顔は歪んでいるがその瞳は楽しげに輝いている。表向きには嫌がっているようにする将也も実際は嬉しいんだよな。……はあ、やってらんねー。春日さんも素直になれない典型的なツンデレさんだけど将也も将也だ。ツンデレカップルがこれまたイチャイチャと暴れだした。もう見ていられない……親友として

微笑ましい光景だが、独り身としては胸に突き刺さるものがある。
胸の奥から溢れ出す嫉妬と殺意の念が体を巡り、俺をダークに染め上げる……ぐうぅぅっ、将也のくせにいぃぃっ！　なんでモテるんだあぁ！

「チクショー！　将也なんてらんぼーになればいいんだぁ」
「突然どうした米太郎！？」

駄目だ……これ以上ここに居られない。あと少しで俺は……俺でなくなる。この手で親友の首を絞めてしまうかもしれない。妬みと怒りに身を任せて……

「ぶべぇらぁ！？」

と、いった感じでシリアスカッコイイ雰囲気で盛り上がりかつ逃げようとしたら顔面に激痛が走った。メキィと鼻が歪んで空中に赤い滴が舞う。あ、俺の血。自身の鼻血を眺めつつ床へと撃沈！

「ご、ごめん佐々木君。大丈夫？」

痛む鼻の先には……黒髪なのにちょっとだけ赤色に輝く綺麗な長髪がフワリと絹のように宙を流れる。その美しき髪の毛を持つ人は一人しかいない。鼻血を流す俺こと米太郎の傍で申し訳なさそうにこちらを見つめるこの女子生徒。名前を火祭桜という。春日さんに負けないくらい綺麗に整った顔、くりっとキュートな瞳はどことなく色気もあり、小さな唇は見る者を虜にしてしまうような甘くてフルーティーな色を帯びている。これはもうただの美少女！　そんな火祭を前に俺は鼻血を垂らしている。うんうん、火祭の魅力にやられたって言ってもいいけどさ、実際は違うから。実際は……殴られたのだから。この美少女は……喧嘩最強と呼ばれたあの有名な『血祭

りの火祭』なのだ。中学時代、この名を知らぬ不良はいない。迷惑な不良を見つけては、たった一人で全てを破壊する怪物。十数人に及ぶ不良グループを一人で打ち負かした伝説は高校に入っても語られるほどだ。そして俺も中学時代に手合せしたことがある。……あの時のことはトラウマとなっていた。まあ二年生の最初の頃まで。火祭と同じ高校になって死を覚悟していたが、今となってはそんなこともない。それは俺じゃなくて他の皆も一緒だ。

「気にしないでいいさ。だって火祭だから！」

「？　あ、ありがと」

ぶっちゃけ、火祭は恐れられていた。そりゃ不良十数人をなぎ倒すような奴に近づく奴なんていない。そう、火祭は孤独だったのだ。誰からも恐れられていた……ただの噂だけで。俺だって昔やられた記憶から火祭に対しては尋常ならぬ恐怖心と警戒心を持ってビクビクと学校生活を送っていた。だって恐かったから。凶暴というイメージがある奴に近づきたいなんているはずない。誰も火祭に心から接しようと思わなかった。ある二人を除いて。そして、その火祭の凶暴というイメージを変えようと決意した奴なんて一人しかいない。

「あのさ、まー君はいる？」

「ああ、教室の中にいるよ」

「ホント？　ありがとっ」

嬉しそうに太陽のような眩しい笑顔で火祭はそう言った。その笑顔は俺に向けてではなく、教室の中にいるまー君に向けてなのだろう。まー君とは将也のあだ名。呼ぶのは火祭だけのようだが。そう、将也なのだ。火祭を恐れず、何も動じず、本当の火祭を理解してやった男。喧嘩最強にも臆せずにイメージだけで火祭の人物像を決めずに堂々と接した奴。さらにそんな火祭の悪い印象を変えてやろうと

奮闘もした。不良にボコボコにされても将也は折れず、ただ火祭のためだけに叫び続けたのだ。それが周りの持つ火祭の悪いイメージを変えて火祭本来の姿を皆に知らしめた。本当は優しくて可愛くて清らかな心を持った乙女だということを。恐れられていた火祭も今では人気者。学校を代表する美少女だ。言い寄る男子は急速に数を増やし、ついにはファンクラブができるほどに。もちろん告白する男子も多くいる。ま、全てフラれているけどね。将也がいるうちは何やっても無駄だろうよ。

「じゃあね佐々木君。本当に怪我大丈夫？」
「別に気にすることないよ。佐々木だし」

まだ心配してくれる火祭の後ろから聞こえたひどすぎる言葉。くそっ、こいつは本当に俺のことが嫌いなのかよ！　火祭の後ろに立つのは、ショートカットの髪がよく似合う女子。名前はマミー。うん、マミーだ。

「マミー言うな」
「まだ口に出してないぞ！？」

思考を読まれた！？　まあ本名は水川真美だ。これまた可愛い女の子。水川とは一年からの付き合いだ。そしてこちらのマミーが、将也に続いて火祭の理解者の二人目。水川と将也が火祭を変えたのは間違いない。そういうこともあって火祭と水川は非常に仲が良い。

「ほら桜、早く行きなって」
「う、うん」

水川に押されて火祭は教室の中へと入る。目的はもちろん将也。春日さんに続いて火祭も……本当に将也はハーレムを形成している。

ああ、なんて野郎だ。親友じゃなかったら一、二発はぶん殴ってやりたい。ふん、実際は殴ろうとしてかわされて反撃を食らったけど。俺ってば惨め。

「佐々木も苦労してるよねー」

「何が？」

「兎月と恵に気を遣って教室から出たんでしょ。そこに桜の拳が飛んできて。アンタはアンタで大変でしょー」

……どうやら水川には見透かされているようだ。そうさ、俺だって本気で将也にムカついているわけではない。そんな周りの奴らと一緒にしないでもらいたいっての。何も知らない奴らと一緒にするな。春日さんについてはよく知らないが、火祭に関しては俺も近くで見ていた。火祭が今ああやって明るい笑顔で学校生活を送れるのは間違いなく将也のおかげ。男子どもが火祭の魅力に気づいたのも将也のおかげ。その将也を男子どもは僕らの火祭ちゃんの傍にいやがって、と逆恨みをしているのだ。なんつー奴ら。つい数か月前までお前らは恐がっていたじゃないか。なのに今は好きです？　ファンクラブ作っちゃいます？　それは都合が良すぎやしませんかって話だ。俺を含めてだけど。

「ホント火祭は変わったよな」

「そうだね。変わったというか、本来の姿を出せるようになった、の方が正しいのかも。桜は苦しかったんだよ……何を言っても誰も聞いてくれないし見てくれない。そんな状態じゃ自分の姿を出すなんて出来ないよ。誰かが見てくれない限り……その見てくれた人物ってのが」

その人物ってのは、

「兎月」
「将也」

だよなー。しかし俺はもう一人加えさせてもらう。

「アンド水川」
「私？」
「そうだろ。水川だって火祭と接していたじゃないか。イメージが変わる前から。お前と将也の二人だけが恐れずに火祭と話していたじゃんか」
「私は……普通に接していただけだよ。桜は良い子だって思ったから。でも私はそこまでだった。兎月のように桜の印象を変えようだなんて覚悟できなかった。行動に移せなかった。そこが私と兎月の違いだよ」

それは謙遜だ。確かに将也のおかげかもしれないが、そんなの４９パーセントぐらいのものだ。水川が火祭のために女子達に色々とやっていたのも知っている。火祭が明るくなれたのも水川の頑張りがあったからこそだ。４８パーセントぐらいは水川も貢献してるって。あと残りの３パーセントは俺のおかげ……ってことじゃ駄目……？

「うぎゃあああぁぁぁっ！？」

俺と水川が昔話（とはいえ最近の話）をしみじみと思い返していると、教室の中から将也の悲鳴が轟いてきた。どうやら始まったようだ。

「佐々木、行くわよ」
「へいへい」

水川の先導の下、再び教室へとカムバック。目の前には、苦痛に顔を歪ませる将也の変なポーズ。左手は左へと伸び、右手は右へと伸びている。悲鳴を上げる将也の両脇には春日さんと火祭が。それぞれ将也の手を握り、力強く引っ張っているではないか。

「恵……離して」

「……桜こそ」

「いやいやどっちも離してください！　痛たたたたたたたあああっ！」

その姿はまるで運動会の綱引き。将也の体がメキメキと恐ろしげな断末魔を上げており、今にも裂けそうだ。裂ける将也なんて見たくない。そんなグロテスクな親友の最後を見届けたくない俺と水川は助けに入ることに。俺は火祭の方に向かう。春日さんは将也以外の男は受けつけないからなー、俺が行くと逆に恐がって将也をさらに引っ張りそうだ。春日さんは水川に任せて俺は火祭を止めに。

「火祭よーい、落ち着いて！」

「こ、米太郎……それに水川も……ぐすん、やっぱお前ら親友だよ。フレンドだよ。これからもよろしくね！」

涙目で手を握ってくる将也。はいはい分かったから。

「で、またかよ」

「そ、そうなんだよ。また春日と火祭が暴れ出して……」

これもまた日常茶飯事。天気は晴れ、の確立くらいの頻度でこれは起きる。これとは、春日さんと火祭による将也争奪戦。また何か言い争いになって将也を奪い始めたのだろう。そして馬鹿な将也は何も分からず叫ぶのみ。はぁ、いつまでこれが続くのやら。毎回毎回

止めに入る俺と水川の気持ちも考えなさい。いや、その前に春日さんと火祭の気持ちを考えろ。

「ほら恵も落ち着いて。兎月が死んじゃうよ」

「……」

また春日さんに睨まれちゃって。けどな、その睨み方は俺ら男子に向けられるものとは違うんだぞ。それにも気づけ将也。お前に対しては特別な感情を込められているんだぞ。ったく、そろそろ春日さんの気持ちに気づいてもいい頃だろ。もちろん火祭の気持ちにも。

「……兎月」

「ま、まー君っ」

「うっ……こ、米太郎ぉ。また二人が切り裂き作業に取りかかろうとする～」

はいはいそうですか。そりゃめでたい。それ見たことか。これが冒頭で俺が言っていたハーレムのことだ。二年生でトップを争う春日さんと火祭。この両者から言い寄られるオメーはハーレム野郎以外の何者でもない。ざけんな、サブキャラのくせに。……つーかこうやって振り返ると、俺ってば将也のことを中心に話していたな。自分の活躍とか全然言ってない!?　ちょ、ちょっと待ってくれ。俺が主人公なのにどうして将也の話ばっかり!?　これじゃまるで将也が主人公みたいじゃないか。う、うそーん。俺が主人公じゃないの？　俺が超電磁砲じゃないの!?　あ、それは違うか。ううぅ、なんで俺に言い寄る女子は一人もいないんだ。俺だって頑張っているのにぃ。くそ……これも全て将也のせいだ！

「うおおおぉぉっ、将也のくせにー！」

「と、突然どうした？」

黙れ。やっぱ一発殴らないと気が済まなぶべえぇぇ！？

「……まー君は私が守る」

こちらがパンチを繰り出す前に火祭がすぐに将也の傍に移動。そしてアッパーを放つ。なんて瞬発力と破壊力だ。アゴが外れそうなくらい痛い。激痛がアゴから脳天へと走り抜ける。すげー痛い。もう意識が飛びそうだ。本日二回目となる鼻血が空を舞う、を見届けながら俺は暗い闇へと落ちていっ……あ、あれ？　これでこの話終わり？　え、マジ？　ただの総集編じゃ、ない、か……あぁ。

第１００話　番外編、米太郎の一日（後書き）

テキトーな終わり方ですいません（汗）

どうかこれからもへたれ犬をよろしくお願いします！

第１０１話　極楽の湯、そこから男の浪漫へと変わり、それは悲劇と殺戮を引き

ぬあ～、色々と疲れた……。とりあえず春日は帰ってくれた。今はまた米太郎と二人でダラダラと過ごしている。もうこのまま寝たいくらいだ。

「鈍感将也は～、マジで馬鹿～」

さっきから米太郎が訳分からん歌を歌っている。気持ち悪い。水も持ってこない使えない奴が。

「兎月君、佐々木君。いいかな？」

コンコンとドアをノックする音に呼ばれてドアを開けてみると、そこには金田先輩がドーン。

「どうしたんですか？」

「入浴の準備ができたから呼びにきたんだ」

入浴……お風呂ですか。

場所は変わって風呂場前。いやいやー、ここは金持ちの別荘でっせ？　普通のお風呂なわけがないでしょーよー。それこそ銭湯並の大浴場なのだ！　たぶん！

「すげー……男湯と女湯で分かれてる。まるで温泉ですな」

米太郎の言う通り、入口が二つに分かれている。群青の暖簾（のれん）には男と、紅色の暖簾には女と書かれてある。まさに温泉じゃないですかい。

「わ～、すごいですね」

いつの間にか水川達も来ていた。そして春日よ、俺を睨まないでぇ。怖いから。

「ここの別荘は親戚や知り合いを呼んだりするからね。こういったように大勢で入れるようにしてあるんだ」

もはや別荘じゃなくてホテルだよ。普通に営業できますって。ホテル金田でやりましょうよ。

「大人数が入れる浴場に露天風呂もあるから」

「露天風呂っすか！」

おぉ、それはすごいですね。海を眺めながら湯に浸かってあぁ極楽……いやー、素晴らしいじゃないですか！

「けど、露天風呂は混浴になっているから気をつけて」

「えーっ！？　最悪ぅ～」

こちらをすっごい睨んできた水川。おいおい、俺達をケダモノのような目で見るなよ。

「ふざけるなマミー。誰が覗き目当てで露天風呂に入るか」

「マミー言うな。インディカ米のくせに」
「誰がインディカ米だ！　つーか覗きなんてしないし、そんなに嫌なら露天風呂に入らなかったらいいだろうが。代わりに俺達が露天を楽しんでやるからよぉ。あっはははは！」
ズカズカと男湯に入っていく米太郎。上機嫌だなおい。
「では僕達も行こうか。女性方もゆっくりお風呂を満喫してくれ」
バイバイ水川と火祭と睨む春日～、と。上品スマイル金田先輩に連れられて俺も入る。うお～、脱衣所も広い。つーかこれマジで温泉じゃん。こんな広い脱衣所を個人が持っているとは……金持ちすげー。改めて金田家の財力に感心しつつ生まれた時の姿になって浴場に突撃っ！　う、うおー！？
「でかっ！」
「俺の息子が？」
お前の愚息のことじゃねーよ！　この風呂場の大きさだよ。ま、まさに温泉……広すぎだろ。立派すぎて開いた口が塞がらない……あ、ありえねぇよ。テレビとかでよく見る高級な旅館にありそうな温泉がどどーんとあるのだ。パネェよ、パネェ。マジですごい。ここって孤島だよね？　どうなってるのさ！？
「あっちがジャグジーで、こっちの小部屋がサウナになっているから」
マジですか、サウナがあるんですか！？　すごいですね。いや、もう、すごいですね！　だって、こんな、あれ…ちょ、っ……すごいですねぇ！

「よっしゃ将也、サウナで我慢大会だ！」
「はいはい」

あぁ、気持ちいい……。極楽だわ～……幸せ。今日の疲れを全て取ってくれるぅ～。心も体もリラックス～。

「どうだい湯加減は？」
「最高ですよ」

さすがですね、もう感無量ですよ。ここに週一で通いたいくらいです。金持ち最高ーっ！

「ぶはぁ、暑いぃっ！」

サウナから全裸で米太郎が出てきた。そして水風呂にダイブ。きゃはぁ、と奇声を上げている。いちいちうるさいやつだな。大人しく風呂を満喫することもできないのか。

「ここって毎年来ているんですか？」
「ああ、いつもは家族で来ているんだが、僕は受験だから今年は来ないつもりだった。だけど君達にお礼がしたくて」

それはわざわざお招きしてくれてありがとうございます。とても良い思い出になりそうです。今度は俺が何かお礼をしなくては。む……う、う～……庶民の俺に何ができるのやら。

「兎月君は長風呂する方かな？」
「いや、俺いつもは短いですよ。でも温泉行った時はのんびりと浸かってます」
せっかくの温泉だから満喫したいよね。普通に家で入る時はカラスの行水よろしくさっさと上がるけど。
「そ、ん、な、ことより～。将也ぁ、まだやることがあるだろ？」
「あ？　……ああ、露天風呂ね」
露天風呂か……涼しい夜風に吹かれ夜空を見上げつつ、熱～い湯に浸かって……くぅ～！
「惜しい。露天風呂じゃないんだな……混浴さ！」
混よ……あぁ、こいつは……。やっぱ覗きじゃないか。さっきは興味ないみたいなことを言ってたくせに、いやらしいな。
「さあ、楽園に行こうぜ！」
「はいはい」
どーせ結果は……
「い、いない！？　誰もいないぞ！」
おー、景色ハンパねぇ。星空も綺麗だし夜の海って新鮮だな。うぅ、寒い。早く湯舟に～……あぁ極楽～。最高～！
「ま、将也将也将也将也ぁ。露天風呂に誰もいないぞ！」

そりゃそうでしょ。お前がさっき露天風呂に行くって叫んでたじゃん。それ聞いて女性陣が来るとでも？　ははっ、ありえない。

「残念だったな。あー、極楽～」

「……しょうがない」

米太郎？　どしたよ、そんな気持ち悪い顔して。何か良からぬ企みを考えてる顔だな……ん、おいおい……まさか……！？

「覗くか」

清々しく言うな。この馬鹿は……やっぱり馬鹿だった！　堂々と覗く宣言しやがって。

「このシチュで覗かないなんて、男じゃねーよ」

「安心しろ、それ以前にお前は人間じゃない」

「いいから将也も来いよ。将也だって覗きたいくせに～」

仲間だろ？　みたいな目を向けてくるな。そして否定できないことを言うんじゃありません。そ、そりゃ俺だって年頃の男の子だし、そういうのに興味がないと言えば嘘になるわけで……。覗けるなら覗きたい。それが本性であったりする。

「……いや、まあ、うん、覗くのには大いに賛同するが、どうやって覗くんだ？」

露天風呂が混浴だと聞いたからそこで繋がっていると思ったが、女湯の方は頑丈な壁があり、こっち側からは開けられないようになっている（と米太郎が叫んでいた）。さらに設備されたドアには鍵ま

でついている始末。女子達には鍵が渡されている（と金田先輩が説明してくれた）。つまり男湯から女湯へと関与する道も術もないのだ。漫画みたく都合の良い覗き穴なんてものはない。こんな高級浴場にあるはずがない！

「確かに女湯を覗くルートは一切ない。さっきサウナから何やら隅々まで抜け道を探したが、残念ながらなかった」

何やってんだお前は。全ては覗きのためか。逆にもうお前は勇ましいよ。男だよ！

「てことは無理じゃん」

よくよく考えると、覗く相手は火祭と春日……殺されるよね。バレたら問答無用、即刻排除のゲームオーバー……うっ、ヤバい。

「や、やっぱやめよう。相手は春日達だぜ」

「将也よ、お前の言いたいことはよ～く分かる。バレたら一巻の終わりだ。しかーし、俺にはある秘策がある。合理的に覗く方法がな……ふふっ」

ニタァ、と不気味に微笑んだ米太郎はどこからか突然と白い袋を取り出した。そしてその袋をこちらへと突きつける。

「は？」

中を見ろってことか。とりあえず中を覗いて見、うおおぉぉっ！？

「きもっ！」

袋の中には大量の虫が、があああぁぁっ！　あああぁぁぁぁ、気持ち悪い！

「うがあああぁぁっ、キモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイキモイ！」

「お、落ち着け将也。途中からモイモイ言ってるぞ？」

俺に近づくな、このド変態野郎ぉ！　む、虫を集める趣味があったのかよ。

「おほほっ、効果絶大だな」

はぁ？　何を満足そうに笑ってんだよ。気持ち悪いっつてんだろ！

「これはな、おもちゃなんだよ」

「おもちゃ……？」

米太郎は袋から虫を一匹取り出して手の平に乗せる。……よ～く観察してみると……おぉ、作り物だ。すげーな、細部にまでこだわった完璧な作りだ。本物と見間違うのも仕方ないくらいに。

「ふふっ、おもちゃ屋『リアルの追求』から大量に買ってきた。一匹あたり二百円～」

なんだそのお店。どこにあるんだよ。

「で、このおもちゃで何をするんだよ？」

うげえ、気持ち悪い。作り物だと知っていても触れないよ。気持ち

悪ぃ……。

「これを女湯に向かって投げるのさ」

白い袋をひっくり返す米太郎。どばどばぁと溢れ出る虫の大群……

ぎゃあぁぁっ!?　気持ち悪いぃぃっ!　鳥肌があぁっ!

「うぎゃあ、モイモイモイモイモイモイモイ!」

「もはやモイしか言ってねーよ。ちょ、落ち着けって!」

風呂へダイブ!　ぬあ〜、気持ち悪い。大量に出すぎだろ。何匹買ったんだ何円使ったんだ!

「けけっ、これだけの虫を見てびびらないわけがない。水川達の悲鳴が楽しみだぜ」

うひひ、としゃがみこんで虫を集める米太郎。うげぇ、気持ち悪い光景。見たことない虫までいるし……ゴキブリとか本物にしか見えないぞ。

「気持ち悪っ。で、それがどう覗きに役立つんだよ?」

「ちょ〜っと考えてもみろ。風呂場に虫が出る。それにびっくりした水川達は悲鳴を上げて逃げだす。俺達は悲鳴を聞いて駆けつける。そして全裸の水川達を目撃……うひゃひゃ!　どうだ、完璧だろ」

こ、こいつ……なんて計画的な犯行を……!

「俺達は悲鳴を聞いて駆けつけただけで決して覗こうとして行くわけじゃない。そして虫にびっくりした水川達がタオルを巻く暇もなく風呂場から出てきたのを見てしまってもそれは事故だ。俺達は悪

くない。こっそり覗くのではなく堂々と拝む。くくっ、これが覗きの新しいスタイルだ！」

死神のノートを手に入れた天才みたいにゲラゲラと高笑いする米太郎。新世界の神気取りか。

「つーわけで金田先輩っ、露天風呂でスタンバってください」

「ぼ、僕が？」

「あと三分したら女湯目掛けてこれを投げて、その後大声で虫が出たぁ！　と叫んでください。では、よろしくです！」

虫の大群を金田先輩に押しつけると米太郎は走り出した。戸惑う金田先輩。

「ほら早くしろ将也。あと三分で着替えて準備するぞ！」

作戦はもう始まったってか。ふっ……行きますか！

「金田先輩頼みます」

「あ、ああ」

大急ぎで着替えて女湯の前にスタンバイ。隣の米太郎はウキウキワクワクと鼻の穴を膨らませている。スケベな奴め。

「おい将也、鼻の穴膨らんでいるぞ」

「おっと気をつけないと」

下心を見せたら駄目だ。せっかくの計画がパーになってしまう。

「いいか？　いかにも心配そうに真面目な表情で行くんだぞ」

分かってるって。これから起こることはあくまで事故だ。シリアスムードのつもりで突入しないとな……でへへ～。

「む～、三人とも正直言って胸は全然ないけど、それはもう承知のことだ。大人しく我慢してやるさ。浴場から慌てて出てきてその美しいスレンダーな裸体をさらけ出して……むふふっ、小ぶりな胸を精一杯揺らして……きゃきゃきゃ！」

おいおい、鼻の下伸ばしすぎだって。作戦が台無しになっちゃうだろうが。

「おい将也、鼻の下伸びてるぞ」

「おっと危ない」

などとワクワク待っていると……

「む、虫だー！　うわぁっ！」

男湯から聞こえたのは金田先輩の声。作戦開始の合図だ。指示通り、おもちゃの虫を投げてくれたはず。

「来い、来い、悲鳴来い……！」

数秒のタイムラグの後、

「キャーっ！」

女湯から響いたのは金切り声に近い叫び声。き、き、き……！

「来たぁ！　行くぞ将也」

「おうっ」

顔を引きしめて紅色の暖簾をくぐる。うほっ、禁断のエデンに突入～……さあ、来い！　堂々と見てやるぜ！

「キャーっ！」

「どうした！？　三人とも大丈夫か！？」

「俺と将也が助けに来たからにはもう安心。さあ、俺の胸に飛びこんでおいで！」

虫の襲撃に驚いた女子達はタオルを巻くこともなく、そのままの姿をさらけ出し……え？

「あ、あれ？　ちょ……嘘だろ……！？」

いち早く乗りこんだ米太郎が膝をついていた。あ、な、な、なんで……なんでタオル巻いてるの！？　視線の先、水川と春日と火祭。この三人は見事なまでにタオルをガッチリと巻いておるではないか！

「は、は……はれえぇぇっ！？」

う、嘘……嘘嘘嘘嘘！？　シドの嘘！？　は、はひぁ？　な、なんで……おかしいよ！？　いきなり虫が出てきたら慌てて逃げるじゃん。それこそタオルを巻く時間も惜しんで。なのに、がっちりタオル巻いてるし。ましてや俺達が突撃してくることを予想していた

かのように待ち構えているなんて……はぁ！？　お、おかしいよ……！？

「兎月ぃ、佐々木ぃ……いい度胸だね」

仁王立ちした水川。笑っているのに怖い。笑顔なのにすげぇ黒いオーラが溢れている。うっ、水川が本気で怒ってる。つーか計画がバレてる気が……。

「こ、米太郎どういうことだ。話が違うぞ！？」

タオルを巻いているなんて予想外だ。まったくの期待ハズレ。こんなの望んじゃいない！

「うぅ！？　ば、馬鹿な……ふざけるなよ水川。全裸で来いよ。なんで全裸じゃないんだよ！？」

それは見事なまでの逆ギレだな。なんで全裸じゃないんだよってキレ方あります？　聞いたことないよ。

「……これ、おもちゃでしょ」

水川が手に持っているのは虫のおもちゃ。おもちゃとはいえ、その完成度は本物と遜色ない。なのに平然と掴んでいる水川。し、しまった水川は虫平気なタイプか！？

「私達見たんだ。佐々木のバッグの中にこれが入っているの」

「え？」

ふえ、ちょ、なっ……どゆことですか？

「びっくりしたけど一度見たことあるから平気だったの。そしてなぜ佐々木がこのおもちゃを持ってきたのかも理解した。……馬鹿なりに考えたみたいだね。でも私達には通用しないから」

や、やられた。夕食前に水川達が悲鳴を上げたのは米太郎のバッグの中の虫のおもちゃを見つけたから。そして風呂場に現れた虫を見てもすぐにおもちゃだと気づき、さらに米太郎の計画に気づき、しっかりタオルを巻いてわざと悲鳴を上げて俺達を誘いだした。……やられた、完全に計画を読まれていた……っ！

「ば、馬鹿な俺の…あ、違う。俺達の完璧な計画が……」

うおおぉい！？　俺を巻き込むな。作戦を立てたのも虫を準備したのも覗きを企んだのも全部お前だろうが。俺はそれに乗っかっただけだ！

「うーん、佐々木のバッグを見る機会がなかったら危ないところだったよ。故に制裁はかな～りキツイのを加えないとね……」

め、目が怖いよ水川。笑顔だけど、目は全く笑ってないよ。他の二人もすっげー白い目で見てくるし……。春日なんかゴミ虫を見るような目をしてるし……なんか死の呪文唱えてない？　こ、怖い。

「あわわわ！？　違うんだ、これはほんの出来心で……」
「桜、やっちゃって」
「うん」

瞬きをした直後には目の前にいた火祭は消えていた。視界に映るのは春日と水川の姿のみ。ど、どこに……？

「ぅ！？」

まず最初に空気が弾けた。次に聞こえてきたのは爆裂音と米太郎の声にならない悲鳴。隣を振り向けばそこに米太郎はおらず、見失ったばっかりの火祭が拳を打ち抜いていた。そして後ろから衝撃音。何かが壁にぶつかる音がした。

「こ、米太郎……！」

か、壁には米太郎が張りついていた。その表情は恐怖で固まっており、ずるずると米太郎が落ちてきた辺りで俺の横を風が走り抜ける。火祭が起こした風が数秒の時間差で今頃になって……ひ、ひぃ！？

「覗きを企んだ罪は重いよ。ねぇ～兎月ぃ……」

床へと崩れ落ちた米太郎。白目を剥いたまま人形のように全く動かない。ぐにゃぐにゃに折れ曲がった手足が無惨……あわわわ……！

「まー君」

「は、はい！？」

ヤバイ。ヤバイヤバイヤバイ！　米太郎を葬った今、次なるターゲットは……俺。横からただならぬオーラを感じる。これが殺気というのか……息が詰まる……！

「覚悟はできているよね？」

呼吸の自由まで奪うほどの火祭の殺気。体中から溢れ出す脂汗。喉が急速に渇き、心臓が締めつけられる。手先が震え、足がすくんで

動けない。こ、これが血祭りの火祭モード……真正面から体験するのは初めてだ。

「ま、待って火祭。ぼ、ぼぼ暴力は駄目だぞ。もう暴力は振るわないって約束したじゃないか」

「まー君、これは暴力じゃないよ。これは……制裁だよ！」

またも火祭が消えた。微かに残像が見えたかと思えば、懐には火祭が。それも一瞬のこと。腹部を襲う衝撃に全身の酸素が口から一気に吐き出された。次の瞬間には視界は大きくブレて天地がひっくり返った。そして浮遊感。足が地を離れ、体が宙に舞う。何が起きたか分からない。ただ腹が痛い。全ての内蔵が弾けたような内側から襲う痛みとぐるぐる回る景色に吐き気がする。しかしそれも一瞬のこと。背中を激痛が襲い、骨が呻いた。た、叩きつけられたのか……？　次には視界が段々と薄暗いなっていき、腹の痛みが熱とともに増してきた。ぐっ、がっ、あああぁぁぁっ！？

「は、らがぁ……」

あ、熱うぅ！　腹が熱くて痛い……があぁ！？　痛いどころの騒ぎじゃない。痛すぎて体は動かせないし、呼吸もままならない。こ、呼吸がぁ……く、空気が入らない……い、息が……ぅっあぁ！？

「か、かー……かー…っあぁっ……」

「苦しい？　ごめんね。でも悪いのはまー君達だから」

視界はもう真っ暗だ。目はぱっちりと開いているのに何も見えない。耳にやけにギンギンと響く火祭の声と自分の鼓動音が鮮明に聞こえる。激しくのたれうちまわる心の臓。内臓は硫酸を直接注ぎ込まれたかのように熱い。灼熱の痛みが腹の中を暴れ、全身を走る血の流

れが頭から足の指先まで感じる。体がおかしい。あらゆる器官が異常反応に過剰反応と支障をきたしている。目が開いているのに光を感じない。口を開いているのに空気を取りこめない。今自分の体のどこを動かしているのか分からない。全てが異常だ。神経も筋肉も何もかもがイカれている。い、息がで、きな……い……ぐっ、ぐうう……

「がっ、あ……っ……」

「楽に死なせてあげたかった……ごめん、もう一発」

火祭の声が遥か遠くの方から聞こえた。その後に耳に届いたのはギロチンが落ちる音。その音は今度は耳のすぐ傍で聞こえたような。そしてそれは間違いではなかった。真っ暗の視界の中、脳がぶち抜かれたような衝撃を受け俺の意識はそこで途絶え、た……

第１０２話　制裁から一夜

気づけば朝になっていた。目を開けばしっかりと光を感じることができ、天井も鮮明に映し出されている。良かった、かん体細胞も錐体細胞も死滅していないようだ。呼吸もしっかりできる。肺は潰れてないし気管も無事。腹をさするとズキッと痛みはしたが、問題はないはずだ。ゆっくりと立ち上がって体全身のチェック。足も動く、手も動く。一度、深呼吸……

「ふぅ……はぁ……」

隣に目を向ければベッドに米太郎が沈んでいた。もう一度目を閉じて、暗闇に戻る。その瞬間フラッシュバックする風呂場での惨劇。腹と背中に痛みが走った。ぐっ……体が震えてきた。落ち着け、落ち着くんだ俺。

「……あれは夢だったのか？」

そんな気がした。そうであってほしいと願った。風呂場での惨劇はただの夢で実際は酒に潰れた俺は朝まで眠っていただけ。つまり実際には俺と米太郎は覗きなんてしていない。そう、そうだ。そうであってくれ。あれは夢だったのか……。

「うーん、夢で意識が飛ぶってことあるんだな。痛みも残るとは……夢って怖いな。夢で死にかけたもん」

夢である。そう自分に言い聞かせてポリポリと頭を掻いて部屋から出る。……頭にでっかいたんこぶがあるのはどうしてだろ？　ま、待つんだ。だからあれは夢だって。俺が覗きだなんてするはずない

じゃん。というか覗きをしたとなるとマズイって。俺ってば最低な奴じゃん。だ、だからどうか夢であってください。この腹の痛みとたんこぶは気のせいだと思いたい！

身支度を整えて食堂へと向かう。そっちから人の気配がしたので、おそらく水川達が朝食を食べているのだろう。……ここではっきりする。俺達が覗きをして水川達にバレて火祭に殺されかけたのが夢か、現実かが……！　さあ、判決は……

「あ、覗き魔Ｂ」

扉を開けると途端に水川の冷たい一言。……あぁ、現実だった。あれは夢でなく現実。覗きがバレた、というか失敗に終わった俺は火祭に制裁を受けて朝まで眠り続けたというのが正しい記憶。それは認めたくなくても事実。うぅ、急に頭と腹が痛くなってきた。つーか空気が痛い。

「やあ、おはよう皆」

「おい昨日の件なかったことにしようとすんな覗き魔Ｂ。死ね」

厳しい。俺への当たりが強烈に厳しい。つーかＢって……あ、米太郎がＡね。

「……」

「……」

春日と火祭も目が怖い。いや、無表情なのだがそれが怖いといいますか、俺を見る目が人を見る目じゃなくて……ケダモノを蔑む目なんですよ。空気が半端なく痛い。全方向から拳銃を向けられているような圧迫感、緊迫感、焦燥感の感感感！　空気の五指に握り潰されているようだ、生きてる心地がしない……。

「覗き魔B、何か言いたいことは？」

ぐっ……何気ないトークで昨日のことをうやむやにしようとしたが、それは無理みたいだ。徹底的に俺を追い詰める気だぞこの三人は。心なしかウエイトレスの女性達も俺を白い目で見ている気が……。ここに俺の味方はいないようだ。誰しもが俺を汚物を見るように不快感を露わにしている。全員が敵、そして悪者は間違いなく俺。そんな俺がやることは一つ、

「昨日は真に申し訳ありませんでした」

謝罪と土下座。頭を床にこすりつけまくる。この場にいるのは全員女性だって？　知るかそんなこと。もうね、諦めましたよ。この状況、こうでもしないと気が休まらない。立っているだけだと視線が痛すぎて意識が飛びそうになるのだ。だからこうやって土下座している方が気持ちとしては楽になる。まあ、土下座をしたところで水川達が許してくれるわけないのだが……

「分かった、許してあげる。頭上げていいよ」

が、耳に届いたのは思いがけない言葉。今なんと……？

「お、お許しくださるのですか……？」

「うん」

な、なんて良い人達なんだ……！　女の敵である覗きを実行しようとした俺を許してくれるなんて……あ、ありがとう。慈愛に満ちた笑顔の水川。あぁ、あなたが天使に見えるよ。天使マミー、アイラブユー。

「ただし、一発芸しろ。こっちが満足するまで」

「……え？」

「早く」

天使がニタァと下劣な笑みを浮かべた。いや天使じゃない……こ、こいつぁ悪魔だ！　いたぶるかのように口元をひどく曲げて目が恐ろしい光を放っている。早くやれと催促か。あ、悪魔め……！

「さあ、早く」

こ、この空気で一発芸……この完全アウェーの静まり返った空気で一発芸をしろと？　む、無理だってぇ！　絶対スベるって！　絶対に怪我するって！　今度こそ再起不能になるってぇっ！

「さあ……！」

う、う、うわあぁぁっ！？

最悪のモーニングだった……。あんなに大怪我したのは初めてだ。スベりにスベった。それはもう昨日の比ではない。もう嫌だ、忘れ

たい。記憶の奥底に沈めたい。一生思い出すことのない最下層に埋めてやりたいくらいだ。……お、思い出すだけで寒気が……あ、あぁ！？

「ぬおぁー！？　棺にぶち込んで鎖でぐるぐる巻きにして徳の高いお坊さんの札貼りまくって地面に埋めて土かけて線香焚いて両手でパンパン！　もう忘れ去りたいわ！」

「ど、どうしたんだい？」

自分でも意味不明なことを口走っていると後ろから声をかけられた。優しい男性の声。はい味方！　この声知ってる～。

「金田せんぱ……どうしたんですか？」

「いや、僕が先に聞いたんだが」

いやいや、それより金田先輩が先ですって。だって……左頬がおもっくそ腫れてますよ……えぇ！？

「な、何があったんですか？」

「実は昨日のことでね……覗きの実行犯は兎月君達だが僕はその協力者として扱われてね。先ほど恵さんから殴られたんだ」

「……す、すいませんでした！」

ここに来てもう何度目やら。全力の土下座をかます。俺達のせいで金田先輩まで巻きこんでしまって……未来の社長さんにとんだ泥を塗ってしまってぇ！

「俺が馬鹿でした俺が馬鹿でした俺が馬鹿でしたあぁっ！」

「お、落ち着いて兎月君！　そこまで頭を床に打ちつけなくていいから。僕は大丈夫だから！」

でもそんなに頬が真っ赤になるぐらいに殴られたなんて……責任感じますって。金田先輩は俺達に無理矢理覗きの手伝いをさせられただけなのだから。俺達が１００％悪い！

「ホントにすいませんでした！　こんな醜い自分をボコボコにして棺にぶち込んで鎖でぐるぐるにして土に埋めて十字架建てて両手をパンパン！　あぁぁっ！？」

「兎月君落ち着いて。これ以上は頭から血が出てしまうよ！」

第１０３話　幻の花を探そう

昨日の肉体的ダメージと今朝の精神的ダメージ、さらには土下座ダメージで早くも体力は底を尽きようとしているが、ここは踏ん張りどころ。水川達も一応は許してくれたし、今日もまた遊びまくるぜいとテンションは自然と上がっちゃうわけで。

「全員いるかい？」

現在、金田先輩を先頭に別荘の裏側へと向かっている。つまりは島の反対側、中心部。立派にそびえ立つ荘厳なる山に生い茂る森林樹木。ジャングルみたいだな……大丈夫か？

「ま、将也ぁ」

急に米太郎が脇腹にしがみついてきた。びっくりするわ。

「なんだよ」

「水川達が無視する……」

そっちかよ。森とか関係ないし。

「いつものことじゃないか」

「普段とは違うんだよ。何言ってもノーリアクションで、何言っても無視するんだ。すごい徹底ぶりに俺もう泣きそうだよ……うえぇぇん」

つーか泣いてるし。涙がポタポタ落ちてるぞ。どうやら水川達は米太郎……いや覗き魔Ａに対しては完全無視というある意味一番残酷

な態度を取っているようだ。

「ぐすっ、俺はどうしたら……」

「反省して誠意を見せるしかあるまい。俺も一発芸を十連発させられたんだ。お互いに傷は深い。頑張っていこうぜ」

俺は昨日決意したんだ。酒と覗きはもうしない。これ絶対。

米太郎と慰め合っているうちに気づけは森の入口。奥はほの暗く、何か恐ろしげな雰囲気を感じる。

「ここで探険ですか～？」

水川の問いかけに金田先輩は微笑み返し、森の奥を見つめる。

「ここの島は特別な場所でね。森の奥にはこの島でしか見ることのできない花があるんだ。その名も、日摘み花」

な、なんすか急に。

「光の届かない森の奥深く、唯一陽の光が差し込む場所に日摘み花は咲くといわれている。その咲く姿はまるで薄暗い森の中で光を得るために天を登るような姿をしていると……。故に日摘み花と呼ばれている。その花を見た者は誰もいない。まさに幻の花だ」

「で、それを探しに行こうと？」

「つまりは探険ですね～」

いきなりのファンタジー的展開。誰も見たことのない花。森の最深部、光が届くたった一箇所に咲く花と言われる幻の花。それを見つけようと？　ははっ……無理じゃね！？

「マジで言ってるんですか。そんなの見つかりませんって。誰も見たことないってことは花の存在も不確かなんでしょ？」
「いや、確かにあるはずだ。遥か昔ここに流れ着いた旅人が森をさ迷い、力尽きようとした時なんと光り輝く一輪の日摘み花を見つけ命を救われたという言い伝えが……」
「ついには言い伝えが出ちゃいましたか！　もう胡散臭さ爆発なんですけど」

さすがにそれはないでしょ。そんなあやふやな言い伝えを頼りに幻の花を探しに行くなんて馬鹿げてるよ。

「面白そうじゃん～。行ってみようよ」

なぜかノリノリの水川。おいおい、良い顔してるよ。冒険ワクワクするなぁみたいな顔してるよぉ！

「なんか俺もやる気出てきたぞ。その日摘み花を手に入れてやるぜ！」

水川につられて米太郎もヒートアップ。場の空気が出発ムードなんですが……え、行くの！？

「将也、ここで男らしいところをアピールして俺達の信頼を取り戻すしかないぞ」

ああ、まあそれもあるか。ここで俺だけが行かないとか言ったら、それこそ俺が無視の対象になってしまう。嫌だ。それは絶対嫌だ。寂しいもん！

「つーわけでチーム水川、幻の日摘み花目指して出発っ！」

「おーっ」
「あ、その前に」
リュックからごそごそと何やら取り出した金田先輩。一人一人に渡されたのはどっしりとした黒色の筒らしき物とライター。先端に導火線がついているけど、これは……？
「これに火をつければ狼煙が上がる。森の中で迷ったらこれを使ってくれ。すぐに助けを向かわせるから」
……マジじゃん。これマジのやつじゃん！　えええぇ!?　これってガチでヤバイやつ……マジでガチでマジガチのヤバイやつ。もっとこうコミカルにお花見つけようみたいな感じじゃないの？　こ、こんな軍隊が使うようなごっつい狼煙渡されても……ちょ、怖くなってきた！
「では気をつけて。僕は勉強するから皆だけで行ってくれ。良い知らせを待っている」
そして言い出しっぺの金田先輩は別荘へと戻っていくし……もうなんなのさ。俺行かないからね！
「将也ー、置いてくぞ。早く来い」
そして何の躊躇いもなく森に突入する水川チーム。え、あれ？　み、皆やる気満々かよ。俺だけ置いてきぼり？　……うぅ!?
「ちょ……待ってぇ！」

森に入って数十分。静かな森を俺達は進む。奥に進めば進むほど辺りは暗くなっていき、地面もじわじわと湿っぽくなってきた。木々と葉で直射日光は遮られてはいるが、森の中は蒸し暑く額にじんわりと汗が滲む。

「う～ん、見つかんないね」

そんな簡単に見つからないでしょ。というか見つかるとは思えない。まずここにしか咲かないという時点で怪しいだろ。孤島一つ一つに幻の花があるならこの世界は未知で溢れるわ。毎日が摩訶不思議アドベンチャーですよ。つ、か、もう、ぜ！

「本当にあるのかな？」

おっしゃる通りです火祭。

「あるに決まってるさ。金田先輩が言ってたじゃないか、この島は特別だって」

それも訳分からん言い伝えを信じての発言だろうよ。俺から言わせてみれば、幻の花なんかないわ！　と今すぐにでも狼煙を上げてさっさと別荘に戻りたいんですが。

「なあ水川、今どの辺だ？」
「……」
「将也ぁ……水川が無視する」
「しょうがないって。耐えろ」

未だに米太郎無視は続いているみたい。やり過ぎだろと言いたいが昨日の覗きのことを言い返されたらぐうの音も出ない。俺達が悪いのだし、それはもうしょうがないこと。だから米太郎、大人しく無視を受け入れないと。

「……兎月」
「ん？　ぐおっ」

後ろから春日が俺のリュックを引っ張ってきた。ぐっ、重い！

「なんだよ急に。コダマでも見つけたか？　それはな、森が豊かな証さ」
「うるさい」

出ましたローキック！　右足に衝撃が走り、体のバランスを崩してしまい地面に片膝をついてしまう。い、痛い……。

「理不尽だ……」
「兎月」
「はいはい？」
「……疲れた」

疲れたって……うん、まあ数十分もこの気温の高い中歩いたら疲れるよね。うん。……うん？

「そ、そうだな」
「……疲れた」
うんそれ聞いた。で、だから何？　俺にどうしろと……。
「疲れた」
「それ聞いた」
「……疲れた」
気づいたら無限ループ。疲れたとしか言わないロボット春日。ど、どう対処したらいいか分からないよ。
「将也、回復魔法だ」
米太郎の素早い耳打ち。よし、
「ベホイミ！」
「……」
ぐ、ぐふっ！？　躊躇なく蹴ってきやがった。俺に６２のダメージ！　無表情で蹴りを入れてくるなんて悪魔かよ。いや、ゾーマかよ。いや、デスピサロかよ！
「おい米太郎、違ったぞ」
つーか俺も安易に実行したけど絶対違うよな。春日にそんなノリは通用しないんだから。
「そうだなー、ベホマだったら」

「MPが足りません！」
「疲れた」

まーた始まった春日のぼやき。疲れたとしか言わない。ノムさんを見習え、あの人のぼやきのバリエーション半端ないからな。マー君、神の子、不思議な子とか。……あれ？　マー君って俺のこと？　まあ普通に違うけど。

「そんな疲れたのか？」
「……疲れた」

お嬢様の春日に慣れない森の探索はしんどかったか。文句なら金田先輩に言えと言いたいが、言いたい本人がいないから言いたいことも言えないわけで。

「背中押そうか？」
「嫌だ」

即答。ちょっと傷つく……人の厚意を踏みにじりやがって。しかしまあ、疲れた疲れたと連呼する春日だが実際その表情には疲労の色が濃く出ている。本当にキツイなら無理させるわけにはいかない。ここでギブアップ、引き返すべきだよな。

「引き返すか。残念ながら幻の花、日摘み花を納品せよ！　のクエストは失敗ってこと痛いっ！」
「……」

こ、今度は殴ってきたがった。なんでだよ、あなたが疲れたって言うから私は戻ろうと配慮ある意見を提示しただけなのに……それすらも気に食わないってか？　上等だオラァ！

「ど、どうしたの。何か不満なことがあるの？」

しかし俺はヘタレ。そんな春日に喧嘩を売るような真似はできない。腰を低くして春日のご機嫌を伺うしかないのだ。

「ここ急な斜面になってるから気をつけてねー」

水川は元気満々に奥へと進んでいく。俺と春日は置いていかれそうだ。おいおいリーダー、チームがばらばらになってるよ。今すぐ戻ってきてぇ。

「疲れた」

はぁ、そればっか。もう聞き飽きたわ。

「だから戻ろうぜ」

「うるさい」

理不尽にもほどがある。一体俺にどうしろと。俺にはもうどうしようもありません！

「疲れた」

「うぬあぁっ！？　なら、おんぶでもしましょうか！」

あなた絶対嫌がると思うけどね！　マジで言ってるわけではない。ちょっとしたジョークだって。

「……」

あ、れ、え？　黙っちゃった……い、いや無視だろこれは。待て、無言は肯定の表れという俺のルールに従えばこれは……つまり……おんぶしろ、と……えっ、マジで？　いやいや、それはさすがにないよ。無言は肯定だと考えてきたが、これはないよ。それにただ無視しただけってこともあるし。

「……」

なんかこっち見てくるけど……え、えぇ？

「な、なーんて冗談だよ。ウフフッ？」

「うるさい」

がっ！？　また蹴ってきやがって……ちょ、これマジでおんぶする感じ？　いやいや！　無理だって。前に一度だけ春日をおんぶしたことあったけど、さすがにこんなところでしたら水川に冷やかされてしまう。

「……疲れた」

またループに戻ってきた。おいおい……本気ですか春日さん、本当の本当におんぶを所望されているんですか？　今度は俺が嫌だ。だ、だって恥ずかしいじゃん。水川達が見てるところでそんなこと出来ません！

「……疲れた」

でも春日は本当に疲れているみたいだし……う、ううぅ？　な、なら俺がすべきことはもう決定しているようなもの。

「ぬあー！　はいはい分かりましたよ」

こうなりゃ覚悟を決めるしかない。恥ずかしいがそれは春日も同じはず。あのプライドの高い春日が恥を惜しんで申し込んでいるのだ。よほど疲れているに違いない。なら俺がやるべきことは、

「……あ～……っと、じゃあ……俺がおぶりま」

「まー君！」

おぶりまー君？　新しいあだ名ですか。

リュックサックを下ろし、しゃがみこむ俺。その後ろに立つ春日。

そしてその間に入りこもうとする火祭。はい？　急にどうしたのさ火祭。すごい勢いで戻ってきた火祭は何やら春日に言いたいようだ。

混乱する場。春日は春日で暴れるし、なぜか米太郎は叫ぶし、場はカオス状態。

「恵ずるいよ！」

「ず、ずるいって何が？」

「……疲れた」

「相変わらずそればっかりだなおい」

「ま、将也危ない！」

「うるせー、今それどころじゃないんだよ」

「兎月達危ない！」

「マジか水川サンキュー！」

「俺のときと態度違うじゃねーかー！」

ギャーギャー騒ぐ皆。い、いや、それより水川の言う通り、ここ斜面が急だし危ない、し！？

「うおっ！？」

ガクンと足が崩れた。ずるずると落ちる体。は、はらあぁっ！？
え……俺ってば今現在落下中？　地面が崩れ、て……落ちてるうぅっ！

「ま、まー君！　手を！」

間一髪、森の斜面へと落ちかけた俺の手を火祭が掴んでくれた。た、助かった。ありがとう火祭。つーかマジで危ない。なんだここ、普通に危険だわ。見下ろせばどこまでも続く森の斜面。ここで足を滑らせて落ちようものなら間違いなく迷子になってしまう。うお、危ないって。足場が崩れるなんて予期もしないこと。火祭がいなかったら俺はもう……

「た、助かったよ火祭……って、火祭も落ちてるくね？」
「え……き、きゃあぁっ！」

身を乗り出し過ぎたのか、火祭の体もずるずると倒れて、重力のいたずらにより俺と二人仲良く奈落の底へとおぉ！？　うわあああ、滑り落ちるぅ！

「将也！？」
「桜！？」
「疲れ」
「それはもう聞いた、ってそれどころじゃねー！」

第１０４話　遭難しちゃいました

「いててて……」

随分と斜面を滑ってきたようだ。米太郎達の声もまったく聞こえない。ここはどこだ？　周りは森林樹木に未曾有の花植物だらけ。……あ、さっきと一緒だ。

「う……」

「火祭、大丈夫か？」

とにかく俺と火祭は道を踏み外し、転落してしまったのだ。ここが島のどの辺なのか分からない。……お、さっきと一緒だ。

「私は大丈夫……まー君は？」

「俺も大丈夫」

火祭もたいした外傷はなかった。無事で何より。……さて、こっからどうしよう。米太郎達と合流したいが、どこにいるのか分からない。さっきから叫んでいるが、応答はまったくなし。完全にはぐれてしまった。

「ど、どうしよう……」

「落ち着け火祭。こういう時にこそ冷静になるべきだ」

ここは男の俺がやるしかない。火祭を守れるのは俺しかいない。よし、どうする……あ、そうだ。はい、もう大丈夫～。

「狼煙だ！」

森で迷ったら使ってくれと金田先輩が渡してくれた狼煙があるじゃないか。きっと紅蓮色のド派手な煙がモクモク上がるに違いない。そうすりゃ救助もすぐに来るだろう。

「よっしゃ、早速のろ……し……あれ？」

な、ない。リュックが……狼煙とライターを入れておいたリュックサックがない。嘘、なんで……はっ！？

「さっき春日をおんぶしようとして下ろしたんだった……」

あああっ！？　しまった！　なんということだ……ひ、火祭は！？

「狼煙ある？」

「ない……落ちてる時に落としたみたい」

……ぐ、ぐわああっ！？　ヤバイ、これヤバイよ。ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ。皆とはぐれて狼煙もない。この得体の知れない未知の森の中、外部との連絡手段がない。この状況を簡潔に表すと……

「そ、遭難してしまった」

……うわわあぁぁぁぁっ！？　ヤバイ、どうしよ。誰かヘルプミー。これマジであかんやつだって！

「う、うぅぅっ！？　ど、どどどどどうしよう？」

「ま、まー君落ち着いて。さっきまで冷静になろうとクールに言っていたじゃない」

そんなこと言われても～。遭難ですよ遭難、そーなんです！　それってどーなんです！？

「うわあぁっ！？　誰かー！　た、助けてぇ！」

必死に叫ぶが返ってきたのは小さなやまびこ……や、やまびこぉ！

「あああっ、遭難だあ！？」

「まー君落ち着いてっ」

「ぐへっ」

び、ビンタされた。親父にもぶたれたことないのに……つ、つーか地味に痛い。パンッと頬を叩く音がやまびこしたし。

「い、痛いよ」

ここ最近、火祭も暴力的になってきたなぁ。これは誰の影響だ。水川……いや春日か。その二人も凶暴だ。特に春日は。なぜだ、なぜ俺の周りにはバイオレンスな女性しかいないんだ。

「冷静になろうよ。まー君がしっかりしないと私どうしたらいいか……」

ギュッと火祭が俺の手を握ってきた。ふ、震えてる……火祭も怖いのか。……くっ、馬鹿か俺は。そうだよ男の俺がしっかりしないでどうする。怖いのは火祭も一緒だ。俺だけが不安なわけじゃない。ひとりじゃない、ＧＴで何度聞いたことやら。俺が火祭を守るんだ。混乱している場合じゃない。

「大丈夫だ火祭。俺がついている。安心してくれ」
「うん……ありがと、まー君」

……とは言ったものの、こっからどうしましょう。現在地不明、携帯も圏外で使えないし連絡不能状態。頼りの狼煙もない。誰がどう見ても遭難。とどのつまりピンチってこと。

「ところで今、何持ってる？」

まずは持ち物確認だ。遭難とはサバイバル。救助を待つ間も生き延びなくてはならない。そのためにも所持品を確認することは非常に大事なのだ。

「えーとね、携帯とミネラルウォーターとポケットティッシュにハンカチ……それくらいかな」
「なるほど。俺は携帯と……あ、そんだけだ」

ほとんどの荷物はリュックに入れてしまったからな。火祭も落ちてくる時にいくつか荷物落としてしまったようだし。携帯は使えないから、あるのは水とティッシュとハンカチーフ。……デジタルワールドに来た時の子供達の方がもっとマシな物持ってたよな。これだけじゃ一日ともたない。急いで森から脱出しなくては！

「とりあえず一直線に歩いてみよっか。そうすればいつかは海岸に辿り着くし、海岸にまで来れたら一安心だろ」

森の中をぐるぐる回り続けるより、一直線に歩いた方がいい。もう幻の花なんか知るか。ぜってーないんだしよ。

「うん」

つーことでレッツゴー。とりあえず真っすぐだ。とは言え、まあないとは思うけど万が一もしもここが迷いの森みたいな場所だったとしよう。真っすぐ歩いているつもりが森の魔力により方向感覚を狂わされて、ここさっきと同じ場所なんじゃ……みたいなことになってはいけない。何か目印をつけておかないとな。

「火祭、ティッシュ頂戴」
「うん」

ティッシュを木の枝にくくりつける。よし、これなら大丈夫だ。もし森の魔力にかかっても、さっきの目印が……みたいになってすぐに気づける。……逆に言えば、この目印を見つけた時は森の魔力によって俺達は……！　ってことに……こえぇ。

「よし、こっちだ！」

しかしびびっているわけにはいかない。俺は火祭の命を預かっているのだから。俺がなんとかするしかあるめぇよ。とにかく真っすぐ進めばいつかは海岸に着く。それまでひたすら歩くしかない。

「……」
「……」

ひたすら歩く俺達。ＲＰＧなら確実に数回はモンスターとエンカウントしているが、ここはＲＰＧの世界じゃないので安心だ。何事もなくひたすら歩く。やはり森は暗く、ひどく湿っている。日陰とはいえ気温は高く蒸し暑いのがこうも続くと体力も削られていく一方で……ぜぇ、ぜぇ…あー……しんど。

「まー君、大丈夫？」
「だ、大丈夫だぁ」

思わず志村テイストで答えてしまう。うぅ、いかんいかん。俺がしっかりしないと。そのうち耳を優しく撫でる海のせせらぎが聞こえてくるはずだ。さあ、もう少しの辛抱だぁ。あ、志村。

「……ごめんね」
「へ？」

ティッシュを枝にくくりつけるのが五回目になった時、火祭がポツリとそんなことを呟いた。ごめんね……って？

「どうしたのさ急に」
「私が暴れたせいでまー君が足を滑らせて、こうなってしまったから……」

ああ～、そういうこと。俺が春日をおぶろうとしたら火祭が声を荒げて、ずるいと叫びだして場が乱れた、と言いたいのか。

「何言ってんだよ。火祭は悪いわけじゃない。誰もがギャーギャー騒いた中で俺が勝手に足を踏み外しただけだし。そんな俺を火祭は助けようとしてくれたじゃないか。そのせいで火祭も落ちてしまったのだから謝るのは俺の方だよ」
「そんなことない。私が暴れなかったら……」

そんな自己嫌悪にならなくていいって。俺としてはそれよりもっと気になることがあるし。

「あのさ、どうして急に暴れたんだ？」

「えっと……」

あのタイミングで急にだからな。何か理由があったのでは？　と将也は冷静かつ何気なく原因究明に着手します。

「その……」

「火祭？」

「……寂しかったから」

へ？

「まー君が恵にばっかりかまっているから寂しかったの……」

……へい？　ど、どういうことですか？　よく意味が分からない……春日にばっかりかまっていたって……そうなの？

「俺が春日の相手をしていたから？　へ？」

「まー君と今朝から全然話せてなかったし……」

「は、はあ」

「……それに……昨日のことでまー君が私を恐がっているんじゃないかと思って……不安になって……」

昨日のこと……あぁ～、覗きの件ね。覗きを企んだ俺と米太郎に対して火祭が制裁を下したやつか。う～ん、思い出しただけで傷が疼いてくる……しかし！

「そんなことで俺は火祭を恐がったりしない。何度も言ってきたろ？　火祭が暴力を振るおうと周りから恐れられていようと俺はなんにも恐れない。それは火祭の持つ一つの顔として受け止めているし俺は絶対に恐がらない。たとえ俺自身が火祭がリンチされてもだ。

それだけは信じてよ。昨日のことは完全に俺が悪かったし、つーか馬鹿で愚かだったよね。それが原因で俺が火祭を避けていたと思われたのならそれまた俺が悪い。だから火祭が気にすることは全くないよ」

「で、でも……」

「はい！　謝るのはこれにておしまい。閉店ガラガラといきましょうよ。俺としては未だに火祭がそんな懸念を持つ方が殴られるより辛いよ」

俺は絶対に火祭を恐がらない。今では人気者の火祭だが、まだ何人かは過去のイメージを持った奴もいる。そうだ、完全に火祭の悪い嘘のイメージが払拭されたわけではない。まだ火祭を恐れる奴はいる。火祭に対して不快な視線を送る奴だっている。そんな奴らから火祭を守り、そのイメージを変えるのが俺の役目だ。

「たとえ俺と火祭以外の全人類が火祭を恐れ忌み嫌おうと俺はぜーったいに火祭を恐がらない。いつまでも傍にいるからさ！」

「まー君……」

「だからそんな申し訳なさそうな顔しないでよ。これまた何度も言ってきたけど、謝られるより感謝の言葉が欲しいんだって。火祭にずっと笑顔でいてほしいからさ」

もう火祭に寂しい思いをさせない。ずっと笑っていてほしいから。

「……うん、そうだね。まー君……ありがとう」

あぁ、この笑顔だよ。火祭は笑顔の方が断然お似合いだ。うん、笑顔が一番！

「えへへ……やっぱりまー君はまー君だね。出会った時から何も変

わってないよ」

「そう？」

「優しくて周りにすごく気が遣えて自分より誰かのことを心配する……少し無鉄砲なところもあるし、とっても鈍感さん。だけど、いつも一生懸命で自分の意思を真っすぐ貫き、嘘偽りなく全力で思いをぶつけてくれる。頼りがいがあってピンチには駆けつけてくれて、不格好でも無様でも必死になって守ってくれる。明るくて楽しくて笑顔が眩しい。そんな太陽のようなまー君に私は救われたんだよ。……本当にありがとう」

っ、う！？　い、いや～……そう改まって言われると……うっ？　な、なんだか照れるというか恥ずかしいというか……むず痒いっ！　べ、別に俺自身はそんなつもりはないけど、火祭はそう捉えているのか……むず痒いっ！

第１０５話　たどり着いた先は

「よし、海岸を目指そう」

火祭と二人きりでいるのも楽しいが一応今は遭難中。デレデレとデート気分を満喫するわけにはいかない。日が暮れたら危険度も増すし、こんな森で一夜を過ごすのは勘弁したいところだ。

「あ、その辺り滑りやすいから気をつけて」
「うん」
「あ、さっきの話だけど、春日がずるいって。別に春日はずるくないだろ～」
「だ、だって！　まー君と今朝からずっと私と話していなかったから！」

そうだった？　さっきだって春日が疲れた疲れたとうるさいから相手していただけで別にずるいというわけじゃ……。

「まー君はもっとフェアになるべきだよ！」
「フェアって……何に対して平等になれば？」
「それはもちろん私達の…っ、きゃああっ！？」

ひ、火祭？　うわあぁっ、火祭が消えた！？

「ひ、火祭！？」

ズザザザッと何かが崩れる音と舞い散る葉と土埃によって辺りは満たされた。充満する土埃が落ち着いたころ、俺のすぐ後ろに現れたのはぽっかりと空いた大きな穴。ひ、火祭は何処に……？

「ま、まー君……」
「火祭！」

なんと穴の中から火祭の声がした。ま、まさか、この中に……！？　おそるおそる穴を覗くと……いた。そこには尻餅をついてボロボロの火祭がいた。あああっ、火祭があぁっ！？

「だ、大丈夫？　怪我はない？　だ、誰かあぁっ、救急車ぁ！」

あ、ここは孤島だった。そして俺達は遭難中だった。助けは来ない。俺がなんとかしなくては！

「火祭、手を……！」

なんとか火祭を穴から引き上げる。こんなところに落とし穴があるなんて……これマジで森の魔力的なやつが影響しているんじゃ……こ、怖いよ。

「大丈夫？」
「う、うん」

とんだ災難だな火祭も。こういうのは火祭じゃなくて俺みたいな奴に降りかかるべきなんだけどな。罰ゲームを受けるのはアイドルより芸人の方がいいのと同じ摂理だ。つーか本格的にヤバくないか？　こんなごく自然に落とし穴が設置されているなんて……いつ命を落としてもおかしくないぞ！？

「は、早くここから出よう。今度は森に住む先住民に拘束されて神の生贄にされるかもしれない。そうなる前にこの森から脱出だ！」

「う、うん。……っ！？」

火祭？　どうしたんだよ、うずくまって……あっ！

「っ……落ちたときにどこか捻ったみたい」

だ、大丈夫？　なんか赤く腫れているけどぉ！？　う、すげえ痛そう……。

「歩ける？」

「う、うん……っ…大丈、夫……」

全然大丈夫そうじゃないぞ。ほらぁ、フラフラしているし。それ軽く捻挫していると思うよ。痛そうにしてるし、そんな状態じゃまともに歩けないよね……よし！

「ほら、おぶるから乗って」

「え……い、いや大丈夫だよ」

「恥ずかしいのは分かるけどさ、今はそんなことを言っている場合じゃないだろ。早くしないと日が暮れてしまうし。嫌だとは思うけど、ここは我慢してくれないか？」

そりゃ火祭だって俺みたいな情けない奴におんぶなんかされたくないと思うだろうけどさ。ここは妥協してもらうしかあるまいよ。

「嫌じゃないよ。けど、まー君の負担になるから……」

「別に負担じゃないって。ほら、早く」

「う、うん」

火祭をおぶって、いざ出発。火祭が怪我した以上、俺が火祭を守らなくては！　さっきから守る守る連呼しているな～。俺は猪狩か。ぬ……ちょっと分かりにくいボケだったかな。

「だ、大丈夫？　重たくない？」
「全然。むしろ軽すぎるくらいだよ」

ホントに軽い。まるで綿菓子のようだ。こんな軽い身体のどこからあのパワーが出せるのやら……謎だ。

「本当に重たくない？」
「大丈夫、本当に重たくないって」

そ、それより気になることが色々とありましてね。……火祭をおんぶしているこの状態。服の上からとはいえ太もも普通に触っているし、その……あの……せ、背中に二つの温かくてふくよかなものが当たっていまして……うっ！？　なんか色々とヤバイ！　これはもう色々と……こんな柔らかいものが歩く度に背中に押しつけられちゃあ……ぐはあっ！？　はいもう正直に言います。胸が当たっているんですよぉー！　うわあぁっ！？　こ、こんな状況だけど……すごい興奮してき、はっ！？

「いかんいかん俺の馬鹿！　そんなやましい気持ちは持ってはいかんのだぞぉ！」
「ま、まー君！？　頭突きで木に目印をつけなくても。まだティッシュは残っているから」

馬鹿か俺は。今は遭難中だぞ。む、胸が当たってムラムラしている場合じゃないんだって。俺は火祭の命を預かっているんだぞ！　もっと気を引き締めろ。……で、でも背中に意識が……うぅ、だっ

てモロに当たっているから。そういや米太郎が言ってたな……春日、火祭、水川の中だと火祭が一番む、胸が大きいって……おいおいおい俺!?

「うおおぉぉっ！　消えろ俺の煩悩ぉ、除夜の鐘は待てねえぞおらぁ！」

「どうしたの、まー君!?」

煩悩を、煩悩を消せ！　煩悩よ消えろ！　木に頭突きのラッシュ！

ぜ、ぜぇ…ぜぇ……お、落ち着け俺。今はそんなハッピーに浮かれている場合じゃないって。遭難だぞ遭難。命の危機に立たされているということを忘れちゃいかんよ。急いで森から脱出しないと。とりあえず真っすぐ突き進むのみ。後ろを振り向くな。後ろのことを考えるな。う、後ろの天使について何も考えるなぁ！

「ぜぇ……ぜぇ……」

火祭をおんぶして歩くこと数十分。未だに緑豊かな森の中。砂浜も見えなければ波の跳ねる音すら聞こえない。ひたすら森。真っすぐ歩いてきたが依然として森。エンドレス森。ザ・森。さ、さすがに疲れた。

「まー君大丈夫?」

「……大丈夫」

弱音は吐けませんよ。火祭は怪我して歩けないんだ。俺が頑張るし

かないでしょうよ。歩みを止めるな、ただひたすら歩け。歩いていればいつかは海岸にたどり着くはずなんだから。……とは言っても、キツイものはキツイ。この蒸し暑い気候、風通しも悪くじめじめと湿度も高い中、長時間歩いていたら体力的にも精神的にもやられる。歩けど森。何も変わらない風景。これはしんどい……何も変わらないってのが一番キツイ。もしかしてずっとこのまま森の中をさ迷い続けるのでは……！？

「嫌だ、まだ隠しボスを倒してないんだ。このままくたばってたまるか」

「も、もっと他にやり残したことあるよね？」

唯一の救いは火祭との会話だ。火祭と話しているだけで気持ちが落ち着くし楽になる。無言で歩き続けたら気が病んできそうだからな。ホント助かるよ。

「……まー君」

「ん、どうした？」

「……ありがとう」

は、はい？　どしたの急に。

「やっぱり、まー君はまー君だね。……私……本当にまー君のことが……」

ん？　ちょ、声が小さくてよく聞こえない。けど……な、何か非常に大事なことの気がする……！

「火祭？」

「ううん、なんでもない。まー君にはいつか必ず伝えるから」

「はあ……」

ん～？　前にも同じようなことがあったような……ん～……む～？　……疲れた。すごい気になるが今はそれよりも生き残ることが大事だ。一体どれだけ歩いたと……もういい加減、海の一端でも見えてもいいじゃないか。ぜぇ……げ、限界かも。さすがにもう限界だ。これ以上は歩けない。火祭がすっげえ軽いとはいえ、人を一人おんぶした状況で足場の悪い森を一時間近くも歩いていたら体力なんてあっという間に底を尽きる。うぅ……フラフラしてきた……視界もぼやけ……ぐぅ……た、倒れ……

「ま、まー君。あ、あれ！」

消えゆく意識の中、火祭の声が耳に響いた。ど、どしたの。俺もうぶっ倒れる寸前……。

「あ、あれって……！」

火祭が前方を指差す。おぼろげな瞳を懸命に開いて前を見れば……

……う、嘘だろ……！？

「あ、あれってまさか……」

まず最初に眩しいと感じた。太陽の光を見るのは久しぶりだったから。ほの暗い森に差し込む木漏れ日。その陽光を浴びる一輪の花。明らかに周りの花とは違う。どの花よりも輝きを放ち、どの花よりも神々しい。他の植物や花が暗くなるほどに眩しく、まるであの花だけがスポットライトを浴びているかのような。そして何よりその美しさ……花がこんなに綺麗だと思ったことはない。惚れ惚れと思わず見入ってしまう。ま、まさか……これが……！？

「日摘み花……」

金田先輩の言っていた日摘み花なのか。ま、ま、まま……マジかあぁっ、うえぇぇぇぇっ!?　う、嘘……だって幻の花。つーか存在するとか全く思ってなかったのに。

「あ、あれが例の？」
「そ、そうみたい……」

確かに日摘み花っぽい。いや、見たことなんてないけど……あの輝きとオーラ……間違いないのでは？　それに金田先輩の言ってた通り、森に差し込む陽光を浴びてまるで陽の光を全て受け止めているかのような姿……日摘み花っぽいぞ!?

「……う……す、す……すげえ！　やったぞ火祭、日摘み花を見つけたぞぉ！」
「うんっ」

きたきたきたぁ！　やはり言い伝えは本当だったのか！　ええ、私は最初から信じてましたよ。いやホントにマジで。やったぜ……俺達は幻の花と言われたあの日摘み花を……誰も見たことのないあの日摘み花を……発見したのだぁ！

「きゃあほおぉうっ！　万歳！　ついに見つけたぜ。おぉ、これが伝説の日摘み花か……なんて美しいんだ。まるでダイヤモンドのようだ！」
「あ……ねぇ、まー君……あの……」

ん？　どうしたよ火祭ぃ。俺はもう嬉しすぎて疲れなんかぶっ飛び

ましたぜ。今なら空も飛べるはず！

「その……私達、遭難中だよね？　あの……日摘み花を見つけたのはいいとしてここからどうするの？」

……ん？　……ん？　……ん？　

第１０６話　脱出

せっかくの日摘み花も状況が状況なだけに素直に喜べなかった。気を引き締めろ俺。とにかく歩け。もう時間がないんだから。日摘み花なんてほっといて森から抜け出さなくては！　……とは言っても……

「せっかく見つけたことだし、この花持っていこうぜ」

こんな貴重な花をみすみす置いて帰るのもなんかもったいない。せっかくなんだし、持って帰って春日達にも見せてあげたい。皆もきっと喜ぶぞ～。

「いいのかな？」

「いいのいいの。誰も見たことない幻の花だぜ？　記念に持って帰ってもバチは当たらんでしょ」

つーことで早速回収。神々しく輝く日摘み花に手を伸ばす……と、次の瞬間、

「うっ……な、なんだこれ……うぅっ！？　く、臭い！」

おうえぇぇっ！？　は、吐き気が……なんつー臭いだ。今までに嗅いだことのない異臭が鼻を襲った。ぐえぇ……鼻がひん曲がる……と、とてつもなく臭い！　なんだよこれ！？

「ま、まー君……もしかして……ごほっ、ごほっ……あの花が……」

あの鼻、いやいやあの花が……ってまさか日摘み花！？　嘘でしょ

……幻の花がこんな悪臭を放つなんて。いや、でも確かにこの臭いは日摘み花の方から漂っている気が……うえっ。気持ち悪い……吐き気がハンパじゃない。意識が飛びそうだ……。体が悪臭を拒絶している。これ以上はヤバイと警報が鳴る。自然と日摘み花から逃げるように足が動いていた。

「に、逃げるぞ火祭。しっかりつかまって！」

「り、了解……」

たまらず来た道をバック。うえっ……まだ臭ってきやがる。どんだけ臭いんだよ！　げえぇぇっ、気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪いぃぃぃっ！

「ぎゃあああああぁぁっ……何が幻の花だ！　ただのくせえ花じゃねーかー！」

ぜぇ、ぜぇ……うぷっ……気持ちわりぃ。悪臭から逃れるように森の中を全速力で駆け抜けた結果、完全に迷った。せっかく目印として木の枝に巻いておいたティッシュも、がむしゃらに走るあまり、まったく視界に映らなかった。またも遭難中。むしろさらに迷った。……どうすんのさぁ！？

「も、もう大丈夫かな？　かなり離れたと思うけど……まだ臭うね」

「あ、あんな臭いとはな。綺麗な花には棘があると言うけど、棘どころの騒ぎじゃないぞ」

もう最悪だ。無駄に走り回って疲れたし……ホントになんだよ日摘み花ぁ！　全部お前のせいだからなっ！　日を浴びたいなら森から出てこい引きこもりが！

「げほっ、げほっ……さ、さすがにしんどいな……」

「だ、大丈夫？」

体力的にも精神的にもズタズタのボロボロだ。今ならスライムごときの攻撃でやられる自信があるね。だ～が、弱音を吐くわけにはいかない……。

「大丈夫……火祭は俺が守ってみせる」

「まー君……」

とはいえマジで限界だ……火祭の前では装ってでもいいから強がりたかったけど……も、もう無……理……ぐはぁ……。

「……い。……ーい」

ん？　……どこからか声が聞こえる……この声は……米太郎。こ、米太郎！？

「おーい、おーい。火祭ー、ウィズ将也ー。いるなら返事してくれー！」

「こ、米太郎の声だ……お、おーい！」

最後の力を振り絞って懸命に声を張り上げる。き、気づいてくれ！

「あ、今さ兎月の声がしたよね？」

「そうか？　まあ確かに、米ちゃんカッコイイー！　とは聞こえた

ような……」
「どんな空耳アワーだよ！　俺だ、将也だって。耳に障害でもあるのかテメーは！」
「この声は将也！」
思わずツッコんでしまったわ。そして……た、助かった。米太郎達と合流できる。色々とあったが俺達は無事森から出れそうだ！
「やったな、火祭」
「まー君のおかげだよ。……ありがとう」
ガサガサと草むらが揺れる音とともに米太郎、水川、春日が現れた。うぅ、良かった。また皆と再開できたよ！
「無事か二人と、も……なんだそれ」
え？　ちょ、久しぶりの再開じゃないか。もっと嬉しそうにしてよ。抱き合おうぜ。何をそんな怪訝な表情しているんだよ？
「おいおいおい将也ぁ……なんだそれは」
「は、何言って……」
「なんで火祭をおんぶしているんだよぉ！？　イチャイチャしてんじゃねぇよ！」
「別にイチャついてないし。つーかそうだ。火祭が足怪我して歩けないんだ。今すぐ救急車呼んで！」
「いや、ここ孤島だし呼べないから」
「いいから何か医療班みたいなの呼んできてぇ！　火祭が怪我してるんだよ。一大事なんだから！」
「ちょ、将也うるさい」

そんなお前がうるさい！　火祭が怪我したんだって。これで落ち着いていられるか。必死になるでしょうがよ！

「とりあえず別荘に戻るぞ。ここから近いし」

え、そうなの？　がむしゃらに走っていたのがまさか正しい道だったとは。ラッキーですな。

「よし、それなら急ごう。火祭、もうちょいの辛抱だからな」

「うん……まー君ありがとう」

「気にしないで。さ、行きましょう。やいやい米太郎、さっさと案内しやがれ」

「うわ、将也がウゼェ。はいはい、こっちですよ」

ダラダラすんな。一刻も早く火祭に安静してもらいたいんだよ。早く、早く案内しやがれ。ほらスピーディに！

「……兎月」

不意打ちだった。いきなり春日が俺の服を引っ張ってきたのだ。おぉ、春日とも何時間かぶりの再開。春日も無事で何よりです。しかし今は火祭が最優先。

「とりあえず後でな。今は火祭が大事だから」

なのでローキックはご勘弁を。この状態で蹴られたりしたら、なんの抵抗も出来ない。文字通り、足から崩れてしまう。火祭を背負っているからそれだけはやめてくれ。

「ほら米太郎、さっさと歩け。そして俺達を導け」

「はいはい、と」

「……」

火祭を無事別荘に運び終え、やっと安堵の息がつける。つ、疲れた……。何時間も森の中を歩いたり走ったりさ迷ったり……しんどかった。我ながらよく歩き続けたなと誉めてやりたい。よくやった将也よ。アイラブミー。

「お前らあそこから落ちてよく無事だったな」

米太郎からジュースを受け取りつつベッドにダイブ。喉を駆け抜ける微炭酸の爽快感と心地好い程度の刺激が突き刺さる。たまらず一気飲み。くぅ～、美味すぎて涙が出てきた。炭酸の刺激がパネェっす！

「ぷぱぁ。やっべ、マジ生き返る！」

「……話聞いてる？」

「え？　ああ、はいはい。足を滑らした時は焦ったけど、なんとかなった。そっちも無事だったみたいで良かった」

「ふっ、そう思うか？」

……ん？　何かあったのか？　三人ともピンピンしていたけど。

「全く、ただの苦痛だったよ。水川も春日さんも俺のこと無視するし……どれだけ苦しかったことか！　将也と火祭の名前を叫んでも反応なし。一体誰が俺の声に気づいてくれるんだよ！　そのめっちゃ寂しかったんだからねっ」

そーいや米太郎は朝から水川に無視されてたな。さらに春日は基本無視だし。米太郎は米太郎で大変だったようだ。しかしそんなの俺と火祭が味わったものに比べたら天地の差。なめんな、お前に出口の見つからないダンジョンを歩き続ける苦しみが分かるか。セーブ出来ないんだよ。オカリナ吹いてワープ出来るようなゲームとは訳が違うんだよ。森の神殿なめんなこの野郎。ん？　森の神殿関係なくね？

「お前らとはぐれて俺達はすぐに狼煙を上げたんだ。んで将也達の救出活動が始まったんだが、まさか俺達が見つけるとはな」

「あ、その辺はどーでもいいわ。俺、寝るから晩飯になったら起こして」

「ひどっ！　ちょっとは俺達の救出エピソードも聞いてくれよ。もうプンプンっ」

「おやすみー」

「ま、将也も無視するぅ！」

第１０７話　ＢＢＱと書いてバーベキュー

軽く睡眠をとって気づけば晩ご飯の時間。さっき米太郎から聞いた話によると晩飯はバーベキューらしい。うお～、ザ・キャンプ。楽しみですな。

「兎月君、準備ができたから行こうか」

金田先輩が呼びにきてくれた。やった、バーベキューだ！

「今いっきま～す」

ルンルン気分で部屋から出る。外で食べる飯って格別に美味いんだよな～。

「兎月君、本当に申し訳なかった。僕があんな提案をしなければ……」

「もういいですって。それに金田先輩は悪くありませんし」

日摘み花を見つけようと提案したのは金田先輩だ。それで森に探しに行った俺と火祭が遭難したのは事故であり、金田先輩は全く悪くない。なのに金田先輩が自分のせいだと何度も頭を下げてくる。いやいや、いいですって。なんかこっちも恐縮です。

「申し訳ない」

「もう結構ですって。それになんやかんやで日摘み花見ることできましたし」

「それなんだよ兎月君。君と火祭さんはあの幻の日摘み花を見つけたんだ！　君達はすごいよ。やはり日摘み花は存在したんだ。伝承

通り、陽の光を浴びていたのかい？」

さっきまでの暗い表情がどこへ行ったのやら、パッと明るい顔になった金田先輩はガッツリ質問してくる。うおっ、どんだけ日摘み花に興味があるんですか。小学生みたいなキラキラした目ですよそれ。

「この特別な島にしか咲かない日摘み花。ああ、毎年ここに来る度に探していたが見つからなかった日摘み花。それが今年、兎月君達が見つけてくれた。こんな喜ばしいことはないよ！」

目を輝かせて金田先輩は熱弁しているが正直、俺はもう日摘み花なんて見たくない。確かにその咲く姿は美しく綺麗で見る者を虜にするが、その裏の顔ときたら……

「旅人が日摘み花を見つけ命を救われたと言い伝えられていたが、もしかして兎月君達も日摘み花を見つけたおかげで助かったのでは……？」

ある意味そうですよ。あの花から逃げるように走り回ったら米太郎達と合流できたのだから。

「やはり日摘み花は命を救う神秘なる力を持っていたのか……素晴らしい！」

確かに美しい花でしたよ。見たことのない花だったし、俺達の命も一応は救ってくれた。はい認めます。幻の花ですよ。ただ……

「兎月君もそう思うだろ？」

「はい、すごいですよね。鼻摘み花」

「……え？　いや、日摘み花だよ」

「いやいや、鼻摘み花ですよ」

あの花……ものすっごい臭いんだよ。うえええぇぇっ、思い出しただけで吐きそうだ！

金田先輩の熱い話を聞いているうちに（途中から受験勉強についてだったけど）庭に到着。既にバーベキューの準備がされていて後は焼くのみ。

「おっ、やっと起きたか将也」

米太郎達も来ているし八時じゃないけど全員集合……あ、火祭ぃ！

「火祭、足の怪我は大丈夫か？」

火祭は椅子に座っており、足には包帯が巻かれている。やっぱり捻挫だった？　だ、大丈夫？

「うん平気だよ。安静にしていればすぐに治るって」

「良かった……」

本当に良かったよ……！　うん、なんだか涙が出てきそうだよ。

「将也ー、焼くの手伝って」

「おー、分かった。よし、火祭はここで安静にしていてな」

やっぱ焼く担当は男の役目でしょうよ。バーベキューでシェフに焼いてもらうわけにはいかないし俺と米太郎と金田先輩が焼くのだが……

「おら米太郎！　なんで野菜しか焼かないんだよ。肉も入れろ」

この野菜馬鹿が作る串には肉が一つも入っていない。全て野菜だ。どんだけ野菜好きなんだよ。

「最近の若い奴らは野菜食べないからな。それはいかんよ」

「だからってオール野菜はやりすぎだろ。ベジタリアンでもちょっと引いちゃうって」

「これが流行りの草食系男子」

「意味が違うし！」

ああ、もう！　それお前が食べろよ。俺はちゃんと真面目に作るからな。

「早くしてよー」

待ちきれないのか、水川が急かしてくる。はいはい、今から焼くから少し待って。

「はい、お待たせしましたー」

良い感じに焼けてきたので皿に移して水川に渡す。なかなか香ばしい匂いがしてきた。食欲そそるよ。

「ありがと。ほら、恵にも」

ちょいちょいと春日を指差す水川。はいはい、ちょっち待ってね。ホタテやサーモンの魚介類を焼きつつ、手早く皿に盛りつける。うし、完璧。

「はい、春日」
「……」

相変わらずブスッとしてんな～。嫌いなものでもあったか。駄目だよ好き嫌いしたら。

「……兎月」
「わり、今ちょっと忙しいから」

何かクレームがあるなら後で受けつけますから。今はそれより先にやることがあるのさ。嬉しそうに焼き野菜を頬張る米太郎を弾き飛ばして、その奥の椅子に座る火祭のもとへ駆け寄る。

「はい、どーぞ」

火祭は動けないからな。俺が渡さないと。ちゃんと箸やコップも持ってくるというナイス気遣い！　我ながら素晴らしいと思う。

「あ、ありがと」
「どう？　美味しい？」
「うん、すごく美味しいよ」

そう言ってもらえるとこっちも嬉しい限りです。えへへ、なんだかニヤケてしまうよね～。

「なあ、将也達って日摘み花見つけたんだろ？　どうだった？」

「うーん、まあ綺麗だったよ。臭いは最悪だったけど」

何度も言いますが、めちゃ臭かったんですよ。悪臭レベルは限界値を超えていたねあれは。

「うおっ、実在したんだ。いいなー見れて。俺達は見つけられなかったからなー」

羨ましげにこっちを見るな。お前が思ってるほど良いもんでもないからな。臭いとか。あと臭いとか。それと臭いとか！

「ま、日摘み花を見たのは俺達二人だけの思い出ってことで」

「サラッと終わらせやがった！」

「サーモンのホイル焼き持ってくるよ。他にも欲しいものがあったら言ってね」

「うんっ」

火祭も機嫌良さそうだし、もう楽しくて仕方ないや。やっぱバーベキューは盛り上がる～！

「……」

楽しいバーベキューはあっという間に終わり、ただ今後片付け中。
自分勝手にバーベキューして後片付けはシェフの方々に任せるってのは心苦しいからね。

「ふぅ、食った食った。野菜は生で食べても焼いて食べても美味しいんだな。もう幸せ！」

結局野菜しか食べなかった米太郎。と思いきや、俺は見逃さなかったぜ。こいつがこっそり肉も食べていたところを。野菜大好きキャラだから肉を食べているところを見せたくなかったのだろう。こっそり食べてたよ。

「なあ米太郎、別に無理してキャラを押し通すことはないさ。お肉が食いたい時はお肉を食べなさい。素直になろうぜ」
「べ、べつに肉食べたいわけじゃないし」
「さっき食べてたじゃん」
「あ、あれは……その、肉が余っていて捨てるのもったいないから仕方なく食べてあげたんだからねっ。勘違いしないで！」

うわ、キメェ。男のツンデレほど気持ち悪いものはない。やめてくれ、吐き気がする。

「もう……許さないんだからねっ」
「やめろ気持ち悪い！」

ボディに一発ぶち込んだら米太郎は大人しくなった。そのまま来世まで大人しくしていろ。

「兎月ー、こっちは終わったよ」

「こっちも大体終わった。あとやることは……その水川の持っているゴミと米太郎の処理ぐらいだな」

後片付けは俺と米太郎、水川と春日の四人でしっかりやりました。金田先輩は受験勉強で忙しいから先に部屋に帰ってもらったし、火祭は動けないから椅子に座って待機している。それでもテーブルのゴミを集めたりと協力してくれた火祭は偉いよね！

「うし、ゴミ捨ては米太郎に任せるか」

「なんでやねん！」

さすがに米太郎もツッコミを入れてきた。なぜ関西弁なのかはさておき。

「なんで俺だけなんだよ。将也も手伝え」

「分かってるって。俺も手伝うから。ただ、その前に……火祭」

「え……うん」

火祭を部屋に送り届けないとな。足を怪我して歩けないから、どうにかして火祭を運びたいのだが……

「肩貸そうか？　それともまたおんぶしよっか？」

おんぶは非常に恥ずかしいが、ここにいるメンバーには一回見られたのでもう大丈夫だ。逆に堂々とやってのけてみせるぜ。

「えっと……その……」

ん、どうした？　何かもじもじしているけど……あ、やっぱ火祭は恥ずかしいか。そりゃそうだよね。つーか、おんぶ自体嫌だった

りして。あの時は仕方なく嫌々だったとか。そ、そりゃそうだよね……うん。何を調子乗っているんだ俺は。浮かれすぎだっての。

「あの……」

「い、いや…嫌ならいいんだ。水川と春日に手伝ってもらうといいよ」

「そ、そうじゃなくて。……その……」

頬を赤く染めて俯く火祭。んん？　俺はどうしたら……？

「えっとね……お、おお……お、お姫様抱っこ……っ」

……ん～……今ね、俺のね、耳がね、正しく機能していたならね……お、お姫様抱っこって聞こえたような……いやいや～、それはいやいや～……いやいや！？　さ、さすがに聞き間違いだよねー。どうした俺の耳、ついに病んでしまったか？　ははっ、聴神経がイカれちまいやがったよ。

「ご、ごめん、よく聞き取れなかった」

「……お姫様抱っこで……」

……ま、ま、ま、ま、ままま……マジでえぇぇっ！？　うえええぇぇっ！？　はいいぃぃっ！？　のはあぁぁぁっ！？　きゃあぁぁぁっ！？　いや、ちょ…ええぇ！？　はっきりと聞こえてしまったけど……今……お姫様抱っこって……い、言った……でえぇぇっいぃぃっ！？

「あ、あの……お姫様抱っこと言うのは……少女漫画とかでよく見かけるあのお姫様抱っこってこと……？」

「う、うん……」

……む、無理無理無理無理無理ぃ！　そんなの無理だって。お姫様抱っこはイケメンと主人公のみに与えられし特権ですよ。誰しもが軽々しくできる代物ではないって。俺みたいなヘタレ軟弱地味メン男がお姫様抱っこって……全然似合わないよ。

「ちょっとそれは無茶な要求……」

「え……」

はいその目禁止ーっ！　ぐうぅっ、そんな上目遣いされたら心揺らいじゃうって……こ、こっち見ないでぇ！

「まー君……お願い……」

はいズッキュンきた！　そ、そんな目されたら断れないよ。くっ、火祭って段々と小悪魔ちゃん的キャラになってきたな……それが良いことなのか悪いことなのかは判断つかないけど。

「ぐっ……わ、分かったよ。やればいいんでしょ、やれば」

腹括るしかない。ここで人生初、お姫様抱っこというものに挑戦させてもらいます。お、落ち着け……一回深呼吸しよう。リラックスだ。落ち着いてやればできるって。お、おお姫様抱っこなんて楽勝だぜ！

「……い、いくぞ」

「うん」

怪我した足に気をつけながら、火祭の両足と背中に腕を回し、持ち

上げる。うお、やっぱ火祭軽い。楽々と持ち上げれた……のはいいとして……や、やっぱり恥ずかしいー！　あ、あ、あああっ！？

顔から火が出そうだ。ファイアどころじゃないファイガだ。メラどころじゃないメラゾーマだ。顔から灼熱の炎が出るくらい恥ずかしいっ！

「ま、将也が……お姫様抱っこしてるうぅぅっ！」

米太郎が騒ぎだした。や、やめろ。さらに恥ずかしくなるからぁ！

つーか水川も春日もこっち見てくるしー！　む、無理無理、皆の顔まともに直視出来ないって。どんな顔で俺を見てるかなんて俺は見たくないッス！

「い、いこっか」

一刻も早くこの場から立ち去りたい。もうこれ以上俺を辱めないで！

「あ、待って。このままだと重いでしょ？　だ、だからはい」

そう言うと火祭は両腕を俺の首に回してきた。すると両手にかかる負荷はさらに軽くなり、より持ちやすくなったけど……けど……火祭の顔が一層近づいた……う、ううぅぅっ！？　めっちゃ近い、数センチ先には端麗で見惚れてしまう火祭の顔……間近で見るとめちゃくちゃ綺麗！　整ってるな～、お人形さんみたいだ。

「えへへ……顔近いね」

「そ、そうだな」

いやいや！　そ、そんな嬉しそう顔しないで。俺の理性がぶっ飛んじゃうから。か、可愛すぎるもん……火祭の真っ赤で照れながら笑

っている表情が可愛すぎるもん！　つ、つーか顔赤いのは俺もか。ものすごい顔が熱い！　火祭と二人、ただただ顔を真っ赤にしてもじもじする……や、やっぱ恥ずい！

「まるで王子様とお姫様だな。へいへい見せてくれるねぇ」

米太郎の茶化しがここまで嫌だと思ったことはない。こ、この野郎。こっちは恥ずかしくて失神しそうだってのに。

「ひ、火祭行くぞ！」
「うん……ゆっくりね」

ぐうぅっ！？　一瞬ぐらついた！　か、可愛い……超可愛い。キュンときて倒れそうになった。し、しっかりしろ。俺は火祭を部屋にまで運ぶ義務があるんだ。嬉し悶え死にしてる場合じゃない。ゆっくりと慎重に歩く。べ、別に火祭をより長い時間抱っこしていたいからゆっくり歩いているんじゃないからねっ。

「まー君……もっとゆっくり」
「え、早い？　こ、これ以上はもう停止する勢いなんだけど……」
「ずっとこうしていたいから……もっとゆっくり」
「っ！？　わ、分かった……」

頭クラクラしてきた。お、おかしいな……今日は酒飲んでいないのに。俺は火祭は今この時間をかみしめるかのようにゆっくりゆっくりと別荘に向かっていった。

「あいつらラブラブだな～」
「……佐々木」
「お姫様抱っことはな……くぅ～！　ありゃ将也も火祭に完全に惚れちまったかもな」
「だから……佐々木」
「うんうん、お似合いのカップルだよな」
「佐々木！」
「な、なんだよ水川。いきなり大声出して」
「……ちょっとは気を遣いなさい」
「何にだ、よ……あ……」

「……」

第１０８話　水川の説教

あ～……あー……幸せだった……。お姫様抱っこで無事に火祭を部屋まで送り届けた。いや～……ひじょ～に幸せな時間を過ごせました。幸せだったけど、それと同等に恥ずかしかった。今思い返すだけで赤面してしまう。うん、ああいった体験はもうないだろう。素晴らしき思い出として心に刻もう。そしてニヤニヤしよう。うふふ。

「にしても遅いな、米太郎の奴」

火祭を送り届けた後はそのまま俺と米太郎の部屋へ戻ってきた。キングサイズのベッドに身を預け、シミ汚れ一つない純白の天井を見つめてもう二十分。いくらなんでも遅すぎる。あの馬鹿な米太郎とはいえ、いくらこの別荘が広いとはいえ、迷うなんてことはないだろうよ。一体どこで何をしているのやら。

「風呂に行きたいのによー。あーあー、もう米太郎は置いていこうかな」

ずっと米太郎を待っていたが、もう待てないので一人で風呂に行くことにしました。あの馬鹿はもう知りません。一人で適当にタオルや着替えを袋に詰めていると、

「まっさやー」

米太郎登場。なぜか湯気が出ている。そしてツヤツヤとした肌と笑顔。

「おせぇよ。何やってたんだ」
「それはこっちの台詞じゃいボケェ。ゴミ捨てはどうしたよ」
……おぉ、忘れてた。そういやそうでしたな。火祭をお姫様抱っこしているうちに忘れてしまったよ。だってねぇ？　そんなの忘れちゃいますよ。頭からポーンッと飛んじゃいますって。
「それは悪かった。ごめん」
「うん、許してやろう。俺は優しいからな」
米太郎も許してくれたことだし、では行きますか。
「よっしゃ、風呂行こうぜ」
「あ？　わり、俺もう風呂は入ってきた」
「はあぁぁっ？」
なんで一人勝手に行ってんだよ。だからそんなホクホクと湯気立っているのかこの野郎。
「ゴミ捨てたついでにパパッと入ってきちゃった。ごめん」
「うし、絶対許さねえ」
「俺は許したのに！？」
知るか。ったく、こんなことなら俺も一人勝手に行っとけばよかった。
「じゃあ一人で行くわ」
「覗くなよー」

覗くか！　もう昨日の惨劇は繰り返しちゃいかんよ。つーか昨日のやつも全てはお前のせいだからな。

つーことで一人、風呂に浸かる。あー、極楽。この広い大浴場に俺一人だけ。この温泉を俺が独占しているのだ。きゃはぁ、なんて贅沢なんだろう！

「あー……疲れが取れるー……」

ジャグジーって気持ちいい～。泡の量と勢いがハンパねぇ。体全体が揉みほぐされるような、ちょうど良い感じの圧迫感……あはぁ。

「あー……暑い……」

サウナって暑い……ってそりゃそうか。なんだろ、この蒸し暑い感じは……全身の穴という穴から汗が吹き出している。うわぁ、汚い表現。これまた違う感覚の圧迫感だな。米太郎の奴はほんの数分で出てきたが、俺はそんなヤワじゃない。三十分は耐えてやるぜ。……む、無理ぃ！

「ぶはあっ」

サウナから勢いよく飛び出て水風呂にダイブ。うっひょー、冷たい！　あー心地好いー……米太郎と同レベルだ。

「ふぅ」

ジャグジーやサウナ、水風呂と楽しんできて残すはあと一つ……露天風呂です。昨日ちょっと入ったけど米太郎のせいで、じっくりとは入れなかったんだよな。まったくもって米太郎は邪魔ばかりする。ボケェ。よし、せっかくだし露天風呂に行きましょう。今日は森の中をさ迷ったせいで体の疲労がひどいからな。露天風呂で癒されましょう。混浴らしいけど昨日のこともあるから、あちらも警戒して露天風呂には来ないだろうし。だから俺はあえて行く！　覗こうとか微塵も考えてませんって。ただ単純に露天風呂を楽しみたいのです。

「はいレッツゴー」

扉を開けば勢いよく吹きつける夜風。うっ、寒っ！

「は、早く湯舟にぃ」

ユラユラと立ち籠める湯気へと飛びこむ！　ドボンッという音とともに全身を包みこむ温もり……あったけえ～……！

「ぶはっ」

体は湯舟に浸かり、顔だけが外気にさらされる。寒いようで温かい。不思議な感覚を星空と夜の神秘的な海が迎えてくれる。あぁ……露天風呂って素晴らしいよ。

「あ～……最高」

「あ、兎月」

……最悪だった。湯気でよく場が見えなかったが、いざ湯舟に入っ

てみると人影がくっきり見える。つーか顔もはっきりと。み、み、水川が先客で露天風呂に入ってました……あわわわわっ！？

「ぎ…ぎ……ぎゃあああぁぁぁっ！？」

金切り声のような擦り切れる高音の叫び声を上げる、俺。

「普通逆だよね！？」

水川のツッコミにも頷ける。だが、こっちの事情にも頷いてもらいたいです！

「ち、違うんだ。これは決して覗こうとしたわけじゃないんだ。単純に露天風呂を楽しもうと……」

ヤバイヤバイヤバイ！　また昨日みたいな惨劇起こっちゃうよ！朝まで目覚めないほどの痛みはもう食らいたくない……！

「これはマジで事故なんだ」

「ふ～ん……言い訳はそれだけ？」

「み、水川」

本当に事故なんだって！　信じてよぉ。旅行最後の夜を気絶して迎えたくないんだ！　うぅ……

「冗談だって。兎月は佐々木みたいな悪友と一緒じゃないと悪さしないもんね」

た、助かった……さすが水川、俺のことよく分かっているよ。

「あ、ありがとうございます。では私めはこれで……」
「待てい」
イソイソと退散しようとしたら水川にガッと肩を掴まれた。きゃあ
あっ、水川の生手が俺の生肩に！　うひゃあああぁぁっ！？
「な、何かまだ？」
「せっかくだし一緒に入ろ」
なっ……む、無理無理。それは無理ですって。米太郎なら奇声を上
げて喜ぶかもしれないが純真ピュアチェリーの俺は違うって！　そ
んなの耐えられません。
「そ、それは無理」
「まーまー。裸の付き合いということで」
「それが無理なんだって！」
は、裸って……裸ってえぇぇっ！　今は後ろを向いて水川の姿を確
認してないが、ま…ま、間違いなく後ろを振り返れば……そこには
……裸の……全裸の水川がいるってことでしょ！？　い、いやあ
あぁぁっ！？　無理だって、理性が持たないって！　理性の壁なん
て簡単に壊れちゃうよ。俺の奥底に眠る野獣が目覚めてしまう。夜
の月に向かって雄叫び上げちゃうよ！
「さーさー、座って」
「うっ……無理……」
「ここで私が叫ぶとどうなるかな～？」
！？　こ、こいつはやはり悪魔か。そんなのされた時には全員が俺
を責めるに決まってるじゃないか！　別荘にいる女性全員が俺をゴ

ミ虫のように蔑むことだろう。そして火祭が回復した暁には……っ、意識を奈落の底へと沈める最強の拳が……はぁぅあぁぁ！？

今度こそマジで死んじゃうって！

「こ、この性悪女め……」

「女子に向かってなんて暴言。キャー、兎月が襲ってくるー」

「ごめんごめんごめん！　分かった、分かったから。だから大声出さないで。俺が世間から抹消されてしまうから！」

「じゃあ一緒に入ろ」

……で、入ることになっちゃいました。水川と（たぶん）背中合わせで湯舟に浸かる。全身を癒すお湯、宝石のように輝く夜空と月、耳に届く海のせせらぎ……どれこれも緊張して満足に味わえない。だって女子と一緒に風呂に入るなんて初体験なんだもん。こんなの緊張しない方がおかしいよ。う、後ろを振り向けば……そこには全裸の水川が……ううぅぅっ！？　理性がぶっ飛ぶぅ！

「あ、私ちゃんとタオル巻いているから安心して」

まるで俺の心を読んだかのように水川がそう言ってきた。よ、良かった、少しだけ気持ちが落ち着いた。ふぅ、リラックス。……そっか、タオル巻いてるのか……はっ！？　いかんいかん、何を残念に思っているんだ俺は！　変態か俺は！　落ち着こうよ、冷静になろうぜ！

「変なことしないでよー？　ま、ヘタレの兎月なら大丈夫だと思うけど」

「あんまり嬉しくない信頼のされ方だな」

「ちゃんと信頼してるからいいじゃん」

「はいはい」

「……」
「……」
「……」
「……」

ん？　なぜに沈黙？　別に変なことは言ってないぞ。なのにどうして沈黙が……それにそんな気まずい空気でもないし。つーか水川と会話して気まずくなったのなんてほとんどないのに。何この静けさ。

「……」
「……」
「……えっと、火祭の怪我は大丈夫？」
「ちっ……うん、今はベッドで安静にしているよ。早く良くなるといいね」

ごく普通の返し。最初の舌打ちを除いて。ちょ、なぜに舌打ち？
俺、今何かまずいこと言いましたか？

「……」
「……えっと、水川一人？」
「はぁ……そうだよ」

今度は溜め息かよ。何が言いたいのですか。なんか、水川の機嫌がよろしくないような。

「……」
「……一人か……春日は？」
「やっと出た！」

うおっ、びっくりした。突然大声を出したかと思いきや、背中に衝撃が。痛い。け、蹴りやがった！？

「何すんだよいきなり！」

思わず振り返ってしまった。ぬあっ、そこには眉間にシワを寄せた険しい表情の水川が。うわー、怒ってる……。あ、やっぱタオル巻いているのか……って、あかんあかん！　残念がるな俺！　はい前を見ろ。もっかい背中合わせ！

「やっと……やっと恵のこと言ってくれた。遅い！」

「はあ？」

「兎月……恵のことほったらし過ぎ」

は……どゆこと？　春日をほったらし？　……んん？

「おっしゃる意味が分からないんですが……」

「……この期に及んでまだシラを切るか！」

「だから意味分からんって！」

一体なんなのさ！

「……兎月さ、今回の旅行でどれだけ恵と行動した？」

「は？」

「ずっと桜と一緒だったでしょ。昨日の夕食も桜と二人だけで盛り上がってさ。今日も日中は事故とはいえ、桜と二人きり。バーベキューの時だって兎月は桜にかかりっきりで恵は無視してばっか。……ふざけるなぁ！」

「ぶっ、お湯をかけてくるなよ」

やめてぇ！　息する間もなくお湯をかけるのやめて！

「げほっ、げほっ、苦しい」

「恵はもっと苦しいんだからね」

「つーか春日をほったらしって……そんなつもりはないぞ」

春日とも普通に接していたはずだけどな。ただ色々とあって火祭といた時間が多いのも確か。それでも水川がギャーギャー騒ぐことでもないと思うぞ。

「こ、の馬鹿が……！　私は恵と桜、両方の味方だから兎月問題に関しては平等に何も口出さないって決めてたけど、もう我慢できない。恵にはアンタがいないと駄目なのよ！」

馬鹿呼ばわりされ、聞いたことない兎月問題という訳分からん問題の張本人にされ、意味がさっぱりの発言に頭はもう混乱状態。春日には俺がいないと駄目？　なんですかそれは。

「別にここなら春日のパシリはしなくてもいいし、命令を聞いてくれる金田家の従者さん達がいるでしょうよ」

「そんなことを言ってんじゃない。ああ、もう！　すごいイライラする！　大声で叫びたい！」

「それはご勘弁を！」

俺が世間から抹消されてしまうからぁ！

「……恵は兎月が一緒じゃないといけないの。そうじゃないと恵は楽しくないの」

俺と一緒じゃないと……？

「恵は兎月がいるからこうやって旅行に来てくれたんだよ。朝の挨拶運動やボランティア活動も兎月がいるから恵は参加してくれたの。全ては兎月がいるからだよ！」

「は……え、ちょ、何言って……」

「恵は兎月といる時が一番嬉しそうにしているんだよ。楽しそうしているんだよ！　私や桜といる時とは違う、特別な気持ちで兎月と一緒にいるの」

ちょっと待って水川。そ、そんな一気に喋られたら頭が追いつかない……。

「なのに兎月ときたら、ずっと桜ばっかに構っていて恵のことは後回し。……もう言っちゃうけど、今日だって森を探検していた時、恵は本当に疲れていてアンタにおんぶしてもらいたかったの」

あ……やっぱりそうだったのか……。

「だけど兎月と桜は遭難しちゃって……これは事故だからしょうがないけど。兎月達とはぐれた後、私達は兎月達を探してたの。恵も疲れているのに兎月達が心配で懸命に探したのよ。自分だって疲れていてフラフラなのに。で、見つけた兎月は桜にかかりっきりで自分には何も言わないし、相手してくれない。そんな恵の気持ちも少しは考えてあげて！」

「っ……」

そうだったのか……。確かに水川の言う通り、俺は火祭を心配するあまり、春日のことをないがしろにしていた。春日だって俺達を探してくれていたのに。なのに俺はそれに対してろくに感謝の言葉も言わないで……。

「バーベキューの時も桜にかかりっきり……極めつけはあのお姫様抱っこ。恵がどんな気持ちでそれを見ていたか分かる？」
「あれは火祭が怪我していたから。それに春日はお姫様抱っこしてくれなんて言ってないんだろ？」
「問答無用！　そーゆーことを言ってるんじゃない」
い、痛い！　だから背中蹴るのやめい。
「恵は兎月と一緒にいる時が一番楽しそうにしているの。だからこの別荘に来てから恵の楽しそうな姿はほとんど見てない。兎月と一緒じゃなかったから見ていないの！　アンタのせい！」
「な……」
「兎月が恵のことを一番理解してあげれるんでしょ。恵は辛いんだよ、兎月がいないから。兎月がいないから恵は辛そうなの」
「……」
「馬鹿なりにちょっとは分かった？　恵のことも少しは考えてあげなさい」
「……うん」
本当に俺って馬鹿だな。いつも春日に無視するとか文句たれていたのに、今日は俺が春日を無視していた。春日だって色々と考えているけど、それを口に出すのは少ない。でも俺はそれを理解できるじゃないか。春日が喋らなくても分かるじゃないか。なのに今日は……春日を全く見ないで分かろうとしなかった。だから春日は何度も俺に話かけてきたんじゃないか。あの無口の春日が何度も俺の袖を引っ張って話しかけようとしたじゃないか。それだってのに俺は……ああ、俺の馬鹿！　こんなんじゃ下僕失格だぞ。
「ごめん……」

「謝る相手が違う。ほら、さっさと上がって」

後ろから水川が湯舟から出る音とお湯の波が俺に当たる。

「八時半にさっきのバーベキューした場所に来て。絶対にだからね」

「み、水川？」

「私は余計なお節介はしたくなかったけど……恵と桜には平等に兎月チャンスを与えたいからね。ごめんね桜」

「だから兎月チャンスって何？　さっきの兎月問題といい何か俺に関係したこと？　兎月関係！？」

そのまま謎の発言を残して水川は去っていった。最後はよく分からなかったな。なぜか火祭に謝ってたし。でも……色々と気づかされたな。ホント、危うく下僕失格のところだった。何やってんだか。

「よし……俺も上がりますか」

第１０９話　ローズクォーツ

ただ今、八時半。現在地は先ほどバーベキューをした場所。夜になると外の気温はちょっとばかし下がったようで、ひんやりとしている。夜風が心地好く吹き抜けて風呂上がりの身にとってはかなり快適です。ジーパンと半袖のシャツに薄い上着を着たラフな格好で俺はある人を待っている。というか水川に言われてここに来た。……俺の予想が正しければここに来るであろう人物は気配もなく俺の背後に現れ、何も発せず無言で蹴ってくるだろう。そう、俺の予想する人物ならば。

「……」
「痛い！」

足に激痛が走った。ガクンと足から崩れるように地面にうずくまる。痛ぇ……せっかく温泉で全回復したＨＰゲージが急激に減った。誰かに蹴られたのだ。てことで俺の予想は的中したようです。

「……」
「か、春日」

後ろを振り向けば、そこには春日お嬢様の姿が。夜風に吹かれてなびく長髪がキラキラと美しい。いつもながら惚れ惚れします。そして無表情。不機嫌っぽく見えるのはいつものこと。

「……」

はい無言。ここで「お待たせっ」と可愛らしく言われたらズキュンとくるのにね。全く残念ですよ。ははは！

「……」
「……あ～……えっと……」

あー……水川に言われた通り、ここに来て春日と会ったはいいが……ここからどうすればいいの？　そこの指示も水川に聞いておけば良かった。つーか水川本人は来ていないのかよ。呼んだ水川が来てないってどうよ。

「……」
「えっと……春日も水川に呼ばれてきたんだよな？」
「……真美が、兎月が呼んでるって」

なんか微妙に違うし。俺が春日を呼んだことになってるよ。どうしてそんなことしたの水川ちゃん。

「……違うの？」
「う……いや、まあ……そうなのかな？」

しかしここは水川の策略にハマっておきましょう。俺が呼んだことにしておく方がなんか俺が男らしいしね。……って、そういうところが男らしくないよね、うん。

「……何？」
「え、え～っと……そうだな……あの……」
「早く喋りなさい」

がっ！？　またもローキックが……痛い！　なんつー短気。少しは待つということを知らないのかよ。俺はいつもあなたが口開くのを待ってますけど？

「す、すいません。えっと、今日はありがとうな。俺達のこと探してくれて。春日も疲れていたのに頑張ってくれたんだよな」
「……別に」
「本当にありがとう。それと……」

んー……これは言うべきなのか？　……水川が言うには、春日は俺といる時が一番楽しそうにしているらしい。だから俺がいないと春日は駄目……らしい！　確定じゃないよ。それに俺はそうだと思ってないから。けど俺自身は春日と一緒にいる時間が一番充実していると思っている。春日といると安心するというか何というか……落ち着けてかつ楽しいみたいな？　まあそれは置いといて。俺のことはともかく、春日がどう思っているのかは分からない。水川の発言を鵜呑みにするのもどーかと思うが、俺なんかより水川の方が達観する目を持っていることだし、水川の言ったことを信じましょう。俺が春日のことに気にかけれなかったことは事実だし、謝るべきだ。

「っと……今日はごめんな。春日と全く話せなくて」
「別に」

そ、そうですか。そ、そうですよね。そりゃ春日からしてみれば、お前は何様だと言ったところか。別にアンタと話せなくても私は何とも思わないから。そういったオーラをバンバン出してくる春日。う、上から発言してすいません。

「そ、そっか。あの……春日はそうじゃないとしても……けど、俺は、春日と喋れなくて寂しかった」
「……」
「だからこうやって春日と話す機会を作」
「嘘」

「……へ？」
「嘘つき」

突然春日が口を開いて割りこんできた。そして俺のことを嘘つき呼ばわり。は、はえ？

「え……嘘つきって……なんだよいきなり」
「……兎月の嘘つき」
「いやいや、俺は嘘ついてない……はず」

あ、もしかして……春日を呼んだのは水川なのに俺が呼んだって嘘ついたことか。それは……それについてはごめんなさい。素直に謝ります。男らしくない俺ですいません。

「兎月……寂しそうじゃなかった」

しかし春日はそこを言っているわけではないようだ。じゃあ一体何？　何が嘘つきだと？

「……桜とずっと一緒で楽しそうだった」
「火祭と……ん、まあ楽しいか楽しくないかと聞かれたら楽しかったけど」
「……ほら、全然寂しくない」

……え、えっと……春日……怒ってる？　なんかピリピリしているというか、不機嫌だというか。……うーんと……なんだろこれ。春日はいつも不機嫌そうにしている。その普段の不機嫌な感じとは違って、なんだろ……むっとしているというか怒ってるというか。こんな春日を見るのは初めてかも。なんだろ、この感じ。

「あの……もしかして春日……拗ねてる？」
「別に」

投げたボールは勢いよくピッチャー返しで打ち返された。俺が言い終えると同時に否定してきたよ。う……やっぱ怒ってる。怒っている、のかな……？　よく分からないけど、なんつーか……よく分からない。つまりまとめると機嫌が良くないのは分かった。

「っ……と、とにかく俺はこうやって春日と話せて嬉しいよ」
「嘘」
「ホントだって」

とりあえずニッコリ笑ってみたが、春日は相変わらず仏頂面。水川さん助けて。やっぱり気まずいよ。

「……」
「いやまあ、その……せっかくだし、その辺りでも散歩しよっか？」
「……嫌」

はい終了。瞬く間に拒絶された。う……どうしましょう？

「ま、まあそう言わずに。ほら星も綺麗だし、こんなの滅多に見られないよ」
「……」

星ってこんなにあったのかと驚くほどに夜空は星で埋め尽くされていた。住んでいる地域ではこんなに見れないよ。まるで宙に散りばめられた宝石のようだ。

「俺と話すのが嫌だったら無視して空を眺めていたらいいし、ちょ

っとだけ付き合ってよ」

「……」

無視は肯定の表れ。俺が勝手に解釈したルールに従い、春日の了承をもらったことにする。つーことで散歩スタート。雲一つないキラキラと輝く空を見上げつつテキトーにぶらぶらと歩く。……後ろから春日がついて来て……いる……はず。全神経を後ろに集中させれば（おい星はどうした）、微かに人の気配を感じ取れる。良かった、ちゃんとついて来てくれている。ここで春日に帰られちゃあ、俺はただ一人外で黄昏れているイタイ男になるところだった。

「うおー、綺麗だな」

こんなに綺麗な夜空は見たことないよ。感動するよこれは。どれがデネブでどれがアルタイルとかよく分からないけど、とにかく綺麗だ。星ってこんなに眩しいものだったんだな……一つ一つの放つ光りは微弱だけど、それがたくさん集まるとキラキラと大きく輝いている。ここで流れ星も見れたら最高だよな～。

「……」

「……」

俺も春日も黙ったまま歩き続ける。うーん、何か話したいけど春日はどうせ無視するし、今はさほど気まずくないので黙々と夜空の美しさに感嘆するのみです。そうして歩いているうちに森が見えてきた。……森に咲く日摘み花が鼻をよぎったので慌てて方向転換。あー、ヤダヤダ。もう日摘み花とは会いたくないよ。

「お～、海か」

空を眺めつつ森から離れるように歩いてると海辺に到着。月に照らされた海は神秘的でどこか恐ろしくもあった。闇の世界って感じ。うわ、中二かよ。海の雰囲気はがらりと変わっていたが、波の打ちつける音は昼と変わらず悠々と涼しげだ。夜の海も綺麗だねー。

「お、意外と波が強いな。あんまし海岸沿いには近づかない方がいいよ」

「……」

もちろん無視。まあ、無視していいって言ったし構わないけどね。海沿いを歩く砂を踏む音が後ろから聞こえるのでついて来ているのは確かだ。振り向いて確認はしてないけど。

「お、あれが夏の大三角形かな？　うーん、よく分からないや」

「……」

「……」

「……」

「……ふあ～」

「……」

「……」

「……兎月」

「ん？」

びっくらこいた。なんと春日から話しかけてきたのだ。うへぇ、まさかのまさかですよ。一体どうしたのだろうか。

「……」

「どしたの？　言っとくけど、どの星がどれとか俺も分からないから」

「そんなの興味ない」

おいおい、そんなの興味ないって、ひどいね。天体観測へのアンチテーゼか。じゃあ一体なんだよ。

「……」

「……」

喋らない。呼びかけといて喋らない……。それはちょっと困るって。俺はどうしようもないじゃん。

「……」

「……とりあえず、どこか座ろっか」

立って待つのもアレだし春日は歩き疲れたのかもしれないので座ることにします。海岸沿いは濡れているので海から少し離れた砂浜に腰を下ろす。

「……」

少し間が空いた後、春日も隣に座った。体操座りで二人仲良く空を見上げる。第三者から見ればカップルに見えるかもしれないが実際は主人と下僕ですので。もちろん下僕は俺。

「星空が綺麗だよなぁ。ほら、空のどこを見ても星だらけ。こんなのここでしか見られないって」

「……」

「記念に写真でも撮ろうかな。あ、でも携帯のスペックじゃ画質粗いからなー。星は写らないかも」

「……」

「今回の旅行で写真ってあまり撮ってないよな……日摘み花もせめ

て写真だけでも撮っておけば」
「うるさい」

そう言われちゃあ、こちらは黙るしかないじゃないすか。うーん、大人しく星を眺めるか。こうしているだけで、なんとなく心地好いし。隣に春日が座っていると考えると気も落ち着くし。

「……」
「……」
「……」
「……ねぇ」
「……なんでしょう？」
「……」

……？　ま～た、それですか。呼びかけといて喋らない。春日の王道パターンの一つだ。ここは待っているのがベスト。下手な口出しはローキックを招く。

「……」
「……」
「……」
「……なんでもない」

ないんかい！　これだけ溜めておいて何もないって……芸人だったらひな壇から永久追放されているぞ。

「ああ、そう……」
「……」
「……お、今のって流れ星じゃ……」

一瞬、夜空に一つの白銀に光る線が見えた。おぉ、流れ星だよ。すげー……見たの初めてかも。

「なあなあ、流れ星だぜ！　うはっ、まさか本当に見れるとは」

「……見てない」

え？　見てない…って……まさか流れ星見てないの！？

「何してんのさー。流れ星なんてそうそう見れるものじゃないんだから。あーあ、もったいない」

「うるさい」

痛い痛い、抓らないで。本当に痛いから。あー、残念だね……いやホント流れ星とか滅多に見れたものじゃないよ。地域によっては数分に一回は見れるとか言うけど、そんな頻繁に落ちてくるものかね。あんまし大量に流れ星が見れると願い事もたくさん叶っちゃうよ。お、そうだ。流れ星と言えば願い事。

「春日は流れ星になんて願い事する？」

「……」

流れ星が見えているうちに願い事を三回唱えたらその願い事が叶うとはよく聞く話。そして実際に叶ったという事例は全く耳にしない。所詮は迷信なのか、それともあまりの難易度の高さに成功者が誰もいないのか。「モテたい」ぐらいの短いワードの願い事ならなんとか三回言えそうな感じだけどなー。「国を、大地を、世界を、そして人を……この世の全てを我が手中に！」だと無理だけどさ。というか、そんな台詞を三回も言いたくない。てことで魔王志望の方に流れ星チャンスは向いていない。

「どう？」
「……別に」

そして春日にこれといって願い事はないらしいです。ま、お金持ちだからなー、欲しいものはなんでも買えるってやつか。ちょっと恐ろしげな黒いカードでオールオーケー。カード払いって憧れるよね。だけどさ、世の中お金で買えないものもあるんだよ。そうプライスレス。例えば思い出とか、青春とか……そういった心に残るものは紙幣じゃ買えないんだよ。うん、今とても良い事言った。

「……兎月は？」
「へ？　俺の願い？」
「そ。……あるの？」

うーん、願い事ねぇ……まずお金が欲しい。あと新しいゲーム機と新作ソフトもいくつか欲しいし、あと最新のテレビも買いたいね。それに新築の家も建てたい。うわー、物欲ハンパないな俺。いやらしいわー。んーと、物欲じゃなくてさっきのプライスレスで考えると……

「そうだな……やっぱ皆との思い出とか。そーゆーのって今じゃないと手に入らないからさ」
「……そ」
「ま、それって欲しいから手に入れるってものでもないけど。欲しがらなくても自然と気がついたら持っているみたいな、皆といるだけで勝手に増えていくような……そうやって大切な思い出は溢れるように増えていって心にいつまでも残るんだと思う」
「……」
「だから今こうやって春日と二人で星を眺めているのも大切な思い出として一生心に残ると思うんだ。春日は嫌かもしれないけど俺に

とっては、かけがえのない大切な思い出なんだよ」
「……」
「つまり俺にしてみれば流れ星に向かって舌を噛む勢いで願い事を早口三回唱えなくても、こうしているだけで願いは叶っているってこと」

こういうのって口に出すことじゃないよね……うーん、でもこれが俺の本音です。願いです。皆に堂々とは恥ずかしくて言えないけど、春日一人にだけなら言えます。誰にも言わないでよ？

「皆と一緒に共有する貴重な時間、楽しい思い出。それって今でしか手に入らないじゃん。まさに今この瞬間。それなら叶うのかどうか分からない流れ星を待つくらいなら今を楽しまないとな」
「……そ」
「そうなのさ。ま、俺の訳分からん話は終わりとしまして……つーことで一緒に写真撮ろうよ」
「……なんでそうなるの」

ははっ、まあまあ、いいじゃん。そんな怪訝な顔しなさんな。さっき言っていたことと違う？　まあまあ。

「思い出に残すのも写真に残すのも同じくらいに大事だと思わない？　心に刻むとはいえ、やっぱ形に残せるものは残しておきたいじゃない」
「……」
「ほら、そんな嫌そうな顔するなよ。こうやって写真を撮ることも思い出になるからさー」

春日が何を言おうがお構いなし。俺は写真が撮りたいのさ！　この島に来て、まともに写真なんて撮ってないもん。……何か記念に撮

りたいじゃん！　できることなら春日達の水着姿を撮りたかったけど……それはもう叶わぬ願い。それに関しては来年もう一度拝めるよう流れ星に願ってもいいかもしれないね！

「ほら、笑って」
「うるさい」

携帯のカメラを起動。辺りは暗いのでライトを点けて撮影準備完了。あとは押すだけなんだけど……

「えー……そんなに嫌かよ」
「……」

隣の春日はしかめっ面でカメラを見ようとしない。そこまで写真撮るのが嫌か……あ、俺と一緒に写るのが嫌だったりして。それってショック！

「なあ頼むよ、一枚だけでいいから一緒に撮ろうぜ」
「……」

……これは駄目っぽいな。はぁ……一人で写っても悲しいだけだし……もうぶっちゃけて言いますが俺は春日と一緒に写真が撮りたいです！　そしてこっそり待受にしたりして……それはやりすぎ？

「う……駄目？」
「……」

無言は肯定の表れ、と言いたいけど春日はどう見ても嫌がってるし……というか恥ずかしがっている？　なんにせよ写真はＮＧみたいです。こればっかりはしょうがない。無理矢理撮るなんて嫌な奴の

することだし、潔く諦めますよ。

「代わりに夜空でも写メるか……」

携帯を上空に向けてプッシュ。カシャリと軽快な機会音とともにフラッシュがパッと光る。撮影完了……保存……あー、やっぱり星は写ってないか。真っ暗だよ。何にも写ってねぇ。

「けど心にはしっかり保存できたことだし良しとしましょう。そろそろ戻ろっか」

結構長いこと外にいたようだ。あんまり遅いと皆が心配するかもしれないし、そろそろ別荘に戻らないと。もうちょい春日と一緒に天体観測をしていたい気もするけど。

「……」

「春日？　ほら、戻ろうよ」

俺と同じ気持ちだったりして。まだ星を眺めたいとか？　最初は嫌がってたくせにー。やっと星の良さが分かってきたのかな。うん、星って綺麗。

「……撮る」

「へ？」

「……写真撮る」

……今……もしかして……写真を撮るって言ってくれました？　そ、それってつまり俺と一緒に写真を撮ってくれる……ってこと!?

「え……いいの！？」
「早くして」
うん、そりゃ。春日の気が変わらないうちに撮らないとね。
「どうやって撮る？　やっぱ海をバックにして……いや暗いから写るかな？　それより別荘を後ろにした方が……あ、セルフタイマー使ってみようぜ」
「うるさい」
蹴られた。シンプルに蹴られた。はしゃぎ過ぎってことですね、ごめんなさい。足の痛みは後回しにして急いでカメラの準備を！
「じゃあタイマーは十秒にして……はいオッケー！」
結局、海岸沿いは暗く携帯のライト程度では写らないので明かりの点いた別荘近くまで移動。手すりに良い感じに携帯をセットしてタイマー起動。はいもう残り十秒、時間がない！
「うし、ばっちり」
時間がないと言ったが十秒ってのは結構余裕ある。人間十秒もあれば百メートル走れるし、色々とできるものさ。それならボタンを押して移動するなんて造作もないこと。そしてこんなこと考えているうちに残り五秒くらい。
「ほら、笑って」
「……」
「だからこうやってニッコリとして。はいパルメザンチーズ～」

普通にチーズで良かったよね。しかし春日は全く笑おうとしなかった。そしてカシャリと撮影……どうなったことやら。

「……うわぁ」

携帯の画面にはピースして、にへらぁと笑う俺と……無表情の春日。二人のテンションが対極すぎてまるで明暗のコントラストのよう。どんな感情でカメラ見てんだよ。友達と写真撮る時の顔じゃないよこれ。いつもの春日ではあるけどさー。写真で無表情って……履歴書に貼るつもりですか。

「春日ぁ、少しは笑うとかしないと。見る人によっては心霊写真になるって」

「うるさい」

「だ、だから蹴らないで！　よし、もう一回撮ろうぜ。今度は笑顔で」

「戻るわよ」

テイク2は駄目らしい。まあ……一応撮ってくれたことだしそれだけでも感謝しないと。これが春日と初めてのツーショット写真……うん……た、大切な思い出……のはず！

「春日にも送っとくな」

「戻るわよ」

そればっか。イエスかノー答えてからにしてよ。

「はぁ……はい、送信したから。保存するなり削除するなりどーぞご自由に」

「戻るわよ」

……流れ星よ、このお嬢様が人の話を聞くようにしてくれませんか！

第１１０話　ラストは苦い顔

ふぁー……あー……あぁ……あ～……

「今日で終わりか……」

代弁ありがとう米太郎。名残惜しげにベッドで転がる米太郎、そして部屋に広がる朝の暖かな日差し。ついに……ついにとうとう二泊三日のお泊りも最終日を迎えてしまったのだ。あー……はあー。

「なんか……もっとここにいたいよな」

「来年も来ようぜ」

来年は受験だろ。たぶん遊べないぞ。それにここの別荘は金田先輩のものであって、お前のものじゃない。そこを履き違えたらいかんよ。

「……起きるか」

「そうだな……」

まるで夏休み最後の日かのようなテンションの低さで俺達は着替えを始める。夏休み自体はまだまだ続くが、なんかもう気分的には全て終わった感じだ。だって、また補習も始まるし……宿題の追加もあるし……嫌だぁ、まだこの楽園生活を満喫したいよ。

「おはようございます兎月様、佐々木様」

食堂に来れば金田先輩の執事、中井さんが出迎えてくれた。中井さんとも今日でお別れ……一昨日、昨日と俺達の面倒を見てくれてあ

りがとうございました。以前、あなたとバトルしかけたことなんて水に流しましたよ。良い人なんだもん、この人も。

「朝食の準備ができております。さ、どうぞ」

中井さんに先導されてテーブルに座る。すでに朝食を食べている春日、水川、火祭……おぉ、火祭。

「足の調子はどう？」

「うん、大分良くなったよ」

おぉ、良かった……！　もしも悪化なんかしていたりしたら……とりあえず日摘み花許さねぇ。今すぐ摘みに行ってやる。

「……」

そんでもって春日はこちらを睨んでくるし……昨日のこと怒っているのか？　……やっぱ写真が嫌だったのだろう。

「つーか水川はなんで来なかったんだよ」

「え、何のこと？」

しらばっくれるつもりですか。

「だから昨日、水川が春日を呼ん」

「あー、あれね。兎月が露天風呂で覗…」

「ストーップ！　それはマジで勘弁してください！」

や、やめてぇ！　それを今ここで暴露されたら俺は社会から抹消されちゃうよ。あれは単なる事故なのに……水川の発言次第で俺は犯

罪者になりかねないよ。

「んー、じゃあ言わないであげる」

「助かる……」

「そのかわり……兎月が一発芸を」

「またそれかよ！　ここに来て何回したことか。実は水川、ちょっと俺の一発芸気に入ってない？」

絶品の朝食を食べ終えて、ついに……この島とのお別れが……！

「嫌だ嫌だぁー！　まだここで遊びたいよー！」

子供のように駄々こね出した米太郎。床でじたばたと暴れている。うんうん、その気持ちはよく分かる。分かるけどさ、でもしょうがないんだよ。お別れはいつかやってくるもの。それをどう受け止め、どう堪えるかが人を大きく成長させるも……の……っ

「嫌だ嫌だ嫌だぁー！」

「将也もそう思うよなぁ。一緒にここで永住しようぜ！」

「早く準備しなさいよ」

米太郎と二人抱き合っていたら水川に思いきり蹴られた。だってさー、こんなリゾート地でバカンスなんて……後世でもありえない貴重な体験だよ。

「ほら、さっさと荷物運ぶ」

「……はーい」
「へーい……」

ズルズルと荷物を引きずって部屋を出る。あー……さよならキングサイズのベッド。さよなら……うぅ……。

「別にいいじゃん。兎月達がお金持ちになって孤島を購入して別荘を建てれば、いつでもバカンス出来るよ」

水川よ、それが出来ないから今こうやって嘆いているのです。サラッと言いますが、お金持ちなんてそうそうなれないから。そんな簡単に夢が叶ったら世の中はケーキ屋さんとプロ野球選手で溢れかえっているよ。

「やあ、ここでの生活はどうだったかい？」

未練タラタラそしてダラダラ名残惜しげに別荘を後にして海岸沿いに来れば上品スマイルの金田先輩が立っていた。先輩が羨ましいねー、毎年ここに来れるのだから。

「これで全員集合したかな？」

春日も火祭もいることだし、全員いますよ。あ、火祭は松葉杖している。早く治ることを祈るばかりだよ。

「この三日間まるで夢のような楽しい時間を過ごせました。本当にありがとうございました」
「喜んでもらえて何よりだよ。また呼んでもいいかな？」
「是非！」

お前が答えるな。米太郎じゃなくて俺に聞いてきたんだからな！
ちなみに俺の返答も、是非！

「中井さんもありがとうございました。シェフや他の皆様方も」

俺達の面倒を見てくださったスタッフの方々にもちゃんとお礼を言って、あとはクルーザーに乗って島を出るのみ。嗚呼、さよならプライベートビーチ。またいつか会える日を夢見て……。

「せっかくだから写真撮ろうよ」

お、ナイス発言だよ水川。そうだよね、せっかくだし記念に写真撮ろうよ。ね、春日！

「いいけどさ、マミーはカメラ持ってんのかよ」
「マミー言うな、お米太郎が。本格的なのはないけど、ほら携帯で撮れば」

そう言ってマミーこと水川は携帯を取り出して……すぐに鞄に戻した。そして春日の方を向く。

「どうせなら高性能のカメラがいいでしょ。なら恵の携帯で撮ろう」

なんだその安易な発想は。お金持ちだから携帯も高級なものを持っているみたいな？　別に携帯はそこまで変わらんでしょうよ。

「私の？」
「うん。恵の携帯で撮って皆に送信すればいいでしょ？」

はいはい、ナイスアイデアですね。

「あの……俺、春日さんのアドレス知らないんだけど……」

……ドンマイ米太郎。お前に写真が届くことはないだろう。お前だけ心のシャッター押しとけ。

「ほらほら、携帯貸して」

奪うかのように春日から携帯を撮る水川。強引すぎるでしょうよ。

「佐々木には私から送るから、まずは恵の携帯で撮っ……ん？　これは……」

突然ニヤつきだした水川。春日の携帯を嬉しそうに見つめている。

「っ！　ま、真美」

それに呼応して春日が慌てたように水川から携帯を奪い返す。ど、どうしたんだ急に？　何か携帯に見られてはいけないものでも？

「あらあらぁ恵ぃ～……どうしたのその待受は～」

「べ、別に」

ニヤニヤする水川と何やら焦っている春日。おいおい、二人だけで盛り上がらないでよ。俺や火祭も混ぜてよぉ。

「兎月ぃ、良い表情しているよ」

「は？　俺？　何が？　良い表情……別に今は普通だと思うけど……え、ちょ、意味分からん」

「そうだよねぇ、恵ぃ」

「真美っ」

ちょ……そっちで勝手に盛り上がっているけど俺には何のことやら……その春日の携帯に何かあるんですかい？

「なあ、俺にも携帯見せて」

「こっち来るな！」

「ぐっ！？」

い……痛ぇ！　ぐうぅぅっ、腹があぁぁっ！？　悶絶するほどの激痛が腹から全身に走り抜けるぅ！　いってぇ……な、何をそんな思いきり蹴ることがありますか！　つーか腹を蹴るなよ。ガチでゲロりそうだった……がはっ、げほっ！

「な、なんだよ……ぐふっ！」

ま、また蹴ってきやがった。今度は足を……ダメージ蓄積量がハンパない。たった二発のキックで倒れそうです。

「本格的に痛ぇ……」

「何やらかしたんだよ将也」

俺は何もしてないっつーに。水川が春日の携帯を見てニヤニヤして、春日がそれを見て慌てだして、俺が春日の携帯を見ようとしたら春日に蹴られて。ほら俺は何も悪くないぞ。このお嬢様が勝手に暴れているだけだい。

「だ、大丈夫まー君？　とにかく写真撮ろうよ」

さ、サンキュー火祭。俺の心配をしつつ話を元の写真撮ろうに戻し

てくれて。なんて気遣い力。女神ですよ、ヴィーナスですよ。

「それなら僕の携帯で撮ろう。中井、頼む」

「かしこまりました」

金田先輩が携帯を取り出して中井さんに指示を出す。そして素早く反応した中井さん。

「では撮りますので、並んでください」

おぉ、海が背景になって良い感じ。さあ、並びましょう。

「俺が真ん中な。そんで右は火祭で春日さんは左。俺の懐に水川で将也は徐々にフェードアウトだ」

せめて写らせてくれよ。それだとテメーのハーレムじゃねぇか。そしてなんだよ徐々にフェードアウトって。動画ならまだしも画像だからな、フェードアウトできないから。

「佐々木は一番端っこね。そしてダブルピースでブイブイしとけ」

「それって一番ウザイ奴じゃん！」

そうだな。でもそれが米太郎らしい。

「まずセンターは金田先輩でしょ」

「な、なんだかアイドルみたいだけど……僕が真ん中でいいのかい？」

「いいですよ～」

まあ、金田先輩が呼んでくれたのだから先輩が真ん中でしょうよ。

少なくても米太郎がセンターよりはマシですから。

「桜はどこにする？」
「私はまー君の隣で」

サラリと嬉しいことを言ってくれますね。ニヤニヤしちゃいそうなのを必死に堪える。

「じゃあ金田先輩の横に桜で、その隣に兎月。その兎月の横に恵の立ち位置で」

……水川さん、どうして春日を俺の隣に？この娘は無表情で人を蹴る人ですぜ。隣にいたら間違いなく俺の足はタダじゃ済まないよ。

「反対側に私と米太郎ね」
「俺の懐に水川」
「まだ言うか。こっちが笑っているうちに治せよ、クソお米が」

水川の冷たい視線は春日のローキックに匹敵する。それを食らった米太郎は半泣き状態で大人しく水川の隣に落ち着いた。さて、こっちは……

「まー君」
「あ、松葉杖はない方がいいぞ。いつか見た時に『あれ？　火祭さん松葉杖しているけど、怪我していたの？』みたいになってしまうから」
「そう？　それなら……」

火祭は松葉杖を使用人の方に渡す。しかし松葉杖なしだとバランスを取れない。フラフラと危なげな火祭がこちらを見る。

「まー君、肩貸して」
「いいよ」

すると火祭は俺の肩にもたれかかって……というか俺の腕に手を回してきた。まるで彼女が彼氏にするような感じのやつ。心臓が世界新並に跳ね上がった。

「あ、あの……火祭？」
「こうしないと倒れそうだから」

いや、あの……はあ、そう言われちゃあ、こちらは何も言えない。別に嫌ってわけじゃないけどさ、なんか……こう……恥ずかしいよね。舞い上がりそうなくらいテンション上がってるけどさ。嬉しくて天に登る勢い。でもやっぱ皆も見ているから……恥ずかしいよね！

「……」
「……ん？　春日？」

「おいおい……また春日さんが可哀想なんじゃ……」
「……ふふっ、もう大丈夫だって」

……？　反対側の米太郎と水川が何やらごにょごにょ言っているけど、どうかした痛い！？

「ぐっ、背中がぁ……！」

ど、どうした春日ぁ！？　なんでいきなり背中を抓ってくるのさ。皮膚がえぐれるぅ！

「どうしたのまー君？」

「な、なんでもない」

火祭に心配かけさせるわけにもいかない。激痛を押し殺して無難な笑みを浮かべ……ちょっと無理がある。痛い痛い痛い痛い。ほらね、だから春日の隣は嫌だったんだよ。いきなり意味もなく人を抓るなんて、暴力以外の何物でもないから。ぐうううぅぅ、背中がとめどなく痛い！

「では皆様、『はい、チェダーチーズ』で撮影しますので、準備を」

携帯を構える中井さん。それをピースと笑顔で迎える他の皆。そうでないのは俺と春日だけ。春日は無表情、俺は苦しげな歪んだ表情。い、嫌だよ、こんな引きつった顔で写真に写りたくないって。でも背中が痛くて笑顔が出来ない。つーか、出来たら俺はドMさん決定。マゾって意味で。

「か、春日……離して」

小声で春日に懇願するも、春日は表情一つ変えずに抓り続ける。なんなら、さらに力を加えてきやがった。ダメージ限界突破。なんか背中が軽く痙攣してきたぞおい！　これヤバイって信号ちゃうんか！　い、痛い……とりあえず痛い。ヤバいよ、このままだと背肉がもげちゃうって！

「では、いきます」

うっ、もうすぐでシャッターが押されてしまう。ちょっと待って中井さん。俺の笑顔はまだ準備出来ていないよ。ま、待って、この楽しかったバカンスを良き思い出として残すための写真だってのに、俺はただ苦い顔しているんですって。嫌だ、この顔で写真に写りたくない。うおおおおおお、こうなったら仕方ない。もれなく絶賛背中えぐられ中だが、笑ってやる。写真に写るからには笑顔で写らなくてどうするんだいってわけさ！　ぐっ……わ、笑え、笑うんだ俺！　今この瞬間だけはドMに目覚めるんだ！　この痛みを快感だと脳内変換しろぉ！

「では、いきますね。はい、チェダーチーズ」

「む、無理だぁ！」

こうして二泊三日のバカンスは苦渋の表情で幕を閉じた……。

第１１０話　ラストは苦い顔（後書き）

今回で『真夏のパラダイス』編は終わりです。

またいつもの学校生活へと戻ります。

第１１１話　夏の補習再開

暑さもピークを迎える八月中旬、常にクーラーを稼動させておかないと全身がアイスのように溶けてしまいそうなくらい暑い。室内ならクーラーでうふふ～快適～なのだが、外となると話が変わってくる。真上にはギラギラ輝く太陽がいやらしくもその存在感を出している。やめてほしいものだ、それはただの嫌がらせです。さらに上から熱するだけでは飽き足りないのか、太陽はアスファルトと提携を結んで下からも人を焼き尽くすという非道な行為にも手を出しやがった。おかげで汗ダラダラだ。汗で濡れたシャツが肌にひっついて気持ち悪い。ペダルを漕ぐ両足は油の切れたブリキの玩具のようにギギギッと苦痛な悲鳴を上げて、疲労が蓄積する。自転車はフラフラと右にブレたり左にブレたりしながら日差しを全反射する坂道を懸命に上る。そして、その自転車を操縦する俺から後ろに座るお嬢様に一言申し上げたい。

「春日……もう自転車通学やめない？」

「早く行きなさい」

「はい」

……あー……しんどい。

楽しい休みも終わり今日から地獄の補習が再スタート。憂鬱以外の何物でもない。また計三時間にも及ぶ悪夢のような数学、英語、国語の授業があるなんて……軽く登校拒否したくなるぐらいだ。しか

も夏にやった授業の内容は二学期の中間考査に出すってよ。つまり中間テストは莫大な範囲……ははっ、なんかもう逆に笑えてくるよね。

「おはよう将也、今日も元気モリモリてんこ盛りでいこうぜ！」
「お前のテンションは逆に笑えねぇな」

春日を無事に送り届けて今は教室で隣の米太郎とダラダラとしている。俺って米太郎と一緒にダラダラしていることが多くね？　もっと他の友達とも会話しなくては。

「いやー、しかしクラスの皆たいして変わってないな。誰か一人くらいデビューするかと思ったのに」

つまらなさそうな米太郎の声を聞き流しつつ教室をぐるりと観察。確かにこれといって皆さん何も変わっていない。数名ほど肌が焼けている奴もいるけど米太郎が言うような髪を染めたりとか耳にピアスみたいなことをしている奴はいない。

「残念だなー、金髪とか期待していたのに。誰か高校デビューしてくれよ」
「二年生になってする奴なんていないだろ。それにうちの学校って進学校だから、そういうのって厳しいじゃん」

髪を染めるなんて言語道断。タバコだなんて見つかったら即停学。停学とか不良とセットでつくワードじゃないか。あー、恐ろしい。

「将也は髪染めたりしないのか？」
「絶対にしねーよ。髪の毛がなんか傷つきそうだし」
「それは残念だな。将也って茶髪が似合いそうだぜ？　そしたら女

子にモテまくりだろうに」
「……大学生になったら染めるかも」
「意志弱すぎるだろ」

そりゃモテるってなら髪も染めますしタバコ吹かすしピアスもしてやるさ。人生モテることが第一優先だろ……って、モテない男ほどこういうこと言うんだよなー……ああ、いと悲し。

「そういう米太郎は染めたりしないのかよ」
「俺は今の黒髪が一番似合っているしカッコイイもん。もう完璧だし～、へっへっへ」
「逆の逆に笑えねぇ」
「それって元から笑えないってことじゃん！」

お米がうるせー。しかし、茶髪ねぇ……とりあえず今は無理だよなぁ、学校側が許さないし。茶髪で学校来る奴とか見てみたいよ。学校側が公認しちゃったりして。

「あ、予鈴が鳴った」

米太郎と馬鹿な話をしているうちに朝の休み時間は終了。もうすぐ授業が始まってしまう。あーあー……別荘でのバカンスは楽しかったな……あれはまさに楽園。そしてこれは現実。なんという高低差であろう。高低差ありすぎて耳キーンとはならないが、この差にはさすがに落胆の色は隠せませんって。前回までバカンスをエンジョイしていたのに今は教室で補習ですよ？　すげーよ落差が。野茂のフォークくらい落ちてるって。嫌だ耐えきれない……と言いたいが、ここはもう我慢するしかあるまい。こうなることは休み前から分かっていたことじゃないか。それをここへ来てまで落ち込んでどうする。受け入れようではないか、この平凡なる高校生の正しい在り方、

あるべき姿を。さあ今日からまた補習頑張りましょう。

「って無理ぃー！」

「おら兎月、休み明けからうるさいぞ。ではホームルームを始める」

はぁ、嬉しくない再会だよクソ担任。そして再開する授業……あ、今のって上手くない？

……疲れた。計三時間にも及ぶ壮絶な戦いがやっと終わった。次々と襲いかかる数式、英単語、七言律詩、睡魔の強者達。久しぶりの授業に緩んでいた脳は叩き起こされ、気分体調ともに最悪だ。さらに帰りのホームルームでは新たに宿題が追加された。うわ……もう死にたい。……いや、やっぱ死ぬのは嫌だ。天寿は全うしたい。幸せな余生を過ごしたい！

「さて、帰るか」

部活も休みだし、特にこれといった用事もない。宿題はまた春日や火祭に頭を下げて教えを乞うとして、今日はさっさと帰ろうかね。こんな暑い日は部屋に閉じこもってゲームをするに限る。生まれた意味を知るＲＰＧが俺を待っているぜ！

「じゃなあ将也ー、それと春日さんも」

弓道部のナタリ……じゃなくて米太郎は今から部活らしく、早足で教室から消えていった。そういや米太郎って弓道部だったな。夏の大会は最後一本を外してしまい惜しくも、とか言っていたような。にしても相変わらず放課後になると元気だなおい。数学の授業、教師に当てられて引き算のところで間違えてクラス中から笑われた奴のテンションとは思えない。しかし、教師から「小学生からやり直してこい」と怒られて、「人生をやり直したいです」の返しには感服したぜ。座布団を一枚上げたい。……ん？　今……米太郎の奴、春日さんも……とか言ってなかったか？

「……」

「うおわぁっ！？」

後ろを振り向けばそこにはお美しい春日の姿が。いやいや……ここ二組の教室ですよ？　あなた……いつの間に入ってきたんだよ。そしていつの間に俺の背後に回ったぁ！？

「……」

「え～っと……あのさ、いきなり後ろに立たれるとびっくりするからさ、今後は一言何か言ってくれないかな？」

「帰るわよ」

その一言がそれですか……はぁ。だいたい春日の返答って「帰るわよ」とか「別に」か「うるさい」だもの。インコの方が多くの言葉知っているぞ。しかしインコより春日の方が断然可愛いのさ！　……インコと比べなくてもよかったな……すいません。

「帰るわよ」
「はいはい」

ちゃんと聞こえてますって。二回も言うなよ～。というわけで春日と下校しまーす。朝と同様、自転車で春日を送り届けなくては。今はちょうどお昼。気温が一番高い……なんか嫌だなぁ。学校行きたくないは何度も思ってきたけど、学校から帰りたくないと思うのはあまりないよ。うあー、もう暑いもん。教室から出たら一気にムワッと蒸し暑い空気が体に纏わりつく。廊下にもクーラーつけようぜ。なんて現代っ子な馬鹿発言だろう。

「帰るわよ」
「わーかったって」

はいはい、暑くて苛立つ気持ちは分かりますよ、俺も同じ気持ちですから。だからってそんな急かすなよ。

「まー君っ」
「ん？」

誰だ、俺のことをまー君と呼ぶのは。そんなの一人しかいない。そう、

「火祭」

火祭しかいない。まるで恋人だけが言ってくれるような、くすぐったい呼び方。まー君だなんて……嬉し恥ずかしい。なぜか火祭は俺のことをまー君と呼んでくれるのだ。俺的には火祭の彼氏気分さ。そんなわけないのにね……。

「もう帰るの？」
「もう帰るのだ」
後ろのお嬢様が急かしてくるからさ。
「桜はまだ帰らないの？」
お、春日が火祭に話しかけたぞ。そっか、この二人って仲良くなったんだったな。最初の頃は睨み合っていたのにねー。一ヶ月前のことなのになんだか懐かしい。あの時のメモリーが頭をよぎ……確か俺って軽く死にかけたような？
「今から図書委員の仕事があるの。夏休み期間中に貸し出されている本の数のチェックをしないと」
「忙しそう」
「でも楽しいよ。本もたくさん読めるし。そういえば、この前紹介した本はどうだった？」
「面白かった。続編はある？」
「図書室にはないけど私が買ったのがあるから明日持ってくるね」
「ありがと」
……え……な、何こ、れ……？　春日と火祭……なんか普通に楽しげに話してる。ちょ、なんかすごいトーク盛り上がってるし……春日はあんなペラペラと喋るところなんて俺は今まで見たことないぞ！　俺と火祭では接し方が違うのね。うぅ、悲しい。
「そういえば、まー君は真美から聞いているよね？」
「……何を？」
やっぱ春日は俺のことなんか下僕としてしか見ていないのか……は

ぁ。……ん？　……今……なんでそんなこと思ったんだ俺？
別にそれでいいじゃん。俺は春日の下僕、それ以上の関係はいらない。……なのに……どうして俺は今、主従関係に嘆いたのだろうか……むっ、何を言っているんだ俺は……？

「返事しなさい」
「痛い！」

春日のローキック！　痛みと衝撃に耐えきれず片膝をついてしまう。

「痛ぇ……なんだよ急に」
「桜を無視するな」

え、火祭何か言っていたのか？　それは聞いてなかった俺が悪い。

「ごめん火祭。で、なんだっけ？」
「まー君、足大丈夫？」

春日に蹴られた俺を気遣ってくれるのかい？　あなた……やっぱり女神だよ。

「大丈夫だよ、もう慣れたから。で、何か言ったんでしょ？」
「え、うん、今週の日曜日にお祭りがあるの。だから皆で行こうって真美が言ってたよ」

へぇー、お祭りか。そういや毎年、この時期になるとあったよな。皆で行くのか……うん、素晴らしいアイデア。発案者の水川に称賛の拍手を！

「まー君も来るよね？」

「勿論。春日も来るよな？」
「……」
「恵も来るってさっき言ってたよ」

ああそうだったの。……それでも無視することないじゃん。いつまで経っても無視と暴力なんだよなぁ……なんだろ、この気持ち。……春日といる時が一番楽しい。だから俺は下僕で春日と一緒にいる。それでいいと思っていた。けど……なんか……うーんと、それだけじゃない何かが胸の中で燻っているというか……なんか歯痒いというか……どう表現したらいいんだろ？

「無視するな」
「無視したのはそっち、って痛い！」

……駄目だ。足の痛みで余計に分からなくなってきた。はぁ……。

第１１２話　祭りと言えば浴衣

ワイワイガヤガヤ。今、俺の眼前に広がる光景を擬音で表現するとしたらこうだ。大勢の人々がわらわらと辺りをうごめき、その両端にずらりと並ぶ屋台、屋台アンド屋台そして屋台。りんご飴、綿菓子、焼きそば…と食欲そそる魅力的なお店ばっかりだ。そこら中から良い匂いが鼻をくすぐる。子供のはしゃぐ声と人の喧騒が茜色に染まる空を埋め尽くす。

「将也ぁ、焼きとうもろこし買ってきて」

「別に買わなくてもテメーん家の畑燃やしたら大量にできるだろうが」

「デンジャラスにも程があるわ！」

人でごった返す大通りの外れにある小さな公園。その公園のアーチにもたれかかる俺と地べたに座る米太郎は賑やかな祭り風景を眺めていた。今日は町の夏祭りの日。大勢の人が足を運び、屋台は忙しなく賑わい、まさにお祭り騒ぎ。ここの公園でも子供達がくじ引きで手に入れた名もなき玩具で無邪気に遊んでいる。

「くじ引きかー、昔よくやったよ。ゲーム機欲しさに何度も挑戦したけどハズレばっかり。あれぜってー当たり入ってないだろ。きたねーよ大人は」

「そうだなー。子供から金を巻き上げる酷い行為だよな」

「俺が金持ちだったら、くじ全部買い占めて店の不正を暴いてやるのに。そして俺は子供達から称えられるであろう！」

もし本当にゲーム機が当たったらどうするんだよ。くじ全部買い占めたお前は子供達から罵詈雑言の批判を浴びることだろうよ。

「にしても……腹減った」

この地域一番の大きなお祭り。そんなちょいビックなイベントに俺は別に米太郎と二人きりで来ているわけではない。米太郎と二人で来るぐらいだったら来たくもないね。家でテレビ観てるよ。とにかく、あと三人いるのだが……

「遅い……」

「ホント遅いよな。将也ぁ、俺もう待ちくたびれたよ」

ここの公園に集合するはずなのに、まだまだ来る気配はない。待ち合わせ時間はもう過ぎているぞ。

「なんか俺と将也っていつも待たされている気がする。これって男の使命？」

「そういうことにしとこう。女性ってこういうのに手間かかるらしい」

お祭りといったら毎年男子グループで回っていた俺だが、今年は違うぜ。なんと女子と一緒に祭りを楽しめるのだ。なんと嬉しいことでしょう。サンバを踊りたい気分。

「準備で忙しいのか。ってことは……浴衣！？」

そうなんじゃない？　そうじゃないなら他に何の準備があるのだろう。

「春日の家であれこれしてるらしいぜ。で、前川さんがここまで送ってくれるって」

「春日さん達の浴衣姿か～……くぅ～、楽しみで仕方ないよ！　ウハウハっ」

この馬鹿にはもう声が届かないみたいだ。やれやれ、そんなに春日達の浴衣姿が見たいのかよ。……俺も見たい！

「春日さんに火祭に水川。この美女三人娘が浴衣を着れば……その威力は予想すら出来ない！　俺の裸眼スカウターが吹っ飛ぶぜ！」

米太郎のテンションが高い。奇妙な声と動きで人間離れの崩壊したミュージカルを演じている。滑稽で珍妙な光景。遊んでいた子供達が蔑む目でこちらを見てきた。やめて、俺は同類じゃないから。名もなき玩具を武器のように構えないで。

「兎月様、佐々木様。お待たせいたしました」

公園すぐそばの道路には一台のリムジ～ンが。そして窓から顔を覗かせる春日家の専属運転手の前川さん。お、やっと到着したようです。いや～、前川さんお久しぶりです。前川さんとは何度も会っているので、もはや友達だよね。電話番号とアドレスも知っているし。それにお互いに春日に仕えている。ある意味戦友？

「では私めはこれで。恵様をよろしくお願いします」

お任せください。下僕の私めが必ずお守りします、と。そして車の中から現れたのは……な、なんということだ……！

「あ、ありえねぇ……！」

米太郎の掠れた声。その気持ち、俺も分かるぞ。だ、だって……今、

俺達の目の前には……天女が三人もいるのだから！

「お待たせー」

水川……ショートの髪がいつもより輝いて見えるのは気のせいか！？　朝顔の花模様が散りばめられた藍色の浴衣が水川にマッチしているぅ！　似合ってるっ！　あれ？　水川ってこんなに可愛かったっけ！？

「どうかなー？」

「も、もう完璧だにょ水川。みゃ、みゃるで天使のよぅだょ！」

米太郎もテンション上がりすぎて何言ってるか分からないくらい舞い上がっている。その気持ち、分かります！

「まー君、お待たせ」

「……」

そして……そして……そしてぇ！　この二人もすごいぞ！　キラキラ数値が常軌を逸している……あまりの美しさと眩しさに目が潰れそうなくらいだ。そんなオーバーな表現でも彼女らの美しさは伝えきれない！

まずは火祭。緋色の明るい浴衣にはたくさんの桜の花びらが鮮やかに舞い散っている。そして火祭の艶やかな長髪は頭の後ろで結ばれ、なんと……ポニーテールになっているではないか。髪型の違いでこうも雰囲気が変わるものなのか……超似合っている！　やはり、浴衣というものは女性を一段と美しく見せるものなのだろう。普段と違う雰囲気の火祭に頭がクラクラしそうだ。浴衣が似合いすぎる……グランプリものだよ。

「ど、どうかな？」
「も、もものすごい似合ってるよ。うちゅくしきゅて直視できにゃいくらぃ」
だあああぁぁあっ、俺もカミカミじゃねーか！　お、落ち着け俺ぇ！
「……兎月」
そ、そして春日……もう半端ない！　い、いや……その……マジで可愛すぎる。ピンク色のかなり派手な色彩なのになぜか落ち着いた印象を受ける浴衣姿。雰囲気、気品……全てが統合し一つの純粋な美しさとなって春日を包みこんでいるような、こちらをうっとりさせる。春日が春日であってそうでないような……本当に可憐で綺麗だった。常にキラキラしているような……。サラサラの長い黒髪は後ろで結われて綺麗にまとまっており、頭につけられているピンク色の蝶のような飾りがアクセントとなって可愛い。いつものキツイつり目に思わず魅入ってしまうのはなぜなんだろうか。すげー……心臓が早鐘のようにひどく手荒に打ちつけ、体は硬直。ただひたすらに春日を見つめることしか出来ない……はぁあうぅはぁっ！？
「……」
「ほら将也。春日さん、お前が何か言うの待ってるぞ」
米太郎の耳打ちなんか頭に入ってこない。つーか入れたくもない。今、俺の頭は目の前の春日を魅入るので精一杯なのだから。
「……兎月」
っ！　春日の声……一声聞いただけで脳がぐらりと揺れ、手足に電流が流れたように痺れる。心臓は夜泣きする赤ん坊のようにのたう

ち回り、まともに呼吸出来ない。頭が熱を帯びたかのようにぼーっとして思考が停止、体が硬直する。な、なんだろ……この気持ち。

「へへ～、この前三人で買いに行ったの。どう？　恵なんて最高に似合ってるでしょ」

「……」

「兎月？」

「……うん、春日……すごく綺麗」

「っ！？」

本当に可愛い。ぶっちゃけ春日がダントツで一番可愛いと思う……本当にずば抜けて痛い！？

「ぐっ、いきなり殴ってくるなよ」

春日が俺の肩をポカポカ殴ってきた。トリップしていた脳が現実世界へと引きずり下ろされたような感覚。春日がひたすら殴ってくる。ふ、普通に痛いから！

「ちょ、痛いってば」

「……」

春日…なんか顔赤いし。あれ？　俺……なんか変なこと言ったっけ？　見惚れていて何口走ったか覚えていないよ。ヤバイ、下ネタは言ってないと思うんだけど。

「痛っ、だから痛いって」

「……馬鹿っ」

いきなり馬鹿って……本当に何て言ったんだよ俺。春日が顔を真っ

赤にするほど恥ずかしいこと口にしてしまったのか！？

「ははっ、さすがは将也。シンプルイズベストだな」

「そうだねぇ～」

何やら水川と米太郎はニヤニヤしだしたし……ムカつく。あいつらがニヤニヤするとなんかムカつくんだよな。俺を馬鹿にしてる感じがして。というか絶対馬鹿にしてると思う。

「まー君！」

「んあ！？　ど、どうしたの火祭」

グッと俺に迫ってくる火祭。うおっ、顔が近いよ。ドキドキしちゃうって。ポニーテール可愛い。

「恵にだけなんてずるい。私にも言って」

「な、何を？」

「今、まー君が恵に言った台詞」

「……えーと……だから痛いって？」

「その前！」

その前と言われましても……

「いや……正直、春日に見惚れていて何言ったか覚えていな痛い！？」

またも春日が殴ってきたよ！　もうなんなのさ。また変なこと言ったかな？　……よく分からないよ。

「おー、今日の将也は一味違うな」

「そうだねぇ」
「まー君！　早く！」
「……馬鹿」

ああぁっ！？　もう訳が分からないぞ！　どいつもこいつも自分勝手に言いやがってぇ！　だからニヤニヤするな水川と米太郎。そして殴らないで春日ぁ！

第113話　エンジョイ夏祭り

色々あったけど、とにかく俺に水川、春日、火祭、ついでに米太郎の五人で屋台を見回ることに。まあテキトーにぶらぶらと歩きつつ気になるものがあったら見てみようぜのスタイル……なのだが、

「うわ、多過ぎるだろ……」

人がたくさんいて思うように前に進めない。毎度のことだが、やっぱ人多い！　何をそんなワラワラと押しかけてくるのやら。それは俺らも同じだけどさ。

「はぐれないように注意しような」
「将也ー、焼きとうもろこしはどこあるんだよ」

返事がそれかよ。どうやら米太郎は本当に焼きとうもろこしが食べたいらしい。いつでも野菜大好きキャラで押し通すってか。肉も食うくせに。

「知らねーよ。そのうち見つかるだろうさ」

そりゃあそうでしょ。だってこんなにたくさん屋台があるのだから目当てのお店なんてすぐ見つかる。道の両端を埋め尽くすかのように屋台がぎっしり。たこ焼き、クレープ、くじ引き、ラムネ…と、どれもこれも魅力あるものばかりだ。あ、くじ引きはいいや。高校生にもなって、くじ引きするのは恥ずかしい。とにかく様々なお店が並んでいてどれも興味深い。匂いにつられてお腹も減ってきた。さーて、何食べよっかなー？

「あ、りんご飴だ～」
「ホントだね」

水川と火祭の楽しそうな声。何か食べたいものでも見つけました？
りんご飴のお店の前で立ち止まる水川。りんご飴美味しいよね。
買うのかな？

「兎月ぃ、りんご飴買って～」
「なんで俺がマミーのために三百円払わないとならんのだ」
「マミー言うな。こういうのって男の人が奢るもんでしょ？」

そうなのか？　米太郎にアイコンタクトで尋ねてみたが、「焼きとうもろこし」としか返ってこなかった。使えねぇ奴。

「嫌だ。彼氏に買ってもらえ」
「それなら……桜、恵ー。兎月がりんご飴買ってくれるよぉ」

おいおい水川ぁ！？　なんでそーなるの！　俺は火祭とも春日とも付き合ってないっつーに。

「え、ホント？」

ぐあっ……そんなキラキラした目をしないで火祭さーん。もう断れないじゃん。

「う、うん……こ、こういうのって男が奢るもん……らしいから」

しょーがない、買いますか。はいはい、それくらい出せますよ。りんご飴を奢ることで男らしいところを見せれるならこれくらいの出費どうってことありません。

「すみません、りんご飴ふた」
「三つで」

……水川ぁ、なんでお前の分も俺が……いや、もういいか。へいへい払いますよ、払えばいいんでしょ。

「まいどありー」

てなわけで三人の美人さんにりんご飴を奢りました。総額なんと九百円。なんてことだ、くじ引きを三回も引けるではないか。

「ありがと～」
「まー君、ありがとっ」
「……」

三人も喜んでいるようだし、こっちも嬉しい限りですよ……はぁ……俺も何か食べようかな。というか何か食べたい。

「将也く～ん、俺にも奢ってよぉ」
「テメーには絶対奢らん。つーか焼き鳥食べてるし！」

いつの間にか米太郎は焼き鳥を買って美味しそう頬張っている。てめ、この野郎！

「焼きとうもろこしはいいのかよ」
「それも食いたいけどさ。ほら、ネギも食べたかったし」
「だったら肉のところは俺によこしやがれ」
「嫌だね！　俺は野菜が特に好きなだけであって別に肉が嫌いなわけではないんだよ！」

「テメーこの野郎ついに本性現しやがったな！　これでお前の野菜キャラもおしまいだ」
「キャラじゃねーよ。やんのかこの野郎」
「上等だコラァ」

野菜コンビもこれで解散だ。あーあ、清々しいね！

「野菜と肉、両方食べて何が悪い」
「悪くねーよ。それだったら普段から野菜野菜うるさく言うな。キャラ作りに必死だなおい」
「キャラじゃねーし。将也の矮小な脳が勝手に俺を野菜大好きキャラに仕立てあげたんだろうが。俺自身が望んだことではない」
「それなら教室で見せびらかすように野菜食べんなよ。草食ぶりやがって」
「ヘタレ草食系男子の将也に言われたくないね」
「んだとこのお米野郎が」
「上等だゴラァ」
「兎月達うるさい」

水川にビンタされた。ぐっ、普通にビンタされた……なんか悲しい。米太郎もビンタされたらしく、地面に倒れている。あ、起き上がった。

「何するんだマミー。男の真剣勝負を邪魔しないでくれ」
「今のどこが真剣勝負？　ただの低レベルな言い争いじゃない。そしてマミー言うな！」
「ぶべらぁ」

またも一発キレイなのが米太郎にヒット。なんと良い響きのビンタ。米太郎が泣きそう。プルプル震えているし。なんと惨めな……。

「ま、将也……俺が悪かった。ごめんな……でも俺……さすがに野菜だけじゃ生きていけないよ。肉も食べたいよ……」
「米太郎……ほら立てよ。焼きとうもろこし買ってきてやるから」
「ま、将也ぁ！」

これでさらに三百円消費。そして俺はまだ何も口にしていない……
……はぁ。

米太郎とタイマンしかけたが、まあ普通に仲直り。そんなガチで喧嘩したわけじゃないしね。そして今はテキトーに屋台を見て回っている。相変わらず人は多い。

「あー……腹減った」

結局まだ何も食べておらず、ただ屋台を見ているだけ。

「何か買えばいいじゃん」

綿菓子を手に持った水川がそんなことを言ってきた。けどさぁ、

「なんかさー、これといって食べたいものがないというか」

確かに左を見ても右を見ても食い物は数え切れないほど並んでいる。だけど、こう……これだ！　っていうのがないんだよなぁ。せっかく祭りに来たんだから祭りでしか食べれないもの食べたいじゃん？

値段もぼったくりだしさ、そこは慎重に選びたいわけなんです。フライドポテト五百円とか間違っても買いたくない。要するに迷っているのですよ。常にどれにしようかな?状態。

「……優柔不断」

ぐあ……か、春日ぁ。その通りなんですが、そんなばっさりと言われるとキツイっす。だってしょうがないじゃん、決めれないもん。

「うーん、から揚げとか……いやでもそれっていつでも食べれるし。お好み焼き……そこまでガッツリ食べたいわけじゃないからなー。焼きそば……俺の中で一平ちゃんが一番だから」

「うるさい」

だっ、か……ら脛を蹴らないで。脛にローキックは激痛なんだって。あ、今のは「げきつう」じゃなくて「げきいた」と読んでね……って誰に言ってんだよ俺。タブーだろこれ。とにかく激痛だ。

「米太郎ー、何食べたらいいかな?」

「カタヌキやろうぜ!」

食い物じゃねー。このタイミングでカタヌキかよ。神経使うよ。カロリー使うよ。何か食べたいんだって!

「だから食べ物を……」

「カタヌキは食べれんこともないだろ」

いや体に害はないらしいけどさ、そんなもん食って腹の足しにはならないもん。って、米太郎の馬鹿がカタヌキに向かっていったし……だから食べ物だって言ってんだろ。なんだあいつ、さっきから全

然話聞いてくれない。本格的に殺意が沸いてきたぞ！

「佐々木ってそんな繊細なこと出来るのー？」

「なめんなよ水川。これでも俺は指先が器用なのさ。米粒に文字も書けるぜ！」

それ、どっかで聞いたことある。米太郎の特技だったっけ？　見たことないけど。米に文字が書けて一体何の役に立つんだよ。それに実用性を感じない。まあ俺はその特技に助けられることはないだろうよ。たぶん。

「ふふっ、見てな。このライスメッセンジャーの腕前を！」

したり顔で米太郎はカタヌキ屋へと入っていった。小学生ぐらいの子供しかいない中へ突入するライスメッセンジャー。高校生なのに恥ずかしくないのか。テーブルに腰掛けて懸命に針をちくちくちくちくちく刺し続ける子供達。シュールな光景だが、彼らは真剣そのもの。子供達にはここで忍耐というものを学んでほしい。根気のいる地道な作業に耐えることで人は栄光は掴めるんだよ。どっかの学者がそんなこと言っていたようなそうでないような。

「どうする？　待つの？」

いいえ待ちたくないです。なんで腹ぺこの状態で米太郎のカタヌキが終わるのを待たなくてはならんのだ。ふざけんじゃねー、とツイッター。米太郎は夢中で針を動かしているが、あれは当分終わらないと思う。嫌だ、待ってられない。

「米太郎はほって置こう。終わったらメールしてくるだろうし」

「そだね。恵、桜、行こう」

「うん」
「バイバイ佐々木君」

一方的に米太郎に別れを告げ、俺達四人はカタヌキ屋を後にした。
すまん米太郎。俺は忍耐を学んでいなかったみたいだ。

「で、兎月は何食べるの？」
「何か」
「……優柔不断」
「まー君は色々と考えているんだよ」

米太郎が離脱したパーティーを新たに再編成。水川に俺に春日と火祭のハーレムパーティーとなった。顔には出さないけど、心の中ではレッツダンシング！　この美人三人娘を俺が独占しているのだからな！　両手に花どころか手が足りないくらいだ。カイリキーに進化したいくらいだね。一本余った手は米太郎を意味もなく殴る用だ。なんと無駄がない。カイリキー素晴らしい。って、今はそんなこと言いたいんじゃなくて。とにかく気分上々なのです。

「あっ、可愛い～。ねー兎月ぃ、アレ取ってぇ」

水川が袖をぐいぐい引っ張ってきやがった。なんだよ……って射的じゃん。

「あのぬいぐるみ？」
「そう！」

いやいや水川さん、ぜってー無理ですって。どっしりとした可愛いパンダのぬいぐるみ。見た感じで重そうなあのパンダさんを落とせるわけないじゃん。というか射的なんてぼったくりの象徴だからね。

高い金払ってやっても手に入るのは小さなお菓子が二、三個程度。
それは中学時代に思い知らされたことだ。

「無理だって。どっかのサーティーン呼んでこないと」
「なんでよー兎月ぃ。ねぇ取ってー」

ぐっ、上目遣いやめい。心が揺れるからぁ！　そしてそのまま水川にぐいぐい押されてやるハメに。拒否権はないのかよ。はぁ、射的とか久しぶり。

「弾は七発だよ兄ちゃん。さあ頑張りな」

店の親父から銃を受け取り、コルクの弾を装填。これで七百円。しかも俺の自己出費……はぁ、やるしかないのね。やるからには全力でやってやりますよ。

「さて、やるからには元を取らないと」

おっさんよ、ぼろ儲けでニヤける気持ちは分かるが笑っていられるのも今のうちだ。鷹の目と言われた腕前見せてやる。中尉、行きます！

「いくぜ」

銃口をテーブルに押しつけて弾をより深く中に入れることで威力アップ。そしてテーブルから身を乗り出し、腕を精一杯伸ばして銃口を可愛いパンダちゃんに向ける。リアルだったら動物愛護団体に訴えられてしまうが、これはただの射的。ぬいぐるみ相手に同情も遠慮もいらないってことで堂々と眉間に狙いをつける。気を静め、焦点を定めて……トリガーを引く！

「せい！」

ポンッと軽快な音とともにコルク弾が発射。ぬいぐるみに直撃。跳ね返される。わずか一秒の出来事。わずか一秒で百円消費。そして三秒後にはこう叫んでいた。

「水川……これやっぱ無理だわ！」

第１１４話　金魚すくい

射的も収穫ゼロに終わり、俺のハートはブレイク寸前。あぁ、祭り囃子の音がむなしい。

「せめてお菓子の一つぐらい取ってよ」

ベストを尽くしたのにこの言われよう。泣けてくるね。これで使ったお金は合計千九百円。俺自身はまだ何も食べていない。ははっ、泣けてくるね……。

「ねぇ、まー君。たこ焼き食べる？」

火祭の気遣いと優しさがソースのように染み渡る……嬉すぃ。

「うん、食べる」

「じゃあ私も。すみません、たこ焼き一つ」

すると火祭はたこ焼きを一つだけ注文した。ん？　火祭も食べるなら二つ注文しなくていいのか？

「へい、お待ち」

ちょちょぃと慣れた手つきでたこ焼きをパックに詰めるおっちゃん。注文通り一つだけ。

「一個しかないけど……あ、もしかして『お嬢さん可愛いね。よっしゃ、たこ焼きもう一つサービスしたる！』を狙ったの？」

「ち、違うよ。そんなピンポイントな狙いはつけてなかったよ。え

っと、一人じゃ全部食べきれないから、まー君に半分食べてもらおうかなと思って……」

おぉ、なるほど。そういうことでしたか。てなわけで火祭と二人で熱々のたこ焼きをいただきます。あ、代金は俺が払いましたぁ。俺も半分食べるし、三百円も百五十円もたいして変わらないしね！

「美味しいね」
「そうだな～」

外はサクサク、中はトロトロ。なんとありきたりな表現だろう。しかし実際そうなのだから仕方ない。うんデリシャス。とってもとっても美味しいです！　熱々のたこ焼きを二人仲良く熱々食べる。うほっ、熱くて敵いませんな。

「いやー、ホント美味し！？」

ぐっ……がぁ……痛い！　突如、足を襲ってきたのはただの激痛。ふくらはぎが削られるようなひどく鋭い痛みの原因は後ろにあるに違いない。

「……」

春日。そう春日。そう春日である。後ろを振り返れば不機嫌オーラ全開の春日が俺を睨んでいた。そして足への攻撃。サンダルの裏で俺のふくらはぎを上から下へと滑らすように蹴ってくる。蹴るというよりはえぐるというか、削るというか……とにかく痛い。痛くてたこ焼きの味がよく分からなくなるほどに。

「春日……痛い」

「……痛くない」
「俺が痛いっつーに！」
はぁ、なんですかこのお姫様は。俺を削ってそんな楽しいですか。
そうだとしたらあなたはサディスト決定です。
「……」
まだ睨んでくるよ……何か気に障ることでもあったのかな。隣の水川にアイコンタクトで尋ねてみてもニヤニヤしているだけで返事はないし。んー……よう分からん。
「あー……たこ焼きいる？」
「うるさい」
痛い。ちょ、蹴るなって。だから蹴るなよ。だ、か、ら、蹴るなよ！
「そーだよなー、お嬢様の春日にはお祭りの楽しさなんて分からな痛い！」
ちょっと軽い挑発にも過敏に反応しやがって。殴ることはないでしょうよぉ。いつか俺も我慢の限界が来るかもよ？
「お祭りとか来たことあるの？」
「ある」
春日にしては珍しくちゃんと答えてくれた。これが今日初のまともな会話の始まりかも。
「うん、やっぱ祭りには行くよね。来るとしたら友達と？　それと

も彼氏と二人で～？」
「ウザイ」

鋭いローキックが炸裂。見事な一撃が俺の足を破壊。い、痛い……
浴衣着ているのによくこうもまあキレイなキックが放てるもんだ。

「痛てて……」
「そういう兎月は彼女と来たりしたのぉ？」

水川の楽しげな声。俺の過去を掘り返して楽しいのかよ。

「一回しかないなぁ。確か中学三年生の時に二人で痛たあぁっ！？」

またも春日のローキック。めっさ痛い。と思いきや、

「ぐぅぃぬっぅうっ！？」

声にならない叫び声がぁ。火祭が俺の頬を指でぐりぐり押し込んでくる。ぐぇ、地道に痛い……そしてまだぐりぐりしてくるぅ。

「火祭……痛い」
「知ってる」
「だったらやめて頂戴！」

もう何これ……春日といい火祭といい、俺を痛めつけて楽しいのかよ。なんで俺の周りの女性にはバイオレンスな人しかいないんだ。
俺がＭだから？　そうなの？　俺ってマゾな体質？

「あ、桜ー。金魚すくいだよ。やってみようよ」
「あ、うん」

俺のマゾ疑惑はさておき。しばらく続いた指圧攻撃をやめて火祭は水川と仲良く金魚すくいを始めた。微笑ましい光景だねぇ～。二人の楽しげな姿を後ろから眺める。金魚すくいとか一年ぶり。そりゃお祭りが一年ぶりだからそうなるわな。

「……去年はパパと来た」

びっくりした。隣に立つ春日がポツリと呟いた。唐突過ぎて心臓ちょいバク状態。というか話の脈絡が分からない。去年……って、あぁ、

「去年の祭りはお父さんと来たってことね。へぇ、それは素晴らしい」

あの父親と二人でね……中々ヘビーな気もしてきた。大声で娘の名前を連呼する春日父が容易に想像できてしまい、思わず苦笑。俺だったら耐えきれないね。

「毎年お父さんと来てたの？　だったら今年は悪いことしたね。お父さんから春日奪っちゃって～」

殺されるかも。ライトに軽く言ったけどマジで殺されるかもだから！

「……去年だけ。パパはいつも友達と行ってた」

「へ？　そうなの」

目の前で水川が必死に金魚を追いかけている。乱暴すぎるだろ。

「パパは毎年仲の良い友達と祭りに行ってたのに……最近はその友

達と会ってないみたい」
「そうなんだ。どうしたんだろ？」

ポイが破れて悲鳴を上げる水川。火祭はまだまだ頑張っている。

「……分からない。今日はお仕事で来れないって」
「そっか。じゃあお父さんの分も楽しまないと。ほら春日もやってみなよ」
「え？」
「金魚すくい」

火祭は一匹すくえたけど、直後にポイが破れてしまった。あらぁ、残念。

「まー君、一匹とれたよっ」
「見てたよ～。お見事っ」

えへへ、と喜ぶ火祭の手には金魚の入った袋が。さすが火祭、賛辞の拍手が止まらないっす。悔しそうな水川は今にもこちらに対して八つ当たりしてきそうだ。右手がグーになって俺の方を向いているぞおい。こいつもバイオレンス女子か。

「ほら次は春日の番」
「……」

春日を座らせて金魚すくい開始。

「……」

ポイを持ったまま固まって金魚を見つめる春日。あれれ、もしかし

て金魚すくいやったことないとか？

「金魚すくいは初めて？　大丈夫だよ、水川みたいな乱暴に追いかけなかったらいい痛い！」

後ろから水川にグーで殴られた。

「……」

石のように動かなくなった春日。と思ったら、ゆっくりとポイ全体を水に沈めた。また膠着……と、一瞬目がキラリと光ったように見えた！　素早くポイを水辺に滑らす。そして、

「うおおぉ！？　上手い！」

見事、金魚をすくった。なんて手捌き。初めてとは思えない。特にポイ全体を一度水に濡らしたのがすごかった。確か、一部分だけが濡れているとポイが破れやすいんだっけ？　だから初心者はよく失敗するらしい。その辺春日は心得ているかのような素晴らしい動きを見せた。普通に上手いじゃん！

「きゃー、すごーい！」

「恵は金魚すくい得意なの？」

「……パパから教えてもらった」

へぇ、春日父が。あの人、雑そうに見えるけどなー、意外だなぁ。

「まー君もやってみてよ」

「よっしゃ、春日に続くぜ」

ちょっくら俺の腕前を見せてやりましょうかね。水面下を優雅に泳ぐ夏の風物詩。お前らはもう俺の掌の中だ。せいぜい足掻き泳ぐがいい。

「狙いは……あの黒だ」

赤い模様に混じって一匹、全身真っ黒で一際デカイ金魚がのっしりと泳いでいる。いかにもボスっぽい。ドス金魚と名付けよう。よし、ターゲットは決まった。あとはポイを振るうのみ。射的は駄目でも金魚すくいは得意なんですよーっと！

「せいやあぁっ！」

敗れた。そう破れた。なんか惜しいとかあと一歩だったのにとかは全然なくて、持ち上げただけで簡単にポイは破れた。そう敗れた。残ったのは虚無感のみ。

「ははっ、ドンマイ兄ちゃん。一匹あげるから」

店のおっさんから憐れみで一匹もらった。悲しいわ。いやホント悲しい！

「兎月もう駄目駄目じゃん。もっと繊細なタッチで金魚と呼吸を合わせないと」

「うるさいやい。相手が悪かったんだよ。本当なら三匹はいけるんだからな」

「はいはい」

くそ、馬鹿にしやがって。水川だって一匹も取れなかったくせに。相手がドス金魚じゃなかったら三匹は取れる自信があるんだから。

いやホント真剣に。う、嘘じゃないよ！

「あ、春日。どーぞ」
「……何？」
「何って金魚」

春日に俺の取った金魚を渡す。どういうことだとジロリと睨まれた。

「いやさ、春日の取ったやつはお父さんにあげなよ。あの人きっと喜ぶからさ。で、俺のやつは春日にプレゼント。はい」
「……」

どうせなら自分が取ったやつをあげたかった。憐れみでもらったやつなんて……ふふ、惨め～。

「……ありがと」
「どーいたしまして」

お父さん大事にしてあげてね。そしてうちの父さんクビにしないでね。頼みます。

「じゃあ、私のはまー君にあげるね」
「だったら、私のは桜にあげる」
「いやいや無限ループ！？」

第115話　おっさんは話を聞かない

「兎月ぃ、かき氷買ってぇ」
「嫌だ」
「ほら、桜と恵も」
「まー君お願い……」
「買いなさい」
「い、嫌だ」
「買いなさい」
「はい」

またも痛い出費。正直お金使い過ぎだよこれ。ちょっとぉ、これ以上は無理です。財布が氷河期を迎えました。今度発売の最新ゲームは諦めるしかないようです。はぁ、ドンマイ俺。そのうち良いことあるさ。とか言うとろくなこと起きない。

「兎月」

痛い！　またも春日が殴ってきやがった。ほらね、良くないことの登場。俺の背中はサンドバックじゃないっちゅーに。

「どうしたのさ」
「……なんでもない」
「はい出たそれ！　俺の痛みしか生まない、なんでもない。なんでもなくはないやい。背中が痛いんだよ！」
「うるさい」

ぐおぉっ、追撃パンチ！？　もうやだこの娘、凶暴すぎるわ。誰かヘルプミー。

「そういえば、あと三十分ぐらいで花火が始まるよ」

かき氷（ブルーハワイ味）を美味しそうに食べる水川の耳寄り情報。

「そうだっけ？」

「毎年の恒例行事じゃん。それを見るためにこんな大勢人が集まるようなものだよ」

ほほぅ、そーだったんだ。そう言われるとそうかもしれない。彩り鮮やか綺麗な満開の花が夜空に咲き乱れることだろう。なんと豪華な天空庭園。そりゃ見たいよね。

「それでどこかオススメスポットがあるとか？」

「そのとーり」

そうですか。ま、見れるなら万事オーケーですたい。

「花火楽しみだね」

おいおい、ここにもう桜という名の綺麗な笑顔の花火が満面だぞっ！　はぁうわぁ～可愛いっ！

「……」

「痛い！　だから春日さん痛い」

背中を抓らないで。もう痛くて悲鳴を上げそうだ。

「……ニヤニヤするな」

「ニヤニヤしてました？」

マジですか。でもそれは仕方ありません。だって火祭可愛いんだも～ん。俺のせいじゃない。ついでに火祭のせいでもない。こんな可憐な笑みに罪はないということさ。ニヤリ。

「……ニヤニヤするな」
「あうっ！？」

抓らないでぇ、激痛が背中を走り抜けるぅ。はぁ、お祭りに来て一体何回春日から暴力を受けたことやら。

「……あれ？　真美は？」
「へ？」

火祭の声に反応して辺りを見れば水川の姿はなし。……あれ？

「さっきまでいたよな……」
「真美が消えちゃった」
「そんな神隠しみたいなこと言わないで！」

ホントに水川いないじゃん。どうしたんだい……つーか人多過ぎ……あっ、

「はぐれた……」

そうだよそれだよ。ワイワイ人で賑わうこの中、人波に飲まれてしまったに違いない。うわっ、迷子じゃん。なんすか水川ちゃん、高校生になって迷子だなんて恥ずかしいなぁもう。

「まだ近くにいるはずだし探そう」

「うん……って、まー君！？」
「へっ？」

隣の火祭がどんどん離れていく。えっ、ちょ俺動いてないよ。勝ってに火祭と距離が空いていくううぅ！？　と、というか……人が多過ぎるって。う、嘘っ……全然前に進めねぇ！？

「ぐっ、この……ぬおぉ！？」

なんだこの勢いは！　全く止まる気配がないよ。ぐあっ……大衆の力がここまですごいとは。

「まー君！」
「ぐっ……ひ、火祭ーっ！」

あああぁぁぁっ！？　火祭が人混みに消えていった……ヤバイ！　もう人多すぎ。くそ、せめて今手を握っている春日だけは守らなくては。

「春日、大丈夫か？」
「お兄ちゃん、僕くじ引きがしたいよ」
「誰だこの子はぁ！？」

俺が手を握っていたのは見ず知らずの子供だった。くじ引きをやらせて無事に母親のところに送り届けてやった。春日の手だと思ったのに違ったよ。つまり春日ともはぐれてしまったわけだ。米太郎、水川、火祭、春日……次々と消えていく友達。そして残された……俺。迷子どころこれはもう神隠し。

「うわあぁっ!?　ただの神隠しじゃねーかー!」

これだけのシャウト、普段なら周りから白い目で蔑まれるが今はお祭り。誰も俺の叫びなんて聞いていないし、誰も助けてくれない。ど、どうしたら……あっ

「携帯だ」

悩みはテレフォンというライフラインを使うことで解消された。オーディエンスで足を引っ張った分ここで挽回だ。早速コール開始。まずは春日。

「もしもし春日?」
『ただ今電話に出ることが出来ません』
「なんでだよ!?」

このタイミングで出なくていつ出るんだよ。水川達にもかけてみたが、どれも電波が悪いとかで全く繋がらなかった。……これも人が多いせい?

「残されたライフラインはフィフティ・フィフティのみ。いやこれ四択問題じゃないし」

あぁ～、もうドロップアウトしよっかな。……ん？　携帯が震えている。

「メールか……あ、水川だ」

『待ち合わせした公園に集合』

ナイス判断の水川に賛辞の言葉を贈りたい。正解！　おめでとう一千万円。いや、もらえないけど。つーかミリオネタ使いすぎ。今時の小学生知らないって。いやー、さすがは水川。頼りになります。さっき迷子になって馬鹿だなぁとか思ってしまってすいません。

「とりま移動しないと。春日が心配だ……」

あの美人三人娘のことだ。一人で歩いていたらナンパされるに違いない。水川や火祭なら軽くかわしそうだが、春日はたぶん無理だろう。学園祭の時もナンパされて困っていたし、それに春日は誘拐されたこともある。一人にさせておくのはあまりに危険だ。こうしているうちにも春日に魔の手が忍び寄っているかも……うおおぉぉ！？　それは俺が許さないぞ！

「急がないと……って、人が多くて前に進めねぇ……！」

やっぱ人多すぎ。とんでもねぇ人数だって……ぐぇ、足踏まれた。この勢い……昼休みの食堂並の混雑っぷりだ。そして食堂とは比べものにならない規模の大きさ。つーか人増えた気がする……。もうすぐ花火始まるから？　ちょ、前に進めない。

「はぁ……波に乗るしかないのね」

つーことで無駄な抵抗はせず人の波に合わせてゆっくりゆっくりと移動。の～んびり遅い足取りで公園へと向かう。この調子ではたどり着くのはいつになることやら。

「お客さん困るよ。さすがにそれは……」

「そこをなんとか頼むよ！」

ん？　どこからか困った声がする。ボランティア部に所属する俺は人一倍の正義感を持っており、困った人の声に敏感に反応出来るのだ！　……のはず。とにかく何やらトラブルのようだ。少し耳を傾けてみることに。

「でもねー……金魚すくいでカード払いなんて初めてだよ」

「このカードでならいくらでも払える。あと百回！　金魚すくいやらせてくれないか？」

……たいしたトラブルじゃないかも。というか馬鹿らしい内容な気がする。とりあえず現場に行きますか。現場はとある屋台の金魚すくい。店のおじちゃんに頭を下げるのはスーツを着た中年のおっさん。どっかの会社員みたいだけど……いやいやおっさんじゃん。いい年した大人が金魚すくいに夢中になってんじゃないよ。

「金魚が欲しいならどれか一つあげるから」

「そんな憐れみはいらない！　私は自分の力ですくいたいのだよ！」

「けどカードはちょっと……」

「そこを頼む！」

……無視しよっかな……。いや、でも話聞いてしまったし……このまま素通りにするのも後味悪いしなー……はぁ。

「あの……僕でよければ代金払いますんで」
「誰だ君は!?」
「通りすがりの高校生です。はい三百円」
店のおじちゃんに三百円渡し、そしてポイを隣のおっさんに渡す。
「君はなんて良い人なんだおじさん泣けてきたよ。くすん」
「はいはい。どーぞ何匹でもすくっちゃってくださいな」
「よーし!」
するとおっさんは無邪気な笑みを浮かべ、金魚を見据える。数秒の間が空いた後、
「せいっ!」
ポイの端をちょっとだけ水につけて金魚をすくい上げる。と、ポイは簡単に破れてしまった。その隙間から逃げる金魚。あーあー……
「くっ、もう一回だもう一回!」
「でもねー、お客さんもうこれで二十回目だよ」
に、二十って……やりすぎでしょ。つーかそれだけやって取れないってどんだけ下手なのさ。センスの無さが露わになりましたね。
「六千円もあれば大丈夫だと思ってきたものの、現金は底を尽き、残されたのはカードのみさ。くすん」
さっきから、くすんくすんうるさい。いい大人が所持金六千円しかないってのもどうかと思うが。

「いや……これどうぞ」

三百円を生贄にポイを召喚。おっさんに渡す。

「おぉ、ありがとう少年。これで私はまた戦えるよ！」

礼を言う前に惨めだと思わないのかよ。いい年した大人が高校生に金出してもらって。はぁ、出費がとんでもないことに。

「せいっ」

心の中で溜め息をついているうちにポイは破けた。早っ！　そしてこの野郎っ！　もっと慎重にいけや。見てたけど、さっきと同じ失敗だったぞ。

「ぐぅわあぁっ！？」

「ポイは全部水に濡らした方がいいですよ。そうした方が破れにくくなります」

「も、もう一回だ。少年、早く三百円の準備を！」

人の話聞きやがれ！　そして高校生に金せびんな！　大人のプライドはないのかよ。このおっさん馬鹿決定！

「よーし、今度こそ……ていっ」

「だからポイ全体を水につけろや！」

「また破れた……くすん」

こ、の、阿呆、親父は……！　全然人の話聞かねーでよぉ！　アドバイス尊重しやがれ。

「ですから、ポイは水に濡れている部分とそうでない部分で亀裂が入りやすくなって破れてしまうんです。だから一回水につけて」
「も、もう一回だ！」
「話聞けやぁ！」

くそ、馬鹿だこのおっさん。どんなに説明しても理解してくれそうにない。百聞は一見に如かず。実演しますか。ちゃんと見てろよ。

「おっちゃん、はい三百円」
「あいよ兄ちゃん」

これで一体いくら使ったことやら。とりあえずこの話を聞かないおっさんに分からせるには手本を見せるのが一番だ。金魚すくいは先ほどやったばかりなので手に感覚がまだ残ってある。これなら楽にすくえそうだ。ポイを水辺に対して垂直に構えて入水。狙いを無理に追わず、あちらから来るのを待ち……はい、ここぉ！

「ぬおぉ！　すごいぞ少年」

見事、一匹ゲットしました。さっきの汚名返上。水川に見せびらかしてやろーっと。

「今の見てたでしょ？　今の感じでやってみてください」
「なるほど、分かった。せいぃ！」
「ちょ、なんて乱暴な。水面に対して垂直にポイを沈めてください。ポイに水圧がかかって破れやすくなりますから」
「ぬおぉ、またも失敗だぁ！」

……はぁ、駄目だこのおっさん。

第116話　激昂

「いやー、助かったよ少年」
「……さいですか」

ひたすらスーツのおっさんに金魚すくいをレクチャーすること千二百円。ついにおっさんは金魚をすくうことに成功。その瞬間はおっさんと一緒に歓喜の雄叫びを上げたが、終わってみたら出費はとんでもないことに。水川達に奢ったのもあり財布の中を覗けば、あらまぁ。六人の野口さんがベンチを温めていたのに今は一人もいない。財布にはもう小銭しかないでないか。無紙幣の寒々とした財布に溜め息を落とし、無邪気に嬉々とした目で金魚を眺めるおっさんを睨みつける。この駄目大人に二千円近く払ったことが許せない。やっぱ関わるべきじゃなかった。はぁ、馬鹿みたい。

「金魚をすくえたのは少年のおかげだ。お礼にこのカードをあげるよ」
「い、いりません。カードなんて高校生には似合わないでしょ」

……しかもこのおっさん、金がないってわけじゃなくて、ただ現金を持っていなかっただけ。よくよく見ればスーツは高級そうだし、きちんと整った身嗜みに立派な口髭とキリッとした顔立ち。立ち上がった姿は一流社会人（父さんを三流とした時の相対比）。それに提示するカードはよく見れば、なんと黒光りしているではないか。もしや、これがブラックカード？　実在するのかよ……うお、なんか怖い。見なかったことにしよう。服装といいカードといい、なんだこの人は？　庶民の俺でも分かる。この人はたぶん偉い人だ。なんとなくお偉いさんオーラが漂っている。さっきまでわんぱく小僧の雰囲気だったのに。

「そうか、それは残念だ。ではまた今度にでもお礼させてもらおうかな」
「はあ」
「いやー、しかしこれでお土産ができた。娘が喜ぶよ！」
「へえ」
「それに今日で金魚すくいはマスター出来た。来年が楽しみで仕方ない！」
「ほお」
「ん？　さっきから上の空返事ばっかりじゃないか。年上の話はちゃんと聞くものだよ」

年下の説明も聞かず金せびった奴が偉そうに言うんじゃねー。

「えっと、どうして来年が楽しみなんですか？」
「よくぞ聞いてくれた。私は金魚すくいが苦手で、よく馬鹿にされていたんだ。それをやっと見返せるってわけさ」
「はあ……」

心底どーでもいいです。見返すって……金魚すくいで。これ以上こちらを呆れさせないでください。本当お願いしますから。

「それに……いや、なんでもない」
「はい？」
「とにかく君には感謝しているよ。では来年またこの祭りで会おう。その時は今日の分を倍にして返してあげよう！」

フハハハと高らかに笑い声を上げておっさんは人混みへと消えていった。倍返しって悪役キャラの台詞じゃないんだから。……なんだったんだろ、すごいインパクトのあるおっさんだったな。つーかも

う会わないと思う。さよなら、人の話を全く聞かない意外と立派な社会人で金魚すくい超下手だった娘思いなおっさん。

「あ、というか春日達と合流しなくちゃ」

いかんいかん、当初の目的を忘れていた。急がなくては！

人波に飲まれつつ合間を縫うように走り抜け、待ち合わせの公園近くまで到着。途中、道草を食ってしまい、いやもう満腹ってぐらいに道草食ってしまった。時間的にも金銭面でも全くもって無駄。たぶん春日達はもう来ているに違いない。ナンパされてなければいいけど。まあ米太郎もいることだし、男のあいつがいれば一応は大丈夫だろ。

「よぉ将也、久しぶり」

「なんでここにいるんだよ！」

隣で焼きそばを頬張る米太郎。何のんびりと焼きそば食ってんだぁ！

「水川のメール見たよな！？」

「おぉ、バッチリ。カタヌキは大成功さ」

「話が噛み合わない！」

顔面に一発ぶち込んでやった。焼きそばが口からこぼれ落ちている。テメーのボケはもういいんだ。

「ぐふっ、焼きそば～。あぁ、メール見たよ。それで今来たところさ」
「焼きそば食う暇あったら急げよ。つーか急ぐぞ」
「あ、待って。ソースが美味しいよ」
黙れ。馬鹿は無視して公園へと走りこむ。
「んん？　誰もいないぞ」
後ろから米太郎の訝しげな声とソースの香ばしい匂いがした。確かに薄暗い公園には誰もいな……ん？　いや、ちょい待ち。……あれは……！？
「火祭と水川だ」
公園の端っこ、暗くてよく見えないが、あの浴衣の色は火祭と水川に違いない。そして……ああぁぁ？　あの三人組の男は誰だ。
「なんか男達といるぞ」
「……ナンパだ」
「へ？」
「恐れていた事態になってしまったぞおい。火祭と水川がナンパに遭ってる！」
間違いない。なんかナンパっぽい。水川が火祭の後ろに隠れるようにしているし、男達が三人に詰め寄っている。遠くだからよく見えないが、あれはナンパに違いない！
「ま、マジか。さすが火祭と水か……おいおい将也……！」
「どうした」

「あっち……あれって……」

ちょいちょいと米太郎が指差すのは火祭達と逆の方向である向かい側。その方向には……!?　なっ……あ、あのピンクの浴衣は……まさか!?

「春日!?　あ、あと誰だよあの二人は!?」

春日を囲むように男二人が並んでいる。おい……あれって、

「ナンパじゃね?」
「ナンパじゃねーかー!」
「ま、将也そんな耳元で叫ぶなよ」

春日もナンパされてる!　これって最悪の最悪じゃないか。公園の端と端の二カ所同時にナンパ、しかもどちらも連れの友達がナンパされているなんて!　ど、どうしたら……いや、考えてる暇はない。走れ!

「米太郎は火祭の方に行け!」
「う、うえぇ?　あ、あっちは三人もいるんだぞ?」
「火祭がいるなら何人いようが関係ない」

もう米太郎に話しかける余裕も時間も惜しい。地面を蹴り、やみくも一直線に走る。視線はブレず、ただ一点を見つめる。春日……春日が危ない。それだけが頭を叩きつけ、全身に血を走らせる。体全体が飽和状態、全身から熱が溢れて鼓動と足が早まる。

「春日……っ」

近づくごとに鮮明になる視野。二人組の男が口元を歪ませて春日に詰め寄っている。対して春日は目を伏せ、俯いている。……また加速する。走る速度も呼吸も思考も何もかも加速する。春日がナンパされている、春日のピンチ。そのことだけがガンガン響く。くそっ、俺が道草食ってるうちにこんなことになるなんて……自分が情けない。いや反省するのは後でだ。今は春日の元へ一秒でも早く向かわな……っ！　と、男の一人が春日の肩に手をおきやがった。なんとか抵抗しようとしている春日。それを遮り春日の腕を掴んだ男二人はさらに春日に詰め寄り密着する。ああ、駄目だ。思考停止。あの男二人、あの手、あの距離、どれもこれも全てムカつく。苛立つ。殺意が溢れる。握りしめた拳が狂いそうなほど熱い。そして春日の泣きそうな顔を捉えた時には口が勝手に吠えていた。

「春日ぁ！」

吐き出した声と共に跳び上がる。殴れ、なぐれ、ナグレ。呪詛を呟く渇いた唇の先を風が切り、怒りで腹ん中が煮えたぎる。男二人のニヤリ顔、春日に触れた手、春日の泣きそうな顔……リミッターが壊れた。拳が鳴き、腕が唸る。真後ろにまで振りかぶった右腕が大きく曲がり、両眼球が狙いを捉えて離さない。春日に……春日に手ぇ出してんじゃねぇ！

「うおおぉぉらあぁぁっ！」

「ぐっ！？」

ナンパ野郎の歪んだ口元から顎にかけて右拳ぶち抜く。モロにパンチを食らったナンパ男はグラリと地面に倒れ……さすかよ！

「おらぁっ！」

「がぁ！」

地面に崩れ落ちる前に左膝を振り上げタイミング良くナンパ男の顔面を膝蹴り。メキィッと骨の軋む音と男の掠れた悲鳴が耳に届く。膝に届く変な心地良さの衝撃が膝蹴りの成功を示していた。休む暇なく、顔面への衝撃に耐えれなく宙に浮いたナンパ野郎の上体に思いきり蹴りをぶち込んで地面に叩きつける。

「ぁ、っは……！」

男が鼻血を垂らして痙攣しているのを見届けることなくもう一人を睨みつけ……ようとしたがそれより先に春日へと視線が流れた。春日の姿をはっきりと確認するなり手が勝手に動いていた。春日の手を掴み、男から春日を引き剥がす。そのまま春日を胸元へ引き寄せ、抱きしめる。

「俺の女に手ぇ出してんじゃねぇよ！」

「ぅ、なっ……！？」

二人目のナンパ野郎はうろたえ、俺と倒れた連れを交互に見てくる。二秒ほど睨みつけた後、すぐさま春日！　抱き寄せる春日へと視線を落とし、そっと声をかける。

「春日、大丈夫か？」

「と、兎月……」

その表情は驚きと恐怖が入り混じっていた。右目から一粒の涙が白く綺麗な頬を伝わり落ちる……だ、大丈夫？

「春日……」

「っ、兎月……！」

弱々しく潤んだ瞳を隠すように俺の胸に顔をうずめる春日。体がすごい震えて……思わずさらに強い力で抱きしめてしまった。恐かったんだよな……。大丈夫、俺がいるか、らぁ！

「テメェこの野郎あぁん？　やってまうぞゴラァ！」

「ひぃ！？」

ヘタレな俺が般若の面をかぶる。春日父のような殺す気満々のドスの効いた声で唸り威嚇する。喧嘩激弱、ヘタレ、ビビリ男の俺だってやる時はやるんだよ！　春日を泣かす奴ぁは容赦なくぶっ潰してやるぜゴルゴルゴラァ。つーわけでナンパ野郎！　貴様を蝋人形…じゃなくてボコボコにしてやろうか！

「覚悟できてるよな……歯ぁ食いしばれやぁ！」

こんな台詞、俺には全く似合わないが今はすごいしっくりくる。台詞に合わせてギロリと睨みつける。ビクッと体を震わせるナンパ男。効いてるみたいだ。ついでに視界の端には一人目のナンパ男が見事に伸びきっているのが映っている。鼻からの出血は止まらず、なんとまあ見事な白目をお披露目中だ。我ながら完璧な連続攻撃だったなと思う。きれーいに決まったよ。殴って蹴って蹴ってそりゃ気持ち良かった。格ゲーだったら今頃空中に『ＹＯＵ　ＷＩＮ』と表示されていることだろう。その程度で済んでよかったな。まだボコボコにしてやってもいいぐらいだ。そうだな、二人目はそうすることにしようかなぁ！　あぁん！

「す、すすすいませんでした！」

ナンパ男はもう一人のナンパ男を担ぎ慌てて公園から逃げていった。

逃げやがった。暗闇に溶けこむのを見つめ、辺りは落ち着きを取り戻しだした。まだ震える春日の背中をポンポンと叩く。春日はずっと俺の胸に顔をうずめたまま。

「春日、もう大丈夫だよ」

「……」

「えっと……」

う……あの、いつまで抱きついているの？　えーと……ナンパ二人組は追い払ったからもう大丈夫だって。危険は去りました。ほら、離れてちょうだい。今になって冷静に考えれば俺と春日って抱き合っている状態なわけでして、そりゃ恥ずかしいというわけでして……。お、俺も我を忘れていたとはいえ、よくもあんなカッコイイ台詞と動き出来たなぁと思うわ。そして春日は一向に離れようとしてくれない。何なら言葉が届いているのかさえ分からない。

「……」

「……っ」

「あ、あの……春日さん？」

「……遅い」

「！？　痛たたたたっ！　背中が剥がれる！」

両手を背中に回したかと思いきや、ガチィと手の平一杯に俺の背中を掴みだした春日。ぐあぁぁっ、背中が取れちゃうよ！？　痛い痛い痛い痛い痛い痛いぃぃぃー！

「ぐぅうえぇぇ……や、やめてください……がぁぁ！？」

「……来るの遅い」

「ご、ごめん。ごめんなさい。すいませんでした！　真に申し訳ありませんでしたので背中をえぐらないでぇ！」

確かに俺が遅れたせいで春日に恐い思いをさせてしまった。俺のせいだから、当然償いたいと思うけども……どうか背中を削ぐのだけは勘弁してくれませんか！

「あ痛たたた」

「将也！」

ぬ、この声は米太郎。おぉ、メシア登場か。米太郎よ、この娘をなんとかして。もうすぐで俺の背肉が公開されることになりそうだ。背中にモザイクが入ることになり痛い痛い痛い痛い痛い！

「そっちは大じょ……何イチャイチャしてんだよ」

「これのどこがイチャイチャだ。背中、背中だよ。背中にズームアップしてみて！」

「まー君」

「兎月」

米太郎に続いて火祭と水川もやって来た。良かった、二人とも無事みたい。

「そっちのナンパ野郎どもは？」

「桜が瞬殺した」

「俺がたどり着く前どころか、焼きそば食い終わる前には終わってた……」

さすが火祭。しつこいナンパ野郎にはキツイお仕置きってか。火祭の腕っ節の強さなら、たとえ武器防具完璧のフル装備であっても歯が立たないだろう。

「……」
「痛い痛い……あ、やっと離してくれた」
ようやく春日がえぐる作業をやめて離れてくれた。あー、背中痛いグロテスクな展開にならなくて済んだ。
「大丈夫か？　さっきの奴らにひどいことされなかったか？」
「……」
「……大丈夫っぽいな。よし、一安心。火祭と水川も怪我とかない？」
「大丈夫だよ」
「平気～」
「将也ぁ、俺のことも心配してぇ」
「ソース臭いのが心配だ」
とりあえず三人とも無事で良かった。まさか本当にナンパされるとは……やっぱこの美人三人娘はすごいや。

第１１７話　夜空舞う花火と素敵な台詞と痛々しい悲鳴

「こっちは火祭があっという間に片付けたけど、将也の方はどうなったんだ？」
「なんとか追い払った」
「え……お金で帰ってもらったのか？」
「そこまでヘタレじゃねぇ」

というか俺の残金なめるな。小銭しか残ってないんだぞ。

「じゃあどうやって」
「ぶっ倒した」
「ギャングみたいな言い方だな。え、将也が倒したの！？」
「兎月やるじゃーん」

なんと意外！　嘘このヘタレ男が！？　と言わんばかりの目つきで米太郎と水川がこっちを見てくる。なっ、俺だってやる時はやるんだい。

「……」

っ、あと……春日さん？　あの……離れてくれたのはいいとして、その……手を握るのやめてくれませんか？　いやね、手を繋ぐのはいいんだけど、っ……あの、力が強いです。ぎゅ～、を通り越えてギリギリィ！　ってくらいの勢いで手を握ってくる春日。すごく痛い。さっきナンパ男を殴った時より手が痛い。折れちゃうよ！

「まー君、怪我はない？」

今現在負傷中です。右手に注目してみよう！

「へぇ～、兎月がナンパ男二人も追い払ったんだ……この～」

なぜか楽しそうな水川。このこの～、と小突いてくる。わけ分からん。どうして楽しそうなんだよ。

「将也すごかったもんなー。迷わず春日さんの方に駆け抜けていったもん」

「そうだっけ？」

「チラッと見えた横顔が恐かったね。え、これ将也？　鬼じゃねぇの！？　みたいな」

とてもオーバーなリアクションを取るウザ太郎にチョップを加えて黙らせる。そして反対の手が痛い。いつまで握ってる気ですか。もうすぐバキバキって悲鳴上げますよ。つまり折れちゃうよ！

「……」

「痛……水川、この娘引き取って」

水川にヘルプ。

「もうちょっとそうさせてあげなよ。恵だって恐かったんだから」

「俺だっていつ自分の手が折れるか戦々恐々なんですが……って火祭？」

そしてなぜか左手を火祭が握ってきた。優しく握ってくれるのは助かりますが、なぜ？　右に春日、左に火祭……あれま、以前にもこんなことがあったような。

「火祭……どしたの」
「恐かった」
「はあ……そうですか」

両手に花と言いたいところですが右手のお花は薔薇です。薔薇の棘の部分です。素手で掴んでいる状態です。離したいけど棘が纏わりついて離れないのです。……ですですです！

「とりあえず全員集合したことだし移動しよっか。もうずく花火始まるし」

水川を先頭に移動開始。もちろんこの状態のまま移動って……右手が折れちゃうってば。

場所は変わりまして、屋台とか並ぶ大通りからちょっと離れた広場っぽい所。水川の話によると、ここが花火を見るにはベストポジションらしい。へぇ～。でもそうかもしれない。だって人がすげーいるもん。わらわらと集まる人々。うおっ、また誰かに足踏まれた。なんだこの人の多さは。町内ってすごい！

「やっぱ人多いな……。よし皆、はぐれないよう誰かと手を繋ぐんだ！」

そう叫んだ米太郎の両手はがら空き。彼の瞳から溢れる滴はなんだか塩辛そうだ。そして……まだ手を離さない隣の春日さん。痛い痛い、マジで骨が砕けそうです。ちょっと緩んできたかなと思ったが、

今さっきの米太郎の声に反応してまた力強く握ってきた。ああぁぁっ、ミシミシ聞こえるぅ。

「うん、この辺がベスポジだよ」
「え、テニプリ？」
「ベスポジ！　耳にぬか漬けのぬかでも詰まってんのか。耳掃除してから出直してこい」
「……ぐすっ」

水川の辛辣なツッコミに米太郎の涙はさらに溢れ出す。しょーもないボケをするからだ。

「……」
「がぁ……春日さん……手が痛すぎて麻痺っているのですけど……」
「……」

それでも離さないってか。ぐぇ……手の感覚がないよ。いやまあ春日と手繋げるのは嬉しいけどさ、何もこんな力こめなくても。もうナンパ野郎どもは来ないですから。俺はもう右手使用不能なので戦力にならないけど火祭がいれば瞬殺してくれますって。いやー、それにしてもめっさ痛い。

「あと喉渇いた……」

色々ありすぎて水分を随分と消費しちゃった。結構頑張って走ったもん。なんか飲み物買いに行くか。

「俺ちょっと飲み物買ってくるわ」
「急がないと花火始まっちゃうからね」
「分かってるよ」

よし、急ごう。そう思い、歩を進めようとしてもなかなか前に動けない。隣の春日お嬢様が手を離してくれないから。

「春日、手離して」
「……」
「飲み物買ってくるだけだから、ここで水川達と待っていな」
「……」
「もしナンパされても火祭がいるから大丈夫だって」
「……」
「俺もすぐ戻ってくるから」
「……」
「ちょ……聞いてる？」
「……」

ち、ちちちちょっとぉ！？　これだけ話しかけて一言も応答なしってどうよ！？　駄目だよ、ここまでの無視はさすがに言葉を失うって。電源オフってるのかな？　いいから手を離してください。もうすぐ花火が始まるから急がないといけないの。

「春日……」
「……」

春日……手をギュッと握る春日。なぜ春日がこんな執拗に手を離さないのか。そんなことは考えればすぐに分かることだった。一人ぼっちで、そこに現れた見知らぬ二人の男。ナンパされ、腕を掴まれて接近されたら誰だって怖い。まして春日は一度誘拐されたこともあるんだから。見知らぬ男が来るのは人一倍に怖いはずだ。それこそ不安で手も離したくないって気持ちになるよな……。

「……春日」
「……」
はぁ……情けないな～……俺。何も分かってなさ過ぎ。自分の都合で離せ離せ無情な発言しやがって。俺は一体何だ？　今ならはっきりと言えるだろ。俺は、春日の、下僕だと。その下僕が主人を守らなくてどーするって話だ。他人に任せるとか言語道断。今、春日の手を握っているのは他の誰でもない俺なんだぞ。
「行こう。ほらついて来て」
「……兎月？」
春日の手を握りしめる。ずっと春日だけが握っていたのを今度は俺も握りかえす。一方的に繋がれていたのをほどき、また繋ぎなおす。二人しっかり手を繋ぐ。
「もう離さないから。もう春日を一人にはしない」
「……っ」
「ほら行こ。急がないと」
もうこの手を離さない。俺は決めたんだ。この人を守る。誘拐犯だろうが不良だろうがナンパ野郎だろうが。春日に害及ぼす奴は一人として近づけさせない。それが下僕としての務め。いや……それ以上のことだ。俺は……気づいてしまったんだよ。自分が今の立場をどう感じているか。
「……兎月」
「気づいたんだ」
「え……」
「さっきナンパを撃退した時、自分の気持ちに気づいたんだ。俺は

春日の下僕。ずっとそれでいいかもって思っていたのが変わってきているって気づいたんだ」

「……」

「俺は今の下僕って立場に不満を持っているんだと思う」

「……それって」

「嫌ってわけじゃない。そうじゃなくてさ、下僕じゃ物足りないな、って。俺はそれ以上の存在になれないのかな……なんて思ったりしちゃって」

下僕でいい。ついに俺はそんな領域にまで達した。相当に頭がおかしくなっている。春日に出会う前の俺が聞いたら今の俺に対して病院に行けと言うに違いない。下僕じゃ物足りない。そんなところになるまでに感覚が麻痺ってきたのだ。そしてさらに麻痺して、痺れる。そう、下僕以上の存在になりたい。下僕じゃなくそれ以上に春日に近い存在になりたい。そう思うようになったんだ。

「そ、それって……」

「ああそうだ。俺は……」

手を握る力が強くなる。俺も春日も。互いに見つめ合い、停止する。こんなに人が大勢いるのに声も雑音も何も聞こえない。春日のことしか頭に入ってこない。

「……兎月」

「俺は……春日の……」

「っ……」

上空が華やかに光った。それに照らされる春日の赤い顔。そしてそれを見て俺は決意した。勇気を出して、この言葉を伝えようと。

「ボディーガードになりたい」
「……は？」

上空に咲いたであろう花火がパラパラと消えて、それに伴い春日の顔からも色が消えた。……あれ？　なんか……あれれ？　ちょ、何この空気……なんで白けたの？　いや、だって、

「ボディーガードなら下僕より近い存在でしょ？　それにカッコイイし！」
「……」
「あ、れ……？　なんか……台詞を間違えた……？」
「……大馬鹿」
「がああぁっ！？」

激痛。激痛を越えた痛み。もう言葉で表しきれない痛みが足をのたうちまわる。足が……足が折れた！？　そう思えるほどの痛みが走り抜ける。そして何度も往復しやがる。超激痛の反復横跳びだこれは。ま、間違いない……今まで食らったローキックの中で一番痛い！　うがあぁぁっ、足が痛い！　し、死ぬ……足が痛くて死にそうだ！

「ぐ、ぐおおおおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉ！？」

ここで絶命しそうな人が一人いるのに誰も気づいてくれない。全員が空に咲き乱れる満開の花に夢中なのだから。あかん、俺の命も花火のように散ってしまいそうだ。がああぁっ、これ、ま、間違い、なぁ、く……お、折れてる……と思う。

「なんで……ボディーガードじゃ駄目なの？」

春日のローキックを食らい足は完全崩壊。片膝を地面についても手は離さない。なんか姫に忠誠を誓う騎士みたいだ。……あ、騎士か……カッコイイ。

「馬鹿」
「痛てて……馬鹿って言わなくても」
「大馬鹿」
「とにかくもう蹴らないで。今マジでヤバイから！」

はぁ……なんか間違えたかな？　ボディーガード良くね？　カッコイくね？　何が不満なんですか……うあぁ、まだ痛い。

「アンタは下僕」
「できたらボディーガ」
「下僕」
「はい」

あ、やっぱ下僕かも。春日の命令には逆らえないからなー。はぁ……我ながらナイスなアイデアと思ったのに。ボディーガードってそんな変？

「……兎月」
「痛てて、はいはい立ち上がりますから。そう急かさないで」

ぐいぐい引っ張りなさんな。血が滲んでいてもおかしくないであろうボロボロの足を奮い立たせ、春日の横に起立。ジュース買いに行くつもりだったけど、また後でいいか。今は空で華やかに輝く花火を眺めようではないか。

「綺麗だなー」

「……」

赤、青、黄に紫と色鮮やかに満開の花を絶えなく咲かせるその光景に息を呑むばかり。パラパラと儚げに夜空を舞い、静かに闇に消えていく姿も美しい。これまた音も綺麗なんだよね。風流があるというか。おぉ、花火ってすごい。こりゃ大勢の人が見に来るわけだ。これだけを見に祭りまで足を運ぶのもありだな。

「……」

隣のお姫様も花火に夢中……のはず。相変わらず表情は崩さず、ただじぃ～と空を見上げている。きっと楽しんでいるとは思うけど、もうちょい嬉しそうな顔をしてもいいんじゃないだろうか。そんな春日をチラ見する俺ですが、もっかい視線を上空へ。……春日に謝らないといけないこともあるし、ここで言っちゃいますか。

「……ごめんな」

「……何が？」

「さっき俺が遅れたせいで春日に怖い思いをさせてしまったから。ちゃんと謝ろうと思ってたんだ。本当にごめん」

「別に」

「そっか」

「……」

「……」

「……約束して」

「へ？」

花火もクライマックス。惜しみなく次々と巨大な花々が舞い上がり、空を埋めつくす。人々の歓声に混ざって耳に届いたのは春日の小さな声。

「……次はもっと早く来て」

……次はもっと早く来て、か……ふぅ、何をそんなこと。

「……」

「……早く来なさい」

「んなこと命令するなよ」

「え……」

手を思いきり握りしめてやる。力任せではなく優しく決意を伝えるように。花火はもういいや。今は春日を見つめていたい。花火がクライマックス？　そうは言いましても、俺にとって今この状況はそれ以上に大事な場面ですから。

「そんなこと俺は命令されてやりたくない。俺は俺の意思でそうする」

「……」

下僕でもボディーガードでも何でもいい。とにかく春日を守れるなら俺はなんであってもいい。何だってしてやるさ。春日を守れるなら俺はどうなってもいい。そう思えるようになった。

「春日を守る。絶対に守る。これは命令されたからじゃない。俺がそう望んで決めたことだ」

「……うん」

最後の一発。お祭りを締めくくる一輪の見事な花火が空を明かりで一杯にした。金色の花が散り散りと空の隅々にまで広がっていく。その光に照らされた春日の顔は微かだがしっかりと微笑んでいた。

やべ、花火以上に見入ってしまった。だって珍しいもん。春日が俺に笑いかけることなんてあまりないから。

花火も終了。すごかったねー、という言葉がそこら中から聞こえてくる。うん、すごかったねー。

「うし、水川達のところに戻ろっか」

雑踏に飲みこまれないよう手をしっかりと握りって移動を開始。ちゃんとジュースも買いました。春日の分も買ったら所持金はゼロになったけど。ちょっともうゲームを買うお金もなければ学校帰りにメロンソーダも買えないではないか。さすがに豪遊しすぎた？　いーや、待て。ほとんどは水川達に奢ったのと知らんおっさんの金魚すくいに付き合って使ったやつじゃないか。俺自身が今日のお祭りで口にしたのなんて、たこ焼きとこのジュースぐらいのもの。そう考えるとすげー腹減ってきた。ヤバ、帰りにパンでも……買えないんだった。あとで米太郎に借りよ。

「……兎月」
「何？」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……何か？」

じっくり待つ。パソコンの起動を待つが如く時間は惜しまない。春日はちゃんと喋ってくれる。……はず！

「……」
「……」
「……さっき、助けてくれた時……」
「うん」
「……」
「……」
「……その、言った言葉って……」
「へ……う、うーん？」

さっきナンパ男を撃退した時だよな。え……なんか言ったっけ？　あー、っと確か……春日ぁ！　とか叫んだような記憶はあるけど他に何か言ったかな？

「……」
「俺……何か言った？　夢中だったからよく覚えてないや」
「……」

うん……うん？　あ～……春日がナンパされていて助けに入って、その時に何か口走ったような……そんな気がするような気がしないこともない気がする。

「……俺の女に手ぇ出してんじゃねぇ……だっけ？」
「っ！？」

うおっ、そういやそんなことを叫んでしまった……！　うっ、なんてベタな台詞を……バトル漫画の主人公じゃないんだから。ま、周

りに誰もいなくて良かった。恥ずかしいだろ俺。

「あ、あれか……」
「……」
「……」
「……うれ」
「訂正な！」
「え……」

いけないいけない。また春日の機嫌損ねてローキックされたら敵わない。もう足はズタズタのボロボロだからぁ。

「俺の主人に手ぇ出してんじゃねぇ！　ほ、ほらこう。こう言いたかったの」

必死のフォロー。

「……」
「……」
「……」
「あ、あれ……？」
「……」
「ぐえっ！？」

ぐぬぅうおおぉぉっ！？　ま、またも……ローキックがぁ……！
し、死ぬ……今なら足の痛みで死ねるよ。ああぁっ、一体何が春日の気に障ったのか。ああぁっ、足の痛みがそれすらも掻き消すぅ！
痛いぃっ！

「……行くわよ」

「あ、あと二十分ほど回復の時間を」
「行くわよ」
「はい」

うあああぁぁ……生まれたての小鹿のようなガクガクの足を懸命に動かし前に進む。ただの要介護じゃねーか。手を繋ぎ、引っ張られて足を引きずる姿はまさにヘタレ。

「……」
「……」
「……」

そう……本当に……本当にヘタレだ。さっき……怖くなって訂正なんかした俺は本当にヘタレだ……はぁ、マジで情けない。傷つくのが怖いんだろーな。だから必死に訂正とか言って言い訳したんだ。すげー情けない。

「……いつかはっきりと言えるかな……」
「……兎月？」
「ううん、なんでもない」

いつか。ヘタレを卒業し、立派な男になれたなら。下僕の俺がボディーガードを通り越して騎士になれたのなら。お姫様の……騎士になれたなら。

「……」
「痛い痛い、そんな強く握らなくてもいいって。離さないから」

またあの台詞を堂々と言ってみたいな。……でもその前に、

「か、春日歩くの早い」

まずは自分の足で歩けるようになろうと思います。

第１１８話　勘違いに注意

「いやいや、心眼のスキルは必要だって」
「だからお前はいつまで経っても弓の良さが分からないんだ。一回ガンナーやってみ。世界が変わるから」
「最近ガンランスデビューしたんだ。今度狩り付き合ってくれよ」
「ガンスおもろいよな～。竜撃砲は浪漫やで」
「それよか村クエ最終がどうしてもクリアできんばい。装備が悪いんとか？」

授業の休み時間、教室のとある机では狩りについて熱り語られていた。無論、我輩も参加させてもらっている！　おっと、変な口調になってしまった。方言訛りの二人に感化されてもうたばい。ああっ、カルチャーショックで語尾が崩壊している！　それにしても休み明けだというのに、ここで狩りトークしている男友達の奴ら誰一人として恋愛関係の話を持って来なかった。なんと悲しいことではないか。青春真っ盛りの高校生が夏に何の色恋沙汰もなく、こうやってゲームの話題しかないってのは寂しいもんだ。下品な言い方になるけど、家の中でモンスター狩る暇があるなら外に出て女子をハントしろって話。とはいえ、こうやって嘆いている俺自身も彼女という心癒す美しき存在はいないわけで。ひじょーに悲しくもこいつらに混じってゲームの雑談で楽しんでいる狭き世界の住人なのさ。でも楽しいのでオーケーってことにします。

「なあなあ、兎月はどの武器が好きなんだ？」
「俺？　そうだな……」
「将也は二組が誇る双剣使いさ！」
「いやウサギは弓が一番やって。似合ってるさかい」
「兎月っちはハンマーも上手いじゃん」

「それ言うなら狩猟笛も扱ってるばい。マサは何でも扱えるから、どのクエストでもよかろうもん」

うおぉい、俺に喋らせろよ。つーか俺はどの武器も試したいタイプなの。そして俺のあだ名多くね!?

「へへっ、見てくれよー。ついに伝説の武器作ったぜ!」

ワイワイガヤガヤ……まあ正確には、ぐわんぐぁんギャーギャー騒いでいると一人のハンターが急にドヤ顔でゲーム機を取り出した。おいおい先生に見つかったら没収されるぞ?

「なっ!? それってイベクエじゃないと作れないやつやん!」

「おまっ、いつの間に。一人だけずるいじゃないか」

「この会心率で属性値も高いとはヤベェな。それにデザインカッコイイ~!」

さらに一段と盛り上がりを見せるハンター共。知らない人にしてみれば理解不能この上ない。何を話しているんだとほんのり冷ややかな視線を感じる。でもそんなのお構いなし、こいつらの狩りへの情熱はこれまた熱くなるばかり。さすが廃人を産むこともある危険なゲームのことだけある。どれほど魅力を語れども尽きることはない。今は補習が午前中で終わるから、プレイ時間も増えるってわけで、一人こっそりやりこむことも可能なんだよね。特に彼女いない奴なんかは……はぁ、悲しい。

「いいな~。俺もそれ欲し……あ」

「ん? どうし、た……あー」

「またか……」

「ふぅ……しゃーないよな」

するとどうしたことか。あんなに盛り上がっていたのからベクトルは逆方向を向いて一気にテンションダウン。暗いムードへと早変わり。先ほどまで熱く語っていた口々から聞こえるのは、溜め息と舌打ち。へ？　どうしたんだよ皆して。俺だけがどんより空気に取り残されているのですが……？

「急にどうしたよ皆して。何かあったのか？」
「……兎月っちにお客様だよ」

そして全員がチラチラと教室前方の扉辺りに視線を送る。つられて前方を振り向けば、そこにいたのは春日。我ら二組の教室前から春日が顔を覗かせているのだ。誰か探しているみたい。

「……行ってこいよ」
「は？」

どうしたの、さっきから暗いトーンで。狩りを語っていた時みたいに明るい感じで喋ろうぜ。修造風に言えば、もっと熱くなれよ！

「また春日さんがお呼びばい。マサが行かんでどうする」

ほらほら行った、となぜか溜め息混じりに背中を無理矢理押される。な、なんだよ揃いも揃って。……ま、まあ俺と春日はよく一緒にいるから、こいつらも春日が俺に用があると推測したのだろう。な、なんか照れちゃうな。べ、別に付き合っているわけじゃないのにね。つーか春日と俺なんかじゃ釣り合わないって。でも……そっか、周りはどう思っているのかな？　どう写っているのかな……。

「ごめんごめん。何か用？」

扉前に到着。いつものつり目が睨んで……こない。というか目が合わないのですが……。な、なんかいつもと違う感じ。

「えっと、紅茶なら昼休みに」

「違う」

へ？　あ、あの……春日さん？　ど、どうして目を合わせてくれな……ぐ、ぐぇ！？　春日はこちらを見ようとせず俺を突き飛ばしてきたではないか。な、なんすか。

「真美……」

「え……」

「真美呼んで」

そう言うと春日はさらに俺を突き飛ばす。ドンと突き押される。その勢いで教室の中へと戻された。へ……な、何？　真美呼んで……真美、真美って……マミー？　あっ、マミーだ！

「マミー！」

「マミー言うな。しかも大声で！」

阿吽とはこのことか。水川がすぐにいつもの返しをくれた。これはもう鉄板だね、ってそうじゃなくて！

「あの、さ……春日が呼んでる」

「恵が？」

キョロキョロしていたがすぐに春日を見つけて駆け寄る水川。二人で何やら会話をしだした。……お、俺はどうしたら？　俺には何の

用もなかったのか。と、水川がチラリとこちらを見た。しかしアイコンタクトを送ってきたわけではない。すぐに春日と向き合って会話を再開。そして二人揃ってどこかへと消えていった。……俺は何だったんだ？　ただの勘違い……って、恥ずっ。

「……」

無言で先ほどの机に戻る。誰も目を合わせてくれない。……なんだよ。何このフワフワした空気。フラれた友達を気遣うような取扱注意みたいな雰囲気は。ふ、フラれてないっちゅーに。

「まあ、その、兎月、ドンマイ……」
「なんだよそれっ！」

変な雰囲気の春日は何だったのだろうか。気になりながらも補習が始まる。もちろん聞いちゃいない。普段から聞いていないのもあるけど、春日のあの様子が頭にへばりついて授業なんか聞けるわけない。ただぼんやりと黒板を見つめるだけー。……やはり春日はよく分からん人物なのだろうか？　最近は理不尽なことを言うのも少しだが減ってきているし、パシリはもうなくなったも同然。前とかは毎日のように紅茶を買いに行かされていたけど今はそれもなくなったんだよな～。未だに無視されることもあるけど、こう改めて考えると春日も随分と変わったのではないだろうかと思う。それでもまだ不可解なこともあるわけでして。さっきの態度とか何だったのか……水川に用事で、それは放課後だと駄目なのかな？　今じゃないと……うーん、水川に相談したいこと。俺には相談しにくいこと。

お、だとしたらさっきの態度も説明がつくぞ。おぉ、俺ってば冴えてる！

「……づき。おい兎月！　聞いているのか！」

「んあ？」

「……教師に向かってそんな態度とは偉くなったもんだな。なら兎月、この問題解いてみろ」

苛立った面立ちで数学教師がチョークで黒板をトントンと叩いていた。ズバンと睨まれる俺、ついでにクラス中の視線が突き刺さる俺、そんな俺。疑問、焦燥、緊迫、難解、醜態、あらゆる心情及び現状が頭を飛び交い、そして一つの答えを導く。

「分かりません」

「そうか。なら真面目に授業に参加しろ」

授業を再開する教師と、くすくす笑うクラスメイトの皆さん。こんな辱めを受けるなんてあんまりだ……恥ずかしい。つーか授業なんか聞いてられるか。春日のことが気になっているのによ、って……さっきから春日のことばっかり考えている。どうしたんだろ……って、ああもう！

「起立、気をつけ、礼」

「ありがとうございました」

一時限目の数学がまともに受けれないのだ。続く英語、国語がまともに授業聞けるわけがない。俺の妹がこんなに可愛いわけ……あ、いや俺に妹いないわ。とまあ、ぼんやりしていると気づけば放課後。頼りにならないけど頼りにするしかない米太郎も部活へと向かったようで教室にはもういない。本当にタイミングの悪い奴だ。俺のモ

ヤモヤを聞いてほしかったのに。……なんか最近、妙にモヤモヤするんだよな……。ムラムラじゃない分マシではあるけど。なんか、こう……春日のことをよく考えるようになったというか……あれ……何を言っているんだ俺？

「兎月」

「むむっ？」

なぜか面白い反応をしてしまった。でもそれでいーんですっ。

「ちょっと来てちょーだい」

補習は午前中で終わり、今はお昼。その放課後に話しかけてきたのは、あらあらまあの水川さん。一体俺に何の用でしょうか？

「って、どこに？」

「いいからついてきて」

そのまま水川に手を引っ張られて教室を出る。ちょっぴりドキドキっ。うへぇ？　どうしたんですか水川。訳も分からない状態なのに水川からは何の説明もなし。黙って廊下を歩き、階段を下りて、また階段を突き進む。一体何……うん？　一時限目前の休み時間に春日と話していたのも何か関係が？

「なあ水川、もしかして春日に相談されていたことか？」

「ふぉ！？　うん、まあそうだよ。ほほぉ、兎月にしては鋭いじゃん」

でしょ。なんか冴えてるよ俺ってば！　とか自惚れているうちに水川はどんどん歩いていく。校舎を出て迷いなく歩いていく～……ん

？　こっちの方向って確か、体育館じゃん。夏の補習中は行くことのなかった体育館へと到着。バスケ部でもバドミントン部でもバレーボール部でもエアロビクス部でもカバディ部でもない俺は体育の授業じゃない限り訪れない場所だ。と思ったら、水川は体育館の横を抜ける。ダムダムとバスケってる体育館の中に用はないようだ。体育館の横をぐるりと回りこんで体育館の裏へとやって来た。あっ、待てよ。ここは不良達と戦った場所ではないか。もう随分と昔のように感じるなぁ。火祭を助けるために百人近い人が集まってくれたんだよね。あの時は本当に感動したよ。百人集まったこともある場所なんですが普段はこのように人気のない場所なんだけど……あ、水川が止まった。目的地へと到着したらしい。ここ……って、なんか人気のない……って、なんだって！？

「でね、兎月」

「うっ？」

え……何これ。いやいや俺だってお馬鹿さんじゃない。このドキドキと胸騒ぎにピンときた。こんな、あの……なんてーの？　このさ、えーと……こ、告白するのに超ぴったりな場所っていうのかな？　だって体育館裏だなんて告白する以外に存在価値ないようなものだし。あとは不良とバトルぐらい。よく漫画で見るよね、体育館裏で告白するのって。告白するなら体育館裏か屋上か放課後の教室だ。そう教科書に学びました。その体育館裏という三大告白スポットに女子に呼ばれたって……み、水川あ、あの……ちょ、マジっすか！？　嘘っ、水川って……実は俺のことが……っ！？

「恵についてなんだけどぉ」

「春日？」

「うん、後ろにいる恵」

う、し、ろ……だと？

「……」

「ぎゃはぁうわぁ！？」

ギョギョと奇妙な声が捻り出た。さっきまでとは違うドキドキが嫌な感じで胸に広がる。真後ろには春日が立っていた。だぁ、かぁ、らぁぁ！　気配もなく後ろに立つんじゃないよ。何なのあなたは。暗殺者？　暗殺者なの？　もしアサシン検定なるものがあったら文句なしの1級合格だ。それほどに春日の背後を取る技術は極致に達していた！

「か、春日？」

「……」

春日はすごく気難しい顔をしていた。表情変化に乏しい春日だが、この表情は見るの初めてかも。なんか、困ったような顔っていうか、うん……困っている様子が表情から伺える。

「実は兎月に頼みたいことがあってさ～」

いつもの調子で話し出す水川。……もしかして水川から告白されるのでは、と一瞬でも期待してしまった自分が情けない。改めて考えると絶対違うわな。春日関連の話って言っていたし、それは俺も察していたじゃん。俺ただの馬鹿だろ。へへぇー、ぬぁさー、ぶぅばぁ。奇声と一緒に不完全燃焼のときめきを吐き出さないとやってられない。もちろん口に出すと春日に蹴られるので声には出さず心の中で発している。なんと不憫で可愛想な将也きゅん。

「おーい、兎月聞いてる？」

「聞きなさい」

痛い痛い痛い痛い……はぁ。

第１１９話　さらなる勘違い野郎に注意

体育館の裏という告白するには持ってこいの場所にて、俺と春日は突っ立っている。何をするわけでもなく、ただぼんやりと。告白する場所だと言いましたが、俺から春日に告るわけではない。ましてや春日から俺に、ってわけでもない。さらに言えば今はここにいない水川から告白されるなんてこともありえなーい。そんなノーリスクノーリターンな俺がここにいるのには理由がある。それは、今はこの場にいない先ほどの水川による一言だった。

「もうすぐ恵が告白されるの」

はぁ？　とりあえず意味不明だったので説明を求めた。どうやら水川の話によると、今からこの体育館裏で春日が告白されるらしい。今朝、春日の机の中に恋文なるものが入っていたそうな。王道の攻め方、ラブレター作戦ですね。成功率はあまり高くないような気がするが、それはまあ置いといて。春日の机に入っていたラブレターには、放課後ここに来てほしい、と書かれていたんだそうで。さすがは春日さん、モテますねー。ふぅ……大人気ですねー、はぁ……って、別に俺は落ち込まなくていいんだよ。と、とにかく春日もさぁ、それ相応の態度を取ればいいんじゃないの？　呼び出した相手と付き合いたいなら告白されてオーケーすればいいし、また嫌なら断ればいい。至極簡単なことじゃないか。それに春日は何度も告白されているのだから断るのには慣れているはずだ。しかし、そう、しかし。ここ大事ー！　と水川が高らかに喋りだしたのは十分前のこと。

「ごめんごめん、待たしたかな？」

春日と黙って待機していると、一人の男子生徒がやってきた。眼鏡をかけた長身の短髪、それくらいかな特徴は。なるほど、こいつが山田君か。二年四組の山田君。春日にラブレターを出した人、と水川が十分前に説明してくれた。もちろん俺は面識ありません。水川に聞いた話の性格だと……

「ちっ……どうやら関係ない奴がいるようだな」

山田君はすぐに俺の存在に気づき（まあ横に立っているから当然か）、すぐさま敵意を向けてきたではないか。おおー、いきなり威嚇ですか？　勘弁してほしい。確かに今から告白する山田君からしてみれば俺は邪魔なだけ。武蔵と小次郎の決闘の場に魔法使いがあぐらをかいているくらい邪魔だ。リラクゼーションタイムは自分の城で満喫しろってクレームをつけてやりたいよね。はい話がボール二個分逸れた！　つまり俺は邪魔者であり山田君はこの場から俺を排除したいだろう。……まあ、その告白が一回目なら俺も空気読みますがぁ……あなたこれで六回目の告白じゃないですか。

「あぁ、麗しの春日さん。そろそろ俺の思いに答えてもらえるかな？」

「……」

春日は超嫌そーな顔で山田君を睨んでいる。嫌悪感が滲み出ていますね、隣に立っているとすごい伝わってきます。あっちとこっちで温度差が激しすぎる。とまあ、ここで問題が生じているのだけど……話によると、山田君は春日に何度も告白してくるらしい。断っても断ってもしつこく求愛してくるのだそうだ。また今日も机にラブレターを入れて春日と二人きりになろうとしてきたんだって。

「俺のこと好きなんだろ？」

「……嫌」

「またそんな照れちゃって～。素直になっていいんだよ？」

おぉ、これのことか。さらに水川の話によると、この山田君はかなりイカれた勘違い野郎みたいで、自分は春日と相思相愛なのだと思いこんでいるんだそうだ。俺は春日さんが好き、春日さんも俺が好き。彼の脳内ではそんなことになっているそうで。春日が何度断っても聞く耳を持たず、好きだ好きだ好きなんだろ？　と連呼するんだって。男の俺からしてみても気持ち悪いと思う。しつこい男は嫌われるって恋愛マニュアル本の第一章に書かれていただろ。もう一回読み直してこい。春日にしてみれば山田君は迷惑でしかないのです。しつこいしウザイし気持ち悪い、と我慢の限界。春日は水川に相談したのだ。それが今朝の出来事。俺が突き飛ばされたやつだ。そんでもって俺が水川によってここに呼ばれた理由なのですが、

「あの、さ、山田君？」

「ちっ、邪魔すんなよ。春日さんが、愛してると言うところだっただろうが」

いやいや違うから。春日はお前のこと嫌ってるらしいから。……俺がここにいる理由、それは春日を守るため。このしつこい勘違い野郎がもう二度と春日に言い寄らないにしてこいやぁ、と水川に命令されたのだ。恵もそれを望んでいると後付けされて。要するに俺は山田君を説得すればいいわけだ。山田君も六回目となると何をしてくるか分からない。こんな人気のない場所で山田君が襲ってきたりしてくれれば……春日が危険だそうで。俺は春日の守り役と山田君の説得役としてこの場にいるわけなのだ。

「えっと……まず始めに、春日が嫌がっているってことを分かってくれない？」

「だから邪魔すんなよ。どっか行け、消えろよ。さあ春日さん、言っていいよ」

聞いた通り、本当に話を聞かない奴みたい。うっ、このタイプは超厄介な気がする。自分と相手が両思いだと信じて疑わない、何言っても通じない奴だ。もし春日じゃなくて水川だったとしよう。水川ならビシッと断るに違いない。それでも折れないタフな勘違い馬鹿、それがこの山田君タイプの人間。ましてや水川と違って春日がビシッと言えるわけない。ただでさえ無言無表情なのに。で、俺が代わりに言えばいいわけね。ってそれなら水川でも良くね？

「さあ春日さん！」

「……嫌」

こんなに嫌な顔した春日は見たことない。あるとしたら金田先輩と婚約騒ぎになった時だな。あの時の春日も嫌そうにしていた。こんなに春日嫌がっているのに……気づけよ山田君。逆に君が哀れになってきたぞ。

「……兎月」

山田君の熱い眼差しに耐えられなくなったのか、春日が俺の後ろに隠れた。春日の手の温もりが背中に伝わってくる。……ん？

「……そこどけよ」

まるで物語の主人公が言いそうな台詞を吐いて山田君が睨んでくるではないか。あんな台詞、俺なら言えないっす。

「いや、どけって言われても。俺が動くと春日も同じように動くと

思うよ？」
「お前、二組の兎月だろ。佐々木とよく一緒にいる奴だ」
だから話聞けよ。会話が成り立っていない、って今あいつ佐々木って言った？
「佐々木って米太郎のこと？」
「そうだよ」
う、うおおぉー！？　やっと会話出来た。まともな応答はこれが初めてだ。やったね。というか山田君は弓道部だったのか。明日、米太郎に話してみよう。ん？　米太郎の奴はもう部活に行ったのにどうして山田君はここにいるんだ。君も部活に参加しなくていいのかい？
「それに春日さんにいっつも付き纏いやがって。春日さん嫌がってるだろうが」
いやいや！　春日が嫌がってるのはお前だからね。むしろその台詞は俺が言いたいくらいですよ。でも言ってもこいつ絶対聞かないだろうね。
「だから山田君、これ見て分かる通り春日が恐がっているからさ」
「……お前、春日さんのなんだよ」
え？
「いつも春日さんの傍にいやがって……お前は春日さんの彼氏なのか？」
「ふえ！？」

いやっ……その……えっ、と……か、彼氏、じゃない……けど。まあただの下僕ですね……。

「おいどうなんだ。彼氏なのか？」

「ぃや……彼氏では、ない、けど……」

「だったら春日さんから離れろよ。俺達の邪魔すんな。では春日さん、愛のメッセージを俺に聞かせて」

うっ！？　ば、馬鹿野郎。何をうろたえてんだ俺は。お、落ち着け。動揺するな、こんな奴の言うことに押されちゃ駄目だ。た、確かに俺は春日の彼氏じゃないよ……。だからといってこのまま言い負けて春日を守れないなんて惨めすぎる。それじゃあの時と一緒だ。あの、金田先輩との婚約騒ぎの時と同じヘタレじゃないか。他人に言われて大人しく従っていたらまた後悔するだけだ。そうなりたくないだろ。別に彼氏じゃなくてもいいじゃんか。春日を守るのは俺！

お祭りの時に約束しただろうが。てことで俺は逃げません！

「ほらどけよ。彼氏じゃないんだから」

「いや、まあ、彼氏じゃないけど……。でも春日が嫌がっているのは目に見えて分かることじゃん。そんな強引に迫るのはよくないと思うよ」

「ああ春日さん、そんな恥ずかしがらないでいいんだから」

ゆっくりこちらに近づいてくる山田君。無論、俺に対しては威嚇しながら。この馬鹿はとことん話を聞かないみたいだ。耳の検査受けてこい。山田君が近づくと春日が背中を抓ってきた。痛い痛い、なぜ抓る。そして微かに震えている春日の指先。春日も嫌で仕方ないのだろう。そりゃ拒絶しても何度も迫ってくる奴なんて恐いだけだ。実際、俺もこいつと会ってから嫌悪感しか出てこない。なんと言う

か……こんな馬鹿に春日の魅力が分かるのだろうか。

「なあ山田君」

「うるせえどけ」

話聞けよ。

「春日のどこが好きなの？」

「あ？　……そうだな。まあ容姿だ。それと春日さんが俺のこと好いていること。好意には好意で返さないとな。ほら分かったらそこどけよ」

……うぁー……なんだろー、この気持ち。沸々と怒りが煮えたぎるようなこのムカムカする気持ちは。とりあえず、こいつ超ムカつく。春日のこと何も分かっちゃいない。春日ってのは、理不尽でワガママで意味もなしに殴ったり蹴ってきたり、おまけに人を下僕扱いするような奴なんだよ。でも……でもなぁ！　気丈に振る舞うけど本当は恐がりで気弱な女の子なんだ。そんなこの人を守ってあげたいと思える人なんだ。そしてたまに見せる笑顔は超可愛い。暴力振ってくるけど、一緒にいると気持ちが安らいで落ち着ける。一緒にいたいと心から思える人なんだ。お前はそれを知っているのか？　春日の笑顔見たことあんのか？　容姿しか見ていないお前に本当の春日の姿が見えているのかよ。春日の良さを知らないお前なんかが！

「さあ春日さん、君の気持ち聞かせてよ。そんなの知っているけど君の口から聞きたいな」

「るせぇ……」

「え？」

「うるせぇんだよ」

駄目だ、もうムカつきすぎて頭回らん。抑制が外れて、こいつに対する嫌悪感で頭が沸いてしまった。なんだこいつ、何も分かっていないくせに偉そうにベラベラと。春日の魅力を知らないくせに何をほざいているんだ。あぁムカつく！　心底ムカつく！　とめどなくムカつくぅっ！　勘違いするにも程がある。春日の気持ちを分かってあげないくせに何が好きだバカヤロー。山田君、いや山田。お前なんかに春日を渡せるわけないだろうが。

「おい山田」
「なんだよ」
「二度と春日に近づくな」

キレました。この馬鹿マジでムカつく、イラつく、腹が立つ！　夏祭りの時も暴れてしまったけど、なんか俺って最近キレやすい？いかん、このままでは将来は波平じゃないか。しかし今はこの山田に、ばかもーん！　と怒りをぶつけてやりたい。波平が怒るのもカツオに愛があってのこと。俺だってそうだ。ただし、山田に対してではないけど。

「なんでお前にそんなこ」
「二度と近づくな！」
「なっ！？」

口で言っても聞かない馬鹿だ。両手で思いきり突き飛ばしてやった。驚いた表情で地面に倒れる山田。ぎょっとした顔でこちらを見てくる。ちょっとは正気に戻ったかよ。山田を見下ろして思いきり息を吸いこむ。感情全てを声に変えてぶつけてやる！

「二度と春日に近寄るな。春日の良さを知らないくせに！」

「う、うっ？」

地面でうろたえる山田を無視して春日の手を掴む。もうこいつに用はない。こんな奴なんて知ったこっちゃない。ああ時間の無駄だった！

「帰るぞ春日」

「と、兎月？」

春日の手を引っ張って体育館裏から出る。山田なんか完全無視だ。次会ってもシカトだボケェ。そしてまた春日にラブレター書こうものならすぐに破り捨ててやるわ。激しい怒りを抑えつつ廊下を突き進む。春日の手を握ったまま。……あー……っ、ちょっと歩いているうちにすぐ熱が冷めた。ものの数秒前まで荒ぶっていた感情も今では落ち着いてしまった。冷静になってさっきの出来事を振り返る……う、うわぁ……俺はなんて恥ずかしいことをしたんだ。ば、馬鹿じゃないの！？　まるで主人公みたいな台詞を言っちゃってさ……っ、…恥ずかしい……。ヤバイ、顔が燃えるように熱い。俺はなんて恥ずかしい漫画の主人公みたいな台詞を言ってしまったんだ。顔が熱すぎて溶けてしまいそう……。

「……兎月」

「……何？」

春日が話しかけてきた。もちろん顔なんて見れない。だって俺の顔すげー赤いもん。顔から熱が溢れるのが自分でよく分かる。こんなの春日に見せられない。

「……怒ってる？」

「今は怒ってない」

「さっきは？」
「……怒ってた」

だってあの馬鹿、何も分かってないから。春日の魅力知らないくせに春日のことを自分の物のように言いやがるし。春日はお前の物じゃないっつーの。あの態度がすげームカついた……って、落ち着けって俺。もういいから！　また我を忘れて叫んでしまうのはごめんだ。いいから落ち着くんだ！　顔の熱よ頼むから引いてくれえぇぇ。

「あ、あのさ……」
「……何？」
「春日ってあんな感じで結構告白されたりするの？」
「……あそこまではないけどよく告白される」
「……そ、そっか」

やっぱ話に聞いていた通り春日ってモテるんだよな……ふんっ。どーせ、春日の容姿だけに惚れてる奴らばっかりなんだろ。春日の本当の良いところ知りもしないくせに。山田にしろその他告白する奴らにしろ、春日に近寄るな。春日の魅力の一割しか知らない野郎どものくせに。そりゃ春日可愛いけど、それは魅力の一つでしかないわけで。もっと春日の良いところはたくさんあるんです。一緒にいて心が安らぐこととか一緒にいない奴らなんかに分かってたまるか。

「兎月、顔赤い」
「っ！？　あ、赤くない」

いつの間にか春日が横に並んでこちらを覗いているではないか。ヤベ、赤面モロに見られた。恥ずかしいよこれ。なんか俺が嫉妬しているみたいでさ……べ、別に俺は何も思ってないから！　うっ……

春日がじっと見つめてくる。な、なんですか？　あんましこっち見ないでよ。さらに顔が赤くなるから！

「……兎月」
「な、何？」
「顔赤い」
「……赤くない」

そう言われるとさらに顔が赤くなるんですけどぉ！　ううぅう、こっち見ないでぇ！

「……さっきまた机に手紙入ってた」
「え……」
「山田君じゃないよ。たぶん違う人。また断らないといけない」
「ふ、ふーん」

な、なんでそれを今このタイミングで言うのさ。それにまた違う人って……春日どんだけモテるんだよ。……むぅ、なんかイライラする。べ、別に春日のことじゃないんだからっ！　ふん、また春日の良さを知らない奴だろう。春日って人気高いな……むぅ。

「……兎月」
「……何？」
「拗ねてる」
「っ……拗ねてない」
「不機嫌？」
「ふ、不機嫌じゃない」

な、なんで俺ってばこんなに不機嫌なんだ？　なんでこんなに嫉妬しているんだよぉ。お、落ち着けってマジで！　冷静になろう、う

ん。そうだ深呼吸だ。すー、はー、すー、はー……ヤバ、全然気持ち落ち着かん！　おいおいどうしたよ俺、何をこんなに苛立っているんだい。ええどうしたんだい俺の筋肉！　いや筋肉じゃねえわ。と、とにかく。とにかくだ！　別に春日が人気高くてもいいじゃん。男子からモテモテなのは前から知ってるしぃ？　俺は何も思わなくていいじゃんか。べ、別にムカつく必要ないしぃ？

「兎月……妬いてる？」
「……別に」

春日のパクリです。別に妬いてなんかいない。ふんっ、なんで俺が妬く必要があるんだい。……むぅ。

「……」
「……」
「……」
「兎月」
「……何？」
「馬鹿っ」
「はい！？」

今までも突然馬鹿って言われることがありましたが今回のこれはさすがに不意打ちすぎる。な、何も俺は馬鹿な発言をしちゃいない……はず。意義を申し立てようと隣を振り向く。もう顔が赤いのはバレているしヤケクソだ。赤面フルオープンで隣を歩く春日を見れば……ふえ？　な、なんで……なんで春日は笑っているんだ？

「帰るわよ」
「え……ちょ」

嬉しそうな微笑を浮かべる春日。なんか余裕があるって感じ？　こんな風に笑うのは見たことないかも。つーかなぜ笑っている？　俺か、俺の顔が赤いから面白いのか！？　あかん、この敗北感はなんだろう。くそっ、米太郎を殴りたい。今そう思った。よし明日思いきり殴ってやろう。いつもの遊び感覚のやつではなく、もうガチの喧嘩に発展しそうな勢いで殴りまくってやる！　とりあえず今日はもう駄目だ……感情が変になってる。それと……なんか春日が嬉しそうなんですが……。何か楽しいことでもあったのかな……あぁ、山田を追い払えたから？　いや……待て、なんか他に理由があるっぽいぞ。俺の反応を見て笑っている気がする。やっぱり顔赤いのからかわれているんだな……うぅ。

第１２０話　誘拐再び？（前書き）

第１２０話　誘拐再び？

翌日、

「うほほー、おはよう将也ぶべらぶぉんじゅでぶぶぷぅ！？」

トマトを美味しそうに頬張る米太郎の顔面に会心の一撃を放つ。右ナックルはクリティカルヒットしたようで米太郎は床へと沈みこんだ。ふぅ、気持ちの良い一発が決まったぜ。

「何すんだよ！？」

すぐに回復しやがった米太郎の顔は赤い液体で染まっていた。まるで出血しているかのように……！　ただ潰れたトマトを浴びただけですがね。見ていて汚いのでティッシュを渡す。

「ったく朝から何がしたいんだ。意味不明将也」
「ごめんごめん。ちょっとムカついたことがあってさ」
「昨日の山田とのごたごただろ」

え、もう知ってるの？　山田と米太郎が同じ弓道部だから聞いてみようと思っていたところなのに。やれやれせっかくのハンサム顔が、とか言いながら顔を拭き終えた米太郎は新たにタッパーからトマトを取り出し、かぶりつき始めた。いいから早く話せよ。どうして昨日のことをもう知っているんだ。

「山田が春日さんにゾッコンなのは前々からさ。それであいつ部活サボって告白してるし、さすがに先輩がキレてさ。昨日ちょっと説教してやろうと先輩が言いだして俺達部員が山田を探していると、

あの馬鹿また春日さんに告白してるじゃんか。お前が山田を突き飛ばした後、部の先輩数人が山田にヤキを入れていたのさ。山田をボッコボコ～」

なんとそんなことが後日談として存在していたのか。ボコボコとはひどいな。少し山田が可哀想に思えて……こない！　あの勘違い野郎には良い気つけ薬だ。ざまーみやがれ～。ちょっとは反省しろ。そして二度と春日に近づくな！　あと、昨日のこと見られていたのね……。あんな主人公みたいな台詞を聞かれたなんて俺もう恥ずかしくてお嫁に行けない！

「山田は人の話を聞かない奴でさ～。部でも困ったもんだった。こっちをイライラさせるもんだから、それで先輩はいつか活入れてやるってやる気満々だったよ」

「やっぱあいつ人の話聞かない奴だったか」

「ま、昨日のアレに懲りて山田も大人しくなったと思うぜ」

ムカついたわあれには。ちょっとは会話をしようと思えよ。春日もたまに無視するけど、それとはまた違ったやつだから。それに自分と春日が相思相愛だって勘違いしているし。イライラしたわぁ。

「それにしても山田も馬鹿だよなぁ。春日さんが山田なんかに振り向くはずないのにね。だって将也がいるんだから」

「その通りだ。下僕の俺がいる限り春日には指一本触れさせやしない！」

「……いや、うん。まあそれでいいならそれでいいけどさ」

え、何その反応？　なんか台詞を間違えたみたいなこの空気は何だよ。

夏バテという言葉がある。夏の暑さにバテてぐったりするということ。今まさに机に突っ伏してぐったりしている俺はその状態と言えよう。教室の中は冷房が効いているとはいえ、廊下に出ようものなら容赦なく熱気が纏わりつき、外に出ればさらに直射日光も襲ってくる。その灼熱地獄を味わって学校に登校。朝でそれだったなら太陽が真上でギラギラと燃える現在昼はさらに気温は上昇していることだろう。

「……帰りたくねー」

そんなことを呟いてしまう。だって外めっちゃ暑そうなんだもん。陽炎見えるんじゃねぇの？　ユラユラと揺れる景色が頭を巡る。あ、本格的に外に出たくない。この冷えた教室でのんびりと……

「クーラー切るぞー」

担任が冷房を切りやがった。テメェ……自分が教室から出た途端エコ気取りかコノヤロー。そうだよなぁ、職員室戻ったらクーラー全開だもんな。ふざけんじゃねぇぞエセエコエロ教師が。ぐぬぁ、暑い。風の精霊が消えた今、また蒸し暑さが徐々に広がってきた。

「あぁぁぁ……暑い」

夏休み補習。それも残り三日となった。そしてあと一週間で二学期が幕を開ける。楽しかった夏休みが終わりを迎えようとしているのだ。なんてことだ。つい最近まで金田リゾートで遊んでいたかと思ったら気づけば終了カウントダウンに突入しているだなんて。うおおぉ、時間よ止まれ。というか逆戻りしろ。あの頃の若かりし時にー……はぁ、逆らえぬ時間の流れ。こうしているうちに夏休み終了は刻々と迫っている。できもしないストップの魔法を唱えるぐらいだったら何か別のことをした方がいい。深夜番組『おねだりブルーベリー』を語る方がまだマシだ。たぶん。

「よし、図書室に行こう」

あそこなら冷房効いてるし快適に過ごせるぞー。ははっ、なんて有意義なる放課後ライフ。てことで早速移動。久しぶりに図書室で知的アピールでもしますか。受験生の三年生には迷惑をかけないようにね。そこ大事。

「あ、春日に言わなくちゃ」

ここ最近はずっと春日と一緒に登下校している。先に帰っていいよと言うのか、一緒に図書室行かないと誘うのか。個人的には後者が望ましいけど春日お嬢様は気分で決定してしまうからなー。こちらの意見が通らなかったのが何度あったことやら。

「一組はまだホームルーム中か」

ちょいと一組を覗けば教壇には教師。何やら喋っている。教室の中には火祭そして春日の姿も。ホームルーム長くね？

「む？」

ふと春日と目が合った。つり目がこちらを睨んでくる。ホームルーム長いのはそちらの担任に申してください。俺に言われてもどーしようもありません。お、そうだ。図書室にいることをアイコンタクトで伝えてみよう。米太郎相手にアイコン出来るのだから春日にも出来るはず。目に力を込めてじっと春日を見つめることに。

「……」
「……」
「……」

ぬあ、春日が目を反らした。ちょっとぉ～、ここでも無視しますか。いやまだだ。負けるか、まだまだアイコンしてやる。やーい、こっちは必死にメッセージ送ってんだ。反応してよ。受信してよ！

「ぐぬぬぬ～」

しかし春日はもうこっちを見てくれない。これだけ情熱と思いを込めた視線に気づかないわけない。春日はわざと無視しているのだ。あのご主人様は……！　上等だ、振り向くまで見つめ続けてやる。俺の眼力なめんなよ。ぜってー振り向かせてみせる。おっ、なんか今のって良い台詞？

「二組の兎月だな。そこで何してる」

ガラガラと扉の開く音。春日を振り向かせる前に俺が振り向いてしまった。一組担任教師が怪訝な顔つきで俺を睨んできた。ははっ、は……そりゃ他クラスの奴がじっと教室を見つめていたら不自然だ

よね。すごい数の視線を感じる……気まずい。今や一組全員が俺の方を見ていた。ただ一人、春日を除いて。

結果、一組教師にたじろいだ俺は名前にもある『兎』の文字、つまり脱兎のごとくその場から立ち去った。軽く辱めを受けて図書室に行くのも嫌になったので大人しく帰宅することに。バスに揺られ降りて歩いてフラフラと家近くに到着。やっぱ暑い……雲一つない空を太陽が支配している。暑っ、いやもう暑いとしかコメントが出てこない。コメントが二つの意味で炎上だよ。昔からよく言われている言葉として心頭を滅却すれば火もまた涼し、ってのがある。無念無想の境地に至れば火さえも涼しく感じられるという意らしいが、はっきりと否定してやる。そんなわけない。火が涼しかったら火の存在意義はどうなる。夏はいいさ。けど冬は？　それっぽいことわざ作った人も冬は火で暖を取ったんだろ。その時の火は涼しかったのですかって話だ。自分の都合でコロコロ変えるもんじゃない。火は熱い。その固定概念を崩しちゃいかんよ。てことで今は超暑い！

早く部屋で涼しみたい。心頭を滅却しなくともクーラーは涼し。これこそ名言だ。

「うっしゃあ、家にゴー…ル？　携帯が……」

ブルブル震えだした携帯のサブ画面には電話マークと春日恵の文字。春日からの電話……お、春日からの電話してくるのって初めてだ。電話で話したことはあるけど春日の携帯からかかってくるのはこれが初。一体どうしたのやら。

「もしもーし」
『……』
はい春日。これ春日。もしもしとか声聞こえないけど分かる。この沈黙は春日の証。
「どしたの？」
『……兎月』
「はいこちら兎月でーす。ご用件の方承りますよー」
こんなおどけたらローキックが飛んでくるだろう。しかし電話の世界に肉体暴力はナッシング。春日の気に触れる馬鹿げた態度を取っても蹴られないのさ。うわっ、電話って最高じゃん。
『……』
「で、何か？」
声が聞きたかった……なんて言われた日にはもう嬉しさ爆発で太陽にまで飛んでいくね。それだとイカロスの二の舞。まあ春日が「声が聞きたかった……」なんて嬉しいことを言ってくるなんてことは天地がひっくり返ってもありえないから大丈夫。イカロスの二の舞にはならない。
『……今どこ？』
「へ？　いやもう家の近く」
『……』
「どうかした？」
『……戻ってきなさい』
……はぁっ！？　な、何を言っているんですかい春日さぁん！

今やっとここさ炎天下の道を通って家近くまで帰ってきたのに……
今から学校にリターンですって～!?

「なんでだよ、もうそんな気力は残っ」
『戻ってきなさい』
「はい」
『ピッ』

……はは っ、こういう時に自分のヘタレ魂に心底溜め息が出るね……泣きそう。電話越しでも命令されて大人しく従う自分に呆れてものも言えないや。はぁ、引き返しますか。

「悲しき下僕の～運命～……ん?」
「ターゲットは一時停止して通話を始めた……と」

そこの曲がり角から何やらごにょごにょと声が聞こえる。そんなの普段なら気にもとめないが、な～んか胸騒ぎがした。ざわざわ…と変な雰囲気を感じ取ったのだ。ウイイレ大好きな第六感が何かあると忠告している。てことで忍び足で移動して声のする方に接近。

「話の内容は聞き取れない……これ以上の接近はターゲットに気づかれる恐れがある……と」
「アンタ誰?」
「うっひゃあぁぁっ!?」

そこには黒いスーツに身を包んだ男性がいた。サングラスをかけたそいつはどうみても怪しい奴。ぶつぶつメモを取っていたが、こちらが声をかけると悲鳴を上げて尻餅をついた。手元から落ちる手帳とペン。なんだこいつ。なんか怪しい。ストーカーか?

「何しているんですか？」
「がっ、は……べ、別に何も？　ただ日課のジョギングをしていただけです」

黒スーツでジョギングしてるってすごいな。どんな逆境プレイ？
嘘つくの下手だな～。テレホンショッキングですと言った方がまだマシな言い訳になりそうだ。ほらグラサンかけているし、馬鹿な奴だったら騙せるよ。百人にやったら一人くらいならいけそうだよ。やったね、ストラップゲット。ん……んん？　なんか……どっかで見たことあるような……誰だっけ？　名前が出てきそうで出てこないこの感じ……たいした知り合いじゃないけど一応知っている人の名前を思い出すような歯痒い気持ち。誰だろこの人、どことなく既視感があるんだよなぁ。

「あの……どこかでお会いしましたっけ？」
「べ、べ別に？　ひ、人違いですにょ」

噛んだ。いやそれより、この声も聞いたことあるよーなー……ん？
黒スーツにサングラス……一つだけ思い当たる節があるぞ。

「グラサン取れ」
「へ？」
「いいから取れ」
「あっ」

無理矢理サングラスを弾き飛ばす。この目……この弱々しい目つきは……思い出したぞ。

「お前……誘拐犯Ａだな」
「っ！」

間違いない。この弱々オーラは誘拐犯Aだ。あれはまだ下僕ライフが始まって間もない四月の半ば頃、春日が謎の三人組に誘拐されたのだ。懐かしいなー、全力パシリをされていた時のことだ。あの誘拐事件は普通に驚いた。だって目の前で春日が誘拐されたのだから。そんでもって春日父の馬鹿うるさい大声で命令された俺は春日を助けに誘拐犯を追跡。廃屋に拉致った春日に対して殴ると脅していたこの誘拐犯Aと対峙。やたら殴るとか連呼していたが、いざ闘ってみると思いのほか弱く俺なんかの蹴りをモロに食らい崩れ落ちた激弱野郎。タバコ吸いてぇとか喧嘩してぇとかほざいている奴ほど何も出来ない臆病者だというパターンの奴だったんだよねこいつ。そして救出に駆けつけた春日父によって拘束された後そのまま海に捨てられたのかと思っていたが……この様子を見る限りだと無事だったようだ。久しぶりー、もう会うことはないと思っていたのに。

「なんでここに誘拐犯Aがいるんだよ。他の二人は元気か？」

「お、お前には関係ないことだ」

「あるだろ。いいから答えろ」

軽くビンタするとAは、あぅと小さな悲鳴を上げて地面に倒れた。ちょっと涙目。なんだこいつ、さらに弱くなってるぞ。こいつ俺以上にヘタレ？　そのくらいで半泣きになるなよ。俺がイジメてるみたいじゃんか。お前が口先だけのハッタリ野郎なだけのくせに。

「うっ、あいつらも無事だ。あの人は軽く事情聴取したら俺達を解放してくれた」

あの人……春日の親父さんか。良かったな海に沈められなくて。あれに懲りてもう誘拐なんてするんじゃ……あぁん？

「で、なんでここにいる」
「え……」
「どうして俺を尾行していた」

後ろでコソコソしていて何やらメモを取っていたことから尾行していたとしか考えられない。俺を尾行して一体……いや違う。目的は俺じゃなくて……！？

「また春日を誘拐しようだなんて思っちゃいないだろうな……」
「そ、そんなことなぐぅへぇ！？」
「テメー……許さねぇぞ」

胸倉を掴み誘拐犯Aを立たせる。我ながらギロリと睨み、ドスのきいた声が出来たなと思います。火祭の影響かな？　今なら血祭りオーラも出せそうだ。ちっ、最近はやたらと春日に言い寄る男が増えてきたな。ナンパ野郎といい山田といいその他告白してくる奴とか。そしてお前、春日には指一本触れさせやしないぞ！

「ち、違う……違うから。今回の依頼はそっちじゃない」
「は？」
「と、とにかくあんな怖い目はもう遭いたくないし、これ以上の失敗は許されないんだ」

何を訳分からないことを口走ってんだ。そっちの事情をさらけ出されてもなー、意味不明。もっと分かりやすい説明を求む。いや、やっぱ説明いらない。とにかく、

「いいから春日に手を出すな」
「ひぃ！」

そういうことです。さらに力を加えて誘拐犯Aを締め上げる。周りから見れば、高校生が大人をカツアゲしているようにしか見えないと思う。それよりこんな真っ昼間からスーツで住宅地を歩いているのが不自然か。へいへい服装チョイス間違えたな。あの人リストラなのかな、って近所のおば様方に噂されちゃうぜ？　どうするよへいへい～。というか俺に凄まれて怯えているこいつは本当に弱いぞ。今後の人生大丈夫か。

「だ、出さない！　だから離してくれぇ」
「また誘拐したら次はマジでコンクリに落とすからな」
「ぐぇ」

胸倉を離すと、どしゃりと地面に落ちた誘拐犯A。フラフラと後ずさりしながらも回れ右をして猛ダッシュで逃げていった。ちゃっかり手帳も拾って。……なんで今頃になって誘拐犯Aが現れたんだ？　何が目的で俺を尾行した？　依頼とか言っていたけど……分からない。

「ん、待てよ……あっ、春日が危ない！？」

誘拐犯Aは囮で今頃誘拐犯BとCが春日に接近しているのかも……ぬぅあぁぁっ！？　そうか、あいつらは三人組だったじゃないか。他の二人がいないってことは……BとCは春日を誘拐しに学校に向かったのでは。一番役に立たないAを囮にして……なんてことだヤバイ、急がなくては！　てことで俺も猛ダッシュ。

「お、追いかけてくる！？　うわあぁぁ！」
「どけえぇぇ！」

第１２１話　グダグダ昼休み（前書き）

今回かなり雑な感じになっています（汗）

第１２１話　グダグダ昼休み

シャー！　シャー！　ガッシャガッシャ！　しゃあああ！
全力で自転車を漕ぐとこんな音が出る。全力で漕ぐ、それはつまり自転車トップスピードを意味する。シャー！　シャー！　ガッシャガッシャ！　しゃあああああぁぁぁはあああぁ！　あ、最後のは俺の叫び声。アホみたいに叫んで馬鹿みたいに自転車を漕いでいますが、そりゃ急がなくてはならんわけでして。だって春日が……春日に忍び寄る魔の手が今にもおおおおぉぉぉ！

「春日あああぁぁ！」
「……兎月？」

見えた！　正門前の急な坂道を速度を落とすことなく一気に駆け上る。家から学校までの最速記録を叩き出したであろう立派な自転車に賛辞の言葉を贈ることもなく校門に着くと同時に乗り捨てる！　自転車をくれた金田先輩には申し訳ないと思うが今は春日の安全が最優先。派手な音を立てて倒れる自転車なんて見向きもしません。校門の前で立っている春日を見るので精一杯だからです！　か、春日あああぁぁぁぁ！　春日のピンチにいち早く駆けつけるため、一度家に帰って自転車取ってきました！　しゃあああああぁぁぁぁ！

「春日、無事か！？」
「え……」
「くそっ、なんてことだ。まさかあいつらがまた来るなんて……。どこだ、どこにいる誘拐犯ＢとＣ！　出てきやがれ！」

良かった、春日は無事みたい。どうやらまだ誘拐犯どもは来ていないようだ。しかし油断は出来ない。今にも奴らが襲ってくる可能性

だってあるんだ。全方位に注意を配るため、春日の周りを軽やかなフットワークでぐるぐる回る。なんと完璧な布陣！　ディフェンス！　ディフェンス！　おおーおおーおおー！　へいへいー！　ふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふんふん！

「さあかかってきやがれＢとＣぃ！」

「兎月？」

「もう大丈夫だ春日、俺がいる限り指一本触れさせやしない！」

「……う、うるさい」

ぐははあはぁ！？　なぜ春日が蹴る！？　痛い痛い、おかしい。なんで春日が蹴ってくるんだ、よ……げほっ。と、というか……この炎天下の中を全力で自転車を漕いだ後に動き回るなん、て……し、死ぬ。テンションが変だったみたい。ぜぇー、ぜぇー……さ、酸欠ぅ。でも春日が無事で良かった……。

「ぬぅあぁ～あぁぁ」

「……」

「まー君は何をしているの？」

「さあ」

「将也ー、何をそんなキョロキョロしているんだ？」

「どこだ、どこにいやがる誘拐犯ＢとＣ～」

俺の予想が正しければＢとＣが近くで春日を狙っているはず。そう思いダッシュで学校にリターンして春日を迎えに行ったが誘拐犯ＢＣはいなかったというのは昨日のこと。汗ダラダラで軽く死にかけたがとりあえず春日が無事だったのでオーケーです。Ａが囮だと思ったのに……いや待て。もしかしたら今日あたりにやって来るかも。そういう考えに行きついた次の日、つまり今日なわけでして。今は食堂から外をしぶとく観察中。ちょっとでもグラサンが目についたら速攻で倒しに行ってやる。春日はもう誘拐させねぇぞオラァ。

「まー君っ」
「ぐぇ」

正門に視線を走らせること三回目、火祭が後ろから引っ張ってきた。首が軽く絞まる。軽くってのが火祭らしい。春日だったら手加減なく引っ張るから首がもげそうになるもん。火祭の優しさを感じつつ席に座る。テーブルにはいつものメンバー、水川に春日と火祭ついでの米太郎。今日は皆で昼ご飯を食べようということになって食堂に集まったのです。補習は午前で終わるから別に家に帰って食べたらいいのですが、たまには皆で仲良くランチするのもよいではないかということで。もうすぐ夏休みも終わるのだからこうやって食堂でゆっくりと過ごせることもなくなるんだよなあ。今は人が少ないけど学校始まったら食堂は大賑わいになるし。それなのに俺は誘拐犯探しに明け暮れていた。時間の無駄遣い……とまでは言いませんが、さすがにこれ以上粘るのもどうかと思う。誘拐犯ＢとＣは、まあいないということにしましょう。もし現れても全力で守り切ってみせる。なんとカッコイイ発言。俺ってばカッコイイ～……あれ？　なんか皆が俺を見ているけど……？

「何してたんだよ。可愛い娘探しか？」

お前と一緒にするな。

「ここにもういるでしょ」

おっしゃる通りで水川。

「……」

こっちを睨まないで春日さん。俺なりに頑張ったんだよ。

「まー君、はい」

あ、ありがとぉ火祭！

「いただきます！」

とりま昼食スタート。米太郎も水川も春日も火祭もお弁当を持参。いつも通り俺だけがパン……ではないんですよ今日は。ふふっ、いつもとは一味違います。なんと……なんと火祭がお弁当を作ってきてくれたのだ。いっ……やっほーい！　ははははぁぁ、テンション上がりまくりー！　嬉しいことこの上ないぜ！　火祭の手作り弁当は河川の清掃以来の二回目。嬉しくて涙が溢れそう……！

「いいなー」

羨ましげにこちらを見る米太郎の手元にはいつもの漬け物タッパー。前回みたいに襲ってこないのを見ると、やはり反省しているのか。以前は俺から弁当を奪おうとして火祭に返り討ちされたもんな。あ

の時の痛みを忘れていないのであれば無駄な抵抗はせず大人しく漬け物を摘んでいるがいいさ！　ライス太郎の視線は気にせず弁当の蓋を開けば……おぉ～、

「完璧じゃん……！」

可愛らしい小さなおにぎり、タコさんウインナーに卵焼きとバランスの良いおかずがラインアップ。見ていているだけで癒されちゃう～！　食べるのが勿体ないくらい。

「ど、どうかな？」
「いただきます！」

隣で不安げな様子の火祭も可愛いです。そしてお弁当ありがとう。早速一口いただきま……うおおぉぉっ！？

「美味しい！」
「良かった……」

やっぱ火祭の料理は天下一品っ！　口に広がる卵の甘さと火祭の愛情（たぶん）……あぁ、美味くて天に昇る勢い。味の昇竜拳やぁ～！　うわ、ホント激美味っ。なんでこんな美味しく作れるのだろうか……美味い！

「わざわざ俺の分も作ってくれてありがとうね。超幸せだよ」
「す、少し作り過ぎちゃったから……その……」
「愛妻弁当かー……いいなー」

米太郎の発言に火祭が赤くなる。そして水川は何も喋らず黙々とモグモグ。春日は……めっちゃ機嫌が悪い。な、どうしたんだよ。不

機嫌オーラがすごいことになってるぞ！？　ぐぅううぅっ？　こっち睨んでこないで。なんか春日の見る目が痛いな……よし、火祭の手作り弁当による幸せオーラでバリアを張る！　うはあぁ～、こんな美味しい弁当を食べれて俺は幸せ者だよ。お、おにぎりが、お、美味しいん、だな。

「ホント最高に美味しいよ。グルメ細胞が進化する勢い！」

「美食屋かよ」

黙れ。前菜がフルコースのお前が何様だ！

「よ、良かったら二学期からもお弁当作ってあげるよ……？」

！？　な、な……なんとぅ！　今……なんとぅ！？　うぅえええぇぇ、マジですか！？　俺のためにお弁当を……火祭がお弁当を……作ってくださるってえぇ～！？　き、きた……ラブコメ的展開きたぜ！　ヘタレ平凡男子高校生の俺にもついに春がきたー！

「い、いいの？」

「私は全然大丈夫だよっ」

両手をぐっと握る火祭の仕種にハートに射ぬかれ、呼吸が止まってしまいましたぁ！　憂鬱に思っていた夏休み終了も火祭の手作り弁当が全て晴らしてくれた。早く始まれ新学期ぃ～！

「だったら俺の分も」

手を挙げる米太郎。

「佐々木は駄目」

「なんで!?　そしてなんでそれを水川が言う!?」

うるさい。水川の言う通りだ。お前のニーズに応えられるかボケェ。

うふふ、手作りってだけで美味しさ二十倍だよね。味の界王拳だよねっ！　今のは美味かったぞおおぉ、みたいな。

「まー君は何が好き？」

「ハンバーグ！」

「子供かよ」

米太郎は無視するとして、

「じゃあ今度はハンバーグ作ってくるね」

「うおっ！　楽しみにしておりますっ」

「……」

第１２２話　ラスト補習

「将也」
「米太郎」
「将也」
「米太郎」
「将也」
「米太郎」
「将也ぁ」
「米太郎」
「将也ー」
「……米太郎」
「将也やぁん」
「……米太郎」
「ま、さ、や」
「……米太郎」
「ま、まままままま将也ぁ！」
「うるせえ！　なんだよ名前だけ呼びやがって。用件を言えよ馬鹿」
「なんか折れたくなかった」

骨を折ってやろうか。ひたすら名前連呼する俺らは教室でダラダラー。軽く気持ち悪いやり取りをしていた。なんて時間の無駄。あと三分ほどでチャイムが鳴り、現代文の授業開始だ。

「で、なんだよ」
「……うへへっ」
「気持ち悪い」
「きゃあぁうぉ！？」

デコピンを放つと米太郎は奇声を上げた。考察、実験、結果から結論をまとめると、こいつキメェ。なんだよマジで。早く用件言えよ。もうすぐ教師が来るじゃん。つまらない現国の授業をしにやってきやがるよ。

「薄気味悪い笑み浮かべやがって」

「だって今日で補習が終わるんだぜ？　そりゃ喜びたくもなるさ。薄気味悪い笑みを浮かべるさー」

きゃっきゃと騒ぐ米太郎にモンゴリアンチョップを叩き込む。ふぅ、やっと大人しくなった。はいはい、そういうことね。お米の言う通り今日は夏の補習最終日。前半と後半合わせて二十日にも及ぶ地獄の課外授業がついに終わりを迎える。あと一時間、現代文の授業を乗り切れば補習は終焉を迎える。そりゃ嬉しいさ。

「やっと補習が終わる～」

はしゃぐ米太郎。けどな、そんな喜べるだけじゃないんだぞ。補習が終わるってことは、つまり……

「夏休みも終わるからな」

「うへへ～……はっ！？」

気づくの遅っ。奇天烈な踊りを止めて米太郎はピタリと固まった。口があんぐりと開いている。ふしぎなおどりをしたかと思いきや、お次はアストロンですか。佐々木君は忙しいな～。

「今更って感じだけどな」

「な、な……夏が終わるーっ！」

悲しみのシャウト。その気持ちは確かに分かる。今日は八月二十九日。二日間の休みの後はもう始業式。さあ二学期の始まりさ。その翌週は編成テストなるものがある。ははっ、なんか逆に笑えてくるよね。どんなイジメだよこれは。

「は、ははっ……なんか笑えてきた」

「同思考回路チョップ！」

「ぐぅへえぇ！？　わ、技名が意味不めぶらぁっ！？」

追撃による二段攻撃も決まったことだし、はい満足です。にしても……夏休みあっという間だったなぁ。つい最近まで七月だと思っていたらもう八月の終わりだなんて……悲しすぎる。嘘っ、本当に夏休みが終わっちゃうのかよ！？　あぁ～……とりあえず夏休み最大のネックである宿題ついてだが、水川達のおかげで宿題は完璧に終わった。丁寧に教えてくれた春日と火祭には感謝しても足りないくらいですよ。編成テストもまあ一組に上がるのは無理だとしても現状維持は余裕でしょ。ふふん、勉強面に関してはかなり満足出来る成果を上げたと思う。色々思い出すこともあるけど……あぁ、夏が終わっちゃう。ホント色々あったなー。ボランティア活動で河川の清掃をしたり、その河川の橋の下でラブコメイベントもあった。金田先輩のプライベートビーチでの三日間は忘れられない最高の思い出だ。海で泳いで森を歩いてバーベキューして星を眺めたり。皆で夏祭りにも行って楽しんで……目を閉じれば蘇る幾多ものの楽しい思い出。

「ＨＰが少ない。アイテムで回復しなくちゃ！」

目を開けば漬け物を一心不乱に噛む米太郎……お前にとって漬け物は回復アイテムなのかよ。いつまで経っても野菜キャラ突き通しやがって……イラッときたので頭の中で連携攻撃の図を組み立てて、

「どぼるぶべらぁっ！？」

チョップチョップ蹴りアンド右ストレート回し蹴り。見事決まった。流れるように華麗な連続攻撃。

「ま、将也が最近強くなったなと思うんだけど……」

「火祭のおかげかも」

何度か火祭の戦う姿を見て体が自然と覚えたようだ。俺って意外と武の才能があったりして！？　呼び名は『月光の兎月』とかカッコイイよね！

「そっか、夏が終わるのか……あぁ、八月の初めに戻りたい」

この時期に誰しもが思うことを口に出す辺りが米太郎らしい。確かにそりゃそう思うけどさー……都合良くタイムマシーンがあるわけでもないし、そんな叶わぬ夢物語に思い馳せる今この時も刻々と終わりは近づいてきているのだから。こういう時に魔法が使えたらなとか思う。七つのボールを集めようと本気で考えてしまうんだよなー。うぅっ、いよいよマジで夏休みが終わってしまう。来年は受験だから今年ほど遊べないだろうな……い、嫌だぁ！

「俺がスタンド使いだったらなーっ！」

「時間を止めてやるぜ。ザ・米太郎ワールド！」

俺達がそう叫んでしまうのも致し方ない。だって現実残酷すぎるぅ～！　そしてスタンドという言葉を聞いてクラスのコアなファン数名がこちらを見てきた。トークしちゃいますか、みたいな目線を送ってきている。好きなのね、あなた達。

「……ところで将也」
「ん？」
「この夏、何か進展はあったか？」
は？　何の進展だよ。漬け物タッパーを鞄になおした米太郎の表情は妙にキリッとしていた。さきほどの気持ち悪い笑みはどこに消えたんだよ。
「いや、質問の意味がよく分からないんだけど」
「そうだな……進展というより、気持ちはどうなった？」
「はぁ？」
ますます意味不明。米太郎の真意が分からない。何が言いたいのさ。
「うーん……そろそろ決めないといけないかなと俺は思うんだが」
「だから何を？　全く意味が分からナッシブル」
ちょっとオカマ入りました。
「いや、分かるだろ？」
「分かんない」
「ちっ……だったらもうはっきりと言うな。春日さんと火祭のことだよ」
……ふえ？
「ちょ、待って。ますますのますます、さらに意味が分からなくなったんだけど……」

なんでいきなり春日と火祭が出てきたんだよ。マジでなんで？　うっ、混乱してきた。米太郎が何を言ってるのか、そして何を言いたいのか。む、難しいこと聞いてる？

「ここまで鈍感馬鹿だったとは……逆に将也すげぇよ」

「？　よく分からないけど、ありがとう」

「褒めてねーよ。ったく、将也がこの感じだとまだ時間がかかりそうだな。でもな、そろそろ気持ち一つにしないといけないぞ。いつか決断しないといけなくなるんだから。その時になって考えるだなんて酷い真似はするなよ。真剣に考えろ」

ちょ……待てい！　ぐぅうぬぅあぁっ！？　長文だなおい。理解が及ばないっつーの。米太郎の言う言葉もれなく全て意味が分からない！

「意味不明すぎる……」

「あ、チャイム」

キンコンカン？　こちとら頭がキンコンカンじゃい！　夏休み最後の授業の準備に入るクラスメイト達。米太郎も離れていく。ちょいちょいちょい！　待てよ、混乱状態の俺を置いていくな。放置プレイはいかんよ。ちゃんと理解するまで説明してくれないと！

「待てよ米！」

「米じゃない米太郎だ。……いいか、決断が遅くなればなるほど相手を傷つける。そしてお前はどちらか一人を絶対に傷つけることになるんだ。絶対にな。それはもうどうしようもないことだから……将也のせいじゃないさ。責任とか感じる必要はないと思う。だけど自分の気持ちに嘘はつくな。気持ちに嘘をついても誰も喜んだりしない。それは将也自身にも言えることだ。怖がる必要はないさ。あ

の二人は将也の決めたことなら全て受け入れてくれるはずだから。
将也は恐れず自分に正直になればいいんだよ……なっ？」
「だから長文っ！」

混乱状態のまま授業スタート。あああああぁぁぁっ、なんかモヤモヤする！　言葉ど忘れしてしまってあと少しのところで思い出せないあのモヤモヤ感ぐらいモヤモヤしている。あああああぁぁぁ、誰かスッキリさせてくれませんか！

「えー、前回の続きだが、主人公の部屋に幼馴染みが起こしに来たところだったな。では遠藤、続きを読んでくれ」
「はい。『もー、ヒロってば遅刻するよ』とアカリは両手を腰に当てて頬を含ませる。アカリの声にも全く反応せずヒロはまだ夢の中だ。寝息を立てて小さく息づいている。整った顔なのに寝ている姿は子供のよう。そんなヒロを見てアカリの顔は少しだけ紅潮がさした……」

相変わらず国語の授業はひどい。前期授業での『僕と兄と義妹～密接なトライアングル～』の話もひどかったが、後期の『ハーレム主人公の素敵な日々』もなかなかヘビーだ。ハーレム主人公の心情なんざ知ったこっちゃない。彼女いない奴への当てつけかよ。クラスの男子もよく平然と受けているもんだ。特大激甘パフェを無理矢理食わされているみたい。こっちはモヤモヤしていてそれどころじゃないっつーのに。はぁ、授業も聞く気にならないがさっきの米太郎の発言は気になるし。うーむ……気持ちが決まったかどうとか言ってたな。そんでなぜか春日と火祭の名前が出てきて、さらに俺は決断しなくちゃならないとか……傷つけてしまうとか……うぬぅうっ？　なんだこの暗号。サッパリ分からん。

「では兎月、ここで登場した手作りクッキーを持った後輩の女の子

について主人公はどう思っている？」
「サッパリ分かりません」
「では佐々木」
「ハーレム主人公らしく、鈍感で何も気づいていません」
「そうだな」

サッパリ分からん。授業も、さっきの発言も。そして米太郎がこちらを見てくる意味も。……もう寝よ。脳のシャットダウンボタンを押して電源オフ。どうぞハーレムな授業を続けてくださーい。俺は寝ますから。

「起立、気をつけ、礼」

ありっしたー、と。ふぅ、ついに補習も終了ー。やった……終わったよ。うん、今この瞬間は喜んでもいいはずだ。きゃっはー、来たぜベイビー！　やっと終わったぜ！

「イェイ」
「ヘイ」

米太郎とハイタッチ。ついに補習が終了した。長かったよ……授業何一つ覚えていないがそんなのどうでもいい。夏休みも終わってしまうがそれはまた後で嘆くことにしよう。とにかく補習が終わったのだ。ともに補習を戦い抜いた親友もとい戦友と互いに賛辞のハイタッチもしたし、さあ後は帰るのみ。授業前の意味不明かつ意味深な米太郎メッセージは一時間考えても分からなかったので、ほって

置くことにした。もうちょい時間が経てば分かるかもしれないし、そもそも米太郎の戯れ事だという可能性もある。

「待てよ……夏が終われば秋が来る。焼き芋の季節！」

野菜ポジティブなこいつのことだ。本当に戯れ事だったのかも。さて、とりま帰りますか。あと二日も夏休みは残っているんだ。最後の最後まで遊ばなくては。

「……兎月」

「はいそろそろ来ると思った！」

ヤードラット星人に教えてもらったのだろう、お得意の瞬間移動で春日が背後から声をかけてきた。一組の春日が二組の教室、しかも後ろから気配もなく名前を呼ぶというミステリー現象には慣れてきたよ。春日もすごいが、そうやって慣れる俺もすごくね？

「……」

「ははっ、ざんね～ん。俺に不意打ちローキックはもう通用しないぜ。レベル上げて出直すがいい」

「……」

で、無視か。これには随分と前からもう慣れているけどね。はいはい何かご用ですか～、とは口に出してはならぬ。おちゃらけた態度は春日の気に障る。そしてローキックや抓りなどの破壊攻撃。もう失敗しないぞ。何回このパターンで足が負傷したと思ってるんだ。さすがにこれ以上の過ちは犯しません。

「今日で補習も終わりだね。お疲れ様っ」

なんと爽やかな応対。涼しげアンド素敵な笑みを春日へ向ける。春日に変化なし。とっても無表情。ふっ、相変わらず感情を表に出さない子猫ちゃんだね。……こんな台詞を言ったら、ローからハイにかけて三段キックが襲ってくるだろう。それを凌ぐ耐久性は俺にはありません。故に口には出しません。

「……」

「夏休みも終わるし、あっという間だったな。ホント楽しかったね」

「……」

無視……はぁ、無視ばっか。春日と知り合って四ヶ月ちょい。まだまだ無視は健在です。この前の夏祭りでかなり距離が縮まったと思ったのにね……どうやら俺の勘違いみたいで。はいはい、気長に待ちますよ。あなたが何か喋ってくれるのを。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ぬあっ！？」

なんだよ、まさかの沈黙状態の延長戦ですか。何にも喋らないし……いつもならこの辺りで「帰るわよ」とか言うくせに今日はずっと口を閉じたまま。夏休み補習最終日にして春日にも何か心境の変化が？　みたいな？　感じで？

「……」
「えっと、帰りましょうか？」
「……」

無言は肯定の表れという勝手に定めた春日の法則に従うと、これは帰るってことでオーケー？　よし帰ろう。夏休みまでにエンディングは迎えたいからさ、早く帰ってレベル上げしなくちゃ～。上手くいけば夏休み最終日にはクリア出来そうなんですよ。ちょっとエンディングで泣いてみましょう。

「帰ろう～、さあ帰ろぐぬうぅっ！？」

襟首が絞まる……ぅ、がっ……首がもげるって！

「……待って」
「がはっ、げはっ、ぐはっ」

すごい力で首元のシャツを引っ張ってきた春日。あなたは手加減という良識ある微調整が出来ないのかよ。一回呼吸が止まってしまった。パニクるって！　人間ちょっと呼吸が止まるだけで体が生命危機を感じ取るものなんです。あー、びっくりした。

「な、何？」
「……」

なぜか帰ろうとしない姫様。どしたのよ一体。まだ何か用事でも？

「げほっ」
「……」

「……あ～」
「……」

うーし、一つだけ分かったことがあるぞ。これは長期戦になるということだ。もう教室に残っているのは俺と春日のみ。皆さんも帰るなり部活行くなり宿題を終わらせたりと、多種多様なアクションに行動を移したのだろう。止まっているのは俺と春日のみ。さて、春日は何がしたいのやら。帰るつもりはないみたいだし、他に何か用事があるのだろうか。しかしそれを言ってくれないと次に進めないわけで。春日さんに発言を求めます！

「……」
「……」
「……今日」

やっと出た言葉は今日。今日は八月二十九日。天気は快晴、気温暑すぎる。夏休み最後の補習日でテンションアップ。星座占い一位は天秤座、今日は何やらすごいサプライズが待ち受けているよ。ラッキーアイテムは愛情の詰まったもの。はいこれが今日の情報。どうだ、一つのワードでここまで語る俺は！　……うん、まあたいしてすごくなかったね。

「……うん、今日が？」
「……」
『ピロリロリーン』
「……今から」

一回メール挟みました。てかマナーモードじゃなかったよ！　危なっ、良かった～授業中鳴らなくて。反省文は書きたくないよ。

「……」
「……」
「今日の今から……？」
「……食堂に行くわよ」
「え？」

クルリと踵を返し春日は早足で廊下を進みだした。は……えっ、あの……もしかして、それだけ？　それを言うためだけに数分も使ったのかよぉ！　つーか食堂に行くぐらい、いつもならサラッと言ってるじゃないか。何をそんな躊躇う必要が……

「マジで意味分からない……」
「ついて来なさい」
「はい」

第１２３話　お弁当と秘めたる思い

午前中で補習は終わったし夏休み中なので食堂は意外と空いている。昼食をとるのは部活生ぐらいなものだ。頑張れ部活、暑さに負けるな。まあ他にも今から塾だからここで食べるとか家に食料がないからここで食べるとか単純に学食が好きな奴とか……細かいところまで掘り下げたら色んな理由が出てきそうだ。しかし主人に命令されて連れて来られたという理由の持ち主は俺以外にいないだろう。

「うーん、食堂も人が少ないと涼しいよなー」

「……」

なんで食堂に来たのか。それに関しては俺達を含めたここにいる全員を通して言える。それは……飯を食べにきた。そりゃそうですよね、それ以外に何がありましょう。学食のおばちゃんに会いにきたとか？　どんな恋の形！？　恋愛に年齢は関係ないと言うけどさすがに無理があるよ。いやまあ年上との恋はいいとして、食堂に来たからにはスタンダードに基づいてランチしましょう。春日はたぶん弁当を持ってきているだろうし、用意してない俺は何か買わなくてはならない。パンでいっか。パン美味しいもん。うーんと……あんパンかなー……あー、いや。待て待て、やっぱあんパンやめとこ。キャンセルあんパン。いや、あんパンキャンセルか。どっちでもいっか。とにかく今はあんパン気分じゃない。えーと……あっ、コロッケパンだ。そうだコロッケパン。なんか惣菜パン的なものを食べたい気分。週一ぐらいの周期でやって来る惣菜パン欲。よし、今日の昼ご飯コロッケパンに決定。

「パン買ってくるから、ちょっと待ってね」

「待ちなさい」

ストップコール。は、はい？　どうかしましたか？

「え……あ、紅茶？」

「うるさい」

うるさいのかよ！？　春日の「うるさい」は全否定の効果を持つ。そしてローキックと合わせて用いることが多い。幸い距離の問題でローキックはなかった。いやいや……うるさいってあんまりだよ。一言尋ねただけでうるさいと言われちゃあ何も言えないじゃん。つまり俺に喋るなと言いたいのかな！？

「うるさいって……。あー、と……えっと何か？」

「……」

今日は本当に沈黙回数が多いな。最近は無視も減ってきたと思ったのに……やっぱり春日はよく分からない。何を伝えたいのでしょうか。

「あの……ここには昼食しに来たんだよね？」

「……」

コクリと頷く春日。つまり肯定ということですね。

「春日はお弁当持ってる？」

「……」

これまたコクリ。

「でも俺は持っていない。だから買いに行く。オーケー？」

「駄目」

だ、駄目って……駄目ってぇ！？　うぅっ！？　もしや新手のイジメですか。私は食べるけど、お前は食うなみたいなイジメですか！　犬体質の俺なだけに「待て」ですか！？

「お、俺だって昼ご飯食べたいです。どうか買いに行かせてくださいな！」

「駄目」

そ、そんなぁ……。

「……買いに行かなくていい」

「へ？」

「……お弁当……兎月の分もある」

……へ？　へ……へへへえぇっ！？　うえええぇぇっあぁっ！？　い、今何とおっしゃいましたかぁ！？　お弁当……兎月の分もある……俺の分もあるだってぇ！？

「え、ちょ、あっ、は、はえ？　でゅ、えええ？　あ、あの……俺の分もあるって……それは俺の分の弁当もあるってこと？」

「……」

コクリ。こ、肯定……！

「だ、だから買いに行かなくてもいいってこと？」

「……」

コクリ肯定っ！

「あ、あの……てことは、春日のお母さんが二人分作ってくれたんだ？」
「馬鹿」
ローキック否定。痛いよっ！　ぐっ、完全に油断していた。筋繊維が悲鳴を上げる！　負けるな俺の足、まだ踏ん張れ！
「な、なんで？」
「……兎月のは私が作った」
え……は……うえええぇぇっ！？　ぬぁあんだぁって～！　か、春日、が、作った、お弁当を、俺、の、分！　なっ、は、え、う……うそぉん！？
「な、なななんで春日がお弁当作ったのさ！？」
「……別に」
ど、どういうことだ？　か、春日がお弁当を……つまり料理したってことだよな……うへえぇっ？　なぜだ！？　なぜいきなり料理なんかを……どんな心境の変化なんだぁ！？
「あ、あ……え！？」
「……はい」
もう奇声しか出てこない。ううううううぬぬぬぬぬぬっ？
か、春日が鞄からお弁当箱を取り出した。一つはピンクでもう片方は水色。二つ……そして水色の方の弁当を俺の前に置く……置くぅーっ！？

「これ……俺の分？」
「そ」
「春日が作ったの？」
「そ」
「な、なんで？」
「……別に」

……うぅぅぅっ！？　頭が混乱するぅ！　なぜなぜなぜなぜＷｈｙなぜなぜなぜナゼなぜ！？　なぜ春日が俺の分の弁当を！？　心の中でシャウトし過ぎて疲れた。お、落ち着け俺。テンパり過ぎて心が酸欠状態じゃないか。リラックスだ、冷静になって状況を整理しよう。あー……まず最初に、春日からお昼食べようと言われました。そして食堂に行くと春日がお弁当を用意していた。なんと俺の分は春日が作ってきてくれていたのだ。なぜか……その理由は不明。うん、ちょっと落ち着けた。つまり春日の手作り弁当ってことね～……ええええぇぇぇぇぇぇ！？

「へ、へぇ～。春日も料理するんだ。ちょっと意外」
「……」

自分の弁当箱を開ける春日。なら俺も……。うーむ、マジでびっくりした。まさかのまさか、こんな不意打ちビックサプライズが待ち構えていようとは。春日も粋なことをしたものだ。なんで今頃になって急に弁当なんか……あっ、もしかして昨日火祭がお弁当作ってきていたのを見て自分も料理したくなったとか？　その可能性大。な～る、春日も料理したい年頃ですね。でも春日が料理だなんて……意外だなぁ。

「……兎月」
「へ？」

「……開けないの？」

え……あぁ、弁当箱ね。すいません、脳がかなり混乱しているもので。

「……嫌だった？」

「ふへ？　何が？」

「……お弁当」

俯く春日の消え入りそうな声。っ、いやいや！

「そんなことない。ちょっと驚いただけで本当はマジで超嬉しいんだって」

意外、突然、びっくりの勢いに飲まれて感情が掻き乱れたが今はっきりと落ち着いた。そして爆発した。だって……そんなの嬉しいに決まってんじゃん！　だって春日の手作り弁当だよ。これが喜べなくて他に何で喜ぼうか、いーや喜ばないわけがない！　う、嬉しい……。普通に感無量ですって。下僕なんかの俺に主人の春日が手作りのお弁当を振る舞ってくれるなんて……天上天下最高の気持ち！

「もちろん開けさせてもらいます」

蓋を外しオープン。……おぉ、あ～……うん、そうだね……ごく普通だね。卵焼きとかウインナーとか……ベターなお弁当ラインナップ。いやいや！　がっかりしているわけじゃないよ。ただ、春日お嬢様つまりセレブなわけだから、もしや超豪華な中身だったりして！　と期待していたもんで。まあ普段から見てたけど春日の弁当は案外普通だったからな～。うん、これはこれで期待しちゃいます。春日のお母さんは普通のお弁当を作ってあげているから春日

もそれを真似したのかな？　ああ、お母さんに教えてもらったとか。そして期待の反対……不安っ！　蓋を開けたら……ドロドロのぐちゃぐちゃ、とても食い物とは思えない謎の物体が……的なことも予期してました。ほらよくあるじゃん、手作りお弁当が死ぬほど不味いみたいな展開が。卵焼きがダークマターのような無惨な姿に成り果てているとか超怖いって。そんな不安もあったけど、とりあえず見た目はセーフ。ごく普通に美味しそうです。

「……」

「おー、美味そう」

と、というかぁ……春日がめっちゃ見てくるのですが。俯いていたかと思いきや今はちょい上目遣いでこちらをじぃーと見てくる……ちょっとドキドキしちゃう！？　めっちゃ見られてるめっちゃ見られてる！　変なプレッシャーを感じる。すげえ見てくるんですけど！？

「……食べなさい」

「もちろん食べますよ。んなことで命令しないでいいって」

そんな急かさなくても……う？　心なしか、なんか春日が不安げな気が……そんな弱々しく命令するなんて、味に自信がないとか？　見た目は良くて味は最悪とか……そんな心配しているのかな。ある意味期待を裏切らないと思うけど、それは勘弁してほしいです。

「いただきまーす」

「……食べなさい」

だから食べますって。いただきますが聞こえなかったのか？　こちらをすげー見てくる春日。何このプレッシャー？　軽く汗かいてき

たんですが。そんながっつり見られたら食べづらい。まあ……春日も不安だったりするのかな……。まさか俺が食べないと思っているの？　味に自信がないとか？　……大丈夫だっての。例えどんなに不味くてもダークマターでも食べたら三日間腹を壊してしまうのであっても！　春日が作った弁当なら残さず全て食べますから！

「まずは卵焼き……」

すげえ見られている中なんとか気にせずに卵焼きを口元に運ぶ。うん見た目は普通に美味しそうだって。とりあえずパクリ。

「……」
「……」
「春日……」
「……っ」
「めっちゃ美味しい！」

普通に見た目良くて普通に味も良かった。いやマジで美味しいよ。このちょい甘めの味付けの卵焼きが口の中でふわさ～と広がるような。虜になるような味わい深さ。美味しい……いやホント美味しいよこれ！

「ほ、本当？」
「ホントだって。なんで嘘をつくんだよ」

そりゃもし不味くても本人に不味いと言うほど俺も人間出来ていないわけではないので、結果的には春日に対して美味しいと言うだろうけどさ。それでもやっぱ本当に美味しかったら心の底から美味しいと叫べるわけです。なんだろ……美味しいし、それにすげー嬉しい。そりゃ自然と顔もニヤけちゃうわけでして！　さあウインナー

いってみよう！

「うお、これも超美味い！　春日って料理得意だったんだな～」

「……別に」

はあ～……なんか幸せ。なんだこの幸福感は。ヤバイよこれ。良い意味でヤバイっす。春日の手作り弁当を食べている今この状況？これが超嬉しいんですけど！　うわっ、こんな嬉しいお弁当食べれた日にはもうパンなんて食べれないよ。なんだよ惣菜パンって。今までの俺はなんて狭い世界で生活していたんだよ。こんな嬉しくて美味しい料理があるってのに！　ヤバイ、手が止まらない。バンバン食べれるよこれ。リアルでやめられない止まらない！

「ほら春日も食べなよ。いつまで見てくるんだよ」

「うん……」

そんな俺の箸を必死に目で追わなくていいって。何を凝視する必要があるのですか。不安だったのかもしれないけど、この通り！　とっても美味しいですから安心してください。そして春日も一緒に食べようよ。二人で食べるとさらに美味しさ倍増だって！

「いやー、すげー美味しい」

「……よ、良かったら……」

「春日、また作ってきてくれる!?」

「っ！　う、うん……」

やった！　また食べれるよっ！　これはもう今から楽しみなんですけど～。現在食べてる最中なのにもう次回が楽しみってヤバイっしょ！　うは～、なんか超幸せなんですけどぉ！

「いやー、ご馳走様でした！」
「……そ」
「じゃあなー、また二学期で！」
「……うん」

春日も無事に送り届けたことですし、さて幸せ気持ちをテイクアウトしたまま帰りますか～！　はいはい、もちろんお弁当は完食しました。あっという間にご馳走様だったな～。もっと味わって食べれば良かったなと反省中。しかし！　春日はまた作ってきてくれるそうなので問題ない！　ヤベ、なんかテンションすげー高い。嬉しさマックス状態。ただ単純に嬉しかったな……春日が作ってくれた弁当ってだけで。こう、心の底から嬉しいと思えるような。この幸福感って味わったことない。もう……駄目だよこれ。だって……なんか、もう……。

「これって、そういうことなのかな……」

あぁ、これもう確定だわ。大分前からなんとなく気づいていたけどさ……俺ってば春日のこと……

「兎月将也様」

っとぉ！？　突然の様付け、そりゃびっくりするよね。家の前で様付けされるなんて初めて……いや待て、前にあったぞ！？　とにかく様付けは勘弁してくだ……へ？

「だ、誰ですか？」

振り返ればそこには見知らぬ男性が。誰ですか？　そう言わざるを得ない。だって知らない人だもん。てっきり前川さんかな、と今更ながら思ったんだけど。俺のことを様付けで呼ぶのなんて前川さんぐらいのものだと思うんですが。でもこの人知らないぞ。だ、誰ですか？

「はじめまして、僭越ながら自己紹介させて頂きます。私、後藤と申す者です」

「はあ……あ、僕は兎月と言います」

というか俺の名前知ってたよね。そんな有名かな？　いやいや、それより誰ですかあなたは。後藤さんって名前は分かりましたが……いや誰っすか？　黒い服を着た清楚な感じが溢れ出す紳士な初老の後藤さん。うーん、連想するのは前川さんや中井さんといったお金持ちな家の執事さん。同じ雰囲気を感じる……ってことは後藤さんも執事さんか！　じゃあ誰の執事をしているのか。そこでまた疑問が産声を上げる。

「ご自宅の前で待たせてもらっておりました。実は兎月様に会っていただきたい人物がいまして」
「はあ……」
うへぇ、いやいや話が見えてこない。なんすかいきなり。もうクエスチョンマークてんこ盛りですって。何さいきなり。ええ、いきなりなんすか。いきなりすぎるよ。会っていただきたい人物って……それよりあなたは誰なんですか？　名前しか聞かされてないんだけど。普通に警戒するわ。
「事態が飲みこめてないと思いますが、とりあえずこちらの車に乗っていただければよろしいので」
「え、いや……ちょ」
有無を言わさず後藤さんとやらに車に押し込まれた。うおっ、軽く誘拐じゃね？　つーかリムジンだったぞこの車。え、ちょ……なんだよいきなり！　かなり強引じゃねーか。なんだよマジで。一体何がどうなって……
「初めまして兎月将也君」
無理矢理乗らされた車の中。そこで俺が見たのは……

第１２４話　新学期（前書き）

春日さん視点で始まります。

第１２４話　新学期

九月初日、夏休みは終わって今日から二学期が始まる。いつも通り朝起きて、いつも通り今日を迎える。……別に普段と一緒。夏休みでもそうでないでも起きる時間は一緒なのに、兎月は辛いと嘆いていた。夏休みが終わるとギャーギャー騒いでいた……うるさいから蹴った。兎月はよく騒いでいるけど大体はどうでもいいことだ。夏休みはずっと暑い暑いとぼやいていた。兎月は暑がりみたい……。でも、いつも私を自転車で送り迎えしてくれていたから暑かったのかも。……頑張ってくれていたんだよね。でもうるさいから蹴った。

「恵ー！　おはよう！」
「おはようパパ」

一階に下りたらパパが明るくて大きな声で挨拶してきた。パパはいつも通り元気だ。ニッコリと微笑んでくれる。私も笑顔で返す。

「今日から二学期だね。パパは心配だよぉ。学校で何かあったらすぐにパパに言うんだよ。嫌な奴はすぐ抹殺してあげるから」

パパはまたニコリと笑う。とても頼もしい。けどちょっとだけ怖い。

「あなた、そんな物騒なことを言わないでください」
「ママおはよう」
「おはよう恵」

お玉を持ったママはパパの頭を軽く叩いた。痛いと叫ぶパパ。

「だって恵のことが心配で……。学校で告白なんかされたら……」
「大丈夫ですよ。もうすぐで二桁になりますから」
「な、なんだとぉ！？」

パパが叫んで椅子から転げ落ちた。そしてどうしてママは知っているのだろうか？

「よーし、今日は会社休む。そして学校に行くぞ！」

すぐにパパが起き上がった。回復が早いのもパパらしい。普段からママに蹴られてもすぐに治る。パパはとても元気だ。さっきまで箸を握っていた手には黒光りする拳銃があった。

「やめてください」
「ママ、止めないでおくれ。これは私の問題だっ！」
「恵の問題です」

お玉をフルスイング。ママの強烈な一撃にパパはまたも床に撃沈した。痛そう……。うずくまるパパの姿が兎月と重なった。兎月も蹴るといつもこんな感じでのたうち回っている。

「あ、頭が割れそうだ……！」
「心配しなくても恵にはちゃんと守ってくれる王子様がいます」
「ま、ママ？」
「なんだとおぉ！？」

またまたしてもパパが吠える。そ、それよりママ！

「な、何言ってるの。兎月はそんなんじゃないから」
「あら？　私は兎月君だなんて言ってないけど」

「っ……！」
「と、兎月だとぉ～？　あ、の、や、ろぉ……やはり抹殺しておくべきだったか」
「はいはいモデルガンは置いてください。会社に遅れますよ。ほら恵も。いつまで固まっているの」
ママが変なこと言うから……とにかく、兎月がそういうのじゃなくて。と、兎月は……確かに夏祭りの時、守るって言ってくれたけど……でも、兎月はそんなんじゃないし……。で、でも……
「はいそこまで。いいから学校に行ってらっしゃい」
ママに背中を叩かれる。時計を見ればもうすぐバスが来る時間……急がないと。
「今日お弁当いらないから」
「始業式だからお弁当いらないのは知ってます。それはそうと、兎月君のためにまたお弁当作ってあげたら？」
「ま、ママ！」
「な、ななんだとぅおおぉっ！？」
パパが勢いよく立ち上がって暴れてだす。その衝撃でコップを倒れた。コーヒーがテーブルに広がる。それを見てママがパパの足を蹴り倒す。執拗に何度もパパを蹴りだした。蹴られる度にパパの口から小さな悲鳴がリビングの天井へと消えていく。
「ぐぇ、ローキック！？」
「私を本気にさせないでください」
「痛い痛い！　ローキックは普通に痛いから！　ごめん私が悪かった！」

さっきの怖い顔から一転、パパは泣き顔で謝りだした。パパを助けてあげたいけど……本当に時間がない。急がないとバスに間に合わなくなってしまう。

「いってきます」
「いってらっしゃい。あなたはまだ行くな」
「さっきと言ってることが違……あ痛たたたっ！？」

連続蹴りに混ざってパパの悲鳴が聞こえた。けど見ている暇はない。急がないとバスに乗り遅れてしまう。兎月が乗っているバスに乗り遅れてしまう……。

「はは、朝から賑やかですな」
「あら前川さん、おはようございます。ホント賑やか。この頃は恵も楽しそうだわ」
「そうですね。私も恵様の楽しそうな姿を見れて嬉しい限りです。これも兎月様のおかげですね」
「と、づ、きだとぉ～！？」
「あなたはとっとと会社に行ってください」
「痛い痛い痛いぎゃあああぁぁ！」

今日は始業式。二学期いきなり自転車通学で行くのはキツイと数日前に兎月からメールがきた。だから今日はバスにしたのだ。別にバスでも自転車でも構わない。兎月がいてくれるのなら……別に大した意味はないけど。やはり今でも車での送迎はなんとなく居心地

が悪い。学校前の坂道で通学する生徒の注目を浴びるのは嫌いだ。だからバス通学にした。そして兎月と……だ、だから兎月は関係ないって。そういえば夏休みの補習が終わってからずっと兎月とメールしていなかった。最後に会ったのは補習最終日だった三日前。いつもなら自然とメールしていたのに……。でも、もうすぐ会えるからいいか。別にどうでもいいけど。……早くバス来ないかな……。

「恵～！　行ってくるお！」

目の前を横切る車の一つからパパが顔を出して手を大きく振ってきた。もう元気になったみたい。タフなところもパパらしい。兎月も見習ってほしいものだ。ローキック一発で倒れるようじゃ駄目だと思う。って……まだパパが手を振ってくる。名前を大声で叫びながら。外で名前を呼ばれるのは恥ずかしい……。小さく手を振って返す。

「手を振ってくれたぁ！　よし前川、ここをもう一周するぞ！」
「会社に遅れてしまいます」

パパと前川の声が微かに聞こえたが、それと同時にバスが来て掻き消された。バスに乗って車内を見渡す。
え……兎月がいない。……兎月が、いない……どうして？　いやどうしてとかじゃない。兎月がいない、それが不安に感じられて仕方なかった。……いつもバスに乗ればいたはずの兎月がいない。そんな……兎月がいないなんて。……たぶん、寝坊か何かだろう。兎月は寝過ごしたに違いない。今日は二学期初日、私はいつも通り起きたけど馬鹿兎月は起きれなかった。そんなところだろう。……ムカつく。兎月のくせに寝坊するなんてムカつく。あとで蹴りを三発ほど入れないと気が済まない。兎月のくせに生意気

だ。いたぶってやる。……いない……。仕方のない下僕だ。わ、私のこと……守るって約束してくれたのに……。本当に仕方のない下僕だ。……兎月がいない。それだけでこんな……っ、とにかく席に座らないと。

「……」

とは言っても席は一つも空いていなかった。……と、一人の乗客と目が合った。うちの生徒だ。それに確か兎月のクラスメイト……名前は知らないけど。何度かバスで見かけたことがあるような。あいつから席を奪おう。近づいてそいつを見下ろす。ぎょっと見開いた目で口ごもるそいつ。

「あ、あの……」

席を譲れと言おうと……けど、

「っ……」

「う……うぅ？」

震えるそいつを一瞥し、近くの吊り革を掴む。……馬鹿みたい。以前の私なら何も感じずに席を奪っていたのに。……兎月の言葉が頭をよぎった。席は奪っちゃいけないって……その言葉が頭から離れない。だからこうして席に座らず立っている。兎月は言っていた。他人の席を奪うなんて非常識なことをしてはいけないって。でも私は兎月と出会うまでずっとそうしていた。……ホント、昔の私って馬鹿だった。昔の自分が恥ずかしい。

とにかく兎月のせいだ。いつも兎月が二人分の席を確保しているのに今日寝坊するから。蹴りは五発にしよう。……兎月がいないから……兎月がいないと……っ？　また兎月のことばっかり……

考え過ぎだ。とにかく兎月が悪い。全て兎月のせいだ。早く会って色々と文句を言ってやりたい。結局言えずローキックに変えてぶつけてしまうけど。

「兎月？　うーんと、まだ来てないっぽい」

バス通学を終えて学校に登校。朝の予鈴も鳴って今から体育館で始業式。その移動中、兎月を探したけど……見つからない。隈なく探したけどいなかった……何をやっているんだろうか。私がこんなに探しているのに、あの馬鹿兎月は一体何を……。

「兎月ってたまに遅刻するからねー。いたら教えるよ」

「ありがと真美」

真美に聞いてみたけど兎月がまだ来ていないらしい。本格的に寝坊しているのか、まだ夏休みだと勘違いしているのか。どっちにしろローキック六発入れないと気が済まない。ムカつく。二学期最初から遅刻なんて気が緩んでいる証拠だ。……早く来なさいよ。どうして私が待ち遠しくならないといけないの。下僕の兎月が会いに来なさい。馬鹿兎月……。

「相変わらずだね～」

真美がニヤニヤと笑いながら小突いてきた。

「な、何が？」

「そんなこと言って～。可愛いんだからぁ」

さらに小突いてきたので距離を取る。真美はよくからかってくる。とても良い笑顔でニヤニヤと……。

「心配だったら電話してみたら？　じゃあね～。ほら佐々木、いつまで漬け物食べてんの！」

「あん、たくあん～」

……最後までニヤニヤ笑顔の真美はそう言うと二組の列に戻っていった。兎月はまだ来てないのか……ホントに一体何をしているのか。別に心配じゃない。別に心配じゃないけど、電話くらいはしてあげようと思う。全然心配じゃないけど。

始業式も終わり、あとはホームルームを残すのみ。始業式は校長先生のお話や部活の表彰など一時間ほどかかった。……その間も兎月から連絡はなかった。メールしたけど返信はなし、電話も出てくれなかった。……ホントに兎月は何をしているのか……こんなに心配させるなんて下僕としての自覚はないのか。……別に心配じゃないけど。メールいつもならすぐに返してくれるのに。何かあったのかな……？　心配じゃないけど。

「ねぇねぇ聞いた？　今日って転校生が来るらしいよ」
「えっ、本当？　知らなかった」
「どんな人だろうねっ」

クラスメイトの皆は賑やかに雑談を楽しんでいる。別にうるさいとは思わないけど、少しだけ静かにしてほしい。いつもより騒がしいのは休み明けだから？　それにしても本当に兎月は遅い。もうすぐで帰りのホームルームなのに、まだ来てないなんて。もしかしたら風邪とか……？　だとしたらお見舞いに行かなくては……別に心配じゃないけど。

「ねぇ恵」

……話しかけられた。目の前には赤色を少しだけ帯びた長髪をなびかせる女子生徒。同じクラスメイトだが、親しく話すようになったのは一学期の終わりからだ。

「どうしたの桜」

彼女の名前は火祭桜。小顔で容姿端麗な彼女はクラス一の人気者。それは最近になってから。それまでは大人しい印象だったし、それに悪い噂も流れていた。クラスで浮いていたように思える。誰も近寄らなかったのに。その彼女が今こうやって輝いているのには理由がある。それは……

「まー君知らない？」

兎月だ。桜は兎月によって本来の自分を出せるようになったらしい。兎月がいたから……そう、桜は兎月のおかげで明るくなったのだ

そうだ。そして桜は兎月のことを……

「ごめんね桜、私も知らない」

「そう……。さっき二組に行ったけど、まー君まだ来てないって」

桜の気持ちは知っている。一学期の終わり、私の家に真美と一緒にお泊りした時にたくさん話した。桜にとって兎月は、自分のことを真っすぐに見てくれた最初の人として特別な存在だって。だから桜も兎月のことを……。兎月を含めて初めて会った時は対立していたけど、今では仲の良いの友達であり……ライバルでもある。

「電話にも出ない」

「うーん、風邪かな？　放課後まー君の家に行ってみようよ」

「うん」

桜と話していると担任の先生が扉を開けて入ってきた。椅子に座るクラスメイト達。桜も自分の席に戻っていった。教壇に立つ先生。早くホームルームを終えてほしい。そうだ、前川に来てもらおう。それで兎月の家まで行って……蹴ってやる。でも風邪だったらやめとこう。たまにやりすぎて可哀想になる時がある。でもそれは兎月が変なこと言うから……。例えば、私服姿が可愛いとか言うから……。思わず蹴ってしまう。でもそんなことを言う兎月が悪いんだから。

「えー、今日から新学期だ。夏休みも終わり、また気を引き締めて授業に取り組んでもらいたい。来週からは編成テストが始まる。夏休みでの努力を試す最初の場所だ。良い点を取り、その勢いでさらに勉強に励むように。それと今後の模試についてだが……」

長い……長過ぎる。先生が兎月だったらローキックをお見舞いする

のに。

「では最後に、もう知っている人もいるかもしれないが、うちのクラスに新たな生徒が来る。転校生だ」

ざわざわと騒ぐ周り。転校生……二学期から？

「今呼んでくるから少し待っていてくれ」

そう言い残して先生は教室を去る。すると周りは一気に賑やかになり、どんな転校生なのだろうかと賑やかに話し合いだした。……早く終わらないかな。未だに兎月から返信は来ない。風邪だとしても返信が来ないのはおかしい。だって兎月は……いつも返事してくれた。私が問いかけたらいつも明るく応えてくれた。私は無視してしまうし理不尽なこと言うのに。それでも兎月は話してくれた。なのに今日はどうして……

「な、なんだ？」

突然、大きな音がした。クラスの男子の頓狂な声。クラスメイトの雑談を払いのけて轟音がなだれ込んできたのだ。机や椅子が倒れるような音。それは隣のクラスから聞こえてきた。二組……何かあったの……？

「え……？」

シンと静まり返った一組をさらに大きな音が襲ってきた。凄まじい音を立てて扉が勢いよく開き、一人の男子生徒が入ってきた。勢いよく開けられた扉のガラスが悲鳴を上げて亀裂が走る。クラスの皆は固まり、一点を見つめる。そこには、

「おい春日ぁ」

低い声で唸る男子生徒。あれは……兎月の友達の……佐々木。

「ど、どうかしたの？」

扉近くのクラスの男子が恐る恐る話しかけるが、

「どけ」

静まり返る教室に響く小さな唸り声。佐々木は周りの人達を払いのけて、

「春日ぁ！」

また私の名前を叫んだ。荒々しく教室に入ってくると激突するかのように私の目の前に立つ。激しく燃える両目が私を見下ろす。……何この人。

佐々木とは何度か会っている。この人は兎月の友達だから。いつも兎月と一緒にいる。兎月の横でヘラヘラと笑い、ふざけている人。話しかけられたことはあるが話したことはない。いつも変な話しかしないから。好きな野菜とか。野菜の話とか。……兎月の友達じゃなかったら絶対に名前も覚えない人だ。兎月の親友らしく、いつも兎月と一緒にいる……。

「テメェ……何しやがった」

いつもヘラヘラと笑ってふざけている変なテンションの佐々木。その佐々木が今まで見たことのない凄まじい形相で私を睨んでくる。

燃え盛る瞳と逆立つ髪の毛が気性激しく写る。佐々木は怒っていた。いやそれ以上に、キレていた。沈黙に溺れる教室でただ一人怒り沸き立っている。凄まじい剣幕で睨んできて今にも噛みつきそうだ。

「無視してんじゃねぇぞ春日ぁ……」

「……」

しかし私にはこの人が怒る理由が分からない。話したこともない佐々木がなぜ私にキレているのか。唸り睨みつけてくる佐々木。意味が分からない。

「佐々木君っ、どうしたの!?」

桜が慌てて駆け寄ってきた。佐々木の側に立ち、私と彼を交互に見つめる。桜もわけが分からないといった表情だ。

「黙ってろ火祭……絶対にこいつが原因なんだ」

「な、何が?」

暴れそうになる佐々木を桜が押さえる。今やクラスは乱れていた。私達を中心に取り囲むクラスメイトは息を呑むばかり。全員固まっていた。他クラスの佐々木が怒り狂って叫んでいるのだ。皆も驚くばかりで何も言えないでいる。

「佐々木!」

まったくの別方向から声が届いた。後方の扉、そこから顔を出していたのは真美だった。ひどく狼狽した表情で佐々木に詰め寄る。真美……? どうかしたの……?

「何やってるの！」

真美がこちらに向かってきて佐々木にタックルする。いつもなら佐々木は奇声を上げて倒れているはず。しかし佐々木は少しよろめいただけで真美を押し戻す。服を掴み必死に押さえようとする真美を佐々木は払いのけ、私を睨み続けて唸り声を上げている。いつもとは別人のように豹変した佐々木。こんなに人が怒っているのを見たことがない。

「離せ水川、間違いなく春日の仕業なんだから」

「落ち着いて佐々木……恵じゃないって！」

桜と真美に押さえられて佐々木は止まった。今にも喉元に噛みついてきそうな勢いだ。血走った目で私を睨む。……状況が理解出来ない。乱入してきた佐々木。私を睨む理由……事態が把握出来ないし意味が分からない。

「どうしたの真美？　一体何が……？」

不安げに桜が尋ねる。けど真美は辛そうに顔を伏せて黙ってしまった。一体何が……？

「だから春日が何かしたから……！」

まだこちらを睨む佐々木。いい加減鬱陶しい。兎月の友達だから気にしなかったけど、この人のことはよく分からない。いつもはヘラヘラしていたのに今はこんな……。佐々木がこんなにキレているのを見たことがない。それに一方的に睨まれるのも気に食わない。

「意味が分からない。ちゃんと言って」

佐々木を睨み返す。辺りはシンと静まり真美も桜も声を出さない。数秒の沈黙、すると怒りで燃え上がる佐々木の目が一気に消え悲痛な色に染まった。さっきとはまるで打って変わったように衰えて、俯いてしまった。そして弱々しく消え入る声で言葉を吐き出す。

「将也が……」

兎月……？　兎月が……！？

「将也が……学校を辞めたんだよ……」

第１２４話　新学期（後書き）

兎月消失編です。

第125話　転校生

「兎月が……学校を辞めた……？」

え……何を言っているの？　兎月が……兎月が……そ、そんなこと……

「な、何を言って……っ……そんなわけない……兎月が辞めたなんて……」

「何言ってやがる！　春日、お前の仕業だろうが！」

知らない。私は何もやっていないし何も知らない……。

「そんな……嘘だよ。なんで……どうしてまー君が学校を辞めるの！？　突然過ぎるし、理由も……誰に聞いたの？」

「担任からだよ。昨日、兎月から退学の手続きを受けたって。理由は分からない、先生も何も知らされてないって……」

兎月が……兎月が……っ、そんなことない。嘘だ、嘘に決まってる。兎月が私に黙ってそんなことするはずない。だって兎月は……いつも傍にいてくれて、いつも私を気にかけてくれて、いつも……いつも一緒だったのに……。いつも隣で笑っていたのに……っ……！？

「なあ春日、お前が仕組んだことじゃないのか！？　お前が何か関わっているんじゃないのかよ！」

知らない……私は何も知らない。どうして……どうして兎月が……っ、なんで……。いつも一緒だった。なのにどうして……こんなの

って……

「佐々木、落ち、着い…」
「おい春日っ、何か返事しろ！　お前じゃないならどうして将也がいきなり学校を辞めたりするんだ！」

分からない。分からないよ……信じられないよ……。

「何とか言いやが」
「おいお前達！　何をやっているんだ！　他のクラスの者は入ってくるな」
「一組の担任……ちっ、おい春日！　あとで話がある、放課後待ってろ。水川、行くぞ」
「ま、待ってよ佐々木。ごめんね恵……またあとで」

佐々木と真美が出ていった後もクラスは掻き乱れていた。落ち着かない教室内。そんなことどうでもいい。兎月が……兎月が学校を辞めるなんて……そんなことあるわけない。私に何も言わないでそんなこと……っ兎月、どうして……

「静かにしろ。転校生を紹介する。入ってきなさい」
「はい」

なんで……なんで兎月が……ずっと傍にいてくれた兎月がどうして……分からないよ……。何か答えてよ兎月……いつものように私に声をかけて……

「始めまして皆さん」

一体どうし、て……え……！？　嘘、だ……なんで…

…ありえない。目の前で起こっていることが信じられなかった。畳みかけるようになだれ込む現象に息つく暇がない。信じられない…。教壇の前に立つ一人の女子生徒。あの顔、あの茶髪、あの瞳。そんな……こいつがここにいるなんて。何かの間違いだ。こいつがここに来るはずがない。どうしてこいつが……あ……っ！？　まさか、こいつが……兎月を……！？

「今日から皆さんのクラスメイトになります……」

黒板に名前を書き終わり、こちらを振り返る。やはりあいつだ……

「土守有紗（つちもりありさ）です、よろしくお願いします」

不適に笑う土守有紗がそこにいた。

第１２６話　不敵な笑み

「ねぇねぇ土守さんってどこの出身？」
「あの有名な土守グループと何か関係あるの？」
「髪って染めてるの？　綺麗な茶髪だよね」
「分からないことがあったらいつでも私達に聞いてね」

ホームルームが終わり、放課後になると同時にあいつの周りに人が集まっていった。クラスメイトの皆は転校生のあいつに興味があるのだろう、矢継ぎ早に質問を投げかけている。

「皆さん、ありがとうございます」

微笑みを浮かべて奴は愛想良くしている。……あんなの猫をかぶっているだけのくせに。あいつは本性を隠しているに過ぎない。クラスメイトはその笑顔につられて顔を緩ましている。どうして……どうして土守有紗がこの学校に転校してきたのか……無駄にワイワイと賑わうクラスに、

「失礼しまーす」

やたら不自然に間の抜けた声が飛んだ。その声に教室中が反応し、活気ある教室が一気にシン、と静まり返る。興味津々とあいつに質問していた人も黙り、視線は一方向に集中。その先には、佐々木が立っていた。

「ねぇ、あれってさっき暴れていた……」
「二組の佐々木君だよ。怖いよね……」
「……なんで一組に来るのよ」

ヒソヒソと囁くクラスメイトに目もくれず佐々木はゆっくりと教室に足を踏み入れた。その表情は先ほどよりも落ち着いていたが、それでもピリピリとした苛立ちが伝わってくる。招かれない空気を跳ね退けて佐々木はズカズカと真っすぐ一直線にあいつの机へと歩を進めていく。一度静まり返ったが再びざわざわと騒ぎ出す教室内。不穏な空気が漂う中、佐々木の後ろから真美が申し訳なさそうに続く。

「……転校生の土守さん、だっけ？」

「はい、そうですが」

佐々木が口を開く。するとまたも教室は水を打ったように音が消えた。静まり返った空間に佐々木とあいつの声が響く。

「俺の名前は佐々……まあ俺のことはどーでもいいとして。実は土守さんが転校してきた今日、俺の友達が退学したんだ。偶然にしちゃすげー出来過ぎだなと思ってさー。……兎月将也って奴のこと何か知らない？」

普段のようにどことなく間が抜けてふざけた喋り方。しかし鋭く、威圧するように低い声で、ふざけているのに真面目な表情と睨み方で佐々木は尋ねる。敵意に近い猜疑心を撒き散らしながら佐々木はあいつを睨んでいた。それに対して、

「兎月将也さん？　いいえ、存じ上げませんわ。申し訳ないですけど私は今日転校してきたばかりですから在校生のことはもちろん、中退した人のことも全く知りません……」

困った表情を浮かべ、おどおどとする演技をするあいつ。佐々木は

それを睨み続ける。ピリピリと不穏な空気が流れて誰も音を発せず沈黙が長い数秒を経過した後、佐々木はパッと表情を変えて、

「うんうん、そりゃそうだよね。ごめんなさ～い、変なこと聞いちゃって」

ヘラヘラといつものムカつく顔に戻った。そして土守有紗に頭を下げて謝罪して佐々木はその場から逃げるようにコソコソと離れていった。馬鹿みたいに情けない姿で……まるで自分が悪かったと言うかのように気まずげな苦笑いを浮かべて……。少しだけ静寂が残り、僅かにクラスが揺れる。しかし佐々木のコミカルな動きを見て周りも緩和されたのか、先ほどと同様に活気ある質問大会が開始された。また賑やかを取り戻した教室……そして佐々木と真美が私の方へとやって来る。佐々木は笑い顔をやめて真剣な顔つきで小さく呟いてきた。あいつ……土守有紗を警戒してる？

「この後、将也の家に行く。春日さんも来てくれない？」

兎月の家……。兎月は学校を辞めた。でも家にはいるはず。なら家に行けば兎月に会える。……今はあいつのことより兎月に会うことが優先。

「……分かった」

「うし、となれば将也の家を襲撃だぜぇ！　それと……」

……？

「疑って悪かった。とんだ勘違いでアイムソーリーでっす。ははっ、なんか俺ってばパニクって頭がぐるぐるでさー。いやー、ホント……本当にごめんなさい」

土守に頭下げた以上に深く頭を下げて佐々木はそそくさと教室から出ていった。その様子を真美は神妙な面持ちで見つめた後、私の方を振り向いた。弱々しく微笑む。

「恵、さっきはごめんね。佐々木も兎月が辞めたって聞いて冷静さを失ってさ。あんな風に暴れちゃって……佐々木にとって兎月は本当に親友だから、ああやって取り乱したんだよ。だから許してあげてね」

「……うん」

「じゃあ後でね」

兎月……どうして？　どうして……何も言わないで学校を辞めるなんて……そんなのあんまりだよ。やっぱり、あいつが何かしたに……っ！？

「……ふふ」

「土守さん？」

「あ、ごめんなさい。少しぼーっとしてましたわ」

今……今、あいつ……こっちを見ていた。私の方を見て……あいつは笑っていた。こちらを見下すように蔑んだ目で……あの時と同じだ。あいつはあの時と同じように……。あいつが兎月に……！？

帰り支度を終えて私は二組へと向かった。未だに質問攻めされてい

る土守の横を抜けて。……あいつのことは、今はどうでもいい。あいつが兎月に何かしたに違いないけど……今は兎月に会いたい。それだけだ。

「恵、急ごう」
「うん……」

私の後ろを桜が追う。桜も兎月のことが心配なのは知っているから桜にも声をかけた。私と桜は二組の教室へと入る。

「あ、恵と桜が来たよ。ほら佐々木」
「んあ？　おお、ラジャーだ」

真美が手を振る横で佐々木は漬け物を食べていた。兎月はそれをよく漬け物馬鹿って罵っていた。

「佐々木君、早くまー君の家に行こうよ」
「まあそう急ぐなって火祭。まずは状況を一度おさらいしてからだ」

そう言うと佐々木は落ち着いた様子で座り直す。さっきはあんなに取り乱していたくせに。佐々木だって言える立場じゃない。でも……私も桜も兎月の退学について詳しく知らない。佐々木の言う通り一度状況を整理した方がいいかも。……兎月に会いたい気持ちを抑えて……。

「まず最初に、将也は学校を辞めた。担任の話によると自主退学だそうだ。退学届けは一昨日に出したらしい。そんでもって退学した理由は不明」

一昨日って……補習の最終日の翌日。補習が終わった日、自転車で

私を送り届けた後に何があったの……？

「それで、他には何かある？」

桜も先ほどから不安げに真美と佐々木を見つめている。桜だって兎月のことが心配だ。だって桜は兎月のこと……

「そうだなー……俺らの知ってることは以上！」

情報量少なっ。兎月だったらこう言うに違いない。

「じゃあ早く……」

「桜、慌てないで。まだ大事なことがあるの」

急かす桜を真美がなだめる。まだ大事なこと？

「マミーの言う通りだ」

「マミー言うな」

「とにかく！　まだ問題がある。それは、なぜ将也が退学したのかだ。あいつは馬鹿だけど自分から退学するほど吹っ飛んじゃいない。……何か、確実に、何か、何か理由があるはずなんだよ」

……うん、その通りだ。兎月は馬鹿だ。学力的にも精神的にも。それに鈍感だし馬鹿だし、こっちが期待した言葉を言ってくれないし……ホント馬鹿兎月。そんな兎月でも自分から学力を辞めたりしない。そんなことしたらローキックだけじゃ足りない。殴ってやる。……だから何か理由があってのことだと思う。絶対に理由があるはず。

「最初は春日さんが何かしたと思ったけど……ごめん」

「……もういいから」
「本当にごめんな。とにかく春日さんじゃなかった。そこで新たな容疑者……って言ったら失礼か。でも怪しい奴がいるんだ。……あの転校生、土守有紗がなんか怪しいんだよ。将也の退学と同時に転校って……そんなわけないだろ。さっき話してる時もなーんか不自然さを感じた。土守有紗……あいつが何か関わっているはずだ」

……佐々木って意外と鋭い？　佐々木の言っていることは私も同感出来る。だってあいつは……

「土守さん、だよね？　さっき教室で話聞いていたけど、土守グループっていう大企業と何か関係があるとか」
「土守さんが兎月に何かしたってこと？　ねぇ、恵はどう思う？」

桜と真美がこちらを見る。……どうしよう……皆に言うべきかな……？　あいつと私のこと……うん、言った方がいいよね……。兎月に関わることだ。きちんとあいつとの関係を言っておくべき。

「……私、知ってる」
「え？」
「あいつ……土守有紗について知ってる」

土守杏紗……彼女との関係について。私は皆に話すことにした。……今思うとこんなに長い時間話すことって初めてかも。

「私と土守有紗は昔よく一緒に遊んでたの」
「し、知り合いなのかよ！？」

佐々木は黙って聞いてなさい、と真美の注意が飛ぶ。

「私のパパとあいつの父親が仲良かったの。それに金田とも知り合いだった。だから私と金田と土守有紗の三人でいることが多かった」

「そうなんだ……恵のお父さんって社長だし、土守さんのお父さんもきっと会社のトップだよね、土守グループって言うぐらいだから。社長同士で仲良いってことあるんだ……」

「それに金田先輩も一緒とは。あ、だから春日さんと婚約の話が出たのか。昔からの知り合いってことで」

金田……そっか、金田はこのこと知っているのかな……あいつが転校してきたことを。

「なるほど……じゃあ恵と土守さんって仲良いんじゃないの？」

……真美がそう言うのも仕方ない。一応はあっている。だけどそれは昔の話。

「……数年前から会ってなかった。最後に会った時は土守とはすごく仲悪かったの」

「な、なんで？」

原因は分からない……。ただ、パパとあいつの父親が険悪になったのは覚えている。その辺りから、土守も私に対して冷たく当たってきて、気づいたらお互い忌み嫌うようになっていた。確かに小さい頃は仲良かった。なのに……だからこそ、あいつが今になって私の前に現れたのかが分からない。ただの偶然なわけない。そして兎月の退学……っ。

「なんにせよ土守が将也の退学について何か絡んでいる可能性は大だ。また明日にでも話を聞けばいい。状況整理終了、あとは将也の

家に乗り込むのみ！」

普段の気持ち悪い顔とは一変、佐々木は鋭い眼光と真面目な表情で勢いよく立ち上がった。その拍子に漬け物を入れたタッパーが落ちなかったら完璧だったのに。奇声を上げて漬け物を拾い集める佐々木はやはり野菜馬鹿の名がふさわしいと思った。

第127話　空っぽ

佐々木と真美と桜と一緒に学校を出る。目指すは兎月の家。兎月の家にさえ行けば……そうすれば兎月に会えるはず。

「ところで、どうやってまー君の家に向かう？」

「バス……だと時間がかかり過ぎるな。申し訳ないけど春日さん、車とか用意できる？」

「……」

急いで兎月の家に向かいたい。そして兎月に会いたい。そのためなら車ぐらいすぐに用意してやる。車での送迎は恥ずかしいけど……今はそんなの言ってる場合じゃない。兎月に会いたい。その思いで携帯を開く。前川に車を出すよう伝えた。お願い前川、急いで来て……。

「あら、春日さん」

学校の正門で前川を待っていると、あの嫌な声が耳に届いてきた。この声……あいつだ。

「ご友人と一緒に帰宅ですか？　とても仲睦まじくていいですわね」

土守有紗……不適な笑みでこちらへとやって来た。落ち着いた様子と柔らかい口調だが、あの見下したような目つきはさっき教室で見たのと同じ……。それに、まさかあっちから声をかけてくるなんて……知り合いであることは隠さないようだ。……。

「……」

「私も一緒に帰りたいのですが、今日は迎えの車が来ていますので」

わざとらしい笑みを浮かべる土守の進む先には一台の車。中から出てきた初老の男性が一礼してドアを開ける。

「有紗お嬢様どうぞ……」

「ありがと。では春日さん、また明日。今度は一緒に帰りましょう。昔みたいに仲良くしましょうね……」

小さくつりあがった口元。……まるでこちらの反応を楽しむかのように土守は見下したようにこちらに薄笑いを向けて車へと乗り込んだ。あんな芝居染みたことして……わざとらしい。最後に会った時は、嫌悪と敵意で私を睨んだくせに。中学校の時……。それに……兎月のこと、聞けばよかった。あいつが何かしたに違いないのだから。あいつが……

「恵、気にしないで。土守さんにはまた今度話を聞けば……」

「……分かってる」

「今は将也をぶん殴ることが先決だ。待ってろ将也ぁ！」

……兎月、会えるかな……。

「いない……」

佐々木がそう呟いてもう一度インターホンを押す。静かな住宅街に鳴るインターホンの音。それっきり他の音が続くことはなかった。前川の車で兎月の家へと到着。前来た時と同じ、ごく普通の家。兎月の家……でも……兎月は、いない……？

「まー君いないの……？」

弱々しい桜の声が空に消え入る。そんな……家には誰もいないなんて。留守……と言えばそれで片付くかもしれない。けど、そうじゃない。なんで……この、嫌な胸騒ぎは……。ただの留守とは思えない。兎月の退学と関係あるようで……気持ちが落ち着かない。動悸が激しくなる。兎月……どうしていないの？　ここに来れば会えると思っていた。会って、兎月と話がしたかった。兎月に……会いたかったのに。どうしていないの……ねぇ……？

「自転車もあれば車もある。それにポストにはしっかり新聞も投函されてる。そんでもって中はカーテンで完全にシャットアウトか。うーん……なんつーか、生活感溢れる家から人の気配だけが消えたって感じだな」

兎月が会えなかった。私はそれを受け止めれずに落ち込んでいるのに、佐々木は冷静に家を観察している。……佐々木は強いんだね。私なんて……もう崩れてしまいそうなのに……。佐々木は何度もインターホンを押し続け、終いにはドアを蹴って兎月を罵りだした。

「このヘタレ将也ー。やーい、悔しかったら出てきやがれー！」

「黙れライス太郎。周りの住民に迷惑でしょうが」

「……あっ、それだよ」

……桜？　どうしたの？

「ご近所の人達に聞いてみるのはどうかな？　最近何か変わったこととか……もしかしたら何か知っているかもしれないよ」

「ナイス桜っ。ほら佐々木、早速聞き込み開始よ」

「オーケー、我が足が滅ぶまで突き進もう」

「早く行け。恵は……ここで待っていて。私達で聞き込みしてくるから」

真美が気を遣ってくれているのが伝わってくる。……私は、駄目だ。兎月に会えないショックで体が動こうとしない。三人が走っていくのを見ていることしか出来ない。何も出来ない……。ねぇ、兎月……なんで突然消えたの？　私に何も言わないで……。いつも兎月は私の言葉に反応してくれて、私が無視しても話しかけてくれて、いつも私の傍にいてくれたのに。ねぇ……無視しないでよ……。私はいつも無視していたけど、あなたはそれでも私に声をかけてくれた。私に返事を返してくれたよね……。なのに、どうして……どうして今は返してくれないの……？　ねぇ、兎月……会いたいよ。

第128話　そして見つめる

兎月はいなかった。自宅にも、どこにも……。メールも電話も全く通じず、連絡手段がない。兎月の消息が掴めない……それに、家族ごと消えるなんて……。真美達が近所の住民に聞き込みしたけども有益な情報はなかったらしい。ここ数日、兎月家の人を見かけないし、夜中は明かりが点いていない。空っぽ……兎月の家の人達は誰に見られることもなく姿を消したのだ。夜逃げ……？　真美がそうかもしれないと言っていたけど……そんな……こと。昨日、家に帰ってパパに兎月のお父さんのことを聞いてみた。兎月のお父さんはパパの会社の社員だ。だから社長のパパに聞けば……でも、パパも兎月のお父さんについて何も知らないって。兎月のお父さんは会社を辞めてないけど、会社には来ていなかったそうだ。連絡もなく携帯も通じないし、どこにいるか不明。パパも知らない……もう他に兎月を探す手がかりなんて……もう、あいつしかいない。

「ねぇ、土守さん」
「はい、なんでしょうか？」

あいつ……土守有紗しかいない。兎月が退学した昨日、その日に転校してきた土守有紗。……あいつが何かしたに違いない。それしかないんだから。だって、兎月が私に黙って消えるはずがないもの……兎月が……っ。とにかく土守有紗が怪しい。あいつと私は因縁があるから……私と兎月の関係を知って、兎月に何かしたんだと思う。佐々木もあいつが怪しいと睨んでいる。佐々木は意外と鋭くて驚いた。

「初めまして。私、火祭桜って言います」

「初めまして火祭さん」
「今日から授業が始まるけど分からないことがあったら気軽に聞いてね」
「ありがとうございますっ」

今は休み時間、桜があいつと話している。またあいつは猫かぶってあんな薄笑いを浮かべて……本当にムカつく。兎月について、あいつが何か知っているんだ。なら、あいつに直接聞くしかない。でも私じゃ論外。二年前……あんなことがあったのに、あいつが私とまともに話すはずがない。佐々木は昨日のことで印象が悪い、真美も違うクラスだからいきなり兎月のことを尋ねるのは不自然。なら桜が聞くしかない。桜は同じクラスだし、自然に会話できる。土守有紗から情報を引き抜くには私達の中だと桜が一番適任だ。だから桜が今ああやって土守有紗との接触を計っている。桜……大丈夫かな？　桜と土守有紗の周りにクラスの女子が集まって賑やかになっている。

「土守さん、桜はクラスの人気者なんだよー」
「火祭さん可愛いですものねっ」
「そ、そんなことないよ」

……あんな感じで大丈夫？　クラスの女子がいる中じゃ聞きづらいと思うけど。でも……まだ最初のうちはそれでいいのかも。いきなり兎月のことを聞いても土守有紗は警戒して話さないだろう。……ここは桜に任せるしかない。桜に頼るしかない……。私は……何も出来ない。ただ嘆くことしか出来ない。桜はああやって自ら土守有紗に聞き込んでいるし、真美と佐々木も兎月について情報を探しているし……皆それぞれ何かしら行動しているのに……なのに私は……何もしていない。何も……ただ兎月が消えた事実を受け止めれないでいる。何もしないで、立ち尽くしているだけ。私は……どう

したらいいんだろうか……。

「恵は恵の出来ることをすればいいんだよ」

「私に出来ること……？」

昼休み、真美と一緒にお弁当を食べる。授業も上の空の中、私は何をすればいいのか分からないままでいた。兎月のために何をすればいいのか。何が出来るのか……。真美に尋ねたら、真美は優しく私に笑いかけてくれた。

「そ、恵にしか出来ないこと。恵にしか出来ないことがあるはずなんだよ。兎月のために出来ることが……。今は何をしたらいいのか見つからないかもしれないけど、いつか必ず恵にしか出来ない、恵がやるべきことが訪れるはずだよ」

私にしか出来ないこと……。私が兎月のためにしてあげれること……。兎月に……。

「だから今はそんなに落ちこまなくていいよ。兎月の馬鹿のせいで恵が元気ないなんておかしいって。ほら、元気出して」

「うん……」

真美……うん、私は私でいなくちゃ。兎月に会えなくてもしっかりとしておかないと。今度……兎月に会った時、兎月を殴るんだから。

「そ、れ、に～、兎月がいない寂しさを味わうのもいいんじゃないの～？　大切な人が傍にいる大切さを確認出来てさぁ」

っ、べ……別に。そ、そんなことない……。別に……。

「あれぇ、急に黙っちゃってどおしたの～？」

「……別に心配じゃない」

「はいはいそーですねー」

……む……真美がニヤニヤしだした。さっきまでの優しい笑顔とは違う、嫌な笑みだ。からかっている……。真美はいつもこんな感じで私をからかってくる。いつもニヤニヤして……む……。

「恵ってばホント素直じゃないんだから～」

「わ、私は別に」

「楽しそうですね」

不意を突かれた。突如、いきなり、完全に油断していた。一瞬、場が固まった。無意識に自分の口先が小さく息を呑んだ。まさか……

……こんなこと……

「もし良かったら私も仲間に入れてもらえますか？」

まさか……あっちから話しかけてくるなんて……。あの気色悪くて不快な声が背後から響いてきた。……後ろを振り向かなくても分かる。今……私の真後ろに誰が立っているのか。こんなにも分かりやすく意地悪く、ねっとりと、猫かぶった、耳障りで苛立つ声の主なんてあいつしかいない……！

「私、まだちゃんと春日さんと話せてなかったですから。再会の挨拶ついでと言っては何ですが、昼食ご一緒してもよろしいでしょうか？」

答えも聞かず隣に座り、こちらに小さく薄笑いを浮かべてくる。私のすぐ隣に……あいつ……土守有紗が私の隣へと座ってきた。こいつがまた私と接触してくるなんて……。

「お久しぶりです春日さん、中学校以来ですわね。お元気でしたか？」

「……」

見え透いた薄っぺらい仮面……こちらを馬鹿にしてくるかのように目が冷たく光っている。わざとらしい愛想笑いを浮かべて……。あんな別れ方したのに、まともに笑顔で話せるわけなんてないのに。アンタが演技しているのなんてお見通しだ。そして、こいつも私が気づいているのを理解した上で笑いかけてきているに違いない。私を苛立たせるためだけに……本当、嫌な奴。

「恵……桜……あの……」

「火祭さんがお二人と仲が良いと言うので、私も仲間に入れてもらえたらいいなと思いまして」

土守有紗の後ろで桜がおどおどと立ち尽くしていた。桜……きっと土守有紗になんとかして情報を聞き出そうとしていたら逆に手を打たれたって感じなのだろう。また話しかけてくるなんて私に対して嫌がらせをしているとしか思えない。なんて奴……こうなっては兎月のことを聞きづらくなってしまった。桜もまだこいつから兎月に関して情報を聞き出せていないだろうし、それに……こいつと一緒にご飯を食べるなんて……すごく嫌だ。不快でしかない。

「水川真美さん初めまして、土守有紗です」

「は、初めまして」

「私と春日さんは幼少期からのお友達なんですよ。昔はいつも二人で遊んでいましたの」

ニッコリと薄笑いを私に向けてくる……。なんて不快、気持ち悪い、吐き気がする。こいつが話しかけてくるなんて悪意しか感じられない。……こいつは私が嫌がるのを分かっている上でこんなことをしてくるのだ。周りから見れば昔の友達と再会して微笑ましいなんて思えるかもしれないが……私とこいつの別れ方は異常だった。お互いに忌み嫌って……もう二度と会うこともないと思ったぐらいだ。確かに昔は仲良かった。けど……中学二年生の夏のある日から、あいつの態度が一変した。敵意と悪意がこもった目で私を睨んできて……散々私を罵った挙句、最後はぐちゃぐちゃになって私達の関係は壊れた。だからこそ……だからこそだ。なぜ、こいつがこうやって転校してきてまた再び私の前に現れて、こうやってわざとらしく笑みを向けてきて、こんなことするのか。兎月を……兎月を奪って……っ、

「こうして一緒に食事するのも久しぶりですね。昔を思い出しますわ。あの頃は楽しかったですよねっ」

「……」

なんでこいつは……こんなにも平然とニコニコしているんだ。なんで……。

「一緒に私の家の庭で遊んだりしましたよね。懐かしく感じます」

「……なんで」

「え？」

なんで……なんでアンタはそんな風に笑えるの？　どうしてそんな風に人を見下せるの？　兎月を……兎月を奪ったくせに……どうして堂々と私の前に現れることが出来るの！？

「兎月を……兎月をどうしたの？」

こうなったら私から聞いてやる。アンタが兎月に何かしたのは間違いないんだから。アンタが……アンタが兎月を……っ！

「ち、ちょっと恵。いきなりそれは……」

真美が慌てているが関係ない。牽制するのはもうやめだ。こっちから直接聞いてやる。

「……？　昨日も他のクラスの男子がその兎月という方のことを聞いてきましたが、私には何のことか分かりませんわ。ごめんなさい春日さん、その兎月という方が誰なのか知りません」

「嘘。アンタが何かしたんでしょう……」

それしか考えられない。そうじゃないとおかしいもの。だって兎月が私に黙って消えるなんてこと……そんなこと、あるわけないん

だから……。

「本当に私は何も知りませんわ。でも、私に出来ることがあれば言ってください。その、えっと……兎月さん、ですか？　何か分かったことがあればお伝えしますから。だって私達、友達ですものね」

っ……本当……本当に嫌な奴。

そして、一週間が過ぎた。夏休みが終わり始業式から一週間。土守有紗が転校してきて一週間。兎月が学校を退学して一週間……。未だに兎月について情報は得られないし、兎月を探せてない。相変わらず一週間前から携帯は繋がらず、家には誰もいない。毎日メールを送っても電話をかけても反応がなく、毎日家を訪れても誰もいない。パパの話だと兎月のお父さんは会社に来ないし連絡もつかない状態のまま。

「こうなったら警察に言うしかないんじゃねーの！？」
「捜索依頼を出すってこと？」
「ノンノン、土守有紗を訴えてやるんだい！」
「それは駄目だよ……」

今日の授業も全て終わり、現在は放課後、二組の教室。二学期が始まってからまともに授業を受けてない……。授業の話なんて頭に入らない。テストもあったが、ちゃんと解答している気がしないし、そんなことどうでもいい。兎月……兎月に会えなくなってもう一週間も過ぎた。声も聞いてない、姿を見てもいない、あの……いつも笑顔で私の傍にいてくれた兎月が……いない。

「なんでだよ、どー考えても土守さんが怪しいだろ。あの有名な江戸川君だってそう推理するに違いないって」
「仮に江戸川君がそう推理しようが時計型麻酔銃を使おうが土守さんを訴えるなんて出来ないの。彼女が兎月を誘拐したっていう明確な証拠はないし、何より動機がないって普通にそう考えてしまうでしょ」
「動機ならあるさ。仲の悪い春日さんに対する嫌がらせだろ」
「恵の前でそんなこと言わないでっ」
「ちょ、火祭、落ち着い…ぶべぇ！？」

そうだ……佐々木の言う通り、あいつの目的は私に対する嫌がらせだ。だから兎月を退学させた……真美の言う明確な証拠がないにしろ、これなら兎月を誘拐する理由も納得できる。

「うぐぐ、鼻血が止まらねぇ……と、とにかく！　今日も将也の家に行くぞ。土守さんから口を割らせることが出来ないなら俺達に出来ることなんてこれくらいしかない」
「うん、そうだね。とりあえず鼻血拭いて」

「恵、行こ」
「……うん」

この一週間、ずっと兎月の家に通いつめてる。もうそれしか出来ない。私にはそれしか……。ねぇ、兎月……あなたは今どこで何をしているの？　……これだけは考えたくなかったけど、生きてるよね……？　馬鹿げたことだと思う。でも……あなたが生きているのかも私には分からない。元気にしている？　また……会える？　ねぇ、兎月……いつも一緒だったのに。いつも傍にいて、いつも笑いかけてくれて、私の話を聞いてくれて、私が蹴っても殴っても無視しても、それでも兎月は傍にいてくれた。傍にいるって約束してくれた。私を守ってくれるって言ってくれた……っ！　なのに、どうして、兎月……今すぐ会いたい。

「あれ？　春日さん車用意した？」
「え……？」

教室を出て、正門へ向かって歩いていると佐々木がそう尋ねてきた。その声につられて前方を見れば……正門のところに一台の車が停車していた。……それと車の傍に立っている人がいる。ここからだと遠くて見えづらいけど黒い服を着ている。

「前川さんに連絡したとか？」
「ううん……何もしてない」

前川に送迎は頼んでおらず皆でバスに乗って兎月の家に向かっている。けど正門のところには車……しかもパパが乗っているような高級車だ。ということは……土守有紗。あいつは車の送迎で通学している。あの車はあいつを待っているのだろう。車の横に立っているのも執事とかだろう……。

「となると土守さんってわけね。へいへい、良いご身分ですな。あんなの無視して早く行こうぜ」

車を睨みつける佐々木を先頭に私達は正門へと向かう。徐々に近づく土守家の送迎車と執事。……？　男性……え……ち、ちょっと待って……えっ？

「嘘……」

心臓が止まったように感じた。正面に見える車に近づくにつれて、車の横に立つ執事服を着た人に近づくにつれて鼓動が跳ね上がっていき、その人の顔をはっきりと確認した瞬間に心臓が止まった。嘘……信じたくない。けど、なんで……！？

「なっ……！？」

「あ、あれって……」

そんな、こと……嘘……。

「ま……まー君」

ずっと会いたかった。ずっと、この一週間ずっと……会いたかった人。目尻が熱くなって指先が震えて喉が締めつけられたように痛い。声が出せずただ見つめることしかできない。会いたかった人……いつも傍にいてくれた人。兎月が……土守有紗の執事としてそこに立っていた。

第１２９話　ドア・トゥ・サイエンス（前書き）

誤字があるかもしれません。雑な文章ですいません（汗）

第129話　ドア・トゥ・サイエンス

息が止まって、口を閉じることができず、唇が割れるように乾いていく。自分の声はひどく掠れて音になっていない。一度停止した心臓がぎこちなく動きだし、鉛で叩きつけられたように全身に衝撃が走った。目の前の光景が受け止めれない。信じたくない……。

「そんな……」

そんな……嘘、だ。理解したくない……目の前で起こっていることが本当であると信じたくない。兎月……ずっと会いたかった。本当に会いたかったのに……なのに、こんな形で会うなんて思いもしなかった……そして、こんなの認めたくない。土守有紗の迎えの車、その横に立っているのは……会いたくて仕方のなかった人。兎月が……兎月が執事服を着てそこにいた。無表情で……色の消えた顔で私達の方を見つめていた……っ。

「と、兎月……」

会いたかった……なのに、どうして今、私はこんなにショックを受けているの？　信じたくない……頭の中で考えてしまった事実が。受け止められない……兎月が、土守有紗の執事をしているなんて。

「まー君……！」

「兎月……って佐々木！？」

桜と真美の間から黒い影が駆け抜けて兎月の方へと突進した。距離を詰めた黒い影、佐々木がものすごい速さで兎月の正面に立ち、

「こ、の、馬鹿将也ぁ！」

っ！？　兎月を……殴った。勢いに身を任せただけの、加減なしの拳が兎月を殴り飛ばす。兎月は……何も抵抗せず佐々木の拳を顔面から受けた。グラリとよろめいたけど、でも兎月は倒れず……赤く腫れた頬にも触れず……表情一つ変えず……何も言わず……じっと佐々木を見てみる。黒く冷たい目で……っ。

「おい……何してんだ将也。やっと姿を見せたと思ったら何だその格好は」
「……」

兎月は何も言わず佐々木をただ見ている。ひどく冷たく、無表情な瞳で……。

「テメェ、なんとか言いやがれ！」

佐々木が再び拳を振りかぶったが、すぐに違う手が佐々木の腕を掴んだ。

「離せ火祭！　この馬鹿もう一回殴らねぇと」
「落ち着いて佐々木君っ」
「そ、そうだよ佐々木」

桜が佐々木の腕を押さえて、そこに真美も加わる。二人に押さえられても佐々木は暴れ続け、兎月に殴りかかろうとしている。

「この大馬鹿野郎っ！　なんだその恰好は！」
「……」
「おい……なんとか言いやがれ！」

「さ、佐々木落ち着いてよ！　……兎月、だよね？」
「……」
佐々木の怒りの声にも、真美の呼びかけにも……兎月は何の反応を示さず、ただ黙って立っている。と、兎月……？
「ま、まー君……」
「……」
桜の声にも反応を見せず、じっと黙ったまま……な、なんで……？　どうして……どうして何も言わないの？
「まー君……どうして学校を辞めたの？」
「……」
「な、何か事情があるんだよね……？　ねぇ、まー君……」
「……」
「……ねぇ……何か言ってよ……ぐすっ、まー君……っ」
兎月……どうして……？　どうして何も言ってくれないの？　だって……だって、そんなの、ないよ。兎月はいつも返事をしてくれて、いつも笑ってくれていたのに。それなのに、今は……何も喋らないで無表情のまま。そんな……嘘だ。兎月がこんな……無視するなんて。ねぇ、何か言ってよ。何か返事しなさいよ……っ！
「兎づ」
「あら、皆さん」
っ！？　また……後ろから、あの声が聞こえた。あの、不快で耳障りで気もちの悪い、あいつの声が。

「土守ぃ……やっぱお前の仕業だったのか……！」

佐々木の怒気のこもった叫び声にも動じず、涙を流す桜に気も留めず、土守有紗は微笑んでいた……っ！

「やっぱお前が将也に何かしたんだな……！」

すごい形相で睨みつける佐々木に対しても微笑を浮かべるだけで、土守有紗は何も言わず私達の横を歩いていく。私の方を見て、ねっとりと嘲笑うかのように口元を歪ませて……。やっぱり、こいつが兎月を……！

「早く車のドアを開けなさい」

「かしこまりました有紗お嬢様」

え……？　ちょ、ちょっと待って……今、兎月は、なんて言った……？　あ、あいつのことを、お嬢様って……！？

「なっ……ま、将也どういうことだ！？　何を言ってやがる！？」

「兎月……そんな……」

佐々木の怒鳴り声と真美の掠れた声に対しては反応しない兎月が……あいつの声には反応した……！？　あいつのことを、お嬢様って……！？　兎月……なんで、あいつに頭を下げて、あいつの命令に従っているの！？

「どうぞ有紗お嬢様」

と、兎月……そんなの、嘘だ。どうして、土守有紗にそんなに従順しているの？　だって……兎月は……土守有紗に無理矢理誘拐され

たとかであって、自らの意思で土守有紗の執事をやっているわけじゃないんでしょ……？　あいつの命令を素直に聞くなんて……嘘だ。

「ま、まー君っ？　な、なんで……そんな……っ」

「待って兎月！」

「……」

まるでロボットのように無感情で、無表情で、兎月から何も感じられない。と、づき……っ。

「それでは皆さん、さようなら。ほら兎月、私の友達の皆さんに挨拶しなさい」

「かしこまりました有紗お嬢様」

土守有紗の声に反応して、兎月がこちらを振り向く。驚いて、あまりの衝撃で動けない佐々木と真美を見つめ、泣き崩れる桜を見つめ、そして……私と目が合った。その目は……いつも見てきた兎月の温かい目と同じものと思えない、とても暗くて冷たい目だった……。

「それではさようなら、佐々木様、水川様、火祭様……春日様」

深々と頭を下げる兎月……っ、いつもの……明るい声じゃなくて、無機質な声が心に突き刺さる。兎月……兎月、兎月っ……やめて……やめてよ。そんなの兎月じゃないよ……。いつも私に笑顔を向けてくれた兎月……なのに今は無表情で……そんなの……

「と、兎月っ」

思わず声が出てしまった。嫌だ。こんなの嫌だ。兎月が……あいつの執事をしているだなんて。そんなの絶対に嫌。だって兎月は……

私の、下僕なんだから。私の傍にいてくれるって言ってくれたんだからっ。私の命令は聞いてくれるんだから！

「兎月、止まりなさい」

「……」

「……止まりなさい」

「……」

そ、そんな……。兎月はこちらをもう見てくれなかった。そして、私の声に反応してくれなかった……。いつも、いつも二回目には絶対に返事を返してくれたのに。私の命令は聞いていたのに……なのに、そんな……無視するなんて。兎月、無視しないで……！

「っ、止まりなさい！」

「有紗お嬢様、行きましょう」

!?　そ、そんな……兎月……。

「ええ、そうしましょう。それでは皆さん、また明日学校で」

窓から覗く土守有紗の勝ち誇った顔。そして、車の中へと入っていく兎月……っ、

「待って兎月！」

いつも傍にいてくれた。いつも傍にいて私の言うことを聞いてくれた。

「……待ちなさい兎月」

理不尽なこと言っても、理不尽な暴力を振っても、いつも笑顔で受け答えてくれた。明るく元気な表情で笑ってくれていた……。

「……行かないで」

私は無視してばっかりだけど、それでも兎月は言葉をかけてくれて、私のことを見ていてくれていたのに……なのに、今は……っ。

「兎月……」

「行きましょう有紗お嬢様」

兎月が見てくれない。兎月が無視する。兎月が……傍にいてくれない。車は走りだし、遠くへと消えていく。兎月が……消えていく。私を置いて……。いつも、いつも傍にいてくれて、いつも笑っていて、いつまでもそれが続くと思っていた。私を守ってくれるって言ったのに……なのに、兎月……っ。

「兎月……行かないでぇ」

涙が止まらず、足が震えて立っていられない。兎月は……いなくなってしまった。私の知っている兎月は……もう……。

第１３０話　佐々木フィーバー

兎月は土守有紗の執事となってしまった。信じられなかった……兎月が、執事になって……あんなこと……っ。兎月が消えたのは土守有紗が何かしたからだと思っていた。土守有紗が無理矢理、兎月を誘拐したと思っていた……なのに、それなのに……っ、昨日の兎月の様子だと……兎月が自分から、あいつの執事になっていたみたいな……っ。だって、兎月……私達のこと無視して、命令しても全く聞いてくれなかった……。無表情で、感情が消えた表情で……土守有紗の命令を聞いていて。

「おい、土守有紗……！」

兎月と再会できた翌日、あいつはいつもの薄笑いを浮かべて登校してきた。また私の方を見て口元を吊り上げて……。土守有紗が教室に入ってくると同時に、佐々木が教室になだれ込んできた。怒りに顔を歪ませて、あいつを睨みつける。騒然となる教室内。ざわざわと、また佐々木が来たと、批難と嘲笑の目が集中して中には冷たい目、敵意すら感じる。それらに一切動じず佐々木は声を荒げてあいつに詰め寄る。

「やっぱりお前が将也を誘拐したんだったな……将也を返しやがれ！」

噛みつかんばかりの勢いで佐々木が土守有紗に詰め寄る。殴りかかろうとしなかったのは佐々木の良心が勝ったからなのだろう。

「あら、なんのことでしょうか？」

「テメェ、昨日あんなことしたくせにシラを切るつもりか！　将也

がお前のとこにいたじゃねぇか！」

佐々木が叫び散らすも、土守有紗は顔色一つ変えず涼しげに微笑む。

「新しい執事の兎月のことですか？　彼がどうしましたか？」

「お前が将也を誘拐したんだろうがっ！」

「うふふ、何を言ってるのですか？」

……あいつ、どうしてあんなに余裕でいるの？　なんで、そんなに……楽しげに笑っていられるの……？　もう、何が何だか分からない。

「昨日の彼の様子は見ましたよね。兎月は自ら執事になると言ったのですよ。私の指示ではなくて彼自身の意思ですわ」

っ、そ……そんな……！？

「なっ……ふざけるな！　んなこと将也が言うわけねーだろ。将也がそんなこと……」

「あら、ですから昨日ご覧になった通りですわ。兎月は自ら進んで私に仕えることを望んだのです。彼の忠実に仕えている姿は見ましたよね？」

っ……土守有紗の嫌な笑みが一層深く歪んだものになる。チラチラと私の方を見ながら……そうだ、兎月は土守有紗の執事になっていた。私に何も言わないで……それに、私の声に反応してくれなかった。兎月は……あいつの命令にだけ反応して、私には何も……。

「将也はそんな奴じゃねぇ！　お前が何かしたから将也は仕方なく応じているだけだろうが！」

兎月……どうして……？　私、分からないよ……ねぇ、兎月……。
それもこれも……！

「うふふ、何のことでしょうか？」
「この野郎……って、春日さん？」

土守有紗、あいつが現れてから全ておかしくなったんだ。あいつのせいで兎月は……！　明るく屈託のない太陽のように温かい笑顔で笑ってくれた兎月を奪ったのはあいつ……兎月との日々を壊したのはあいつ。土守有紗に対する憎悪が一気に体中から溢れる。そして体が勝手に土守有紗の前へと詰め寄っていた。

「……っ」
「あら春日さん、おはようございます。春日さんも何かご用ですか？」

……よくもそんな白々しい態度が取れたものだ……アンタのせいで兎月と私はこんなことに……許せない。

「……兎月を返して」
「春日さんまで何を言っているのですか？　兎月は自らの意思で私の執事になったのですよ。返すも何も、私にもあなたにもそんなこと命令する権利はありませんわよ。全ては兎月自身が決めたことなんですから」

っ、そんなこと……ない！

「そんなことないっ、兎月は、そんなこと……」
「ふふっ、見苦しいですわね。兎月はあなたのものじゃないんです

よ？　それに、もう彼にあなたの声なんか届きませんわ。昨日のように、ね」

……っ！

「こ、の……テメェ、春日さんに謝りやがれ！　俺の親友の大切な人を馬鹿にすんじゃねぇよ！」

「あら、事実とはいえ、やはり辛いですか？　無神経な発言でしたね、申し訳ありませんわ。それでは授業が始まりますので自分の教室に戻ってくださるかしら？」

「この野郎ぉ……ちっ、はいはい戻ればいいんだろ。春日さん、また後で」

クラス中の冷たい目線を浴びつつ佐々木が教室を去る。……そんな……兎月にはもう私の声は届かないの……？　命令すれば何でも聞いてくれて、いつも話を聞いてくれた兎月。それなのに、もう届かない……。兎月……昨日見た兎月……あれが今の兎月？　もう、あの頃の兎月はいないの……？

「ふふっ、春日さんも自分の席に戻った方がいいですわよ。お話なら休み時間にお付き合いしますので」

何も分からない。分かりたくない。認めたくない。壊れた私と兎月の関係を見つめたくない！　……全ての元凶、土守有紗は勝ち誇った笑みを浮かべて私を見上げていた。

どうなってしまったのだろうか……まだ頭の中の整理がつかない。いや、つかないんじゃなくて……認めたくないだけ。信じたくないよ……兎月が土守有紗の執事になっただなんて。私に黙って勝手に……それもあいつなんかの下につくなんて。私のこと無視してあいつの傍にいるのなんて……。どうしてこんなことになったの……。

「あ、あの春日さん」

「……？」

放課後になり、廊下を歩いていると後ろから声をかけられた。男の人の声。正直、どうでもいいのに……とりあえず振り返ると、

「か、春日さん……良かったら一緒に帰りませんか？」

……知らない男子だ。見たことない。なんでいきなり話しかけてきたのか、大体は察しがつく。なので無視する。

「……」

「あ、あの春日さん……あ、あぁ～」

……この頃、こんな感じで知らない男子から声をかけられるようになった。誘われたりするようになって正直鬱陶しい。そんな気なんてないし、今は兎月のことで頭が回らないのに……。兎月といた時はなかったのに、兎月がいなくなってから……。告白もやめてほしい。時間の無駄でしかないんだから。私は兎月しか……。

「春日さんっ」
「……」

また声をかけられた。今度は正面から。目の前に立っているのは……山田君。何度も何度も私に告白してくる人。何回断ってもしつこく勘違いしてきた……。この前、兎月が一緒に告白を断ってくれて、それでもう諦めてくれたと思ってたのに……また現れた。もう……本当にウザイ。私は兎月のことで頭が一杯なんだから。

「今日はどこに寄っていこっか？　駅前の新しい喫茶店に行ってみようよっ」

アンタとどこかに行った記憶なんてない。なんでいつも一緒に寄り道してるみたいな感じで話しかけてくるの。……本当にウザイ。いい加減にしてよ。兎月が言ったこと覚えてないの？　もう私に近づくなって兎月が言ったことを。兎月が……私のために言ってくれた……私のために怒ってくれた……っ。兎月……あの時、私のために山田君を追い払ってくれて、私のことを想って怒っていた兎月。……嬉しかった……兎月が嫉妬してくれて。でも、今は……

「ほらほら行こうよ～」
「え……」

気づけば山田君が私の手を握ってきた。悪寒が走る。兎月以外の男子に触られるなんて気持ち悪すぎる。手に広がる生暖かさに吐き気がする。体が拒絶反応を起こして……き、気持ち悪い。引き剥がそうとしても離れてくれない。しっかりと握られているなんて不快でしかない。手に滲む不快感が浸食するように体に流れ込んでくるような気持ち悪さ。もう気持ち悪いとしか言いようがない。

「は、離して」
「照れなくていいって。春日さんの手温かいね～」
い、嫌……っ！　兎月以外の男子に触られたくないっ。気持ち悪くて仕方ない。どうしてこんなにしつこいの。もうやめてよ。うっ……嫌だよ……た、助けてぇ……兎月ぃ……！
「はーい、セクハラにご注意をー！」
「ぐへぇ!?」
っ!?　山田君が吹き飛んだ。誰かが山田君を蹴ってくれた。離れた手と同時に安堵感が満ちていく。誰……と、兎月……？
「大丈夫、春日さん？」
「……」
……佐々木だった。
「ちゅうおおぉっと!?　何そのがっかりした目は!?　余裕でマイリスみたく余裕でショックなんですけど!?」
そして言ってる意味が分からない。そしていつもの変な笑い顔をこっちに向けてきている。いつものふざけた佐々木がそこにいた。
「いってぇ……佐々木、一体なんだよ!?　俺と春日さんのラブラブムード壊してんじゃねぇよ」
佐々木に蹴られた箇所を擦りつつ山田君が起き上がって佐々木を睨みつける。対して佐々木は涼しい顔で頭を掻きむしり、軽く溜め息

をついて山田君をぼんやり見つめていた。

「はいはいそれもういいから。どうでもいいし。さっさと部活に行けって」

「ふん、部活なんかしてられるか。俺は今から春日さんとデートするんだ。どうして邪魔するんだ」

「この人は俺の親友の大切な人なんだよ。ちょっと親友が不在なんでね、今は俺が代わりに守ってやらないといけないんだ。ってことで、おーい野郎どもー。山田を拘束しろ」

佐々木の合図とともに数人の男子が現れて山田君を捕まえる。突然のことに山田君は驚いている様子で、手足を動かして暴れだす。しかし完全に拘束されて脱出できないみたい。

「や、やめろ！　弓道なんかやってる場合じゃねぇんだよ。俺は春日さんと……」

「恋の弓道でもしてたつもりか。つーかお前なんかじゃ的には当たらんって。うし、先輩のところに連行しろ」

「や、やめ……うあああぁぁぁ！？」

数人の男子に運ばれていった山田君。あっという間の出来事だった。廊下に残ったのは私と佐々木のみ。……佐々木か。

「あっ、またそのがっかりした目！　へーへー、助けたのが将也じゃなくて俺ですいませんでしたよ。ったく、なんつーひどい役回りだ」

ぐちぐち言いながら不機嫌そうに佐々木は制服のポケットから慣れた手つきできゅうりを取り出して口にくわれた。……佐々木っていつも野菜を常備してるのだろうか？

「はあー、どいつもこいつも将也がいなくなった途端チャンスと言わんばかりにアクション起こしやがって。結果は変わらないのにさ」
「……アクション？」
「最近、告白されまくってるでしょ。王子様が消えたから皆さんチャンスと勘違いしてさ。さすが春日さんって感じだね」
と、兎月のこと？
「ったく、山田なんか懲りずにまた来やがって。ホントすげーウザイよな。いや、一番ウザイのは将也だけど」
「と、兎月……？」
「あんの馬鹿、もう一発ぶん殴らないと気が済まない！　そう思うだろ？」
……私は……
「……土守有紗」
「あぁ、土守さんね。あの人も許せないけど、俺はやっぱ将也がムカつく。ってことで将也に会いに行こうぜ」
「え……？」
と、兎月に会いに……？
「土守さんの家に突撃するんだよ。将也が土守さんの執事になってんなら居場所はもう決まったも同然。だったら直接こっちから会いに行ってぶん殴るんだよ」
……そうだ、兎月はあいつの執事。認めたくないけど……。それなら兎月はあいつの家にいる。その通りだ。だからあいつの家に行け

ば兎月に会える……？　で、でも……

「でも……兎月は、あいつの……」

兎月はあいつの執事になってしまった。私のことを無視して、何も反応してくれなかった。もう兎月は……あいつのものになってしまったんだ……っ

「将也が本当に土守さんの執事になったと思ってるの？　それはちょっとあんまりだろ」

「え……」

「将也はそんな奴じゃない。俺の知ってる俺の親友はそんなことするはずない。きっと事情があるんだ。俺はそう思う。だから俺は諦めてないよ。あいつにまた会って話を聞かないと納得しないし、とりあえず聞く前に殴らないといけないしぃ？」

きゅうりを食べ終えた佐々木はすぐさまポケットからトマトを取り出す。でも……兎月は……

「兎月……私のこと無視した……。私の言葉を無視しないで聞いてくれて、いつも私に話しかけてくれた兎月。でも……土守有紗の言うことしか聞かなかった……っ」

私の知っている兎月はいないんだ。何でも言うこと聞いてくれる兎月は……。

「あらら、春日さんは将也を何でも言うこと聞いてくれる下僕としか思ってなかったの？」

「そ、そんなことない」

「将也は何でも言うこと聞く下僕じゃねぇよ。声かけたら何でも反

応してくれるとでも思った？　春日さんだって将也のこと無視したりしてたじゃん。兎月を都合の良い手先とか思ってるとか勘違いにも程があるわ」

そ、そんなことない。確かに私は命令ばっかりで、兎月のこと無視したりしてたけど……でも、兎月のこと手先とかそういう風に思ってない。最初の頃は下僕扱いしてたけど……けど今は！

「今は……た、大切な人なんだよ」

……は、恥ずかしい。何を言っているんだ私は。こ、こんなこと言うなんて。しかも佐々木なんかに……。

「……ほほぉ、それが言えるなら問題ないよ。その台詞、本人に言ってやりなよ」

「と、兎月に？」

「今までは将也が春日さんに話しかけてきたんでしょ。いつかの結婚騒ぎの時みたく将也から春日さんに呼びかけていたんでしょ。なら今度は、春日さんが将也に呼びかける番だ。あいつの心に響く一発良いのぶつけてやりなよっ！　ヘイ！」

……佐々木の決め顔とポーズが気持ち悪い。真面目にやってるのかふざけているのか分からない。ホント……変な佐々木。

「ぐあっ、そんな冷たい目線向けないで。余裕でショック！」

「……兎月」

「はいはい俺なんかじゃ将也の代わりにはなりませんよ。早く王子様奪回しに行こうぜ」

え？　今度はすごく真面目に良い顔で佐々木が笑いかけてきた。不

真面目だったり真面目だったり……ホント佐々木って変。

第１３０話　佐々木フィーバー（後書き）

シリアスってホント難しいです（汗）
自分の文才のなさと語彙力のなさが更新の遅さと内容の粗末さで露呈しまくりな状態ですね。
どうしたらいいでしょうか……？

と、とにかく頑張っていきます（苦笑）
今ここを読んでくださっている方、読んでくれて本当にありがとうございます。

第１３１話　突撃

佐々木と一緒に学校を出る。今から兎月に会いに行く……今度は私から兎月に呼びかけるんだ。いつも……いつも兎月からだった。金田との婚約の時もそうだ……兎月の方から思いをぶつけてくれた。素直になれなかった私……何も言えず、何も言わなかった私に兎月は全力で思いを告げてくれた。私が誘拐された時、私が怪我した時、夏祭りで知らない男の人に話しかけられた時……兎月は助けてくれた。自分のことを省みず私を救ってくれた。だから、今度は私が兎月を助ける……！

「さて、今から土守さんの家に特攻するんだけど……まずは足がないと話にならないよな」

そう言うと佐々木は携帯を取り出して誰かと通話しだした。ちょっと話して佐々木はすぐに携帯を閉じてニッコリと笑ってきた。……？

「おっ、来た来た」

佐々木と一緒に正門で待つこと十分、一台の車が勢いよく佐々木に向かって走ってきた。ものすごいスピードで激しい音を立てて、そして佐々木に激突する数十センチ前で停車する。車体に貼られた初心者マーク……。間近で見ていたけど今のって相当危なかった気がする。佐々木の顔から汗が尋常じゃなく流れている。

「が、ガチで危ねぇ……轢き殺すつもりかよ姉ちゃん!?」

「いやー、ごめん。車は急に止まれないものさ」

涙目で講義する佐々木、それに対して軽く手を挙げるだけで反省の

色なしの佐々木のお姉さん、菜々子さん。反省の色どころか、少し自慢げな顔をしてる……。

「恵が大丈夫なら佐々木はどうなっても構わないですよ菜々子さん」
「おいこら水川！」

あ……車の後部座席にいるのは……真美と桜だ。

「なんだこの俺のひどい扱いは……。あっ、この車は姉ちゃんのやつね。んで、姉ちゃんと水川と火祭には土守さんの追跡を頼んでいたんだ」
「むふふ、この菜々子様にかかれば追跡なんてお任せあれだよ！」

そっか、この車は菜々子さんの車なんだ。それにしても……もう土守有紗の家を見つけ出しているなんて……。皆、行動が早いな……。やっぱり真美達も兎月のことが心配だよね。私だけじゃない、皆も兎月のことを大切に思ってる。それだけ兎月は皆に好かれていて皆にとって大切な存在なんだよね……兎月、これで無視したら許さないんだから。

「恵ちゃんお久しぶり～。相変わらずかぁわぁいい～！」
「は、はい……」

菜々子さん……昨年まで生徒会長を務めていて佐々木のお姉さん。今は大学生でカラオケ店でバイトしている……私が知っているのはこのくらいしかない。すごく綺麗な人……初めて会った時は兎月に抱きついていて……かなり警戒したけど、この人は兎月のことは普通に後輩としか見てないって言っていた。だから大丈夫だと、思う……。でもこんな綺麗な人だから……ううん、誰にも負けない。

「事情は米太郎から聞いたよ。将也君のこと……私もすごく悲しいよ。でも悲しんでばかりじゃ駄目と思う！　だから一緒に将也君を助けに行こうっ」

「ほらほら恵も乗って。桜だって立ち直ったんだから」

「恵……私、まー君を連れ戻す。昨日まー君と会った時はすごいショックだった……。まー君、私達のこと無視して……あんなの私の知ってるまー君じゃない。だから……本当のまー君を取り戻すために、私は頑張るよ！」

菜々子さん、真美、桜……うん、そうだ。皆で兎月を助けるんだ。私だけじゃない、皆が兎月を助けようと動いてくれている。いつまでも落ち込んでいるだけじゃどうしようもない。確かに今でも兎月があいつの執事になったことが信じられなくて落ち込んでいるけど……でも、私の方から進みださないと始まらないんだ。兎月……もう無視なんかさせない。今度は私があなたに呼びかける番だから。必ず助けてみせるから。

「んで姉ちゃん、土守さんの家の場所は分かったの？」

「ばっちりだよ。それにバレないように細心の注意を払って追跡したよ。ドライブスルーも小声で注文したし」

「ちょっと待て。なぜドライブスルーに寄った？　その助手席にあるハンバーガーセットは何だ！　追跡なめてんのか！？」

「だって今ならポテト全サイズ同じ値段だから……」

「だってじゃねぇよ。ポテトなら家のじゃがいも食べたらいいだろ！」

佐々木……それもちょっと違うと思う。

「落ち着きなって佐々木。ちゃんと土守さんの家を見つけた後に寄っただけだから。ほら、腹が減っては戦はできぬって言うじゃん。

恵も食べなよ」
「う、うん」
「なんだこの、ほのぼのムードは……。今から敵陣に乗りこむっていうのにさ」

呆れたように溜め息をつく佐々木を置いてとりあえず車に乗りこむ。真美と桜……昨日はあんなに落ち込んでいたのに、今はもう元気になって明るさを取り戻してる。……ううん、たぶん空元気だと思う。でも、すごく強い決意を感じる。二人とも強いな……辛いのに立ち上がって、こうやって兎月のために行動している……私も遅れたけど、今から助けに行くからね……。

「いいから米太郎も乗りなさい。さて、将也君奪還といきましょう。皆、飛ばすよ！」
「ま、待って姉ちゃん。俺まだシートベルトが…ぬぅおおおおぉぉあああああぁぁっ！」

兎月……待っていて。

「ここが土守さんの家か……」

菜々子さんのものすごい速さの運転で目的地にはすぐに着いた。すごい運転……。目的地、あいつ……土守有紗の家。ここは……

「ただの豪邸じゃねーか……。これは春日さんの家といい勝負するレベルだぜ。こんな家あったんだな」

「この家って随分前からあったらしいよ。しばらく使われていなかったみたいだけど、最近になって住人が戻ってきたんだって」

うん……この家、知ってる。昔、あいつが住んでいた家だ。……あの頃は一緒に遊んでいて、この家にもよくパパと一緒に遊びに来たことがある。またここに来ることになるなんて……。

「ここが土守さんの家で間違いないんだけど……ここからどうするの？」

堅強で重量感ある門の前に立つ私達。その中で呟いた桜の疑問に答えるように佐々木が一歩前に出る。

「決まってんだろ、男なら正面突破だ」

「いやこの場に男はアンタしかいないから」

真美のツッコミを無視して佐々木は躊躇いもなくインターホンを押した。え……？

「この馬鹿太郎！　なんで普通にピンポンしてるのよ！」

「痛い！　グーで殴るなマミー」

「マミー言うな」

「さらにいてぇ！　つーか、ここは堂々と突撃すべきだろ。こっちがコソコソする必要があるのかよ」

確かにそうかもしれないけど。でも、土守有紗が大人しく出てくるとは限らない。佐々木はどう切り出すつもりなの？

『はい』

インターホンから聞こえる男性の声。おそらくあいつの執事の一人だ。

「すいませーん、土守有紗さんの友達なんすけど、そちらに仕えている兎月将也君についてお話があって来ましたー」

『……少々お待ちください』

そのままブツリと消えるインターホン。……。

「馬鹿インディカ米！　やっぱり警戒されたじゃない！」

「佐々木君の馬鹿っ」

「痛い痛い！　火祭のパンチはマジでヤバイから！」

……などと、真美と桜が佐々木を殴っていたら、

『どうぞお入りください』

その言葉と同時に重厚な門が音を立ててゆっくりと開き出した。そして奥に見える巨大な扉。あの扉が玄関先、この家の入口だ。昔と変わってない。

「あ、開いた……？」

「勝手にどーぞ、って感じだな。上等だぜ、余裕こいていられるのも今の内だけだ」

ポカンとする真美と、やる気満々の佐々木。小さく微笑む菜々子さんと口をきゅっと閉じる桜。この先に……あいつと兎月がいるんだ。鼓動が早くなり、体全身を打ちつけるようなひどい痛みとなって響き渡る。呼吸が辛くなって足先が震えてしまう……。でも、逃げない。弱気になっちゃ駄目だ。しっかりと兎月に思いを告げないと。そして兎月を助けてみせる……！

「……行こう」

気持ちを落ち着かせることなんて出来ないんだ。このまま抑えきれない感情を抱えて、入口へと続く長い道へと歩を進める。一歩一歩近づく扉……あの奥に兎月がいるんだ。……土守有紗、アンタなんかには負けない。

そして……玄関前へと到着。小さく息を吐いて、異様に冷たい扉に手をかけて、ゆっくりと……その奥へと進んでいく。

そこは皮肉にも幻想的な空間だった。扉を開けば、またも無限に広がる清澄な青き天井。太陽の日差しを全面に浴びるライトグリーンの芝生。この家は独特の構造をしていて、玄関を抜けると室内ではなくまた外へと出るようになっている。ここは中庭だ。花壇に咲く花々に、中央には大きな噴水が静かに青天の空へと舞い上がっている。……昔と同じ光景だった。ここでよくあいつと遊んだりした。あの頃はまだ私もあいつも仲良しで、パパもあいつの父親とよく会っていた。この家に招待されて一緒に食事したり……それは昔の話。もうここに来るなんて思ってもみなかった。でもそんなの気に

することじゃない。昔と変わらず奇妙な造りの家なんてどうでもいい。私がここに来た理由は一つなのだから。

「な、なんだここ……」

「中庭みたいだけど……っ！」

辺りを見回す佐々木と真美、桜に菜々子さん。けどすぐに皆の視線は一箇所に向けられる。中庭の奥の扉がゆっくりと音を立てて開き始めたのだ。不気味に聞こえる扉の音。そして……

「あら、皆さん。わざわざ遊びに来てくださって嬉しいですわ。突然の訪問で私もびっくりしてます」

あいつ、土守有紗が見下したように薄笑いを浮かべて現れた。私の方を見て、ねっとりと相変わらずの不快で虫酸の走る気持ち悪い笑みで微笑んで口元を大きく歪ませて……っ。そして……いた。姿を確認した途端、口が一気に渇いて、心臓が跳ね上がる。兎月……また会えた。土守有紗の後ろから扉から姿を見せた兎月。やっぱり……執事服を着ている。あいつの執事をしている……っ。

「土守有紗ぁ……将也を返してもらおうか」

佐々木が唸り声を上げて土守有紗を睨みつける。それに対してもあいつはいつものように冷静に微笑んでいた。まるでこっちを馬鹿にしているように……。

「ふふっ、あなた方もしつこいですわね。兎月は自分自身の意思で私の執事になったと言いましたよね？　この光景を見てもまだ分からないのですか？」

あいつの横に立つ兎月。っ……また、昨日と同じように無表情。感情の色が消えた瞳は何も捉えておらず、ただ暗く、その場に静止していた。兎月……あんなの、兎月じゃない。兎月……！

「はっ、何も分からないね。おい将也！　テメェいい加減に目を覚ましやがれ！　いつまでも馬鹿な事やってんじゃねぇよ！」

佐々木の怒りの大声。

「兎月、助けに来たよ。何か事情があるんなら私達に話してよ。私達、友達でしょ！」

「将也君っ！」

真美の声、菜々子さんの声。……皆がいくら呼びかけても兎月はぴくりともせず、何も反応を示さず、ただじっと立っているだけ……。そ、そんな……。

「まー君……っ。お願い、目を覚まして！　そんなの……そんなの、まー君じゃないよ。ねぇ、いつものように笑ってよ……私を救ってくれた笑顔をしてよ……まー君……」

桜の消え入りそうな声。でも私にはしっかりと届いた。なのに……兎月には届いてない……？　兎月……そんな顔しないで。何を考えているのか分からない……。お願い、返事をしてよ……。

「……」

「ま、まー君……」

「ふふっ、これで分かりましたよね？　兎月にあなた達の言葉なんて届かないってこと。春日さん、あなたの言葉も届きはしないのですよ」

歪んだ笑みを見せつけてくる土守有紗……っ、許せない。アンタのせいに決まってるんだ。兎月が自分の意思でこんなことするはずがない。アンタのせいで兎月は……っ。目尻が熱くなって色んな感情が入り混じる。土守有紗への怒り、目の前の光景に対する絶望、兎月への思い……ごっちゃ混ぜになって心が掻き乱れたように暴れて痛い。言葉が詰まって何も言えない……。

「うふふっ……。兎月は私の執事なのです。だから私の声には反応しますよ。ほら兎月、私の級友に挨拶しなさい」

土守有紗の命令、兎月はそれに反応して……

「佐々木様、水川様、火祭様、春日様、本日は有紗お嬢様にご会いに来てくださり、ありがとうございます。お嬢様の代わりにお礼申し上げます」

っ、そん、な……。兎月……どうしてそんなことをしているの……？　なんで、あいつなんかの命令を聞いてるの……？　ねぇ、兎月……。

「ふふっ、どうです？　私の命令はちゃんと聞くでしょ？」

どうして……どうしてなの？　こんなの……こんなのあんまりだよ……。佐々木も真美も菜々子さんも桜も……皆こんなに呼びかけているのに、なんで反応してくれないの？　ねぇ、兎月……兎月い……！

「兎月……」

「……」

「兎月……ぐすっ、私を見て……」
「……っ！」

え……兎月……？　今……一瞬、表情が崩れた……？　今のは……

「と、兎月？」
「……」

でも、次に見た時は兎月の顔は先ほどと変わらず無表情だった。で、でも……さっき、兎月は間違いなく私の声に反応してくれた……？

「……もう言葉で何言っても分からないようだな」

佐々木が小さく唸って、ものすごい形相で兎月を睨んでいた。目を見開き、拳が悲鳴を上げるくらい強く握りしめている。そして兎月めがけて走り出した。

「ぶん殴って目ぇ覚まさせてやるよ……おらあああぁぁ！」

一気に中庭を駆け抜けて兎月へと接近した佐々木。大きく振り上がった拳が兎月に狙いを定めたその瞬間、

「ぐっ！？」

佐々木の振り上がった右腕は途中で勢いを失い、空中で止まった。そして佐々木の体自身ごと地面へと崩れ落ちていく。あれは……あいつの執事？　拘束するように一人の初老の男性が佐々木を押さえ込んでいた。ものすごい強さの力なのか、押さえ込まれた佐々木の頭が地面へと沈んでいっている。さ、佐々木……！？

「くそっ、この……がっ」
「ご苦労ですわ、後藤」
もがき苦しむ佐々木を土守有紗が冷やかに見下しながら佐々木を押さえ込む執事に向かって言う。
「いえ、有紗お嬢様に危害が及びそうでしたので。ご友人には申し訳ありませんが、このような対処を取らせていただきます」
佐々木の腕を締めつけ、頭を押さえ込んだ後藤という執事はさらに強い力で腕と頭を握る。
「ぐ……がぁ」
「米太郎っ！」
菜々子さんが両手で口を押さえ、真っ青の顔で佐々木の名前を叫ぶ。震えた両手から見える菜々子さんの青ざめた表情。佐々木は声にならない悲鳴を上げて次第に暴れる力も弱くなっていた。
「た、助けに行かないと！」
「う、うん！」
ショックで動けない菜々子さんの横から真美と桜が駆け出す。わ、私も行かないと……！
「兎月、あの二人を止めなさい」
「かしこまりました」
土守有紗の一声。素早く応答を返した兎月はすぐに走りだし、佐々木を押さえる後藤の前に出て桜と真美の行く手を阻もうとしてきた。

押さえつけられて苦しんでいる佐々木のことを見向きもせず……。

「ま、まー君!?　そこをどいて。佐々木君が危ないんだよ!?」

「申し訳ありません火祭様、水川様。しかし佐々木様も命の心配はございません。こちらも手加減しておりますゆえ」

桜が必死に叫んでも顔色一つ変えずに兎月は二人の進路を阻む。と、兎月……そんなの、あんまりだよ……っ。

「……って言え」

……真美？

「マミーって言いなさいよ。今までみたいに……いつもマミーって言ってくれたでしょ。水川様だなんて言わないでぇ……」

真美は……泣いていた。ぐしゃぐしゃの顔で兎月を睨みつけて小さく甲高い声で叫んでいた。真美……。いつもニヤニヤと笑って可愛らしい真美の顔は涙で濡れてぐしゃぐしゃだった。泣き顔で兎月の執事服を掴み、必死に揺らし続ける真美。必死に……涙を流して……

「兎月ぃ……」

「……っ」

！　また……また兎月の無表情が崩れた。さっき私が呼びかけた時と同じように、小さな変化だが確かに兎月の顔に驚きが見えた……！

「っ、佐々木君！」

次の瞬間、桜がものすごい速さで兎月の横を抜けた。そして佐々木

を押さえる後藤を思いきり蹴飛ばす。蹴りの威力による轟音と衝撃波。桜の一撃は凄まじかった。一瞬の不意をついた一発の蹴りのみで後藤は吹っ飛び何度も地面を転がり、のたうち回り、ようやく静止。そのまま動かなくなった。

「う……げほっ」

「米太郎っ、良かった……！」

弱々しく地面から這い出た佐々木の元に菜々子さんが急いで駆け寄る。佐々木は無事みたい……あの執事の後藤は全く動かなくなったけど。

「え……後藤が……。くっ、まだまだこっちには……」

ダウンした後藤を放置して土守有紗は手を挙げた。その合図とともに何人ものの執事服を着た男性が扉から溢れ出てきた。その数およそ十人……！

「あの人を捉えなさい！」

桜を指差す土守有紗の命令が飛ぶと同時に執事の集団が動き出した。一斉に桜めがけて突進してくる。さ、桜が危ない……！

「菜々子さん、佐々木君を遠くの方へ運んでください」

「う、うん」

意識が朦朧としている佐々木と、その佐々木を支える菜々子さん。二人を誘導する桜の後ろにはもうすでに執事の一人が大きな両腕を振り上げて……っ！？

「ぐぁ！？」

振り下ろす前に桜の回し蹴りが執事の頭部を強打した。速すぎて蹴りがヒットしたところしか見えなかった。巨体がグラリと音を立てて崩れる。一撃で沈んだ執事、その光景を目の当たりにした他の執事達のわずかな動揺を桜は見逃さなかった。

「はっ！」

素早いステップで懐に潜りこんで拳を打ち抜く。声にならない悲鳴を上げて倒れていく執事、そしてさらにもう一人、もう一人と。十人いたはずの執事は一分も経たないうちに半数を切っていた。執事達に何か行動をさせる間もなく桜は次々に拳と蹴りを放つ。

「そ、そんな……なんで！？」

ヒステリックな金切り声。その声の主、土守有紗はひどく狼狽した顔で倒れていく執事達を見下ろしていた。初めて、あいつの顔が壊れた。猫かぶった薄笑いの仮面が剥がれて、焦燥で歪んだ土守有紗の表情。まさか桜がこんなに強いと思わなかったのだろう。慌てて何やら携帯電話を取り出した。しかし桜の蹴りがすぐに土守有紗の手にある携帯を弾き飛ばした。壁に叩きつけられた携帯。おそらく、あれで増援を呼ぼうとしたのか……。

「うっ……そんな……！」

携帯を壊されて土守有紗の顔はさらに歪みだした。初めに見せた余裕の様子など一切なく、泣き出しそうな表情で桜を戦々恐々と見ている。

「悪いけど、このまま倒させてもらうね。そして、まー君は返してもらうよ！」

土守有紗に目もくれず残りの執事達を一睨みする桜。そのまま態勢で拳を構えたその時、

「待つんだ火祭！」

「え……」

……！？　今の声は……あっ……！　そこに立っていたのは……桜の前に立ちはだかるように両手を広げている……兎月。切実な表情で桜をじっと見つめている。と、兎月……無表情が完全に崩れている……。

「ま、まー君……？」

「火祭……もうやめるんだ。俺なんかのために人を殴らないで。火祭はもうそんなことしなくていいんだから」

と、兎月……この、感じは……兎月、だ……。い、いつもの……いつもの兎月。良かった……兎月が元に戻ってくれた。

「まー君、良かった……正気に戻ってくれたんだねっ」

「火祭……」

兎月？　ど、どうしてそんな顔してるの……？　なんでそんな悲しい顔をしてるの……？

「火祭、もう俺に構うな。俺のことなんか忘れてくれ」

「……まー君？　な、何を言ってるの？」

「俺は自分の意思でここにいる。自分から有紗お嬢様の執事になる

ことにしたんだ。だから……もう、その拳を俺なんかのために振るわないで。それじゃまた昔と変わらないだろ。今の火祭はそんなことするべきじゃないんだよ」

と、兎月……な、何を言ってるの。目が覚めたんでしょ？　だって、いつもの兎月だもん。ね、ねぇ……今のだって嘘でしょ？　そ、そんなはっきりと言うなんて、おかしいよ。兎月の口から執事になっただなんて言葉が出てくるなんておかしいよ！

「嘘、だよね……？　だ、だってまー君これからもずっと一緒……」

「俺のことは忘れてくれ。俺は、もう……」

「……う、うっ……そんなの、ぐすっ、やめてよぉ……お別れみたいなこと言わないで、まー君……」

嘘だ。こんなの嘘だ。兎月が……兎月がこんなこと……

「水川、さっきはごめん。でも俺は有紗お嬢様の執事だから……。米太郎にも謝っといてくれないか」

「と、兎月……何を言ってるの……？」

悲しげな表情。あなたのそんな表情見たことない。いつも笑ってくれていたあなたのそんな辛い表情を見たこと……ない。そして、兎月と目が合った。私を見つめる兎月……悲痛に満ちたその目は一度閉じ、次に開いた時、決意が宿っていた。その目のまま兎月は土守有紗の方を振り向く。

「有紗お嬢様、申し訳ありませんが、春日と話をさせてもらえますか？」

え……？

「なっ……何ふざけたこと言っているの!?　お前は私の執事なのよ！　い、今更そいつの所に戻るなんて……」
「そのようなつもりはございません。ただ一度、春日と二人だけで話をさせてください。お願いします……」
両手を地面につけ、兎月は土下座する。頭を地面につけて深々と。
と、兎月……なんでそこまでするの……!?

「そ、そいつと二人きりで？　……そんなの私が許さないわ」
「お願いします。これ一度きりだけです。あなたに二度と逆らいません。一生の忠誠を誓います。ですから春日と……」
「……ふん、いいですわ。他の執事達は片付けましょう。ただし私はここに」
「春日と二人きりで話をさせてください」
「ぐ……分かりました！　この場で話しなさい。私は部屋に戻ってるから。……それでいいのでしょう？」
「ありがとうございます」

え……と、兎月？　な、何を話すつもりなの？　私と二人きりで……？

「火祭、水川。悪いけど春日と二人きりにしてくれない？」
「う、うん……でも」
「兎月……何があったの……？」
「……頼む」

桜と真美にも頭を下げる兎月。わけが分からず顔を見合わせる桜と真美のの肩に菜々子さんが手を置く。

「将也君がそう言うならそれに従いましょう。私は将也君を信じてるから」

「菜々子さん……。すみません、米太郎を頼みます」

「こいつ気絶してるだけだから。すぐに意識戻すって。それまで私達は外で待ってるから」

そう言って菜々子さんは佐々木を抱えて入口へと向かっていく。それに続く桜と真美。何度も心配そうに兎月の方を振り返る。兎月は……ただ優しく微笑んでいた。でも、その顔は……すごく寂しげに見えて……。

「ふん、それではどうぞご自由に」

真美達も中庭を出て、桜にやられた執事達も残りの執事に運ばれて、土守有紗率いる執事達も出ていった。忌々しげにこちらを見下ろす土守有紗……力任せに扉を閉めて静寂が訪れた。そして、中庭に残ったのは私と兎月だけ。

第１３２話　兎月消失

太陽の日差しを浴びてキラキラと輝く噴水。耳を撫でるように伝わる水の流れる小さな音はこの場に人がいないことを示しており、微かに吹くそよ風は時間の経過を曖昧にしてしまい、私を見つめるその瞳は深くて寂しげで。私と兎月、二人しかいないこの空間で、永久と刹那が濁り混ざった時の流れで、黙す静止空間の中で私達は見つめ合うだけで動けず茫然と立ち尽くすのみ。兎月……やっと会えた本当のあなた。無表情じゃなくて、恐ろしいほどまでに冷たく色の消えた声じゃなくて、いつもの兎月の表情と声。でも……私は兎月のそんな顔を見たことがないよ。確かに声も顔もさっきとは違って感情がこもっているけど。だけど……そんな悲しい顔……そんな辛そうな顔は見たことない。明るくて太陽のように心温もる笑顔はどこに消えたの？

「……」

「……」

何も言わず、私を見つめるだけの兎月。……さっきまでは土守有紗の執事として感情を押し殺していた兎月。でも私や真美や皆の言葉が届いて、佐々木と桜の頑張る姿を見て、兎月は感情を出して私達と向き合ってくれた。やっぱり、ずっと無理して執事をやっていたんでしょ？　良かった……兎月は変わってしまったんじゃなくて、変わったように演じていただけで。そして土守有紗に向かって堂々と口をきいてくれた。命令されていたのを跳ね返して私達のことを見てくれて、そして……私と二人きりで話したいって……。あいつなんかに頭を下げて、桜や真美にも頼んで、そこまでして……私と二人だけで話す時間を作った兎月。だから今この中庭にいるのは私と兎月だけ。

「……」
「……」

なのに、兎月は……何も言ってくれない。ただずっと私の方を見るだけで、何も発せず、じっと見つめるだけで……。兎月……私と二人で話したいことって何……？　私だって兎月に言いたいことがある。いっぱい、いっぱいあるんだから。どうしてあいつの執事になったの？　どんな事情があってこんなことになったの？　私に何も言わないだなんて兎月のくせに生意気だ。それに、私が呼びかけても無視して……そんなの許せないんだから。メールも電話もたくさんしたのに一度も返さないで、少しは反応しなさいよ。まだいっぱい他にも言いたいことあるし文句だって言い足りてない。なのに……なのに、今の兎月を見ていると、どれ一つとして言葉として口にすることができない。胸中を渦巻いて渦巻いて渦巻くだけで、何一つ兎月に向けてぶつけることができない……。兎月の、その悲しげな顔を見つめると……どうしても言えない。こんなに……こんなにもたくさんあなたに言いたいことがあるのに。文句だってたくさんある。私を無視したことに対するローキックだって何発もある。いつもみたいに「痛い！」って言わせてやりたい。あなたにぶつけたい思いがこんなにも溢れているのに……全て胸の中で取り残されるだけで、あなたを見つめることしかできない。だって……だって、やっと兎月と会えたのだから。ずっと会えなかった……こうやって二人向き合うなんてなかったから。だから、それだけで落ち着けなくて何も言えないで……

「……ねぇ兎月」

こうやって名前を呼ぶことで精一杯。だから兎月……あなたから話しかけて。そんなに見ないで……何か言ってよ兎月。そんな……悲

痛な顔をしないで……そんな辛そうな目で私と向き合わないでよ。なんでそんな顔をするの……？

「……」

「……兎月」

「春日……」

やっと喋ってくれた……。小さく口を開いて、ゆっくりと息を吐いて兎月は私の名前を呼んでくれた。思わず体が硬直する。こうやって兎月と二人で話すのが嬉しいのかどうか分からなくて、身を強張らせて固まってしまう。私は兎月と会いたかったのに……何も言えず、こんなにも動けないでいるの……？　あの悲しげな兎月の目を見ると動けず何も言えず、不安になってしまうの？

「春日……もう俺に構うな」

全てが止まったように感じた。噴水から零れる柔らかい流水も、青天から舞い降りる微風も、曖昧に流れていた時間さえも止まり、目の前に広がる光景も停止して、兎月の姿も止まった。ただ、ただ体に衝撃が走って、弾けた。と、兎月……今、なんて……？

「な、何言って……」

言葉が出ない……っ、言われた言葉が何を表すのか考えたくない。

「もう俺のことは忘れてくれ。春日とはもう会えない……俺はここ

で土守有紗の執事をしなくちゃならないんだ。だから、春日とはこれでお別れだ。もう二度と会うことはない」

さらなる衝撃が体を貫く。と、兎月？　な、何を言ってるの……？

あ、会えない……な、なんで……

「……ふ、ふざけないで」

そんなの……そんなの嘘だ。お別れだなんて……嘘、でしょ……！？

「春日……今までありがとう。俺は春日と一緒にいられない。春日だけじゃない、皆とも会えない。火祭達にも伝えてくれ……もう会えないって」

「何……言ってるの」

……嫌だ。

「もう会えない……けど、最後に……春日とは会いたかった。春日にはちゃんと別れの言葉を言いたかった。だから、こうして最後に春日と会えて本当に……本当に良かったよ」

「……」

「春日……？」

「嫌」

嫌。嫌嫌嫌嫌っ！　そんな……っ、そんなの嫌だ。なんでそんなこと言うの！　兎月とお別れだなんて……もう会えないだなんて……そんなこと言わないで！

「兎月……」

「……」

ずっと一緒。私と兎月はずっと一緒にいられると思っていた。兎月は私の傍にいてくれて、ずっと傍にいて私を守ってくれて。いつまでも傍で笑っていてくれる。そうだと信じていた。ううん、信じている！　なのに……そんなの……もう会えないなんて……信じられない。信じたくないよ……っ。

「兎月……ぐすっ」

もう会えない。そう考えると涙が一気に溢れ出してきた。止まらない……。涙が……兎月との思い出がよみがえってきて止まらない。嫌……っ、やめて……止まってよぉ……これじゃ、本当にお別れみたいになっちゃう……。嫌だ、涙も止まって。瞳の先にいる兎月が潤んでよく見えないよ……兎月、どこにも行かないで……！

「春日、これでさよならだ。春日と出会ってからこの数か月……すごい楽しかった。今まで本当にありがとう。それと……ごめん」

っ！？　と、兎月……行かないで！　微かに映る兎月の後ろ姿。私から離れていく。ま、待って……待ってよ！　行かないで……こんなお別れ、私は絶対嫌っ！

「兎月……行くな」

「……」

兎月は私の下僕なんだから。だから私の命令には絶対に従うんだからっ。今までだって、出会った時からずっと兎月は私の言うことには大人しく従うヘタレな体質なんだから！　だから……兎月、行くな。

「兎月……」
「……」
「行くな！」
「……ごめん」

と、兎月……駄目っ！　嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！　どうして私の言うことを聞かないの？　だって兎月、今までずっと命令には従ったじゃない。私の言うこと全て聞いてくれた。私のこと……見ていてくれた。なのに……っ。

「兎月ぃ……」

離れていく足音。消えていく影。あなたの気配。兎月……嫌だよぉ。私達はずっと一緒じゃなかったの……。私のこと守ってくれるって言ってくれたのに……兎月……っ！

「行かないでぇ……」

行かないで。ずっと傍にいてよ。ねぇ、ずっと一緒なんだから……。こんなお別れ嫌だよ……！

「ぐすっ……い、行かないでぇ……兎月……お願い……っ」
「俺のことはもう忘れてくれ」

っ！　と、兎月ぃ……！

「春日……さよなら」

そして、そのまま私を置いて兎月は扉の奥へと消えていってしまった……。

第133話　全ては

「あはははははっはははっ！」
「恵っ！？」

どのくらい時間が経ったのか分からない。その場で座りこむだけで何も出来ず、喪失感が漂うだけの生きた心地がしない虚無の世界で私は浮いていた。兎月が中庭を出ていき、どのくらいの時間が経過したのか分からない。ただ、気づけば中庭には土守有紗の狂気染みた笑い声と私を揺さぶる真美の声が響いていた。土守有紗がこれまでにない歪んだ笑みで高らかに笑っており、狂った両目がぐりぐりと抉り出されるように動いて私を見下ろしている。

「一体何が……どうして将也がいないんだ！？」
「ま、まー君は……？」

耳に纏わりつく土守有紗の下卑た笑い声の合間を縫うように佐々木と桜の声が届く。座りこんだ私の周りには真美、桜、佐々木、菜々子さんが立っていて皆それぞれ不安げな表情で私と土守有紗を交互に見つめていた。そして……いつまでも笑い続ける土守有紗……。

「あっはははははは！　春日恵……なんて情けない姿、見ていて笑いが止まらないわ！」
「この……ゲラゲラ笑ってんじゃねぇ！　将也は……将也はどうした！？」
「はっ、何回同じ言わないで。あいつは私の執事だって言ってんでしょ」
「テメェ……ついに本性表しやがったな」

土守有紗の仮面は完全に剥がれていた。学校で見せる猫かぶった声も振る舞いも殴り捨てて上品さの欠片もなく、ただただ大声で醜く笑い続ける。勝ち誇った顔で私を見下ろし、佐々木に冷たい言葉を吐き散らす。あいつ……本性を出した。あの目は……見たことある。中学の時……あいつと最後に会った時……あの目であいつは私に攻撃してきて……

「これで分かったでしょ？　兎月将也は私の執事だってことが。アンタらのことなんて忘れてしまったのよ」

優越感に満ちた顔で土守有紗は私達を見下ろす。っ、兎月……なんでっ、なんでこいつなんかの執事になったの。わ、私のこと……私のこと見捨てて……。お別れだなんて……そんなの……っ、

「……恵ちゃん、将也君は何を話したの？」

菜々子さんが私の肩に両手を置いて優しく問いかけてきた。と、兎月は……

「兎月……もう構わないでって……ぐすっ、これで……お別れだって……っ」

「ま、まー君がそんなこと……！？」

涙が止まらない。いつから私は泣いていたのだろうか……。兎月が去る前からずっとなのか……目から零れる涙は溢れるばかりで全然止まらなくて……兎月への想いも加速して止まらなくて……涙がどんどん出てきちゃう……っ。

「っ、兎月……」

あの表情……二人きりの時に見せたあの悲痛な表情は……兎月だった。土守有紗の執事を演じていたのは違い、兎月の本当の……本気の気持ち。顔を見たら分かる……兎月は本気で言っていたんだ……本当にお別れを言ってきたんだ。もう会えないって……もう構うなって……そんなことを……そんな、どうしようもなく辛いことを伝えてきた……。嫌だ……もう会えないだなんて。やっと本当の兎月に再会できたと思ったのに、本当の兎月はお別れを告げるなんて……ひどいよ。それに……私の命令を聞いてくれなかった。今までずっとずっと私の言うことに対してきちんと反応して従ってくれたと兎月。なのに、さっきは……ちゃんと聞いてくれて、それでなお無視した。どんなことも二回目には聞いてくれたのに……さっきは何度言っても聞いてくれなかった。そして、さよならって……っ、そんなこと……。あの時の兎月の表情……それは本当にお別れだってことを意味していて……だからこんなにも涙が止まらなくて溢れて……嗚咽が止まらなくて悲しくて……ただ喪失感だけが漂って支配している。

「ま、将也がそんなこと本気で言うわけ……な、何かの間違いだろ!?」

ううん、間違いじゃない。こんなに悲しいんだから……兎月のあの表情は本気だったから。

「兎月……お別れなの？　こ、こんなの……あんまりだよ……」

「まー君……ぐすっ」

涙を流して崩れ落ちる真美と桜。佐々木と菜々子さんも悲痛な面持ちで言葉を出せないでいる。だって、だって兎月はもう……。どうしてこんなことに……

「あはははっ、なんて無様な姿なの？　別にいいじゃない、たった一人下僕ぐらい」

沈黙して悲しみに堕ちる私達を嘲笑うようにまだ笑い続ける……土守有紗。全て……全てこいつのせいで……っ！

「兎月は下僕なんかじゃない……兎月は私にとって……」

兎月は私にとって……大切な……

「大切な存在なんでしょ？　そのくらい知ってるわ。それに、アンタと兎月将也の関係もね」

え……なんで……？　思わず顔を上げて土守有紗を見上げる。なんでこいつは……私と兎月のことを……

「全ては復讐よ。アンタに対するね……」

「な、何を言って……？」

冷たく、優越感に満ちた、憎しみで捻じ曲がった表情で土守有紗は私を睨んできた。そしてまた、ねっとりと、蹂躙しているように、まるで私の驚く様を楽しむように恍惚と醜悪が入り混じった笑みをぶつけてきて、

「兎月将也にとってアンタは大切な存在。アンタのこと身を挺して守るなんてこと、こっちは調査済みだわ。それで私が兎月将也に対して何て言ったと思う？」

こ、こいつは何を言っているの……？

「『私の命令に従わないと春日恵の生活を壊す』って言ったのよ」

えっ……！？

「なっ……やっぱりテメェが将也に脅しかけていたんじゃねぇか！」

「でも将也君がそんな言葉に簡単に言い包められるなんてこと……」

佐々木と菜々子さんが声を荒げる。真美と桜の息を呑む悲鳴を聞こえる。でも……それ以上に、頭は別のことで混乱していて……。つ、土守有紗は何を言うつもり……！？

「あははっ、そんな必死に突っ掛ってこないでよ。簡単なことでしょ？　私のお父様の会社である土守グループの巨大さと権力を見せつけるだけ。あとは土守グループと春日恵の父親である春日進一の会社が敵対していること、そしてお父様がその気になれば春日進一の会社なんて潰せるって脅せば兎月将也は大人しく従ってくれたわ。ホント優秀な下僕ですわね」

っ、そんなことを……！　兎月に脅しをかけて無理矢理服従させた……っ！　だから兎月はこいつの執事なんかをやらされて……でも、

「でも、土守グループにそんな力ない。……パパの会社と対立しているのは本当だけど、土守グループとパパの会社は均衡してるから」

土守グループは巨大企業だけど、パパの会社と同じ程度。パパがそう言っていた。だから土守グループにパパの会社が潰されるなんてことありえない。

「嘘ってことか！？　それで将也を騙して……この野郎ぉ！」

「そう嘘。でもそれで兎月将也は落とせた。ざまぁみやがれ、って感じですねっ」
「ふざけんな！　今のこと話せば将也は正気になる。将也と話せたら」
「そんなことさせるわけでしょ。もうアンタらと兎月将也は絶対に会わせない。兎月将也はこの家から一生出さず奴隷のように働かせるわ」

そ、そんなこと……許せない……。土守有紗……

「……許せない」
「今さら何を言ってるの？　さっき言った通り、これはアンタに対する復讐なのよ。いや……アンタら親子に対する復讐」

私を睨む土守有紗。その目には敵意がこもっていて……でも、それは私だって同じだ。こいつのせいで兎月は……っ

「私だってここまでするつもりはなかったわ。ちょっとアンタを懲らしめたいだけだったのに。例えば……」

土守有紗の口元がさらに歪んだ。

「アンタを誘拐したりしてさ」

え……そ、それって……！？

「アンタを誘拐して怖がらせて春日進一を脅してやろうとしたのにさ、なぜか失敗しちゃったし。後で聞いてみれば、春日恵の下僕と言い張る男子高校生が邪魔したらしいじゃない」

ま、待って……その、誘拐って……四月の、あの誘拐のこと……！？

「あら、何その驚いた顔は？　そうよ、誘拐を企てたのは私。アンタを懲らしめるつもりだったのにさ」

誘拐犯の依頼人がこいつだったなんて……！　あの時は兎月が助けに来てくれて……まさか、あの時にすでに土守有紗は私に復讐しようと考えていたの……？

「だから次の手を考えたわ。そう……金田英明を使ってアンタと婚約させようってね」

「な……！？」

あの金田との結婚話も……あれもこいつが仕組んだことだったの！？

「アンタも知ってるでしょ？　土守グループの下に直属する企業の一つに金田の名があることを。だから金田家の人間を使うことにしたわ。アンタと昔から友好のある金田英明を脅してアンタと無理矢理結婚させようとした。そうすれば金田英明を通じてアンタら春日家を内側から潰せると思ってね」

確かに金田の父親の会社は土守グループの傘下だ。で、でもこいつが金田を操っていたなんて……。金田はこいつに脅されて私と結婚しようと。会社を潰すと脅されて……だから金田はあんなにも必死になって私との結婚の話をどうにかしようと……！？

「でも、また邪魔が入った。春日恵の傍にいる男子高校生が婚約の話をぶち壊した。そう、それが兎月将也。……二回も邪魔されたものだから気になって色々と調べてみたわ。誘拐の時に雇った奴を使って兎月将也について調べた。そしたら面白いことが分かった。兎月将也……その存在がアンタにとってどれほど大きなものでどれほど大切な存在なのかを。だから次の手は兎月将也を使うことにした。彼を脅して私の執事にする。兎月将也を失って落ち込むアンタに絶望を味わらしてやろうってね。く、くくくっ……あっははははははっははははは！　予想通りアンタは落ち込んで今じゃ泣いてるじゃない。何その涙でぐちゃぐちゃの汚い顔は？　あはっ、愉快過ぎてこっちも涙が出てきちゃう」

そんな……そんなことって。誘拐事件、金田との結婚話……あの二つが土守有紗が仕組んだことだったなんて……。そして今度は……兎月を使って……私の、大切な人を騙して……っ！

「きゃはははっはははっ、もう最高よ！　私の目の前で落ち込むアンタを見下ろせて。さっき兎月将也が頭を下げて反抗してきた時は焦ったけど何も問題なかったわ。あいつは約束通り私の執事になりきってる。こうやってアンタの惨めな姿を見れて清々しいわ、あはっ」

「……なんで」

なんで……なんでそこまでしてこいつはこんなことを……！？

「なんでこんなことまでするの……」
「……だから言ってるでしょ」

ピタリと下品な笑いを止めて土守有紗が私を睨む。冷淡な笑みを浮かべ、敵意と憎悪が入り混じる目で私を睨んで……

「全ては復讐よ。私のお父様を馬鹿にしたアンタら親子に対するね。それ以外の何でもない。ただそれだけよ」

第１３４話　真相の翌日

土守有紗と出会ったのは五歳の時だった。パパに連れられ遊びに行ったお家の二階のベランダから顔を覗かせる小さな女の子。ニッコリ笑って私に手を振ってきた。二階へと上がると女の子はまた満面の笑みを浮かべて手招きしていた。上品な洋服に身を包み、まるで人形のように綺麗に整った容姿。見た目はまさにお嬢様、だけどニッコリと笑った無邪気な笑顔でとても活発的で、私の手を引いて家の中を案内してくれた。その子の嬉しげな笑顔を見ていると私も楽しい気分になって一緒に笑って家の中を駆け巡ったのを覚えている。それが土守有紗との出会い。土守有紗は父親の好きで、べったりとくっついていた。大きくなったらお父さんのお嫁さんになるとか言って……すると土守有紗の父親も笑って、それを見た土守有紗も嬉しそうに笑って。それを見たパパが恵も言ってくれと私に必死に頼んできたりとか。そんな感じで私達は非常に友好な関係を築いていった。パパと土守有紗の父親は昔からの古い付き合いで、ずっと仲が良かったみたい。よくパパに連れられて一緒に土守有紗の家に遊びに行ったし、逆にあっちの方から私の家に訪問することもあった。パパと土守有紗の父親が仲が良いのに似たかのように私と土守有紗も仲良しで二人でずっと遊んでいた。途中からは金田英明も加わって三人で遊ぶようになった。小学校に入っても私達は一緒で、いつもどこでも一緒。土守有紗は無邪気に笑って、金田は私達に振り回されて、私も土守有紗といるのが楽しくて……。私と土守有紗は親友だった。パパと土守有紗の父親がそうであったように。そしてこれからも続いていくと思ったし、そうであることを疑わなかった。

だけど、

突然、何の拍子もなく私達の関係は終わりを迎える。中学二年生の

夏、土守有紗の態度が一変した。夏休みの途中から連絡が途切れて、心配になって二学期の始業式に土守有紗に話しかけた。すると……土守有紗、あいつは私を睨むだけで何も言わず無視してきたのだ。……敵意をむき出しにした目で私を睨んできて……。親友だと信じていたのに。ずっとそうであると信じて……なのに、突然……唐突に裏切られた形で私達の関係は壊れてしまった。ずっと一緒だった親友にわけも分からないうちに嫌われ恨まれて……納得いかなかった。だってあまりに突然だったから。何か理由があるはず……だから私は何度も土守有紗に話しかけた。だけど土守有紗は無視して睨んでくるだけ。そして、最後に私に向けて一言……「絶対に許さない」とだけ言って私の前から消えた。それが私の聞いた土守有紗の最後の言葉。それっきり土守有紗とも土守家とも何も関係はなく、パパが私を連れて土守有紗の家に行くこともその逆もなくなった。そして今……あの中学の別れから三年経って……土守有紗は再び私の前に現れた……。

「……本当に申し訳ない」

兎月と会えて、兎月と話すことができて、そして兎月に別れを告げられた。全ては土守有紗が仕組んだこと。あいつが私に復讐するためだけに兎月を陥れたことを暴露した翌日。結局、昨日はあのまま土守有紗に追い出されて私達は何も出来なかった。佐々木も真美も桜も菜々子さんも声を失って茫然として立ち尽くすばかり。兎月……もう一度会えたら、土守有紗の言ったことが嘘だってことを伝えられるのに……。兎月は騙されているってことを……私達、さよならしなくていいってことを……っ。ずっと、これからも一緒にい

られるんだよ……。土守有紗みたいに……消えないで。私の傍にいてよ……。

「あ、あの恵さん……？」

「……」

……また泣きそうになっていた。昨日も帰って家でたくさん涙を流して……。そんな醜態をこいつに見せたくない。こいつ……金田英明なんかに。今、私は三年生の教室に来ている。こいつ……金田に会うために。こいつなんかに会いに来たくなかったけど……聞いておかないといけないことがある。昨日、土守有紗が暴露した真実の一つ……私とこいつとの結婚話が土守有紗の仕組んだってこと。金田と結婚させて私を内側から支配するって言ってたけど……まさか結婚の話が土守有紗の仕組んだことだったなんて……。そのことを金田に問い詰めると金田はすぐに頭を下げてきた。……あっさりしていてムカつく。なんで黙っていたの？

「今、恵さんが言った通りだよ……。僕と恵さんの結婚の話は有紗さんに命令されて行ったものだ。僕の父親の会社を潰すって有紗さんが脅してきて無理矢理……本当に申し訳ない。でも、そうしないと父の会社が大変なことになってしまうから。だから仕方なく……恵さんも知っているよね？　僕の父の企業は土守グループの傘下にあるってこと」

そんなのどうでもいいけど知ってる。それに、だから金田を嫌っているようなものだ。こいつの父親の会社は土守グループの一つ。つまり金田の会社の親会社が土守の企業ってわけになる。だから、金田は土守有紗の言うことに逆らえないみたい……けど、そんなのどうでもいい。佐々木の野菜話ぐらいどうでもいい。とりあえず金田は土守有紗に命令されて私と結婚しようとした。失敗したら会社を

潰されるかもしれないから。……だからあんなに必死だったんだ。最終的には兎月によって滅茶苦茶にされてしまったけど。

「結婚の話がなくなった時は血の気が引く思いだったよ……。でも進一さんが事情を察してくれたみたいで、もし土守グループが何かしてきても止めると言ってくれたんだよ。本当に進一さんには感謝している」

「うるさい」

「う、うるさいって……ご、ごめん」

結婚の時、結局は兎月に邪魔されたのもあって結婚の話は白紙になり、金田は失敗したってことになる。そうなると土守有紗が黙っていない。でも……パパがなんとかしたのかな？　確かにパパと土守有紗の父親は友達だったし、パパが説得してくれた……？　それとも、会社を潰すと言ったのも土守有紗の単なる脅しってだけで実際には何もしてなかったとか……

「有紗さんからこのことについては一切口外するなって口封じされていたんだ。だから今まで言えなくて……そ、そしたら兎月君が有紗さんに拘束されてしまったなんて……。実は僕が失敗した時、そのことを有紗さんに報告したら有紗さんは兎月君について詳しく調べてみるって言っていて……それで僕知っている兎月君の情報も全部言わされて……」

……ムカつく。アンタが事情を全て話していれば兎月は騙されずにこんなことにならなかったんじゃないの？　土守有紗に脅されたからって兎月の情報を報告するなんて最低だ。金田のせいで兎月は土守有紗に捕まったようなもの。こいつが馬鹿なせいで私と兎月は……うーん、金田だって被害者なんだ。土守有紗によって命令されて……そう、全ての原因は……土守有紗。あいつが元凶だ。そし

て……因縁のある私も……。私と土守有紗のせいで関係のない兎月を巻き込んでしまって……皆にも迷惑かけてしまって……。

昨日の夜、パパに土守有紗のことを話してみた。私が、話があるって言ったらパパは嬉しそうにニヤニヤしたけど土守って名前を聞いた途端、険しい顔になって不機嫌そうに鼻を鳴らしていた。やっぱり、まだ関係は悪いままなんだ……。

「……あいつは、すくえない奴だ」
「救えない奴……？」
「ああ、すくえない野郎なんだよ」

そう言ってパパは黙ってしまった。救えない奴ってどういう意味なのかな……。パパと土守有紗の父親は友達、だった。だけど三年前から何かあったのか全然会わなくなって話題になることもなくなった。そのまま音信不通……パパに土守有紗の父親について尋ねてみると、いつも顔をしかめて一言だけ呟く。救えない奴だ……って。中学二年生の時、土守家との関係が崩れた時もパパにその訳を聞いたが、その一言しか言わなくて、そして昨日も……ただ、救えない奴って言うだけ。土守って名前を聞くとパパは不快そうに黙ってしまう。パパと土守有紗の父親の関係が悪くなったのをきっかけに土守有紗も私に対して敵意を向けてきた。だから……パパが何か知っているはずなんだけど……パパは何も言ってくれないし、どうしたらいいんだろう……私は、兎月と一緒にいたいだけなのに……。

「あ、あの……恵さん？」

……まだいたのか金田。土守有紗の言ったことが事実だってことが分かったからアンタにもう用はない。さっさと教室に戻って。……金田と初めて会ったのは小学校の時、土守グループの傘下とはいえ、立派な会社の一つである金田家の一人息子。土守有紗から紹介されて小学校の頃は三人でよく遊んでいた。軟弱で細くて頼りない奴。そのイメージしかない。土守有紗の手下みたいだった……そして中学で私と土守有紗が決別した辺りから金田とも疎遠になった。だけど高校は同じで……たまに会ったりしたら向こうは話しかけてくるし……違う高校にすれば良かった。いやでもそうしたら兎月とは出会えてなかったから……

「な、何か僕にできることはないかな……？　僕も友達として兎月君を助けたいんだ」

「うるさい」

「う、うるさいってそんな……ご、ごめん」

とにかく金田から土守有紗の発言が真実だってことが確認できた。もうこいつに用はない。さっさと戻ろう。三年生の教室からアレが金田の彼女だ、とか聞こえてきて私の方を見る奴らもいる。不快……興味津々な目線に金田の彼女だなんて気色悪い汚名。もう戻ろう……、そして……そして、どうするの？　え……私はこれから何をやればいいんだろう……？　兎月を陥れたのは土守有紗、全ては私に対する復讐。それだけのために兎月に嘘をついて脅して兎月を嵌めた。それが分かった以上、真実を兎月に話せば……兎月も土守有紗なんかに服従しなくて済むし、そしたらまた兎月と一緒にいられる。けど、兎月にもう一度会えるの……？　土守有紗はもう兎月に会わせないって言ってきたし、兎月を家の中で奴隷のように働かせるって……っ、なら私はどうしたらいいの。もう……兎月に会

えないのに、私に出来ることって何があるの……？

「ね、ねぇ恵さ……うわっ！？」

「こんにちはー」

金田の気持ち悪い声を押し退けるように別の低い声が耳に届く。顔を上げれば……一人の男子生徒が金田を突き飛ばしていた。視界から消える金田。清々した。金田なんて消えればいい。それにしても……この人は誰だろう？　前に見たことがあるような……。でも三年生の男子で知り合いなんていないし、この人は一体……

「えーと、自己紹介がまだだった。俺は駒野、元ボランティア部の部長であり部の創立者だ。春日さん、だったよね？　確か金田の婚約者の……」

「違います」

一時的とはいえ金田と婚約者同士だったなんて忌々しい記憶は忘れてしまいたい。最悪以外の何物でもない。

「あれ、そうだっけ？　まあ春日さん改めて初めまして。ボランティア部ってことで分かるかもだけど、俺は兎月の先輩なんだよ」

先輩……確かに兎月と一緒にいたような気がする……。でも、そのボランティア部の先輩が私に何の用……？

「最近の出来事は水川から全て聞いてる。……兎月のことな」

「っ……」

「正直、俺は事情をよく知らない。俺に出来ることなんて何もない。だから……兎月のこと頼む。こうやって春日さんにお願いすることしか出来ないんだ。後輩のために何かしてやりたいけど俺には何

も……ごめん。だけど兎月は俺にとっても大切な後輩でさ、そりゃ兎月はどうしようもない馬鹿でアホで大馬鹿でホントどうしようもないアホで、そんでアイアンクローとか技がかけやすくてリアクションとか面白くて……そして真面目で一生懸命で後輩思いで誰に対しても優しく接するすげー良い奴なんだ。そんな俺の自慢の後輩なんだ……だから、どうか兎月を助けてくれ。頼む！」

深々と頭を下げる駒野先輩……。兎月のことを大切に思っているのが伝わってくる。兎月は……色んな人に好かれているなぁ。……わ、私もそのうちの一人……

「……はい」

「てことでこれからも兎月のことよろしく頼むわー。俺ら受験で忙しいんで。おら金田さっさと来い。勉強すんぞ」

「ぐっ、襟を掴まないでくれ駒野君……」

顔を上げた途端ヘラヘラとした笑顔で駒野先輩は教室に戻っていった。金田を引きずりながら。真剣なのかふざけているのかよく分からない……でも兎月のこと心配していた。

……私に出来ること。兎月を助けるために私にしか出来ないこと。佐々木が言っていた……今は何も出来ることがないかもしれないけど、いつか兎月のために私がしてあげれることがあるって。それは……何なんだろう……。兎月……兎月のために……そして、私自身のために……

「……兎月」

兎月の笑顔が浮かんで、兎月のことを思うと……自然と足が動き出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4769s/

へたれ犬

2011年12月13日02時06分発行